

1348

奇譚クラブ



10月号 ¥350

10

作 六 鬼 団



決 定 版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

|| 巻号『花決定版』 || 定価一、〇〇〇円 (送50円) ||

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

△ 内容上主要見出し一覧 △

第一章 発端 第二章 恐ろしい探偵 第三章 美人の来 第四章 麗な来 第五章 救者の来 第六章 救者の来 第七章 餓魔の来 第八章 悪魔の来 第九章 恐怖の来 第十章 恐怖の来 第十一章 淫蛇の来 第十二章 淫蛇の来 第十三章 淫蛇の来 第十四章 淫蛇の来 第十五章 淫蛇の来 第十六章 淫蛇の来 第十七章 淫蛇の来 第十八章 淫蛇の来 第十九章 淫蛇の来 第二十章 淫蛇の来 第二十一章 淫蛇の来 第二十二章 淫蛇の来 第二十三章 淫蛇の来 第二十四章 淫蛇の来 第二十五章 淫蛇の来 第二十六章 淫蛇の来 第二十七章 淫蛇の来 第二十八章 淫蛇の来 第二十九章 淫蛇の来 第三十章 淫蛇の来 第三十一章 淫蛇の来 第三十二章 淫蛇の来 第三十三章 淫蛇の来 第三十四章 淫蛇の来 第三十五章 淫蛇の来 第三十六章 淫蛇の来 第三十七章 淫蛇の来 第三十八章 淫蛇の来 第三十九章 淫蛇の来 第四十章 淫蛇の来 第四十一章 淫蛇の来 第四十二章 淫蛇の来 第四十三章 淫蛇の来 第四十四章 淫蛇の来 第四十五章 淫蛇の来 第四十六章 淫蛇の来 第四十七章 淫蛇の来 第四十八章 淫蛇の来 第四十九章 淫蛇の来 第五十章 淫蛇の来 第五十一章 淫蛇の来 第五十二章 淫蛇の来 第五十三章 淫蛇の来 第五十四章 淫蛇の来 第五十五章 淫蛇の来 第五十六章 淫蛇の来 第五十七章 淫蛇の来 第五十八章 淫蛇の来 第五十九章 淫蛇の来 第六十章 淫蛇の来 第六十一章 淫蛇の来 第六十二章 淫蛇の来 第六十三章 淫蛇の来 第六十四章 淫蛇の来 第六十五章 淫蛇の来 第六十六章 淫蛇の来 第六十七章 淫蛇の来 第六十八章 淫蛇の来 第六十九章 淫蛇の来 第七十章 淫蛇の来 第七十一章 淫蛇の来 第七十二章 淫蛇の来 第七十三章 淫蛇の来 第七十四章 淫蛇の来 第七十五章 淫蛇の来 第七十六章 淫蛇の来 第七十七章 淫蛇の来 第七十八章 淫蛇の来 第七十九章 淫蛇の来 第八十章 淫蛇の来 第八十一章 淫蛇の来 第八十二章 淫蛇の来 第八十三章 淫蛇の来 第八十四章 淫蛇の来 第八十五章 淫蛇の来 第八十六章 淫蛇の来 第八十七章 淫蛇の来 第八十八章 淫蛇の来 第八十九章 淫蛇の来 第九十章 淫蛇の来 第九十一章 淫蛇の来 第九十二章 淫蛇の来 第九十三章 淫蛇の来 第九十四章 淫蛇の来 第九十五章 淫蛇の来 第九十六章 淫蛇の来 第九十七章 淫蛇の来 第九十八章 淫蛇の来 第九十九章 淫蛇の来 第一百章 淫蛇の来

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 淫花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すさまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい穢の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。
〒558 暁出版株式会社宛

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

▽規定△

入選作品の著作権は当社に移行することを前

一、応募作品は編集部にて慎重に審査の上、入選決定しました。入選作品は折り返し賞金を贈呈致します。如何に拘らず、お著作権は当社に移行することを前にて御承知願います。

二、応募作品はすべて未発表の自作の作品に限ります。たとえ未発表の作品でも他社へ投稿されたものはお断りします。作品の中に他人の作品を引用する部分があります。出処へ作者、書名などを明記して下さい。

三、紙をご使用は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙三十枚以上三百枚まで。枚数は四百字詰換算にてきは一枚以上三百枚まで。三百枚以上に亘るとだけ、早く誌上掲載致します。入選作品は出来る区別するため第一頁に一般の原稿、読者原稿とい。連絡先氏名は必ず書き添えますが、住所へ連絡先氏名を開いたり他へ洩したりなどは者の氏名を公開したから御安心下さい。絶對に致しません。若しご入用でしたらコピーをとって置いて下さい。

一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第41号、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種郵便）にて下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断り致します。

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さい願います。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先Ⅱ大阪市住吉郵便局私書箱第41号

曉出版株式會社編集部宛

沖繩美人の明子嬢

妖麗な縛られぶり

大手札三枚一組
座間明子
略号△ほけ

て発達した肉体美が俵の如くに縄
でくびれているが明子の表情から
は妖艶な凄さがにじみ出ている。

股間縛りの痛さか

大手札三枚一組
座間明子
略号△ほへ
四〇〇円

両太腿のつけ根を左右とも喰い込む程に締めつけたので明子は、その痛さのためか自ら開股し或は胡坐するのを追う鮮鋭なレンズ。

悶える厳しい縛り

大手札三枚一組
座間明子
略号四〇〇円
△ほて

股間、上半身や後手ばかりが胴体から
 身を出る。膝に縄で敏感な子縄が全
 身をよじって悶え抜くのだ。つた。

椅子で演ずる痴態

大手札三枚一組 四〇〇円

座間 明子 略号△ほと▽
 身体に縄が喰い込むと虚脱した
 ように全身の力を抜く明子を椅子
 の上に追いやめて縄によって起る
 肉体的変化を確認しようとする。

觀念して身を任す

大手札三枚一組
座間明子
略号△ほあ▽

縄は柔肌をくびる

大手札三枚一組
座間明子
略号△ほさ▽
四〇〇円

美しさ抜群の正面

大手札三枚一組
座間明子
略号四〇〇円
△ほゆ▽

飼育女性好美夫人

本誌十月号のカメラハントで辻

木陰氏が「悦唐の甘き虜」と題して渡部好美夫人の悦唐ぶりを紹介しておりますが、それとは別に編集部にて渡部氏の依頼に依つ

て、渡部夫妻の強烈な夫婦プレイの場面を特別に撮影しました。この鮮明な印刷紙、焼付の写真をS.M.F.のテンのために、渡部氏の許可を得てここに特に分譲いたします。

悦虐にむせぶ美貌

大手札三枚一組
渡部好美
略号△ほし▽
四〇〇円

責められて恍惚境

大手札三枚一組
渡部好美
略号四〇〇円
△ほひ▽

足挙げと開股縛り

大手札三枚組
渡部好美
略号△ほも▽
四〇〇円

超羞恥責めの極致

大手札三枚組
渡部好美
四〇〇円
略号△ほせ▽

股縄は知っている

大手札三枚一組 四〇〇円

渡部 好美 略号△ほす▽
身体の中心を二つに割って走る
股間縛りの縄はポーズを変える度
に喰い込んで女体を責めつけ、飼
育女性を狼狽させるのだった。

鼻責めの悦楽境地

大手札三枚一組
渡部好美
略号△ほめ▽
四〇〇円

鼻を愛撫する責め

大手札三枚一組
渡部好美
四〇〇円
略号△ほみ▽

蠟燭責めと臀打ち

大手札三枚一組
渡部好美
四〇〇円
略号△ほに▽

喰い込む股間縛り

大手札三枚一組
渡部好美
四〇〇円
略号△ほん▽

肉體を真二つに縦割りする悪魔
のような股間縄によって好美夫人
の全裸の肢態がどのように変化を
するか興味のあるところである。
◎お申込み◎以上の写真のお申込
みは大阪市阿倍野局私書箱第14号
天竺社宛前金でお願いします。

徹底の自誌本

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



奇譚クラブ

△第二四巻 第十一号・通刊第二七一号▽

(昭和四十五年) 十月号 目次

△本 文▽

- 扉で一言『蒸発亭主の夢』……………山川 東一…(9)
- ヤセ犬のボヤイても腹膨れるなり……………予世場良三…(10)
- 遠吠え 女責め図絵の系譜 関所破りの女……………南 彦造…(14)
- 連載小説『大噴火』△第二十五回▽……………千葉 青鬼…(16)
- 読切創作 男が女を殺す時……………千草 忠夫…(24)
- 懸賞入選あのだ・このテ△翻訳ミステリー△ラム ワカ…(42)
- 告白・孤独のプレイ 豚鼻の刑……………葉那 万三…(50)
- 連載・Mの傾斜「壺中の園」(6)……………真砂十四郎…(54)
- オムニバス 責め祭りだぜ……………不二 天流…(64)
- マゲチヨンス
- 懸賞 エスメラルダ(1)「罌に掛かった女」……………中有 宣也…(72)
- カメラ・ルポ「沖縄美人の責め記録」塚本 鉄三…(90)
- ファンの妄想 静子より皆様へ……………小杉 千恵…(106)



或る交換プレイの記録	野間 文生
充実してきたM派小説	麻曾比須人
愛妻の緊縛写真	和歌山 K 生
サロン楽我記 〔第七十六回〕	辻村 隆
辻村氏のカメラ・ハントに望む	今井 博
夫婦プレイを楽しむ	紀川 正信
緊縛は夫婦生活の活性炭	三浦 敬一
交換プレイと三人プレイ	兵庫 収
編集部だより	編集部
あるシンジケート「仕置」	青井 松造
我が主観「縛りの美学」	ロマン派生
僕のイメージ画集「スパイ訊問」	室井亜砂路
縛り映画私の採点	岡田 康彦
イメージ画「展示品」	あらい かず
夫婦プレイ	菊 茲 童
同好者の皆様へ「見学を希望します」	風流 粹人
奇ク誌への欲求	札幌 T・H
イメージ画「洗礼」	阪東 太郎
フォト通信プレイ告白	

連載・青春の陥穽 ⑩ 三角模様 芳野 眉美 (112)

実験「責めの部屋」 井風呂秋於 (120)

被虐の旅シリーズ 続・求める人々 由利美千子 (134)

「科学朝日」から「ヤプー」の書評に思う 山口 広 (141)

連載小説「花と蛇」 〔続篇第六十七回〕 団 鬼六 (144)

ミニ・ストーリー 煉瓦の光沢 宇野 一郎 (161)

連載・アブ紳士行状記 M派交友録 ⑩ 鬼山 絢策 (164)

女性乗馬考「ダイアン・ベーカー」 佐野 寿 (172)

美女緊縛作法「八重垣流秘聞」 ① 風流極道軒 (174)

SMカメラ・ハント 〔渡部好美の巻〕

「悦虐の甘き戯れ」 辻村 隆 (188)

幻想創作コント ヤプー商売繁盛記 清川 純平 (210)

水田真紀子「サーカスの少女」 水田真紀子 (214)

読者通信 編集部選 (252)

読者ギャラリー 「塩水の叫び」 豪城二・「大奥残酷絵譚」 浪速

伸浩・「洗面附属台」 春川ナミオ・「サデイス

ティン」 岡たかし・「マゾミちゃん」 九美 淳

目次カット 「剃髪・花縛」 あらい・かず

扉カット 「被縛憧憬」 神戸・狂四郎

☆北欧系の金髪碧眼の美女を緊縛する

六月号誌上にて、うら若き白人の女性を「純日本式縛り」にて縛り上げたルポ人金髪碧眼の美女を縛るVを発売しました。鮮明な写真に、紙に焼付けた極めの要望に、たえらるため、特にシアの嬢の許しを得て分譲することにしました。文獻的に見ても非常に珍しい資料だと思ひます。お早い目にお申し込み下さい。お申込は大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛前金にて願います。

首縄高手小手縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
生れて初めて縛られる首縄高手小手縛りの全裸の肢体を言われるように白く肌を晒すのだった。

縄の痛さに耐える

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
ぎゅうぎゅうと力まかせに締めつける縄は柔肌に驚くほど喰い込んでは、その苦痛に耐えようとする彼女の表情に一段と迫力を増す。

股間縛は凄く締る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
きびしい高小手縛りに加えて首縄、更に埋れるような股間縛りで肌を割り不自然な姿態を強要すれば美しい顔面が忽ち紅潮する。

卓上の裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
テーブルの固い板の上に正座させられた白人の美女が縦横に縄を掛けられて二つ折りになっているのを正面側面背面から狙った。

両手吊りの全裸像

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
シーラ嬢の美しい容貌とすらりと伸びた肢体とが両手を吊られて拘束されることによって諦めきった被虐美を最高に発揮している。

投げだした被縛体

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
縛られた彼女の心の中にマゾの芽が芽ばえていくかどうかかわからないが、全裸で縛られたこのポーズの中に諦めきった相が見える。

麻縄は女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
ドス黒い麻縄は情容赦なく白肌に埋まり青い目を曇らせて、この異様な緊縛に耐えようとする。

縛られるのはいや

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
つぶらな青いひとみを見開いて何をすると聞いたげに責手を見る目には可憐な拒否がある。

私の裸を見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
多分彼女は今まで人前で裸の肌を晒したことがないだろうに、今は後手に縛られて前をかくすべさえなく喘ぎ悶えるだけである。

日本式縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
すうらりと伸びた長い脚、しかし今は徒らな足掻きを見せるに過ぎない。日本式縛りの厳しさが今こそ彼女の骨身にこたえるのだ。

白人をいたぶる手

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
責めのイケニエとなった哀れな彼女は悪魔の触手によって身動きも出来ない縛られるの姿をさんざんに、いたぶられるのであった。

金髪美女も台なし

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
房々とした金髪、格好のよい高い鼻、平常は男性を尻目に高慢だったか知らないが、このように縛られると裸を羞らう哀れな女だ。

被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
高小手乳房縛り首縄に責めあげたシーラを様々にいじめて其の表情をアップで狙いをつけた。

美しき緊縛の姿

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
彼女の顔の美しさ肢体の美しさを縄を用いることによって、このように最大限にまで高めることが出来たのは大成功であると思う。

逆エビ責めの外人

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
長い足を逆に折り曲げてエビ縛にすれば流石にスタイルの良さを誇るだけあって、まことに優美な肢体を輝くばかりに開陳した。

雁字搦目で椅子に

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
あるだけの縄を使ってシーラの白い肌に狂ったように掛けた結末が、このように余りにも日本的な縛りとポーズになつてしまった。

落花狼藉のしとね

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
ビール瓶、コップ、食べ散らかした寿司の器、その中で麻縄で縛られた彼女は疲れきった全裸体を長々とびたように横たえた。



神戸・狂四郎画

…… 蒸発亭主の夢 ……

俄か雨の上った夏の夕暮、街はずれで下駄の鼻緒を切って難渋している美しい女に出逢った私は、その女の余りの美しさに魅せられて、ふらふらと近寄ると腰の手拭を引き裂いて女の鼻緒を直した。私が鼻緒を直している間、私の膝の上に置いた女の素足の白さ。光を浴びたように明るく輝いているのだ。私は宝物でも戴くように素足を下駄に誘った。

家はすぐ近くだから、お礼にお茶でも差し上げましょうと、女は先に立ってどんどん歩いてゆくの、私は引かれるように、その美しい女の後に従った。

五分ばかり歩いて女の家はすぐにあつた。無人らしく静かなたたずまいの別荘風の粋な家であつた。女は山海の珍味を運んで私に与えた。美人の酌で飲む酒の味は又格別であつた。夜。美しい女の白い肌がべったりと私の肌に吸いついて離れなかつた。肌と肌から私の赤い血が女の方へ通ってゆくように、その瞬間、私は痺れるような快感に襲われた。

私は幸福であつた。こんな楽しい日々がずっと続いてほしいと願つた。

夏の夕方、突然いなくなつた私を捜していた家族が痩せ細って薬しべをくわえた私を縁の下で発見したのは十日余りしてからだった。

(山川東一)

ヤセ犬の遠吠え



ボヤイても

腹脹れるなり

予世場 良三

何年か以前に、私は悪友と三人連れでクダラン遊びをしていた頃、キャバレーのホステスと縛りプレイをしかけて、酔いのためにダラシなくも未遂に終わり、しかも「賞金」を取られバカクサイ思いをしたことがあった。このことは、ほんの小文だが「気の毒賞」と題して投稿した覚えもあるのだが、これが三年も経った先日、思いもかけずにボヤキたくなる結果を生んでしまった。まこと、天網カイカイとは、このことだろうか？

その時の二人の悪友（G君とT君）とのつき合いは、今以て変わりはないが、昨年の秋T君の住む文化住宅が火事騒ぎを起こして大半が焼失、怪我のなかったのが幸いなどと、

気休めの慰めをしなければならなかったのである。しかし、類焼になったお陰？で、以前より気の利いた住いにありつく結果となったT君の新居に先日招かれ、女房も子供も一緒に押しかけて、G君の家族ともども喰い荒してきた。

ここまではまずよかったが、あとがいけない。調子にのってGのヤツ、この席で飲めもしないくせに三人の女房相手に、件のことを肴にしやがった。自分のことは適当にボカシて、私の味わったバカクサさの由来を、バラシてしまったのだ。もちろん、彼流の脚色で「縛る理由」は尤もらしくなっていたのだ。が……女房連、腹を抱えてコロゲ廻らんばかりだった。だが、私の女房だけにはピンとくるものがあつたらしい。

帰って子供が寝入るや否や、女房のヤツ、ジンワリとやって来た。

「アナタ、あのことホント？」

G君は、もはや時効のつもりで笑えばなしにしたものだろうが、わが女房ドノにとつては初耳もの。あまり明眸でもないマナコを、三角にするのも無理ないかも知れない。

「本人の前ですもの、作りばなしじゃないことだけは確かだね」

ある意味での創作だよといったかったが、私は黙秘権を行使した。

「はずかしかったわ。涙が出た」

嘘つきめ、ゲラゲラ笑ってたクセに。

「雑誌を読むだけと思ってたのに、ホントにククリたいのネ」

女房のヤツは、私がホステスとホテルにシケ込んだことよりも、ククル云々のことを矢面に立てて来たのである。

「ククリたいの？ ホントに。ネエ、ネエったら。返事ぐらいしたらどう？」

クドイから略したが、この言葉までの間にはネチネチといろんな詰問が一方的に速射されて、そのウルサイことこの上なし。ついに私としても黙秘権行使を守りきれずに怒鳴らざるを得ない羽目に追い込まれた。

「いい加減にしろッ！ 別に浮気したわけじ

「やあるまいし」(未遂だったけれど)

「浮気のこととは云ってないワ。ククリたいのかどうかと訊いてるんですッ」

「おお。ククリたいね。ギリギリに縛り上げて呻かしてやりたいヨッ!」

「やっぱり」

「何がやっぱりだ。お前も雑誌のことは知ってるだろ。そしたら何も、そんなにクチとんがらかして改まることあなからう」

「ただの空想だけだと思ってたノッ!」

「じゃ、そんなに問いつめて一体どうする積りだ? 俺が女を縛りたいんなら、あたしが縛られますとでも……」

「いやよッ! (この声は激しかった) 何いてんの、いやらしい」

「見損なうな!」とどなったが、これは私の腹の中だけ。

なるほど私は、若い頃から女の縛体に強く魅かれる。その為に私なりの多少の想い出もある。ごく平凡? でささやかな——紐のある法悦——に浸ったこともあり、夢よ今一度の願いは現在でも強く胸底に感じているのはたしかだ。

しかし女房で間に合わそうとは思わない。奇ク誌上にしばしば見る夫婦プレイ。一番手軽で一番安全、そして一番幸福と思われる家庭プレイ。ケッコウなこと、といわざるを得ないのだが、負け惜しみばかりではなく、

私には、それほど強い羨望の念はない。もう一昔も以前に一度だけ形ばかりの縄がけの真似をした覚えはあるが、こちらの気持ちなどクソクラエ式に、女房はフテクサレて遠慮なく嫌悪の表情をみせつけてくれ、私の、もしやにひかされた夢はフツ飛んだ。つまり、残念ながらわが女房ドノにはマゾのマの字もないことと、ぜいたくながら私自身もマイホームプレイでは興がのらないことを悟らしめられたのだった。

縛るに値しないほどの醜女というわけでもなし、私にその気さえ湧いてくれれば、一方的な陶酔といえども奪い、飼い馴らすぐらいの、亭主としての横暴さは持ち合わせているつもりだが、いかんせん、女房相手では酔えないのである。この心情はどういうものか自分でもわからないのだが、これを考えると頭が痛くなるので、私自身の欲深かということに落着せしめている。——バスなどで、一緒に乗った女房の二の腕に触れても平気だが、他の女性のそれにはドキッとなるではないかと。

多分に痴漢的要素も自認せざるを得ないのだが、世の男性の大部分がそうではなからうか。家で飲めば安上りで家庭円満の筈を、わざわざ夫婦間の平和を乱してまで高いアルコールを追い廻す男の多いことも、何か共通心理があるのではないかと思うのである。ただ

私の持つこの性向に何かとリクツをつけて正当化したいのも事実だが、ムヤミヤタラに罪悪感に襲われ、自己嫌悪にゾツとする時の珍しくないのも事実である。従って、女房相手の縛りは考えないことにしている。多分に諦めムードの強い自己満足のようだが、お陰? で、わが家の寢床は極めてノーマルである。まことに味気ないことで情けないのだが——やはり、不惑を越した男は頭が古いし行動力もない。それともエエカッコシイの鼻持ちならん奴か——と自分で思う。

つまらんことを書いてしまったが、ともかくそういうわけだから、女房がムキになって予防線を張るのが片腹痛かった。

(力カアをひくくする趣味はねえや)

他に、悦んで縄を受けてくれる女はザラに居るんだ! と見得をきりたいところだったが、カケラもない悲しさ、正真者? の私は嘘がつけない。

「アナタのそんなヘンなとこ、あの人たちに知られたら、私、羞かしゅうて……」

「でもサ、Gの細君が、相手の人をククッてまで浮気しなかったのは偉いって、ほめてたじゃないか」

「ただの浮気ならいいのよッ!」

どうも女というものは(わが女房だけかも知れないが) ドシがたい。いくら売り言葉に買い言葉といえど、はなはだ妻らしからぬ言

葉を吐き散らすものだ。浮気は普通で、縛りは極悪ときめつける。不倫行為は許せるが、アブ行為は寛容の余地なしとする論法。

以前、よくボヤイて？ いた黒井珍平さんの心情、よくわかる。

犬も喰わないことは、この辺でやめて、ボチボチボヤかせてほしい。男らしくないのは承知で私自身を慰めるために……。

ウチをモマシやがったGのヤツは、酒が全然駄目。そのクセ、酒場が大好きだという。

私に云わせれば、そこに居るホステスとジャラツクのが好きなんだろうと思う。証拠は、大のストリップファンであるし、トルコの常連でもある。その事を聞いたわが女房の評は「しよ、うのない人だけれど、考えようによってはイキなひと」とくる。

ナメる癖持ちのTのヤツは、飲んべえで、四十の坂を越しながら、汽車のオモチャが好きであるそう。ミニチュアかなんか知らないが、広くもなかった家に随分沢山のプラモデルではない模型汽関車やら客車があった。金と暇を喰う道楽だと笑っていたが、例の類焼騒ぎで大半を焼かれて悲嘆、見るに耐えなかった程であるが、それに対するわが女房の評。「あんな精巧なものが作れるなんて素晴らしいわ。いい趣味ネ」

この他にわが女房と気易く話し合える間柄の友人に、やたらと無理算段しては必要でも

ない新車を追い廻すカーマニア。二、三本の耳搔きの大きいのをご生大事に、失うともつたいないからと球に紐をつけて、愚にもつかない球打ちしてる自称ゴルフ。仕事はサボルものと広言し、細君のアルバイト料までかすめ取ってはマージャン、競馬等にウツツを抜かしているギャンブラーなどが居るが、わが女房は、これらのものについてさえも、あえて非難しない。ただ、ギャンブラーについては多少の酷評が混じる程度である。

私のボヤきたいのは、ここだ。

それらの事柄はすべて趣味として通り、創造主の大傑作であるところの女体に手を加え私の信ずる女体美を、細引きによって創り出し、観賞し、陶醉することは趣味としては通用しないというのはどうということだ。

何も、こんな不満は今に始まったことではないが、この片手落ちは腹がたつ。何が異常者だ。

異常とは、少数のことだ。同じ少数でも大多数群に都合のよいものは尊敬と憧れの的となり、毒にも薬にもならない程度のもものは、「珍しい」ということで、大手が振れる。私のような少数派は「変態」で「いやらしい」というので、小手も振れない。不合理だ。天才も才人もエリートも、「異常者」と呼ぶべきである。それがいけないなら、私のような少数派を「天才」か「エリート」と呼んで貰

いたいものだ。

だいたい女性を、いや女と限らないが、生きていく人間を縛るということが、いい筈のものではない。人の自由を奪うなどとは同じ人間同志で許されるべきことではないのだ。まして、縛り上げた上に責めたてて、うめかせたり蹴かせたりするってなことはもってのほかである。そんな人間が殖えたらこの世はどうなる。考えただけでも恐ろしい……てな意味のことを、わが女房がいったことがある。こ尤もなことと、と、私は怖いから逆らわずにペコペコしておいたが、現在のナントカ審議会というのも、そういう「不健全」な思想に次代の担い手が染まることを用心してのことだと思う。それはそれでまことに結構、ご苦労さまと心から謝意と敬意を表したい。私も「エリート」だが、子の親として、わが子に後継ぎを望んでいるわけではない。出来得るならば、ノーマルと呼ばれることで、心から満足出来る性向であって欲しい。そういう願いは強い。

しかし、しかしだ。それはあくまでも現在を基準にしたノーマル感覚として考えた場合のことだ。何も私自身のリクツを正当化する意味でも、そうなたらナアという夢に似た意味でもなく、現代のノーマルと、次代のノーマルとの差異を考えてみると、ナツメロ式な思想に育った我々年代のノーマル感覚を

押しつけて、事足りると自己満足していいものかどうか。

先達でも、ナントカテレビのナントカ番組で、水着の変遷のことをやっていたが、明治か大正かは知らんが海水浴場設置に当たって当時の良識は、女性の入水服装として、外気に晒してよいものは首から上、手首、足首から先のみという制限をつけたそう。しかも海に区切りをつけ、風呂屋よろしく男女別に泳がせたという。浜辺に立つ女の写真も映ったが、まるでアッパッパのぬいぐるみといえるものを着ていたのには、わが家の風俗思想監視員を以て任じているらしい、女房のヤツも吹き出しおった。ザマ見くされ、と私は内心で手を拍ったものだ。

一事が万事じゃなからうか。

「世のなか変わった」とかで、紅茶にコーヒーの真似させようとする時代だ。非力な人間が現実には到底なりきれない強者の真似をして、たわい無い縛りゴッコをしてみたいと願うことぐらいは……と思うんだが、どうもそれが、セックスと結びつく場合には抵抗があるらしいから妙なものだ。ドダイ間違っちゃあしませんか？ といいたい。

暴力を揮うために縛るといふのなら、暴力反対という意味から私も大反対である。非力な故にとくにそう思う。現在、報ぜられているベトナムやカンボジア戦線の捕虜に対する

拷問ニュースなどには身の毛がよだつ。

しかし、事がセックスという極めて大切な必要事を、より効果的に味つけする目的のための「平和的縛り」なればこそ、常識的な縛りイメージと一線を画していいのではないかと思うのである。セックスに結びつくのだからこそ、私としては縛りを加味したいのだ。いささかも害意のない縛りだから出来るのであって、暴力的な拘束など、このフェミニストで柔和な模範的紳士に出来るわけではない。まったくワカッチャイネエンダナ……ということになるのだ。

現在は、それが当然、というより、それではなければオカシイぐらいにまで実績をつくり上げてしまったミニスカートも、出始めた頃には、テレビで討論会までしていた。相当数の反対論者もあったようだが、あの方たちは今でも持論を固執していられるのだろうか。当時としては勇敢な実行派の娘さんたちも、見せつけておいて、見る人がエッチだなんて勝手なネツを吹いたかどうかは知らないが、いずれにしてもセクシムードであることは間違いないことで、私としてもマコトにケツコウと思うのである。このミニにしる、大胆なカッティングドレスにしる、自分をより美しく、チャージングに見せるための意図であることは動かせないし、見せられる男にセックスを感じせしめる工夫であろう。通常いわ

れる「美女の魅力」の大半はセックス感を基盤としていようから、それはまことにいいことだと思うが、その女たちが自ら演出して強調した部分のみには、セクシムードを感じなければいけないが、それから先は感じて想像してもエッチだ。まして、その晒し出された美肌に縄などをまといつかせる妄想などはケシカラン限りだ。なんてなことになる、ヤメテケレ、ということにならざるを得ない。

女が化物であることは周知のことだが、ペテン師であると思っっている私に、やはりそうだったと確信させないでほしいものである。……と、ここまで書いて読み返してみると、例によって大分当初の狙いたる軌道がボヤけてきている。脳の中の歯車が、どこで喰い違ったのか妙な噛み合わせに変わってきているのだ。つまり、極めて「高尚」な一般論に傾き始めていることに気付くのである。リクツではなく、道理論となつては鼻持ちならん。

偉いヒトからの諮問とやらに、大所高所からみた答申をされる方々同様で、つい自己欲望強調を控えてしまう私の「教養の高さ」がなんともハヤ恨めしい。ボヤきたおしてモヤモヤを晴らそうと思って書き出したが、悲しくも「知性」が邪魔してダメナノヨというところらしい。しかし、折角書いたものだから、屑籠代りにポストにだけは投げ入れよう。

女責め図 絵の系譜



関所破りの女

文と絵 南彦造

関所の起源は古い。なかでも「箱根関」は醍醐天皇の昌泰二年（西暦八九九年）——諸国の群盗に備え、国が設けたのに始まる。

初め「足柄関」と云ったが、三島へ四里、小田原へ四里……合わせて「箱根八里」の道程は、あまりにも有名で、のちに徳川幕府の「直轄関所」となるや、人別の改めも一段と厳重になった。

したがって、その難から逃れようと、所謂「関所破り」なるものが、秘かに横行した。方法は「本街道を行かずに、脇道を抜ける……たとえば、早川宿（神奈川県にある）から、

箱根火口の背筋にあたる、連山^{やまなみ}を伝って仙石原の裏手に廻り、そこから峠を越える……なども一法で他にも、まだ、間道は、いくらでもあった。

元和元年（西暦一六一八年）——すなわち大阪夏の陣のあった年の初秋。徳川幕府は、川越城主（埼玉県東部にある町）に命じて、「箱根宿」を開かせ小田原城主には「関守^{せきもり}」とか「番所の守護」などを命じた。

箱根預り藩の『小田原文書』によれば、当時、もう「乙女峠」の通行は禁止されて居り

一般に乙女は「御留峠^{おとめ}」なりと喧伝されていた。もっとも、この乙女峠なるものの由来に就いては、哀れな旅娘の物語が存在する。

『当時……この番所・裏手に拡がる仙石原から、峠道を間道伝いに抜けようとする一人の美しい乙女がいた。しかし、関守に見つかり、この乙女は「通行手形」とか「女切手」などの持ち合わせがないのを理由に、「女仇討」と誤認され法にしたがって、気の毒にも越えようとした峠の頂上で、秋晴れの富士山を背に、縛りつけられ「焚刑」に処せられた

のであった』

この乙女の無惨な死を悼んで、人々は、口伝てに、此の場所を乙女峠なりと伝えるようになった。

話は前後するが前記のとおり、徳川時代の関所は嚴重をきわめ、手続が煩雑な上、急用で旅を急ぐものにとっては、迷惑このうえない仕儀が多かったので、なかには重刑をもらえりみず「山越え」などの『関所破り』を行なった。

そして、その『関所破り』には、およそ、『四種類』あり第一に「山越え」第二に「忍び通り」第三に「偽り通り」第四には「強引に押し通る」所謂、「強通り」——などだった。

これに手を焼いた関所側では、重刑をもって脅したりしたが、関所破りは水洩れの雨樋のようなもので、どうする法もなかった。

「まくらだと女をおどす関所前（古川柳）にもあるとおり『入鉄砲に出女』——封建時代に於ける関所の「人別の改め」は微に入り、細をきわめ、とりわけ『女改め』には「毛見の婆」と称する、女役人がいて、女体のすみずみまで検査に当たったのだ。

そして怪しいと睨まれたが最後——腰のも

のまで捲りとられ、乳房改めは勿論のこと、局部の改め……まで行なったという。

「毛見？」とは、うまく云ったものであり、「婆」とは勿論、女役人の云いだが、入鉄砲とは男の旅人の象徴。「出女」は説明するまでもあるまい。

また、この女役人には宿場役人の妻女か関所役人の系類に当たる妻女などが登用されたので、なかには役得を利用したり、利欲にからんだ行為をしたので、旅女の、難渋は男などの比ではなかった。

それに加えて、街道筋には「道中サギ師」や「香具師」「ゴマの蠅」などの、雲助どもが、餌物を狙ってうろついていたのだから、餌食にされる悲劇も起こり、そこには酷い女体残酷図絵も展開されたのであった。

○

私が、まだ少年期の頃——父の手文庫の蔵書から、木版刷りの、古びた絵物語を見つけ出し、孤独の耽美に酔いしれた、不思議な魅惑の才月を想い出す。

その題名に曰く『紅裙地獄図絵』——副題として「お浜峠の野曝し」というふり仮名つきの極彩色豊かな綴じの装本だった。

私はこの絵物語のなかで、お浜という、嘉

兵衛（江戸深川の材木問屋の旦那）の妾が、箱根関の裏道で、悪い雲助どもに犯されるといったシーンの見事に心を奪われた。

雲助どもは駕籠かき人足で裏街道行きは御法度だ！ だがその美事な肌の味を賞味させてくれたなら、黙って眼をつぶろう——だが断わるならば……と凄む……お浜は抵抗するが、結局は真昼間の峠裏の笹簾の中で、数人の雲助どもの手にかかり、女体の哀れさを白日の陽光に曝さねばならない破目になる——といった物語だった。

私は、何とか模写したいと思ったが、カメラの複写も出来なかったし、デッサンの未熟さは仕方なく、透明なガラス紙を利用しての大体の線だけの模写に終わった。

数日後——私は、もう一度あの迫真力と原画の生々しさに触れようと、手文庫の扉をはずしたが、まったく見当たらない。盗見に気づいた父が、処分したのであろう。残念だがいまとなつては、どうにも取り返しが出来ない——といって、父に問う勇氣もさらさらなかった。

稚拙ではあったが、こっそりと描いた、その凄まじい複写絵も、どこへいったのか見つからない。

（終）

色 獣

テレビの画面から、不馴れなアマゾン女兵達によってヨタヨタと運ばれて行く唐丸籠。肉体の其処彼処をピンや金串で刺し貫かれた哀れな二〇三号をその中に收容した、ひどく時代がかりのする行列が姿を消すとウィリー博士は、つまらなそうにスイッチを切った。赤毛が、そのまっ白な肌と、きわだったコントラストを見せるミセス・ウィリーがコーヒーを運んできた。二人ともヌーディストクラブで暮らしているかのように、生まれたま

まの姿だったが、年増美が、いよいよ洗い抜かれてきた美しい夫人の曲線美と対比して、学者とは思われない程遅しいウィリー博士の筋肉美は、そのまま一对の美術品のように見えた。

——二人とも、ポートエリアに置くには勿体ない代物だわい——

つくづくと有明は思った。

しかし、それ以上に、ウィリー博士をこのポートエリアで必要としている。日本人では如何としても及び難い、実存的判断力と組織的実行力とが、博士には備わっていた。博士の協力がなかったら、有明の王国建設は不可



第二十五回

前号までⅡガボンで巨富を築いた有明はそれによって一つの理想郷を建設した。彼の独裁王国を構成する若い美女たちは世界各地から誘拐してきたものである。今度も美女山本百合子、ジャンヌこと小林敏子を始めとする入荷が多数あった。脱走を企てたアマゾン女兵B二〇三号は〇号重拘束のまま唐丸籠で運ばれて行った。一等扱いの山本百合子は特別にエミール司令が案内している。その他はジャンヌを始め、流れ作業で処理されて行く。その光景をウィリー博士夫妻と一緒に有明は平然としてテレビで観察している。

能だったに違いない。あとで詳しく紹介するように、パレスエリアでは極端な日本人優先主義をとっている有明でさえ、それをポートエリアに適用することを止めているのは、ただ一つ、ウイリー博士夫妻の立場を配慮しているからに他ならない。

すぐれた外科医であったウイリー博士は夙にその学究的情熱が地上的道徳の範疇をはるかに超えてしまっていた。生体解剖はもとより、生体実験すら行なう必要に迫られていたその点に限っていえば、物語にあるフランケンシュタイン博士に似ている。つまり、学問のために良心を犠牲にするのを厭わなかったのである。しかし、如何にウイリー博士といえども、地上の制約に支配されているうちはそのモルモット「人間」を勝手気儘にするわけには行かない。丁度そんなときに有明からの誘いが来たのであった。

有明はウイリー博士の能力を、ウイリー博士は有明からの実験材料を、それぞれギブ・アンド・テイクして共同関係を作ることにしたわけである。

ところが、有明はすぐに、ウイリー博士がもっと便利な人間であることを発見した。彼は単に立派な医者であるばかりでなく、その

該博な常識と、行動力によって、有明のマネージャーに、あらゆる点で打ってつけの人物だったからである。有明が気に入れば入る程ウイリー博士も有明に忠順な側近となっていた。こうして現在の、水魚のような交友関係が確立したのである。善悪を超えてウイリー博士を愛している夫人も、進んでこの挙に参加してきた。

「ダイアピーチス（糖尿病）は全く万病のもとでしょう」

有明を案内しながら、博士は熱心に話し続ける。

長い廊下を幾廻りする間に、角々にヘルメット姿のガードマンが立っている。

「このことについて、面白い実験をご覧に入れますよう」

一つのドアが開かれた。十畳ばかりの部屋の真中に、獣を入れるような鉄格子の檻があって、中年の白人女が一人、素裸で入れられていた。高さと奥行は夫々二メートル程だったが、巾は80センチ位しかない。女は、立てば立てるのに、ぐったりと檻の床に寝たままだった。しかも、おそろしく太っている。

「美食させ、肥満体になると糖尿病になりや

すいのは事実です。しかし、それより直接ス臓の機能を減退させた方が早いのです。ただ、これを癒すにはインシュリンがよいとされていますが、高単位を打つと気絶してしまいます。やってみましょう」

博士がボタンを押すと檻だけが床下に沈み太った女は魚を焼く金網に挟まれたようになって、たちまち身動き出来なくなった。檻の間から腕を引っ張り出して、檻外の器具に固定する。

すると今までグッタリしていた女が、急にあばれはじめた。さかんに身を揉みつつ、かすれた声で、

「レーデ、ミッヒ（助けて）」と繰り返すのである。

どうされるかは、一番その女が知っているにちがいない。

プツリと注射針が喰い込んで行った。付き添ったウイリー夫人が、まめまめしく夫の手助けをしているのである。これが、あのゼイタク三昧だった有閑マダムとは到底、思えない程の違いだった。

たちまち、檻の中の女は苦悶をはじめ、遂に気絶してしまった。あまりの物凄さに有明でさえ吃驚したくらいだったが、ウイリー夫

妻は平然と、馴れたものだ。

「これからブドー糖を四百グラム程、打ちます。すぐによくなります」

なるほど、ウイリー夫人がブドー糖を打つと、忽ち女は息を吹きかえた。しかし、副作用が起こって、ゲージと苦しげに戻しはじめる。部屋中に酔っぱい臭気が満ちた。

「一種の拷問的效果はありますね」

博士は、事もなげに言う。

「こうして人工的に糖尿病患者を作ることとは



出来ましたが治療法が完全ではありません。

そこで数名の実験材料を使って、糖尿病患者に激しい運動をさせた場合、どうなるかを実験しつつあるのです。これも……」

ガードマンが二人、檻から太った裸女をひき出し、部屋の一隅に置いてあった自転車型の運動機械に乗せた。天井から下っている鎖に両手を縛りつけられ、足首もペタルに固定された。もうこれでは逃れるすべもない。速度計が20キロに合わされる。

女が、

「ギャーッ」

と叫んだ。ペタルを踏まなかったので電流が通されたのである。一定のスピード以上で足を廻していないと、自動的に容赦なく、電撃が走る仕掛けになっている。太った女は苦しそうに膝を上下しはじめた。

ウイリー博士は、忽ち汗を噴きはじめた白い肌に数々の測定接点を貼りつけて行く。

「この研究で、無手術療法が発見出来れば素晴らしいんですがね」

女の苦悩をよそに、平然とウイリー博士が言った。

「殿下——は、どうなっているかね」

再び廊下を歩きながら、有明が聞いた。

「それを、これからご覧に入れようとしていたところなんです」

「もう大分、作業が進んだんでしよう」

「はい。しかし、おいつけが色獣に改造せよとのことでしたので……」

「何か厄介なことでもあったのですか」

「なにしろエミー司令が急所に縄をつけて長道中を引っばったものですから、大分損傷を受けていたのです」

「フフ、それは困ったことですナ」

「そうなんです。役立たずでは色獣になりませんからね」

乾いた声で博士は笑った。

「エラクチオン能力をよくするために大腦をちよっとオペしてみました。性衝動以外には情緒を動かさなくなるでしょう」

「フン、文字通り色餓鬼だね」

「ただ、今のところ動揺が激しいので、馴化期間が終わるまでは人に会わせない方がいいのです。それで、申訳ありませんがこちらの看視室からご覧になって下さい」

暗室のような小部屋に導かれ、電灯が消さ

れると、片側の壁を覆っていたカーテンがスルスルと引かれた。壁全体がマジックミラーで、水族館の中を覗くように向こうの部屋が丸見えになっている。腰の高さ程に床が上っていて約二メートル立方程の空間があった。床には白いウレタンマットが敷き詰められている。その真中に奇妙な肉塊が蠢いていた。

そこには、かつての毅然としたアラブ首長の姿は片鱗すら残っていない。むごいことに手足は夫々肘と膝でプスッと切断されていて切口は金色に光る金属で蓋をしてあった。頭髮も、あの見事な髭も全部、剃り落とされていて、その後頭部には15センチ程の縫合痕が縦長に残されている。

「シェイク・アル・ゼバルも、こうなっちゃ形なしだね」

「この処置の時には、それはもう大変な暴れようだったんです」

ウィリー夫人が言った。

「主人が脳切開をするまで続けました。本当は脳をいじらないで屈服させるべきだったんですけど……」

「うちの拷問システムでも歯が立たなかったのかね」

感心したように有明がつぶやいた。

「ええ。すくなくとも予備拷問までは問題なく耐え抜いてしまったんです。そんな人間は僅か三パーセントしかありませんからね」

「さすがは……だね」

「それより……」

ウィリー博士が口を入れた。

「この民族は伝統的に性的機能が鍛えられているんですね。おどろくべきものです。まあ見て下さい。今、条件反射をトレーニングしていますから」

博士が何かのスイッチを押すと、リーン、リーンという澄んだ鈴の音が響いてきた。すると、今までドンヨリと曇っていた「殿下」の顔が忽ち輝きを増し、肉体が隆々と活気を呈し始めた。身体のバランスがちがってきているので、奇怪とも思える。第二関節までしかない手足を珍妙にバタバタさせる。天井が開いて、スルスルと裸女が降りて来た。よく見ると等身大の人形である。人形とはいっても、いわゆるダッチワイフとしての機能が調っているばかりか、皮膚の感触、滑らかさ、体温等も、かなり本物に近く、何よりコンピュータで操作されるので非常に複雑な動作が可能になっているのが特長である。

色餓鬼になり下ってしまった殿下はニタニ

タとヨダレを垂れ流さんばかりに相好をくずし、この人形を迎え入れるのであった。

「今でも連続五〜六回戦は可能なんですからトレーニングで随分よくなるでしょう」

人形はコンピュータの指令によって作動をはじめている。それにつれて、ユルプリナーによく似た殿下の顔に恍惚の表情が泛かんで来た。

プーンと動物園めいた匂いのする一室に、人がやっと蹲んで入れる位の、言いかえれば長さ約一メートル、巾と高さが80センチほどしかない檻が数個並んでいて、陸揚げされた新しい男囚が一人ずつ監禁されている。新津謙介やホセ・アマビスカとて、例外ではなかった。

有明たちが入ってきてても、男囚たちは怒る気力すら尽き果ててしまっているように思われた。むしろ、口々に卑屈な態度で有明の憐れみを乞おうとする。

その中で新津だけが沈黙を守っていた。体毛を悉く剃りとられ、毛根まで電気針を刺して分解されてしまったので、これからは頭のテッペンから足の爪先までツルツル坊主で暮すほかはない。そうしたことの屈辱感だけで

も耐え難いのに、犬でも入れそうな檻に押し込んで放置されていたのである。暗い憤怒が瞳の奥で燃えたぎっていた。

「ちょっと吊るしてみてくださいませんか」

有明が、たのんだ。すぐに男奴が呼ばれて檻の口をあけて新津を引き出した。

檻から出されても、後手錠、足鎖では手向かいも出来ぬ。齒がみしているところを、上から降りてきた鎖に首輪を連結されてしまった。たちまちガラガラと上へ曳かれて、いやでも立上らなければならない。痺れ切った足でヨロヨロと爪先立ったところでヤッと停まった。

「案外、いい身体をしているんだね」

嗤いながら有明が言う。

ペツ、と新津が唾をハキかけた。有明が敏捷に、それをかわした。絶対の差異は怒る必要すら認めさせないのであろう。有明は平気で新津の裸の腕をとって、

「どうかね、私と取引をしないかね。君が味方になってくれるのなら、自由にやってもいいのだが」

「いやだ」

ニベもなく新津は頭を横に振った。

予 審

地上の世界には時というものがあつた。まして太陽が燦々として照らしてくれる昼間と星が宝石をちりばめたように輝く夜とが交互に繰返していた。それにひきかえ、女囚たちの繋縛されている広間は四六時中、人工の光に曝されていた。もっとも、ネプチューン号のセル内での生活も全く同じだったから、女囚たちは幾分それに馴れ始めていたのかも知れない。

計るすべもない時間の経過、その中で眠ければ眠り、喰べなければ喰べた。そうはいっても、ムカデのように五人ずつ首を連結されていては勝手な事が許されない。何をするにも五人一緒でなければならぬのだ。

五人掛けの奇妙な便所の事は前に述べた。

いつでも数名のアマゾン女兵が交替で見張りをしているから、それに頼めばいいのだけれど、恥かしくて仲々出来るものではない。それに五人の間にも個人差があるから、いつも便所の近い者が貧乏クジを引くことになる。尿意があろうがなからうが、一旦ガラスの穢線をまたがせられると五人全員が用を済まさ

なければ降りして貰えない。しかも、アマゾン女兵は意地が悪く、容易なことでは女囚たちの希望を満たしてくれないのである。

最近のガソリンスタンドには、給油管が天井から下ったタイプのものがあるが、ここでの女囚たちの食事は、すべてドロドロした液体だった。五人並んで上からブラさがっているゴム管をくわえさせる。ジョツとベルが鳴っている間中、流動食が流れてくる。そしてわずかに数秒で終わる。女囚たちは目を白黒させて呑みこまなくてはならない。ちよつとでも噛もうなどとすれば流動食は忽ち口中に溢れて、外へ噴き出てしまう。これだけのことでは電氣鞭を受けなければならないし、第一その日一日（といってよいか悪いか）とに角、かなりの時間を空腹で過ごすなければならないのだから皆が夢中になるのも無理はないのである。

睡眠をとるにしても、五人がそうしようと思わなければ横になることさえ出来ぬ。幸い床にはプラスチック製の柔らかい疑似芝が敷き詰められてあつたから、コンクリートの床にねるよりはマシだったかも知れない。その代り蒲団もベッドもなくて、メザシのように雑魚寝をする他はないのである。

ジェット機で世界一周をしているような、昼夜の別もない時間の経過のあとで、正確に言えば約三昼夜たった頃、数名の部下をひきつれた偉そうなアマゾン女兵が、一段と高くなったバルコニーに出て来て言った。

「よくきけ。これから予審がはじまる。予審と本審査とで、おまえたちの地位が定まるのだから、一生懸命、いわれた通りにして審問官さまのお気に入るようにしなければならぬ。さもないと、永久に牛馬のように繋がれていなければならないであろう」

ワイヤレスマイクを使っているのであろう朗々とした声が広間中に響き渡った。この短い演説は、直ぐに英語やフランス語、さらに中国語など必要な言葉に翻訳されて放送された。国籍の入りにくんだ女囚たちも、全員がこの意味を理解することになる。怖れと不安で皆一様に顔を蒼白にして立ちつくしているのを、アマゾン女兵が電気鞭を振りながら番号順に並べはじめた。

トップは五五三号という番号をつけた中国娘で、この組だけは五五五号まで三人だけが一組みになっていた。

ベランダから広間の中央まで、天井に複線



になったクレーン・レールが取付けてあっていくつもの小型クレーンが、並んで動いてきた。その一つから、細いワイヤーがスルスルと降りてくる。五五三号がムカデの列から切りはなされて、ワイヤーの先についたフックに結びつけられた。すぐに両手首を繋いだパイプが首輪からはずされたので、パイプの中央部と連結したワイヤーが上へたぐり上げら

れるに従って、五五三号の両手は見る見るバンザイをしたように引きのばされてしまった。

「パイプにしっかりつかまってるんだよ。さもないと手首が痛いから」

アマゾン女兵の一人が、福建語で注意をした。あわてた五五三号がパイプを掴み直すより早く、彼女の裸身は宙に浮いてバルコニーの高さまでグリーンと昇って行く。そこで上昇を停めたクレーンは、今度は横に動いてバルコニーの中に吸い込まれて行った。

「肉体番号F五五三号、シナ人、俗名張惠華二十一才、捕獲地ホンコン島、捕獲状況A B B、ご審査願います」

抑揚のない声で自分が紹介されるのを、気が遠くなりそうな気持で聞いた。

影をつくらぬ特殊な照明が上から束になって彼女を照らしているだけで、周囲はまったくである。大勢の人間にとりまかれています

ということだけは気配でわかった。

伸縮自在のパイプは80センチばいに延ばされ、全身を懸垂する両腕はVの字型に開いたまま、足の爪さきが僅かに床に届くか届かないかという状態では、肘を動かすことすら出来ない。

「未決服を脱がせないさ」

正面の暗闇から、やや甲高い、しかし素晴らしく澄んだ女の声が落着いた調子で命じた。

「ヒューッ」

哀れな五五三号の悲鳴も空しく未決服は永久に彼女の肌から離れ去った。揮スタイルのショーツもスリと抜きとられてしまった。もはや、身をかくす一片の布切れすら許されなくなった彼女は、吊られているので突き出した恰好になった豊かな胸乳を憐れながら愁々とすすり泣くばかりである。

闇の中から何人かの手が伸びて彼女の肌に触れた。身をよじって避けようとしても、タカがしれている。かえって恥かしい裸身の動きを更に、あからさまにしてしまうようだ。闇の中の手は一層、大胆に腕を掴んだり、腿の筋肉を大きくつまんだりしてくる。そのたびに五五三号は激しく苦悶を繰返すのであった。

「捕獲司令の状況判定を承認する。総合判定

B A A C e、銅クラス相当」

澄んだ声がハッキリといった。

「肉体番号を、確認願います」

脇にいた誰かが声をかけた。いきなり両足が別々に持ち上げられ、太腿を大きく開けさせられ、そこへ、ご丁寧にスポットライトが当てられるのである。

「F—五五三、たしかに間違いありません」

もう一人の声がすぐ近くでする。顔を近づけて文身の数字を読みとったらしい。

これで予審とやらが終わったらしく、五五三号を吊るしたクレーンは静かに右手の方に移動しはじめた。

入れ違いにF五五四号が吊りあげられてきた。金髪の美しい白人娘である。

ワアワア泣き叫ぶのに頼着なく両膝を高々と差上げられ、スポットが集中される。白すぎるほどの肌色に、F五五四号という入れ墨の紋様がドギツク浮き出て見える。

闇の中の声はC A A C fという判定を下し「鉄のクラスに相当する」

と言いわたした。

五五四号は張恵華と反対の方向、つまり左手の闇に吞まれて行った。

F—七五三号、ジャンヌの番が廻ってきたときは、もう予審が始まってから十時間以上経過していた。

型通りに肉体番号が確認されて最終判定が下される。B B A A dという記号が果たしてどんな評価を表わすか、ましてや銅のクラスが、どんな階級であるかも知らない。しかし彼女は一旦、脱がされた未決服を再び着せられ正面に進めと命ぜられる。パイプは再び、もとの長さに縮められ首のつけ根に固定された。

くらやみの中で、誰かが彼女の首輪にガチャリと鎖のようなものを連結した。その鎖に牽かれて歩かなければならないのは一寸、悲しかった。

かなりの距離を進んだところで、長さ1メートルばかりのパイプの杭が、薄暗い光りの中に林立している広間に着いた。ジャンヌはその一本に首輪をつながれてしまった。更に今まで首を引っばってきた鎖で、身体をタテに割って背中のパイプに固定される。つまりジャンヌはパイプの杭を背中にあてて中腰で立っていなければならないことになったのである。

しばらくの間は、どうやら我慢できた。しかし、時が経過するうちに、そのように中腰で放置されていることが次第に耐え難いものになって来る。かなり多数の女囚たちが、ジャンヌより先に、同じように縛りつけられているらしく、杭のあちこちから、苦しそうな呻き声が聞こえてきた。いつの間にかジャンヌも、同じような苦悶の声をあげはじめていた。

一時間ほどして、アマゾン女兵が一人ジャンヌの側に来て、ジャンヌに耳打ちした。

「本審査を受ける前に、体力検定をしなければならぬが、受けるか受けないかは、お前の自由にしていい。どうするかい」

「受けます」

ジャンヌは、躊躇なく答えた。今の耐え難い状態から逃れられるなら、人殺しだってやったかも知れないと思った。

「よろしい」

アマゾン女兵は満足そうにうなずいて、杭からジャンヌをはずしてくれた。再び鎖をひかれて部屋の隅へ。そこからエレベーターで下へ降りると、まばゆい程の広場へ出た。いや、広場というより、大運動場といった方が適当であるかも知れない。五レーンのトラッ

クの内側は人工芝が敷きつめられ、いろいろな運動競技が出来るようになっていた。そして、其所彼所で美しい裸女たちが夫々体育にいきそんでいた。太陽光線を集束して導入している照明は地底とは思えない程、あたたかい雰囲気を感じさせていた。

ここで、ジャンヌは始めて四肢の自由を許され、定められた順序に従って百メートル疾走、重量揚げ、運動神経反応など、様々のテストに汗をかかされた。アマゾン女兵が数値をコクメイに記録して行った。

壁一つ隣が、ついさっきまでムカデのように五人一組でツメ込まれていた、広間になっていた。

体力検定が終わると再び手足を拘束されて先程の杭へ戻らされることになったが、その途中、アマゾン女兵がフト気まぐれを起こして、もとの広場の見えるベランダのところまで引っぱって行った。

「見なさい。お前は従順だったから自由意思による体力検定が許されたが、アッチは反抗したので強制検定をされてるんだ。どっちにしても体力を測定されることには変わりはない」

見おろすと、ただ見る、そこは一つの地獄

図であった。さっきまでは何も置いてなかった広間なのに、今は色々な機械が据えつけられてあり、その一つ一つに全裸の美女達が縛りつけられて、或いは泣き叫び、或いは唇を噛んで苛酷な検査に呻吟していたのである。

自転車のペタルのようなものを力一ぱい踏まされている女は、両手を宙に吊られ乳首に細いコードがゴムバンドで留めてあった。足の動きが弱まると、忽ち電流が通じるようになっていた。直径1メートル50センチもある重い車輪を必死に廻している女もいる。腕の力を抜くと、背中に鞭がとぶのである。二枚の車輪にはさまれているので、その鞭をさけることは出来ない。首輪と床とをコイルスプリングで連結され、立ったり坐ったりさせられている美女もいる。背筋力を測定するという名目だけれど、サボればグイグイと首が締まってくるという仕掛けになっている。いずれにしてもギリギリの限界までシボリ取られなければ懲罰的体力検査が止む時はないのである。

さすがのジャンヌも暗然と息をつめて悲惨な光景を見おろすだけだったのである。

(未完)

読 切 小 説

男が女を殺す時

千 草 忠 夫

一

高木刑事はゆっくり煙草の煙を吐き出しながら、机の向こうの殺人犯人がいかつい肩を前かがみにして、与えられた煙草をむさぼるように吸い込んでいるのを、眺めている。

第一回の尋問のとき、もう犯人はいとも簡単に犯行を認めていたから、第一の難関は越えている。裏付けもほとんど終わっていて、あとは動機をはっきりさせることだけなのだが、その点が今ひとつ、高木刑事には納得がゆかないのである。

人妻といい仲になっていて、その女が心変わりしたわけでもなく夫に気付かれて三角関係が破綻を生じたわけでもないのに女を殺している。背後にそれ以外の複雑な利害関係がからんでいる様子もないのだ。現代青年の無軌道、「理由なき殺人」横行の時代、などとあげつらってみてもどうなるものでもない。



高木刑事はあらためて、犯人の純戦後産といえる容姿を眺めやった。ビートルズ頭、彫りの深い顔だち、しなやかな長身。ノーネクタイでふくれ面をうなだれていてさえ、それなりにカッコいい、いかにも現代青年の典型——それもまだ実社会には出ていない遊び好きな大学生あたりに、よくあるタイプの青年であった。

険を含んだ眉宇、酷薄で冷笑的なまなざし、薄い鼻梁、不平を吐き散らしたくてウズウズしている唇。駄々っ子の図体だけが大きくなつたような、こんな青年を刑事は事件のたびごとに見てきた。取り扱いも心得ているつもりだ。最初、鼻っ柱は強いが、それをいったんヘシ折られると、母親の乳房からもぎ離された赤ん坊のように、たあいもなくわめきたるだけで、後は文字通り赤児の手をヒネるよりもたやすく、屈服してしまう。ねばり気などというものは更にないのだ。

高木刑事は、そんなタイプの青年のことを「プラモデル並み」と評している。見栄えはいいが毀れやすいのである。そして、いったん毀れたら、もう継ぎ合わせる気もおこらないほど、安っぽさが露呈してしまう。

しかし、今眼の前に居る犯人を「プラモデ

ル並み」と評し去るには、刑事は或る種のためらいを感じるのだ。一応たかはくくっているものの、何かひっかかる所がある。その原因は、犯人が犯行をあまりにも平然と、簡単に自供している点にあった。自分の行為に罪悪感を持たないのも現代の「プラモデル並み」の特徴のひとつと言ってしまうばそれまでののだが、長年のカンはそれだけで割り切ってしまうえないものを警告している。それでなくても、犯行をスラスラ自供する犯人にかぎって後からゴタつく例は少なくないのだ。

格子のはまった窓のスリガラスに、葉桜の緑の陰がゆれている。高木刑事はゆっくりと構えることにした。

昼飯は与えた。煙草も吸わせてやった。後はその重い口が、何かをしゃべり出すのを待てばいい。こんなタイプの男は、下手にせきたてて気分をこじらせるのが一番まずいやり方なのだ。インテリらしく、自分の話に筋道を自分なりに立てて、話しはじめるのを待つのだ。いったん口を開けば、あとは結末まで一瀉千里で進む。

煙草を吸い終った犯人は、さっき食べた親子丼の鉢の底を蠅がねぶりまわっているのに眼を落としていたが、その眼をチラと刑事の

方に上眼使いに上げた。刑事はうながすようにうなずいて見せた。

二

ぼくが初めて小田切美沙子と出会ったのはそう、あれはたしか四月十三日だった。友人を見送りに東京駅の新幹線ホームに居た時のことだ。発車までの間がもてなくて、何となく話もとだえ勝ちにホームに向き合って立っていたとき、すぐ隣の一等車のホームで、いかにも楽しそうな笑い声があがるのを聞いたのだ。パリッとした背広姿のいかつい四十がらみの男と、和服をスラリと着こなした、二十七八、まだ三十にはなっていない美しい女とが、肩を抱き合いそんな様子で寄りそってしきりに笑いあっていた。

「チェッ、見せつけやがるな」と友人が羨望の眼で見やりながら言った。ぼくも同じ気持ちだった。この女に限らず、美しい女が何の取り柄もなさそうな男としあわせそうにしているのを見ると、腹が立ってくるのだ。

「夫婦じゃないな」とぼくは言った。

「夫婦だよ。妾だったらこんな人眼につくところだ、ああデレデレしてられないさ」

「年令が違い過ぎるんじゃないか」

「だから見ろよ。亭主のやつ、可愛くてたまらないって面してやがるじゃないか」

ぼくの眼は、その女のスッキリと抜けたえりあしの、匂うような美しさに、釘付けになっ
てしまっていた。女の優しいなで肩が、ガ
ッシリとして四角張った男の肩に寄りそうよ
うに——というより、抱きくるまれるようにな
って、何か互いの耳にささやき交わしてい
るのを見ながら、ぼくはみだらな想像をかき
たてていた。

発車間際になって、男が車のステップの方
に歩みかけた頃、若い部下の社員らしいのが
息せききって駆け寄って来た。何かしきりに
言いわけをしながら、手にした大きな封筒を
渡した。その封筒に大きく印刷してある社名
が、ある有名な会社のもので、そのことが、
一層ぼくの興味をかきたてた。

列車が出てしまうと、最後まで胸のあたり
で小さく手を振っていた女は、ちょっと肩を
落とすようにして、つつましくひかえていた
会社の青年と階段の方へ歩き始めた。ぼくは
なんということなしに後をつけて行った。そ
ろって丸の内の方に出ると、男の方は会社へ
もどるらしく、挨拶をして地下道の方へ行っ

てしまった。女はタクシーに乗った。女のタ
クシーが出たすぐ後にもう一台やって来て、
そこにボンヤリ立っていたぼくを客と思った
のか、ドアを開けた。

それが、ぼくの運命を大きく狂わせてしま
ったのだ。

これまで女を尾行したことがないわけじゃ
ない。しかしそれは歩いてのことで、こんな
自動車などで始めてのことだった。それまで
の尾行というのは、例えば、電車から降りた
時こればと思う女を見かけると、その女の家
までただなんとなく後をつけるだけの事だ。
女の顔や体つき服装などからいろんな事を想
像しながら後をつける。そしてその女が自分
の家に入る所を見とどけて、更に想像をふく
らませて楽しむのだ。やはり、生活の背景に
なるものを見とどけないと、どんな女も生き
てこないし、門標などで名前がわかれば、そ
れに越したことはない。

ホームからタクシー乗り場まで後をつけた
のは、そんな習慣がいつのまにか現れたので
あって、尾行をトコトンまでやろうという気
は全然なかった。タクシーのドアが眼の前に
開いて、それに誘われるように乗ってしまった
てからでも、まだその気になってはいなかつ

た。車が動き出すか出さないかに停車信号に
引かかって、眼の前にあの見おぼえのある
スッキリ抜けた襟あしを乗せた車が居るのに
気づいたとき、始めて、これはイケるかも、
という気が起きてきたのだ。あれといい、こ
れといい、それから尾行が最後までやすやす
と成功したことといい、みんな何か運命が糸
を引いていたような気がする。

女のアパート、いやマンションは代々木の
場所柄だけでも、いかにも高そうな所にあっ
た。前に広い駐車場のついた五階建てで、ぼく
がその前に乗りつけた時、女は入口にある郵
便箱を開けて手紙を取り出しているところだ
った。ぼくは縦横幾十か並んだ郵便箱のどれ
が彼女のものをしっかり頭の中に刻みつけ
ることを忘れなかった。

女が階段の上に姿を消してから、ゆっくり
その郵便箱に近づいて行って、さっき女が開
けていた箱の、ネームプレートを確認めた。

小田切美沙子という名前を知ったのは、その
時のことだ。そしてその瞬間から、彼女はた
だゆきずりの美人というのではなしに、レッ
キとした名前を持ち、住所さえわかっている
ぼくの知人になったのだ。亭主の名前は弘と
あった。三十五という箱のナンバーから、美

沙子の部屋が三階にあることもわかった。

白昼のマンションはまるで無人のように鎮

まりかえっていて、表通りをゆく自動車の騒音が、かえってこの静けさを強調するようだった。ぼくをいろんな空想に誘い込んでいったのは、そのエアポケットのような静けさだったと思う。いまこの三階に、夫を送り出したばかりの人妻がたったひとり、いる。夫の居ない気楽さから長襦袢だけになって、しどけなく横ずわりになってお茶でも飲んでいられるかもしれない。あるいは外出のほこりを払うためにバスにつかっているかもしれない。ひとりの気楽さからどんな奔放な姿態を見せていることか。もし、そんな所へぼくなり他の男なりが不意に侵入していったら——あまり刺戟的なので、じっとしていることができず、ぼくは歩き出していた。「マンションの内部は、いったんドアを閉じてしまえば密室同然」というどこかで読んだ文句が頭の中で明滅していた。マンションやアパートでの白昼の強姦や殺人が、隣人に全く気取られることなく行なわれた新聞記事がよみがえって来た。恐怖のないまざった誘惑に、ぼくはほとんど歩くことが出来なくなっていた。

「あいつらはヘマだ。おれならもっとうまく

やって見せる。永久に新聞ダネにならないようにな」

こんなことを口走ったりしたけれど、まだ真剣に実行しようなどと思っていなかった。いけば退屈しのぎのお遊びのつもりだった。

○

高木刑事からは、犯人の表情はひさしのように覆いかぶさっている長髪のために、ほとんど見えない。ただ高い鼻と唇の動きが眼に入るだけだ。その唇は果てしのない不平を訴えるように、ブツブツ泡を吹くように動いている。

（退屈しのぎか、この頃の若いもんはやることがさな過ぎるようだな）

高木刑事は窓にうつる葉桜の陰に眼をやって、ちょっとした感慨にふけた。彼の青春時代といえば、鉄と皮革とグリスの匂いがした。それに罵声とビンタ、砂利を踏みしだく編上靴の音、果て知れぬ重圧に押しひしがれた青春ではあったが、それでも本人にとってはかけがえのない青春だった。それを良しとするわけではないが、何の苦勞もなく青白く育った青年に対する嫉妬に近い反感をおぼえることはおさえたかった。こんな青年より

機動隊とわたりあう青年たちの方が高木刑事の心情により近い。

刑事は煙草を一本抜き取ると、袋を犯人の方に押しやった。

三

翌日ぼくは封筒で見ておいた会社へ電話をかけた。弟と名乗った。会社の方では何の疑いも持たずに、小田切課長は福岡へ一週間の予定で出張中だと教えてくれた。

一週間の出張——運命の女神はまたしても意味深長な笑顔を見せた。あまりにもツキ過ぎるので、ぼくはかえってたじろいだくらいだ。これまでの尾行には、どこかの一点で必ず犯行をはばむ障害があったし、またその事をあらかじめ予想し、その障害に立ちいたったら行動を中止するという自分自身に対する暗黙の了解のもとに行動していた。いわばゲームのルールみたいなものをあらかじめ設定しておいて、その範囲内で遊戯を楽しんでいたのだ。罪のない楽しみだった。

しかし今度のは違う。障害らしいものは何もない。残るのは自分みずからが設定したルールを破るかどうかだった。これまでは

現実の障害という裏付けがあったのでルールも強い拘束力を持つことができたのだが、それがなくなった今では、ルールを守るだけの自制心があるかないかだけが問題だった。

世間の人間はこのルールのことを道徳と呼んでいる。そして自分は確固とした道徳観念を持ち、法を犯そうなどとは露考えたこともない、などと思っている。しかし、人間の道徳心などというものは、そんなに強いものじゃない。みんな刑罰がこわいから、世間体が悪いから、何となく法律を守って暮しているだけなのだ。ぼくも世間一般の人間にくらべて、特に道徳心が欠けているとは思わない。ただ機会の犠牲者に過ぎなかったのだ。

とはいっても、考えている事を実行するのは、かなりの勇氣と決断がいった。計画は難なくでき上がったし、発覚のおそれもまず考えられないのだが、しかし世間に犯罪と呼ばれる行為を実行するには、やはり勇氣がいる。

不決断のまま二日たち三日たった。日がたつにつけて、美沙子のイメージが次第に強烈にぼくの妄想をかきたてるようになっていった。あの端正に取りつくった表情が恐怖にゆがみ哀願に崩れ、衣紋をしどろに乱して屈

服していく姿が夢魔のように、ぼくの眠りをさいなむようになった。たった一步、たった一步踏み出しさえすれば、その悪夢を現実の至悦に変えることができるんじゃないか、と自分を叱りつけてみたり、ある時には、突発的な事情で計画がすべて不可能になるようになればいいのに、とさえ思った。しかし、何事もなく時間はぼくの不決断、無氣力をあざけるように過ぎていった。

そう、たしかにあんたの言う通り、世間には掃いて捨てるほど女がいる。ぼくのことを好きだといって、モーションをかけてくる女子学生もいないわけじゃない。しかし、そんな女を抱いて寝たところで、ぼくのこのヒリつくような焦燥が消えるわけじゃない。欲望には決して昇華されない部分が、代用品では決して発散することのできない部分があるのだ。恋人に代用品がきかないのはそのためなんだろう。

ぼく的美沙子に対する感情は、決して恋なんてものじゃなかった。はじめっから欲望だけだった。その欲望が他の女ではなくて美沙子だけに向けられるようになったのは、美沙子との最初の出会いで、彼女があんまりしあわせそうな姿を見せつけ過ぎたからだろうと

思う。ぼくは美しい女が恋人や亭主としあわせそうに寄りそっているのを見ると、むしろに腹が立ってくるのだ。そんなふたりの仲をメチャメチャにしてやって、泣きベソをかきく所を見たくなくなるんだ。たぶんヤキモチなんだろう。ぼくは度しがたいヤキモチ焼きななんだろう。しかし男はみんなそうなんじゃないか？ 世界で男性は自分ひとり、あらゆる女を自分の膝下に奉仕させたいと願わない男が居るだろうか？ 老いさらばえて臨終の床についている男は、自分が死んだ後にも若い美しい女がたくさん生きて居て、自分以外の男に恋をし夫婦になることを考えて無念の思いにさいなまれはしないだろうか？

○

高木刑事は、犯人の話を聞きながら、次第にこの犯人がグロテスクな奇形児に見えて来た。いつだったかテレビの怪奇もののシリーズで見た、頭脳だけが異常に発達した頭デッカチの矮人が彷彿としている。それは高木刑事が抱いている現代青年に対する考えと完全に一致するものだった。

(こいつはやはり、戦後自由主義教育の欠陥の最も大きな現れだな)

犯人が話し終るまで口を出すつもりはなか

ったのだが、犯人があまり熱心にたたみかけてくるので、高木刑事はちよつとその鼻っ柱をくじいてやるつもりで、口を開いた。

「じゃ聞くがね、そんなに世界中の女を自分のものにしたいのなら、なにも他の男に抱かれたことのある女、いってみればセコハンの女なんか狙わなくても、そこら辺に生娘がウヨウヨしているじゃないか」

犯人は前に垂れた髪陰からチラと眼を上げて、さげすむような色を唇のあたりにただよわせた。

「そんな、いつでも自分のものにできる女は後まわしにして、他の男のものになっている女を先ず自分のものにしてかかろう。というのが自然な心の働きじゃないですか」

「フーン」

高木刑事はヤレヤレという思いで黙った。

(手っ取り早く言えば、一盗二婢というやつじゃないか。それを、なにを持てまわって……)

心の中でブツクサ言っているうちに、高木刑事は愕然となった。一盗二婢というのはどこから起こったことか知らないが、とにかく古い言葉に違いない。とすれば、犯人の言っているタワ言はあながち戦後自由主義教育の

言わせることではなくて、かなり手垢のついた真理なのではあるまいか？

四

時間がぼくを引きずっていった。はっきりとした決断をくださないままに、ぼくは少しあて退路を狭めていった。大型のナイフを買い、綿ロープを七メートル買い、最後に手錠を買った。あんたも知っているだろうが、東京には手錠ばかりじゃなしに、女を責める小道具を売る専門店がある。そこに売っている一番安いものが手錠で、それ以上のものには手が出なかった。革ブラジャーに革パンティ首輪に鎖、こんなものも欲しかったんだが、それはこの次にして、必要最少限の手錠だけにしたのだ。その店でいろんな小道具を眼にしたことが、ぼくの妄想に一層火をつけた。女を素っ裸に剥いて首輪をはめ、手鎖足鎖をまとわせて、這いずりまわらせることが夢になった。革のパンティとブラジャーを素肌につけさせて、その上に上品なよそおいをさせそんな女に銀座の人ごみの中を歩かせることを想像しただけで、体の中心が熱くなった。しかし、ぼくの持っている金だけでは、そ

んな高いものとはとても買えない。手錠を買うのにさえ財布の底をハタかなくちゃならなかったんだ。ぼくが退路を狭めていった、というのはこのことだ。これだけ投資した以上は無駄にはできないってことだな。

人は決断をせかされ、それについて考えているうちは絶対に決断なんかできっこないものなんだ。決断は自分でするものじゃない。向こうからやってくるのだ。ぼくが決断、と言えるものならだが――をしたのは、こんなことをウジウジやっているのが急にバカバカしくなった時だった。そんなに深刻に考えなきゃならんことなのか、こんなことが？ と考えたら、急に体が軽くなった。そんな気持ちを、ぼくはそのまま電話口まで運んだ。四日目のことだった。

ダイヤルをまわす指がふるえていないのを確認して、ぼくは満足した。受話器の向こうに美しい声を聞いたときは、積もりに積もったストレスが、まるで風船から空気が抜けてゆくようにしぼんでゆくのがわかった。

「社の課長の部下の者ですが、実は急に必要な書類ができて、福岡の課長に電話したところ、お宅にあるということなので、突然ですが、これから取りにあがってもよろしいでし

「ようか」

「あの、あたくしでわかりますでしようか」
「こちらは見ればわかりますから。ただちょっとデスクをかき廻すことになりますが——これは課長の了解を得てありますし、奥様も立ち合ってくださいませ……」

「よろしゅうございますわ。どうぞいらしてくださいませ」

「では、さっそくうかがいます」

ざっとこんなやりとりだった。あらかじめ考えておいた言葉がスラスラ口から出るのが我ながら嘘みたいだった。

用意は全部できていた。サラリーマンに見せかけるために、散髪して髪をチックで固めおしゃれの友人からダークスーツを借り、アタシュ・ケースも準備してあった。要はマンションのドアから一步でも内側に踏み込めるための仮装だった。アタシュ・ケースにはロープだけを入れ、ナイフと手錠はポケットにおさめた。

マンションに着いたのは、昼の一時頃だったと思う。建物を眼の前にして心がひるんだが、もう後へは退けなかった。いや、いつでも退けるんだぞ、と考えながら階段を昇っていった。エレベーターを使わなかったのは、

階段を一步一步昇る動作によって、一步一步自分の心をその方に向けてゆくためだった。ブザーを押してすぐドアが内側に開き、夢にまで見たあの顔と眼近かに対したとき、ぼくは膝がガクガクするのをどうしようもなかった。恐怖とか不安からじゃない。そんな感情なんかどこにもなかった。興奮のためだ。わかるだろう。やることより、やるんだという期待の方が興奮させるものなんだ。未経験の男が、入口でブツ放してしまうのはそのためなんじゃないか。這入りこんでしまえば、どんな女もたいした違いがあるわけじゃない。

○

（こいつ、まだ青二才のくせして、このおれに教えようというのか）

高木刑事は苦笑した。しかし、犯人がしゃべっている心理学が、あながち的はずれでもないことを、刑事は体験から知っている。

高木刑事がはじめて女を知ったのは、彼の年代の例にもれず、女郎屋でだった。はじめて登楼して、妖しげな雰囲気の部屋で女と二人きりになり、女が帯を解き始めるのを眼にしたとき、彼は急に生温かいものをズボンの中に感じ、同時にかつて味わったことのない恍惚をも体験したのだ。それはいまだに記憶

に鮮かに残っている。その後の行為のことは全く思い出せないのに。

高木刑事は、連想の当然のなりゆきで、現在の女房との初夜のことを、何ということなしに思い出した。たしかに初夜の感激のような感激はその後の夫婦生活の中に一度も味わったことはないようだ。もっとも、あの時はさすがに事の前の討ち死にというような醜態は演じなかったが……。

犯人が再び話し始めたので、刑事はあわてて口元を引きしめて、思い出を傍へおしやつた。

五

美沙子は何の疑いも持たずに、ぼくを中へ入れた。ピンクのカーディガンにスカート姿の彼女は、駅で見た時と違ってもっと親しみのある、いかにも家庭の主婦らしく見えた。それがぼくをたじろがせた。生活の匂いのする女に、ぼくはあまり興味がないう。ぼくの頭の中には駅で見た彼女のドレスアップした姿だけが固定観念になって、ヘバリついていて、家でもあんな恰好でいるものとはばかり思い込んでいたわけだ。

しかし、しなびかけたぼくの気持ちには、美沙子の美貌と、自然ににじみ出る色っぽさ、それに内部の家具や調度の豪華さなどで、すぐに元にもどった。彼女はどんな服装をしていてもやはり高価な女のイメージを与えることに変わりはないのだ。

すまいは、玄関を入ってすぐの所に一部屋その隣にダイニング・キッチンと居間を兼ねた広いスペースがあり、その奥ベランダに面して二部屋並んでいる。右側が案内された書斎で、左側がベッドルームになっていた。四畳半に六人というような生活をしている人がいるというのに、ふたり暮らしにしては、これは贅沢なものだし、インテリヤの凝ったたたずまいは、ぼくの眼には一流ホテルなみとも見えたものだ。

書斎はベランダに面してドッシリしたデスクが据えてあり、壁にはむづかしげな本や、スクラップブック、ファイル、などがギッシリつまった書棚が並んでいた。

「さっきちょっと調べて見たのですけれど、鍵のかかった抽出がひとつだけありますわ」背後からのぞき込むように彼女が言うのを聞き流して、ぼくは何となく抽出を探すふりをしていった。ぼくはふり返って美沙子と向き

合う時をはかっていた。何かのキッカケが必要だった。

「そこはこまかい身の廻りの品物ばかりの筈ですわ。その傍のに書類が入っていたようですね……」

意味もなく抽出の中を引っかきまわすのに我慢がでなくなつたように美沙子がまた声をかけてきた。ぼくはあいまいな返事を返しなから、デスクの袖についている抽出しをあらためていった。そして一番下の鍵のかかっている抽出に行き当たった。

「やはり、このようですね。鍵はありますか？」

「それが……主人が持っているのじゃないでしょうか」

「困ったな」

ぼくはポケットからナイフを取り出して、刃を起こした。美沙子はぼくがナイフで抽出しをこじ開けようとしていると感違いしたらしい。「やめてください、そんなこと」と、せっぱつまつたように叫んで、止めようとするかのように体を寄せて来た。

それがキッカケだった。

ぼくは刃先を百八十度回転させて、美沙子の腹のあたりに向けた。

「なにをなさるの？」

美しい眼を大きく見開いてたじろぐ隙に、

ぼくは立ち上がって彼女と向き合った。

そのときぼくの顔には、薄笑いが浮かんでいた筈だ。事がうまく運んだから笑いが浮かんだのか、笑えたことがぼくを大胆にしたのか、とにかく自分が急に本当の悪党になりきったような気分になった。

「ヘマだったな、奥さん。おれは会社の者なんかじゃないんだぜ」

馬鹿みたいに口を開けたまま、どんなつもりかやたらに首を横に振り続けている美沙子の方に、一步踏み出した。彼女は突きつけられたナイフに押されたように一步しりぞいたが、足がもつれて、そのままヘナヘナと絨毯の上に崩れ落ち、両手で顔を覆った。ぼくは用のなくなったナイフをしまい、手錠を取り出した。その物音に美沙子は顔をあげて、何か悲鳴のようなものをあげ、尻もちをついたまま膝でいざるように後じさりし始めた。ぼくがもつれかかった手錠の鎖をほどくちよつとの隙をうかがって、跳ね起きると、大きな声をあげながら入口のドアに走りだした。これ程あわてたことは後にも先にもなかった。この野郎とか畜生とか悪態をつきながら

追いつかり、わずかにカーディガンの後裾に指を引っかけてたけれど、それもたちまち肩から脱げ、こっちは後ざまによろめくし、彼女は前のめりになって、居間の椅子に蹴つまずいた。結局はこれが幸運だったのだ。起き上がろうとする所を背中から押し倒し、組み伏せ、俯伏せに馬乗りになった。こうなれば、いくら手足をバタつかせたって、ひっくり返された亀の子同然、両手を背中に捻じ上げて手錠をかけるのに、何の造作もないことだった。

玄関のドアの内錠をおろしてもどってくと、美沙子は思いつめたような顔をあげて、「お金なら、あるだけあげますから、悪いことはしないです」

と訴えた。恐怖と不安と哀れみのないまざった美しい女の顔が、これほどチャーミングなものとは、それまでも小説なんかで想像はしていたが、実に想像以上だった。しかも、それをこちらの思う通りにすることができるのだ。絶対的な権力者ってわけだな。そのことだけではち切れそうになった。ぼくはヒクヒクしている柔らかいあごを指でつまんで、その快感を心ゆくまで味わったものだ。

「くれるというんなら、遠慮なく金はもらっ

とくけど、その悪いことってのはなんだい」
 ぼくの指を振りもぎろうと、眉をしかめて首を振りたてている美沙子が、くやしげに歯を噛んだ。

「実はその悪いことがしたくて、美しい奥さんをねらったんだぜ」

「そ、そんなことしたら、大きな声をたてます」

「へへ、そうかい。なら大きな声を出してみな」

ぼくはナイフを取り出して、その切先をボラウスのボタンに押し当て、「さあ」とうながした。叫び声は出ないで、逆にのどの奥に引っ込んでしまったようだ。

「こ、ころすの？」

「あんた次第さ。おとなしくしてりゃ、優しくかわいがってやるだけさ」

言いながら、ボタン糸をひとつひとつ押し切って行った。そのたびに彼女はふるえあがり、のどをキクキク鳴らす。ぼくののども興奮でつまりそうだった。声までが興奮で震え出しそうなのを押さえるのに苦労した。

「どうなんだい。おとなしく言うことを聞くのか聞かんのか」

「そんなことだけは、お、お願いですから、

かんにんしてください。あ、あたくしには、夫が……」

ぼくは笑い出した。おそわれた人妻の、きまり文句が飛び出したのがこっけいだったんだ。

「生娘じゃあるまいし、キズなんか残りやしねえよ。それに、あの風采のあがない亭主じゃあ、浮気の一度や二度はやってるんだろうが」

美沙子は顔をそむけて泣きだした。ボタンを切り取られたブラウスは前が開いて、淡い水色のスリップの胸のふくらみがのぞけている。ブラジャーで固くおおわれたそのふくらみが、激しい息づかいと一緒に上下しているのが、さらにぼくをせっぱつまった気持ちにした。

脇の下に両手をさし込んで引きずり起こし弱々しくあらがうのを、引きずるように横抱きにして、寝室へ運んだ。「だめよ、ね、おねがい」と、小さく訴えるように言うのが、かえって煽情的だった。中央のダブルベッドの上に放り出しておいて、ドアをしっかりと閉じた。

カーテンをとぎしてはの暗い寝室は、いい匂いがした。落着いた雰囲気の中に、布団の

ピンクと、壁にかけられている真っ赤な長襦袢が、ひときわなまめかしかった。ことに長襦袢というのが洋風一色のこの家のムードの中では異様でさえあった。

「あんたの亭主ってのは日本趣味かい。あれを着たあんたを、デレデレして抱いてるってわけか」

部屋には他に大きな三面鏡と洋服だんすがあった。しばらく電灯をつけようかと考えたが、ほの暗い中にうごめいている美沙子の白い横顔や脛が妖しいほど美しいので、電灯はつけないことにした。写真ならフラッシュでいくらもとれる。

○

高木刑事は、自分の犯行をさも楽しい思い出のように事細かにしゃべる犯人を、一種異様なものを見る眼つきで眺めていた。

(こいつ、やっぱり変態だな)

さっきは自分までが巻き込まれそうになった、うがった心理学を開陳していた同じ人間が、どこからこんなふうになじまがって行くのか、そこら辺が常人と異常人との分かれ目なのだろう、と高木刑事は距離を置いて眺めることができるようになっていた。

家宅捜査したときのことが、自然に思い出

される。湿けた四畳半は万年床で足の踏み場もなく、更にそのまわりにはエロ雑誌やら何やらが散乱していて、物置き同然だった。体液でベトベトしているようなそのエロ雑誌がみんな証拠物件として押収されたのだが、目立ったことは、その中に女を責めるのを主眼とした種類のものが多かったことだった。

近頃はSMとか称して、この種のエロ雑誌が多く発行されている事は、刑事も知らないわけではなかったが、同じ雑誌でも店頭で眼にするのと、薄暗い万年床の傍で見るとでは、ずいぶん印象が違う。どんなに取りつくるって見たところで、この種の雑誌がどんな目的のために読まれているかということが、生臭いほどにわかるのだ。

高木刑事も二、三、参考のために読んで見たが、どれもこれも同じようなことを登場人物の名を変えただけで繰り返しているようなものだった。これからまた同じようなことを聞かされる、いや聞き出さねばならない、と思うと、職務とはいえウンザリして来た。

六

ぼくがここに押し込んだのは、ただ美沙子

を犯すためだけではなかった。究極はそこへ行きつくにしても、それだけでは目的の十分の一も遂げたことにはならない。素っ裸に剥いてロープで縛り上げ、さんざん恥ずかしい目にあわせてやった上でなければ、目的は達しられたことにはならないのだ。一種の儀式みたいなものだ。

服を脱がせる時の、彼女の抵抗はすごかった。手錠をかけてなかったら、とてもひとりじゃ手におえなかったろう。何か切れぎれに叫びながら体をあちこちにころげまわらせて、足で股ぐらを蹴りあげてくるのだ。それでもどうにか押さえ込んで脱がしたんだが脱がせるというより引き裂いたと言った方が早い。ブラウスもスリッパも、スカートもブラジャーも満足なものはひとつもなかった。

ここまですぐと、さすがの女も恥ずかしさと疲れでグッタリとなってしまう。まだ体のほうぼうに切れ残りが汗にべりついていてるのをナイフで切り取って、パンティだけの裸にした。想像していた通りの素晴らしい体だった。着痩せするたちなのか、こうして剥いて見ると、いかにも人妻らしくあぶらが乗っていて、そのくせ首すじとか胸まわりなんかスナリと細いんだ。子供を生んでいな

いので腹にたるみがなく、乳房の形が崩れていないのも、想像通りだった。ただ想像よりはるかに素敵だったのは素肌の色あいだ。キメの細かい肌がさつきからの大活躍に汗ばんで、ほんのり桜色に色づき、それがうつすらと浮かんだ汗に濡れて、何とか高価な陶器がそのまま柔らかく温められたような感じだった。まとめてあった長い髪が崩れて突っ伏した顔やうなじのあたりに乱れかかっているのも、絵や写真で見ると以上にエロチックな感じのものだった。

そんなことなんかをしっかり記憶にとどめてから、ぼくはもうあまり抵抗しなくなった体を引き起こして、ケースから出したロープで縛った。「くくらないで」とか「おとなしくしていただきますから」とか泣き声で訴えたけれど、そんな甘えなんかにはもちろん馬耳東風かえってロープを引き結ぶ腕に力がこもるようなものだ。ロープがグッと肌に喰い込む感触が、あんなにすばらしいものとは思わなかった。ただ、人形を縛るんじゃない、生き物を縛るんだから、ロープを絞れば、それに対する反応が必ずある。内側がグツといきむような緊張、それがこちらのこめた力に手応えになってもどってくる。それがたまたまなくい

いんだ。実感ってやつだな。それから苦しがつて、イヤイヤとすねたような鼻声を出して身をくねらせる。これがまたいい。途中でロープを投げ出したくなったことが何度あったかしかない。こんな手間をかけないで、思いきり可愛がつてやったら、と思わないでもなかった。

しかし、考えて見れば、甘えるってのは、女が男を征服する最大の武器のひとつだからな、そのテに乗っちゃあ元も子もなくなる。第一、もう縛り上げられてグーの音も出せないから、今度はカラメ手から男をたぶらかさうとしているに違いないんだ。対等に向き合っていたとしたら、ぼくに甘えかかるなんてことは、絶対に考えられないことだからな。こんなテに乗って男は骨抜きになっちゃうんだ。男の防禦手段としては、鞭と鎖としかない。鎖で縛って鞭で追い使うんだ。女からめぐるまれるんじゃないで、女から絞り取らなきゃダメなんだ。

偉そうなこと言ったけど、実は女を縛るのは生まれて始めての経験だった。写真を見て研究はしたつもりだけれど、長いロープがこんながらかって、なかなか思うように締まらないのには手を焼いた。女が割におとなしくし

ていてさえこれだから、もし手錠もなくもつとあばれたら、逆に追い出されていたかも知れない。

それでもどうにか縛り上げた。ぼくの好みで乳房の上下にもロープをかけたし、首にもまわした。腹の上にもひと巻きくれてやったので、胴のくびれがいつそうめざましいばかりになった。美沙子は唇を半開きにして舌をのぞかせ、長く伏せた睫毛をふるわせて、喘いでいた。パンティを剥いだ。アッと悲鳴をあげて腰をひねって俯伏せになった。腰のエクボがあらわに見え、キュッと緊張した尻の盛り上がり、まるでそこを打ってくれと訴えているように見えた。打ってやる代りにかぶりつきたいような気がした。

縄尻を引っ張って仰向けに押え込んだ。狂ったみたいに頭を振りたてるのを両手でしっかりおさえ込んで、くやしさとはずかしさでほてっている頬っぺたや、ツンと高い鼻や、次におそわれることを予想してキツチリ閉じた唇に、接吻を降らしまくった。そのたびに美沙子はのどの奥で呻き声をあげて、体全体でおれを押しつけようともがいた。「へへ、どうだい、こうやって縛られておもちゃにされる気持ちはい」

何度も読み返した小説の文句が、無意識に出た。いかにもその場にピッタリの文句だった。美沙子の頬に血がのぼり、固く閉じたまぶたのあわいから、涙がにじみ出て来た。と思うと、だしぬけに美沙子の抵抗がやんで、固くなっていた首すじがぼくの腕にゆだねられ、唇が吐息をつくようにゆるだんのは驚いた。接吻しても今度は拒もうとしない。

(やっと、観念したか)

とホッとしたような物足りないような気分になった。思い切ってディープキスをやると口の奥で美沙子の舌が応じるようにチロチロ動き、鼻息が荒くなった。

(こいつ、Mつけがあるんじゃないか)

という考えがひらめいたけれど、女は誰しも多少Mのケがあるということだし、亭主と離れてもう一週間になろうとしているのだから、美沙子のこういった反応は、さして気になるほどのことでもなかった。

「気分出してるじゃねえか。亭主のことはもう忘れちゃったのかよ」

意地悪く言って、女が打たれたように体を固くするのを楽しんだりした。ただメチャクチャに抵抗するんじゃないに、こっちの出方次第でそれにあやつられるように反応を見せ

るのが、だんだん面白くなって来て、いろんなことをやった。そのたびに美沙子は泣いたり呻いたり、悲鳴をあげたりして、のたうちまわった。髪がザンバラになり、汗が一層ひどくなって、まるで一戦まじえた後のようだった。そんな風になったのをベッドから引きずり降ろして、三面鏡の前に立たせた時は最高だった。

大きい鏡だったから、ほとんど全身がまる見えになった。いやがってしゃがみ込もうとするのを、無理やり押し立てて鏡の中をのぞき込むと、観音開きになった三面に、正面、左、右と、まるで前科犯人の顔写真のように眺められる。実物で見るのとまた違った感覚にうったえてくるようだった。色っぽく乱れた頭、そむけた横顔の消え入りたげな風情、緊張しておののいている首すじ、縄にくびられてゆがんでいる乳房と、その頂点の処女のような乳首、せわしく息づいている腹、恰好のいい臍、ピッタリよじりあわせて、たえずもじもじしている下肢、ひっそり息づいている鬚りの妖しさ——みんな前からも横からも見えるんだから。

「顔をそむけてばかりいないで、縛られた自分の恰好を見てみな」

髪を掴んで正面を向かせようとしたが、さすがに今度は頑固にこばんだ。

「いやッ……そんなことさせないで……」

髪を引っ張られる痛さに、顔をゆがめながら叫んだ。

「もっと痛いめにあいたいのか」

髪を放した左腕で首を絞め上げ、右手で乳首をひねり上げた。ヒツと悲鳴をあげて、美沙子は一瞬見開いた眼を鏡の中に向けた。と同時に、あっと羞恥と驚きのまじった声をあげた。

「どうだ。もっとしっかり眼を開けんかい」

首をグイグイ絞めながら、一方の手で体のいたる所をつねり上げた。苦痛が加えられるたびに、美沙子は痙攣するようにまぶたを開いたけれど、けっして長く見つめようとはしなかった。しかし、女つてのは見ないようできて、見たいものは全部見てしまうそうだから、あれでけっこう盗み見を楽しんでいたのかもしれない。睫毛の陰で瞬間瞬間きらめく瞳の色が、だんだん濡れて妖しさを増していたような気がする。

そこで十分以上も、なぶりものにしたろうか。どうやら飽きて来たので、最後の仕上げに取りかかることにした。

女の方も疲れたのだろう、重くなった体をもう一度ベッドの上に押し上げて、用意しておいたもう一本のロープを足首に縛りつけ、それをベッドの下をまわして反対側に引き、もう一方の足首に縛りつけた。ぼくの目的をさとした美沙子は悲鳴をあげて、そんな恰好にはしないでくれと泣きわめいたが、容赦なくダブルベッドの幅一ぱいに引き伸ばしてやった。今度はピンと引きつった下肢が痛いと言って泣き出した。

それから写真を撮った。あんたも見た通りの写真だ。美沙子の泣き顔がどんなものか、あんたも見たいだろう。声を録音できなかったのが残念なくらいだった。しかし、写真はしょせん写真。写真じゃみっともない泣き顔も、実物となるとグッとくるくらいチャーミングなものなんだ。ことにあんな恰好にされて恥ずかしいことの限りをつくされている時の泣き顔ってのはね。

○

「もうその事は、そこらへんでいいだろう」身ぶり手ぶりよろしく、更に事細かにしゃべり出そうとする犯人に辟易して、高木刑事はストップをかけた。話の端を折られて、犯人はしらけた顔になって、手ぶりの手を膝に

落とした。

「そろそろ女を殺した動機の方に移ってもらいたいもんだな」

「でも……」

不服そうなふくれっ面で、犯人は刑事を上目使いに見た。鼻の頭に汗をかいている。

「その場の後のことは、簡単に言ってもらおう。抱いたのは一度だけか」

「二度です」

「縛ったままでか」

「はい、二度目は恰好を変えましたけど……雌犬にしてやりました」

刑事は口をゆがめた。犯人の顔を見、話を聞いているだけでも、生臭い匂いがにおってくるようだった。

「マンションを出る時は、女の縛りを解いたのだな？」

「はい」

「女はどうしていた」

「ベッドに突っ伏したままでした。さんざじらしたてられた上に、二度までも悦んだんですから」

犯人がまた上目使いで見て、ニヤリと笑った。

「マンションに入ってから出るまで、どのく

らいの時間だった」

「三時間でした。時計を見ましたから。一時過ぎから四時過ぎまでです」

「出入りの際、姿を人に見られるようなことはなかったか」

「ぜんぜん。入る時も出る時も、猫の仔一匹見ませんでした」

七

写真を送りつけたのは四日後だった。あんなフィルムをもちろんDPE屋へ出すわけにはいかないから、自分でやった。大学の写真部に何となく入っていたのが役立った。朝早く登校すれば部の暗室には誰も居ないから、楽に仕事できた。仕上がりはあんたも見た通り、芸術写真とはいかないまでも、まあまあ出来だった。その幾組かを手元に置き、ひと組だけ送ったわけだ。現像液の中で美沙子のさまざまな姿態がゆっくりと姿を現わしてくるのを見守っていた時の、あの心の高ぶりを今でも忘れる事ができない。現像液の温度があがり、写真から流れ出す粘液で液が濁るのではないかとさえ錯覚された。

美沙子が手紙を受け取り、封を切り、中の

写真に嫌悪と好奇の入りまじったす早い視線を走らせる場面を想像して、一、二日は落着かなかつた。ひと目見て破り捨ててだろうかそれとも箆笥の奥にしまい込むだろうか。どっちにしても見た以上は二度と脳裏から消し去ることのできないシーンの筈だった。ぼくは何とはなしに、彼女が写真を捨ててしまわないだろうと確信めいたものを持っていた。手紙は簡単に次に会う場所と日時を指定し、ホテル代を用意せよと書いただけだった。日は四月二十四日の午後一時、場所は渋谷駅のハチ公前だった。ハチ公前を選んだのは、不安におののく彼女を人の多い所に立たせてみたかったからだ。

三十分ぐらい前から物陰でうかがっている、美沙子は一時十分前にタクシーを降りて来た。たぶんこんな所で待ち合わせなんかしたことがないんだろう、落着かなさそうに、あたりを見まわしたり、腕時計に目を落としたりしている。

その日の美沙子は地味で目立たない和服姿だったけれど、それでもあたりにたむろしている連中の視線を集めるのには十分過ぎる程美しかった。こんな美しく上品な人妻が、こんな日中に誰と待ち合わせしているんだろう

とか、これはてっきり夫にかくれての密会に違いない、とかさまざまな憶測をまじえた視線にさらされて立ちすくんでいる美沙子の様子は、充分にぼくを満足さしてくれた。

一時十分過ぎにぼくは出て行った。若奥様の意外な密会相手に、あたりの視線が一瞬ざわざわ揺れるのが意識された。ぼくの姿を見て、憔悴の陰を宿した美沙子の頬に救われたような色が浮かんだ。

「行こうか」

わざと荒っぽく言って、押し立てるようにタクシー乗り場の方へ歩きだした。そこまでの短い時間のあいだじゅう、美沙子は、すがりつくような眼を向けて、ホテルへ行くのだけは許してくれ、よんどころない事情があるのだから、と泣かんばかりに繰り返す哀訴したが、ぼくは知らんふりを通した。そしてタクシーに押し込まれると、ガックリ肩を落として、ハンケチを眼に当てた。

乗りつけた連れ込みホテルは「みゆき」といって、前に一度バーの女に誘われて行ったことのあるホテルだった。いろいろな設備があつて面白かつたことを覚えていたのだ。

部屋に入ってしまうと、美沙子は観念のホゾを固めたのか、冷たいほどの表情を取りつ

くろつてもうメソメソしたりはしなかった。

「写真はとうだったい」

と、まずそのことを聞いた。美沙子は唇を噛みしめるようにして、顔をそむけた。

「見たこともない姿がトックリ見られて楽しかったろう」

そむけたうなじから頬に血の色がのぼってゆくのがわかった。

「おなぶりにならないで……は、はやくすましてください……」

血を吐くように叫んで、顔をおおった。

「じゃ、自分で着物を脱ぎな。おれの目の前でだ」

おどしたりすかしたりして命令通りにさせ一緒に風呂に入り、ほかほか色づいた体を縛り上げた。今度は大分うまく縛れた。湯上りの匂うような素肌にドス黒い縄という対照はこの上なく刺戟的だった。こぶを作った縦縄をかけておいて、あぐら縛りにしてやった。

無理やり唇を奪ってやると、細い眉を八の字に寄せた表情は、屈辱の極みから恍惚の中に昇天するような複雑な翳りをおびて、それを見ているこっちまでが昇天してしまった。

その後はお定まりの太の字。今度は壁と天井に鏡があつて、責められる自分の姿を盗み

見ては、美沙子は前よりも何倍か激しい反応を見せた。呻き声とすすり泣きをないまぜ、身も世もなげに悶え狂う美沙子の様子を見ていて、実は女というものの底知れない貪欲さに、おそれをなしたくらいだった。そのくせ男はそんな女の姿に魅せられて、ズルズルと深みにはまってゆくのだ。最後に風呂に入ったとき、もういましめは解いていたのだが、ぼくの首に自分から両腕をからませてきて、甘ったるい小声で「ひどいひと……」とささやいた。そのときぼくは、もうこの女とは離れられそうにもないぞ、と観念したような気分になったものだ。

それから後は、ほとんど一日か二日置きごとに会った。いろいろなホテルを渡り歩いたり、マンションの部屋に入り込むこともあった。美沙子にはもともとMのけがあつて、それがだんだん拡大されていったようだ。ぼくが欲しかったいろんな器具や道具も、美沙子の金で買った。保管は亭主に見つけられるとまずいので、ぼくが引き受けた。もうひとつ美沙子がいやがったのは責めが激しくなってロープの跡が肌に残ること、そのためにロープはあまり使わずに革の手錠やそんなものを使うようにした。

美沙子はマゾだったが苦痛の激しいものはあまり好まなかったようだ。それより屈辱的な扱いをされる方が興奮を激しくした。だから鞭打ちなんかはあまりやらなかった。せいぜいベルトで尻を赤らむ程度に打つくらいだった。

こんなふうに言う、なんだか美沙子がなれなれしくなったように聞こえるかもしれないが、そうじゃないので、ぼくが彼女に一番魅力を感じたのは、どれだけ逢い引きを重ねプレイを重ねても、決してなれなれしくなったりしなかった点なのだ。いつまでたっても美沙子は人妻としてのつつましさを忘れず、夫の目を盗んでいるという罪の意識を心からぬぐい切ることはできない風情だった。それがたまらなかったんだ。つつましかうわべが、内からせくり上げてくる欲望に次第に打ちまかされてゆく、その哀しいまでの女の生理といったものを見るのが、たまらなかったんだ。

○

「それで、殺ったのかね？」

高木刑事は身を乗り出すようにしてたずねた。

「ばかな」

犯人は、さげすむような視線を上げて、刑事を見返した。

「そんな美沙子の様子は、ぼくをとりこにこそしても、殺すなんて」

「じゃ、そんなに好いていたのに、なぜ殺したりしたんだ」

「裏切ったからですよ。美沙子がぼくをだましていたんですよ」

机をたたかんだばかりに、犯人はどなった。「裏切るとかだますとか言っちゃって、きみ、彼女は夫を裏切りだましてきみと通じたんだろう。きみを裏切りようがないじゃないか。それに考えてもみたまえ、きみはさっき、女がいつまでも人妻らしいつつましさを失わなかったから、それに魅かれたんだと言った。つまり、夫を裏切っている人妻だからこそ、きみは夢中になったんだろう。それなのに、女がきみを裏切ったなんて、おかしいじゃないか。ひとりの女が夫も情夫も同時に裏切ることができるか？ 第三の男でもいたというのか」

高木刑事は、こんなことを言うのは職務上好ましくないなと感じながらも、言いつのらずにはおれなかった。

「いや、そんなんじゃない。そんなことを言

ってるんじゃない」

犯人も負けずに言い返した。さっきまで表情を隠すのに役立っていた額の髪を蒼白い左指でせわしなく掻き上げて、表情をむき出しにしながら、何か適当な言葉を探すように、眉をひそめた。

「世間じゃ、男と女が何の保証もなしにセックスするのが不安だもんだから、結婚という契約を取りかわす。安心して公認のセックスを楽しもうってわけさ。美沙子は亭主持ちだから、彼女の行為は確かに契約違反、裏切りだ。それはいい。しかし、一方じゃ美沙子はおれとも契約をかわしたんだ。結婚なんてもんじゃない、ただのセックスとも違う。そのどちらよりも強いSとMの絆でだ。結婚もセックスも、男と女でさえあれば誰とでもできる。しかしSとMとの組み合わせは、そこらあたりにザラにあるものとは違うんだ。SはSで相手が見つからずに悶々と苦しみ、Mはまた欲求不満のあまり我と我が身をさいなんでいる。東は東、西は西、というのが現実なんだ。それが何かの偶然でピッタリ組み合わせあった以上、それは死んでも解くことのできない絆になる。それは公に登録もされないし言葉にさえ出されないかもしれない。しかし

そうであることは当人が一番胆に銘じていることなんだ。それなのに……」

「じゃ、やっぱり第三の男が居たんだな？」

「いない……いや、いた、と言った方がいいのかも知れない」

「誰だね、それは」

「美沙子の亭主だ」

「なんだって？」

八

あの日、渋谷で朝から映画を見ての帰り、急に美沙子に会いたくなった。前の日に会ったばかりだったのに、多分映画の中の人妻の楚々とした姿に刺戟されたんだろう。それは前を歩いているミニの尻にくらいつきたくなるほどの否応なしの衝動だった。駅前の赤電話も青電話もみんな満員で、列さえ作っていた。とてもそんなものがあくのを待っていることはできなかった。前もって連絡なしに家を訪ねることは、お互の利益のためにいまして来たのだけれど、その場合は、とてもそんないまじめなど、守っていられなかった。三時頃だった。タクシーを拾ってマンションに駆けつけ、階段を飛ぶように駆けあがっ

た。この一瞬をおくらせると、何かとてつもなく貴重なものが失われるような気持ちに急き立てられていた。

さすがに美沙子は驚いたらしく、非難めいたことさえ口走ったが、かまわずに押し入った。寝室に入ってはじめて、おれはいつもの道具類を何ひとつ持っていないことに気付いた。美沙子は観念したように、ベッドの上で顔をおおって丸くなっている。羞じらいながら、その姿はおれを誘っていた。その背中に向かって、何か縛るものはないか、とたずねた。これまで一度も縛らずに美沙子を抱いたことはなかったんだ。縄目のない自由な彼女を抱くなんてことは想像の外にあった。

しばらく彼女はためらっている様子だったけれど、ようやく顔を掌にうずめたまま、

「洋服箆笥の下の抽出の奥に、何かあるわ」

と小さな声で教えた。

言われた抽出には彼女の下着が色とりどりにおさめてあった。そしてその色どりの奥、ピンクのスリーインワンにくるむようにして一本のロープの束がしまい込まれていた。どす黒くしみ込んだ汗と脂の色をみて、そのロープが長く使い込まれたものであることがすぐにわかった。

「妙なものがあるじゃないか、どういうことなんだい、これは」

おれの声が変わっていたのだろう。美沙子はベッドの上に上体を起こして、いたずらを発見された子供の様な、バツの悪い笑顔を向けてきた。しかし、おれに更につめ寄られてその笑顔はギコチなく凍りつき、昇りかけた血が、急速に失われていくのが見てとれた。そしてやがて、にらみ合いの緊張に耐え切れなくなったようにガククリうなだれると、

「ごめんなさい」

と、蚊の鳴くような声で言った。

おれは、だんだんと高まってゆく疑問にそのきながら、更に問いつめていった。そしてその疑惑が真実であることを知らされた。美沙子はおれを知る前に、すでに責めの味を知っていたんだ。亭主の手でマゾの開眼をさせられていたのだ。美沙子は処女じゃなかったんだ。

「だましていたんだな」

「そんな……恥ずかしくて言えなかっただけですわ」

「お上品な顔をしていながら、よくもこんなことを……」

おれは、声がふるえてくるのをどうしよう

もなかった。

駅で彼女の姿を見た時からその時までの彼女のことがすっかり別の眼で眺め渡された。そしておれは知った。おれが道化師にすぎなかったことを。おれが美沙子に植えつけ花を咲かせたと信じ込んでいたものが、実は他人の手で熟させられたものだったのだ、ということ。そして、その汁のおこぼれを、恩恵のように与えられていたのだということ。たぶん、おれの眼は吊り上がってしまったていたに違いない。

「お怒りになったの？」

例のところがすような憂いの色を浮かべて、不安げにすり寄ろうとするのを、おれははねのけてやった。クッションのいいベッドに尻もちをつきながら、美沙子は叫んでいた。

「あたし、あなたの手で初めて満たされたのよ。主人は優しく、まるで、あたしのことをこわれ物でも扱うようにしかしてくれないの。もう、あなたから離れられない女に、美沙子はなってしまったのよ。ね、そんなこわい顔をなさらないで、美沙子が悪かったのならきつく縛って。打ってもいいのよ。どうにでも罰して……」

叫び、涙を流し、訴えながら、美沙子の顔

が次第に上気し、瞳がぬれぬれと光りはじめるのを、おれは見た。おれは事の筋道を立てて考える力を失っていた。ただひとつ、美沙子がおれの前に、もう亭主とプレイを楽しんでいたという事実だけが、大きな屈辱としておれの頭をいっぱいに占めていた。

「おれは代用品だったってわけだな」

「ちがいます。夫に縛られながら、まだるっこしくて、いつもあなたとのことを思い出していたわ。あたしをこんなにしてしまったのは、あなたなんですもの」

「おれを知ってからでも、亭主とプレイしていたんだな」

「ええ……でもそれは……、さっきも言ったでしょう……」

美沙子は、亭主では満足できなかったものが、おれの手で初めて満たされ、悦びを知ったということをクドクドと訴えていた。そのことこそ最もおれが腹に据えかねていることだとも気付かず――

おれがロープを手にして飛びかかっていたとき、美沙子の顔にホッと安堵の色が浮かんだ、と思う。おれが縛る気になってくれさえすれば、もうこっちのもんだ、と思ったんだろう。おれはその安堵を嘲笑うように、そ

のロープを、美沙子がウズウズさせて待っている体ではなしに、細首に、巻きつけてやっただ。

ロープを絞め上げてゆきながら、おれは取り憑かれたように「契約違反」というようなことをわめき続けていたように思う。いわば美沙子は重婚罪を犯していたんだ。おれは美沙子とSとMの固い絆で結ばれていたと思ひ込んでいた。ところがそれは、美沙子と亭主とのSMの絆の上に、かりそめに重ねられたものにすぎなかったんだ。

我に帰ったとき、美沙子は死んでいた。自分の吐き出した体液のしみついたロープを細首にめり込ませて、裏切り者にはふさわしい死にざまだ。

○

高木刑事は、犯人の興奮にピリピリしている顔を、暗然と見つめていた。

(やっぱりこいつも単細胞だったか……)

軽い失望のようなものがあつた。はじめ何かありげに思えたのに、いざとなるとやはり現代青年に共通な興奮性直進型の行動しか取り得なかった。

犯人は、被害者に当然問いたださなければならぬ重大なことを、ひとつだけ抜かして

いる、と刑事は思う。

それは、夫婦の間で、そんな行為を初めに持ちかけたのはどちらだったのか、ということとである筈だ。

それが夫からならば、犯人の言いがかりにも一理ないわけでもない。しかし妻の方から持ちかけたのだったとしたら――

高木刑事は、被害者の夫小田切弘の供述を思い返した。

(……家内がそのことを言いだしたときは、本当に驚きました。週刊誌やなにかで、近頃そんなことが夫婦の間でもはやっているらしいということとは、知らないわけではありませんでしたが、まさか自分の妻が、妻の方からそんなことを言い出そうなんて、思ってもみませんでした。しかも、妻は半ば冗談めかしていましたけれど、内心はかなり切実にそれを求めているらしいのです。

私はそんなことは嫌いでした。道徳的な潔癖さをうんぬんするわけではありませんが、とにかく、私のどこを探っても、そんな行為に対する欲求は全くありませんでした。しかし、欲求不満のつった人妻がどんな無軌道に走るかは、これも週刊誌が書きたてていることです。私は美沙子がそんなふうにな

ることに、とても耐えられそうにありませんでした。夫は、妻の欲望を満たす義務がある、ということも頭にありましたし、仕方なしに義務を果たすつもりで、家内を縛ったりしたのです。家内はそれでも大分不満のようでしたが……)

小田切美沙子を「つまましい人妻」と見たのが、そもそも犯人の大きな間違いだったのだ。そして、そのように見えたのは、「人妻はつまましいもの」という、固定観念のようなものが、犯人の側にあったためではないのか。

つまりは、みずからが生み出した幻を、幻のままであらしめるために、犯人はひとりの人間を、いや女を、殺したのだ。

高木刑事は、どうやら殺人の動機を察知したように思った。

犯人は、与えられた煙草を、まだふるえている指先につまんで、せわしく煙をのどに送り込んでいる。

そのうつろに宙を見る眼は、まだ幻を追いつづけているようだった。

——(終)——

× × × × ×

懸賞入選

翻訳ミステリーの

サド・マゾ紹介

あ の テ ・ こ の テ

ショー・ラムワカ

(マンガも)

『最終作戦』

H・ホイッティングトン作、青木秀夫訳。ナポレオン・ソロ・シリーズの第2作である。このソロ・シリーズは一作毎に作者が変わる趣好になっているが、この本で取り上げるにたるサド・シーンは催眠術の処くらいしかない。

サディストにはスラッシュ団のスウ・ヤン犠牲者にはショー・ガールのバーブリー(エステルともいう)

『ソロは息を吐き出し、部屋のなかへ足を踏

み入れた。ソロがさっき部屋を出たときと、何もかもすっかり変らない。

ただベッドの上の、バーブリー・コーストの坐っている位置が少しちがうだけだ。

バーブリーの眼は、まっすぐ自分のまえを見つめている。表情はこわばり、視線は一点にすえられたきりだ。まるでマネキン人形のように見える。

「きみは大丈夫かい。バーブリー?」

……略……バーブリーは、ゆっくり頭をまわ

君達の行為に
対する。

若干の見解を
のべるならばア

人をむち打つなど

人間に対する不信であり

それを喜ぶなどはア

人間たる誇りの放棄である。

それわア。われわれのオ

大学制度や物価高と同じくウ

人類に対するウ 不当なア

弾圧だ!! ダンコ・粉碎!!



し空ろな眼で、ソロを見つめた。

その眼差しはまるで見知らぬ人を見るよう
だ。

「もちろん元気だよ」

スウ・ヤンがソロの背中ごしに言った。

「そうだね、おまえ」

「わたしは元気よ」バーブリーは、無表情な血の気のない調子で答えた。……略……

バーブリーは……略……ソロがしゃべりかけても、何の反応もしめさない。

スウ・ヤンが言った。

「気の毒だがね、エステルと話がしたければおれを通してしゃべるよりほかない。おれの声にしか、こいつは反応しないんだ。おれが話しかけるときだけしかしゃべらない。おれの言ったことしかない」

「催眠術がなかなか得意らしいな。しかしナイト・クラブのショウで見たのにはだいぶ劣るぜ——まさか、あの閉じた、錠をかけたドア越しに催眠術をかけたんじゃないかあるまいな」

スウ・ヤンは大仰に肩をすくめてみせた。

「信じようが、信じまいが、おれの知ったことじゃないがね、ミスター・ソロ。持続性催眠暗示というのを聞いた事があるはずだ。それはつまり、一度、催眠術をかけられたものは、二度でも三度でも、いや、持続性催眠暗示を最高度を利用して何百回だって、回数を重ねれば重ねるだけたやすく催眠状態に陥りやすいんだ。時にはひとつのことばが、たったひとつのことばが重要な働きをするんだ」

ソロは娘のろうのように無表情な顔を一瞥

して、重く息を吐いた。

「あんたがひとことドアの錠を開ける、と言えればいいとでもいうのか。彼女はその通りにする。そうだな？」

「ご名答だ、ソロ、まさにその通り。あんたの言った通りだ。もうおれの思う通りに動くんだ。あんなふうだね。この女はあんたを見ようとはしない。話しかけても、あんたに答えようともしない。ところが、おれが命令すれば、こいつは何でもする。あんなだって撃ち殺すぜ、ソロ、おれが命令すればな。たいたいま、すぐにでも」

ソロはあえて返事もせず、聞き流した。

「この女はいつもおれの言うことを聞くといったが、その証拠を見せてやろうか？」
(青木秀夫訳「最終作戦」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック・第九二六号一一三—一一五頁)

×

×

このあとスウ・ヤンは催眠術にかかった女バーブリーをネチネチと言葉遊びで責める。

催眠術は心理的なサド・シーンによくつかわれる。このシーンの場合なんかでも本来はソロの言うことしか聞かない筈のバーブリーがソロを目前におきながら敵方のスウ・ヤン

の言いつけに易々諾々と従う、しかも前もってスウ・ヤンに命令されていた通りに、ソロの飲みものに麻酔薬を入れてソロを裏切る。スウ・ヤンのサド心は最高にくすぐられることだろう。

○

『唇からナイフ』ピーター・オドンネル作
榊原晃三訳 講談社版

モデステイ・シリーズの第一作である。作者は初めにこれを漫画家のジム・ホルダウェイと協力して新聞漫画として連載し人気を得たらしい。

これも映画化された。ヒロインのモデステイには「情事」でマストロヤンニと「赤い砂漠」でアラン・ドロンと共演したモニカ・ヴィッティが演っていた。

セックスを味わいもし楽しみもするが、セックスを通じての男達とのつながりをあまり重要視しない現代感覚の持主のモデステイにアントニオ・ニ監督の創造したモニカ・ヴィッティがどんぴしゃだったんだろう。

ストーリーはイギリスから中近東のアラウラク教王国(地図を開いてもこんな国はありません。念のため)へ送る百億円のダイヤをめぐる、モデステイと犯罪組織(ネットワーク)のガブリエ

ルとがあらそう。

サディストには女殺し屋のフォーザギル夫人、哀れな犠牲者にはイギリス・スパイのグラント氏。

サドシーンは地中海に浮かぶ孤島の僧院。眼下に海をのぞむテラスの場に出現する。

× ×

『女は葉巻の根元に手をやって唇からはずすと、手すりの向こうに投げた。かすかに一条の光が目にはいった。』

女は口を広げて、にたりと笑ったようだ。しかし唇は歯の上でぎゅっと結ばれているから、にたにた笑うと、それが暗い、いびつな長円形になる。女が合図するように手をふった。

「坊や、いいわよ」

女の声はかすれていた。アデノイドみたいな鼻声だ。

「仲よくやろうじゃないの」

最後の言葉をはくやいなや、女のからだは前方にひらひらと泳いだようだ。と筋骨たくましい手がさげすむように、逆手うちにグラントの顔を強烈になぐりつけた。

その衝撃は打撃そのものより強くて、それだけで気絶させる威力があった。グラントは

うしろによろめいた。しかし、すぐからだをひねってバランスを取り戻し、うずくまったまま探るような目つきでにらみつけていた。彼は本能的に柔道の姿勢を取っていた。それをフォーザギル夫人がうなずくように見ていた。

「そのほうが幾分ましだね」

彼女はぶつぶついいながら、じりっじりっと、きわめて軽やかに小さきみに近づいてきた。……略……

女は拳骨をかためると、彼の頭めがけて、幾分ゆっくりとうちかかってきた。彼は前腕をつき出して、身を守った。しかし、牽制するには、もう遅すぎると気づいた。女の片足がわずかに宙に舞ったと思うと、びゅんとうなって、彼の腎臓にはげしく命中した。

グラントは身をよじり、よろめきながらたおれこむとき、自分が動物に似たうめき声をあげるのを聞いた。

また女が攻撃してきた。彼は……略……指をたばねるとその先で、女の喉をつき破ろうとした。……略……

女が彼の手首をびしゃりと平手でうった。それから強く握り込んだ。長いあいだ、ふたりはそのままの恰好で動かなかった。

その間にあらゆる希望が彼から消えていった。彼は憂うつで不愉快だった。女が自分より強くてすばやいことを知っていたからだ。しかしそんなことは考えないことにした。

膝でけりあげようと力を入れた。と同時に、女が彼の考えを見破り、動きを見てとったことを、グラントは気づいた。女は別の手で彼の腕をしめつけてきた。ぼろぼろになった人形みたいにくいっと引っぱられたかと思うと、かたい肩が猛烈に彼の心臓をうった。

彼は寝そべるような恰好でたおれた。

女は数歩しりぞくと、くすくす笑った。……略……

グラントは頑強に足をふんばった。心臓が動悸をうっていた。……略……息がひゅうひゅう音を立てた。

もう一度からだを動かしてみた。すると女が横つとびにとんできて、……略……手刀を、彼の二頭筋めがけてたたき込んだ。刃のつぶれた斧でぶんなぐられたようだった。……略……

右腕がぐにやりとたれた。骨が折れたのではないか、とぼんやり考えた。

女の顔に、また新しい興奮が浮かんだ。真黒い小さな目が喜びにきらきら光っている。グラントはふらふらしながら立っていた。

女が攻撃してきた。闘牛士のようにからだをさっと開いて彼のけりをかわした。彼が女の顔をひっかくと、女が彼の右腕を取った。腕の下でその腕をきめておいてから、急にぐいと引っぱった。骨がぼきんと折れた。

ぎゃあっとグラントが悲鳴をあげた。

今、彼の顔は女の顔のすぐそばにあった。

女の目にあふれた、ほとんど性的クライマックスに近い満足の色を目にして、グラントは全身吐き気をもよおした。

フォーザギル夫人は彼を離すと、今度ははげしく彼の顔をなぐりつけた。

彼は足首に足をかけられて、敷石の上にお向けにたおれた。頭を堅い石で強打した。

頭の中で真黒いものが渦巻いた。

必死に動こうとしたが、筋肉がまったくうことをきかなかった。

フォーザギル夫人は長々と、満足気に息を吸い込んで吐き出した。目をあげて、バルコニーのほうをちらっと見やり、それからあおむけになったグラントに馬乗りになった。

ズボンの膝をぐいと引き寄せるようにすると、彼の上にかがみこんだ。それから用心しながら喉仏を親指で押えると、静かに絞め始めた。『（唇からナイフ）ピーター・オ

ドンネル作、榊原晃三訳、講談社、五一〜五三頁）

× ×

かくて第一回戦「女対男」はフォーザギル夫人の勝利に終わった。続きましてメイン・イベント第二回戦は「女対女」恐怖の対決。かたや連戦連勝を誇るフォーザギル夫人に対し、こなた「正義の女神」モデステイ。

ここで解説者の淀川長治さんに二人の横顔について紹介して戴きましょう。

「こんばんは皆さん、スゴイですねえ、こおふんしますねえ、からだがぶるぶるふるえてきますねえ。」

わたしたちが始めてパール・ホワイト嬢やルス・ローランド、リリアン・ギッシュ、ドロシー・ギッシュ、リチャード・パーセルメスの映画を見た時のように、わくわくしますねえ。

おそろしい、おそろしい、フォーザギル夫人に、あんなに、あんなにかわいいモデステイが、はたして勝てるでしょうか、手に汗をにぎりますねえ。思わず膝がのりだしてきますねえ。

このフォーザギル夫人は六尺以上もあるノッポの金髪女なんです。それに女のくせに

葉巻もお酒もプカプカ、ガブガブやるんですよ。いけないですねえ。

趣味はボデー・ビルで、あの重たいバーベルや鉄亜鈴を振り回すんですよ。

それにボクシングで使うメデシング・ボールごぞんじですね。サッカーやバレーにつかうような大きなボールの中へ粘土みたいなものを詰めたものですねえ。

あれを、おなかへドスンドスンと、いつもあててトレーニングしてるんですよ。

それにレスリングから唐手まで、できるんですよ。おそろしいですねえ。

左ト全さんならきつと、ヤメテケレ、ヤメテケレ、ゲバ、ゲバ、パッパッヤーと言って逃げちゃいますねえ。

アッ！ カメラさん、もう時間ありませんか。モット、モットお話ししたいですが、しかたありませんねえ。では皆さんまた後でお会い致しましょうねえ」……

× ×

『モデステイは金剛杖をにぎりしめた。膝を少し曲げ、両手を胸の高さまであげ、両脚を開いて身構えた。……略……夫人の途方もない体重と力に対しては、こちらから攻撃していくより、反撃の機会をねらうほうが有利な

のだ。

フォーザギル夫人はボクサーのようなすばやいフットワークで近づき、とつぜん、ぐるとまわったかと思うと、片足で横つとびにとんだ。……略……

モデステイは横に動いて、かろうじて肋骨を折られずにすんだ。

次の瞬間、彼女はとびこんだ。相手の首の横をねらって、金剛杖をうちおろした。手首がうちかかる夫人の手端にぶつかって、音をたてた。……略……

金剛杖が下に落ちた。彼女はすすつととびすさった。……略……

フォーザギル夫人が、すばやくこれを追った。手を、鋤のように開いてうちかかってきた。モデステイはさつと身をかわし、相手の手首をつかむと、重いからだにはずみをつけるように強く引いた。

彼女はまた攻撃に移って、相手のみぞおちをねらった。ところが夫人は、はずみにさからわず、前方にとんで高く宙返りをうったので、モデステイの足は届かなかった。

モデステイは手首をはなした。フォーザギル夫人は足ですくっとおり立つと、ぐるっとまわった。と同時にモデステイは横にまわっ

て、上にとんだ。

フォーザギル夫人はにたにた笑いながらもはあはあ荒い息をついていた。しかしモデステイは、これが体力の消耗のためではないことを知っていた。

顎のがっしりした顔が欲望で燃え立っているのだった。

……（大巾に略）……

三分くらい戦った時、モデステイがドロップ・キックを使った。……略……

フォーザギル夫人は手すりの切れたところを背にしていた。これはドロップ・キックで攻撃するのに最上の位置とはいえなかった。夫人の背後に、碎石を入れた大きな金属バケツがあったからだ。

初めてモデステイが前進した。短く二歩、早足で進んで、ジャンプした。

二歩目を踏み込んだとき、右足が落ちた金剛杖の上に来た。ジャンプしたときに、足首がぐるっとくねった。

このため、高さや距離が半分になり、彼女は背中から、どしんと地面に落ちた。

地面で頭をうったが、後頭部の鬘がクッションになって、打撲は弱かった。めまいの中で、フォーザギル夫人のくすくす笑う声を聞

いた。

夫人が両膝から彼女の上にとびおりてくる一瞬まえ、本能的に腹の筋肉をかたくした。

ぜいぜいいう音が喉から洩れた。まるで水が浴槽からなくなるように、夫人の重みが消えるのを感じた。

フォーザギル夫人は彼女に馬乗りになり、全重量が彼女の胸にかかるまで、からだを前にずらした。

「おあいにくさまだね。どんぴしゃりにいったじゃないか」

夫人の手がモデステイの喉を搜した……略……彼女は、意志力を結集して、首に全身の力を集めた。

顎を、ぴったりくっつけて、喉頭に移ろうとしている鉄の指を防いだ。

彼女は右手で床をさぐると、金剛杖でも、煉瓦でも、とにかく、うつものをつかもうとした。

大麻に手がふれた。ロープだ。大きく巻いてある太いロープだ。

ロープがチャペルの上についている滑車に達し、そこから下にさがり、大きな金属バケツにつないであるのを思い出した。

バケツの横のところを、長靴の底で探りあ

てた。

「顎をあげるんだよ」

フォーザギル夫人が、半ばヒステリックなうっとりした声でいった。

モデステイはロープをにぎりしめ、ちょっとふって、ゆるみ具合を調べた。腕にはほとんど力はいらない。残った力をかき集めて腕をあげたり、まわしたりした。ロープの輪ひとつが、フォーザギル夫人の首に半分ひっかかった。

モデステイは激しくロープを引っぱった。輪がぐっと小さくなった。

フォーザギル夫人が喉の奥で笑った。肩をぐっと突き出して、首の筋肉をかたくしている。……略……夫人は目だけ動かして回廊を見まわした。ウィリーはまだ戻ってきてないから、首にロープをかけられる心配はない。

官能の満足を無限に味わっている表情を浮かべながら、親指をモデステイの顎深く沈めていった。指が小さく波うっている喉仏の軟骨にふれた。

モデステイはゆっくりと押えてくる指の圧力を感じた。

両脚は……略……フォーザギル夫人のうしろにあるバケツの腹にあたっていた。

彼女はからだの他の部分の緊張をとき、喉は夫人のなすがままにまかせ……略……両足を激しくうしろにけた。

バケツがローラーの上をころがった。……略……

フォーザギル夫人の頭が、ハンマーでなぐられたようにぐいっと上に引っぱられた。首をしめていた手はずれ、夫人の全重量がなくなった。

フォーザギル夫人は高く舞い上がり、ロープの先のところで宙をつかんでいた。

操り人形みたいに手足をばたばたさせている。半分首に引っかかっていたロープが夫人の体重で首にくいこんでいる。……略……

夫人が両足にはいたズックの底、そのあいだに見えるねじけた頭。

軽々と上に引きあげられるにつれて、からだ全体が縮んだように見えた。

頭が滑車に激突したとき砕ける音がした。……略……夫人はぐにやりとぶらさがり、頭が肩と九十度になってたれていた。『（「唇からナイフ」ピーター・オドンネル作 榊原

晃三訳 講談社 二二九～二三二頁）

「どうですか？ よかったですか？ 悪もの

のフォーザギル夫人は、とうとうやられてしまいましたねえ。

モデステイの可愛らしい首がおられなくてよかったですねえ。あなた方サド族が、ムチやなわを持って、とびかかっても、やはりやられてしまいますね。

フォーザギル夫人を和田あき子ちゃん、モデステイを中村あき子ちゃんて演らせたら、おもしろいですねえ。

では、サイナラ、サイナラ、サイナラ」

『クウェート大作戦』 ピーター・オドンネル作、榊原晃三訳、講談社、モデステイ・シリーズの第二作である。

これも「007」にひびいてきするおもしろさで、冒険精神がみなぎっている。

サド場面にかぎって紹介すると、捉えられたモデステイが、殺し屋集団の後宮^{セラーリオ}に入られる処がそれにあたる。

そのへんのいきさつを説明すると、アラビヤ半島の一角にあるクウェートにクイーターをおこそうと、もくろむ集団がいたその中へモデステイとガーヴィンの二人がスパイとしてもぐりこむ。

やがてモデステイはつかまり、双生児の殺

し屋と決闘させられた後で後宮にほうりこまれる。

ガーヴィンはそのモデステイを助けんと、色々かくさくする。

× ×

『「おれがちょっとかわいがってやれば、あいつはびんぴんしちまうだろうさ」

とウィリー・ガーヴィンがいった。…略…

「おれはそうは思わねえな。え、あんた」

こう答えたのはガマラという男だった。ボリヴィア人で、金壺まなこの、唇の薄い大男だ。左耳が半分ない。…略…

ガマラは、小屋のどまんなかにあるテーブルの近くのベッドに長々と寝そべっている金髪の男に顔を向けた。金髪は不機嫌な顔をしている。ガマラが声をかけた。

「あの女はだめだな、ゼチ？そうだろう？」

「眠っているのと同じだよ」

金髪は仏頂面をして鼻をならした。これはポーランド人だった。

「女を抱いているなんて気分は、ぜんぜん出ねえや。でけえ薬人形なんぞとちっとも変わりやしねえ」

闘技場で決闘がおこなわれてから三日たっていた。二日目の夜、モデステイの用意が全

部ととのったとリープマンが報告してきた。

その夜のうちに、モデステイを抱きたいという希望者のくじびきがおこなわれ、まずガマラが選ばれて…略…三日目の夜はゼチが彼女のところへいった。…略…

「ちょっと見ものだぜ。あの女が目をさましてあんたをやつつけるかどうかな。目ん玉をとび出させるくれえのこたあ、やりかねねえ女だからな。」

ちえっ！ なにしろ、あの女は、双生児をこてんぱんにやつつけちまったんだからなあ！

すると、ボリヴィア人がにやにやしながらいった。

「あの女は、うしろ手に縛られている。なにかしようもんなら、こっぴどい目に会わせれるさ。あの野郎を傷つけちゃいかんという法はねえんだからな」…略…

「ガーヴィンは今夜あの女をどう料理してくおうかと、そればかりお考えだ」

ゼチがあざ笑うようにいった。…略…

「まったく薬人形みてえな女だ！」

ゼチが腹を立ててどなった。この男は癪癪持ちなのである。…略…

ガマラが笑っていった。

「ま、せいぜい今夜の練習にはげんでくださいよ。あの女は眠ってるように見えたって、必要なものは全部そなえてやがるからな。制服を着ているときは、ぜんぜんわからんがね。ほんとうにあの女は色気満点だぜ。からだもいい。こいつはまちがいねえ…」…略…

ウィリーは、ふるえながら大きく息を吸い部屋の中へ入ると、ドアを勢よくしめた。…略…

モデステイは寝椅子の上に横向きに寝ていた。両腕は肘のすぐ上のところで太い綱で縛られていた。

そのため腕は背中になわしても十五センチくらいしか伸ばせないようになっていた。両手は自由だが、動かせる範囲はほとんどなかったから、事実上無防備といってよかった。

彼女は赤いナイロンの袖なしの薄ものを着ていた。両肩のところにそれぞれボタンが三つついていて、腕は縛られていても、そのまま脱がすことができるようになっていた。…略…髪はといてあり、明るい緑色のリボンでうしろで結んであった。

顔の片側が黄色くなっていた。双生児と戦ったとき、鎖帷子の手袋でつけ

顔の片側が黄色くなっていた。双生児と戦ったとき、鎖帷子の手袋でつけ

顔の片側が黄色くなっていた。双生児と戦ったとき、鎖帷子の手袋でつけ

られた打身のあとだが、だんだんよくなっているらしい。

唇はかすかに開いていた。口の片端は、この間なぐられたばかりで、まだふくれあがっていた。前歯が一本欠けていた。

ガーヴィンはゼチが拳骨をふるって、大きな傷を負わした話を思い出したが、もう心の中には何の変化も起こらなかった。今、彼の心は力なく神経も死んだようになっていた。ただ彼は、これからしなければならぬことしか考えなかった。……大巾に略……

やっと縄がとれた。ガーヴィンはナイフを鞘におさめると、彼女と並んでベッドの端に腰かけ、両手を膝の上に置いた。

彼女は引き裂かれた薄ものの肩ひもを、胸と背中の方から引きあげて、無造作に結んだ。ガーヴィンは床をじっと見つめているばかりで、一言も口をきかなかった。

彼女が肩をもみながら、ほっと吐息をついた。苦しい時間は終わったのだ。……略……

彼女は首を傾けると、彼の肩にもたせかけた。とつぜん、自分の頬にあたっているガーヴィンの腕の筋肉が鋼鉄の棒みたいに堅くなっているのに気づいた。かちかちだった。

彼の顔に触ってみると、まるで木みたいだ

った。彼のからだの全筋肉が測り知れないほど収縮して、ぜんぜん動かないのだ。

彼女は立ちあがると、彼の前にいき、鉄のようになつた肩に両手を置いていった。

「ガーヴィンったら！」

答えはなかった。ガーヴィンの青い目は、百万キロも離れたものにそそがれているように、じっと動かなかった。

手を膝の上から持ちあげても、抗わなかった。だが、ずいぶん力がいった。

彼女は彼にかがみこむと、寝椅子に横にならせ、両足をベッドにあげて、仰向けにさせた。

「むりをしてはだめよ、ガーヴィン。ちょっと、お休みなさい」

彼女がやさしくいった。寝椅子のそばに膝をつくと、彼の強情な手をとって、自分の頬にすり寄せた。彼が顔の向きを変えて、彼女を見つめた。彼女はやさしく彼の手を動かし、自分の頬をなでさせた。

——彼女にとって、肉体をめっちゃめっちゃに犯されたことや、あの二晩の苦しみは、思っただけでもひどい試練だった。しかし彼女は、自分の感覚にしみついた記憶を全部取り出して、心のどこか深い洞窟の中に、放りこんで

しまうことができた。そして、その記憶は間もなく消えてしまい、二度と再び弦を弾いて音を出すことはないのだ。

しかし、ガーヴィンはどうか？……

ガーヴィンはモデステイのことを、ガマラとゼチから聞いた。全部聞いたのだ。

彼にとってその三日間は、まさに恐怖の間だったろう。それに夜は！ 二晩、彼は自分の部屋で横になりながら、こうして自分のうのうと寝ている間も、彼女は何をされているのかと思い、そんなことは思うまいと必死になっていただろう。

ガーヴィンは二晩寝なかったのじゃないかと、モデステイは思った。

ガーヴィンは彼女同様、自分が殺されるのではないかといった妄想などに心を閉してしまふ術には熟達していた。この能力こそ、二人が持っているさまざまな武器の中でもっとも強力な武器であった。

しかし、この七十二時間のうちに加えられたような攻撃を持ちこたえられるほど強くはなかったのである。

モデステイは初めからこのことを認識しておくべきだったのだ。

「ああ、ガーヴィン……ごめんなさい……」

彼女の声は殆ど囁きに近かった。彼の目の中に、何か感情めいたものが走った。彼女のいうことがわかったのだろうか。「ねえ、もう終わったのよ、ガーヴィン。わたしはいつときもくじけなかったわ。わかるでしょう?」

彼女はこめかみにちよっと手をやった。

「ここはまったく大丈夫よ。わたしはもとのままなのよ」

彼女は話すのをやめ、長い間、彼をじっと見つめていた。それから頭を下げると、額を彼の胸にうずめた。

「わたしのところへもう一度戻ってきてちょうだい。さあ、ガーヴィン。わたしたちは長い長い道を一緒に歩いてきたのよ。わたし、また一人ぼっちで歩き出したいくないわ」

……略……

数分後、とつぜん、彼の呼吸が大きくなり

筋肉の無残な収縮がなくなり始めたことに気づいた。……略……

「マーロン・ブランドみてえに色男ぶって悪かったな、プリンセス」(榊原晃三訳「クウェート大作戦」講談社。二一〇〜二一九頁)

× ×

以上である、本稿の本来の意味あいからいけば後半分はいらないのであるが、モデステイの身をおもうガーヴィンに、かわいい男の心根がよく出ているので抜萃した。

007ものでも、サド行為をうけた女をボンドが、いたわるシーンがよくでてくるし、そこらへんが、また、すごく印象的である。人間の心というものは、愛と憎しみを入れる器の容量がきまっています、片方がいっぱいになると、もう片方に流れ込むようである。

戦乱の時代には、女は愛の対象としかなら

ず、太平の時代になると、憎しみのうつわにすぎまができ、それを満たすための対象としての要素が女達に加えられ、サド・マゾ・プレイの流行を呼ぶのかもしれない。藤原のガーヴィンよりモデステイへ一句。起きもせず寝もせず

夜をあかしては

砂漠のものとながめくらしつ。

△寸評▽ あなたの責められるさまが目につかんて夜の目も眠れず悶々と一夜を明かし朝を迎えて、昼になれば少しは心もまぎれようかと思つたところ、単調な砂漠の風景に、なんのことはない、同じように他のことには手もつかず、あなたのことを思う物思いに、じっとふけたまま、日がな一日暮らしてしまいました。

という奥床しい句ですね。実に傑作です。

一〇〇点。

——(了)——

鼻マニアの方なら誰でもそうだろう

と思うのですが、テレビに出てくる化粧品のコマーシャル等の美しいモデル嬢の、神の傑作とでもいいたい程の美しい鼻に、お目にかかれる機会が多くなって、たいへんうれし

い。そして、なやましい限りです。

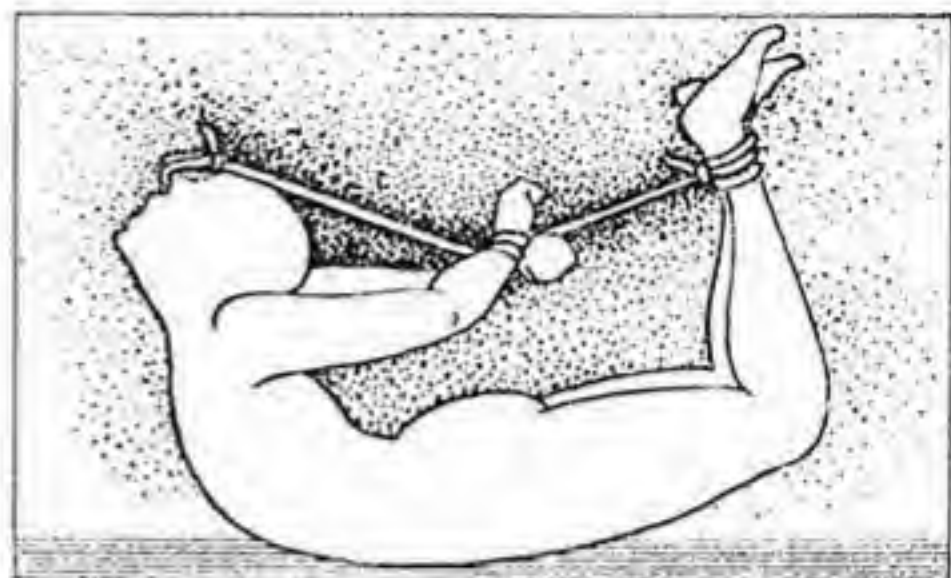
鼻梁の微妙な美しさ、鼻の形、鼻腔の恰好など、個性を持ったそれぞれの美しさには、ハツとなって目をひきつけられ、思わず惹き寄せられそうになった時に、パッと画面の変わる意地悪さ。もっとアップで長い時間映し

告白

孤独の
プレイ

刑

三 万



豚 鼻 の

葉 那

るほど見とれてしまします。

そんな美しい鼻の先端近くから、優美な丸みを微妙に描きながら、中核がやや細くなった鼻腔を見ると、こんな形なら鼻輪がつけ易いだろうナとか、思う存分にいじめつけたらどんな喜びの表情になるだろうかなどと、つい考えてしまします。

素晴らしい鼻をつまみあげ伸ばしたり、圧したり、捻ったり、器具を使って押しあげたり、鼻孔に紙をつ

めこんだ上から涙を流して白い八の字にしたり、鼻輪、鼻棒、鼻鎖などといった飾りつけをして吊るし、小鼻がヒクヒクするのを想像するのは、私のとても楽しいことで、限りのない夢を繰り上げさせてくれることなのです。

そんな想いはますます昂じてくるのですけれども、実際に思い通りになってくれる鼻に出会うことは出来ず、加虐の対象はつい私自身の鼻ということになっています。美しい鼻を見て来て、鏡に写った自分の鼻と相對するわけですが、あぐらをかいた己れの鼻にコンプレックスが甚しく、一層加虐に激しさが加わり、中核に穴をあけて鼻輪をつけたり、棒

を通してひっぱったり、鎖を通して首に巻きつけたりしたものです。

そんなことを繰り返しながら、サド女性の足元にひざまずいてドレイにして貰えたらなあと思うようになってからも、もうずいぶんの月日が経ちますが、この夢はいっこうに叶えられそうもありません。

しかし、自分だけの空想の中でのプレイをしているうちに、私なりに完成したと満足出来る自虐プレイを発見したのです。名付けて「豚鼻の刑」というものです。

独りで行えるプレイとしては、これが限界ではないかと思っていますが、これを発見してから度々楽しむうちに、やはり同好者に吹聴したい気持が押えきれなくなってきて、ペンをとってしまったのです。

結局は鼻吊りと自縛が同時に味わえるというのですが、鼻マゾなればこそと、自分ながらオカシクなることもあります。

勤めがある関係上、昔のように中核に穴をあけることはばかられ、吊りたいけれど鼻孔に傷がついてはマズイと考えていた私が、ふと思いついて目をつけたのが、百貨店で買った物でした。

続けてほしいと残念でなりません。

しかし、一般に戦後、女性の自意識の向上や、ノビノビと育つ環境のせい、外人なみに鼻筋の通った、しかも高く、鼻腔の形も丸みを帯びて恰好よく八の字を描き出している女性が、昔よりはるかに多くなったようで、私のような鼻マニアにはまことに嬉しい世の中になってくれました。

通勤の車内などでも、美しいローマ鼻に行き合い、思わず息を呑むことも、そう珍しくなくなってきましたが、ツンと高く鼻頭で少し陰影の筋がついた上に、形よい八の字に光を受けて鼻腔内が明るく見えたりすると、グーンをひきつけられる思いで、場所柄も忘れ

これだ、と思った時の嬉しさは、ちょっと表現しかねるくらいのものでしたが、この着想がキッカケとなって次々と妙案？ が浮かんできたのです。

私は早速、その柄を真中から曲げ、そこに女性のストッキングを結びつけました。私の好みの黒色です。鼻の孔に曲げた柄の針金をひっかけてみました。思った通りカッコウの「鼻鉤」になってくれました。真中に結びつけたストッキングを頭に廻して引いてみました。鼻が吊り上げられ、鼻鉤が小気味よく喰い込んでくれました。

嬉しくなつて、頭のとっぺんで擱んだストッキングをグングン引いているうちに、ふとこのストッキングを後頭部で交叉させて前に廻したら、猿ぐつわにも、首カセにも出来ることに気付いたのでした。

鼻に苦痛を感じながら、ストッキングで猿ぐつわが出来るといふこの思いつきは、ただ鼻吊りを目的に試みていた私をワクワクさせるのに十分な価値がありました。後で考えたら何でもないこのことが、その時には素晴らしい発見のように思えたものです。

なやましい感触を以って、後頭部から廻ったストッキングは私の頬を締めつけて唇を割

り、舌の動きを封じます。しかも、その猿ぐつわが強ければ強いほど、目的の「鼻吊り」が平行して強烈になってくれるのです。鏡に写した鼻吊り猿ぐつわの自分の顔に、ヒシヒシと感じられる苦痛の実感とともに私は酔い痴れる想いでした。

もちろん首カセにもしてみました。しかしこれは、やってみて始めて首カセではなく首絞りであることに気付きました。猿ぐつわと同様に、鼻吊りの強烈さに比例するのはいいのですが、鏡の中の自分の顔が、みるみるうちに充血し、醜い顔がさらに醜くふくれ上ったのにビックリしてしまい、これ一度きりで以後はやっていません。プレイは楽しむもので、危険まで冒す気持は私にはないのですから……。

それから何度、この鼻吊り猿ぐつわの陶醉を繰り返したとか数えきれませんが、だんだん何か物足りなさを感じるようになってきました。マンネリというものでしょうか。私の欲というものでしょうか。

しかし、この欲のおかげで、先に書いたように、今でも私が満足している「豚鼻の刑」が生み出されたと思っています。

私は、その物足りなさの原因を考えたので

す。そして、目的の鼻吊りはほぼ満足といえるのに、猿ぐつわという副産物を思いついたために余計に欲が来ているらしいことに気がついたのでした。手足が自由であるということが不満のたねだったわけです。

それに気付いてからは、もちろんいろいろと工夫して自縛をやってみた結果、曲りなりに形だけはどうか自分自身を縛ることも出来、ある程度は不満をまぎらすことも出来た時もありました。

しかし実際に私の好みを満す自縛というのはむづかしいことだと思い知るだけで、鼻吊りを活かした自縛プレイは出来なかったのです。だめなのかなアと、空しい思いで、鏡の中の鼻吊り猿ぐつわを眺めながら、頭のテッペンを這っているストッキングをひっぱって、哀れに吊り上げられたオモロイ鼻を、さらにピクピク吊り上げていた時、ふと思いついた閃きに、思わず躍り上ったものでした。この閃きこそ、私にとっては正に幸福の閃きともいえるものだと思います。

一つ思いつくと次々とよい考えが浮かびます。私はとびつく思いで実験にとりかかったのです。何でもそうでしょうが、やってみれば、あれこれ考えあぐねていたのがオカシ

イほど簡単なことです。

早速にロープで両足首を揃えて縛り、片方の端に、鼻鉤のストッキングを結びつけ、腹這いになって足を曲げ、鼻鉤を頭越しに鼻孔へひっかけて曲げていた足を伸ばしてみたのです。鼻が、想像以上に引っぱられた時の嬉しさは、例の鼻吊り猿ぐつわを発見した時以上のものでした。

こうして、不満に悩んだ幾十日が嘘みたいに、私の性向ピッタリの自虐プレイが出来るようになってからは、色々の演出が潤いを添えるようになりました。

鏡は以前から欠かせないものだったので、その鏡の前に大型の写真立てが加わりました。もちろん私ごのみの鼻筋のきれいな女性の顔写真が入っています。この女性が私を責めてくれるサド女性です。ブラジャーやパンティ、ハイヒールやストッキングが並ぶこともあります。

その前で、逆エビになった私は、鼻鉤で吊られた鼻と、縛った両足首を直結したロープの中程に、背中へ廻した両手で輪をこしらえて手首を巻きこみます。足を出来るだけ伸ばします。とたんに鼻がグリーンと吊られ手首がギュッと締め上げられるのです。写真立ての

サド女性が、私を鼻吊りにかけ、後手の逆エビに縛り上げてくれたのです。

「どうだい？ もっと強く吊ってあげようかい？ 鼻が千切れても知らないよ」

サド女性の声が聞こえます。ムチが私の太ももに激しく打ち降ろされます。私は思わず唸ってビクッと足を伸ばします。鼻孔に鼻鉤がグイッとばかりに喰いこんでギュウと引き吊られるこの苦痛。じーんと脳髄までひびくようなこの快痛。

「女王様、ご主人さま、もっともっとおムチを下さいます」

私は、猿ぐつわをしない時でも、している時でも、実際に声を出して哀訴するのです。

鏡の中の豚は、ストッキングで区切られた両眼を細くして、醜くへしゃげた団子鼻の孔を八の字に引き吊られ、小鼻をヒクヒクとさせて苦痛を噛みしめています。向こうがわに写る縛られた両足首と反り返った背中の中の手首が、ロープに絞られてブルブルと悦虐に慄えているのが見えます。

「お、おねがいします。この豚めを、足蹴におかけくださいませ」

「こうして欲しいっていうのかい」

私はごろりと横転します。そして写真の横

に並べてあるハイヒールに、接吻しようと腕くのです。

こうして、グイグイ引かれる鼻鉤に責められてマゾ天国に達しますと、縛られたままの私はグツタリと横倒しのまま、受刑の余いんを噛みしめるのです。

ようやく起き上って鉤を外すと、鼻の頭に二筋の鉤痕と、額を縦断する一筋のストッキング痕が明瞭に浮き出ています。これが私の被虐の喜びを現わすバロメーターといえると思っています。

現在はこの「豚鼻の刑」のおかげで、私の欲求不満もほぼ解消することが出来て幸福なのですが、しかし、ある不安を取り除くことは出来ません。それは、現在の満足がいつまでも続いてくれるかということです。事実、これが独りプレイではなく、どなたかサド女性に責めてもらえるのなら、という気持は絶えずあるのですから、欲望のエスカレートがこのプレイを味気なくしてしまわないかと心配しているのです。

(おわり)

×

×

×

×

×

×



19

こんな甘い亭主ですから、玉枝がますます増長してくるのは当然のなりゆきです。そのうち、玉枝は客と一緒に外出するようになりました。

十一時の閉店時間が、残っている客のため

いくぶんのびて十一時半ごろになるのが普通でしたが、十一時前後に郁子を先に帰したあと、しばらく店で客と玉枝との笑い声がきこえていましたが、いつのまにか静かになって物音もしなくなりましたので、そっと覗いてみますと、店には客もいなければ玉枝もいない、もぬけのからでした。

M
の
傾
斜

壺

中 ちゅう

の

園 その

(6)

真 砂 十 四 郎

カット・春川ナミオ

入口のドアをしらべてみますと、カギがかかっています。

私は舌打ちして、とりちらかしたままのビール瓶をかたづけたり、コップや小皿類を洗いながら玉枝の帰りを待ちましたが、洗いものも、掃除も全部すまして、テレビの深夜番組を最後まで見終っても、まだ帰ってきませ

ん。

しかたなく私は一人で蒲団の中に入りましたが、やはり眠れるものではありません。あれこれと玉枝の行き先など想像したりしているうちに三時の時計の音をききました。

と、階下でカチリと鍵をあける音がしました。

ああ、帰ってきた——。私は内心ホッとしながらも、あわてて蒲団をひっかぶって眠ったふりをしていますと、トン、トンと階段をあがる音がして、玉枝が部屋へ入ってきました。

彼女は私の枕もとに中腰で立ったまま、かぶっている蒲団をひょっとめくったので、私も思わず目をあけてしまいました。

「あら、あんた、おきてたの？」

「う、うん……ちょっと眠ったかな」

いま目がさめた……という恰好をして目をこする私へ、ふふんと笑いかけながら彼女はそこへしどけなくどすんと坐り、たもとから煙草をとりだして火をつけます。

「どこへ行ってたんだい？ 今ごろまで」

「お客さんと一緒にすすしを食べに行ったのよ。車で新宿まで行っちゃってサ」

「それにしても、もう二時だぜ」

「お客さんが飲んべえだから、しょうがないのよ。すすし屋で、また一本ってくるんだから。帰りのタクシーはなかなかつかまならないし……」

「すすし食べに行っただけか？」

「そうよ。……あら、あんた、なに考えてんの？ あたしと清水さんと変なことしたとでも思ってたんの？」

「いや、そういうわけじゃないけどさ」

「おかしいと思うんなら調べてよ。ほら、どう？ 近くばよって目にも見よ」

彼女は、酔ったまぎれの軽口をたたきながら、膝立ちして、恥かしげもなく前をひろげて私の目の前につきだします。

「おいおい、冗談するなよ。わかった、わかった」

まあ、その清水さんと一緒におすすしを食べに行っただけなのでしょう。私は「あはははは」とわざと朗らかに笑って、彼女の気嫌をとりました。

「さ、酔ってるんだろ。早く寝巻に着かえて寝なさい」

「着かえるわ。だから早く着かえさしてよ」

「おやおや、これは参った」

いつもの習慣なので、私はしかたなく蒲団

から起きあがって、彼女の着物を一枚ずつ脱がしてやります。

玉枝は（あたしにぞっこん惚れこんでいる男）という自信たっぷりですから、女王のようになんとしてたまま、足袋をぬがせるのもお腰をとるのも、何から何まで私にまかせたままです。

ネグリジェに着かえさせ、抱きかかえるようにして蒲団にいられてやりますと、酔った下地が發散してか、彼女は私に抱きついたままうつらうつらと眠りの中に入ってゆくようです。私は（なんとという悪女）（なんとというふしだらな女）と苦虫をかむ思いに眉をひそめながらも、しっかりと彼女のからだを抱きしめて、半開きのまま正体のない彼女の唇にひとりキッスするのです。

私がこんな態度では、玉枝が何処へ誰と何しに行こうがご自由にと承認したようなものです。表面の理由は「商売のため」ですが、内面の理由は「好きな男と思いきり」にちがいありませんが、いずれにしても、最初から「不貞」は予想していた妻です。

案の定、彼女の外出は二度、三度と重なってきて、帰りの時間も三時、四時と遅くなってきました。「四時ごろ帰ってくるんだった

ら、いっそ朝までゆっくり寝て帰ってきてても同じことさ」と言いたいところですが、そこまで私も平気で言いきれませんし、彼女もまたいくぶん私に遠慮してか、夜のうちに帰ってきて「閉店した後のちょっと外出」の形をとっているのでしょう。

三時にしろ、四時にしろ、依然として私が彼女の着物を寝巻と着かえさせているのですが、最初のうちはそれでもなんとなく弁解めいたことを言っていた彼女も、次第に当り前のような顔をしたまま私に着かえさせるようになりました。そとで好きなことをしてきた妻に、とくとくとして寝巻と着かえさしている私の馬鹿さ加減を、内心なかば呆れて見下ろしているのにちがいません。

夫婦喧嘩してもいいから、一ぺんたしなめて、彼女の行動を抑制する手もありますが、またそれが夫として当然とるべき態度でしょうが、私はためらってしまうのです。

自己弁護めきますが、気が弱くてそこまで言えないというわけではありません。玉枝を力でおさえつけて、平凡な女房にしてしまつて、それで玉枝の価値がどこにあるのかという問題です。

「あなたの出世になることだから、やきもち

焼いちゃダメよ。淋しいだろうけど、一、二年、待ってるのよ」

と夫に納得させて殿様の愛妾になった姐妃のお百が、貞淑で純情な女だったらお百の価値はまったくなくなってしまう。男もまたそんなお百には惚れますまい。私が玉枝に惚れた……でもありませんが、玉枝に負けた理由は、お百のような彼女の淫奔さ、不貞さにあつた筈です。それならいっそ、その淫奔さ、不貞さをそのまま肯定してこそ、彼女と一緒になつた価値があるというものではないでしょうか。

ま、なんの、かのと、とりつくろつて弁解してみたところで、どっちにしてもだらしない馬鹿な亭主にちがいはありませんが、玉枝は不甲斐ない私をいいことに、蒲団に入つてからも、男との情事にぐったり疲れたからだを横たえたまま、私にマッサージをさせるのでした。

「ねえ、按摩してよ。店で立ちどおしだし、疲れちゃうもん」

「よしよし、どのへんかな。肩か、腰か？」

「腰、押して」

「よし」

私は腹ばいになつた彼女の腰に両手をあて

て、力加減に注意しながら上から下へ、右から左へとマッサージしてやります。

「ああ、いい気持ちだわ。もっと下の方も」

「このへんかい？」

「うん……」

私は、腰から大きくもりあがつたお尻へ、それからさらに下つて太腿へと、もみあげ、もみおろします。彼女は手をのばして煙草に火をつけ、吸いながらうっとり目をとじ、からだを私にまかせています。いま別れてきた男との感触を思いだして楽しんでいのでしょうか。

それから仰向けになつて、腹部、太腿、ふくらはぎ、足先と終つて、やつとお許しがでた私は、彼女の横にもぐりこみました。

「あら、冷たいわね」

「それは寝巻のまままで起きてたからさ。でも按摩してるおかげで、僕自身は寒いこともなかったけどね。まあ、辛抱してくれよ、すぐ温かくなるからさ」

私は遠慮しいしい、彼女により添い、「玉枝ちゃんのからだはすてきだな。こんなに魅力のあるからだって、ちょっとないよ。僕ばかりじゃないだろ、今までだって他^{ほか}の男の人からも言われたことあるだろ？」

「あら、いやよ、そんなこと……」

「いや、言うと思うんだがな。玉枝ちゃんだって、今まで、男は僕だけなんて僕は思っちゃいないし、もちろん過去のことなんか僕は問題にしちゃいないのは君だって知ってるだろ。すくなくとも君と関係のあった男なら、きっとそう言ったにちがいない、と僕は思うんだがな」

「そりゃ、言った人もあるわ」

「だろう……。事実、すばらしいからだだもん。キャバレーなんか勤めてると、誘ってくる男もずいぶんいると思うんだが、君だって自由意志で行動するんだから、その中には好きな男もでてくるのは、これは当然だよ」

「……」

「さあ、……何人ぐらいいたかな、玉枝ちゃんのからだをほめた人は……。今まで、過去にだよ、玉枝ちゃんは何人ぐらいの男の人を知ってたの？」

「いやアね、あんた……。そんなこと聞いてどうするのよ」

「いや、どうってわけはないさ。ただ、玉枝ちゃんのからだを知った幸福な男が、今までに何人ぐらいいたかな、と思ってさ」

玉枝は私の表情を探るように、横目でちら

りと一瞥つしましたが、警戒する必要のないことを感じたのでしよう。

「バカねえ、あんたは……。恥かしいじゃないの、そんなときかれたら……」

「僕と君の間で、恥かしいなんてことは何もないよ。玉枝ちゃんの素晴らしさの証明みたいなもんじゃないか」

「……まあ、五、六人よ」

「それは『ロマンス』だけのことだろ。前に同棲してた男の人もいたんだろ？」

「あれは、ロマンスの前に勤めてたキャバレーの楽士だった人」

「その人とは、どのくらい同棲してたの？」

「そうね、半年ぐらいかな。一緒になってても、月給なんか全然いれないのよ。あたしが食べさせてやってたようなもんだっし、ばかばかしいから別れちゃったの」

「すると『ロマンス』の前に勤めてたキャバレーでも、何人かはあったのさ？」

「あんた、なんでまた、そんなこと詳しくきくのよ？」

「いや、それはだな。玉枝ちゃんがそれだけ男の人に好かれていたかと思うと、一そう魅力を感じるからさ」

「どうかしてるわ、あんたは……。そんなこ

とが魅力なら、いくらでも話してやるわ」

「その前のキャバレーでは、何人……？」

「いちいち覚えちゃいないわよ」

「すると、まあ『ロマンス』と大たい同じぐらいとして、まあ、五、六人……？」

「まあ、そんなところサ」

「うーん、素晴らしい！ ロマンスで六人として、その前のキャバレーで六人、それに同棲した男の人はいれて十三人か……。『玉枝をめぐる十三人の男』なかなかいいじゃないか」

「あんたもいれたら、あたしをめぐる十四人の男よ」

「あはははは、なるほど。そのうち、どの男が一ばん好きだったか……。やっぱり忘れられないのは、たとえ半年でも一緒に同棲したその楽士さんだろ？」

「そうね、それは時々には思いだすわ。けど、一ばん思いだすのは、なんといっても初恋の人ね」

「おやおや、まだそのほかに初恋の人もいたのか。それはいつ頃？」

「あたしが十九のときだったから、もう八、九年前のことね。そんなときはもう、あたしまだなんにも知らなかったでしょ。想像してた

けど、びっくりしちゃったわ」

「なにをびっくりしたの？」

「とても乱暴なのよ。あたしをおさえつけて……。抵抗したけど、しっかり抱きしめられちゃって、否も応もないのよ。あんたなんかと大違い……」

「だけど、そのバーバリズムが、またいいんだろ？」

「え？」

「いや、その乱暴なところが、またいいんだろ？」

「そうね、思い出だから、それも懐かしいわね」

「その初恋の人は、どこで知り合ったの？」

「近所の人よ。最初は一緒に豊島園へ遊びに行つて、二度目に花月園へ行つた帰りに、ちよつと休憩していこうつて言われて、あたしホテルなんてあんまり知らなかったでしょ。」

鶴見へんのホテルへ連れこまれてサ」

「そのときが最初か。十九の春……。なかなかすてきじゃないか」

「そのときはいいも悪いもないわ。ぜんぜん夢中よ」

「それから後は、せきを切つたように二人の仲は進行した……ってわけか」

「そうね、しばらくは続いたわ」

「で、結婚というところまではいかなかったのかい？」

「それが、癪じゃないの。その年の秋に、その人、他の人^{ほか}と結婚しちゃつたのよ」

「ふーん、それは残念だったな。その人はいくつぐらいだったの？」

「二十三、か四だったわ」

「それで、その人とはそれでおさらばかい」

「ええ……. だけど」

「だけど？……. だけど、どうした？」

「いや、もう……。あんたったら、そんなに根ほり葉ほり聞いて、どうするのよ」

「だけどさ、また会つたのかい？」

「半年ぐらいたつてからだったかな。あたしのうち、五反田の方へ越したけど、なんかの用で、前の家の方へ行つたのよ。そうしたら

その人の家、お父さんが死んだとかで、お葬式なの。その人、玄関の前に立ってるじゃないの。あたし、知らん顔してお焼香の列に並んでお焼香してやったら、その人、びっくりしてたようだけど、帰りにあたしにそつと紙切れを渡すじゃないの。そこから離れてから紙切れをひらいてみたら、何日だか忘れちゃつたけど、まあ十五日なら十五日として、十

五日午後三時、新橋駅、烏森改札口で”って書いてあるの”

「ふーん、また会いたいつてわけだな」

「ええ」

「で、どうした？ その時間に行った？」

「行つたわ」

「それで半年ぶりのランデブーってわけか」

「一緒に烏森へんのホテルへ入つて……。結婚したのは親のいいつけで仕方がなかった、なんて弁解してたけど、あたし、あの人をあたしから奪つた奥さんに復しゅうしてやる気持だったわ」

「しかし、奥さんに復しゅうしていても、悪いのは男の方で、奥さんの方は何も知らないわけだろ」

「だけどサ。男の方は会えばまた懐かしいもん。奥さんの方は憎いけど……」

「へーえ、そういうもんかな。そうすると、その人は奥さんを可愛がつたうえに、君もまた可愛がつて、幸福だな。ああ、僕はやけるやける……」

と私は玉枝にしがみつきました。私のからだの反応を感じて玉枝は

「まあ、いやらしい！ バカ」

と私の頭をポンと叩いて私をつきはなしま

した。玉枝の胸のうちは、その初恋の人との情事の思い出で、いま一ぱいになっているのでしょう。

20

「だいたい、こんな小さなバーは、女ばかりの方がいいのよ。お客さんの方も男の人がいるとテレくさがるし……。ねえ、あんた、こうしようよ。あたしがそつとあんたのお尻をツネったら、あんたは奥へひっこんじゃうのサ。ハイボールぐらい、あたしで充分なんだから……」

玉枝のおしつけ提案に私は従わせられてしまいました。

その後、ときおり玉枝からお尻をツネられて、私は奥へひっこみました。（ああ、この客はツネるな）と大たい私も予想できるようになりましたが、三、四人います。その中でも絶対間違はなくツネるのは、清水という土建会社の下請け工務店の専務さんという男です。「ロマンス」からの玉枝の客ですが、こんなバーに通ってくるくらいですから、たいした会社ではありますまい。

狭いバーのことですから、二、三組、客が入ったら満員になってしまいますが、他の客

もいるときには玉枝も私のお尻をツネりません。客がとだえて、清水さん一人というようになると（そろそろツネるな）と予想している私のお尻に、チクリと彼女の指先がくるのです。

私はコップ類やビール瓶などをかかえて、奥で洗いものでもする態で、さりげなく退場するのですが、そんなときは郁子もときどき奥へ入ってきます。

私のそばへきて、ペロツと舌をだして「ちよつと休憩」などと言いながら、足を投げだして坐ります。

「立ってばかりだから、足が疲れちゃうわ」近ごろ、郁子と二人きりになる機会はほとんどありませんが、私はいそいそと座布団を持ってきたて郁子にあてがってやります。

「どれどれ、すこし揉んでやろう。どこが疲れる？ 踵かい？ 足先かい？」

「踵も、足先も、両方よ」

「よし、こっちへおだし。もんでやるから」郁子は私の方へ、ミニスカートからあらわに出ていくたくましい足をヌツとつきだして私にまかせます。私は彼女の足を捧げて、静かに、やわらかく揉んでやるのでした。

「ねえ、マスター。奥へ入ってて、あんた、

やけない？」

「やけないね」

「ふーん……」

郁子は感心したような顔をして、私に足をもませています。

「それより、矢沢君とその後、どうだい？ うまくいってる？」

「いい加減なもんだわ」

「しかし、矢沢君は昼の勤めだし、君は夜だから、すれ違い夫婦で、不便だろ？」

「多少、その点はあるわね。だけど、家にじっとしてたって面白いことないもん。ここへ出ての方が面白いわ」

「それは結構。その方が僕としても有難いってわけだ。毎晩、郁ちゃんの顔を拝めるからね」

私にとって郁子は今でも「御セミロング媛の命」です。

「それはしても、奥さん業とホステス業と二本立じゃ疲れるだろ？ よかったら昼間でもときどき五反田の家へ行つてやろうか。部屋の掃除だとか、小さいものの洗濯ぐらい僕がやってやるよ。夫婦二人きりで、たいした用事はないようでも、案外あるもんだよ。下着の洗濯とか、トイレの掃除とか……」

「うん、でも、わざわざ来てくれなくてもいいわよ。マスターに来てもらったりしたら、姉さん、おこるわ」

「だから、姉さんがいないときを見はからってサ」

「もういいわ。だいぶ楽になった」

郁子はなんの返事もせずに、また店へ立ってゆきました。私は一人ポツンととり残されて、しかたなく、そばの新聞などとりあげて拾い読みするのですでした。

郁子が姉に遠慮しながらも「やけない？」と私にきくように、私が奥へ入っている間、店では玉枝と清水さんがしっかり抱き合ってキッスしていることは明白なのですが、私の不甲斐ない態度をいいことに、玉枝のお尻の合図と、閉店後の外出は依然として続きました。一緒におすしを食べに……などと弁解している間はまだ可愛げもありましたが、次第に図々しくなって、平然とやられるのには、私もいささか頭にきます。

玉枝の気嫌のいい日をみはからって、蒲団の中に入ってから、私は玉枝に清水さんのことをききただしました。

「おすしを食べに行くだけじゃないんだろ？この前なんか四時だったよ。四時といえば、

もう朝帰りと同じことだぜ」

「……」

「十一時に出ていって、四時じゃ、その間、五時間だぜ。五時間もかけて、おすしを食べてるのか？」

「深夜バーだってあるわよ」

「打明けるけど、実はこの前、僕は尾行したんだよ、君たちのあとを……」

「……」

「先回りして裏口から出て、タクシーで清水さんと君のあとをつけたんだ。そしたら、君は何処へ行ったと思う？」

「……」

尾行しなくてもわかっていることですが、私はカマをかけて問いつめました。彼女もこれはまずいと思ったのでしょうか、急に態度をかえて、私に抱きついてきました。

「ほらね、この前だって、君はこうやって僕に抱きついた。そのときだって、君のからだから匂う香り、君はわからないと思ってるかもしれないが、お風呂へ入った湯の香りが、君のからだにただよってるのさ。君はおすしを食べにいってお風呂へ入るのかい？」

「ほほほほ」

玉枝は笑いました。

「あとをつけたんだったら、わかっているんじゃないの。何もあたしにきかなくなっちゃっていいじゃないの」

彼女は、ふてくされたように含み笑いをしていました。胸のうちでは（知られたうえは、どうしたらいいか。どうしてこの男を軟化させようか）と、あれこれ思案していたのでしょう。

「あんた、この前、あたしのからだがすてきだって言ったでしょ。他の男の人でもすてきだって言う人いるだろうって言ってたでしょう。あたしをめぐる十四人の男なんて言うたくせに……。それが十五人の男になったところで、別にどうってことないじゃないの。あははははは」

「おいおい、冗談言うなよ。いまの君は僕の妻なんだぜ」

「妻よ。妻だからこうやって抱き合ってるんじゃないの。ねえ、あんた……」

私はいささかタジタジとなりました。抱きついてくる玉枝のからだをポンとつき放せないのが私の弱みです。私は言葉につまってしまいました。

別れる気なら、あくまで突放したらそれですむのですが、別れるという決心もついてい

ない私だけに、いふなればこのくらいのこと
は初めから半ば予想していた私だけに、どう
しても毅然とした態度がとれないのが、から
だとからだの感触で玉枝にも伝わってしまう
のでしょうか。（これは、あたしの持っていき
ようで、どうにでもなる）という、勝利の予
測を彼女に与えてしまうのです。

「僕としてはだよ。玉枝ちゃんを普通一般の
夫のように拘束しようとは思っていないよ。
ある程度、玉枝ちゃんの自由にやってくれて
て、僕はそれでいいと思っているんだ。だけ
どサ……。僕の知らないところで、かげでコソ
コソやられるのは、だまされたような気がし
て、おもしろくないんだよ」

「別にあんたをだまして、なんて思っちゃい
ないわ」

「うん、それはわかってるよ。だから……だ
から、僕にかくして何かするのは勘忍してく
れよ。君が嘘をついて、それを僕がほんとう
に知らないでいるというのが、僕として一ば
んつらいんだ」

「だから、あんた、知ってるんでしょ」

「でも、玉枝ちゃんは嘘をついて、僕をどま
かそうとしたじゃないか」

「あら、そうかしら……」

玉枝はじっと私の眼を見ました。私が彼女
をどう思っているのか？ 玉枝が演じた行為
に対して私がどう出ようとしてるのか？ 私
の心のうちをハッキリつきとめてから、自分
の出方を考えよう、と思っているのでしょうか……。

彼女は仰向きに寝たまま、じっと天井を見
つめていましたが、故意か無意識か、膝を立
てて、だらしなく足を両方に開いたその右足
の太腿が、私のからだにちょいちょいと触り
ます。それは私の反応度を打診する感度計み
たいなものかもしれません。

ここで釘をさしておかないと、彼女は図に
のってますます増長する。いまここでは、私
はくりりと彼女に背中を向けて、目もくれぬ
態度をとるのが一ばん効果的な方法だ……と
思うのですが、それが出来ないのです。

ともすると、何もかも忘れて彼女にしがみ
つきたい衝動にかられてくるのです。

彼女の手管の駆引きが、私のからだへ加わ
ってきます。私は初めこそその手をはらいの
けていましたが、次第に抵抗の力が影をひそ
めて、いつのまにか女王蜘蛛の巣の中にひき
こまれる私になってしまふのでした。

なんと私はだらしのない男なのでしょ

う。とうとう私は辛抱しきれなくなって
「ああ、玉枝！ 玉枝ちゃん！ 玉枝ちゃん
は僕の一ばん好きな人！」

われを忘れて玉枝にしがみついてしまいま
した。

（こうなれば、もうあたしのもの）と胸のう
ちでフンとほくそ笑んだ玉枝は、最初私に
結婚を迫ったときの手管を……。それはジ
クフリードの背中に残った木の葉のあとのよ
うに、私を屈服させるかんどころを思いだし
たのでしょうか。彼女はあざ笑いながら、しが
みつく私を押しつけました。胸から押し放さ
れた私は彼女の腰にしがみつきました。そし
てまたその腰から押し放された私は、彼女の
足にしがみつきました。

彼女は私の狂態を見おろしていましたが、
そのまま半分起きあがって、私にのしかかっ
てきたかと思うと、足を開いて、私の首の上
にずしりと馬乗りに跨がってしまいました。

「あたしに文句言った罰よ。どう？……参っ
たか？」

「う……うう」

私は息がつまって、声も出せません。

「降参したか？」

ずっしりと圧しつぶされた私は夢中で「う

ん、うん」とうなずいてしまいました。

「あたしは何をしようと、あたしの勝手よ。」

あんたは黙って見ていたらいいのよ」

「……」

「どうだ、黙って見ているか」

私はまた合点々々しました。アヘン患者が自分の身体をむしばむものと承知の上で、アヘンの香りに陶醉するように、私の人格を破壊する女と承知の上で、私は彼女の魔力の沼に吸いついて、おぼれはてるのでした。

「清水さんはあたしのパトロンよ。バーのマダムには、パトロンがいたっていいのよ」

「……」

「パトロンだから、仕方がありませんってお願い」

玉枝は馬乗りになった上から見おろしながら、私に返事を強要します。私は口をふさがれたかすれかすれの声をふりしぼって

「パトロンだから、仕方がありません」

と復唱するのです。

「よし、そんなら許してやる」

玉枝の演出は、まんまと私の^ま的を射てしまいました。女房に力の源であった髪の毛を切られたサムソンのように彼女の重圧から解放された私は、われながら恥かしさに顔もあげ

えず、彼女にしがみついてそのはだけた胸に顔をうずめたのです。

21

それからの私は完全に玉枝に屈服させられてしまいました。一緒になった最初からそうでしたが、それでも多少カモフラージュされていたメッキがすっかりはぎとられて、それこそ何から何まで玉枝が女王で、私が下男になりはててしまったのです。

炊事、洗濯、掃除など、何一つ玉枝はしませんから、そうした仕事は全部私の役目ですが、もっとも私としても他に仕事はほとんどなく、なんなとすることがないことには退屈でしょうがありませんので、これもまあいいと思っっているのです。

蒲団の中で寝そべったままテレビを見たりして、彼女が起床するのは午後の一時ごろです。それから顔を洗って、ご飯を食べて、またテレビを見て、午後三時ごろ美容院に出かけます。五時ごろからお化粧にかかって六時から店に出るといったスケジュールですが、その間の玉枝の御用係りは全部私です。

「ちよっとオ、タバコ……」

「おいきた」

「あんたア、これ汚れてるわ。洗っというて」

「オーケー」

という具合で、完全服従の私は易々として命令に従いますので、彼女はますますいい気になり、近ごろでは他の人には絶対言えないような恥かしい行為まで私にさせて平気です。

こんな状態にさせられて、私が懊惱不満の日を送るというのなら話は別ですが、大たいにおいてこういうコースを私が求めて仕向けた傾向が多分にあるのですから、そうなるべくしてなったまでと私も観念していますし、玉枝もまた（なるほど郁子からきいていたとりの男）と私を取扱うようになるのは当然の結果でしょう。

就寝後、玉枝は蒲団の中でタバコを吸いながら寝そべって、私にマッサージをやらせます。私は彼女の肩から腰、足と一生懸命もみながら、この野卑で下劣なハレンチ女の下男になっている自分を（なんという不甲斐ない男）と思うよりも（これでいいのだ、これで私は幸福なのだ）と思う心を強く身に感じるのですから、本当にこれでいいのかもしれない。

「あんた、店へくるお客で、加納……なんて

いったかな、加納……敏夫っていう、ほら、子供みたいな若い男、知ってる？ まだ十九なのよ、あの子。どっかの大学へことし入ったばかりの学生らしいんだけど、あんた、知らない？」

「ああ、知ってる知ってる。黙ってビールを飲んでいとおとなしい男。あんまり飲めないんだろ、すぐまっかになってるじゃないか。その男がどうしたの？」

「あの男があたしに惚れてるのよ。おかしいじゃないの、まだ十九のくせに……。同じ惚れるんなら、郁ちゃんに惚れたらよさそうなものなのに、あたしに惚れてるんだから笑わせるわ。いつか、あたしに、これ読んでくさいって、そつとラブレターをくれてサ。読んで破っちゃったけど、若い男だから夢中なのよ。『あなたは僕の女神です』ってサ。いつもあなたのお姿を胸に抱いてなんとか、なんとか……って、読んでるあたしが顔が赤くなるようなこと書いてあるのよ。あの男も、あたしをめぐるとかの一人かしら」

「といって、そのレターだけなんだろう。直接どうってなこと……？」

「あたり前よ。あとで、手紙読んだわって言ってやったら、顔をまっかにして、うつむい

てたけど、あの男だってお客の一人なんだからサ、ひっぱっといってるんだけど、あんな男にちょっと甘い言葉かけたら、いちころよ」

「可哀そうなこと、するなよ」

「だからなんにもしてないじゃないの。郁ちゃんに、あんた、どう？ って言ってやったら姉ちゃんのカスなんかいやよ、だってさ。

あら、あたしはなんにもしてないわよ、もしかしたら童貞かもしれないわ、興味ない？

って言ったら、笑ってたけど、大たい若い男ってのは、年上の女が好きなのね。その反対に郁ちゃんなんかは、三十から四十という中年の男に好かれるのよ。あんたなんか、どう？ 郁ちゃんは？」

「冗談言うなよ、女房の妹に……」

と私は打消しましたが、内心ドキリとしました。私は郁子を秘密の御神体にしていましたので、恐れ多くて手が出ませんでした。郁子もこの玉枝の妹です。矢沢に知られずすむとしたら、こんな無垢な学生をおなぐさみの一人にしないともかぎりません。しかし玉枝の方を恋しているのでは、どうにもならないでしょう。

その玉枝は、今はもう、私にかくす必要もなく、平然と清水さんと一緒に深夜の外出に

出て行きます。二時ごろ帰ってくることもありますし、朝まで帰ってこない日もあります。が、彼女の帰りをひとり待っている私は、久しぶりに押入れから郁子がおいていったピンクのネグリジェを取り出して、壁にかけてみました。

「郁子さま。御セミロング媛のミコト様」

と拝みかけて（いや、これはいけないな）と思い直し、そのネグリジェをかたずけて、かわりに玉枝の水色のネグリジェを出して掛けました。女神の座には玉枝が即位したのだから、これからの私の御神体は郁子でなく、玉枝でなければならぬじゃないか……と自分自身に言いきかせながら

「かけまくもかしこき玉照枝栄媛の命（タマテラスエダサカエヒメノミコト）様、たけきパトロンのおがみとともに、あつきしとねに伏したまいて、御むつごとかわし給うたつきがうえにもたつときおおみなりわざを、はるか杉並のしづがやにて伏し拝みつ、玉の小枝に赤き花、白き花とりどりに咲きそろうがごとく、玉のあわしまいやさかえにさかえしてまさんこと、かしこみかしこみてまおす」

と、ひとり私は祝詞（のりと）をあげて、汚れたネグリジェを礼拝しているのです。 （つづく）

オムニバス・・・・

・・・マゲチョンズ

責め祭りだぜ



不二天流

湯屋騒動

「熟々つらつらんがみ監るに、銭湯ほど捷徑ちかみちの教諭おしえなるはなし。其故如何となれば、賢愚邪正貧富貴賤、湯を浴んとし裸形となるは天地自然の道理。釈迦も孔子も於三もおさん権助も産れたままの姿にて、惜しい欲よくしいも西の海、さらりと無欲の形なり。欲垢よくあかと梵悩ぶつなうを洗い清めて浄湯おかゆを浴びれば旦那さまも折助も、執とれが執とれやら一般裸形おなしはだんがこれすなわは是乃ち生れた時の産湯から死んだ時の葬濯ゆかんにて、暮に紅顔なまよひの酔客よめも朝湯に醒しらふ的となるが如

く、生死一重が嗚呼ままならぬ哉……」

と式亭三馬の名作『浮世風呂』の書き出しの一部であるが、江戸の庶民階級と銭湯はきつてもきれぬもの。

されば……。

○

「いい湯だな、いい湯だな、湯気がポタポタ背中に落ちる、冷めてえな冷めてえな、ここはお江戸の、どまん中の湯。ああこりゃこりゃ」

石榴口ざくろぐちから手拭振り振り入ってきたいなせ

の若い衆の爪先きが、傍の侍の頭に当たった。

「こりゃ貴様」

やわら

柔の一手でもあろうか、みんなと若い衆を湯槽ゆぶねの中へたたきこんだ。

アッ、アップ……。

「よくもやりやあがったな、ださんびん」

飛び出し、侍の胸ぐらを掴み、いや裸じゃ

掴みようもない……のでパッと蹴り上げた、

侍の急所を。

「ウーン」

不意をくらって、さすがにガクンとくる。

「ざま見やがれ」

若い衆、仁王立ちになって笑った。

この騒ぎで、ちょっと脱衣場いたのまが混乱した。

案の定、盗難があった。財布だ、五十両。

「みんな、出ちゃならねえぜ」

番所から下ッ端がやって来た。よほど暇と

みて、電光石火のようだ。この辺の縄張

安岡ッ引き、金ぴらの金吉という。

「誰が……」「どいつだ」詮議するうち、縞

の財布の五十両は、例の若い衆の着物の中から出た。

「オレは知らねえ、でえいち湯槽の傍から離

れていやしねえ。そんな暇があるもんか。ね

え、侍さん」

と馴れ馴れしく喧嘩相手に応援を求める。

「……」

不気嫌な侍、まだ痛いらしい。

現状証拠とかで、若い衆とにかく番所へ。

「オレは番所と、ゲジゲジはでえきれえだ」

誰だって嫌いだ……

「氏素性は」

「丹之助、植木職、二十三、賭博前科一とな
っています、きつとバクチの金欲しさにや
ったんでしよう、叩きますか」

金吉が見廻り同心に、こう申告した。

暇をもてあましていた金吉、運動がわりに
もなる。こんな小事件は適当に任せてくれる
のが定法。同心は、仕事の有無にかかわらず
ご繁忙なのだ。

歴とした証拠。盗もうとしたヤツが慌てて
人の着物の中へ投げこんだ、それが運悪く丹
之助の……そうかもしれない、が証拠という
二字が厚い壁になっている。

○

ここまで考えた金吉だが、また疑ってもみ
た、なにしろ賭博前科があるからなァ。
「しょうがない、とにかく叩こう。退屈しの
ぎにもなる」

退屈しのぎにやられては、たまらない。

江戸時代は人権蹂躪が、日常茶飯事。

「オレも江戸っこだ、どうともしやがれ、素
ッ裸にしてやってくれ、江戸っこだい、禪も
切りたて真っさらだぜ」

丹之助の啖呵が風を巻くよう。

煽られて、もう黙っておられない。

「ようし、オーイ下っ引きッ」

「へえ……い」

と二、三人。下っ引きというものは、みな
アルバイトである。

番所の裏の小庭で、丹之助禪一本、菱縄で
引き据えられて……

「さッキリキリ白状申し上げろ。知らぬ存ぜ
ぬは痛い目を見るだけだ、損だぞ、損だぞ。
証拠まであがっていながらしらをきるのとはと
うしろうだ。てめえは番所が初めてじゃねえ
はず、馴れてるはず」

言うことはきまっている。型通りにおどか
し、なだめすかしたが……。

「バツケ野郎ッ」

憎悪の大喝は丹之助。

「それッ」容赦ない、ゲバ棒ならぬ六尺棒が
雨のように降ってくる。

ダダッ……ダダッ。

「こんちくしょうッ」

へこたれないぞ、と丹之助が唇を噛む。

「さァ申し上げる、申し上げる」

と、うるさいこと……聞く耳もたぬわい。

丹之助ふてくされる。

「いい湯に、入ったばかりにとんだ災難だ。

やはり、あそこへ行きゃよかった。お花坊、
待たろうな」

丹前風呂のお花に惚れている。ちょっと借
金があって行きにくい。普通の湯屋と違い二
階は酒も女もご自由。つまり湯女という売笑
婦。なかなか人気のあるところ。

デレデレと、思い出して笑っていると、

「こいつ笑ってやがる、痛くねえのか」

下っ引きが一打する。キーンと音をたてて
棒が折れた。

「ふてえ野郎だ……」

帝釈様たいしゃくさまのような眼の角たてて金吉親分が、
六尺棒をしごいて丹之助のあぐら組みの足に
差しこみ、股も裂けよと押しねじる。

「く、くそッたれ」

真ッ赤になりながら耐えている、が禪の前
袋がずれてくる。これはいけない、見られて
たまるかもがと蹴く丹之助……。

痛いだけが責めじゃないと今度は変わった
趣向で、上は顔から下は足の爪先きまで鍋墨なべずみ

を一面に塗り、禪の白さだけを残した黒ん坊にしたてられた丹之助。

「さ、ゆっくり歩くんだ」

ニヤリとした金吉親分、縄尻とって町内を引き廻しだした。

異国から来た黒ん坊か、それにしては髭もあるし、サラシの禪。異国人じゃない日本人だ。しかもよくよく見ると植木屋の丹さんじゃないか……。一体全体どうしたってんだ、そのさまは。

いけねえお花坊にまでに見られた。死ぬほどつらい苦しみ。恥かしい。丹之助は泣きだした。いや、ほんとに泣きだした。

「歩くんだ、止まるな」

ピシリッ、ピシリッ。

後ろから縄尻が唸り、とんでくる。

何か言いかけたお花坊も、幻滅の悲哀か、横を向いて地面を下駄で蹴っていた。

「オレは潔白だ、潔白だ。今にみる」

思わずポタリポタリ、くやし涙流れて、そこだけ墨がとけて……。

「ワイ泣いてるよ、弱虫黒ん坊」

罵笑、冷笑、子供も、弥次馬も。

せめてこの禪だけあってよかった……。

翌日、真犯人が捕まった。金吉頭を円めて

この失策を詫びたということであった。
「裸黒ん坊も悪くねえな」と言ったかどうか丹之助。

× × ×

——お茶手柄——

「下に、下にッ」

東海道は日本晴れ。

鳴海なるみの宿から、一里二十四丁宮の宿。

尾張平野の眺望絶佳なり。

「下に、下にッ」

お行列。

「はて今頃、何様だんべ」

「鳴海からだが、さてなア」

「わかんねえな」

わかんねえけど知らん顔では後が怖い。百姓たち鋤耨はおりだして、路に土下座する。

「下に、下に」と物々しいが、近づく行列の人数の少なさ、お駕籠などもない。

「はアてねえ……」

不思議がる、もっともだ。

駕籠の代りに担がれているものは、絢爛たる覆布をかぶせられている長箱。

その上に掲示された木札を見て、

「お茶、お茶献上だべ」

「何だ、お茶様の行列か」
百姓たちの呆れ顔。

駿州新茶を毎年献上されるのは、將軍家とご三家（紀伊、尾張、水戸）だけであった。

「尾張様か」

たとえお茶でも百姓より偉い。長いものには巻かれるで、仕方ない。

これだけの情景なら無事穏やかだが……。

「ご一同、抜かるでないぞ」

繁みの間から四人の黒覆面の侍、何かうなずき合いながら、行列をじっと見送った。

薄闇が迫っている。行列は、室泊り……。

今年は天候のせいか茶の出来が特に良い。

珍しいことだ。大手筋の、茶商の動きも活潑で、早くも高相場をよんだとのこと。

本陣——高張り提灯掲げ、人間様並みの警備である。

「またここで鰯腹飲むか、つまみの羊かんもあるしのう」

「いくら銘茶でも、そうそうは……」

「飽きると言うのか。しかし上役への手前もあるし、茶の味を克明にご説明するには嫌というほど飲まぬと味を忘れてしまうかも」

「一理ある」

警士たち、勝手なこと言い言い、ざわめい

ている。

ボーン……。

遠寺の鐘、亥の刻か。静かな夜ではある。が、三味の爪弾きの音が流れてきた。

予算も残っている、ストレス解消にと田舎の泥芸者三、四人を招いて酒池肉林のようになった。本陣に芸者などを呼ぶなどは、とんでもないことだが。

「あなたに抱かれたわたしは蝶になる、ね」

「よし、よし愛いやツ。朝まで離さぬぞ。おまえ名は何というのだ」

「はいのウ、奥村屋のちよと申します」

「何ぞ唄え」

乱痴気騒ぎ——。

○

庭奥に忍びこんだ黒い影四つ。

「好機至る。あのバカ騒ぎは天の助けだ。春山氏、夏川氏、秋田氏」

冬野と、四季の名のような、行列の時の怪しの侍たちだ。

何を狙うのか、何をしようというのか。

この時、勝手口にもう一つの影があった。

泥棒業界の不景気で、あぶれあぶれて欠食三日という、稲妻半次が衰視耽々、暗闇に蠢いていたのだ。金が先か、食物が先か、いや

食物だ。腹がへっては（へりすぎている）何とかで……。

炊事場へ忍び、何やら食ってきたようだ。財布も握っている。さすがである。

と……。

「曲者ッ」

本陣の警士たちに見付かったらしい。

「か、返すから勘弁してくれ」

喰い過ぎで動けなくなったか、難なく掴まった。ダラシのない稲妻。

「尾州家献上茶の本陣へ忍びこむとは不屈千万」

乱痴気騒ぎは不屈きではないとみえる。

「鼠賊といえども一応の詮議を」

庭に引き据えられて半次、ベソをかく。

深酔いしていない警士二、三人がサラリーの手前もあってか、もっともらしい顔付きで申し渡しを始めた。

「大胆不敵なヤツ、献上茶を何と心得る。城へ拘引し、きつく窮命申し渡すぞ」

「お茶とは関係ねえんです」

「何と？」

「何も関係ねえんです」

半次も、むかっぱらだ。

バカに致すか、と茶箱担ぎの下郎二人を叩

き起こし（これまた泥酔している）責め役を命ず。

いい気分だったのにとブツブツいう下郎。

仕方なさそうにフラつく五体をもたせながら半次の上半身を裸にして割れ竹で、

ビシッ。……もひとつ、ビシッ。

「い痛え」

江戸おかまいの稲妻半次だ。奉行所の百叩きにも平気だったが、こう衰弱したからだでは、さすがにこたえる。

血が、にじんでくる。

「ウウッ」

夜も更けた。

「もう、いいだろう」

面倒くさくなって下郎は寝てしまう。

半次もやおら、苦痛を耐えながら這うように、傍の縁の下へ潜りこむ。手は縛られたままだから小便も、仕方なく垂れ流す。

その間、例の四季名の侍たちはどうなったかという……結末は朝までおあずけ——。

○

今日も日本晴れ。

「いや全くの大殊勲だ、無礼は謝す。そちらかりせば七十万石尾張家は累卵の危きに立たたと申してもよい。恩賞は前例のなきほどの

豪華さじゃぞ」

名古屋から駆けつけた重臣が、欣喜して半次をねぎらった。

「何の、ただ偶然で……」

こそばゆい思いだった。

「いや、そちが眼を開けていたからこそ。眠ってしまつてはのウ。ハハッハ」

重臣も警士たちも、氣よく微笑する。……尾州七十万石の崩壊を狙う逆臣輩が、献上茶に毒薬（今の砒素のようなものか）を混入、あわよくば主君大納言の命を……。

この秘密作業を縁の下から眺めていたのが半次……濡れ衣袴さに告げ口して、四人は黎明とともに、宿外れで「御用」というわけ。「旦那、禪がびしょびしょで氣もち悪くて、何しろ……でござんしょう」

「ハハッもっともじゃ。これで買え、何千本何万本、いやもっともつと買えるぞ」

恩賞金の額は分からなかったが、容易なものではないことは確かだ。

× × ×

——くノ一芝居——

何をやってもダメだ。

赤字続きの打開策に幹部たちが鳩首協議。

「こんな不景氣みたことない」

「無理もない。方々で百姓一揆が起こっているそうだし、それが此の江戸にもひびいてきているんじゃない」

「らしいな、と言って済ましちゃうおられもすまい。何とか彼とかせにやららん」

「猿若町の団十郎は別だが、浅草奥山までがこの不景氣の時だからなア」

「諦めちゃいけない。考えるのだ」

「アッと驚く為五郎式のようなものを」

「あるッ、あるぞッ……」

「見せ物かい？ 月の石でも、取り寄せるのか」

「そんなのではないワイ。これぞ起死回生の大企画。大当たり大入満員間違いなし。一回の終りを待つ行列が回向院まで延びて、十重二十重と、とり巻くってえもんだ」

「ホレッホウ。一体全体そりゃ何だ」

「即時準備開始ッ。おまかせを、ってなもんさ」

○

宣伝は今も昔も誇大氣味が効果的。

「さアいらはいいらはい。数多い芝居見せ物の此のお江戸でたった一軒だよ。聞いておどろき見てびっくり。若い者にも年寄りにも、

びったりこん。壮絶快絶、魂、宙天に飛んで

恍惚たり。団十郎も三舎を避けるいい男。小野の小町、照手姫も色を失ういい女。揃って揃って芝居たっぶり、色気たらたら。見ないと一生の損だよ。サアいらはい、いらはい。東西——」

股賑両国、頓馬座。歌舞伎くそ喰らえと打ち出したのが、いわゆる輕演劇、それも、

素登立婦

くノ一忍法変化談

——全通し

というヤツ。これが当たった。まず逆転ホームランとでもいえる。

小屋が大きい上に超満員とくると、江戸中の金を集めたようなバカ景氣。シュンとしていた役者もやりがいが出て、イヤにハッスルし始める。

○

「チャリン！」刀が折れた。

「しまった」小柄の青装束が、ひるむ隙にバタバタと縄をかけられてしまう。

「立ちませえ」男たちに引立てられて、縁を正面にして庭先に。

さる大名屋敷に忍び入ったくノ一、忍者はみな黒装束と定まったようだが、さにあらず保護色を利用した他の色もある……。

くノ一浪路、緘口して動かず「しからばやむえぬ」と形の如く拷問となる。

さる大名、座員の都合で、ごく少数の臣下を従えての立ち合い。

弓折れで乱打

「申せ申せ、何者に頼まれた」

「言えぬ言えぬ、殺せ殺せ」

「女忍者も強情になったわ。殺しは興醒めじや。責めるのじゃ。裸舞いをさせろ」

好色大名らしい。

背高き美男の侍、女の上衣を手にかける。

「忍者は覚悟が必要、あらゆる覚悟がな」

下座の三味、笛が哀調音から軽舞曲に変わるうち……浪路は覚悟の思い入れ、静々と衣服

(といっても青衣の上下) サラシ襦袢を、いとも悩ましげに、いとも魅惑的、いとも淫嬌的に舞うが如く、踊るが如く……。

「ええぞ、待ってました」

「早くぬげ」

「まさに千両」

などと客席。

最後の布ぎれは赤禪ではないか。

「ワアッ」と、これは客席の声。

「愛いヤッ、さすがくノ一。それでなければ活動できぬて」

雪の肌、ふっくらした胸の隆起、ぽってりした双臀。禪の赤が目にしみる。

舞う。何の舞いか、いかにも煽情的。

「それもとれ」

声あって、待っていたように女の手が禪に掛かる。看板に偽りはなし。

「それ赤い布がはずされる。それ、それ」

客の興奮も当然。

くノ一忍者、素裸すはだかになった、客席には後を見せたまま舞い続ける……。

「まだ白状せぬな、しからば」

となつて、これも見せ場のひとつ、素裸の

エビ責めだ。その形はみなご存知だから、ここには書かないが、とにかく苦しい。

「どうじゃ、まだ音をあげぬか」

弓折れが、地獄のような音をたてる。

芝居だからといっても、仮装でない。実際にエビの苦痛も、乱打も犇々と身にこたえる

のだ。仲々良心的。

それでは本人もたまらないと、とりこし苦

労はいらない。なぜなら此のくノ一になった

お浪という女役者は、被虐性なので裸責めを

もっとも喜ぶ。

美男の侍は、その亭主で看視かたがた舞台につきあっている。責めとお色気売りもののこの一座は、まる一年間、超満員を続けたという――。

× × ×

——毒婦お角——

日本橋は本町のさる呉服屋に、薫風くんふうをただよわせながら、ふらりと入って来た女。

桔梗色ききょういろの目のさめるような縞目の袷、銀鱗ぎんりんの半纏はんてんの小粋さ。

あれこれとひやかしていたが「では、また

ね」と、のれんをくぐり出た時。

「もしもし、お待ち下さいませ」

と手代の声。

万引き容疑……。

「もし、調べてなかったらどうする。おとし

まえ覚悟の上だろうね」

スル、スル着ているものが、投げ出され、

燃え立つ湯文字までとんでしまう。

「み、店先で、そ、そんな」

番頭、人だかりを気にする。

「さア、あるかないか、とっくり調べなよ」

上り框がまちにどっかとおぐらをかけた女の裸。

何という凄さ。雪肌到大蟹の刺青。腰から回った鉄の先が狙っているのは……。どうも、この蟹はエッチ蟹らしい。

ヒューッ……番頭たちが仰天した。

そのはずだ、女は今評判の「蟹のお角」という、傷害美人局強請詐欺と、奉行所のブラックリストに載っている毒婦。

一っぱい引っ掛かった番頭、むざむざ金をとられるのだが、

「お角様の素ッ裸をとっくり拝んでおきやがれッ」

とまじまじと見せつけられた女の肉体に、思わず恍惚としていた……。

着物を抱え、黒山の人垣をかき分け、とんで行くお角。

「蟹のお角にかかっちゃ災難だ」

悪いヤツだが、女の魅力。それも脂ののつた熟れた肌に触れたら、刺青の蟹が魔性のように男を挟み、引きずるか……。

それにお角の腰にまつわりついている真ッ赤な湯文字……いい感じだ、オレは虜になったらしいと、戯作者の徳平が呉服屋でのお角の強請を目のあたりに見たのが、因果だったらしい。

独り身の気軽さ、鵜の目鷹の目でお角を探

し廻った。

「蟹のお角を知らないか」

「さア知りませんな」

知っていても関りあいになつては……。

近頃の徳平、スランプか。何を書いても売れない。仕方ないから瓢々としている。女も抱き飽きた、変わった悦楽はないか、日々妄想を逞しくしていた時だったから……お角の住居をみつめて、ぞっとする欲喜に燃えた。

深川富岡八幡の裏になろうか。

「なんだよ、おまえは」

お角、茶碗酒をあおっていたが、不意の招かざる客に眼角をたてる。

「警戒する人間ではない。お角さんに会いたくて、随分探したよ」

「ヤイヤイ、馴れ馴れしいね。どこの馬の骨か、牛の骨か、猫の骨か、犬の骨か、猿の骨か、鳥の骨か……」

「たいそう骨を並べたな」

「まだあらい。鼠の骨か蛇の……」

「もう結構、お角さん」

○

てなわけで、徳平とお角は互いに敵意をもたぬことだけは諒解できた。

酒も飽きた。どんどろ行灯はの暗く、夜着

の色さえ眠たそう……。

「オツとどっこい、いけないよ。感違いしないで、もう帰ったら」

「分かつてる。ところで川柳の話しよう。

みなオレが作ったのだ。おまえさんは人から毒婦と言われているが、それでいいさ。オレはそうした女と、その女の湯文字、真ッ赤なヤツだよ、湯文字に身心がとろけそうだよ」

徳平の川柳とは……。

『緋の湯文字、今朝も毒婦の腰が巻き』

『緋の湯文字、見やがれと毒婦捲り上げ』

『毒婦肌、湯文字の赤が締めつける』

『赤湯文字、毒婦の殺しが待っている』

ここは「赤」といったほうが凄絶だ。

『老毒婦、湯文字の色を使い分け』

婆アになると白や浅黄を常用するが、男を引っかけろのに、時には緋色も締める。容色衰える毒婦の悲哀だ。

へえ……お角が呆れたよう。

「毒婦と湯文字をたいそう並べたね。だが、あたしゃ、まだ人殺しはしないよ」

「したら、こうして安閑としておれまい。人殺しをするような凄惨所作を見せてくれ。つまりオレは……」

帯をクルクル解いて、唐棧の袷スッポリぬぎ捨て六尺禪一本。年のわりに堅肥り、頑丈な肉体だ。

「どうするんだよ、裸になって」

「変な顔するな、毒婦、蟹のお角の拷問だ、責めだ。鬼のような気になって、やりたいことを存分やってくれ。頼む」

徳平、こうして、裸を荒々しく縛られイモ虫のように、コロコロ転がった。

湯文字一枚のお角の巨臂が、グッと徳平の顔に落ち、動かし、回す。

「ツツ……」

息が詰まりそう。

眼界は白と赤の交錯だ。

いい気分だ、と徳平思ったようだが、助平男とお角は嗤う……。

逆さエビ。両手足を背に曲げて、顔を巳れの足で挟むようにして縛る。いささか苦痛。

「大分苦しうだね。ホッホホ」

お角が湯文字の端で、ヒタヒタ徳平の鼻づらを叩く。

「じっくり湯文字の味を味わうんだね」

「ヒヒヒッ」

真っ青になりながら、薄笑いする。

今度は足を上げて、強たか蹴りつける。

「ヒヒヒッ」

夢のよう。徳平の肉塊、ヒクヒクふるえている。夢は夜開く――。

○

次の夜、また次の夜……。

お角に責められるために、朝昼と栄養食、昼風呂、永代を渡ったところで駕籠の返し、心浮き浮き深川通り……。

金もあるらしい。責め賃はたっぷりお角の懐へ。つまりパートタイマー……。

湯文字責めにかけられている時……この湯文字責めというのは、禪なしの素ッ裸で亀甲縛りの上、汚れきった、汗と臭気の湯文字に上半身、顔まで包まれ転がされること。

「へへッへッ」満悦の声か。

そのまま、別の湯文字一枚を下半身に巻いて包む。なんのことはない赤い大魚がうごめいているよう。お角も二枚の湯文字をこんなに汚すのも楽ではないが……だんだん責めというものがおもしろくなったよう。

……湯文字の中にいても、誰か人がふえたことは分かる徳平。

「心配おしでない、あたしの弟子だよ」

弟子とは何だろう。

「まだ肩揚げのとれない小娘、十三だよ」

毒婦の弟子か、何たること。

「大人の男の責めつてものを見たいとさ」ダメだ、他人は加えない約束だ。

「いいじゃないか、子供にや分らないよ」いいんや、早熟な子供だろう。しかし、ダメだと言っても、こう縛られていては動きもとれない。仕方ない……か。

「ご覧よ」

湯文字がめくられた、顔を出す。

あどけない女の子が、笑っている。あどけない顔だが、末恐ろしい。そのはずだ毒婦修業の第一歩を、もう踏み出しているよう。

ブルブル……あな恐ろしや。

元の素ッ裸にされた徳平、そのまま此の十三小娘の足蹴にされてしまう。

「フフフッ姐御さん、こいついいさまじやないの、ご覧よ……アライヤ――だ」

何を見たか、笑いきける。

「もっと、もっと責めつけてくれ。お角と一緒に……法悦にふるえている男一匹の素ッ裸を、まともに見れるおまえもいいタマだ。末はきつと大毒婦。ヒヒヒッ」

徳平よ、心中察してあまりあるぞえ。戯作者ハッスルして、書く、書くのだ、この生きた体験を。売れるぞえ――。――(終)――



懸賞創作

クラブ「エスメラルダ」の女たち(1)

毘に掛かった女

中 有 宜 也

カ ッ ト ・ 神 戸 狂 四 郎

青木恒三^{こうぞう}はロッカーから上衣を出しながらまだ書類の整理を続ける洋子に声をかけた。「野川君、僕は帰る。明日の午前中にやればいいから、遅くならないうちに帰り給え」云い残すと、立上って会釈する洋子に軽く手を振って、青木は長身の体にぴったりのスーツをひるがえして、大またに支店長室を出ていった。

洋子は青木の性格がまだわからなかった。しかし全体として冷たい堅さを感じていた。支店長さんって、かたい一方の人だわ。冗

談の一つぐらい、おっしゃってもよいのに。洋子は三カ月前までは、この大都商事の大阪支店の経理課に居た。十数人も居た経理課は、多忙であったが、それだけに活気があり楽しくもあった。

ところが、この四月の定期移動で、青木が本社の総務部から栄転してくると同時に、洋子は支店長秘書に抜擢された。ミス経理課とか、人によってはミス大阪支店とほめるほどの整った顔立ちと、成熟した容姿をもった洋子が支店長秘書に抜擢されたのは、誰しも当

然と思った。短大を出て二年、天性の美貌に磨きがかかり、それ以上にてきぱきと仕事をこなす洋子を追いかける独身社員も少なくなかった。

洋子はそれらの誘いを断わる強さを持っていたし、その上、断わられても悪い感じを与えない優しさを身につけていた。

青木恒三は社を出るとタクシーを拾った。一方通行で大幅に規制された大阪の街を、タクシーは南へ飛ばした。

「君、ここでいい。手近な電話ボックスにつけてくれ」

ダイヤルをまわしながら、恒三の眼は周囲に注意ぶかく注がれていた。

誰も尾行する者の居ないのを確かめて、ボックスを出た恒三は、ゆっくりと歩きながら流しのタクシーを探した。

つい一カ月ばかり前に小さなネオンを不二ビルにかかげた、クラブ『エスメラルダ』は会員制らしく、出入りする客は極めて少なかった。

小さな鍵穴だけがついた真黒なドアは、レザーばりの豪華なものであった。

不二ビルの通用口から裏階段を昇った恒三は、この黒いドアを横目に見ながら隣のバークイーンの前を押し開けた。

うす暗い店内は、低いムードミュージックが流れ、ホステスとささやきに似た会話を交わす酔客は、ほどよい入りであったが、どの客も、恒三が奥の小さなドアから姿を消したのに気づかなかった。

ページの袖をまとった、クイーンのマダム、清子が額に深い縦じわを寄せて、『クイーン』と『エスメラルダ』の間にある

個室で待っていた。

「マスター、いらっしやいませ。私、困りましたわ」

隠しドアから恒三が姿を現わすと、清子は立ち上り、丁寧にあいさつしながら訴えた。

「どうした？」

「マスターがせっかくお見えになるのに、あの子は今夜、休みましたのよ。頭が痛いからって電話して来ましたの」

「どうしても呼び出せないのか。キヨ、呼んでみる」

ダイヤルをまわす清子に背を向けた恒三はエスメラルダに面した扉につけられた、ドアサイドに目をあてた。魚眼レンズをとりつけたドアサイドは、エスメラルダの店内をひと目で見渡すことができる。

野川洋子は、心斎橋筋を経理課の山本規子とおしゃべりしながら歩いていた。

「……………」

「ところでね。規子、経理の方がいいわ」

「どうして？ 秘書になりたいって人が、よくうけるのに……。忙しいの？」

「ううん、ひまよ。今日だって書類の整理だけだったわ」

「そんならいいじゃない。うちなんか足がくたくたになるんよ。支店長さんが代ってから仕事が増えたわ」

「張り合いがあるじゃない。私なんかおしゃべりもできないのよ。支店長さんって、私用はなんにもおっしゃらないわ。そうそう、今迄の三カ月でたった一ぺんだけ云われたの。」

『野川君、ここではそんな短いスカートをはいてはいけない。膝が見えない様に』ですって。ゼンゼンよ。ムードがないわ」

「ふーん。きっと意識過剰だわよ、それは」

「何よ。意識過剰って」

「知らないの、洋子。支店長は独身よ」

「そうなの。知らなかったわ。ずっとなの」

「秘書のくせに知らないなんて、ふふふ。三年ほど前に奥さんが亡くなったんだって」

「だから刺激されたくないって云うの？」

「そうよ。きっとそうだわ」

「ほんとかしら……」

黙り込んだ洋子の手を引っぱって規子は、宝石店のウィンドウの前で立ち止まった。

その一 育子の巻

アパート涼風荘は、その名と逆に涼しくも

なければ風も通らなかった。

「中本さん、電話ですよ。デンワ！」

しゃがれた管理人、お峯ばあさんの声がひびく。

「はい。いま出ます」

ふとんに寝そべって、テレビを見ていた育子は、電話？ 誰だろう？ と、つかかけをひっかけて階段を降りかかった。

「イタッ」

体の節々が痛む。その痛みに、育子は昨夜のでき事を思い出して、顔をしかめた。

電話は、バー・クイーンのマダムからであった。

二こと三こと、やりとりがあった。育子はぱっと顔を赤らめた。

「それじゃ、今からすぐ行きますわ。ごめんなさい」

電話を切った育子は、お峯にえしゃくして階段を上った。

「おばさん、有難う」

駅まで歩き、電車に乗ると、体の節々の痛みもやわらぎ、快い痛みに変わったようである。育子は、背をしゃんと伸ばし、ハイヒールの踵を鳴らして歩いた。

クイーンのカウンターを通り抜けてロッカールームへ消えていく育子の姿を、恒三はクイーン側の扉のドアサイドから、じーっと観察していた。

奈良の田舎から出てきた育子は、高校卒業以来、三年間も小さな電機メーカーに勤めていた。つい十日ばかり前に清子が言葉巧みにクイーンに誘い込んだのである。

育子の体の線はむしろ堅いぐらいで、全く崩れていない。きゅっと切れ上ったヒップラインは、育子の背丈を高く見せる。娘らしく肉のついた体は、誰であっても気持をほのかに刺激されるようであった。

清子はドアサイドから離れる恒三に丁寧に声をかけた。

「マスター、連れて参りますから、あちらでお待ち下さいませ」

ドアへ向う清子の後姿を見ながら、今さらに恒三は年を感じた。美容に心掛け、適度の運動を続けるので、まだ三十そこそこに見える清子も、後から見ると、腰のまわりに一段と脂肪がつき、むっちりとした貪欲な女を感じさせる。

「さすがのキョも四十に近づくと。ふふふ」
口の中でつぶやいた恒三は、部屋の隅の大

きな洋服ダンスをあけた。洋服ダンスの中は半分だけ清子のスーツがかけられていたが残りの半分には、ゆったりした腰掛けが造りつけられていた。

清子に従って育子が個室に入ってきた。
「育子さん。まだ頭が痛い。まあお掛けなさい」

洋服ダンスの真向いのソファに掛けた育子を、さも案ずるように横ににじり寄った清子がやさしい口調で問いつめる。

「あなたから、頭が痛いって電話があったと聞いたものだから心配していたのよ」

「すみません、ママ。二日酔いみたいで」
「あら？ あなたは、昨夜は殆ど呑まなかったわよ。割にお酒に強いあなたなのに。だからさっき電話で訊いたのよ。アンネじゃないのって。そうしたら、そうじゃないって云うでしょ……」

育子はうつむいたまま、顔に血が上るのが感じられた。

恒三は洋服ダンスの中から、はめ込みになったマジックミラーを通して育子の姿を見つめた。丁寧な、優しい口調ながら、急所をつく清子の問いに、顔を赤らめ、身をよじる育

子の姿態の変化を見つめた。

清子の巧みな問いに、ついに育子は問われるままに、昨夜のでき事を話した。

閉店の一時間ばかり前に来た四十才ぐらいの客は、初めての客であった。別に育子の体に触れようともせず、ビール一本を三十分ばかりもかけて呑むと、無表情に店を出てしまった。育子はその三十分の間をもたせる会話に困ってしまった。それだけが印象に残っていた。閉店して、駅に急ぐ育子の横に音もなくスカイラインが停まると、助手席のドアが開き、その客の顔がのぞいた。

「吹田まで帰るんだが、駅まで送ろう。乗り給え」

この「駅まで」と云う言葉について誘われて行く先を告げた。

店では無口であったこの男の巧まない話に乗ってうっかり東淀川も過ぎて、車は吹田に入った。と、あるモーテルの前で急に停車して、男はハンドルの上に顔を伏せた。

「い、痛っ。うーん」

育子はあわてた。胃がいれんだとか。頼まれるままに、後の座席にあったボストンバッグを持って、育子はそのモーテルに部屋をと

った。ガレージに車を入れる手つきもあぶなかくさえた感じた。

タオルを水で濡らして、ベッドに横たわる男の胸や頭を冷やしながら、育子は相反する二つの感じを受けた。このまま客をほうっておいてアパートへ帰ろうか、或いは明朝までここで過ごそうか、と。

すーっと額の汗が引いて、胃がいれんの発作が治まったと云う男の様子にほっとした育子は

「ああ良かった。どうなるかと思ったわ」

「すまんすまん。でも君が介抱してくれなかったら、大変だったよ。お礼にこれでも取ってくれないか」

例のボストンバッグから、細長い包みを取り出して、男は育子に手渡した。

「こんなの。いいんです」

「いや、ほんの気持だけなんだ。きっと似合うよ」

開いた箱の中に、それほど大粒ではないがパールのネックレスがあった。

恐るおそれるそれを取って頸にあてる育子の眼が、ふと開かれたまま床に置かれたバッグに移り、思わずはっとした様子に、男は、

「これは、見ないでくれよ。僕のひそかな趣

味なんだ」

云いながらも、却って写真をテーブルの上に出した。

キャビネ判のヌード写真は、立派なできであった。女である育子が見ても美しいと思えるものであった。

三枚、五枚、何人ものヌードの美しい姿を見せながら、男は低い声でささやいた。

「美しい。この世の中で一番美しいのは女性の体なんだ。特に成熟した処女の体は。どうこの線など」

全く巧みであった。ついに育子は、ほめられるままに、彼のモデルになることを承知してしまった。

三十分ばかり、上半身だけ脱いだ育子はカメラの前でポーズをとった。

「有難う。一休みしよう」

ところで、ブラジャーをつけないでセーターをはおっただけでソファに掛けた育子の前に、新しい写真が展げられた。モデルの女性、みな緊縛された写真であった。両手は背に、高くロープで結ばれ、豊かな乳房がせかれ、中には縦に体を締め上げられたモデルもあった。

「まあーっ」

全身がほてった。男の低い声がまるで催眠術の様にささやく。

「これだよ、女性の美の極致は。この怖れを表現している眼だ。このくびれた肌だ。君だったらこんなモデルよりずっと美しい線が出るよ。いいね」

思わず育子は、うなずいていた。

右手が男のがっしりした手に捕えられ、背にねじ上げられた。同時に、バッグから引きずり出されたロープが巻きついた。左手にもロープがかかった時、育子ははっと催眠術から覚めたように、

「ひどいこと、しないでね。約束し……う」

叫び終わらないうちに口の中にハンカチが押し込まれストッキングが唇を割っていた。

それから一時間、育子の体はロープの中で呻き、締められ、転がされた。

三時頃に男の車でアパートまで送られたのだが、育子は興奮のあまり、朝がたまで寝つけなかった。睡眠不足と不自然な緊縛による疲労からの軽い頭痛を感じて、つい、バーテンに電話して休んだのであった。

清子は相変わらず動揺も現わさずに、やさしく問い続けた。

「大変だったわね。ところで体は大丈夫だったの」

「からだ？」

「そうよ、体よ。いたずらされなかったの」

「まあ！ そんな……。何もありませんでしたわ。だって、だって」

「だって、どうなの。どうだったの」

猿ぐつわをはめられた育子は、ダブルベッドに押し倒された。貞操の危機を感じた育子は、猿ぐつわの中で必死に叫んだ。

「許して。悪いことしないで」

高く低くひびく呻きを楽しむように、男は育子の腰からびったり肌に喰い込む、淡いブルーのパンティに指をかけた。

両手を背に縛られていては、抵抗はできなかった。足をばたつかせても、男の指がパンティを引き下げるのを助けるようなものであった。

全裸に剥かれた育子の体は、男の手によって自由に扱われるよりほかはなかった。

ところが、不安と怖れと、何か云い表わせない期待にふるえる育子の体を抱き起こした男は、バッグから別の長いロープを取出して二重に折ると、結び目を二つ作った。一番上

の輪を育子の首にかけて、他の端を脚の間に通した。背で長いロープが、しゅっ、しゅっとなぐられると、きゅーっと体が締めつけられた。どこにどうつながっているのか、長いロープは育子の豊かな乳房をくびるように、頸の下と臍の上に頂点のある菱形を作った。

床に立たされると、思わず首がうなだれてしまう。柔らかい、しみ一つない肌にロープが喰い込んでいる。とりわけ突き出すようにくびられた、乳房の間から走るロープが目に入る。

呻きにしかならないとわかっていても、堅く噛まれた猿ぐつわの中で、

「いやっ、ほどいて。こんなの」

叫ばずには居られなかった。

あまりの恥かしさに、全身を真赤に染めてしゃがみ込んで、育子は呻いた。しゃがみ込むと、縦のロープが、きゅーっと締まった。

「そうなの。良かったわね。そんなにひどい目にあっても、体だけは安全だったわけね」

育子にも清子の慰めは卒直に受取れた。「時に育子さん。あなた、本当にバージンだわね」

今まで、うなだれていた育子は、きつと顔

を上げた。

「ママ、本当ですわ。私、まだ……」

「そう。それなら、大事にするのよ」

軽くいなしながら、清子はなにげないふりをして、聞き出そうとする。

「ところで育子さん。そうしてロープで縛られたらどんな気持がするのかしら」

首をかしげた育子は、ぼつりぼつりと話し始めた。

「どんな気持って、怖い、怖い感じ。でも何だか、これで良いのだって云う感じもあるみたいだったわ」

清子は、この返事に微笑を浮かべた。

育子は客の名前も、素性も聞かなかった。

男は育子の住むアパートを知っている。

「育子さん、アパート、引越した方がいんじゃないかしら。私がちゃんとしてあげるわ。そうね、もう今日からどう。差し当たり私の部屋に来たら」

「ええ、でも……」

「じゃ、今夜はお店が終る迄、手伝ってちょうだい。帰りは一緒にね。でも秘密よ。誰にも云わないでね」

激みなく喋られると返す言葉がなかった。

育子が、清子の個室から出ていくと、洋服ダンスの中から恒三が出てきた。

「キヨ、さすがにお前のおめがねにかなうだけあって、あの子はいいな。きつとスターになれるだろう。早速とりかかれ」

「はい、マスター。さっき云いましたように今夜から私の部屋に引きとります」

「うん、それがいい。後くされのないように気をつけろ」

恒三はそう云い残すと、エメラルダに通ずる隠し扉に向かった。

「マスター、今夜はいらっしゃいますでしょうか」

「いや明後日にする。いいな」

深く頭を下げる清子をしり目に、恒三は隠し扉に消えた。

西宮の高級マンションの最上階の一室に、

清子は育子を招き入れた。4LDKのこのマンションに、清子は一人で住んでいた。

育子は目をみはった。話に聞いてはいたが高級マンションにふさわしい設備とそれに負

けないだけの調度品は育子の度胆を抜いた。ここでしばらく暮らすのだと云われると、

自然に浮き浮きとして、快いソファに深く

腰をおろし、体を揺すって、ソファの弾力を楽しんだ。

ここが便所、ここが風呂場、と案内され、

「あなたは当分の間、この部屋で寝るのよ。それから、私の部屋はここ。このドアをあけてはいけませんよ。プライベートルームなんだからね。ふふふ」

育子には、この最後の含み笑いが重大な意味を持つものと気がつかなかった。

育子に与えられた部屋は六畳ほどの広さの洋間であった。大きなソファベッドで寝るのだと気づいた。シーツや毛布は押入れにあると云われて、いそいそとベッド作りを終えて

その上に寝そべると、昨日までのあの安アパートがみじめに思い出される。隣の物音が手

にとるように聞こえ、縁のすり切れた畳の四畳半に較べると、何だか自分が王女様にでも

なったかのように思える。

トイレに立ったとき、バスルームで清子が洗っている物音を感じた。

ガウンをまとった清子が、育子の部屋のドアを開けて、風呂に入るようにすすめた。

「もう私は休むから、お風呂の水は落としておいてね。勝手に休んでちょうだいよ」

美しい浴槽に、伸び伸びと手足を伸ばせる

ことにも、この上ない幸福をさえ感じた。

二日後になって、清子は一足先に出て、買物をしてから店に出るから、と育子に鍵を渡した。

育子は遅い朝食の後かたづけを終え、テレビでも見ようと思ったが、ふと清子の部屋をのぞきたい気が起った。この家に来てから何度か聞かされた言葉が逆に好奇心を生んだのであった。

『育子さん、私の部屋にはどんなことがあっても入っては駄目よ。これはプライバシーに關することだからね』

勿論このマンションも他の建物と同じで、外へ通じるドアやベランダへのドアは精巧で頑丈な鍵がつけられてある。しかし、内部の各室のドアには鍵穴らしいものはつけられていなかった。

育子の好奇心は、あの冷たいほどの美しさをたたえたマダム、清子のプライベートな生活がうかがいたい慾望を起こさせた。

育子はおそろおそろ清子の部屋の扉のノブをそつとまわした。思った通り鍵らしいものはかかっていなかった。

清子の部屋は想像した以上に、豪華でなま

めかしかった。壁にまでどっしりしたカーテンが引かれ、大きなダブルベッド、ドレッシーな化粧ダンス、スツールでさえもちょっとしたソファの値段と同じ位に感じられた。化粧ダンスのぜいたくな化粧品の数々に目移る。香水ビンについて手を伸ばしたとき、ちやうど清子が出てから三十分であつたが、突然、電話のベルが響いた。

リビングルームにもどろうとして、育子は小走りにドアのノブをつかんだ。だがノブは全く動かなかつた。鍵がかかった状態になっている。育子は閉じ込められたのと同じになつてしまった。電話のベルはいつか鳴り止んでいた。

困ったわ、どうしたらいいのだろう。

窓の下には、遙か下の方に植え込みが、道路が、静かなたたずまいを見せている。

仕方がないわ。マダムが帰るまで、ここにい、謝るだけだわ。マダムならきっと軽く叱るぐらいのものでしょう。育子はその後に来る運命がどんなものであるかも知らず、たかをくくって、クッションのよくきいたベッドの上に寝そべった。

うとうとと眠り込んだ育子は、迫ってきた

尿意に目を覚ました。もうすっかり暮れてしまっている。手探りでスイッチを探しながら処理方法を考へている頃に、恒三の運転するスカイラインは第二阪神国道を走っていた。

助手席に清子の姿があつた。

「マスター。きつとあの娘は私の部屋でもじもじしていることでしょう。うまく罫に掛かつたというものですわ」

「うん、あれならエスメラルダのスターになれそうだ。あとはキヨの腕だな。僕が手を下すことはないだろう」

「これで、お店も三人の女の子が揃いますわね。あと二人入れて、五人にすれば充分でしょうね」

「いや、十人は要る。四人が日本人、三人は白人、それに混血を入れるのだな。南米か、フィリピンか」

清子は、恒三の構想が予想以上のスケールを持っていることに驚いた。

灯をつけた清子の部屋で、育子は困った。ここにはトイレはおろか、手洗いすらない。平常なら清子の帰宅は十二時を過ぎる。あと四時間も、とても保たない。と玄関でがちがちと鍵の開く音が聞こえた。こんなに早く。

でも清子が帰って来たのなら本当に幸運だ。ともかく謝って、トイレに走ろう。と甘えた考えで清子の入ってくるのを育子は待った。

『カチッ』

鍵が外れ、ドアが開いた。

きりっと眉をつり上げた険しい清子の顔を見るなり、育子は謝り、そして哀願した。

「ママ、ごめんなさい。ほんのちょっとだけと、あの一、お掃除しようと思ったんです。

すみません。お願い、おトイレに行かせて」

「やっぱりねえ。すみませんで済むと思ってるの。まあ、出すものは出してからお話を聞きましょうね」

清子は育子の手首をつかんでベッドの方へ引っぱった。

「そっちを向いて」

育子は、清子の怒った顔に較べて、やさしい口調に安心感をおぼえて、云われるままに清子に背を向けて立った。清子はベッドの下の隠し戸棚から手錠を取出すと、後から育子の右手首に、バシッと手錠を叩きつけた。右手首を背にねじ上げ、左手首もそれに重ねるようにねじ上げると、手錠をそれにも叩き込んだ。あっと云う間のできごとで、育子は虚をつかれた。

「ママ、こんなの、いやっ。はなして」

手に力を入れてもだえても、手錠はゆるむどころか、益々きつく締まってくる。

「育子さん、おトイレに行きたいんですよ。連れて行ってあげるわよ」

両手の自由が奪われただけで、ちゃんと歩けなかった。清子に背を押されると、育子はよろよろとよろめいた。トイレに向かって押されながら、許しを乞い、手錠を外してほしいと訴え続ける育子を、清子は脅した。

「うるさいわね。これ以上わめいたらお口も括ってしまうわよ」

黙りこんだものの育子はトイレの前でためらった。しかし、清子は、育子の短いスカートの下に手を差し込むと、ずるずるとパンティを膝まで降ろした。

「さあ、しなさい、育子さん。この次からは勝手にさせないからね。ふふふ。恥かしいことなんかないでしょ」

激しい音を聞きながら、清子はやさしい口調でいたぶった。

「まあ、随分たまっていたのね。こんなの、私のお部屋でお洩らしされたら、大変だったわね」

清子の部屋へ引き戻された育子に対する尋問が始まった。

あれほど入ってはいけなないと云ってあるにも拘わらず、部屋に入っただのは何を探るためだったのか。金目の物を盗るつもりだったのだらうなどと責められると、育子はそうではないと云う外はなかった。しかし育子はいわば現行犯である。窃盗未遂だと云われても仕方なかった。

「何も盗るつもりではなかった、ですって。それじゃ、育子さん。私の秘密を探るつもりだったんでしょう。これを見たでしょう」

手錠の入っていたベッドの下戸棚から、がさりとテーブルの上に出された革具に目を見はった。複雑に繋がった道具は何に使うのか見当もつかなかった。

膝までパンティをずり降ろされたまま、後手錠をかけられたまま、ソファアに掛けて問いつめられるのは惨めであった。

「ママ、ゆるして。そんな、私にも見せんなわ。ただ、ちょっとお部屋が見たかっただけ、それだけです」

「部屋の何が見たかったのよ。私の秘密ですよ。誰に頼まれたのよ。ふふ、云えないのねじゃないわ、もう云わなくても」

清子は予定の行動のようにさっと立上るとテーブルの上の、短い広幅のベルトのような物を手にして育子に近づいた。育子は腰を浮かして叫んだ。髪の毛を、わしづかみにされる。

「ママ、ゆるして。もう決して、あう、むむむ、う……」

大きく開いた口の中に、革具につけられた丸い革の玉が押し込まれ、ベルトが唇を覆った。頭の後で、尾錠がかけられると、その革具は完全な猿ぐつわになった。

革の玉は育子の舌を押さえつけ、むっとする匂いを口の中、咽喉の奥まで充満させた。育子はなめし革の渋い味を、口一杯に味わいながら、呻きをあげた。

清子は呻きもだえる育子の、後手にはめられた手錠をつかんでぐっと引き上げた。育子の体は、くの字に前に屈んで腰が浮いた。

「こちらへいらっしゃい」

膝上まで下げられたパンティで歩きにくい体も、両手を背にしぼり上げられていると、いやでも清子の意志に導かれてしまう。

壁ぎわまで育子を引っばった清子は、手錠を繋ぐステンレスの環に紐を通して、壁のフックにかけた。育子はカーテンを押すように

体の右側を壁に着け、上体を直角に折って吊るされてしまった。

清子は、育子を吊るしたまま、部屋を出ていった。

育子は、この時になってやっと悲しさと口惜しさがこみあげて、涙を浮かべた。その涙にさそわれて、どっと胸がこみ上げ、涙を溢れさせた。猿ぐつわが噛まされていなければきっと、

「わう、わう……」

と大声で泣き叫んだにちがいない。

バスルームでシャワーを使う音が、マダム清子の若やいだ声と共に聞こえた。清子の高い澄んだ声と共に、低い男らしい声が混っている。話の内容は聞こえない。

次第にだるくなる頸や肩、腰や膝を揺すりながら

「男の声だわ。ママのパトロンかしら。こんな姿を見られるのは嫌だ。恥かしい」

育子は一そう激しく身を悶えた。しかし手錠はもちろん、その環を吊った紐も少しも弛まなかった。

ゆったりしたガウンをまわって、清子が現われた。化粧を落とした清子の湯上りの肌は艶やかに、ほんのりと桜色に輝いている。

育子は声にならないとわかっていながら、猿ぐつわの中で、大声で許しを乞わずにおれなかった。

「育子さん。あなたは後でびったりした衣裳をつけてもらうわよ。きっと、ふふ」

清子はガウンの裾を曳きずりながら、くの字になって吊られている育子に近づいた。スカートのホックが外され、ジッパーが降ろされる。短いスカートは、足もとで輪になって床に落ちる。

清子は、育子の呻きを楽しむかのように、大きな裁ち鋏をとりだして、ブラウスを裁ち裂いた。スリップとブラジャーの肩紐が、パチリと切られ、スリップが縦に裂かれると、体の横を滑り落ちた。

ブラジャーは背中中のゴムバンドを切られると、豊かな乳房にはじき飛ばされたように、体から離れた。

一枚ずつ着るものを剥がれるたびに、新しい肌が外気に触れて、冷気を感じた。

育子の身にまとうものが、冷たい手錠と、黒革の猿ぐつわだけになったとき、全身にぶつぶつと鳥肌が立ったのは、決して涼しさだけではなかった。

「さて、これからよ」



読者ギャラリー

「塩水の叫び」

豪城二

育子が呻きながら悶えるた
びに、たわわな乳房がゆさゆ
さと揺れた。ほんのりと紅を
さしたような乳暈の真中に小
さな乳首があった。

清子は、がっしりした革の
首輪を、育子の頸にかけた。
尾錠をかけると、ここにもロ
ープを通した。

黒いヘヤバンドが、解かれ
た。育子の長い髪は、ばさり
と顔の前に垂れた。そのヘヤ
バンドが、こんどは目覆しに
なってしまった。

育子は視界をうばわれて、
一層、不安を感じた。清子の
ガウンの衣ずれの音だけが清
子の動きを感じさせるもので
あるだけに、不安が大きかつ
た。

清子は、育子の後手錠を吊
っていた紐をほどいた。へた
へたと厚いじゅうたんの上に
坐り込む育子の首輪に繋いだ
ロープを引っばって云った。

「さあ、お立ちなさい。がんばるのは勝手だ
けど、首が締まってしまおうよ」

育子は首輪を引き上げられるので、仕方な
く立ち上った。ロープがフックに掛けられた
らしく少し膝をゆるめると咽喉をせかれた。

どれだけの時間であつたらうか、育子は清
子の柔らかい掌を肌を感じた。どこを清子の
手が襲うか視力を奪われているだけに、不安
も大きく、体全体がびくっとけいれんした。

清子の手がたわたと揺れる乳房にかかった
とき、育子は手錠をかけられた後手をしっか
り握りしめて、その強烈な刺激に耐えた。ふ
ーっとなるような快感ともいえる不思議な感
覚であつた。

清子は、育子の耳に口をよせ、ささやくよ
うに云った。

「育子さん。もっと揉んでほしいのね。吸っ
てあげようかしら」

清子の手は腹の肉づきをしらべるかのよう
だった。なでまわす掌が腰にかかったとき、
育子は一きわ高いうめきをあげた。首を左右
に振りながら、腰をよじって拒もうとする育
子の動きは、清子のささやいた言葉で、ぴた
りと止まった。

「育子さん。なまめかしいわよ。もっと大き

く揺すってごらんなさい」

同時に、ヘヤバンドで覆われた眼から、つとと涙がこぼれ、猿ぐつわの革ベルトにつたわった。

「育子さん。泣いたりしても駄目だよ。私は泣き落としには乗らないたちなのよ」

清子は、ハンカチで涙の跡をていねいに拭った。

優しい言葉つきながら清子の苛責の手は敏速に動いた。育子の右足首に別のロープを巻きつけると、上の方の別のフックにかけて、全身の重みで引っぱった。育子は呻きながら抵抗した。しかしながら首輪をせい一ぱい高く吊るされているので、足には力が入らない後の壁によりかかった形で、左足一本で立ちすくんでしまった。

「おとといは、まだバージンですって云ってたわね。本当にそうなのかしら、ね」

育子は無理な姿勢を強制されても拒むことができなかった。それどころか、さっきのように腰を振ることさえ難しかった。呻きをあげながら、涙を流し続けた。苦痛は益々激しさを増した。

「む、む、うう、うーん」

やがて軽い呻きと共に育子の体は硬直し、

やがて、ぐったりと全身の力が抜けた。

清子は急いで立ち上ると、育子の脇に片手を差し入れて、首輪のロープを解いた。

厚いじゅうたんの上に、失神してうつ伏せに横たわった育子の体は、一面にじっとりと脂汗がにじみ出ていた。

清子が育子の若い美しい体をなぶるのをソファでじっと見ている男があった。もちろん青木恒三である。

彼は無言で、育子の悶える姿と、猿ぐつわに殺された呻き声を楽しみながら、コニャックのグラスを傾けていた。香りの高いコニャックの匂いも、清子の香水の香りにまぎれている。

育子は男の存在に気づかなかった。たとえ気づいたとしても、どうすることもできなかったであろうが。

やがて意識をとり戻したが、依然として後手錠のまま床に伸びた育子の体をタオルで拭いながら、清子は云った。

「育子さん。やっぱりあなたはバージンだったわね。でも見直してよ。すごいわね」

恒三が、にんまりと笑う顔は育子にはわからなかった。

「さあ、お立ちなさい」

腋の下に手を差し入れた清子は、ぐっと育子の体を引き起こした。

「ふらついているわね。まあ、無理もないけどね。ほほほ」

育子は、またあの羞かしい責めが始まるのか、とふるえた。しかし案に相違して清子は後手錠を押しながら云った。

「あとは、明日からのお楽しみにするわよ。お部屋へ帰りなさい」

育子は部屋に押し込まれた。

「ゆっくりお休みなさいね」

ソファベッドに押し倒すと、清子は短いロープで、育子の首輪を、ベッドの脚の一本に結びつけた。

「そうそう、粗相をされると嫌だから、ちゃんと身づくろいをしておいてもらわうわよ。さあ、仰向けにおなりなさい」

育子は、拒もうとする気持と、従がわねばという恐れに、しばしためらった。

もう一度うながされると、不自由な体をよじって、仰向けに横たわった。背中、左腕が不自然によじれ、ううーっ、と呻きをあげる痛みを生んだ。

育子が、羞恥に耐えている姿を見ながら、

清子は目隠しになっていた育子の黒いヘヤバンドを外した。

まぶしさにまたたく、涙を一ぱい浮かべた育子の目を見ながら清子はうながした。

「あのね、あなたが安心して休めるように、身づくろいをしてあげるのよ」

腰を上げると云われても、育子は拒否の呻きをあげながら腰をよじるだけであった。

「ふーん。嫌なのね。でもね、私は思ったことはさせるわよ」

清子はガウンの裾をひるがえすと、ソファベッドの上に上って、育子の胸の上に、後向きにまたがった。きゃしゃに見える清子の体ではあったが、むっちりとした腰、尻が育子の胸を圧した。息苦しさで悶えて、ばたばたとあかく両足が清子に捕えられた。両足首を交叉させて、紐がしっかりと巻きつけられた。その紐が首輪に結ばれると、尻を斜上方に突き立てた姿で固定されてしまう。

清子の手にあるものは白木綿の真新しいおむつを重ねたおむつカバーであった。裏一面にアメ色の生ゴムを貼った花柄のナイロン製のおむつカバーなのだ。

準備を終えると、清子は両足を首輪に引きつけた紐をほどいた。育子の足はばたりとベ

ッドの上に落ちた。しかし、両足首が十文字に括られているので膝を合わせることはできなかった。

清子は、育子の腰に、嚴重におむつをあてると、おむつカバーのホックを腰の両脇で止めた。

「どう？ 育子さん、可愛らしいと思わないこと？ これなら、何度お洩らししても、ソファベッドや、お布団を汚される心配はないわ。落着いて何度でもどうぞ。ふふふ」

云いながら、足の紐を外した。

清子は毛布と布団をかけながら

「じゃあ育子さん。ゆっくり、お寝みなさいね。でも思い出して、寝つけないのではないかしらね。明日からは楽しいわよ。ほほほ」

電灯が消されると暗黒の中で育子は、この二時間ばかりの短い間に大きく変わって自分の身を巻き込んだ運命に泣いた。猿ぐつわに殺されて、呻きになってしまふ泣声をあげて泣き続けた。

やさしいママだと思っていた清子の無情ないたぶりと、苦痛の中に感じ取った不思議な快感じみた感覚が、奇妙に心の底に灼きつけられていた。冷たい手錠の一つだけで両手の

自由を奪われ、それが単に両手だけではなくよろよろとしか歩けないほどに、足腰の自由をも奪ってしまうものであることを思い知らされた。

それは余りにもみじめであった。嫌であった。その反面、どこか気持の片隅に、もっときつく、厳しく縛られ、あれ以上にいじめられたいと云う秘かな願望もあった。

寝返りをうつものも不自由な体で、育子はベッドの上をのたうちまわった。いつか夜は深々と更けていった。

「キヨ、あれは使い物になるぞ。あの表情は素質十分だと云えるな」

恒三はソファで、くつろいで、清子を抱きながら話しかけた。

「はい、マスター。お気に入って頂けて、嬉しく思いますわ」

清子はガウンの下には、何もまといなかった。恒三の手が肌を這うのを、拒むでもなく拒みながら微笑で答えた。

「ところでキヨ。あの娘、育子と云ったな。誰にまかせるのだ。お前が、掛かりきりになるわけにはいくまい。そうだ、マツにやらせろ。きつとうまく仕込むだろう」

「はい、マスター。明日の朝から早速にとりかからせますわ。あ、やめ、やめて下さい。」

おねがい……」

「ふふふ。上品ぶるのはよせ」

恒三の手がテーブルの上の革具に伸びた。

清子のガウンがむしり取られた。夜の秘図が始まるのだろう。

目隠しは取り去られたが、舌を押さえる革の玉のついた厳しい猿ぐつわに声を殺され、後手錠で自由を奪われ、首輪をベッドにつな

がれた育子は、暗黒の中で転々ともだえた。呻きに変わる泣声をあげて泣き喚いた。ほんの少しの過失が、こんなにも大きく運命を変えてしまったのだ。

しかし、まだ育子は気づいてはいないが、平凡な事務員として、メーカーに勤めていたのを、清子の巧みな言葉で『クイーン』に引き抜かれたときから、こうなる運命の歯車が回転しはじめていたのである。

昂奮しきった神経は、育子を寝つかせなかったが、暗黒の中で泣くだけ泣いてしまうとけだるい疲労がおそってきた。

「ふっふっふ。お目覚めのようだね」

耳なれない声と共に毛布がぱつと剥ぎとられた。

厚いカーテンの向こうには、強い日ざしがさしている。

育子の目の前に、育子よりひとまわり大柄な女が立っていた。細く吊り上った目、あぐらをかいたような不恰好な鼻、一文字にむすばれた大きな口とうすい唇、顔を見ると、パーマをかけた髪がなければ男に見ちがえたことだろう。耳が異様につぶれているのが不気味である。

だが、黒いセーターの胸のふくらみと、これも真黒の短いスカートの下の尻のでっぱり腰のふくらみは、さすがに女を思わせる。

女は手にした短いしなやかな黒い笞を軽く育子の肩にあてながら云った。

「いつまでも、フテ寝をしていないで、起きるんだよ。今日は適性検査や、衣裳合わせで忙しいんだから。早く」

ピチッ。胸にきびしい笞を受けて、育子は返事の呻きをあげて、起き直ろうとしたが、首輪のロープに引き戻されて重心を失い、ソファベッドから転がり落ちた。右肩から床に落ち、いやと云うほど背中を打ったとき、張りつめていた忍耐力が弛んだ。

「うーむ、むむむ」

羞恥に頬を染めながら、育子はじっとしていた。しっかりとあてられたおむつが、すぐに液体を吸いとった。股の間から、腰のまわりまで、じっとりと濡れてくる。その温い感触に、育子は思わず身震いした。

恥かしさに眼を伏せる育子を、笞が再びおそった。脚を縮めると、おむつがごわごわと音を立てるような感じがした。

女は表情を全く変えないで、機械的に育子の首輪のロープをほどいて、云った。

「お立ち。早く立つんだよ」

後手錠だけで、こんなに自由を奪われるとは、想像もできないであろう。やっこのことで、両足を投げ出した形で坐り、足を折って立ち上った。おむつのじっとりとした感触が腰を包むので、居たたまれない。

女の笞のさばきは、いかにも巧みで強かった。育子の乳房の上の方と右の腿には、赤い細い笞あとがくっきりと浮かび出ている。

「お前は育子だね。なかなか可愛い顔をしているわね。肉づきもいいよ。この足の長いところなどは、すばらしいわね。これから、お店へ出るまで、私がみっちり仕込んでやる。清子姐さんには、ちゃんとしつけてから渡す

のだから」

女は育子の後にまわった。不安におののく育子は思わず体の向きをかえた。と同時に、

「ピチッ」

「む、むうう」

脇腹が、かっとな火をつけられたように、ほてる。

「動くんじゃない。それとも、この笞の味がもう一度、知りたいかい」

女の声より早く笞が胸にはじける。

「むう。ううう」

育子は女が視野から去るのがこわかった。

しかし、自由を奪われた身では、女の云うなりになるほかはなかった。

育子の後にまわった女は、育子の右手首にロープを巻きつけてしっかりと縛った。この次はロープで縛るつもりらしい。右手首の逆をとったままで、女はポケットを探った。

手錠の鍵穴に鍵が差し込まれた。

「ビーン」

やっと長い間、育子を後手にしぼり上げた手錠が外された。しかし自由はまだ回復しなかった。女のごつごつした手が、育子の右腕を背に高く、逆にとった。手首をねじ曲げられた激痛に、呻きながら背を反らせる育子に

女はささやいた。

「さあ、左手も背中曲げるんだよ。早くしな」

左手は、ねじ上げられた右手ほどに上らなかったが、背に曲げた手首にロープがからみつく。

「育子、素直になったね。そんなに素直になれば、きっと可愛がってやれるわ。ふふ」
いつの間に用意されたのか、長いロープがとぐろを巻いている。後手に縛りあげたロープが胸にまわる。豊かな乳房の間でひとひねりされたロープが、乳房をはさみ込むように肌に喰い込んだ。

育子は、昨日からずっと続いた後手錠に較べると、あまりに厳しい緊縛に驚き、これからどのように扱われるのか、不安を感じた。先日の男の手よりも力強いこの女の、巧みな縄さばきに、何かしら、あきらめと、されるままにすべてをまかせきろうと思う気持ちが、心の隅に湧いてくるようであった。

両手を肩甲骨の間までねじ上げられ、豊かな乳房を突出するようにして緊縛された育子の体を、じーっと上から下までなめまわすように眺めた女は、引導をわたすように云った。
「ふーん。なるほどお前は良い体をしている

わ。ママの云うとおりよ。今迄はなに様であったか知らないけど、今日からは私の云う通りにするんだよ。私に逆らったりできないように、これから少し鍛えてやるわ。わかったね？ ええ、なぜ黙っているのさ。猿ぐつわがあつたって、首ぐらい振れるだろう。返事はちゃんとするのッ」

育子はいかに云われるままにうなずいてしまった。後手に締め上げられたロープを持たれると、どんなに逆らおうとしても、ただ悶えになるだけで、この大女の思うままにされてしまう。

女は育子を引き倒すと、両足首をあぐらをかくように交叉させて綱をまきつけた。二本の縄尻をねじり合わせて両肩に振り分ける。後にまわると、頸筋をハイヒールで踏みつけた。それでも腿を合わせようと、努力する育子の体は腰から二つに折れてしまう。自身の太腿で突き出された豊かな乳房を押し潰しながら、

「ぐ、ぐう」

呻きを、あげ続けた。

女は足首から肩にまわった縄尻を、後手につないだ。

「さあ、少し汗をかいて貰おうじゃない」

がっくりと首を垂れた育子の太腿の裏がつっぱり痛みはじめる。腹と胸を圧迫され、息苦しくなってくる。すぐに全身に汗がにじみはじめた。苦しみがはじまると、さきほどおむつの中に済ませたはずなのに、再び耐えようのない要求が襲いかかってくるのだった。何時間もの海老責めにされているように育子には感じられたが、正味は十五分ばかりであった。

「お前の体は、だいぶ柔らかいね。これが海老責めって云うんだ。いい気分だろう？ 眼がうっとりしてきたじゃないか」

女は注意深く育子の様子を見ていた。続いて、黒いハイヒールをあげると、育子の顎の下に差し込んで蹴上げた。育子は丸く緊縛された形のまま仰向けにひっくり返され、尻を高く上にあげ、やがて安定を失って横倒しになってしまった。体の下じきになった左手がぐきりと鳴った。

花柄のおむつカバーの中でびっしょりと濡れたおむつが音をたて、腰のまわりが冷たくなってくる。

育子の眼がぼんやりとし、吐く息がせわしくなったところに、女は育子の肌に喰いこんだロープをほどいた。

育子は、ついさきほどまで、あれほど、ほどいてほしいと希ったロープが解かれ、手足に自由がもどっても、じゅうたんの上に横になって大きく肩で息をつくだけであった。

柔らかくむっちり肉のついた手首に、胸に、腕に、そして足首に、深くロープの跡を赤くつけたまま、泣き続けた。昨夜から喘まされている革の猿ぐつわの中で、呻きに変わる泣声をあげながら……。

この革の猿ぐつわは、後頭部の尾錠を外せばよいことを忘れてしまっていた。

女は泣き続ける育子にのしかかるように、育子をうつ向けにして再び両手を背にねじ上げて、手首にロープをかけた。もうあらがう気持もなくなり、じゅうたんにぺたりと頬をつけてつつ伏した育子の体を冷たい表情の女は全く自由に扱った。手首を縛ったロープは胸にまわった。さきほどは、ロープが乳房の上下をきっちり締めただのに、今度は乳房の中ほどをくびった。胸を二巻して後手に帰ったロープの端が首輪を通された。

育子は体が引き締まるような感じに酔ったような気持であった。しかしその感じも、女が更に両足首にロープをかけ、両足を後に折って、縄尻を首輪からのロープにぎゅーっと

引きしぼって結びつけたときから、次第に苦しみに変わっていった。

両足は揃えて縛られたのに、いつの間にか膝が割れてくる。意識して頭をのけぞらさなければ、首が締まってくるようだ。

「さっきの海老のお返しだよ。今度は腹の皮を延ばすんだ。おやおや、首が苦しいかい。これじゃ長持ちしないね」

育子の咽喉がひーひーと云いはじめると、女はうすい唇に冷たい笑いを浮かべながら首輪を外したが、その首輪で後手と、両足を吊り上げるのだからたまらない。今度は手と足がじかに結ばれた。たしかに息苦しさは去り頭を下に垂れることはできた。しかし腹の皮はぴんとつっぱっている。女は手足をつなぐロープを持ち上げた。女らしくもなく筋ばった体だけに、この醜い大女は力があつた。育子は腹だけが床につき、弓なりに反りかえらされてあえいだ。呻きが又しても出てくる。

海老責め、逆海老責め、体ががくがくになるまで責められた育子は、あらがう気力が全くなくなってしまうた。

後手に縛ったロープはそのまま、足首を解かれた育子は床の上に立つように命じられたが、腰がふらつき、膝が震えた。

「ふふふ。ふらついてるじゃない。この涙は嬉し涙みたいだね。……さて、尋問にかかうか。正直に答えられるね。ほほほ」

最後の笑いはかん高く、とってつけたような感じである。

後頭部の尾錠が外され、長い間、噛まされていた黒いなめし革の猿ぐつわが除かれた。口一杯にほおばっていた革の玉が引き出されても、顎に力が入らなかった。舌も動かさなような気分であった。猿ぐつわを除けられて、あらためて革の匂いが口と鼻一杯に拡がってきた。

床に崩れおちて、横坐りになった育子の顎が、女のハイヒールで持ち上げられ、やっと顎に力が戻ってきた育子は、女の黒いスカート、セーターを見上げながら、弱々しい声で許しを乞うた。

「許して、お願い。わ、わたし、なにも」

“ピチッ” 女の答は声より早く、育子の横坐りの腿にはじけ、赤い答跡を作った。

「お黙り。なんにもしなかったって？ 図々しいじゃない。どうして姐さんの部屋に忍び込んだのよ。何を盗る気だったの、え。それとも、何かさぐりたかったの。正直に云ったらどうなのさ」

女は今まで育子を責め続けた時の無口さとうって変わって、たたみかけるように問いつめる。髪の毛をわし掴みにされて頭をかくがく揺すられると、答える声もとぎれ勝ちになる。女の答が、肌になんどもはじけたが育子は、何も盗むつもりはなかった、さぐるつもりもなかった。ほんのちよっと、部屋を見たかったただけだとしか答えられない。

「それじゃ、それはそれとして、悪いことをしたのは認めるわね。どうなの、育子」

「は、はい。悪いことをしました。ゆ、許して下さい」

答をあてられ身悶えするたびに、おむつかバーの内側が、ぐじゅ、ぐじゅと音がする。

「それじゃ、話はきまったわ。悪いことをしたのなら、その償いをして貰わなきゃ。お前だって気がすまないだろ」

「は、はい。償いは、つぐないは、し、しますわ。だ、だから、お願い。ゆ、許して」

「そう、それで話はきまったわ。さ、それじゃ始めてもらいましょ」

冷たい表情を崩さずに、女は育子の後にまわった。

意外、女は後手の厳しい緊縛をほどこした。ロープを解かれると、無意識に両手で胸を抱

き、二の腕の肌に喰い入ったロープの跡を、いとおしむようになでさすった。

「お前、おむつが、ぐちょぐちょだわね。風呂に入って洗いなさい」

育子は女の声に、ぱっと顔を赧らめると、ぎゅーっと自分の胸を抱いた。もう一度うながされると、ゆっくりと立ち上った。腰のまわりの冷たさが、余計に意識された。

熱い湯の中で手足をノビノビと伸ばすと体中の疲れがすーっとほぐれて消える感じであった。昨夜からのことがまるで悪夢のようにしか思えなかった。今朝、あの冷酷な女にさきほどもで、縛られ、あえぎ、もだえ、答うたれ、恥かしめられたことさえも、遠い昔のようにすら思われた。

湯の中で、こんなに自由に自分の体が洗えるのも、これが最後であるなどとは夢にも思いはしなかった。

「もう洗ったね。早く上んなさい」

女の声は冷たい調子であった。

「はあい」

育子は昨夜、清子に下着もセーターも、ずたずたに切り裂かれてしまったことを思い出した。何か着る物はあるのだろうか。少し不

安を感じた。

バスタオルを高く胸に巻いて、スリッパをつっかけて、リビングルームにおずおずと入った。香ばしい匂いを立てて、ベーコンエッグが作られている。コーヒーの匂いが空腹にこたえる。女が用意したらしい。

「あの一。何か着る物は……」

「お前、やっと上ったのかい。朝食にしようよ。あれを着な」

あごで示された壁のフックに、ハンガーに吊られた中国服チャイニーズがあった。大きなぼたんの花を肩と腰にあしらったサテンの美しい服であった。

「あの……。下着はどれを」

「下着ねえ。要るんなら、ソファアの上にあらよ。早く着なよ」

ソファアの上には、黒いなめし革の変なものがあった。

「これが？」

女はいつのまにか育子の傍に、冷たい表情で立っていた。手に短い笞を持っている。

「それがパンティだよ。便利なデザインだからね。早く着ないか。いやならいいんだよ。なんにも着せないから」

「は、はい」

バスタオルが、ぱつとむしり取られた。

「笞がほしいの。早く」

「びゅっ」笞の空気を切る音におびえて、育子は、なめし革を手にとった。

三角形を二つ、頂点でつないだようなもので、四隅に長い革紐がついていた。着け方がわからずに、おどおどする育子の手から女はなめし革をひったくると、

「あっちを向いて。この端を持って……」

育子は云われるままに、なめし革の紐のつけ根を持って腰にあてた。両足の間へ後ろから手を差し込んで、女は大きい方の三角の革を引き出して尻にあてた。腰の両側で、革紐を結びつけると、それは、ビキニパンティになった。

「ま、まあ。こんな……」

「うるさいわね。つべこべ云わずに服を着たらどうなの。それとも又おむつカバーかい」

育子は仕方なく壁にかかったチャイニーズをとった。手を通して、衿を打ち合わせ、ホックを止めた。着丈の長い、このドレスはブルの華やかなものであった。しかし両脇は裾からノースリーブの脇の下まで、太い絹紐でかがってあるだけで、肌がすけて見える。両肩も同じように絹紐でかがってある。むし

ろ奇抜なアクセサリーになっている。

「さ、食事だよ。と、その前にちょっとしておくことがあるからね」

革のビキニパンティの両側の紐は十分長いのに固結びにされ、余分が長く垂れていたのも、わざとそうしてあったことが育子にもわかった。

女は、ドレスの脇の飾り紐の間から、その余分の革紐を引き出して、育子の右手を、右の腰の脇に結びつけたのである。続いて女の手が左手にかかる、育子はあらがった。

「ゆ、許し、許して下さい。はなして」

「許しても、放してもないよ。これからさっき約束した償いが始まるんだから。さ、こっちに来て、食事しなさい。それとも口に猿ぐつわをかけようか。どっちにする」

よろよろと、女に背を押されながら、テーブルに向かった。笞と言葉で脅され、育子は涙しながら、口だけでベーコンエッグやトーストに喰いついた。空腹が満たされた。

みじめな食事が終わると、女は育子の化粧をはじめた。

「これでよし」

両手を腰のそばに結びつけられて、自由を

奪われた育子の体は、女の思うままになるより外はない。

女は強い粘着テープを取り出すと育子の口にガーゼを押込んでから、唇にぺたりとはりつけた。その上にガーゼのマスクをかけさせた。風邪でもひいているのかと見えるが、育子の声はもう言葉にならなかった。呻きをおげる育子の体に、女はレインコートをはおらせた。

「丁度雨もようだからいいわ。さあ来るの」
身づくろいをした女は、切れ上った細い目に惨忍な笑みを浮かべ、育子の肩を抱いて、マンションの階段を降り始めた。
安定のとりにくい育子は何度も女に寄りか

かった。駐車場の白いマークⅡに歩み寄る二人の女の様子は、遠くから見ると仲のよい友達同志に見えた。

女は育子を助手席に乗せると、両足首を細い紐で縛った。

「さあ、これをかけて、ドライブよ」
濃いサングラスがかけられた。ガラスの内側に塗料が塗られた大きなサングラスは、育子の視界を奪った。

大都商事の支店長室。野川洋子は、やばったいフレヤーのロングスカートをはいて書類を整理していた。青木恒三は、書類に目を通して

洋子は考えた。手の動きが止んだ。

「支店長さんって意識過剰だわ。一度思いきって、超ミニをはいて来たら、どんな顔をされるだろう。怒られて、又経理に帰された方がいいわ。その方が楽しいんだから」

恒三の机の上の外線直通電話が鳴った。

「はい、青木です。おう、そうか」

途中から言葉つきが変わった。

清子からの電話であった。

「あの育子は、今朝からマツが世話をして、今、エスメラルダに着きました」

「ふむ。それで？」

「あの子のアパートは、ミチが行って引き払ってまいりました。御安心下さいませ」

電話を聞き、うなずきながら、恒三の眼は洋子の横顔に、胸に、腰に、じっと注がれていた。

「よし、それではうまくやってくれ」

恒三の返事がぞんざいであるのに、ふと不審を感じた洋子の眼が恒三の眼と合った。

悪いものでも見たように、サッと眼をそらし、顔を伏せた洋子の端正な横顔に、じっと見入る恒三の眼の奥に青い火が燃えているのに、洋子は全く気づかなかった。

(未完)

伝言板

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるよう願います。
尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替(切手代用は一割増)にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留(封筒は郵便局で売っています)にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分(前篇写真と絵画特集)第二回分(続篇小説絵画特集)第三回分(前篇続篇収録小説特集)のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載していないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。
○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。

カ
メ
ラ
・
ル
ポ

沖縄美人の責め記録



塚^{つか}

本^{もと}

鉄^{てつ}

二^{どう}

よくこれだけ降るものだと思うくらい、降り続いた雨が、夜になってから一層激しさを加えてきた六月末の月曜日、プロレスの放送をテレビで見ているところへ、奇クの編集部から電話が掛かってきた。

神戸在住の女性の読者から編集部へ通信が

く人はいるんじゃないの、と一応断ったのだが、モデルになるとは、はっきり書いていないので、一つ君の腕で口説き落としてくれなにか、連絡先として電話番号も書いてあるからという性急な話だった。

写真撮影に成功すれば八月末に発行の十月

来たのだが、内容を読むとどうやらモデルになって貰えそうなので一通逢ってみてくれないかという依頼であった。私が行かなくなつて、読者の中にでもルポ記事ぐらい書

号に是非載せたいから直ぐ行動を開始してくれ。但し相手はモデルになることを承諾しているわけではないので、若し不成功に終わっても編集部は一切関知しないから、そのつもりで——という虫のよい話で強引に押しつけられてしまった。

七月一日、月は変わっても梅雨空は一向に晴れそうにもない。起きぬけに冷水摩擦をやっていると「速達!」といった一通の封書が届けられた。開いてみると奇ク編集部から転送されてきた女性読者からの通信である。

☆

前略御免下さいませ

奇クは時折り楽しく読ませていただいております。特に関谷富佐子さんの『いけにえになった富佐子』には大変感激いたしました。

私も、この富佐子さんのように責められたら、いや、富佐子さんだったら、いいなあとき想っております。もし、私のような者にも、この富佐子さんのように責めて下さる方がおられましたら、ぜひお会いしたいと思ひます。

私は平凡な二十五才になる沖縄出身の一女性です。三宮の或るお店に勤めておりますがもしご連絡下さるのでした、お店の方ですと他人の目がありますので寝起きしております寮の方へお願いします。電話番号は神戸(〇七八)二×一七×三×番です。午前中でしたら殆ど居ります。

住所は書いておきますが、なるべくTELをご利用下さればよろしいんですけど、よろしくお願い致します。

六月二十五日

編集部さま

座間 明子

☆

この手紙の文章を読んだ範囲では確かにモデルになるというようなことはいささかも書

いていない。しかし、

七月号に載った関谷さんの文章を読んでいるということは大分脈がありそうである。引き受けた以上、何とかしなくてはいけない。

朝食後、私は手紙に書かれてある電話番号を頼りに早速ダイヤルを回していた。

電話はすぐつながった。

「ハイハイ、新田荘ですけど——」

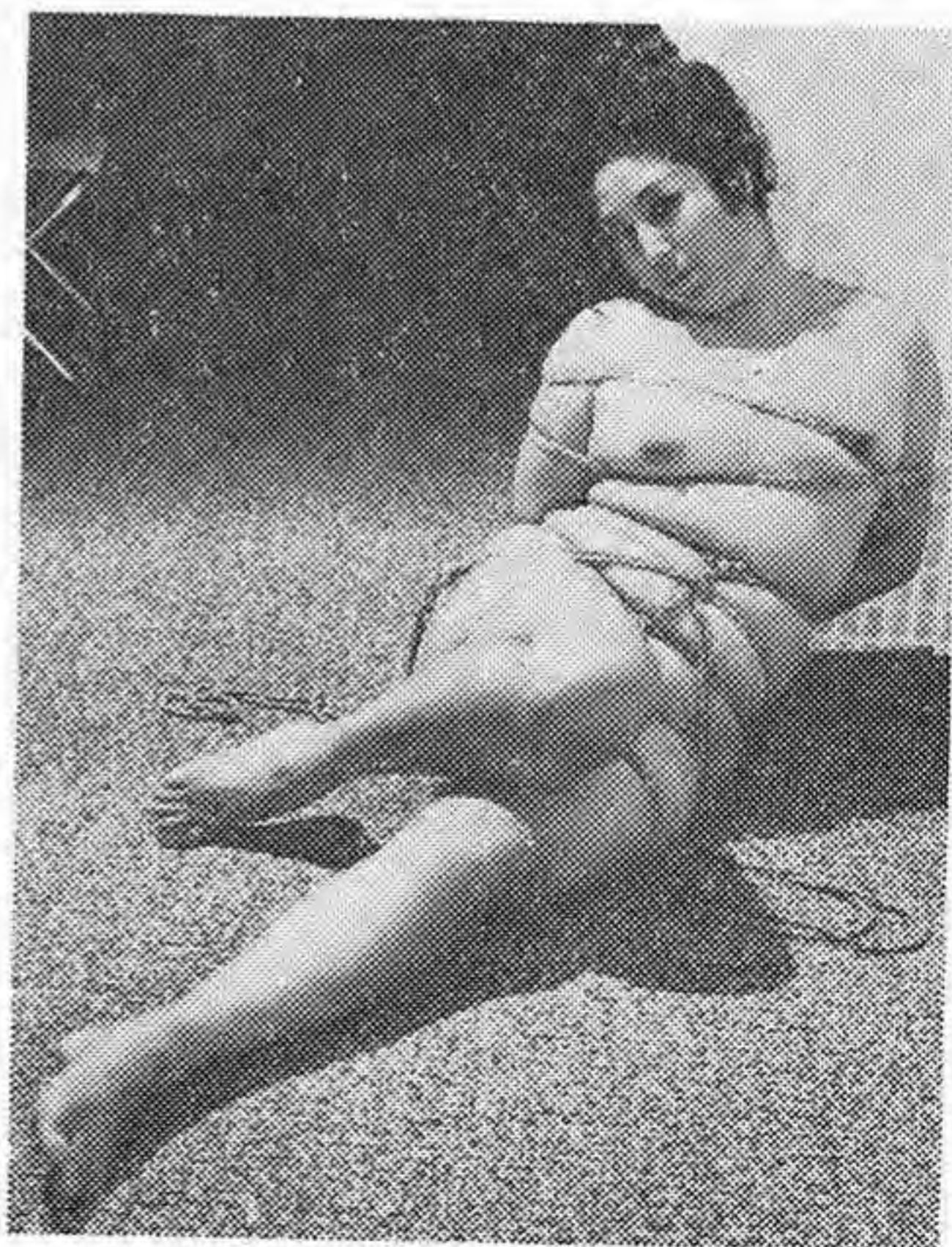
中年の女性の声がした。

「塚本という者ですが、すみませんが座間さんをお願いします」

「座間さんですね、少々お待ち下さい」
暫くして若やいだ女の声がした。

「モシモシ、モシモシ、座間ですが——」

「ああ、座間さんですか、私は奇クの編集部から聞いてお電話しました塚本鉄三という者ですが、お手紙を読ませて貰いまして、一度是非お逢いしたいと思ひまして——」



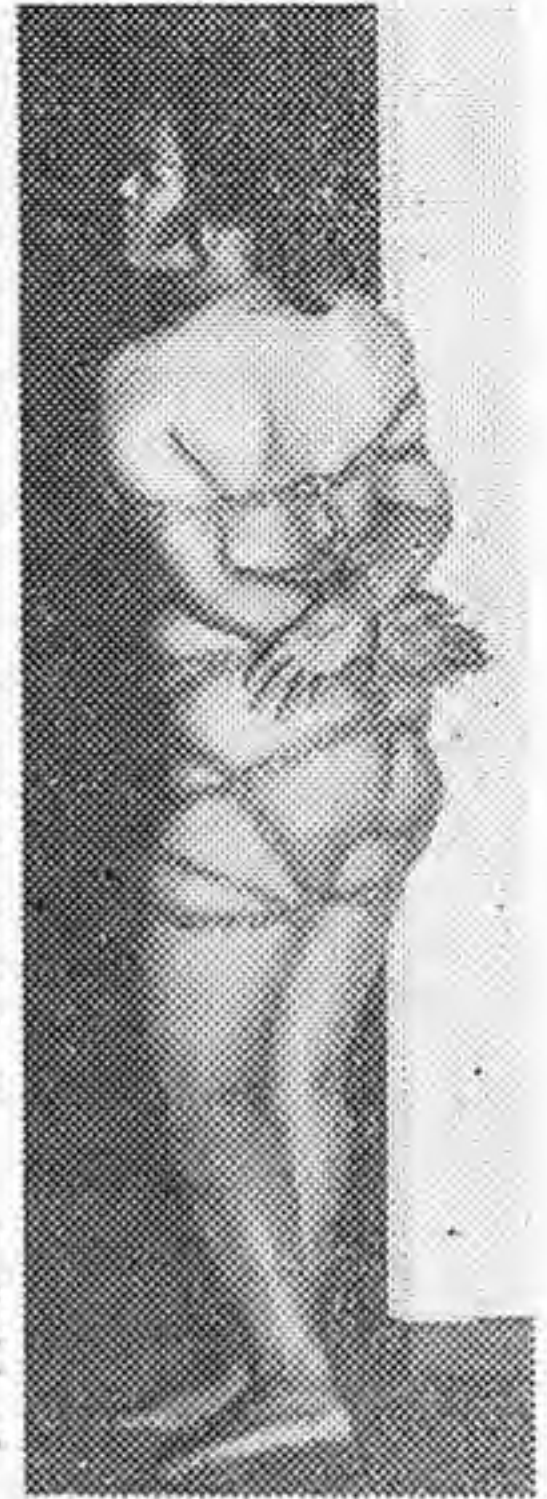
「えッ？ 塚本さん。あの雑誌によく書いておられる塚本さんですか」

「ええ、そうなんです。関谷富佐子さんの記事はよく書きましたので御存知だと思いますが、一度お逢い出来ますか？」

やはり雑誌に記事を書いていると、こういう時は、名前が知れているので楽である。

「ハイ、私はあさって公休がとれますので、その時でよかったです——」

「ああ結構ですよ。神戸は私は余り土地カン



がないので、よくわかりませんが、待ち合わせ場所は何処にしましょうかね」

「それでしたら、午後三時にポートタワーの展望台に来て下さいます？ 海に面した望遠鏡の前で待っていますから——」

「何か目印でも——」

「私、着物を着て行きますから、すぐ判ると思いますわ」

「そうですか、それでは明後日の三日、午後三時ですね。では間違いなく——」

「ハイ、きっと参ります。その節はよろしく願います。さようなら」

彼女との電話は事務的に終わった。私は編集部へ電話して、三日に逢うことになった旨、簡単に報告しておいた。

七月三日——

梅雨空は一向に晴れる気配もなく、朝から雨であった。時々小降りになったり或は止む時もあったが、厚い雲は切れることなく陽を

望むのは無理であった。

そののみか大型の台風2号が今朝、宮古島の南方海上を北上三日夜には沖縄に接近し沖縄を暴風雨圏に巻き込む公算が大となり、四日朝には奄美大島にまで接近し、九州南部にも影響が出そうだという朝のラジオニュースである。

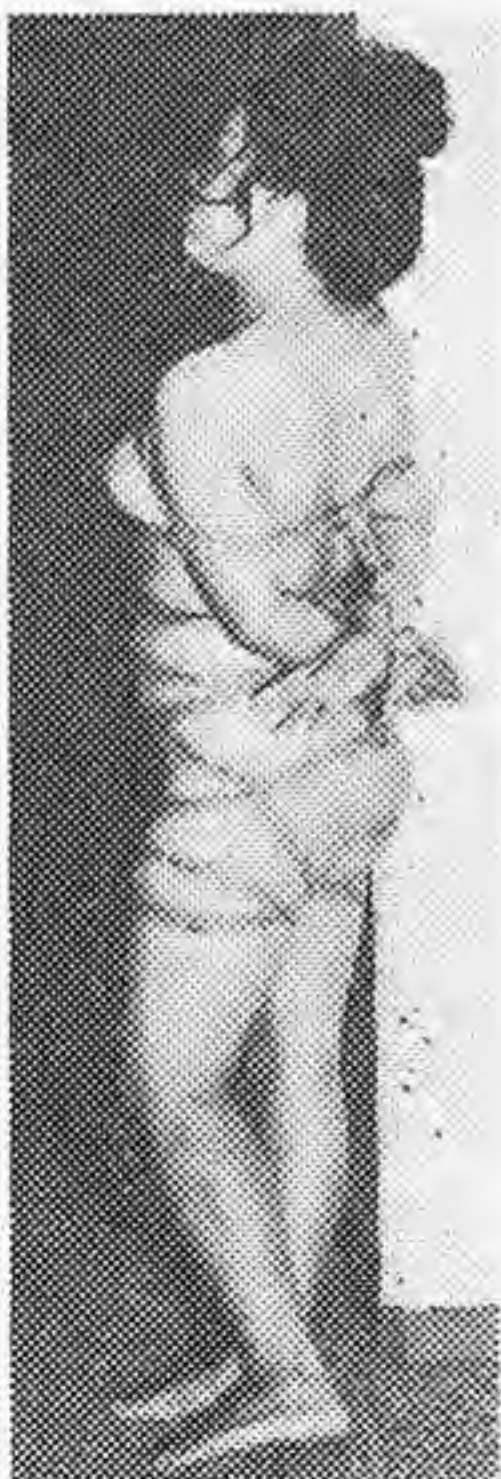
昼食後、カメラ、三脚をはじめ撮影用具一式の外に若干の責め道具を積み込んだ私は、少し早い目だった家が家を出た。途中でネオパンスを20本買い込み、第二阪神国道を西へ進んだ。ウィークディだが流石に尼崎へ出るあたりまでは車が多い。

西宮を過ぎて、やっと本来のスピードを出すことが出来た。三宮の手前で左折、海岸通りへ出て間もなくポートタワー下へ着いた。

駐車場へ車を入れて外へ出る。

霧のような小雨が降っているが傘をさす程でもないで、そのまま小走りにタワーの下へ入る。ずらりと売店が並んでいるが人影はなく閑散としている。

腕時計を見ると二時五十分である。



二百円を出して入場券を買い、二階にあるエレベーターの扉の前で鈕を押して待つ。私一人だけで他に客はない。手摺りにもたれて待っているとエレベーターの扉が開いた。

箱の中にはエレベーター・ガール一人だけで降りる客はいない。中へ入ると娘が無言で手をさし出すので切符を渡す。半券を引きちぎってポートタワーの写真を刷り込んだ方の紙片を再び無言で返して寄す。

無表情でハンドルを握っている娘の横顔を眺めているうち、エレベーターは展望台に着いた。箱を飛び出したが人影はない。

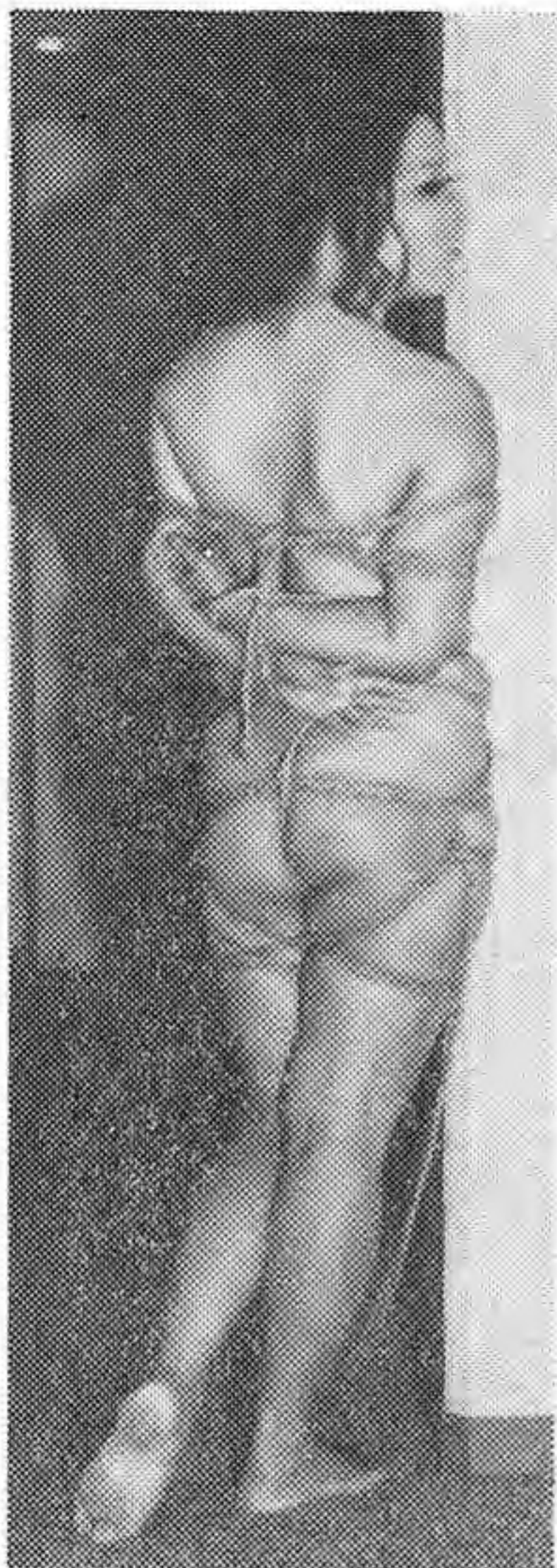
右回りに回る。一組のアベックと会う。

海側の望遠鏡の脇に明るい海と空を背景にして、シルエットとなって和服のよく似合う一人の女性がいた。

「座間さん！」

私は思わずそう叫んで近寄っていた。

「ハイッ」



彼女ははっきり返事すると、にっこり微笑んで両手を差し伸べるような仕草をして望遠鏡の脇から離れた。

「お待ちせしましたか？」

私は無意識に腕時計を見た。

三時ジャスト——。

「いいえ、私もほんの今、来たところなんですのよ」

二人は並んで歩きだした。

東西南北の四方向に望遠鏡が据えつけられてあって、その上には横長の大型な俯瞰写真が貼りつけられてある。

雨は止んでいた。

曇り空だが見透しは案外よい。

「ああ、あれが市役所ですね」

私は上に貼ってある写真と実際の風景とを照らし合わせて彼女に語りかけた。

と、背後から売店のおばさんが顔を出して

「いや、あれは貿易センタービルですよ。昨年十一月に出来たんで、その写真には写っていませんがね」

と親切に教えてくれた。見物人は、私たち二人だけ。売店のおばさんも退屈しきっているのかも知れない。

右を眺めると赤く塗った新しい橋が薄日に映えて美しく見える。

「あれが摩耶大橋という有料の橋ですね」

又も私は知ったかぶりをして説明したのだが、これも失敗だった。一旦売場へ引き返した売店のおばさんが再びせせり出てきた。

「いや、あの橋は一般の人は通れませんよ。今埋立てている人工島とつながり工事用の橋で有料の橋ではありません」

一日中、この風景を眺めている売店のおばさんにしたら、私のデタラメの説明が頭にきたのかもしれない。

参った、参った。

知ったかぶりをやめて、港内を見た。

目の下にあるメリケン波止場にも三、四千人から二万トン級の客船、貨物船が横づけになっているし、港内にも数多く碇泊している。

「一つ、二つ、三つ——」

私は子供のように指さしながら数えていった。全部で十七隻である。

「きれいですわね」

海面が曇り空からさす薄日に映えて、きらきらと宝石のように輝いている。

「私、初めて神戸へ来たとき、最初にこのポートタワーに案内してもらいましたので、大変印象に残っておりますの。それで、是非もう一度来てみたいと思っていますのです」

彼女はしみじみと港の風景を楽しむかのよう、目の下を眺めている。

この風景が大いに気に入ってくれて結構な

のだが、私には彼女を裸にして縛り上げ、そして写真に撮るという大役がある。

それなのに、そういった話題には今のところ少しも入っていないのだ。

私は不安感に襲われてきた。

このまま徒らに時間が経過して、「今日は楽しかったワ、ハイ、さようなら」ということになってしまふのではないだろうか。

ふと見ると「回転喫茶室」という案内看板が出ている。どうやらこの下らしい。

「一寸、お茶でも飲みましょうか」

私は先に立って鉄製の階段を降りた。

十五分で一回転の速度で座席が回転しているのである。周りがガラス張りだから、居ながらにして、風景の変化が見れるのだ。

「私は宇治金を注文しますが、貴女は何になさいますか」

「私はミックスジュースを頂きますわ」

客は私が上の展望台ですれ違ったアベック一組がいるだけで他にはいない。

注文品は座席が一回転もしないうちに届けられた。私は氷にスプーンを押し込みながら彼女に問いかけた。

「奇譚クラブは長い間、お読みですか」

「ええ、毎月というわけではないんですが、

三年ぐらい前から時折り——」

「どんな個所を特に、お読みになりましたか？」

彼女がそれに答えようとしたとき、丁度バーテンや二人のウェイトレスのいるカウンターの前に座席が回ってきた。他に客がいないので三人は手持無沙汰に私達の方をじっと眺めている。

余りにもオープンで雰囲気がよくない。下を見ると自動車がまるで玩具のように動いている。倉庫からトラックに荷物を積んでいる人達が蟻の動くようだ。

とてもここで初対面の女性に助平人間の本領を発揮することは出来ない。

時間は刻々と経ってゆく。第一、彼女が果たして何時までつき合ってくれるのか、それすら確かめていない。

私は焦りだしてきた。

しかし、急いではいけない、無理をするなよ、という自制心も湧いてくる。

「出ましようか」

氷を半分程食べたところで席を立った。

エレベーターで降りて表へ出る。

止んでいたと思ったのに、細い雨が音もな

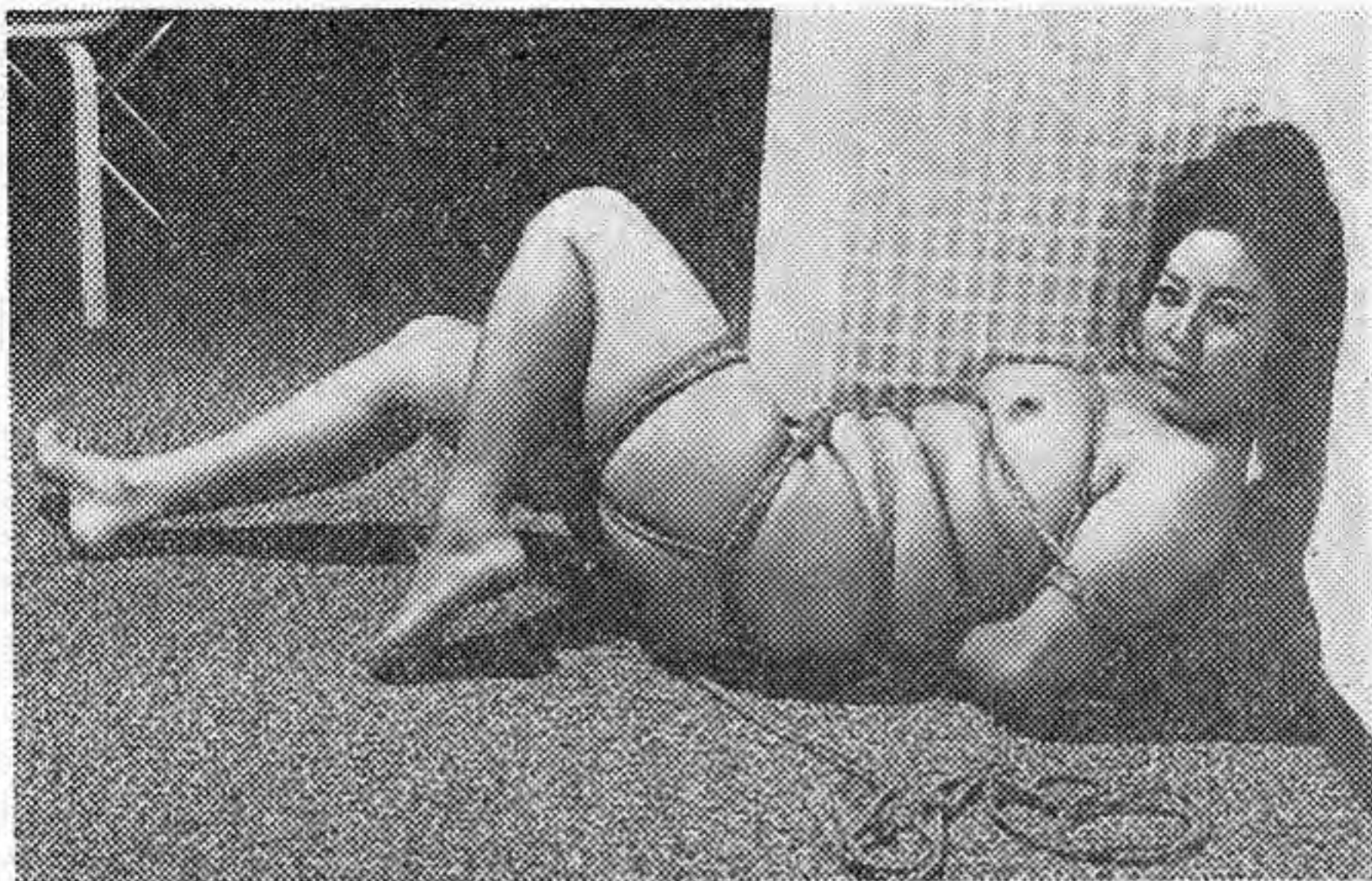


舗道を濡らしていた。

私は携帯用の傘をひろげて彼女に渡す。埠頭には加藤汽船の船が着いたばかりで乗客が列をなして降りてくるところだった。

船旅がしてみたい——。

ふっと、そんな心が兆したが、今はそれどころではない、なんとか彼女を口説いて快くモ



デルになって貰わなくてはならないのだ。
和服のよく似合う彼女。
下ぶくれの整った愛嬌のある顔。
着物の下にかくされたグラマーな肢体は、
一体どんなんだろうか。

沖縄の女性といえば、色が黒くて毛深いという印象を抱いていたが――。

しかし、彼女は違っていた。色も白い。もっとも小麦色という健康色に近い感じもするのだが、これは素裸にしてみないことには、今の段階では、どうとも言えない。

はつきりとした目鼻立ち、これは沖縄美人の特徴といってよいだろう。

私は彼女が大変、気に入った。

ファイトが湧いてきたような気持だ。

ぼんやりと船を眺めている彼女を促して車へ案内する。

国道二号線を海岸沿いに西へ走る。

車は一種の密室である。二人きりの密室で私はなんとか話題を下品な方へ持ってゆきたいと努力した。彼女は私の撮影した女性のことについて控え目な質問をした。

やがて須磨の水族館を通過。次に左に海を眺めて須磨浦公園を通過。ようやく黄昏が迫ってくる。車の列が時折り停滞するが、二人で話し合っているので余り気にならない。

舞子の浜で車を駐める。

車外に出て堤防に腰をおろす。

風が涼しくて快い。台風2号の影響か、海から吹きつける風は、かなり強い。

幸い雨が止んでいた。ので堤防に腰を下ろして暮れなずむ海を眺める。対岸の淡路島が手の届く近さで黒々と横たわっている。

「ああ、あれ、さっきの船だわ」

彼女の指さす彼方に白い船体の客船が白波を立てながら進んでいるのが見える。

やはり梅雨空である。急にバラバラと大粒の雨がこぼれてきたので、あわてて車へ駆け戻る。

二号線を東へ逆行する。

陽は暮れた。ライト点灯。

雨足は一入激しくなる。

ハンドルを大きく左へ切ってラジオ関西隣の『レストイン・スマ』に立ち寄る。有料道路のゲートのような個所でチケットを貰って駐車場へ車を入れる。

風が強く、横なぐりの雨が吹きつける中を駆歩でレストランに走り込む。

私はポータタワーで一度用を足したが、それでも尿意を催したので彼女を誘ってトイレへ向かう。出来て間がないのか照明も明るく掃除も行き届いて綺麗である。

一階は中華料理のバイキング。だが、ここは縛りを口説くのはどうも不向きなようである。エスカレーターで二階へ行く。バーで

は若い女がウインクして笑顔を見せたが、今日のところは用がないので、隣の野鳥料理『はや』という看板が出ている方へ入る。

深々としたソファに焼肉台のテーブル、程よく冷房がきいていて落着いた感じの雰囲気、女性が客あしらいも極めて好感が持てる。

ビール二本とヒレ肉の焼肉、サラダを注文する。コップについだビールを一気に飲み干す飲みっぷりを見てみると、彼女は中々いけそうである。私は勿論車を運転しなければいけないのでビールは自制する。冷たいのをぐっとやりたいのは山々だが、唇をコップに当たただけにして焼肉をほおぼる。

雨の音も風の音も、ここまでは聞こえてこない。他に客はいないし中年の女性も手際よく注文の品を運んでしまうと、気をきかして姿を消してしまうので、どうやら落ち着いて助平な話も出来るムードである。

私は立て続けに彼女にビールをすすめた。ほんのりと目元を赤めて、彼女はようやく饒舌になってきたようである。

ここまでに私が彼女から聞き訊したところによると、彼女は三宮神社近くの琉球料理の店に勤めていて、そこから歩いて十五分ばか

りの寮、といっても、文化住宅式のアパートの一室に住んでいるのだそうだ。

午後二時から三時、これが店へ彼女が出勤する時刻である。

店が閉まるのは十一時であるが晩くまでねばる客があったり、

後片付けなどで寮へ帰って寝るのは一時になったり、時には二時になったりする。

沖縄から日本へ渡航してきたのは十九才の時、店員、事務員、運送店の荷造りなどをやった末、同郷の人の店で働くようになってやっと落ち着いたし収入の方も女が一人で生活するのに充分で、貯金も大分出来たという話であった。

ビール一本を空けた頃を見はからって、私は本題に話を持っていった。

「いつ頃から『縛り』に関心を持たれたのですか？」



「たしか中学の二年の時ですわ。家の近くに二つ年上の美少年があって好きだったんですが、彼が私の大切な所へ悪戯したり、さわったりするような空想をするとき、いつも私は後手に縛られているんです」

「最初から後手に縛られていて、それから何かされるという——」

「そうですね。だから私は他の同性の方も当然そんな空想しているんだと思っていましたわ。その頃は——」

「それで、縛られたという経験はあるんですか、今までに？」

「全然ありません。すべて空想だけですわ。大分齡がいつてから年上の同性から大切な個所をさわることを教えられましたけど、そのときでも、男性から縛られたり、拘束されているということを空想しないことには燃え上がらないんですの。それに……」

「それに、なんですか？」

「いやー、こんなこと言うの、恥かしいワ」

「恥かしがらずに言ってみなさいよ」

私は更にビールを注いだ。

「あの、一人で楽しむときのことなんですけど、いつも身近かにいる好きな男性のことを思い浮かべているのです。その男性が私を縛っているということを考えて……。でも、終ったあとで、とても佗びしくてたまらない思いがするのです」

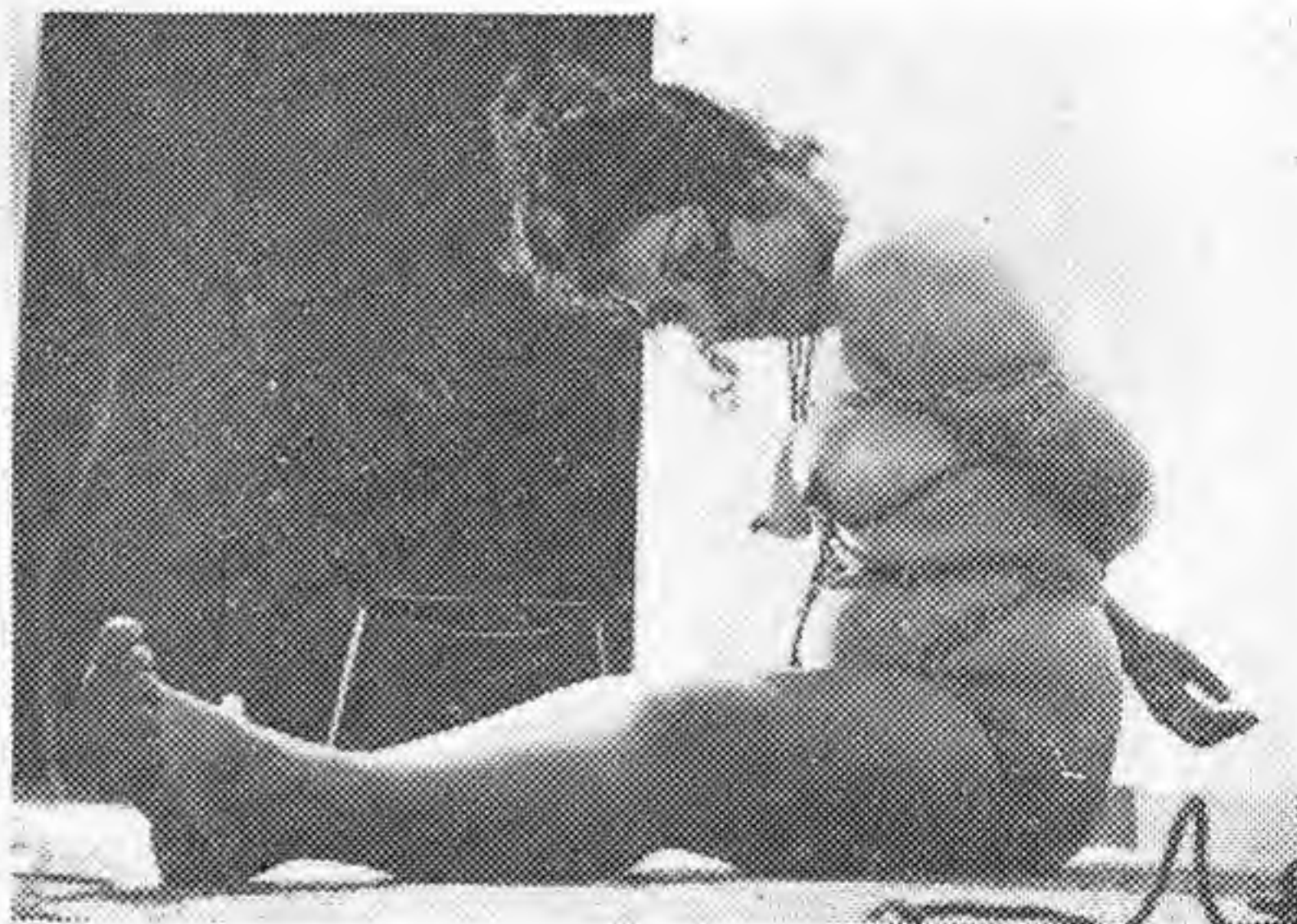
「ふふん、そうですか。勿体ないものだな。」

いや、こちらの話です。では一つ、私に縛らせてくれないか。その上で素晴らしい写真を撮ってみたいんですが――」

「塚本さんに？ 私か？」

「ええ、そうですよ」

「まあ、恥かしい。私、身体に自信がありませんわ。そんな写真に撮ってもらうなんて」「いやいや、そんなに謙遜なさらなくて」



貴女だったら、きっとよい写真が撮れると思います。決心して下さいよ」

「決心だなんて……。私、そんな話を聞いただけで、こんなに胸がドキドキして――」

彼女は私の手を引き寄せて自分の左の胸へ押し当てた。勿論着物の上からなので鼓動なんか判るわけがないのだが、彼女がそのよう

に打ち解けてきたので私は脈ありと見た。

ここで一呼吸入れるため、ビール一本を追加注文する。

例のあいそのよい中年女性、にこやかにおしぼりの交換をすまして、ビールを持ってくる。

ビールを注ぐと一杯目は一息に飲んで二杯目は口をつけただけで下へ置く。

目元がほんのりと潤んで艶っぽい。

「縛られるって、裸になるんでしょう？」

「勿論だよ、素っ裸になった方が、ずっと魅力的なものね」

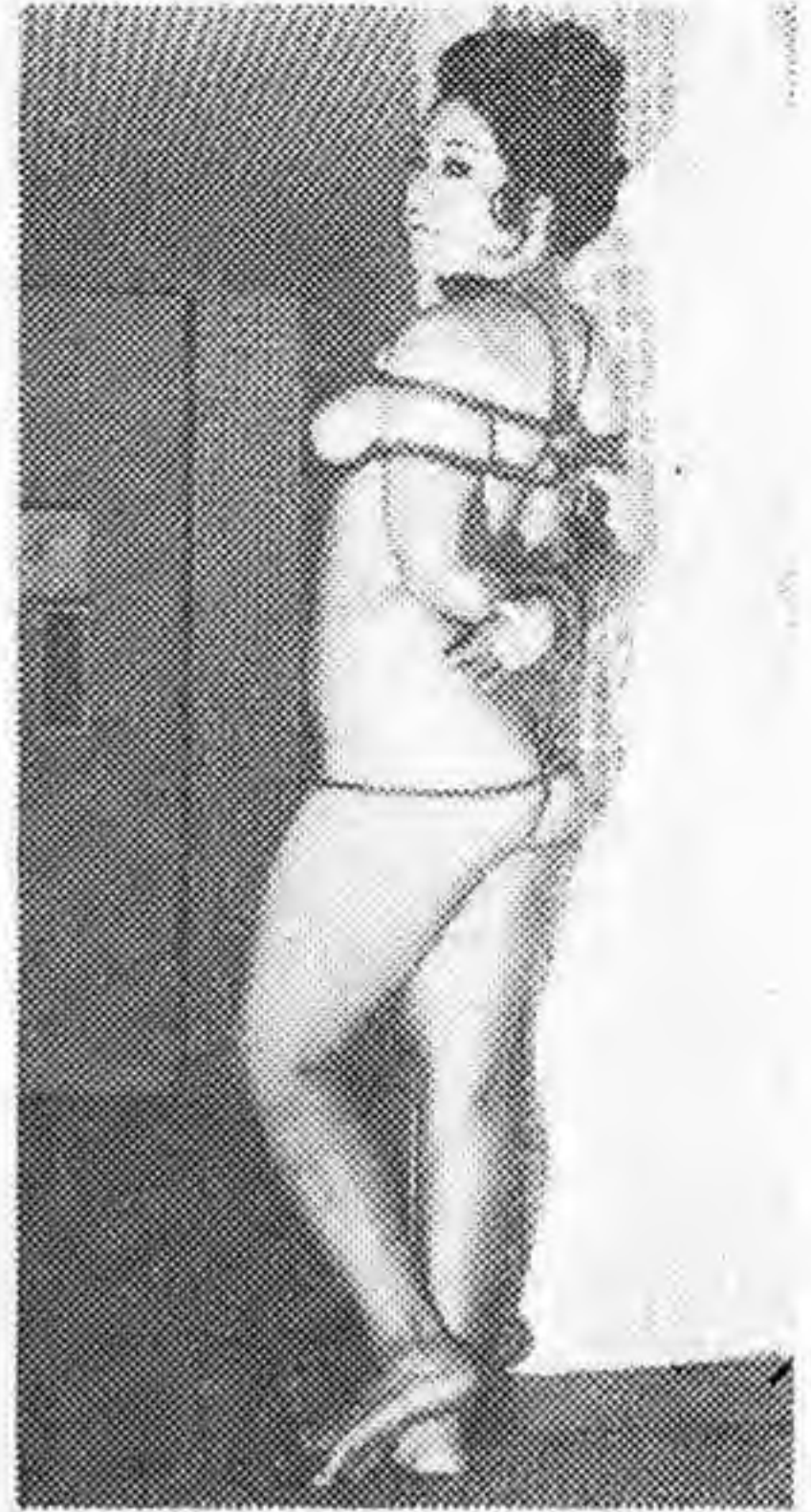
私の言葉も次第にぞんざいになってくる。

ここで私は一寸下品な言葉を使って彼女を挑発してみた。下品というより卑猥な俗語で彼女の肉体のことを批評したのだ。こんな戦法も、こういった雰囲気になったところで試みないと、えてして失敗するものだ。

「私、裸で縛られたりしたら、自分の身体がどんなになるか――それが恥かしくって。それを塚本さんに見られるのかと思うと――」

彼女は両手で顔を掩うと絶句した。

へ恥かしくって、恥かしくって、考えただけでも死ぬ程恥かしいのだが、またそれだけ、全身が痺れるような期待感があるのだ」



それも瞬時にして視界から消えた。

ダッシュボードの時計は既に、九時を過ぎていた。

西宮インターチェンジで名神高速道路へ接続、更に東へ向かう。尼崎インターを高速で通過。豊中にて更に阪神高速道路へ入る。

彼女は移り変わる窓外の夜景を眺めながら沖縄の民謡をくちずさんでいる。

結局、彼女はさんざん駄々をこねた上、私のような者に、それだけ言われるのだったらと、縛られ姿を写真にすることを納得した。「でも、神戸市内だったらイヤなの、どこかもう少し離れたところで——」

夕陽丘で高速道路を出てホテル街へ向う。車を駐車場へ入れてエレベーターで四階へ上る。受付では十二時以降は宿泊料金になるという。もし十二時までに出るとしたら、正味の撮影時間が一時間あるかなし。

レストイン・スマを出す。目の前をけたたましいサイレンを鳴らしてパトカーが走り過ぎ闇の中へ消えてゆく。

彼女は送って貰えるのなら、一時が二時になっても一向に構わないと言う。

阪神高速道路へ入って東へ向かう。やがて右手にポートタワーが浮かんで見える。と思う間もなく左手にフラワー・ロードの光の渦が足下から燃え上るように目に入ってきたが

例によって彼女を入浴させておいて、その間に撮影の準備をする。部屋は相当広いのだが、あちらこちら場所を変えて撮影する程の時間はとてななさそうなので被写体を移動させず一個所に据えて写すとして、三灯のストロボを配置する。前方斜め四十五度の角度に

メインライトを一灯、上部に髪の毛のハイライトをつけるために小型を一灯、バックから人物を浮き上らすために中型を一灯——。

発光テストをしてみる。

どうしたとか、バックの一灯だけが見つからない。パイロットランプがついているのだからACコードに異常がない筈だ。エクステンションコードも確実につながっているのに、何回テストを繰り返しても、どうしても一灯だけが見つからない。

そこへ彼女が浴衣をまとって浴室から出てきた。

私はストロボのテストはそのままにして、縄を片手に持って、彼女に近寄っていった。

「では、始めましょうか？」

私は気軽に手をとろうとした。しかし彼女は両手で胸をかたくなに抑えたまま、一向に承知しようとしなない。

「だって、恥かしいんですもの——」

一寸間をおいて、彼女は流し目で私の方を睨むような目つきをした。

「それに、縛られるのって始めてだし——」

「そりゃ、誰だって最初は始めてですが、すぐ馴れてきますよ。そう駄々をこねないで、素直に縛られてみなさい」

私はす早く彼女の背後に回ると、胸にあった左手を捻じ上げ、浴衣の肩口を脱がせた。ほんわかとした湯上り特有の女臭が私の鼻をくすぐる。

「いや、いや、いやッ」

左手首に縄を掛けようとしたとき、彼女は急に狂ったように抵抗しだした。上半身を左右に振ったので右の肩口の浴衣もずり落ち、豊かなポインが、むっくりと姿を現わした。

左手を背後に回して手首に縄を掛けておいて右腕をかい込むようにして捻じ上げ、背後へ回すなり左手首に揃えて縛った。

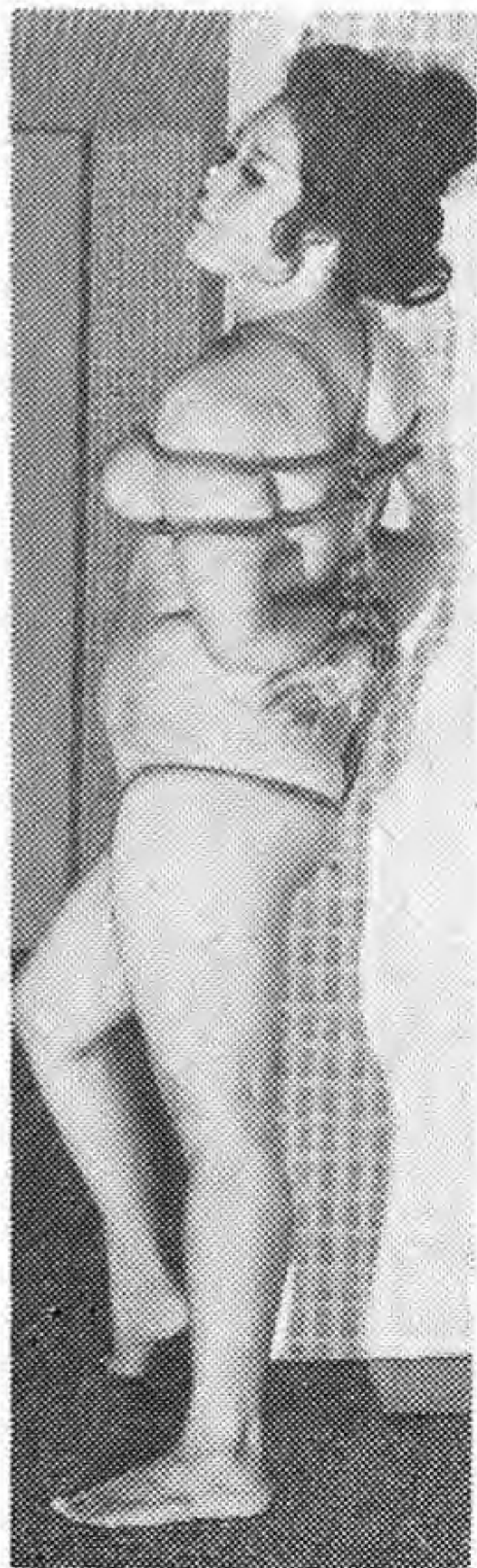
前へ回って浴衣の紐を解き、手荒らに剥ぎとってしまった。

女盛りの脂ぎった肉体がそこにあった。

両手が後手に縛られているので、全く無防備の女体が、羞らいで身をすくませて立っている。

着痩せするタチなのだろうか。着物を着ていた時は背が高い関係もあって、そう肥っているとは思えなかったのだが、このように素裸にしてみると、目を瞠るばかりのグラマーマな肉体である。

二つのお椀を伏せたような両の乳房のボリユームがかぶりつきたい程見事だ。



遅い膨らみの頂点に、可愛い紅の蕾が、かすかに息づいている。

ぐっと深く窪んだ臍窩が、皮下脂肪の豊かさを物語るような陰翳を見せている。

私は彼女の全身を一瞬にして観察した。私が嘗て抱いていた沖縄婦人のイメージとはすっかり違っていた。体毛も決して房々として濃いというのではない。只、胫のあたりが稍毛深いのではないかと思われるが、しかし、それも決して気になる程ではない。

それよりも、むんむんとする女盛りの甘い香りが全身より発散していて、その熱気に私の方が圧倒されそうになった。

たしかに——、琉球料理といえば、豚のペニス、ホーデン、マンマ（乳房）、ワギナ、ウテルスなどの強精料理の本場のようだ。特にハブ料理は一匹が三人分で食べた翌日から

エネルギーがあり余り離婚騒ぎまで起こした人もあるという位だから、そんなスタミナ料理を平常食べているとしたら、あの方の精力も並々ならぬものがあることだろう。

だが、彼女の方は私の手早い縄捌きに感心したのか、さっきの激しい抵抗も忘れたかのように、無言のまま、ただ両太腿をもじもじとねじり合わすようにしているだけだ。

縄尻を胸へ一巻き、二巻き、三巻き、肉づきのよい肌に縄がぐっと喰い込み、乳房がむっくりと盛り上る。

縄を掛け終った途端、急に不思議なように大人しくなった彼女を立たしておいて、背面側面、正面から、立て続けにシャッターを切る。

これで彼女の固さが大分とれたことである。最初のフィルム一本はカメラテストを兼



ねた被写体の体馴らしでもある。私は素早くフィルムの入替えを行ない次のポーズをきめようと彼女に近寄ったが、しかし、この辺から彼女の様子が少しおかしくなってきた。頭を壁にもたせかけたかと思うと、身体の緊張を失って、ずるずるとくずれるように、

床へしゃがみ込んでしまったのである。

「私、初めて縛られて、もう……」

あえぐようにその言う彼女は、うっとりとした表情で潤んだ瞳を私に向ける。

そうだ。座間明子は縛られるのが、大好きだったのだ。

投げ出すように前へ心持ち開いた両の太腿の膝頭のあたりが、びくびくと逡巡しているのが、私にもよくわかる。

私は、その巧まざる被虐姿態にカメラを向けてシャッターを切った。

二度、三度――。

ストロボの充電が待ちきれないような逸った気持であった。

何か、もっと、もっと、ひどく苛めてやりたい衝動にかられさせる彼女の、男のS心を誘い込むような態度であった。

「立てッ、立つんだ！」

私は恍惚として全身の力を抜いている彼女の臀部を蹴上げると、手荒に後手首の縄を右手で掴んで引き上げた。更に一本の縄を取り上げ、喰い込むように股間へ回して引きしばった。

縄は深く陥没していった。

私は彼女の表情を横眼で睨みながら、全身

の力が抜けきったような女体を、再びストロボの投光範囲に連れてきて坐らせる。

強烈に締め上げた股間縛りの縄目が痛いのか彼女は八の字に開いた両腿を前に伸ばしたり膝を曲げて引きつけたりしている。膝を曲げて引きつけるとき、足の裏が床から離れて全くあられもない恰好である。

目高の位置で、或は胸の高さで、時には腹這いになって私は機敏に立ち回って、さまざまなかメラアングルでシャッターを切る。

カメラを向ける度に、彼女の顔面に、いうにいわれぬ喜びの表情が走る。

どんなことを空想しているのだろうか。

沖縄は過去何百年に亘って他国の支配を受けてきている。その被虐の心情が、この沖縄美人の肉体の中にも脈々と流れているのだろうか。私は一昨年、沖縄で遊んだときのことを思い浮かべた。

或る料亭で宴会のあと、席に侍った眉目麗しい女性に、かりそめの恋を誘ってみた。その返答が、近頃の日本女性ではとても聞かれない言葉であった。

「私のような者で若しおよろしければ……」

私はこの返答が大いに気にいった。

金の砂を蒔いたような夜空を眺めながら、

私はその美人仲居と二人で夜道を歩いてホテルへ向った。嘗ての「亭主関白」の男の気持を十分に満足させるに足る奉仕ぶりだった。

翌朝――。

女は私に尋ねた。

「今日はどちらへお出かけですの？」

「昼の飛行機で日本へ帰るよ」

何気なく、そう答えた私に対して、女はきびしい口調で抗議するように言った。

「ここも日本ですよ」

そのときの仲居の怨^まずるような目な^まざしを私は今も忘れることは出来ない。

座間明子のあられもない姿態にオーバーラップして私の回想はそこで打ち切られた。

私はカメラを持ったまま立っていたのだ。ライトを浴びて、浮かび上った彼女の全裸の緊縛姿態がそこにあった。

脂が浮いて濡れたように艶を帯びた肩口、豊かな胸、ぐっと深い窪みをみせた臍窩、はちきれそうな肉づきにはち切れんばかりの太股、冷房がよく効いている筈なのに、ふつふつと玉の汗を盛りあがらせている白い肌。

このとき、彼女の姿態に変化があった。背中を壁にもたせかけていたのが、ずるずると全身の力が抜けたようにずり下って、仰

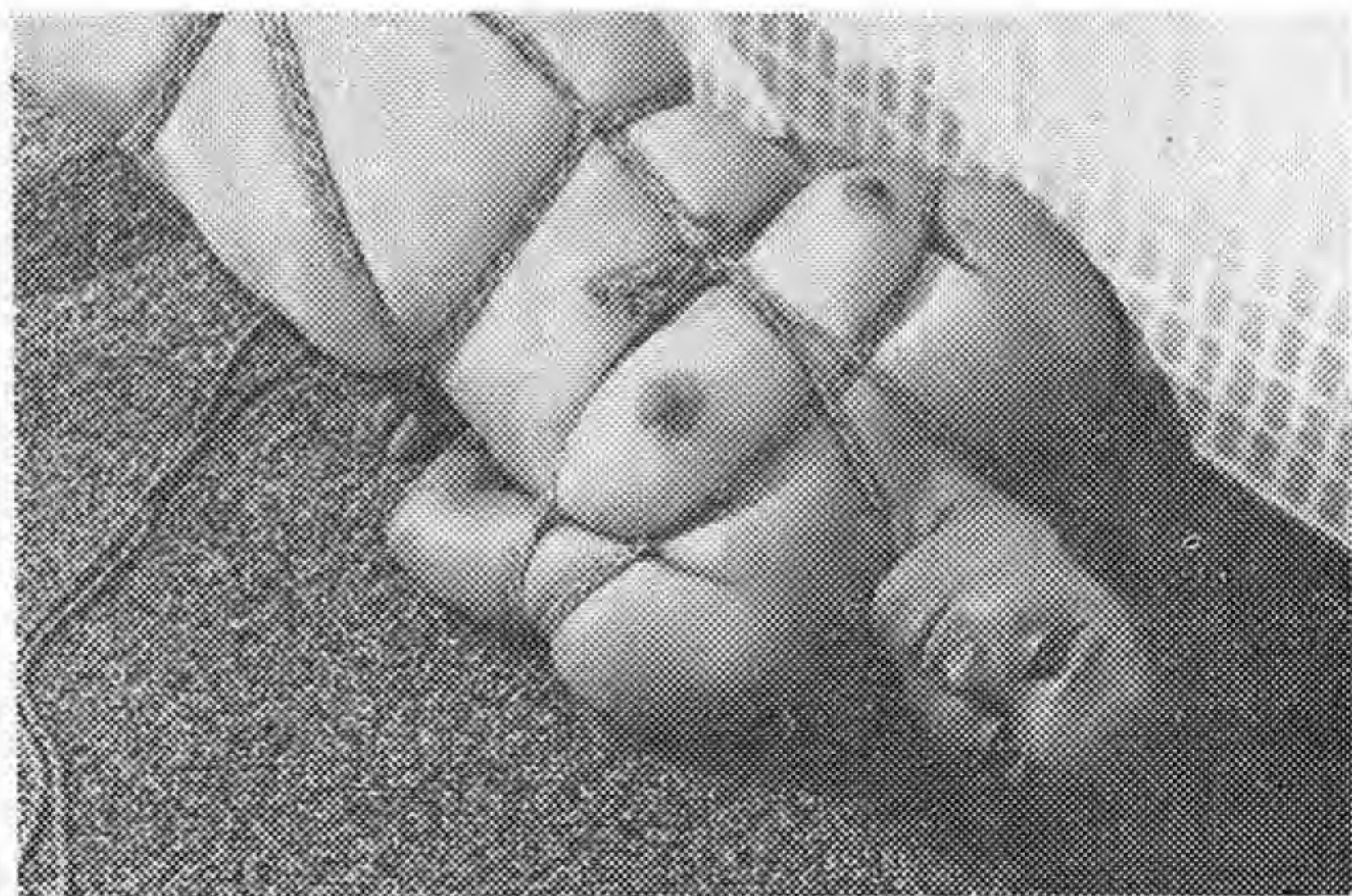
向けに寝てしまったのである。両股は依然として八の字に開いたままである。

深く喰い込んだ股間縛りの縄がどんなに陥没しているのか、気がかりな位縄目が引き締まっている。その外観を具さに観察しながらそのポーズにもならない緊縛姿態を、持ち出した小机の上に立って俯瞰撮影した。ヒケがないので浴室の扉を開けて、流し場から彼女の正面を狙った。

ファインダーで覗きながら接写を混えて数度シャッターを切った上で私は仰向けになっている彼女の頸に手をかけて抱き起こした。微かに口を開いたまま、とろんとした目で私を見る彼女は虚脱状態で全身に力がない。時計を見ると、すでに十一時半を指している。彼女と逢ってからでも、もう八時間以上も経過しているのだ。

今日一日の行動が走馬灯のように、目まぐるしく私の頭の中を駆けめぐる。

私は撮影をはじめた時は、背広の上衣を脱いだだけだったが、いつの間にやら、靴下を脱ぎ、ズボンも脱ぎ、熱中してくるとシャツも脱いで今はパンツ一枚の姿になっていた。今まで写すことに懸命で、そんな自分の姿に気がつかなかったのだが、全裸で縛られて



いる彼女を抱えあげた際、ふっとパンツ一枚の自分の恰好にためらいを感じた。

そのとき――、

虚脱して放心状態だと思っていた彼女の顔が動いて、自分の唇を私の唇に合せてきた。私の心に一瞬のためらいがあった。



タイミングをずらして少し唇を横へそらしたので、彼女の唇は空を切った。

「私の口、くさいでしょう？」

彼女は失望したような目を私に向けた。

こんな美しい顔をしていながら、この女も

豚の耳（耳皮ナマス）、足デビチ（豚足のス

ープ）などを食べるのだろうか。琉球料理の

ソーキ焼といえば、蘇鉄ミソ、ニンニク、ト

ウガラシ、サフランなどの香料を加えて豚の

骨つきを焼き、ハブの粉末、ピーナッツの粉

を入れたタレで食べる自慢の料理だ。

「私の口、くさいでしょう？」と彼女が言っ

たのは、ニンニクを常用しているからかもし

の平衡を失った。

彼女の肉体の魅力に溺れてゆきそうになる

自分に恐れさえ感じた。

座間明子は私好みの肉づきのよい女体の持

主である。整った端正な顔立ちも好感が持て

るタイプである。

南国女性の華麗な熱情が焰のように燃えさ

かって縛られたまま、迫ってくる明子のアタ

ックに私はたじろいだ。いや縛られているか

らこそ、一層彼女が燃えたのかもしれない。

沖縄は日本である。嘗ては沖縄県と呼んで

いて住民は日本人であった。一度はアメリカ

に占領されたが二年後には返還される。

れない。だが、私は幸か不幸か、鼻が悪いので臭いは一切受け付けない。（但しよい匂いはよく感じるのだが）

私は彼女を引き寄せて唇を合わせた。

ダイナミックなキッスであった。受け応えていると、底なしの沼へ引き込まれてゆきそうな感じに、私は心

私は理性としては、そう考えたかった。しかし、現実には沖縄女性である明子を抱いていると異国の女性のように感覚的に思えて仕方がないのである。なんとなく、日本人でない女性を抱いているという異常感が私の気持ちを動揺させ、途惑わせた。

長いディープキッスの末、私は明子の身体を離れた。皮下脂肪の豊かな肌の冷たさが、私の掌の中に残っていた。

フィルムを入れ替えのために縄を解く。股間縛りの縄のその部分が、べっとりと濡れているのが手ざわりでよくわかる。

二の腕や胸に、鮮かな縄目の痕を見せて寝そべっていた明子は、私がカメラの準備を終った頃を見はからって、むっくりと起き上ると、私の耳に口を寄せて囁いた。

「もっときつく縛ってもいいのよ。それに、どんなポーズでもとるわ」

淑女は豹変する。

さっきは、あれ程、恥かしいとか、いやとか言っていたのが今度は私の生ぬるい縛りをもどかしいと言うのか。或は本格的な責めを

期待して私を挑発してきているのか。

これなら――、あんな回りくどい、口説き

方をしなくてもよかったのだ。逢うなりホテ

ルへ直行、それでよかったのかもしれない。或は彼女は、単刀直入を大いに期待していたのかもしれない。余りにも紳士の過ぎたのかと、そんな淡い反省が心の底でした。

縄を見て、被虐の女心が一層たけり狂ってきたのかもしれない。

よし、そうなれば彼女の期待にこたえて大いにハッスルしなければいけない。

如何なる羞恥責めに対しても十分耐え得る準備態勢が完全に整っている女体なので、今までのようなウォーミングアップでお茶を濁すことは少しもないのだ。

私は控の間から一脚の椅子を持ち出してきた。この椅子を利用して、彼女の羞恥心を徹底的にかりたててやろうと思った。

この重量感のある女盛りの女体を、とことんまで責め抜いてやろうと考えた。

先ず考えられるのは開股縛りである。

小道具としては、大小のバイブレーターをはじめ、こけし人形、一〇〇ccと二五〇ccの浣腸器、エネマシリンジまで準備してきた。

後手高手小手に縛り上げた明子を椅子に坐らせ先ず左足首を縄で括り引き上げようとしたところ、急に激しく抵抗して足を挙げさせまいとする。ピントを合わすために点灯した

二五〇ワットの明るい光線の中で、あられもない女体を晒すことをためらう或る種の肉体的変化が起こっているのかもしれない。

私は強引に左足首を椅子の肘掛けに縛りつけてしまった。一旦縛られてしまうと途端におとなしくなってしまう。そして次の責め口を待っているといった、風情でさえある。

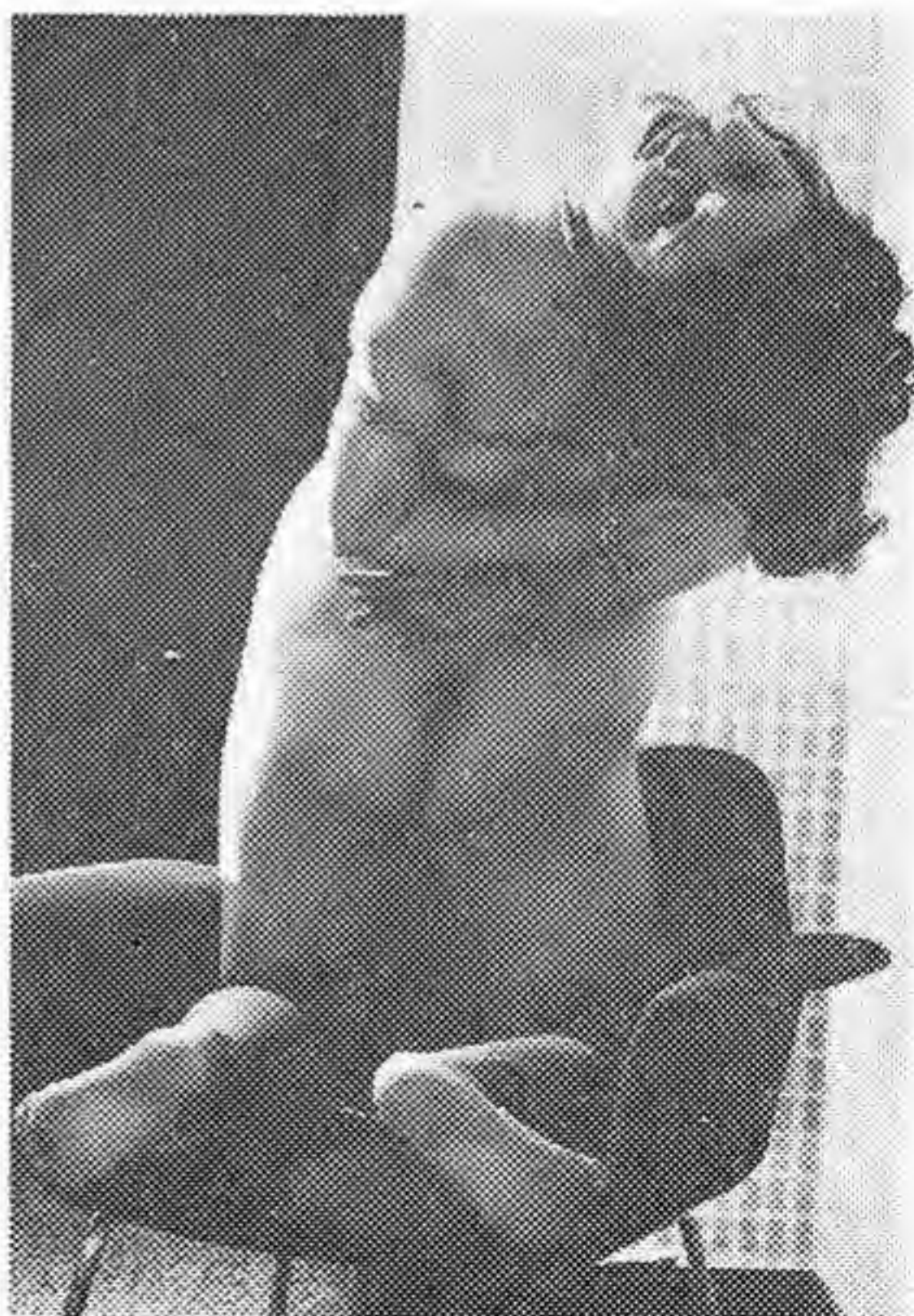
ここで安心した私が次の段階で右の足首に縄を巻いて挙げさせようとしたところ、強い力で拒否にあった。

べつとりと脂ぎった足の裏に手を掛けて何度も掌を滑らせながら、やっとのことで椅子の肘に足首を固定することが出来た。

完全な開股縛りである。

私はカメラを三脚に据えた上でエヤーレリーズをカメラ本体に取り着けた。レリーズのゴム球は足で踏むか口でくわえるかすれば、これで私の両手は自由に使えるのだ。

持参した責めの小道具の中で、私は先ず、



一〇〇ccの浣腸器を取り上げ、浴室で作った石鹸液をポンプで吸い上げ一気に注入した。明子は額に冷汗を浮かべながら、徐々に襲ってくる排泄欲と戦っている。

私は彼女に対して羞恥責めを加えていると思っていた。そして、彼女はその羞恥責めに対して必死に耐えていると思っていた。だがよく考えてみると、彼女は私の責めを全身で悦楽しているのではないかと、考えざるを得なくなった。そのはつきりとした兆候を私は自分の目で確かめることが出来た。

そんな彼女の姿態を、冷徹なカメラの目は

機械的に正確に記録していった。

この浣腸責めの記録に於いて、私は彼女がアヌスに対しても異常なまでの鋭敏な感度を持っていることに驚いた。

だが——、主体はやはり女性のウィーク・ポイントであったということは、次に悪魔のような微妙なバイブの振動によって爆発的な展開を見せたことで証明された。

私はもう少し写真を撮りたかった。このままでは、発表可能のものが何枚もないことはよくわかっていた。彼女の両脚を椅子から解放すると、私は白いテーブルを隣室から持ち

出してきて置いた。このテーブルを用いて撮影した数枚は、疲労した私の最後の力を無理に駆りたてたものであった。

テーブルに仰向けに寝かせたとき、明子は足をバタつかせて激しい便意を訴えた。私はあわてて縄を解こうとしたが、汗で濡れた縄は固結びとなつて中々解けない。やむを得ずナイフで切り放つてトイレへ送った。

彼女が用便のあと入浴を済ませ、私が撮影用具の取り片付けを終えると、既に午前一時は過ぎていた。私は白封筒に入れた謝礼を差し出した。

私は彼女の手に握らせた。

「本当にいららないんです。私、そんな気持ちで出て来たんではないんです。それに、私も楽しませて貰いましたから——」

「それじゃ僕の気持ちも済まないし、第一、お金って、いくらあっても邪魔にはならないでしょう。取っておいて下さいよ」

彼女は静かに封筒を返して寄こした。

「もし今日の写真が貴方のお役に立つようでしたら、次にお逢いしたとき、私に何かプレゼントして下さい。私はそれで満足です」

「と、言いますと、次に又、お逢い出来るんですね」

「ハイ、貴方がお望みになるなら、私は喜んで参ります」

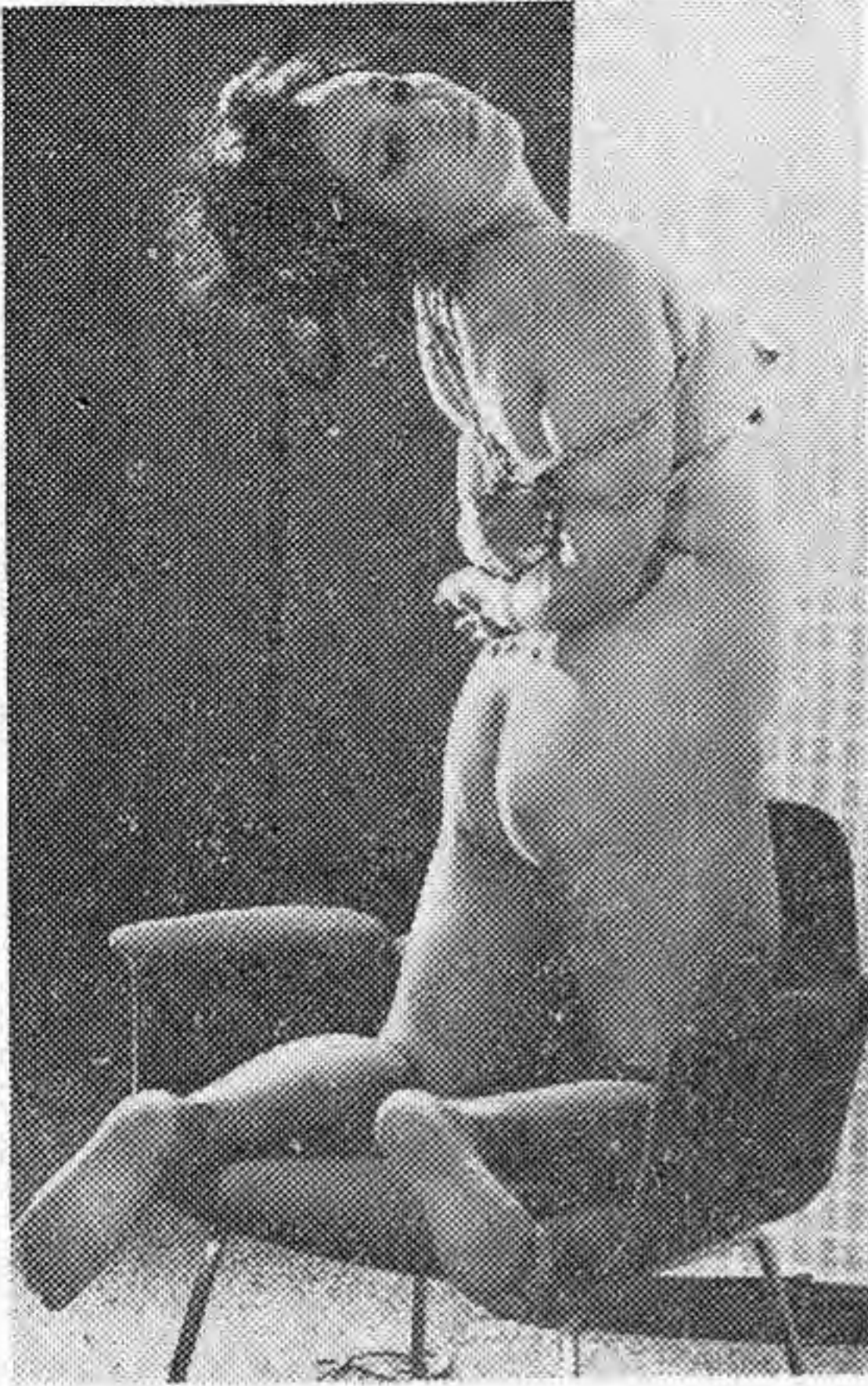
「そうですか、それでは、これは潔く引っ込めましょう。そのかわり、次にお逢いする日までに素晴らしいプレゼントを考えておきましょう」

宿泊料金を支払って外へ出る。

糠のような霧雨が静かに降っている。

「眠くありませんか？」

「私は夜ふかしは慣れておりますわ。これから、まだ、どこかへ連れて行ってほしいみたい。次の公休日には、泊りがけで、遠くへ連



「これは些少ですが、お礼の気持ちです。お受け取り下さい」

「あら、そんなもの頂けませんわ」

彼女は手を出さうとしない。

「まあ、そう言わずに受取って下さい。辞退される程の金額ではないのですから——」

れてって——」

明子は甘えるように私に寄り添ってきた。

私はウインド・ウォッシュャーでフロントグ

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

ラスを拭ってから深夜の街路へ向かってスタートを切った。

とにもかくにも、やっと緊縛写真だけは撮

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

れたのである。私は、ほっとしたような安らいだ気持ちだった。

もし、不成功だったら——。

そのことを考えると、私は数時間前のあのイライラした焦った気持ちが痛々しく胸に蘇ってくる。

しかし、今は違う。

私の傍で私に身体をもたせかけている明子の心は、大分私に傾斜していると受けとってよいようだ。

不思議なものである。

縛る前と縛った後とでは、心の交流は雲泥の差である。

他人行儀のよそよそしさが、今では只無言で寄り添っているだけで血までが通うような心情なのである。

「私、空想の中でも、本当に好きな人じやない、縛られたくないんですの」

ぽつりと、独り言のように、明子はそんなことを言った。

私はそれに返事をせず、阪神高速道路の難波入口へ向けて車を走らせていた。

次に逢ったときは、どんな激しい責めを加えてやろうかと考えながら——。

——(おわり)——

「ファンの妄想」

静子より

皆様へ

小杉千恵



ユミヒコ・N

私は、お恥かしいことですが幼女の頃よりSM愛好の素質を持っていたようでございます。よくあることですが、お医者様ゴッコが大好きで、いじめっこをよくしたように憶えております。それも大へんな熱のいれようでした。

このような私でございますから、偶然に知ったSMのとりことなると同時に、いつも自己愛撫する時に夢想していたのとそっくりの「花と蛇」を読み、その魅力にとりつかれてしまっても、少しも、不思議ではないと思います。

熟読しているうちに私自身が静子夫人になつてしまい、この妄想が、とうとう、こんなに恥かしい空想文を書かせてしまった、といいわけをする私を、思いっきり嘲笑してやって下さいませ。

× × × ×

皆様、その後おかわりございませんか。お蔭様で静子も、この屋敷に連れ込まれました当初は、毎日が涙の乾くひまがないという状態でしたが、近頃では遠山隆義の妻として退屈な一生を送るよりも、今のような生活を送る方が女として本当の幸福ではない

のかとさえ、考えてしまう女に変わって参りましたの。

想い出すにはあまりに激しいできごとですが、あの遠い日のように思える捕えられた日に、義子、エリ子、銀子などズベ公達の手によっていたぶられた時の苦しみは目眩を憶える程でした。パンティのゴムに指をかけられ嬌声をあげながら、ひき降ろされていく気持は筆には表現しつくせない恥かしさでした。少しずらしては私の表情を愉しみ、又、少しずりおろす。私のお腹が冷やりと外気を感じて慄え、後手に縛られた腕を一生懸命に悶え

させる。わあっという笑い声。私は耳朶まで朱に染めてすすり泣きましたわ。

更にキャッキャッと面白がって騒ぎながらズベ公達は、私のお尻を撫でたり、たたいたりした挙句、「まあ、可愛いわ」などと云って、洗濯バサミで挟んで、あざ笑わったのでございます。

これが初めての日なのですから、静子が気を失うのは当然でございます。

気づけ薬をふくまされた上、冷水をぶかけられ、目を覚まさせられました。気絶した私には興味のない女同志の責めは、残酷で無惨なものでした。

中腰にされて、上半身を堅く床柱に縛りつけられた私は、エリ子の手で浣腸を受け、ズベ公達のどよめきの中で、見るも憐れな姿を晒したのでございます。

その後、男三人を介添えにビニール布の上に仰臥させられ、川田の手によりグリセリンを注入され、8ミリに撮影されたのを皮切りに、悪徳弁護士伊沢を悦ばすために、一つ二つと数えられながらの排泄ショー等々、両手で静子の羞恥を受けとめる小夜子に見せた恥かしい終末や奇妙なゲイボーイ達に調教を受けるために施された浣腸などを数えますと

静子は十数回に及ぶ浣腸を嫌や応なしに施されたのでございます。

お話しするには、あまりにも羞かしくおどましいことでございますが、静子は自分でも私自身のA感覚が理解できるようになってしまいました。このお話は、もっとあとにゆずることに致しますが、汚辱に泣きながら、心に反して何かを求めて悶えてしまうのに気付くことさえございますのよ。ほんとうに、静子、困りますわ。こんなことお話ししてはいけませんわね。

でも、こんな恥知らずな静子に変わってしまいましたけれども、今でも、排泄ショーは一番の苦しみでございます。せめてもの救いは浣腸による甘さでございますが、静子のこの気持に薄々、感づいた鬼源さんが、静子に下痢止めを飲ませておいて、浣腸なしでの強制ショーを催そうとなさっていることを、朱美さんより聞かされて、先のことは云え気に病んでおります。

朱美さんは「きっと最高よ」と云って笑っておりますが、静子は想像するだけでも、脂汗が額に流れます。

いずれにしても、どんなに馴れても、若い女性が、このような姿を見物されるとい

うことは一番の苦しみでございます。

私はその度に、畜生同様の変態者の集りなのよ、と自分を慰め、相手を心の中でさげすむことにしているのでございます。でも、周囲でわあっと起きる哄笑を耳にすると、われ知らず、ふるえてしまいます。

その他にも、静子に対する責めは手を変え品を変えて与えられましたわ。

でも、浣腸を始めと致しますそれらの責め以外の、羞恥責めや感覚責めは、前者に比べますと、私にとっては楽なのです。

内緒で皆さまに打ち明けますが、本当に秘密にしておいて下さいね。若しも、本当の私の気持を鬼源さんがお知りになったら、きっとこんなことはいつてられないほど責められてるに違いありませんもの。

鞭打ちを好まない森田さんや鬼源さんの方針に従って、静子は幸いに一度だけしかぶたれません。あの時以来、一度も体に鞭を受けたことはありません。その代りでしょう、調教師鬼源さんのお好みだと思いが、羞恥責めが主体になっているようでございます。

私はよく、酒宴の、乱痴気騒ぎの盛興の中に、無理矢理引き出され、肴にされて参りま

した。狭い室内に充満し渦巻く好奇と欲情の脂ぎった熱気を肌を感じながら、私は心で泣き、うわべは嬌態と微笑を浮かべて野卑な男女の前に恥態を晒すのでございます。

初めのうちは浣腸を中心とした羞恥責め本位でございましたが、昔、遠山家で女中をしておりました千代の登場によって静子の女を責める目標が変わって参りましたことはみなさまもご存知の通りですけれども、最初のうちは前にも話しました通り、千代の意図と反対に、この方が私にとりましては救いでございました。少し恥かしくって申し上げにくいことですが思いきってお話し致しますと、毛むくじやらの川田さんに胸の隆起を撫ぜるように責められたり、足もとに身を沈めた弁護士の伊沢さんの手で身体中がずたずたになっでしまいそうな荒々しい攻撃を受けたりしたこともございましたし、京子さんや桂子さんと、女同志の口づけを強制され、銀子さんのいうままになって、見物人を欲ばせなければならなかったこともございました。でも、どれもこれも、こと女の本能に通じる虐げは、あくまで、私にとりましては救いでございましたのよ。

それは、あふられ、まきこまれ、口惜しい

思いで女のみじめさを思い知らされる責めには違いありませんでしたが、一面、私にとりまして、……いけないことですが、このようなことをお話しすることは……。

第二に、仮に男達が名器だなどいいながら、どんなにあわれな醜い姿を私に強いたと致しましても、その一瞬におきまして私は、どんな野蠻な男性でございましょうとも、おとなしくさせるだけの自信と、女のほこりを持ちうるのでございます。同じ羞恥の中に存在致しましても、牝犬同様の姿を嘲笑されるのは屈辱だけですが、女としての美を鑑賞されるということとは、まだしも女のはこりなのでございます。

第三に、相手が川田さんや伊沢さんのような悪者であれ、同性の京子さん、桂子さんであれ、千代のような意地悪な性悪女であれ、その相手の存在に救いがございますの。責め手の存在が救いだなんて申しあげても、おわかりになって頂けないかも知れませんが、私のような境遇に立たされますと、その相手さえ、本当に救いでございますのよ。スターの名演技だとか勝手におっしゃいます数々の恥かしい見せ物をさせられる時でさえ、その場でポカンと見入っているお客様の協力という

安堵が、私の心の救いなのでございます。

私の心を見抜くことにたけた調教士鬼源さんが、このような静子の心理状態を悟られたではないかと思いましたが、それは責め方の変わった数日後でございました。いつものように縛られて引き出された私は、鬼源さんが罰に、どんな残酷なお仕置をなさるのかと、おびえにおびえておりました。そして、それはきつと、とんでもない責めを施されるに間違いないと覚悟致しておりました。

しかし、罰は私の予感に相違しておりました。相手のある責めが採用されたのでございます。でも、全く私の意表をつく羞恥責めを鬼源さんはこの時初めてお使いになったのでございます。

確かに相手はございましたわ。でも、それは存在しないと同一相手でした。羞恥と屈辱をわかちあえる相手でない限り、それは存在しない相手でございましょう。

その羞恥責めと申しますのは森田さんの本来の目的と、千代の目的とを同時に達成させるものでした。これを話されて、打ち合せをさせられた際には、あまりのことに自殺できない自分を呪って、私はのたうちまわりました。

鬼源さんは、静子の死ぬよりつらい姿を8

これ以外にも静子は、岩崎さんのお妾さん達による卵遊び、千代と鬼源さんによる奇妙なお習字、シスターボーイによる中国の秘法等々、屈辱の限りをあたえられましたが、これらの時には、先に申しましたように、はかないことながら静子なりの救いを見出し得ていたのでございます。

体の方は、もはや静子のもものではございません。静子の心を包みこんでいる容器に過ぎないと思います。従って静子は、畜生にも劣るあの人たちが、この容器を如何ように弄ぼうと、好きになさいというつもりになっております。でも、その容器が、不思議な力を以て、絶縁したはずの心に、いやおうなく、絶ち切れない繋りのあることを訴え続ける時があるのです。そんな時が静子にとって一番苦しく、口惜しい時なのでございます。その繋りのあることに、つい無意識のうちに安堵し、悦んで迎え入れているのですもの……。もう、全く駄目になってしまいましたわ。それでも、容器は容器として、絶縁のままでは押通す時のほうが多いことに多少の救いを見出しておりますが、心にまで絶縁の仮面をかぶせなければならぬ時もあった、それはそれは辛うございました。でもその練習を致しま

したおかげでしょうか、近頃は、以前は強制されてふるえながら口に致しました「恥かしい単語や言葉」も、自然に口にしてしまえる静子に成長致しました。

手を変え品を変えて与えられ続ける、その道のベテランの手練手管は、静子のものではない体を時にはみずから積極的に嘲弄を求めさせるようにまで手なずけたようでございます。しかも、そのような時に限って、先に申しました不思議な力をむき出して心に復縁を迫ってくるのですが、その脅迫的手段の一種のように、まるで蒸れたバターのような匂いを吹きつけてくるのでございます。

この匂いのことは、静子がこの地獄に陥る以前にもないではなく、正体は静子も承知しておりますが、絶縁を決心してからとはくにごうしようもない程に強くなってしまう、静子を困惑させるのです。その脅迫がたいへんに効果的であることを心のない体がどうして知っているのかと、つくづく思うことも、珍しくなくなってきたのでございます。

絶縁だの仮面だのといって、自身の体内に生じる数々の変化を、さも静子の責任ではないかのように申し上げることが、せつかく不快な思いをおさせする結果を生んだことだろ

うと存じます。どうぞお許し下さいませ。

でも、でもそう思いこみたいと念ずる気持は事実、静子にはございます。そうとでも思ひこまなければ、いくら逃れ得ないことと観念し、縛り上げられて身動きならぬとはいえ直接素肌に加えられる触手をどうして受け流すことが出来ましょう。たとえそれが一〇〇パーセント身の毛のよだつものではないとしても。またたとえ、ある一瞬に於いて現在の悲運を忘れ果てる時があるとしても。……どうぞお察し下さいませ。

これから先、どのような責苦が静子待ち受けていることでしょうか。想えば空恐ろしい限りなのですが、今までに受けました調教という色々な責めの方法から鬼源さんのなさりそうなことは、おぼろげながら想像がつくような気も致しますし、意地の悪い千代のいたぶりだって、肉体的な苦痛を加えられるとは思えません。ただ、静子を人間以下のみだらな女に変化させることだけが目的のように思われますので、静子のこの肌についてのように縄目さえ掛かっていれば耐え通せるのではないかという気もするのでございます。

ここへ連れこまれてから、衣服とい



うものを忘れ、一日として縛られなかった日はないように思いますが、もし仮に、自由な身で、何かのショーを演じろといわれましたら、いくら慣れきった簡単なことでも、辛さは遙かに、増すことでございましょう。呪わしいことではありますが、自らの肌に縄目を感じていればこそ、心も納得して屈辱に甘んじてくれ、先に申しましたような、責める相

手の中に救いを見出し得るのだろうと存じます。

静子はもうこの地獄から脱出することはおそらく出来ないだろうと覚悟しております。これも運命なら致し方のないことでございましょう。逃れることが不可能ならば、観念して耐え通す以外にはありません。静子は、その覚悟を定めてから、少々のことには負けな

いような気持ちになれるのです。与えられたこの悲運に揉み抜かれても生き通せる自信のようなものを感じ始めております。どんなに卑劣でみだらがましい責め苦であっても、きつとこの肌身は耐えてくれることでございましょう。ただ、それが女の本能に通じることであり、強制的状況である限りに於いてのことですが……。

明朝には、今こうして久方ぶりにペンを持つていますこの手は背中に組まされ、しっかりとロープに噛まれることでありましょう。こう思っただけでも、乳房の上下や二の腕がピリピリしてまいります。でもそれが、明日はどんな調教をされるかは存じませんが、与えられる羞恥を耐える支えとなってくれると思いますと、みじめではあっても、何か期待に似た思いが致します。

つまらぬ囚女のグチをお聞かせして申しわけございません。どうも有難うございしました。もしこんな静子に少しでも興味がございましたら、今まで通りに、ときたま、行く末を見守って頂く時間をお割き下さいますようお願い致します。

(おわり)

青春の三角模様



—春川ナミオ・画—

芳野眉美

海老責めにしたのは炭俵に詰め易かったからだろうが、無理に身体を屈曲させられて、無造作に炭俵詰めにされた勇にしては、まるで半殺しの目に会ったようで、それこそ半死

A

半生の態であった。

うしろ手に荒縄で縛られ、あぐら縛りにされた上、犬の首輪をはめられて、首輪の鎖を足首にかけられ、海老責めに近い責めを受けた上、まるで死人を座棺におさめるような軽い気持で、炭俵に詰め込まれてしまったのだ

から、まったくたまったものではない。

「海老責めにしてやるから、トレーニングをしておいでよ」

と葉子は笑いながら勇にいうのである。

「スケベジイは、下腹がでてきて、うまく縛れないのでつまらない」

そういえば、中年太りの三田は、夜な夜な葉子に責められているくせに、一向にスタミナがおとろえず、驚くべきタフな一面を見せて、かせぎまくっていた。

「海老責めのトレーニングですか」

「そうよ」

スポーツの各種トレーニングは聞いたことがあるが、SMプレイのためのトレーニングは聞いたことがない。

「勇の身体は、若いくせに少し固すぎるわ」縛りにくい、と葉子はいうのである。

「やれといわれれば、しますよ」

不服そうな顔で勇は答えた。

男と寝ることしか考えていないような葉子のことから、何を考え出すかわかったものではない。

葉子が勇に命じたサーキットトレーニングを、勇が忠実に実行したかどうかはわからない。前方屈伸運動や、腹筋運動、水中で長く

息を止められる運動ぐらいはやったかもしれない。

とにかく、柔軟な身体をつくれば、これにこしたことはない。

勇は葉子の生きた玩具にされているわけだが、葉子に絶対服従している勇のことだから葉子に何をされようとかまわないのだろう。

勇のような惚れ方もあるわけである。

隣家の大崎に、床下の穴の中に閉じ込められているのを覗かれ、大崎のしている前で、葉子の小便を飲まされてしまったのだから、勇の腹の中は煮えくりかえっていた。

葉子の命令なら、どんな恥かしめを受けようと、責められようと、それを甘受出来るのだが、一人でも他人がはいってしまおうと、その男に対して、むらむらと腹がたってくるのである。

葉子に対して勇はMになれるが、大崎に対しては、なれるわけがない。

炭俵から首を出し、冷たい床下に転がった勇は、残飯を集めたバケツに首を突っ込んで、葉子のたべ残しをあさり、葉子の口紅がついた、歯のあとくつきりと残った肉やリソゴの切れ端を見つけると、野良犬のように鼻を鳴らしてたべるのである。

あまり長い間、床下の穴に閉じ込められている間に勇の目は、すっかり闇になれてしまったようであった。

大崎の妻である絵里子夫人の汚れたパンティを口に詰め込まれ、大きな絆創膏でぺったりと猿ぐつわをされていたので、口がこわばって重く、バケツの中の残飯あさりも容易ではなかった。

まったく、葉子ときたら、どういうわけか自分が排泄したものを残飯と一緒に持つてくるのが好きで、洗面器に小便をし、みのむしのように炭俵詰めになっている勇の首の前に突き出し、

「お飲みよ、おいしいよ」

と、勇の顔を洗面器の中にひたしてしまったり、仰々しくポットにいれて、

「あたたかいよ」

と穴の中に置いていたりするのである。バケツ、洗面器、コップ、ポットといった勇用の家庭用品が、床下の穴の中に集まってくるのは愉快なことであった。

いつこの穴倉から解放してくれるのかわからないが、勇は何かぞくぞくして寒気をおぼえ、首をひねった。

湿気の多い、じめじめした、半腐朽した床

下の防空壕に、これまで何度かほうり込まれていたが、エネルギーシユな若い体力は、別に身体をこわすこともなく、葉子の精力的な攻撃にたえてきた。

熱があるようだ、と勇は思った。

かなりの疲労の蓄積が、勇の体力を弱めていたのに違いなかった。

床下の土が、かなり水分を含んでいるようだし、勇が詰め込まれている炭俵も、じとじとしていたようであった。昨夜、夕立のようにざあーと降った雨が、床下の土に吸収されてしまったのかもしれない。

勇の歯が、ガタガタ鳴りだした。

発熱であった。

勇は炭俵から首をのばして、穴を密閉している床板を仰ぎ、重石のようにのしかかる畳のことを、まるで墓石のように思った。

急性肺炎になれば、このまま急死してしまうこともあるのである。となれば、葉子に責め殺されたのと同じ事であろう。

はじめて、真の恐怖が勇を襲った。

「助けてくれ」

と勇は叫んだ。

猿ぐつわをはずされていたことが、わずかな慰めであった。

「ここから出してくれ」

土台が高く、囲いがなく、外の明るさが、少しでも床下に忍び込んでこなければ、勇は簡単に精神錯乱をきたしたかもしれない。

この点、家が古いということに、勇は救われたとわかっていい。

「助けてくれ」

勇は涙をぼろぼろ流しながら叫んでいた。

「死にたくないよ」

いくら土台の間があいていても、人通りがなければ、勇の声を聞いてくれる人がない。

郊外といっても県境に近く、私鉄の駅から遠いのと、廃墟のような倒産した工場が隣接し、あとは雑草が茂った空地と、一面の畠に囲まれていては、勇の声は、いたずらに床下にこだまするだけである。

勇は突然、射るような腹痛に襲われ、顔をしかめて歯を食いしばった。

しぼるような痛みは、排泄をこらえる限界を越していた。

海老責めにされ、炭俵詰めにされた勇の尻に、水のような下痢が噴き出て、勇は歯をガチガチ鳴らしながら呻き続けた。

早く葉子もどってきて、床下の勇に気がついてくれなければ、どうにもならない状態

であった。

発熱と下痢と、長時間、穴の下に押し込まれている勇は、夢うつつに、葉子が大崎夫妻と三人して、奇妙なあそびに夢中になっているのを空想していた。

B

大崎夫妻のSMプレイを見物しながら、葉子が急に勇のことが気になった心の片隅に、やはり葉子のカンのようなものが働いたのかもしれないなかった。

葉子は畳をあげ、床板をはいで、穴を覗き込み、炭俵の中の勇が、油汗をたらして息もたえだえなのに、びっくりした。

「どうしたの、勇」

穴の中に飛び下り、勇を抱きかかえて、あまりの熱っぽさに葉子の顔の色が変わった。

葉子に殺されるなら本望でしょう。と、日頃、夫の三田にも勇にもいっているけれど、間違いがあつて死に、責め殺したなどと新聞記事にされたら、一生は終わりである。

葉子は勇のひたいに手をあて、勇がかなり発熱をしているのに気づくと、

「しっかりして、勇」

いそいで炭俵から勇を引っ張り出し、海老

責めをといて一息ついた。

下痢の異臭に鼻口をおおい、一瞬いやな顔をしたが、それどころではなかった。

台所に行って湯をわかし、とりあえず穴の中で勇の身体を洗うと、

「勇、しっかりして」

と勇の尻をひっぱたきながら、畳の上に這い出させた。

万年床の葉子の布団に勇を引っ張り上げ、もう一度、勇の全身を甲斐々々しく拭くと、三田のゆかたを着せて、とりあえず、下熱剤と下痢止めをいっしょくたに飲ませた。

「お医者を呼ぶからね、勇」

心配そうな顔で、葉子はいった。

葉子から、はじめて優しい言葉を勇はかけられたようであった。

「大丈夫です」

勇は、とろんとした目で葉子を見上げた。

「寒気がしたから、きつと風邪でしょう」

「大崎さんに頼んで、お医者に連絡してもらおうわ」

「いいですよ、奥さん」

と勇は首を振った。

「少し休ませてくれれば、熱ぐらい直ぐ下りますよ」

「そうかしら」

不安そうな顔で葉子はいった。

「安心して下さい。病氣らしい病氣は、まだ一度もしたことがありませんから」

葉子は冷蔵庫からアイスノンを取り出して勇の頭にあてがった。

まるで勇の妻のようであった。

「そろそろ、御主人が帰る時間ではありませんか」

と勇は、発熱してもそれだけが気になるのか、勇の枕元に坐っている葉子にいった。

「そうだわ、オヤジを忘れていた」

「どうでしょう」

三田の浴衣を着て、葉子の布団に寝ていたのでは、三田にどう勘ぐられようと仕方はない。

「いい考えがある」

葉子は勇の下着を集めて洗濯器に投げ込みズボンと靴に水をぶっかけると、

「これでよし」

と、ひとり言をいった。

その時、三田の車の音がした。

庭に車を乗り入れて、車から下りた三田は誰やら男が妻の布団に寝ているのに気がついて、はっとしたらしかった。

台所から葉子が三田を出迎え、

「早かったのね」

と三田に抱きついた。

「誰だい」

口ごもって三田は妻に聞いた。

「ほら、大崎さんがあの家を買う前に、アルバイトに留守番をしていた学生さんがいたでしょう」

「ああ、あの学生さんなら知っているよ」

「駅からこちらに来る途中で、足をすべらせて、あのドブ川に落ちてしまったのよ」

よくもまあ、ぬけぬけと出任せが出来るものだ、と、布団に横たわり、目をつむってじっとしている勇は思った。こう口がうまくてはだまされても仕方がない。

「それはあぶないな」

「風邪気味だったので、すっかりこじらせてしまったらしいの」

「ほほう」

「下着も服もびしゃびしゃだし、このまま病人を帰すことも出来ないから、今夜一晩だけとめてあげようと思って」

「――」

「ねえ、いいでしょう」

「葉子さえよければ、いいさ」

三田は、いったん胸にまで抱き上げた葉子を下ろしていった。

他人の病人がいるとなると、今夜は葉子と例のあそびができないから、久し振りに休めると思ったのかもしれないし、葉子との夜の生活を楽しみにして、急いで帰ってきたのに他人にじゃまされて不満かもしれない。そのところは寝ている勇には、わからない。

「すみません。御迷惑をおかけして」

と勇は、なるべく三田の顔を見ないようにしていった。

三田の妻と通じている意識がある以上、いくらなんでも、三田の顔を、まともに見られるわけがない。

「災難にあいましたね」

と個人タクシーの運転手らしく、交通事故にあったような口調で三田は男にいった。

「明日になれば熱も下がると思います」

「無理しなくてもいいよ。この家だって留守番してくれただ人なのだし、まあ、いわば、自分の家で寝ているつもりで、気楽に養生して下さい」

と三田は、妙に熱弁をふるい、

「そうだ。ちょっと、医者を迎えに行つて来よう」

と、軽く腰をあげた。
妻を寝とられていくせに、どこまで人が
良いのかわからない。

「そうしてあげて」

と葉子が三田に甘え、

「すみません」

と勇は布団で顔をかくしながら感謝した。
病気になったのは、三田の妻の葉子との火
遊びの結果であり、それを夫の三田が、わざ
わざ姦夫のために、疲れて帰って来たのにか
かわらず、重い腰を上げて医者を迎えに行く
ことはないのである。

三田の車が発車すると、葉子は舌をペロッ
とだし、

「ゆっくり、おやすみなさい」

と勇のひたいに軽くキスをした。

C

奥の八畳に勇が寝てしまったので、玄関と
台所に挟まれた四畳半に、三田と葉子は寝る
はめになった。

布団を敷くのは三田の役目だから、隣の部
屋にしたのだろうが、葉子だったら、さっさ
と勇の布団と並べて敷いたかもしれない。

三田が連れて来た医者の注射がきいたのか

穴の中の拘束から解放されて安心したのか、
勇は、ぐっすり眠ってしまった。

「寝たようだな」

と三田は、隣室をうかがうようにして葉子
にいった。

「びしょ濡れになってきたときは、本当に驚
いたわ」

と葉子は尻をももぞさせ、三田の手を両
掌に挟んで誘うそぶりをした。

昨夜から勇を投げ込んでおいた穴の上に、
二人で寝ているとは、まさか夫の三田は気が
つかないだろう。

「ねえ」

と葉子は鼻を鳴らした。

夫に内緒でちくりあっている（という言
葉がありましたね）勇が、唐紙一枚の隣室に
寝ているというだけで、葉子の淫乱な血が、
さわぐらしかった。

「病人がいるのに」

と三田は少々仏頂面をしていった。

「いたっていいでしょう。ぐっすり眠ってい
るからわかりはしないわよ」

はだけた胸から丸い乳房がこぼれ、青いあ
ざになった齒型が三田の眼にとまった。

「これはどうした」

三田の声に怒気がこもっていた。

「あら、いやだ」

と葉子は、いった。

「あんたがつけなくて、誰がつけるのよ」

三田はじろりと隣室の唐紙を振り返った。

「あんた、まさか、隣の学生さんを疑ってい
るわけではないでしょうね」

馬鹿々々しいという顔つきで葉子は夫の顔
を見た。

「あんな高い熱を出して寝ている人が、こん
なことできて」

「だけど、俺じゃない」

と三田は妻にいった。

「じゃ、誰よ」

「――」

「はっきり言ってよ。気持悪いわ」

ぷいと横を向いて葉子は怒った顔をした。

今朝方、夫の三田を送り出した直後、隣家
の大崎と、庭に面した縁側で、こともあろう
に關係してしまった、記念のキスマークなの
だが、勇と同様、大崎と關係したことは、ま
だしばらく白状しないほうがいいと葉子は考
えていた。

そのうち、こんなことをいわなくても、三
田夫妻と大崎夫妻の、夫婦交換SMパーティ

をするようなことが、きつとあるだろうと葉子は思うのである。

「いう必要のないことは、だまっていたほうが賢明である。」

葉子は不満そうな顔で、いらいらしている三田の前で長襦袢を脱いで、すっ裸になり、「ほれ、見てごらん」

と、全身につけられたキスマークのあとを指さした。

ふくよかな内股につけられたキスマークが殊に強烈で、葉子に首を挟み込まれるのが毎日のように繰り返されている三田にとってはこうしてぶしつけに見せられるとテレテ顔が赤くなる。

「お尻にも大きな齒のあとがある。」

「あんた夢中だから、どこに食いついたのかわからないのよ」

と乳房に大崎がつけた齒型を夫に見せて、

葉子は、しゃあしゃあといったのけた。

「とにかく、葉子をたべるって感じで、ペロペロ舐めるんだから」

「俺がなあ」

と三田は首をひねった。

「あんた、やいてんの」

と大声で笑いながら葉子はいった。

「そうじゃないけど……」

「やいたっていいよ」

くねくねと、しなやかな裸体をくねらせて葉子は夫の顔に、どかっとまたがった。

「ほら、もっとやきなよ」

よくバネが利いている、むっちりした腰を動かして、三田の顔を責めつけながら、

「お隣の絵里子さんね」

と夫を見下ろしていった。

「貞操帯をつけているのよ」

「えっ」

と三田が驚いて、妻に責めつけられていた首をもたげた。

「なんだって」

「貞操帯を、はめられているのよ」

「大崎君は、そんなに嫉妬深いのかい」

「馬鹿ねえ、そんなことじゃないわよ」

葉子は慣れた手つきで、夫の両手首を腰紐で縛った。三田は葉子のされるままになっている。隣に寝ている勇のことなど、どうでもよくなったらしい。

「貞操帯かと思ったのだけど拡張器なのよ」

「拡張器」

「お尻のね」

「お尻」

葉子は三田の顔から腰を浮かせ、頭の方に背を向けると、便所でしゃがむようにした。

三田の顔の上で、葉子のまるまっちい、お尻が、もぞもぞした。

「ま、まってくれ」

と三田は、あわてて顔をそむけた。

布団の上で、それも顔の上に、じかに排泄されたら、たまったものではない。

「フフ、大丈夫よ」

葉子のはぞくように夫の顔を見下ろした。

「ピクピクしてるでしょう」

「ああ」

絞り小紋のようだと三田は思った。

「絵里子さんはね、アヌス拡張器をされているの」

「見たのかい、葉子」

三田は、ようやく隣家の大崎の夫婦生活のみこめてきたようであった。

「見せてもらったわ」

「ほう」

三田は深い嘆息をついた。

後手に縛られ、上体を鴨居から吊るされて四つ這いのようになった全裸の絵里子が、夫の大崎の手によって、蒸しタオルでお尻を蒸され、やわらかくもみほぐされたことや、ク

リームを潤滑油代りにすることや、葉子が目を見張ったほどの太い栓のことを、葉子は三田の顔をお尻で押し潰しながら話してきかせた。

「大崎さんが、こんなこと、いつていたわ」

「どんなことかね」

「おトイレに入っても、絵里子さんがする物は、小指ほどの小さい細いものだったんですって」

「——」

「それがね、今では大崎さんがびっくりするぐらい、太くて、どっしりしていて、重量感があつて、それはすばらしいものなのですよ」

「どういう意味だい、それは」

「馬鹿ねえ。大崎さんは、奥さんを、別々に愛せるってことじゃない」

大崎は、新婚まもない新妻に、二つの能力を与えてしまったと葉子はいうのである。

そして責めていた尻をもたげ、葉子は、もう一度、

「うん」

と息ばってみせた。

「拡張器をしなくても、舌を丸めて栓の代わりをしていれば、そのようになるわよ」

訓練によってはできるかもしれない。

「どう、これから毎日、葉子の練習をやってみる？」

お尻を振りながら、葉子はくすつと笑って三田を見下ろした。

「簡単なことよ、葉子がお便所に行ったとき一緒について来ればいいのよ」

こともなげに葉子はいった。

絵里子が味わった快感を、葉子が知らないというのは、ちょっとしゃくだったのかもしれないし、絵里子のように、夫に飼育されるのはいやだから、三田をいじめながら、A感覚を増長させようと、葉子は頭をひねって考えたのかもしれない。

大崎夫妻との交換があつても、その意味では、葉子も二重のエクスタシーを得られなければ、不公平といわなければならぬ。

隣室で、勇が寝返りをうった。

D

「起きてよ」

葉子は三田の頭をけとばし、縛った両手首を引っ張って布団の上にあぐらをかかせた。

「隣が目を見ましたらどうする」

「見られたって、いいでしょう」

おたおたする三田を、葉子はロープを派手にあやつって、あぐら縛りにした。

三田のでっぱった腹がじゃまだだったが、両足首を縛ったロープを首にまわして、三田の背中を踏みつけながら、ぎゅうぎゅうしぼっていった。

簡単な海老責めだが、葉子もこれは縛りやすいようであった。

後手に縛らず、前縛りのままにしておいたのは、三田の背中を打つとき、手がじゃまになるからであった。

葉子は、この間の生理のとき、ちょっと使って捨てずにほっておいた、乾いて固くなったカットメンをさがしだすと、

「口を開けろ、この馬鹿」

驚いて口をつぐむ三田の歯と唇を上下にひっぱって無理にこじあげ、くさったイワシのような臭いのするカットメンを、三田の口の中に詰め込み、メンスバンドで猿ぐつわをしてしまった。

夫を海老責めにしておいて、葉子はいきなり隣室の唐紙を開けたのである。

「——」

三田の叫び声は、舌をのどに押し込むほどぎゅうぎゅうと詰め込まれたカットメンにさ

えぎられて、声にならなかった。

葉子は、つかつかと勇の布団に近寄り、目を開けていいのか悪いのか、もじもじしている勇の髪をつかんでいった。

「見たいなら、見たっていいんだよ」

「――」

「ホホホ、目をぎゅゅとつぶって。ウブだねえ、勇は」

まだ熱のある勇は、顔を真赤にさせて、葉子を見上げた。

「どうだい、葉子に半殺しにされた感想は」
急激に熱が、あがるようであった。

葉子は掛布団をはねのけ、勇の着ているゆかたをだけさせた。

「なんだい、だらしのない。このくらいの熱でダウンなんてだらしがなさすぎるよ。葉子が好きだったら、せいぜいトレーニングをすることだね」

ぴしゃりと下腹を平手打ちして、葉子は乱

暴に布団をかけた。

「口を開けてみな」

葉子は口中一杯に唾液をあふれさせ、勇の口の中に、すっと唾液を垂らした。

まるで美しい細いクモの糸のように、葉子の唾液が勇の口に吸い込まれていった。

「葉子のお薬だよ」

猿ぐつわはしたが、三田の耳に、耳栓をしていないはずであった。

三田は、妻と勇の間で交された会話を、すべて聞いているはずであった。

あぐら縛りにされた三田の腰のあたりが、ひくひく動いていた。

「水のかわりに葉子のオシッコを、ポットに入れて枕もとに置いといてあげるからね」

楽しそうに葉子は勇にいい、

「雨戸の節穴から覗いているよりは、いいだろう」

と、足の裏で勇の顔を踏み潰してから、三田のほうにもどった。

みにくく曲った三田の背中を、ハタキの細い竹の柄で、『ぴしり』と打ち、

「絵里子さんも、今頃、御主人にこうして責められているわ」といった。

隣家同志、夫婦生活にSMプレイを楽しんでいる。このセクシュアルな事実、葉子は興奮したのかもしれない。

びしっ、びしっ。

と続けて三田の背中に竹が鳴り、三田の広い背中に赤く充血した線が盛り上った。

くさったイワシのような葉子のメンスの臭いが、三田の口中一杯にひろがり、

「うう、うう」

と三田は呻き続けた。

猿ぐつわをとったら、三田は一度に嘔吐するのに違いない。

大崎に浣腸され、葉子の見ている前で晒した、絵里子のマゾヒスティックな姿が目につきて、葉子はますます燃えてくるのである。

熱が下らず、ぶるぶるふるえながら、葉子が夫の三田を責めているのを眺めている勇はすさまじい全裸の葉子を、ただ呆然として見るだけであった。

葉子は三田のひたいを足蹴にして、海老責めの三田をうしろにひっくり返した。三田には葉子のしようとするのがわかっていて、

葉子のそんな場合の秘戯に、三田はどれだけ苦しめられているか、わからない。

見ている勇の吐く息が荒くなった。

葉子の舌打ちと同時に、猿ぐつわの下から三田の呻き声が鋭くなった。

(未完)



実

験

責めの部屋

井風呂秋於 (写真も)

大柄な体躯に、可愛いとさえ言えそうな小さな目が、時折り凝っと、私を見詰める。

そして、その円やかな印象にもかかわらずそんな時の表情には、ふと、鋭さといったものが感じられぬでもなかった。

——郊外在住の公務員、四十二歳。

と、尋ねもしないのに自分からそう紋切りに言って、指で……テーブルの真ん中へ大きくゆっくり孝雄と書くと、「斯う、呼んでくれればいい……」

はじめてその口もとに笑みをうかべたばかりであった。

わざわざ本名を書いて見せたのでもないだろうし、それに、私が彼を、名前で呼ぶよう

なことはないだろう——そんな事を思いながら私は、先刻から縮こまっていた。

こちらが恥ずかしくなるような色白さとい、風格といい、その想像外の彼の『紳士』ぶりにどぎまぎさせられたのをきっかけに、それからずっと私は更に予想外の緊張感に襲われて、こここちになっっていたようだった。

——四月五日。日曜日。

言わばこれが、私たちの『見合い』であった。市街からいって彼のいう郊外とはまた逆方向にあたる郊外の家の、静まった一室。

先着の私が用意を整えて彼を待ち、やがて彼が到着した丁度その時、泣き泣きだったそれまでの空模様は一変したかのように青く冴

え、私たちのこの部屋を奇妙な白さと感じさせるほど、陽を注ぎこんできたのだった。

もっとも、この妖しげな『見合い』。

『紳士』と、『女装した男』が相対して醸し出す妖しげな雰囲気注ぎこまれた陽からして変異を遂げていたのかも知れない。

とは言っても勿論これは第三者的な表現。

私たちに、なんで『妖しげ』な自覚などあるのか。真面目も真面目、その緊張度から言っても、こっ恥ずかしさから言っても、世間一般のお見合と何等変わる処もないつもりであった。とりわけ私など、彼のその第一印象に衝動を覚えてからというものの、懼れやこっ恥ずかしさもさることながら、何卒この『見

合い』が成就してくれるように、彼のお気に召しますようにと心中いつしか祈るような気持ちになっていたのは事実だった——

「きみが本当に、この井風呂……？」

初めて挨拶を交わした直後、『見合い』に際して彼が最初に訊ねたのはこの言葉であった。彼は一冊の本を持っていた。私がこの陰部のごとき願望の募るままに、それをぶちまける手段としてあくどくこれまで利用させてもらった雑誌。その夢物語の、『縛られた花嫁』の頁をひらいて、彼の白い指は、その挿入フォトの一葉を差していたのだ。

「別人に見えますか？」

と私は上の空のまま、小首をかしげた。

「いや、似ているが……」

顚顚のあたりを指で押さえて、

「書いたことは、経験談？」

私は口をひらきかけたが、黙って、首を横に振った。

彼が今更この場になって、その様な事から話し掛けてこようとは思ってもいなかったのである。私たちの『仲介』役をつとめてくれた知人の再度の言によっても、私のこれまでの経緯は一応すべて、彼の耳に入っている筈であった。面白さ半分から（とは言っても素

質は本来にあり自分がそれを自覚していなかっただけのことだろうが）女装を楽しむようになり、いつしかその夢が欲しくなり拡げ

みたくなり、果ては夢では満足し得なくなり然し、小説などのようにうまくいかない。仕様事なく原稿用紙を相手にしてみたり一寸その気のある知人に強引に頼んで縛って貰ったり新奇をもとめてみたり……エトセトラ。

ともかく黙っていると、やがて彼は、
「すると、きみ。はじめてなの？」

何気なく言いながらも、そのとき始めて表情の隅に鋭い色を走らせたのであった。

——いつのまにか、部屋の内部に翳りが忍びこんでいることに私は気づいた。

あらためて彼を窺ってみても、彼の大きな軀はまるで巖のような感じで身動きひとつもしていない。

なにを考えているのだろうか。

その白晢の容貌は全く自然のもののようにあり、また何かを躊躇し何かを押さえている色を……微かに刷いているようでもあった。

私は、不安になってきた。この俚ぼんやりと調子を合わせて坐っていると、彼は矢張り何気ない顔で身動きし、立ちあがって、すうと帰ってしまうのではなからうか。

今まで書いてきた私の夢物語では、こんな場面においてはもうと、つくに、適宜に言葉が交わされて、どんな物語は進行している筈であったが、残念ながら現実はそう甘くはいかない。斯うしなければ……ああ言わなければと筋書は一応作って来たつもりであったがそれはただ、意識すればするほど胸の内を矢鱈とかき立てる役目をするだけ。外見はますます縮こまり、歪つに揺らいで、果たして彼の目にはどんな醜態として映っていたことであらうか？

その彼が、漸く身動きして……もつとも、その瞬間、私はぎょっ！とさせられたものだが……白い齒の色をこぼしながら微笑みかけてきたのは、窓の外だけが真ッ青で、部屋が先程の明かるさにくらべて、もう夕闇のような感じが漂っていた頃あいであった。

「……」

何かを言っただけがうなずいてみせた。

聞き取れなかった私のほうが悪いのだが、始めて正面から彼のほうへ顔を突き出し、耳をかたむけて眉根をしかめた。

しかし、彼のその微笑みから——間もなく私は或る安堵といったものを得た。

（……いいんですか？）

という風な意味をこめて私は、彼の目を瞞めていたのである。

この意味が通じてくれたのやらどうやら、彼はその小さな可愛い目をちょっと丸くし、双腕を僅かにひろげてみせた。

(おいで……といっているのだろうか?)

だが疑問よりも先に、私の躰はひとりでに浮き立って、ふらふらと、テーブルを回ってこうとしていた。

彼のすぐ傍まで行きながらふと足を止めてしまったのは、彼の瞬きの無い視線に気づいてカッと火照り、思わず俯向いた『其処』に真っ紅なドレスがあったからである。

「あ、待って……」

と、今度は言葉にしていた。しかし、

「あのう、……着換えてきます」

言葉の多くを知らない私は、それしか言う事が出来ない。ただ笑みを残しただけで、そくさと隣室へかけこんでいたのだった。

ドアを閉めたたん、せわしい火照りのうちにも微かな虚脱感があって、暫くは、次にする事を忘れた。

——『お見合いは済んだ』

うまくいったのだろう。

何よりも彼のあの微笑がそれを物語った。

すると、次は——

私の希望していた事を実現させてもらう段階である。女装『秋子』の自分にもどって、このささやかな希望を満たすべく、私は、胸をわくわくさせながら鏡台の前に立った。

この夜のために……わざわざ新調した(と言っても残念ながら安手だけど)純白のウエディングドレス。

それをいま、この胸の内を露わに示したような真紅の色のワンピースと着換える。

ヘッド・ドレスをかぶると、手袋をはめてブーケを持つ。

鏡を覗くと、いまようやく陽の目をみる、そんな欲びの表情に燃えた『秋子』の花嫁姿があった。思わず知らず胸のあたりを押さええていて、深呼吸を何度となく繰り返したのちそうっと、ドアをあけた。

どうやら彼は所在なげに煙草のけむりを吹かしていただけらしい。が、こちらを見て、急に呆れた時のような顔をした。

「やっぱり……」と彼は言った。

私は「やっぱり、こんな事をやるのか、ですか?」と言いながら、勿論ですとも、と胸につぶやき、歩み寄っていった。

彼は首を振り、いや、と言ったがあとは吞

みこんだように口をとじ、それでも近づいた私へ片手を差しのべるようにした。

「いいえ。これから……ふたりだけの『式』を挙げましょ」

私は、多分彼も気づいているに違いない窓際のカーテンの向こうへ、隠してあった三脚つきのカメラのほうを、ブーケ持つ手で、そっと指していた。

——間もなく、私たちは『仲良く』ならんでカメラにむかっていた。

「う……、汝は、この孝雄を、永遠の夫として愛することができるか?」

この晴れの日を写真に撮るだけと思っていて私に、不意に重々しげな口調を作って彼が言いだした。見あげると、いかにも真面目な表情ではあるけど、何となく、撫然とした色も窺えないことはない。

はい、とあわてて答えて、私も、「汝は、この秋子を永遠に妻として愛することが出来ますか?」

一瞬、白い閃光が、室内に満ちていた淡い水色の照明をはじきとばして、三メートルほど前方のカメラは、この私たちの、『結ばれようとする姿』を映し撮った。

彼がフィルムを巻いてくるあいだに、私は

今度は横向きになって、次のポーズを取りはじめていた。内奥のどこかにちよっぴり残っていた『固型』のものも、いま次第に溶解しはじめていくようであった。

彼が戻って来ると、私たちは微かな悶着を起こしたあと、なんとなく形がきまって軽く抱き合った。

仰向いて、半びらきにした私の唇へ、ふと奇妙な冷たさを感じさせて、彼の唇が触れてきた。彼はちよっぴり、薄荷の匂いをさせながら私の下唇を吸った。その『愛を誓う姿』もカメラにおさまった。

——倒錯とは、蜘蛛の巣のことか。

最初のうちは危険を懼れる事があっても、いつしかその巣の真ん中にこの心を充実させてくれる甘い極致の味の蜜があるように思えて、もう一切を顧みる事も出来ずにどんどん近づいている。

もっとも、『巣』は自分の内にあった。

だからこそ、自我の理を占めたこの巣に気がついた時にはもう当然にして自分ではどうにもならない粘着が始まっており、いくらもがけど悲しめども、今更他の世界へなど飛び立つことなど、許されもしなかった——と言えようか。ただ生きている限りは、もがいて

その巣の真ん中へたどり着いてみようとするよりはかはない。

しかし、いま、その途中にしてわれに戻る、私は友を得て、しかもその人の『花嫁』になろうとしている。『巣のなかの結婚』？だが……勿論と言っていいほど其処には苦しみなど感じられない。

結婚という常識的な意味への危惧こそ、無いとは言わないけれど、斯うなってしまった事に対する後悔も煩悶も不思議となかった。

これが決して巣の中にあった『蜜』だとは思っていなかったけれど、なんの今更の抑制心とて覚えなかったのは事実であった。いやむしろ、その『花嫁の座』には、この永年の願望が掛かっており、いっそ、これまでは単なる夢物語にしか出来なかった欲望のあれこれが遂々現実のものとなって今後に待ち構えている——と、そんな熱い嬉しい期待だけが掛かっていたと言ってよかったのだった。

無意識に私は『花嫁』らしくもなく大きな吐息をついて、彼から離れようとしていた。折角の、精いっぱいのはほえみも、深く俯向いてチュールの陰に隠してしまった。

彼が突然、腕にちからを籠めて……尚私の軀を引き寄せようとしたのはこの時だった。

仕様事なく私の望みを聞き入れてつきあっていた彼の、その憤懣がとうとう押さえきれずになったような荒々しさだ。

そして、ふたたび唇が……。

目をあけると、青黒く見える髪がみだれて私の額に掛かっていた。

その髪が、ひときわ揺れたかと思うと、感覚は宙に浮かされた時のように酔った。

数秒を置いて気づいたことは、抱き締められたまま……床の上へ横たえられようとしている事だった。私は漸く火の点いた調子で逆らいはじめ、唇が僅かに離れたときをねらって、

「ああッ、やめて！　ゆるして！……」

どだい、これこそ三文小説の台詞に違いない。それ以外のものではなさそうな哀願の言葉を——これだけは努力しても祈ってみてもどうにもならないシャガレ声で走らせていたのだった。

——なるほど、今想い出してみても彼のその時の遣り様は、私の『夢』を拒絶した暴力以外のなにものでもなかった。

どうやら最初から本気で強引に臨んできたらしい彼の様子に、それでは、とこちらも真剣になり、足をばたつかせ腕のピストン運動



を繰り返してやがて漸くその難から逃れる事が出来たからよかったものの、その時もしもその僥倖のするなりになっていたとしたら、ひょっとしたら今、私のこの心は……或る種の嫌いな、恐い、そんな傷痕の味だけを噛みしめていなければならなかったかも知れない——

私は、わざわざ新調したのに早や袖つけの部分の裂けてしまったウェディングドレスの裾を曳き曳き、自分ながら何やら意味も無い事を繰り返しつぶやき、部屋の片隅へと逃げたのだった。

そして、立ちあがって尚も私に襲い掛かるうとする彼のそんな様子を見て、私は始めて『そのこと』をハッキリと、真剣に願う気持ち

になっていたのだった。

「嫌、そんなやり方では嫌よ！」

もちろん私は、唐突的でしかない彼のそんな心情も一応わかっているつもりだった。

しかし、この僥倖すべてが終わってしまったてはたまらない。『そのこと』が頭から除外されてしまつては最早私の『花嫁』の『花嫁』たる所以もなくなってしまう。

私は欲しかった。

どうしても、この場で欲しかった。

『そのこと』つまり、責めを……

そして縄を……

相手にじっくり苛められることを望む内心と共にこの肉体が、感覚的にも、その責め縄の是非襲い来てくれる事を熱く乞うているのだった。

私の性癖は事前によくつたえてあり、理解してもらえたとも思っていたのに、彼のその『責めとも思えぬ暴力』に途端に、口惜しさがこみあげていたのだった。

——だが考えるまでもなく、この日の楽しみ

は、まさしく彼があつての事となる。

唐突をなじりはしたけれど、彼のその意志が望みが、『素直』に、この日の展開の幕を開けてしまったと執るのが本当だろう。——

なのに斯うして私は、意に副わない事としてあくまでもこの僥倖われれば抵抗してやる考えで、そんなことを口走り、あまつさえ逆に挑戦するかのように睨み返ししながら、どうでもこの場を自分の望む方向へ切り換えようとしていたのだった。ああ、なんとエゴに過ぎた、嫌な女装者であろう、私という人間は……

ところがこのとき、図らずして私の目には涙がにじみあがってくれたのである。

こりゃ大袈裟だと言われるだろうけど、この一世一代の大演技をも必要とするかも知れない場面にあつては、折りよく浮かんでくれたこの涙のきらめきを精々活用しないって法はない。

私は同じ意味の事を言いながら気張って、涙が尚も量を増すことに専念しはじめたのである。

すると幸運にも、やがて彼の、その精悍な顔が緩慢にゆがんでいき、緊迫感のあふれていたその姿態の、どこからともなく、淡やか

な弛みのいろが生じてきた。

例のカーテンの陰から、丸められていた縄を取って来ると、

「よし、それじゃア……責めろと言われて責めるのも阿呆面だろうけどこれからジンワリ苛めてやろう。だから、中途半端な音など上げるんじゃないぞ!……」

そのようなことを言いながら、先程までとは違った、不気味な、まるで人の変わったような彼になっていった。

——私は、腕をつかまれ引き出されると、ヘッド・ドレスをむしり取られ、すぐさま後手に縛られた。

経験の浅い私でもそれはあまり馴れた縄捌きとは言えなかっただろう。が、かえって遠慮仮借のないその縛り方は、私の被縛感をして徐々に歓びへと震わせていった。

そして縄止めを済ませた気配を察したとたん、この躰はまるで子供を扱うかのように軽々と、長椅子まで運ばれた。

俯向きに放り出されると、ドレスの裾を捲りあげられ、折角の下着も邪魔っ気そうな手付きで極く無難作に剥がれて、そして彼が、私へ第一の責め具として用いたのは例のストロボゴム球を繋いでいた——細くて黒いゴム

の管であった。

顔をねじり呻き声をあげはじめている私の目の前近くでそのゴム管を折ると短く持つて剥き出しにされた臀からばちん! ばちん! とはじき始めた。

二度、三度は左程には感じなかった。が、すぐ、はじくことに馴れたか、肌が好い音を立てて、やがて全身が硬直するような痛みが加えられてきた。

「……!」

私は声をひきつらせたようである。すると含み笑いが聞こえて、ゴムはじきは臀から太股に移った。

左右交互に丹念に皮膚を打ち鳴らしながらすこしずつ移動をつづけているようだった。勿論いちばん柔らかい部分を弾かれる時には、私の躰は弓なりに……反抗の勢いをも混えて足を撥ねあがらせていた。

ただ、盤石の重味で押さえこんできた彼がその繰り返しを途中からさせなかっただけのことであった。

——次に彼がしたのは、隣室から、プラスチック容器に水を汲んできて、それを、私の腰から下へ、ソファの上であるにかかわらず余すところもなく振り掛ける事だった。

そして、べたべたに濡れてしまった私の下肢を、脱がし奪った靴で、撲ち、押さえつけこすり廻し始めるのだった。

期待していた私のその『責め』とは違ってあまりにも無頓着な、そして不細工な責めらしくもない責め……

だが、これはどうした事だろうか。

いったい、どうしたというのだろうか。

しばらく経つと、私は模糊としながらもその痛苦の間隙を縫って何やら悦楽めいた情念を起こしはじめるのであった。

彼は時折り、靴の運びに潤滑油をさすかのように、水をながし掛けた。

ながし掛けては靴をめりこませ、蹴らせてはまた水をさす。

するとその都度、私は泥にまみれて、のたうちまわりながら——超自然の世界から伸びてきた悪魔の掌に愛撫されつつ破滅の淵へと曳きずり込まれていくような、そんな思いを昂ぶらせていく。

堪えきれなくなり私はあらぬことを口走っていたようだった。

と、その破滅の泥沼の中に横たえられ、朦朧としつづけていたらしい私は、そのとき、『泥の揺らぎに振られて』曾て覚えたことも

ないような匂いを嗅がされたように思った。
恢復と混濁の境界で、ふと自分の躰が浮きあがっていくのを知った。

身動してみたいにも、四肢が利かない。

そして、それは無理に努力したくもなかった。すると、その億劫さの奥まったところで絵にもならず、色彩の判別とてつかない幾つかの妖花が咲きみだれはじめた。

きつとそれは、『泥沼のほとりに咲いていた』のを見た所為かも知れない……？

小首をかしげていると、その妖しい花のむこうから、変にくぐもった声が聞こえた。

近くからでもあり、遠くからでもあるようなその声は、

「ちがう。もっと大きく…… その馨しい息を……そうだ、楽にして、楽にして、もっともっと腹がふくらむように、ぐうっと吸いこむんだ……」

と、私をみちびいた。

——もっとも、私たちが斯うなるについては、ちよっと、一風変わった『契約』が二人の間に成り立っていた。

一風変わった契約。

とは言ってもそれは、Mを本来自認してい

る私が、Sであると言ってきた彼を事前において一方的に『被支配』の立場へと押しやった恰好に依るものだったからだ。

例えば彼が、私と責めプレーの一夜を共にしたいと言ってきたとしてもその時の私のほうに彼と同じ意向が持たれていなければどうにもならず、でなければ、いくら彼のその望みが強くても『一夜の夢を共に』は成立しないとあった条件なのだ。勿論これは、私が最初の日に気に入られた上での話になるが——

ともかくそんな場合、私の意志が絶対的な役割りを果たすというものであった。

彼が私を欲しがってくれるとき。それは必ずしてこの私が彼を欲しがるときと一致をみなければならぬ。威張った表現で恐縮だけど、この一致がなければ、二人は顔を合わせること出来ず、意の湧くその時までお預けチンチンで我慢するよりほかないのだった。

当然、『お前を責めてやりたい』という彼をして、『彼に苛めてもらいたい』と願う私が、他に意味することなどあってこのような甚だ一方的に過ぎた、意地悪い条件を承諾させたのではなかった。

夢物語ならともかく、実際としては仲々どうして難問題の多過ぎるこの種の性質上——

こんな身勝手な厚かましい処置とて仕様事なく私は執らねばならなかったのである。

尚、これはまた『卑怯な手段』ながら……条件のひとつとして組み入れねばならない事があった。それは、『契約』するための『契約』として、私がこれもまた一方的に、その相手となってくれる男性の身許を大体の線ながら知り得なければならぬといった項目だった。

もっとも『被虐の女装者』としての、所詮は未知の人でしかない相手へのそのささやかなる希望は、幸運にして彼に快く受け入れられたようでもあった——。

○

さて、その日、私は所用があつて姫路まで出掛ける。簡単な用件は、すぐに済んで、その帰り途尼崎の友人に電話を入れてみる。

これは朝大阪を発つときから予定していた事で、友人が在宅であれば久方ぶりに訪問して近況のやりとりなど、してみたかったとも思ったからである。

案の定、午後からが忙しくなる彼はその時まだ家でとぐろを巻いて？ いた。これから寄ることを伝えて電話を切ると、目についた店で菓子折りをとめて駅へといそいだ。

——彼の家に着くと、彼は早速、私を二階へ引っぱりあげて、居間で何となく目つきを鋭くしている奥さんに挨拶ひとつ、ゆっくりとはさせてくれなかった。そして私が喋ろうとする前に彼はもう机の上にあったアルバムをひろげてみせて、『さあ、来い』と手招きをする。

起きているのなら、もう寝巻を脱いで着換えたかどうか、などと言いながら私が覗きこむと、写真はどうか、あれから後に撮ったものばかりらしい。しかも最近の物らしいのはまだ微かに定着液の臭いが残ってホンワカ鼻を刺戟するようだ。

私が坐ると、彼はすこし息まいた口調でフオート一枚一枚の説明をはじめた。

それを聞きながら、つい、フオートのなかの『美女』と——明かるい窓辺に坐ったのが運のつき？ で人一倍彫りが深い上に皺も多い四十男を露呈してしまっている彼とを見くらべる。

彼の女装歴はこの私より一年ほど浅いぐらいなのだが、さすがに性根の入ったその女装愛好の精神はまたあれ以来も見事な技術を生んだらしく、素晴らしい『美女』となった彼は実に誇らしげにその姿をアルバムにおさめ

ているのだった。

熱の籠った説明が一段落すると、彼は、今度は「Uさんがね……」と、その彼の彼でありこのフオートの撮影者でもある人のことを話題に乗せた。そして、以前にもました自分とその人との親密度たるや如何ばかりか——といった事を随分と酔ったような口吻で話したあと、その人が「いずれお前と秋子ちゃんと一緒にした責めプレーの撮影を行いたい」と言っていた、とその大きな目でこちらを覗きこんでくるのだった。

訪問した下ごころとしては例の私自身のビッグ・ニュースを話して、このような点においては先輩である彼に御意見なり御教示なりを仰ごうというところである。だが、矢張りイザともなると……迷ってしまう。

勿論、話す事が惜しくなったのでもない。

単純な話だが——積極的でまた実行力も備える彼とは違い、夢を追うばかりで実情としては当然相手にめぐまれずただ孤独な女装愛好者に過ぎなかったそのくせして、いつもヤケに落着いた振りをし、取り澄まして自分の殻にばかり閉じ籠って来た手前、それがたとえビッグ・ニュースに価するものだったとしても、或る日突然やって来て、それじゃ私も

……式で言うのが、急に恥ずかしく思えてきたのだ。

私は、「是非こちらからも頼みたい」と応えるだけにした。彼は嬉しそうに頷きながら「まだまだ『女性』として向上したいために、いずれまた何処かで、秋子と二人『研究会』でも催そうよ」と、言った。

結局私は、別にどうって事もない顔見せと彼の惚気話を聞かされに訪れただけのようであまり喋らせてもらう機会もなかったままにやがて家を辞している。しかし。

——灰色に変わった空が、重たく被さる工業地帯を、タクシーで通り抜けながら、私は、いつのまにか、今日の夜を、例の『第二夜』とするべく心に決めていたのだった。

すると、窓外を見る目が空虚なものとなり——夜までも待てない。いまずぐにでも彼に会いたい。間近に運転手さんの背中があると、いうのに身が燃えてくる。

車の座席は、そのままあの夜のソファの感触へとつながり、疾走のための揺れは、そのままあの夜の、あの妖しい律動にとつながってしまったのだった。

私は、胸に顔を埋め目をとじてしまった。

——わが家に帰り着くと、彼に今夜、都合を



る。ふと、気づくと、知人の私を見る目がなんだかおかしい。いつもと違っている。

斯うなると知人は私に『何か』を、聞きたがっているようにも受けとれる。どうやら、興味を持つ表情を完全には隠し切れていないようにも見えてくる。

うっかりしていると、何を訊き出されるかと、心許なかった。

水臭いのを心中で咎めながらもさて……などと呟きながら席を立つ。

たった一ふくみのウイスキーが喉を熱くさせて、その故だろう、外へ出るとタクシーを待つのに十分間も平気でいられた。

——私たちの、『愛の巣』に着いたのは五時をすこし過ぎたころであった。

彼が『帰って来る』まであと二時間足らずしかないことを確かめてから、私は急いで、おもちゃのような白い台の三面鏡に向かう。

一時間ほど掛けて化粧をすませると、下着をつけ、若草色のワンピースを着て、ロング・ヘアのかつらをかぶった。

この瞬間から、男性の私は消える。そのかわりに秋子という女が鏡のなかにあ

らわれる——

時計を見ると七時にちよつと前だった。

香水をつけながら、今夜はカメラなど要ることもないだろうと、持って来もしなかったくせにそんなことを呟きながら椅子へ行く。

そこではじめて肩の荷をおろしたような溜め息を吐いた。

……凝つとしてしていると、欲びが次第に、こみあがってくる。

間もなく彼は『帰って来る』だろう。

そのとき秋子は、ドアのところまでかけ寄り『お帰りなさい！……』と飛びついて口づけをもとめようかしら。

そのくせ、そのあとは彼にうんと反抗してやり、焦だたせ、怒らせ、どうしてもこの秋子を一責めしなきゃおさまらないところまで、持っていかなくちゃ……

想像する場面は——衣服や下着、ナイロン・ストッキングまで引き裂かれ、むしり取られ、そして縛りあげられ、撲たれ、猛りに猛り狂いに狂った地獄の責め手に凌辱されていく——といった悲惨かぎりないストーリーなのだが、もちろんそれは望むところだから、この想像の段階では楽しさこそあれ恐怖なんて有ろう筈がない。

私はひきつづいて用意を整えながら、ついハミングしてしまうのをどうしても抑える事が出来なかった。

——四時ちょうど、私は家を出た。

途中、知人の店に寄ることにする。とは言っても別に何でもない世間話を交わしながら、ちよつぱりウイスキーを馳走にな

クライマックス・シーンを想像するにおよんでは胸がひどく圧迫されたように痛み、その痛みを突き上げるようにして熾烈な悦喜がみなぎるのだった。

私は、凝っとしてはいられなくなった。

立ちあがると、狭い部屋のなかをうろうろと歩きはじめる。

落着くために何度も鏡を覗きこんでみるがそのたび、気がつくともうそわそわと歩き廻っていた。

——が、『帰って来た』のは、約束の時間より三十分も過ぎたころであった。

ノックする音と一緒に、「秋子……」と呼んでいる声が瞬間抑えに抑えてきた胸の内のものを爆発させた。

ドアが、そうっと開いていく……

私は駆け寄っていた。

そして、この前とまったく同じ姿の彼を間近にむかえて、もう何も言えずに、ただ精いつぱいの微笑みだけを浮かべて手を差し伸べていく。まるで、渴者が水滴を受ける時のように、ぴくつく表情の顔をのけぞらせ、かたむけて、そして熱っぽく喘ぎながら口づけをもとめていく……。と、その時だ。

「あッ……」

そのドアの隙間に、薄ら笑いを浮かべてこちらを覗きこんでいる男の顔を発見して私は驚きの声をあげていた。

「な……なに?! あんた!」

思わず、嘔みつくような声が出る。

すると、どうだろう、その——目玉ばかりが大きく痩せこけて見える男の顔はこの詰問というより噴怒に近い語気にもかかわらず、「ヒエ、へへ……」と声まで立てて笑ってみせたのだった。

いや、それよりも何よりも、また一段と私が驚かされたことは、この胴に腕を回して優しく引き寄せていた彼がゆっくりと、その時首をねじって「はいれよ……」と、男に手招きしてみせたことであった。

私はびっくり仰天もいいところで、呆気らんとして彼を見あげた。

（な、なにを言うんだろう、この人は）

瞬きも忘れて見あげていると、その男も男で、また「へへ……」なんて、下卑たとか言い様のない笑い顔でしかも悠々と入って来た。そして、どういうつもりなのか、露骨に眉をしかめる私をまだ覗き込むように見て胸の前で揉み手なんかを始めるのだった。

言わずもがな……

私の攪乱症状はこの時から起こったのだった。

「俺の、悪友なのさ」

しばらくして、彼は平気な顔で言った。

「鈴木、とでも呼んでやればいいさ。——でそこで、挨拶のいろいろは乾杯で、ってことにしたらどうかな。なア、秋子」

見ると、早や、ふたりのためにと取り寄せてあったテーブルの上の角瓶へ目をつけていた。

そして、「いや、これはどうも」と、その「鈴木とでも呼ぶ」男が言ったので気がついたのだが、その時にはもうこちらの彼はテーブルへ行って、なみなみとついだ……ふたつしかないグラスの片方を、私にではなくその鈴木のほうへ差しむけているのだった。

「ね! これはどういうこと?」

鈴木より先に彼へ駆け寄った私は、小声で然し語気を強めて尋ねていた。

「なにが?」

「ウン! なにがってことはないでしょ、ひどいわ、帰ってもらってちょうだい!」

「……はい、よ」

と、彼はグラスを鈴木に渡す。

聞いていないのだ。いや、彼は頭からとぼ

けようとしているのだ。

私に背中をむけて、カチリと鈴木とグラスを合わせると悠々とそれを口に含んでいる。

その彼の肩先あたりから、まだニヤニヤ笑いの鈴木がこちらを覗きこむ。

「……………」

私は、すうっと二人から離れた。

隣室への、ドアのところまで行って、くると振りむくと思いつきりその二人を睨みつけてやる。

すると、ちらっと一瞥してきた彼が何やら鈴木に囁きかける。と思うと、二人は顔を奇妙にしかめて卑怯な笑い方をした。

「おい、そんな処で何をしているんだ。早くこちらへ来てこのお客さまのおもてなしでもしないか！」

彼はネクタイをゆるめながら、その怒鳴り声とは裏腹にいかにも愉快そうだった。

二人とも、酔って此処へ来たのだな……とそのとき思った。

「おい！ 来いと言ったら早く来ないかっ」

漸く本物らしい怒声が飛んできた。

「でなけりゃア、俺たちが其処へ行くぞ。行って……その糞面白くもない態度にお仕置きをしてやるぞ！」

——一体、彼は本気だろうか、と思った。

彼自身はともかく、その言い草からするとこれもプレーの一種だからといったような節もあるしで……

だが、飛んでもない。

私にすればそれどころではない。

なんでそんな。彼の調子になど合わせられるものか。

いくら倒錯者の集いだとはいっても、それが『プレーの場』と決めた以上は、基本的に遵守し超えてはならない一線だってある、と私は日頃から信じていたからだった。

『ハプニング』は、双方プレーに入った時にこそ活かされるべきである。

でなければ、寧ろ『ハプニング』は起こしてならないものとし、プレーに至る道程では絶対否決的なものとして双方注意をしなければならぬ。

相手を信じ、相手を尊重してこそ、そのプレーの場においては華々しく『ハプニング』が起こり得るものであり、したがってその悦びが加味されていくわけではないか。

それが、プレーによってのみ生きる、倒錯者たちの不文律というものだろう。

彼は、私の『城』に『土足の者』を導き入

れてきた。

いや、彼自身が『土足の者』となって私に襲い掛かってきたのだ。

どのようなことを意図して、またどのような望みがあったのか知らないけれど、たとえ彼の、その心中が『私たちふたりのため』であったとしても明らかにこれは、プレー以外の『ハプニング』を起こした事であり侵してはならない領域を侵してしまった事になると、思い込んだ……。

私は混乱するうちにも寧ろ鮮烈といっていほどにそのことを感じて、やがて口惜しさのために身の震えていくのをおぼえた。

彼の喚き立てる声で耳はがんにんしていても、それを聞き分けることが出来ないほどその口惜しさは募っていき、間もなく、彼を信じようにもそれが出来ない絶望感に急激に胸を空虚なものとしていったのだった。

私がドアへ手を掛けたとき、
「待てっ！」

と、さげんで彼が近づいた。

「俺たち、これからこつてりとお前を苛め抜いてやろうとしてるんだぜ。うん？ 嬉しいと思ったら、それ以上は逃げようとするな」

「俺たち、だって？」



「そう。そうなのさ。ごらんの通り、今夜は二人掛かりでお前をよろこばしてやろうって寸法なのさ。当然、お前としては、この前の二倍は楽しめるってことになる——」

「そんなこと、頼みません。頼んだおぼえはありません」

「なに言ってる。……お前、マゾじゃなかったのか？」

「——！」

「お前が、本当にマゾだというのなら、頼んで責めてもらうより、頼みもしないのに受ける責めのほうがどれだけ快楽につながるものか、よくくわかってる筈だ」

「わかった。だからそういうわけで、予告もなしにあの人を連れて来た、と言いたいの

すね？」

「なんだ、不足か」

「不足？……違います。そんな事ではありません。……だから、今夜のところは帰らせていただきます」

「ふざけるな。帰すもんか」

「痛いっ。な、なにをするんです！」

「きまつてるじゃないか。縛るのさ、縛ってやるのさ。ほれ、お前の大好きな緊縛……」

「や、やめてください！」

「なあに、楽屋話を言ってみりゃ、この俺があつ男にちよいと縄捌きのいいところを見せてやるって段取りになっているのさ」

——狭せせこましい、私たちのやりとりは終わった。

私は、手首をつかまれ、ねじあげられた。

すこし反抗したとたんにドレスへ飲み残しの液体を振り掛けられた。

そしてそれまで『素直』

な見物客を気取っていた鈴木木きのほうへ押し出されていた。

「おい縄を取ってくれっ」

という彼の指図にしたがって、その鈴木はなおも下卑た（と私にはどうしてもそう見える）笑いを浮かべながら、縄を取って来た。（ああ……この男。この男は一体どのような神経で、此処へやって来たのだろう！彼の『悪友』だなんていうけれど、本当なんだろうか？——）

絶えず薄ら笑いを浮かべて、握みどころもない表情。そのくせ、目だけには、露わな興味の色を赤黒く、めらめらと燃え立たせている。そんな男の菜っ葉いろの作業服姿を、頭のとっぺんから足先まで、じろじろ睨ねめ付けてやりながら私はここにうめいていた。

招かれざる客と言えはまだ聞こえはいい、乱暴極まる闖入者としか思えない、その男の——目の前で縛られる、その恥ずかしさよりも、憎悪のほうの方が勝って、この軀は灼かれるような熱さであった。

縄を受け取った彼は、そのとき一際気張ったかのように、ウツ、ウツ、と唸り声すらもらしながら私を縛りはじめた。

その『怪力』を知る私が、もう斯うなっているは抗って暴れてみても仕方がない、と諦め、跪ひざまづいてしまったのをいいことに、益々おもちやのように扱いながら……首縄を掛け、二の

腕にこみいった縄掛けをし、胸には馴れぬ菱形などつくろうとするのだった。

そして、

「……どうだ、この俺の女房の手は本当に小さくて、可愛いだろう?」

縛る途中で手をやすめ、鈴木のほうへ嘯いたりする。「この手の指が、な、イザという時には俺の目の前でゆらゆらと面白いダンスをはじめのさ」

やがて、縄捌きの『披露』を終えた彼は、
「——さあ、この強情っ張り女をどう責めてやるか、だ」

そして、

「その責め方は、そうだな、まずお客様に敬意を表する建前から……お前、考えてみろよ」

鈴木を見て、頤を杓る。

「うん、そうでンなあ」

と鈴木は、もっともらしくグラスを持ち上げて目を細めるポーズ。

「わてなら、……わてがやるんなら、猫にかんぶくろ、でっしやるなあ」

「ねこに、かんぶくろ?」

「そうでンがな。紙でも何でも首まですっぱりかぶせ、ケツでもぶっ叩いてきりきり舞い

させまんな」

「おもしろい。……で、ほかに?」

「うん。ほかにというと、平凡やろけど亀の子返しの股裂きか、擦り責め、それとも穿いてるもん取ってこのまま街まで行って放っばり出しとく」

「ふん、なるほど」

「それとも、いっそのこと、ここで口のなかに横木でも噛まして、ええ物、ペロペロでもさせてやりまっか。それともわてがシャブシヤブさせて、あんたのほうは……」

「ひッ、ひッ……」

と、彼は肩をすばめた。ご満悦の態で、とても『紳士』なんてものじゃない。いや『紳士』という人間の、これが本当の姿なのだろうか。

「それとも……」

と、鈴木は悪乗りした。

「まずは手始めに、このまま引っくり返してその綺麗なおべべをずたずたに……」

「お、それがいいな、それからひとつやってみるか」

「へえ。ほんまに、やりまんのか?」

「なんだ、お前、俺が実行しないとでも思っていたのか」

——私は、

「やめて!」

とさけんでいた。悪乗りもいいところ、口から出まかせにも程があるその男の責め方法の案を、そのまま『素直』に実行に移そうという彼の馬鹿々々しさ。

奇妙な心理だけど、「この甲斐性無し、意気地無し!」と腹が立って仕方がない。

……誰が、誰がそんな責めなど受けてやるものか。

「おい、手つだえ!」

突然、彼が襲ってきた。

首縄に手を掛けて、その『怪力』は必死にばたつく私を、簡単に横倒しにする。

「おい、そんなこと教えたからには、持っているだろうな」

彼は、グー・チョキ・パーの、チョキをつくって、私に截りこむ動きをしてみせた。

「いや、残念ながら持っているのは……爪切りだけで」

「阿呆」

「そ、そんなこと、いうたかて……」

「よし、交替しろ。向こうの部屋へ行ったら何かあるだろう、俺が取ってくる」

肩をつかまれて私は俯伏せにされた。いそ

いで屈みこんだ鈴木が、彼のその手と交替する。と、私の顔の両側へ、指を反らした馬鹿でかい足が、じりっ、じりっ、と迫ってきて、強烈にいやらしい臭いが、鼻をついた。

「くさいっ」

「はあ？ なんですか」

「放して。その手を放してっ」

「そら、あきまへんわ」

暴れると、その指を啜えそうになるので、動くと言えるほども動けない。

（この嫌らしい男！ 帰れ、帰れ、帰ってしまえっ——）

追いつめられると人間、どうやら単純になつてしまふらしい。その男への怒りも憎悪も一直線化してきた。

肩を押さえられていなければ、本当に私はその足首あたりへかぶりついていたかも知れない。

私は思いきり足を飛ばした。この嫌らしい男を蹴り上げるつもりで……。

「……よし、押さえているよ」

そのとき戻つて来た彼の声が出て、ちょうど撥ね上げたばかりの足をつかまれ矢庭に、ぐっと押しひろげられた。

思わず腰を浮かすと、いきなりぱしっと叩かれた。

「こら、うごくな！ うごく……この柔わ肌にこいつがぶすりだぞ！ それでもいいんなら話はべつだが……」

成程、それと同時に内股にひやりと何かの冷たい感触があった。反射的に、息をとめてしまう。

「おっと、△△さん……」

と、どうやら彼の本姓らしいのと言って、そのとき鈴木が嘴をはさんだ。

「どうせやるのなら、まずそこから切り抜いてみるのも一興でっせ」

「うん、そうか。……よしきた」

——私は、もう目をとじていた。

彼は、私の押しひろげられた足の間にあるらしくて、その膝は盤石の重味で膝裏を押さえつけていた。

顔のほうでは、意識してかしないでか、その穢い足が触れてきて、こじるように蠢きだしている——。

ぞっとするような、気味悪い感触が円をつくって這った。

「うふふ。切り抜いたぞ」

「へへへ……お見事だな」

「次は、どうする」

「どうするって……えへへ、あんたにおまかせですわ」

「おい、そっちは大丈夫か！」

「え？ こっち？ ……大丈夫です。暴れたらこの首が締まることぐらい、本人は判っているのと違いまっか。やけにおとなしくしてまっせ。なんなら……要心のために猿轡でも噛ませときまっか？」

「なあに、いいだろう。実はこいつ……こんな事ぐらいで悲鳴上げちゃうようなタマじゃない」

「へえ、そうでっかあ」

——苦痛と混迷のうちに、また別個な、何かを冷たく思索しようとするものが、芽生えていた。凝っと、静かに、或る一点をみつめようとする気持が押しつけられている胸にひろがっていった——。

（この、たった二度目の夜が、彼との別れの夜になってしまおうとは！……）

一瞬貫かれるような感銘と同時に、はつきりと脳裡に刻みつけられたのは、このことであつた。

——（了）——

被虐の旅シリーズ……………

続・求める人

由利 美千子

窓の外の景色は、いつまでもあじさい色の夕暮れの中に息づいていた。

私は青い鎖で縛られ、胸もおなかも書類をはさむクリPPERではさまれて、針ねずみのような姿で、あえいでいた。

その小さな中庭は、まるで私のために、しつらえた檻のようだった。

庭といっても草木はない。畳を二枚か三枚敷ける位のせまい空間に砂利を敷きつめ、背の低い石灯籠をおいてあるのだ。部屋とは障子でしきられ、硝子戸ごしに外のテラスに通じる。テラスの外は海だった。

もし海に点々としている舟の中から、望遠

鏡でこのホテルの七階のテラスを見上げたら硝子戸越しに私の異様な姿が見えるかもしれない。

青い細い鎖で私は後手に縛られ、鎖は首にまわされ、さらに両方の乳房をゆがめて肌にくいいていた。

そして私は砂利の上へ正座させられて、胫にも腿にも鎖がまわされているのだ。そしてクリPPERをはさまれて……。

「食事にしよう」

彼は、やっと脚を固定していた鎖をといて

くれた。

ほっとする私に、

「キミは白状するまで、そこにいるんだ」と言った。

「ビールのせんをおしつけたといたいんだろう。今、ためしてやる」

彼はビールのせんをあけてもってくると、

私の胸へおしつけた。それは、クリPPERではさまれるほど痛くはなかったし、ギザギザのあとは出来ても、肌と同じ色で残るだけで赤い痕にはならなかった。

「そら見ろ、違うよ。この痕はこうしてつけ



られたのだろう？」

彼は私を抱くようにすると、肩へガブッと噛みついた。

「あっ！」

と、私は思わず声を出した。しかし、すぐに歯をくいしばって、その痛さをこらえなければならなかった。

彼は、私の肩の肉をかみ切るように歯をたてている。

「ううう……」

私は、うめいた。

彼は、やっと唇をはなしてくれたが、その痕を私が見ようとする暇もなく、もう片方の肩へ歯をたてた。

彼の腕の中で鎖とクリッパーがチャラチャラと鳴った。彼は片手で私の後手に縛った所を下へ引いたから、私はのどの皮がさけるかと思うほど、顔を仰向けた。そののどに鎖がくいこんでいた。

「どうだ。これはキミが誰かに、こうやって痕をつけられたのだろう。見てごらん、同じ痕だ」

彼が噛んだ所は血がにじんでいた。

私が自分で自分の歯をあてた二の腕は、もう赤さが消えかけていた。

「先生、本当に自分でしたのです。先生に会いたくて……先生にいじめられたくて……」

私は言った。

「じゃあ、どうやって噛んだのか、やってみてごらん」

彼にいわれて、私は腕へ口を近づけようとしたが、鎖にまかれた私の体は、首をわずかに肩の方へ向けられるだけだった。

「噛める所を噛んでごらん」

私は上半身を丸くして、口を膝へ近づけようとした。胸やおなかをはさんでいるクリッパーが重なって、痛さを増した。

それをこらえて私は膝頭へやっと口をつけた。しかし、口はとどいたが噛むには後手と首を結んだ鎖にゆとりがなかった。

私はいたずらに膝頭をなめるだけだった。

彼は笑い出した。

鎖とクリッパーで飾られた女が、必死になつて自分の膝頭をなめている図は、随分滑稽だったのだろう。

「もういいよ。けれど許してあげたわけではないんだよ。膝小僧をなめても仕方ない。これをお食べ」

彼は卓から、さしみの鉢と醤油の入った小さな皿をもってきて、砂利の上へおいてくれ

た。

「今日はキミはそこで食事をするんだ。動物園の動物は足をつながれているのがあるね。

キミも、そうしておこう」

彼は私の片方の足首を鎖で石灯籠につないだ。

「さあ、このままで食べなさい。食べないとひどいめにあわせるよ」

私は膝について、後手のまま、さしみを口にくわえた。

「お醤油も、ちゃんとつけるんだよ」

彼にいわれて、私はおさしみを口にくわえて醤油のお皿へしたし、ツルツルとのみこんだ。

彼は、そんな私を面白そうに見ながら、ビールをのみ、自分もおさしみを食べているようだった。

「吸物もあるよ」

彼はおわんをもってくると、少しはなれた所へおいた。

私は、つながれている脚はそのままに、出来るだけ股を開いて、そのおわんに近づき、膝をつこうとしたが、それでもまだ届かなかった。

「ほれ、もっと近づかなければダメだ」

彼は箸のうしろで私の尻をついた。

「へただな。ほれ、もっと……」

尻をつかれて、私はしゃがんだ。

「そのまま寝たら届くよ」

いわれて、私は砂利の上へ、うつ向けに体を横たえた。

胸とおなかをはさんでいるクリッパーが、こすられて言いようのない痛さだった。

私は口をおわんに近づけるとどこか、その痛さで動けなかった。

「どうした？ さあ」

彼は足で私の尻を蹴った。

ジャラジャラと、鎖とクリッパーが非情に鳴った。

「痛い。……おねがい、クリッパーだけでもはずして……」

私は哀願した。

「ダメだ。それはお仕置なんだから……さあ吸物をお吸い」

けれど、両手の自由が奪われていて、片足を石灯籠に固定された私は、砂利の上へ這いつくばって、動きようがなかった。

おき上ることさえ出来なかった。

「だらしない奴だな。じゃあ、食べさせてやろう」

彼は私の背中に、どかっと腰をおろした。

クリッパーの痛さが加わった。私は、ものを食べるどころか、その痛さにたえるのに、荒い息をしていた。

「なぜ、こんなめにあわされるの。もう、かんにんして。クリップをはずして……」

私がいうと、彼はかえって邪慳にグリグリと自分の体を動かした。

背中の上に、どかっと腰かけられてグリグリ動かれたら、私はその尻の下でクリップにはさまれた肌を、さらに強く砂利にこすりつけることになる。砂利というより小石というのだろうか、装飾的に敷きつめてある小石はソロバンの玉と同じである。彼の体重は私を圧迫し、ソロバン責めのような痛さに、私は呻いた。

彼は、そうやって無理やり私の口を開けさせて、御馳走を食べさせようとする。私は彼の方へ顔を向けることさえ困難だった。

「よし、他のポーズにしよう。折角、いい形の灯籠があるのに、ただそれに縛っておくだけでは、つまらないね」

彼は何を考えたのか、ゆっくりと私の背中からどくと、私に手をかけて、起き上らせてくれた。

クリッパーも、はずしてくれた。

私はほっとして、やっと普通の息が出来るようだった。

「リーン」

と、室内電話が鳴った。

食事が済んだら、床をとらせてもらおうという催促の電話だった。

「まだだ。もう少ししたら知らせるよ」

彼は答えていた。

「仕方ない、食事をすませよう。旅館はこういう点が面倒だね」

彼は私の鎖をといてくれた。

「真っ裸では逃げ出せないね。さあ、一緒にこっちで食事しよう。お仕置は、それからあとだ」

私は自分の体を見まわした。赤や紫の痕が模様のように私をいろどっていた。

彼がつけてくれたその痕を、私はいとしいもののように手でさわった。ヒリヒリする痕もあったけれど、アザのつきやすい私の肌はその痕のわりには痛くなかった。

しかし、全裸で食卓に向かうのは恥かしかった。それをいうと、

「鎖でフンドシをしてやろうか」と、彼は言った。

「厭！」

その方が、まだ恥かしい。

私は違い棚の上においてあった宿のタオルをとって、ビキニのパンティのように前だけおおった。

しかしどんな姿をしていても、ドアに鍵がかかっているから安心だった。

「どうだい、縛られずに食事するのはたのしいかい？」

彼がきいた。

「さあ……？」

たのしい中に何となく物足りないものがあるのは何なのだろう。私は、よっぽど縛られることに憑かれてしまったのだろうか……。

「大分、痕がついたね」

彼は言ったが、私は彼の愛のしるしのように、その痕が嬉しいのだ。

出来れば、もう一度縛られて、犬のように皿に口をつっこんで食べてもいいと思ったが夕飯の膳を片付けて、寢床を敷いて、早く仕事から解放されたがっている宿の女中を、そう待たせるわけにはいかない。

「ビールとおかずを少しおいてもらって、あとをさげさせよう。キミは浴室へ入っておいで。おや、猫が着物を着るなんてきいたこと

ない。キミはハダカでいなければいけないんだ。まあ、又、あとで赤や紫でいろどってあげるから、風呂へ入ってその痕をこすってごらん。多少、早く消えるだろう」

彼は私をバスルームにおいたてて、室内電話をかけた。

私は風呂へつかりながら、彼が鎖をしまったかしらと、漠然と考えていた。

○

さっき私は石灯籠につながれていたが、石灯籠といっても、さし絵も写真もなかったらどんな形のものを考えられるのだろう。

奈良の春日神社の参道にあるのは大抵、丈が高く細長い。

どんな石灯籠でも、宝珠というのが、てっぺんにあって、笠があり、火をともし火袋といわれる所が台の上にあって、下の台につながる竿の部分があるものだ。

これは幼い時に母から習ったことだった。私の家の庭にも石灯籠があった。灯をともしすことはなかったような気がするが、苔むしていたのと、その笠に蛙がとまっていたのを覚えていた。

この旅館の中庭にある石灯籠も、庭園用の低い形のものだった。

雪見灯籠というのだそうだが、笠が平たくひろがって、竿と呼ばれる脚が短い。そして笠の上の宝珠は元来、丸い形のものなのに、ここのは尖っていた。

それを彼は目にとめていたのだ。

宿の女中が中庭に面した四畳半に、一つの寢床をとって下った。

彼は何もいわなかったのだろうか。

九州では、アベックの客に、二つの敷布団を敷かないのだろうか。

けれど、それは、私がチラッと見た感じでは本当は二つの敷布団を一つにつけて敷いていたのだ。

私は風呂に入り、裸体のまま、女中さんのさがっていく気配を探っていた。

そして、彼が再び、ドアへ鍵をかけた時バスルームのドアをあけた。

「もう済んだのね」

私は言った。

これからが私たちの世界なのだ。

「両手を前にお出し」

彼が言った。

彼の方へ差し出した手に鎖がまかれた。

細い青い色の鎖が手首にグルグルとまかれていく時、私は被虐のよろこびを感じた。

彼は私の足首も一つにして、鎖をまいた。しかし、それは歩けるように、多少のゆとりをもたせていた。

「さあ、キミの檻へ帰るんだ」

彼は言った。

私は小さきみに、中庭へ歩いた。

ヨタヨタと、まるで中国の昔に、てん足といて、足を小さくされた女が、小さな靴で歩くように、お尻を振って、小さきみに歩いていった。

きれいな小石を敷きつめた床と、石灯籠が待っていた。

彼は私を横抱きにかかえると、石灯籠の笠の上へ私の体をのせた。

「痛い！」

私は思わず言った。

石灯籠の上の宝珠の尖端が、私の背中を突いた。

しかし彼は私の腕を上へのぼして、手首を結んでいる鎖を、石灯籠の台へ巻きつけて固定させた。

そして、足首を一つにした鎖を、同じように石灯籠の台へ結びつけたのだ。

私は弓の弦のように、石灯籠の笠の上へ体を固定されてしまったのだ。

二つの乳房は無防備に上を向いて、乳首はとがって天井をさしている。

何よりも背中が痛かった。

私は体を浮かそうとしたが、それを知った彼は、手首をよけいに引いた。

私の背中はどうよけようもなく、宝珠の尖端にあたった。

「痛い！」

私は思わず声に出した。

「きれいだよ」

彼は平然と言った。

私の体は石灯籠の尖端を軸として、のびられるだけのびているのだ。

乳首はもとより、私の恥かしい所も堂々と上を向いている。ピキニスタイルでかくしたタオルなんか、いつの間にかはずれていた。

「さあ、もう一度、クリップで飾ってあげよう」

彼は先ず上を向いて、かたくなっている私の乳首をはさんだ。

「痛っ……」

私は、うめいた。

「唇を封じること出来るけど、ボクはしないよ。それでは音色をきかれない。猿ぐつわも厭だ。うめくなら、うめくがいい。助けを

よびたいのなら大きな声を出してもいいよ。さあ、どうだ？」

彼は私の延び切った腕の、二の腕のやわらかい所をクリッパーでつまんだ。

「痛い！」

私は思わず声をあげた。

右も左も、私は二の腕をクリッパーではさまれた。

それも、肉ごと深くはさまれるより、肉と皮膚とを浅くつまんではさまれる方が痛かった。

胸もおなかも、腿も……。

彼はもう、女中さんに邪魔されることがないと思ったのか、カバンの中から、ありったけのクリップを出して、私の肌をつまんでいた。

大きいのも、小さいのもある。

大きいのはバネもきつい。

私の体は再び針ねずみのようにクリッパーに飾られた。

石灯籠の笠の上に、思い切りのばされた私の体なのだ。

それに大小のクリッパーを、全身にといっていくらはめられた姿は、人間でも獣でもない、何か別の世界の生き物がとらえられ



読者ギャラリー 「大奥残酷絵譚」 浪速伸浩

ているようだったに違いない。

彼は私の苦悶を満足そうにみていたが、ピアノを弾くように、私の体の上のクリッパーを横なでにさわった。

「あっ……痛っ……」

私は口を大きくあけ、天井に訴えた。

私の頭は下にさがり、私には私の姿がみえ

なかった。

彼の指が私の皮膚をつまんだクリッパーをなでると、私の痛さは増した。

その痛さの中で、彼は私の乳首をはさんだクリッパーをはずし、乳首をなげた。

彼の手が、他のクリッパーを横なでにする
と、それは痛みが走り、その同じ動きで彼の

手が乳首にふれると、痛みと別な感覚が体を走った。

ついに彼のクリッパーは、私が予想し、惧れていた、いじめ方をしようとした。

その痛さ……。

唇のようなやわらかい皮膚にまで、彼の手で金属の飾りをつけられてしまったのだ。

「痛い……」

私の目から涙がこぼれた。

「痛い……痛い……」

私は訴えた。

どんな形で私のやわらかい肌がはさまれているのか……。私は想像も出来ない。

「痛かったら誰に噛まれたか言ってごらん」

彼は言った。

まだ私が自分でつけた歯型のことを気にしているのだ。

「キミは若い男と二人だけで遊びに行った。

そうだろう？ オバさんが言っていた。その男と何をした？」

「何も……」

私は説明出来なかった。

彼のいう若い男、伊波を、椅子に縛りつけていじめたのだ。そんなことを彼にはいえなかった。

「キミは今、身動きも出来ない。いい恰好に
されているんだ。いくらでもキミを責めるこ
とは出来るんだよ」

彼は煙草に火をつけた。

「キミのおへソは恰度、灰皿のように上を向
いている。どうだ、熱いか？」

彼はタバコの火を私のおへソに近づけた。

私は本当に身動きも出来なかった。やっと
背中を突く宝珠の尖頭をさせているのだ。身
動きしたら、背中では錐で突かれたような疼痛
がおそうのだ。

彼は、おへソの中へわざと灰をはたいた。

「これを焼かれてもいいのか？」

彼はタバコを吸い直して、赤い火を強くみ
せると、私に近づけた。

ジリジリと音がして、変な匂いがした。

「熱い……」

私は思わず言った。

「これは熱いうちに入らないよ。どうしても
言わないのなら、もっと熱いことをしてもい
いんだよ」

「でも、本当に、自分でつけた痕なんです。
どんなに責められても、私が私でつけた痕な
んです。ゆるして……」

「キミは強情だね。では、ほんとに熱くして

やるか」

彼はカバンの中から、薄い紙包みを出して
きた。

もぐさだった。

彼は私のおなかの上へ、その一つつまみを
のせた。

私は、もちろんそれをふりはらうことも出
来なかった。

彼は別の一つつまみを腿の上に、ゆっくりと
のせた。

そして、別の一つつまみを、もう片方の腿の
上へものせた。

そして、彼はいくつかのもぐさの塊を、弓
なりに縛られた私の体のあちこちに小さなコ
ブにした。

私は、どうしようもない。

「本当なの……信じて……私が私でつけた痕
なの……」

ただ、そうくり返した。

彼は皮肉そうな笑みをうかべて、そのもぐ
さへ次々に火をつけていった。

「熱う……」

ようやく燃えつきた一つが消える頃には、
別のが燃えてくる。

「熱う……ああ……熱う……」

私は息つく間もなく絶叫した。

もがけば背中を突いている宝珠の尖端が私
の肌をさした。

右にも左にも、よけようもない。

石灯籠に固定された体は、ただ、呻くだけ
だ。

私は体中から煙をあげて呻いた。

彼は、もぐさの上に、もぐさを足した。

私はもう、彼の囚人というより獣だった。
赤や紫の斑点のある白い体は、もぐさの煙

の中で、のた打っている。

胸もお腹も脚も……。クリッパーで、はさ

まれ、お灸をすえられ、泣いても叫んでも、

彼の思いのままにうごめいているのだ。

私は彼の愛玩動物なのだ。人間の女ではな

いのだ。鎖をまきつけられ、一匹の白い獣に
化身してしまったのだ。

私の口について出る言葉は、もう人間の言
葉ではない。

「ううっ……くくっ……」

私は呻く。

言葉にならない言葉で呻く。

そして、鳥原の夜は更けていった。

(この章完)

『ヤプー』の書評に思う

『科学朝日』から

山口 広

わが「奇譚クラブ」は異色ある風俗誌として、幾多の苦難を乗り越えて、二百七十号に近づかんとしている。この「奇ク」の文献誌の価値を高めたのが、沼正三氏の「家畜人ヤプー」である。もちろん他にも文献としての価値ある多くの研究、考証、創作、通信などがあるが「ヤプー」の書評が、週刊誌や文芸誌に見られるのは当然のことであり「沼正三を探せ」などの見出しは、センサーショナル好みの週刊誌としては、売り上げ増加を狙う一手段とも受取れるであろう。

しかし、専門家向きのものを除けば、我が国では最も高級な科学雑誌であろう「科学朝日」の一九七〇年七月号「科学朝日図書館」のページに、「家畜人ヤプー」の書評を見つけたとき、私は驚きと嬉しさで、しばらく呆

然となった。

慶応義塾大学医学部・分子生物学の渡辺格（わたなべ いたる）氏が、「ヤプー」の内容を分子生物学者の眼で見、一ページ（十六字詰め、一三四行、横書き）にわたって書評を書かれている。四〇〇字詰め、五枚程度であるが、文芸誌に載った作品そのものの書評とはちがった意味で、たいへん興味をそえられるものがある。

渡辺氏はこう述べていられる。（以下「」の中は、原文からの抜粋）

「異色のマゾヒズム小説として、評判の高い『家畜人ヤプー』を編集部の依頼で読んだ。これは、多くの科学者が、関心をもっている。『医学生物学の発展と人間の未来』という、これからの大きな課題を考える上に、一つの

重要な問題を投げかけていると思われる。

マゾヒズム文学という立場ではなく、科学・技術の発展が、人間をとんでもない方向に暴走させるのではないか、と心配している一科学者の立場から、感想を述べてみたい。」と前おきして、渡辺氏は「自然科学の中心が物理的なものから生物学的なものに移りつつある現代において、今から始まるとしている『生物文明』が個人の生活や社会体制に、絶大な変化を与えるであろう」とされ、「そしてそれは人間にとって極めて危険な方向に進む可能性を持っていることを予想」されている。

「試験管ベビーが可能になれば、女性は出産から解放され、社会活動上の位置がきわめて高くなり、『家畜人ヤプー』のイース帝国の

ような女権国家が生れる可能性もあり、その時の男性の位置は、著しく変ったものになっているであろう。」

「次には、精神的改造が現れ、はじめは精神障害者の福音となろうが、これを使って、他人に奉仕し使役されることを幸福、あるいは快楽と感じる人間をつくり出せるようになるであろう。そのような時代には、人間の肉体を他人の道具として使えるように改造する技術も発展しているであろう。このような「道具人間」は、現在のわれわれの目から見れば悲惨きわまりない、許すべからざる存在であろう。が、当人らは幸福と快楽を追求する主体性をもっており、そのような状態こそ幸福であると主張するかもしれない。こういう状況下で提出される「人間存在とは何か」「何が幸福であり自由なのか」という根源的問いかけには、現在では、的確な答えはまだできないのではなからうか。」

『家畜人ヤプー』は、この点で、意味深い示唆を与えてくれる。小説は、一九六〇年夏、日本留学生、瀬部麟一郎とその婚約者のドイツ女性クララが、（以下、小説のあらすじが述べられ）……ところで、小説はひとまず終る。」

「しかしこの小説は、作者の意図したかどうかは別として、核危機と生物学的革命を乗り越え、地球環境という制限をも打破ったあとの



読者ギャラリー「洗面附属台」春川 ナミオ

人間を予測する上に、一つの重要な参考となるものである。」

「作者は、マゾヒズム小説としてきわめて冷静に物語をすすめてはいるが、その背後には「人間という存在は何か」、人間の未来はどうなるか」についての鋭い目をもっているのではなからうか。人間を道具として使う文明になるくらいなら、今のままの機械文明の方が、まだまだはるかによいのではないか、

と思われた次第である。」

人間は一人一人が物の見方も考え方もちがう。文芸誌と全く違った見方から、科学朝日が『家畜人ヤプー』を取上げていることは、「奇ク」の読者として、非常に嬉しいことである。

渡辺氏の——「生物学の未来」の恐ろしさを暗示する——と題したこの書評は、ごく近

読者ギャラリー「サディスティン」岡 たかし



い将来に、生物学・医学の分野で、あるいは
つい先ごろ学会が作られた未来学の分野で、
必ずや話題の焦点に「ヤプー」が置かれる可
能性を示すものとして興味がある。

これはまた「奇譚クラブ」がともすればア
ングラ的な雑誌として、世の「有識者」から
指弾される存存から「人間とは、幸福とは何
か」を問いかけ、答えを出そうと努力してい
ることを、世間に認めさせるチャンスの一つ

であろうとさえ思える。

極めて複雑な有機体である人間は、今や地
球を飛出し、宇宙空間をすら征服しようとし
ている無限の活力を持つている反面、弱い醜
い一面を持った生物である。人間の最も動物
らしさを持った一面が、生であり性である。
この人間の弱さと醜さを最も赤裸々に表現し
ようとしているのは一流の文芸誌であるが、
その意味では、主としてSMの世界に限られ

てはいるが「奇ク」も一流の文芸誌であるこ
とを痛感させられる。

渡辺氏は

「このような『道具人間』は、現在のわれわ
れの目からみれば、悲惨きわまりない、許す
べからざる存在であろう」

と論じられるが、「奇ク」誌上に見られる
数々の真情告白、体験、そして創作には、あ
る意味から云えば「道具人間」が幸福を感じ
快楽を追求しているのが、はっきりと現われ
ている。

たとえば辻村さんのカメラハント、これが
全部真実であるならば（失礼）Mの性向を秘
めていたとしても、表面はあたりまえの性格
を持った女性が、徐々にSMプレーによって
縛られ、鞭打たれ、羞かしめられることに喜
びを感じるようにまで飼育される過程が、刻
明に描写されている。

こうした点を思えば、「奇ク」の編集部の
努力は（営利の面はもちろんあるが）人間
の存在の根源を探求すると云う点で、まこと
に偉とせねばならない。

「ヤプー」の書評を通じて、「奇ク」が長く
存続し、なお一層の発展をなしとげるように
祈る気持が強められる。

はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

連載小説

花

はな

と

蛇

へび

団 鬼 六

続篇（第六十七回）

鬼女の奸計

薄暗い地下牢の中にまる二日監禁された千原美沙江は、生きた心地もなく蒼ざめた表情で冷たい床の上に坐っていたが

「さ、お嬢さん、今日で貴女は無罪放免よ。友子と直江が、お金を持って来たからね」と大塚順子に云われ、顔に生気が現れた。「ほんとに、友子さん達が——」

美沙江の美しい瞳から、これでやっと救われたという嬉し涙があふれ出る。

「辛い思いをさせてごめんなさいね。でもこれで自由になれたんだから、恨まないでほし

いわ。さ、早く出てらっしゃい」

順子は田代にチラと眼くばせして牢屋の錠前を外した。

すべて、田代と打ち合わせた事である。

千原美沙江が牢舎の中から出て来ると順子は、いわゆる猫撫で声になって

「貴女のお嬢様にも随分、辛い思いをさせてしまったけれど、みんなここだけの話にしてほしいわ。その方が、お互いのためですものね」

「あの、お嬢様は今、どこに——」

「奥の間で休息なさっているわ。さ、行きましょう」

千原美沙江は順子にうながされて、急ぎ足

で地下の階段を上っていく。

——ほんとに、私達はこれで助かったのだろ
うか——

芝生の庭を歩き、本館の方へ案内されていく美沙江の心には、まだ一まつ不安があった。

何かひそひそ小声で話し合ったり、薄笑いを浮かべたりして先に歩く田代と順子の態度が気にかかる。

そんな美沙江の心を見通してか順子は振返ると

「私達はね、大金が手に入ったので外国へ高飛びすることにしたわ。だから、お嬢さんが私に受けた仕打ちを、その筋に知らしても平

「氣よ」

「私、訴えるような事は致しませんわ。おば様と私をここから逃がして下さるならば、それで充分です」

美沙江は、おどおどした口調で云った。

本館の二階の一室、そこは大塚順子に当てられた八帖の和室であって、これも打ち合わせ通り、美沙江の二人の女中、友子と直江が待機している。

「ああ、お嬢様っ」

友子は美沙江を見ると大仰に驚いて見せ、順子に教えられた通りの芝居を演じ始めた。

「よく、ま、御無事で」

眼に涙まで浮かべて、友子もなかなかの役者であった。

「友子さん、直江さん、よく助けに来てくれたわね」

美沙江は袖で顔を覆って泣きじゃくる。

「もう貴女達は来てくれないのじゃないかと私、生きた心地もなかったわ」

そう云って、友子や直江の手を取ってすり上げる美沙江を、遠くの方で眺めていた順子は

「それじゃ、お嬢さんにお風呂にでも入って頂いてゆっくりくつろいでもらうのよ。その

うち折原夫人の仕度も出来ると思うからね」

と二人の女中に云って、田代と共に部屋から出て行った。

「おば様は、どこにいらっしゃるの。御無事でいらっしゃるの。ね、友子さん」

美沙江は恐ろしい女が引き揚げると珠江夫人の安否をたずねた。

「心配いりまへんわ、お嬢さん。そやけど、大変なショックだっただけに助かったとわかった途端、軽い貧血を起こされて、今、ベッドで休んだはります」

友子は、そう出鱈目を云った。

恐らく、川田や吉沢達に塗りこまれた魔薬の効果が最高に達し、今頃、珠江夫人は気の狂うばかりの錯乱状態に陥っているに違いない。

しかし、そんな事は顔色にも見せず、

「さ、お嬢さん、お風呂へ入って下さい。狭い汚い牢屋の中で二日も暮した垢を、さっぱり洗い流して下さい」

としきりに美沙江に入浴をすすめるのだ。

「呑気に今、お風呂なんかに入る気持にはないわ。それより、早くおば様に逢いたいわ。ね、おば様の休んでおられる部屋へ案内して下さい」

美沙江は、早く珠江夫人に逢って救出された事を二人で悦び合いたかった。

「でもね、お嬢様。せっかくこの屋敷の人達が二日間の垢を落とすようにと云ってお風呂をわかせて下さったのやから、その好意を無にしたら相手の感情を害す事になります」

と直江は奇妙な理屈をこねだした。

「お風呂に入ってお嬢さんがさっぱりしやはってる間に、珠江奥様の気分もよくなると思いますわ」

ここまで来て、相手を怒らせてはまずいから、好意を素直に受け入れるよう、二人の女中は美沙江を説得するのだ。

こんな時に敵方の家の風呂を使うという気分になれる筈はなかったが、女中達の云う事にさからうわけにはいかない。

「じゃ、少し、体を洗わせて頂くわ」

美沙江は、友子に案内されて、浴室へ向かった。

新作生花発表会のあとの、祝賀パーティに出席するために着た真紅の紋綸子の中振り袖も逃亡を計って竹藪を走ったりしたため、かなり裾元が汚れている。

浴室の脱衣室で二人の女中に揚げ葉蝶に結ばれた帯を解かせながら美沙江は

「身体の汗を流すだけですすぐお風呂を出ますわ。こんな所にもう一分でも長居はしたくないの。わかるでしょ、友子さん」

美沙江が薄紅色の艶めかしい長襦袢姿になると、友子は

「もうここまで来て、何もあわてる事はありませんわ。ゆっくりとお風呂ぐらいは入って下さい」

そう云って直江と一緒に脱衣場から出て行った。

美沙江は長襦袢を脱ぎ、すぐくると向かう向きになって腰をかがめると肌襦袢、湯文字を脱いで、手拭で前を隠しながら、浴室へ素早く入って行く。

同時に脱衣場の戸が静かに開いて、こっそりと直江と友子が入って来たのだ。

浴室のガラス戸の鍵穴から中をのぞくと、

美沙江は鏡の前に立膝して坐り、アップに巻き上げた髪を解いている。

ウェーブのかかった艶々しい見事な黒髪はハラリと肩まで垂れかかり、輝くような雪白の肌とのコントラストが悩ましいばかりに美しい。

友子と直江は眼で合図し合って、脱衣籠の中に花束の山のように積まれた豪華な美沙江

の衣類を一枚残らず抱きかかえ、そっとその場から立ち退いた。

部屋に戻ると、すでに順子と田代が坐っている。

「うまくいったようね」

順子は友子と直江が抱きかかえている美沙子の豪華な衣類を見て北叟笑んだ。

すべて手筈通り進んだわけである。

青い畳の上にさっと投げ出された華麗な真紅の紋綸子、御所解き模様を浮上らせた中振袖や黒地に金と赤の袋帯、それに絹綸子の長襦袢、湯文字に至るまでの下着類など、それだけ見ても滴るばかりの色気が感じられて田代は生唾を呑みこむのだ。

「今日限りであの御令嬢は、こういう立派なお召物を着る時がないんだから、色々骨を折ってもらったお礼に、これはあんた達に差上げるわよ」

順子は手に取って眺めていた美沙江の衣類を友子達の方へ押しやって

「でもこれからが大変ね。名門の御令嬢だけに、一流の調教師が揃っているからといっても相当手古ずる事だと思うわ」

「しかも、処女だけに一層、始末が悪い」

田代は苦笑して見せた。

「でも、またそれが値打ちという事になるじゃないませんか」

順子はそう云って、

「羽衣を奪われた天女みたいに今頃、御令嬢は歎き悲しんでいると思うわ。一寸、様子を見に行きましょうよ」

と立ち上った。

順子が云った通り、浴室から出た美沙江はたった今、脱いだばかりの衣類が紛失している事に驚き、しきりに女中達の名を呼んでいた。

「友子さん。着物を何処へ持って行ったの。早く着物を持って来て頂戴」

美沙江は、女中達が汚れを落とすために着物を持ち去ったものだと思ったのだ。

「ね、早く着物を持って来て。お願い、直江さん」

美沙江は浴室のガラス戸をたたいて声を立て始める。

吹き出すのをこらえるようにして廊下でそれを聞く順子達。

友子が順子に何か耳うちされて、口を開いた。

「何云うてるの、お嬢さん。うちらお嬢さんの着物なんか知りませんわ。御自分で外へ出

て来てこの屋敷中、探さはったらええやないの」

そう云った友子は、直江と一緒に笑いこけた。

ふと、悪魔の計略にかかったのでは、という疑惑が美沙江の胸をしめつける。

女中達の態度が、急にがらりと変わった事で、その恐怖の念は一層つのり出したのだ。

「冗談はよして。ね、お願い、早く着るものを持って来て」

美沙江は必死な声を上げ出した。

「ハハハ、出るに出られぬ籠の鳥か」

田代の大きな笑い声が突然響くと、美沙江は電気にでも触れたように身体を硬直させ、縮かむように膝を曲げると手拭で胸元を押さえた。

「お嬢さんを素っ裸にするためには随分と手数がかかると思ってね。女中さん達と相談してお風呂へ入って頂いたわけなんだよ」

田代にそう聞かされた美沙江の顔からは見る見るうちに血の気がひいていく。

「友子さんっ、直江さんっ。これは一体どういう事なの」

美沙江は廊下にいる二人の女中に向かってガラス戸越しに激しい声を出した。

「悪う思わんといてね、お嬢さん。うちら、お嬢さんを裏切ったというわけや」

友子は、はっきりした口調で云った。

次に大塚順子の声が響いてくる。

「これで事情がわかったでしょ。苦心して釣り上げた魚をまた広い海へ逃がすような、そんな馬鹿な真似を私達がする筈ないじゃありませんか。お嬢様は今日限りで、今までの生活とは、いさぎよくお別れし、私達の奴隷となつて、この大きな屋敷の中で一生、暮して頂く事になったのよ」

それを聞くと美沙江は目まいが起る程の衝撃を受け、床に手をついてしまう。

「折原の奥様も、今は心がけをすっかりかえて、性の奴隷としての修業を一心につんできらっしゃるのよ。お嬢様も奥様に負けないように、これからはっきり修業をつんで頂きたいわ」

そう云った順子は、友子達に合図してガラス戸を開けさせた。

瞬間、美沙江は悲鳴を上げ、脱衣場より浴室へ走りこんで戸を閉め、内鍵をかける。

田代は舌打ちして、激しく浴室の戸をたたいた。

「鍵を外すんだ、お嬢さん。ここにいる女奴

隷がどんな修業をつんでいるか参考のために見学させてあげるんだよ」

たった今、あわてて浴室へ走りこんだ美沙江の肌の光沢と、二の腕から肢までの均齊のとれた美しさが、一瞬であったが田代の眼に灼きつき、切ないばかりの思いになって、田代は美沙江を浴室から引き出そうとする。

「もう何もかも諦める事ね。ここにいる女奴隷は、皆んないい所のお嬢さんとか、家柄の立派な若奥様とか、そんな風な美人ばかりなのよ。お友達だって、すぐに出来るわ。だからおとなしく出ていらっしゃい。羞かしがったりこわがったりする気持も、すぐになくなるから」

などと順子は優しく口調で説得し始めるのだ。

「お願いです。何か着るものを、着るものを下さい」

浴室の中の美沙江は、すすり上げながら身につけるものを与えてほしいという哀願をくり返すのだ。

「何云ってるんだ。ここにいる女奴隷はな、皆んな生まれたままの丸裸で修業に励んでいるんだよ」

業を煮やした田代が思わず叫んだが、それ

を順子はたしなめて小声で田代に云って聞かせる。

「こういう名門の御令嬢をおどかしたりするのはよくないわ。うまく騙して、こっちのペースに巻きこむのよ」

そこで順子はまた猫撫で声になる。

「じゃ、お嬢さん。着物を渡すから、ほんの少し、このドアを開けて頂戴」

天の岩戸じゃないが、少しでも戸を開けたら最後、田代は躍りこんで美沙江を引っ張り出し、用意して来た麻縄でがんにがらめに縛り上げる肚だった。

「大塚さん、貴女のおっしゃる事は信用出来ないわ。死んでも私このドアは開けません」

美沙江の手きびしい声を声くと、順子はむっとして、

「あらそう。いいわ。何時までも強情を張っていなさい。そのかわり、最初、考えていたような特別扱いにはしてあげないからね。捕まえたら最後、骨身にこたえるような辛い修業をさせてあげる」

順子の毒気のある言葉は、浴室の中の何一つ身に覆うものもない美沙江の魂をしめ上げるのだ。

順子は友子と直江に云った。半分は、素っ

裸で浴室内に籠城した美沙江に聞かせるつもりである。

「若い連中を何人かここへ集めて頂戴。それからロープなんかも持ってこさせるのよ」

肉の競演

夕方近くに至って、やっと三本の映画を撮り終えた静子夫人は、精力という精力をすべて出し切ったように、ぐったりとマットの上に俯伏してしまった。

捨太郎も同じで、そんな夫人の横に流木のように仰向けに倒れ、大きく肩で息をついている。

「二人の息がこんなに合ったのは始めてだ。

こりゃいい値がつくぜ」

鬼源はホクホクした表情で茶碗酒をあふつた。

何時もは緊縛された身を捨太郎にゆだねるというものだったが、その日は最初から組のからまない本格的なもので、勿論、夫人にしても始めての仕事だったが、最初から自棄になったように捨太郎のがっしりした黒い肩を柔軟で優美な両腕で抱きしめ、鬼源に強制されるまま露骨な肢態を織込みつつからみ合

いを演じたのである。

犬のように四つん這いになって捨太郎に、調教結果を試させ、成功させた時は、この映画撮影を酒を飲んで見物する連中の間から歓声と拍手が巻き起こった。

「よ、捨太郎、だらしがねえな。しっかりしねえか」

鬼源は完全にのびてしまった捨太郎の腰のあたりを足で蹴った。

「親方、おら、もう駄目だ」

捨太郎は指でそれをして見物人を笑わせ負け犬みたいにマットの上から這い下り、隅の方へ逃げて行く。

「男役者が参っちまえば、もう仕事にならねえや」

撮影技師をつとめるやくざ達は笑い合う。

「だけど、奥様も随分進歩なさったものね。

あんな大男に対して一歩もひけをとらないじゃありませんか。いえ、むしろ大男を打ち負かしてしまったのには驚いたわ」

千代は仲間の葉子や和子の顔を見ながら笑いこけた。

捨太郎の野獣めいた攻撃の前に、最初は彼の動きに対応する力がないほど消極的な応戦を示していたが、遂に追いつめられた狂態を

意地の悪いぐらゐに克明に撮影されてしまうと、二本目の撮影からは糞度胸をつけたように夫人は積極的に応戦し始めたのだ。

絶息してはまた燃え上り、燃え上ってはまた絶息しながら捨太郎に喰らいつき、激しい鳴咽の声と共にまるで命がけとなって、捨太郎を陥落させてしまったのだ。

三回目の撮影の時は、鬼源の指示で最初はフランス式を命じられたのだが、夫人はすばらしい舌の技巧で完全に捨太郎を痺れさせ、つづいて新しい実験に入ると、美しい量感のある双臀を揺さぶりつつ、その部分に劣らぬ貝類のような強い吸引力を発揮して捨太郎を完全に屈服させてしまったのである。

この種の仕事を渡世にしている、いわゆるプロの鬼源や井上達は、男達を悦楽の境地にいざなう宝庫を夫人が有している事を、改めて認識すると共に、如何に夫人が貴重な商品であるかを思い知ったのである。

精も根も尽き果てたといった風に、マットのシートの上に額を押しつけている静子夫人の横顔は、見る者の心を揺さぶるばかりに美しい。

「御苦労だったね、奥さん」

鬼源は夫人の優美な肩に手をかけて、ひっ

ぺ返すようにして上体を起こさせた。

夫人は、おどろに乱れた黒髪を頬の半分にもつらせたまま屈辱と快楽と苦痛の焰の残り火の中で未だはっきり意識が戻らないのか、ぼんやりと潤んだ視線をシーツの上へ投げかけている。

「あと二本分の撮影を続けたいんだが、捨太郎の奴が駄目になっちゃったから、今日はこれで中止。この続きは明日ということにしようぜ」

それでは三十分の休憩だ、と鬼源は周囲を見廻して云った。

次にここで文夫と桂子のコンビが撮影される事になっているのだ、と鬼源が云う。

「どうだい、奥さん。ついでに見物していくかね」

井上がそう云って笑った時、襖が開いて、数人のやくざが、きびしく後手に縛り上げた一片の布も身につけぬ桂子と文夫を引き立てて入って来たのである。

「ああ、桂、桂子さん」

静子夫人は、入って来たのが桂子だと気づくと、切長の美しい瞳から幾筋もの涙を流した。

文夫と桂子は床の間の柱に縄尻をつながれ

たが、二人とも静子夫人の方には一瞥もくれず、白く冴えた顔を互いにそらせ合うようにしているだけだ。

この場に夫人が居合わせた事を二人はあきらかに不快に感じている、という表情を露骨に見せて、時々、チラと桂子は夫人の方を見るのだが、まるで空気でも見るような無表情さであった。

静子夫人は、自分がこの若い二人に侮蔑されているという事を悲しく感じとって、がっくりと首を落としてしまう。

「捨太郎という馬鹿とママはコンビを組んだのですってね」

桂子は冷ややかな口調で、うなだれている夫人に云った。

その一言にハッと顔を上げた夫人に向かつて更に桂子は

「強制されたとはいえ、そんな男とコンビを組む事になったママを私、軽蔑するわ。もう顔も見たくないわ」

その非情な桂子の言葉に、静子夫人の全身は慄えた。

「――桂子さん。あ、あんまりだわ」

両手で顔を覆って静子夫人が泣きじゃくると、

「よ、何の親娘喧嘩を始めているんだよ」

と鬼源が近づいて来る。

桂子は、顔を上げるとはっきりした口調で鬼源に云った。

「早くママをここから連れ出して頂戴。そうしないと私達、演技に調子が出ないわよ」

よし、わかった、と鬼源はうなずいて

「そのかわり、文夫とびったり息の合ったいい演技をしてくれなきゃ困るぜ。何しろ、静子夫人と捨太郎のコンビは抜群で、すごい売れ行きなんだ。お前達のコンビも、それに負けねえよう、がんばってくれなきゃあな」

鬼源は井上から麻縄を受取ると、夫人の白い肩をたたいた。

「さ、奥さんは、しばらく休憩してから、次の仕事にかかるでしょうぜ」

顔を覆ってシクシクすすり上げる静子夫人は、鬼源に背後から両腕をとられて背後へねじ曲げられる。

「桂子から愛想づかしをされるとは気の毒だったな」

鬼源は、キリキリと夫人に縄がけしながら笑った。

「捨太郎のような亭主を持ちゃあ、娘が愛想づかしするのも無理はないわよ」

千代も調子を合わせて笑い、鬼源に手渡された夫人の縄尻を持つと、「さ、お立ち」と夫人を引き起こした。

「まずお風呂に入って少し休憩してから、奥様は親友である折原夫人と対面、そういう予定でしたわね、鬼源さん」

「そうです。そこで、美しい若奥様二人が、特殊な関係をお結びになるってわけですよ」

次回に開催する予定のショーには、ぜひとも、この二人の人妻のプレイをプログラムに加えるよう田代社長の命令を受けているのだと鬼源は千代に説明するのだった。

「何しろ女盛りの脂の乗り切った人妻二人のショーですからね。生っちよろいもんじゃあもう客も満足しねから、こっちも腕の見せどころ、面白い番組にしようと思切っているんですよ」

鬼源にそう聞かされると、千代は何度も満足げにうなずいて

「わかったわね、奥様。相手が親しいお友達だけにいいコンビが組める事だと思うわ」

千代は、夫人の背を押して、

「さ、お風呂へ入って、春太郎さん達に身体中よく洗ってもらうのよ。お歩き」

千代に引き立てられる静子夫人の左右に春

太郎と夏次郎が付き添った。

部屋から出ようとした時、夫人はそつとうしるを振り返り、床の間の柱につながれている桂子の方へ物悲しげな視線を向けた。

桂子もふと顔を上げ、夫人の視線と眼が合ったが、すぐにそっぽを向き、冷たい横顔を夫人に見せるだけだった。

夫人は、とりつく島がないように深くうなだれ、艶々しい黒髪を片頬に長く垂れ流しながら千代に背を押されて出て行くのだ。

そのあり、鬼源はニヤニヤしながら、柱につながれてうなだれている桂子と文夫の傍へやって来る。

「じゃ、そろそろ撮影にかかるぜ」

新しいシートが取りかえられたマットの上に若い二人は、縄尻を鬼源に取られて歩まされる。

「どうしたい。お坊っちゃんの方は馬鹿に元気がないじゃないか」

緊縛されたままの裸身を、マットの上で小さく縮める若い二人に、カメラ係りの井上が云った。

文夫は、あぐらを組んだまま元氣なく顔を横に伏せ、桂子は文夫の背にびったり背を押しつつけるようにして立膝に足を組んでいる。

「ね、文夫さん。どうしたの。今更、悲しんだって仕様がなないじゃないの」

桂子は、背中で縛り合わされた両手を動かして文夫の縛られた手首を握った。

「文夫さん。貴方、まだ美津子さんの事を想っているのね。、そうでしょう」

桂子は口惜しげに云った。

桂子は、人間的感情はとうに失い、この地獄の世界で与えられた仕事を、熱意を持って果たそうとする女に変貌していた。だが、それは非合的だが、文夫という愛人を得たからであって、それ故にこの恐ろしい奈落の世界も自分にとっては快楽の修羅場かも知れぬと思うようになってきたのである。

人間的な思念は失ったといっても、やはり嫉妬だけは酸っぱい形で胸に残るのだ。

「お願い、文夫さん。もう美津子さんの事を考えちゃ嫌。ね、文夫さん」

桂子は身体を曲げると、文夫の頬に鼻をすり寄せ、文夫の唇を吸おうとする。

「僕は、僕はもう生きているのが嫌になったんだよ」

「嫌っ、そんな事云わないで。私は今、生きている事に喜びを感じるようになったのよ。文夫さんがもし死ぬような事になれば私だっ

て生きちゃいないわ」

桂子は、激しくそういうと、ぴったりと文夫の口に唇を当てた。

「ハハハ、まだカメラは廻っちゃいねえよ。そうあわてる事はないさ」

鬼源は笑って、チンピラの竹田と堀川に合図して、二人を一旦、マットの上へ引き起こすのだ。

「少し、準備運動をしておかなくちゃあいけねえ」

文夫と桂子が、うしろからチンピラに肩をおさえられて立つと、マリと義子がガムを噛みながら近づいて来て、二人の前に腰をかかめる。

「大いにハッスルしていい商品を作ってね」
義子は、用意して来たクリーム瓶を突き出すようにして見せつけた。

こういう場合、文夫に長時間耐えさせるため、特別クリームを女達の手で塗らせる事に鬼源は、とりきめていた。

また、桂子の方も、一層、燃えて画面に迫力を盛らせるため、特殊なクリームを使用させる事になっている。

もう何本目かの映画に出演した文夫や桂子は、ズベ公達の手でそうした処置を受けるの

も始めてではなく、大して狼狽は示さない。

薄く眼を閉ざし、心持、肢を開いて、マリの処置を甘受する桂子は、さも心地良げにうつとりした表情さえ見せて

「ね、今日は私、何だか文夫さんにうんと愛してもらいたい気になったの。何時もよりよけいに塗ってほしいわ」

とマリに甘えかかるような声を出すのだ。

「へえ、やる気充分というわけね。気に入ったわ」

マリは面白そうに桂子を見上げて、たぷぷりとクリームを掬い上げた。

「ね、いいでしょ。文夫さん」

桂子は、横に立つ文夫に情感に濡れ光る瞳を向け、甘い声を出すのだ。

「それじゃ、お坊っちゃんの方もがんばって頂かなきゃあね」

義子は文夫をひやかすようにいう。

「まあ、頼もしいわ。ちよっと、桂子。見てごらん」

義子は桂子の臍を横から指ではじいた。チラと文夫に眼をやった桂子は、すぐに反対側に顔をそむけて

「文夫さんを、そんなにいじめないで——」と頭を振りながら云うのだ。

「さて、準備も出来たようだな。それじゃ始めるぜ」

鬼源はカメラやライトの方の点検もすまして、マットの上へ足を踏み入れた。

はかない抵抗

線の美しい象牙色の頬に涙をしたたらせながら、静子夫人は二人のシスターボーイに左右を挟まれ、千代に縄尻を取られて長い廊下をゆっくりと歩いていく。

桂子にもう顔を見るのも嫌だと浴びせられた一言が胸に突きささり、夫人は、悲しく情けなかったのである。

「桂子さんに軽蔑されたのが、そんなに悲しいの、奥様」

春太郎はポケットからハンケチを取出すと夫人の涙をふきとってやりながら

「でも桂子さんは最近、森田組の仕事には、とても協力的だそうよ。その点では皆んなに可愛がられているそうだし、奥様も安心なさっていいのじゃないかしら」
と云うのだ。

それを聞くと夫人は、何故かほっとした気持になった。

この地獄の毎日を苦痛に思う心が、地獄と云える。こうした恐ろしい仕事を大して心の抵抗がなく勤められる事になれば、むしろ、それは本人にとって救いなのかも知れない。もうこの悪魔の屋敷より救出される日が無いのなれば、命運の尽きる日が来るまで、自分の肉体も悪魔に作り変えて心に来るべき反撥を忘れ、歪んだ性の陶醉に浸るより方法はない。そんな風に静子夫人は桂子の事を考えるのだ。

二階の廊下を曲がった所に浴室があるのだが、その前に田代や森田、それに銀子や朱美達がつめかけている。

「あら、何かあったのかしら」

春太郎と夏次郎が不思議そうに顔を見合わした時、大塚順子が苦笑しながら、こっちへ近づいて来た。

「家元の御令嬢が、浴室に籠城してしまったのよ」

順子は、千原美沙江をうまく騙して浴室へ入れたまではよかったが、美沙江は内鍵をかけてこっちを遮断してしまった、と事情を千代に説明した。

「大家の御令嬢も死者狂いになると、なかなか手ごわいものね」

千代は、ふと、その場にうなだれて立つ静子夫人を見て、いい方法があるわ、夫人の縄尻を、いきなり強く引っ張った。

「この奥様に美沙江を説得させるのよ。無駄な抵抗はやめて、すぐに出て来るようにね」

静子夫人も、珠江夫人と同じく千原流生花を後援して来た一人で、美沙江とは親しい間柄だ。

「千原家の御令嬢は、美貌と教養を兼ね備えた遠山夫人を、以前から崇拜なさっていたようだし——」

千代は意地の悪い微笑を頬に浮かべて「奥様なら美沙江嬢を、うまくおびき出せることと思うわ」

白い頬を硬くして眼を閉じ、口をつぐむ静子夫人の見事な双唇をぴしゃりと平手打ちした千代は

「説得に失敗すると承知しないわよ。罰として——」

千代は夫人の耳もとに口を寄せて、何かささやいた。

夫人の優雅な美しい顔は、ショックで忽ち紅潮する。

「——犬、犬ですって」

夫人の思わず取乱した狼狽の表情を千代は

面白そうに見つめながら

「そう。奥様は犬とか猫とかあまり動物はお好きじゃなかったわね。以前、私が遠山家の女中だった頃、庭の隅で小犬をこっそり飼っていたのを奥様に見つかって、大変叱られた事があったわ」

千代は小鼻に皺を寄せて笑いながらそう云い、

「犬とコンビを組まされるのが、それ程嫌なら美沙子嬢を説得して女奴隷にするのよ。説得に失敗すれば奥様だけではないわ。風呂場のガラス戸をたたき潰して男達は美沙江嬢を引きずり出し、反抗した罰として彼女もまた犬と——」

「待って、待って下さい」

それ以上、千代の言葉を聞くのが恐ろしく夫人は首を左右に振りながら、千代の顔を見るのだ。

「——ね、千代さん。貴女は本気で千原家のお嬢さんまで私のような女奴隷になさるおつもりなの」

「今更、何を云ってるのよ。千原美沙江を大塚女史がどのように扱うか、それは何度も説明したじゃありませんか」

さ、行って、美沙江を浴室からおびき出し

て頂戴、と千代は夫人の背を押し、浴室の前まで引き立てる。

脱衣室の床には、美沙江を縛り上げるためのロープなどが置かれ、田代や森田がしきりに浴室の中に立て籠る美沙江に対して、ガラス戸をたたきながら、おどしているのだ。

「お嬢さん、そう何時までも強情をはらずに内鍵を外してこっちへ出て来な。早く云われた通りにしねえと、捕まえてから痛い目に合わすぜ」

森田は、そんな風にどなってガラス戸をたたくのが、おどすというより楽しんでいるようだ。

「うちの若い連中が生花家元御令嬢の丸裸を見たがって、うずうずしているんだよ。何時までも出し惜しみするねえ」

森田はそうどなって、田代の顔を見て笑うのだ。

「そんな風におどかしちゃ駄目よ。ここは、静子夫人に任そうじゃありませんか」

千代は、森田をたしなめて、夫人の縄尻を引き、ガラス戸の前に立たせた。

「何時見ても、相変わらぬきれいだね、奥さん。じゃ、一つ、ここはよろしく頼むぜ」

森田は、夫人の艶々と輝く象牙色の裸身を

眼にすると、口元を歪めてガラス戸の前から身を引いた。

「仕事をする毎に、肌の艶がよくなっていくようだな。え、奥さん」

酒気を帯びている森田は、豊かに引き緊まった夫人の豊かな太腿のあたりを、眼を細めて眺めながらそんな事を云うのだが夫人は凍りついたような硬い表情で、視線を横へそらせている。

「お嬢さん、貴女の大好きな人を、ここへお連れしたわ。遠山家の美しい静子奥様よ」大塚順子は、ガラス戸を軽くたたきながら中の美沙江に声をかけた。

「え、静子奥様が？」

浴室に一人、立て籠る美沙江の悲痛な声が響いて来る。

「黙っていちゃ駄目よ。美沙江を口説き落として戸を早く開けさせて頂戴」

千代は、夫人の耳を引っ張り、ぐずぐずしている二人とも犬と組まねばなくなるのよ、と小声でおどすのだ。

「お、お嬢様、静子ですわ。おわかりになつて——」

「あ、静子奥様」

美沙江は、こらえていたものが急に堰を切

ったように慟哭となってあふれ出て、ガラス戸に額を押し当てて肩を慄わせるのだった。

静子夫人も翳った深い眼の中に一杯の涙を浮かべながら

「——お可哀そうなお嬢様。でも静子は、お嬢様をお救いする事は出来ないのです」

そう云うと同時に静子夫人は耐えられなくなったように顔をそむけて号泣し始めた。

「何をしてんのよ。お互いに泣き合っていたってちががあかないじゃないの」

千代は、けわしい顔つきになって夫人の尻をつねり上げた。

「——お嬢様、こうなれば覚悟をきめて下さいまし。静子と一緒にこの屋敷内で女奴隷となるより、もう逃がれる方法はないのです」

「な、なんという事をおっしゃるの。嫌っ、そんな事、死んだって嫌です」

美沙江の嗚咽は、静子夫人の苦しい胸の中を一層かきむしるのだった。

「——もう助かる見込みはないのです、お嬢さん。死ぬ時はお嬢さんも静子も一緒ですわ。」

ですから、お願い、これ以上ここに人達に抗うと、お嬢さんはもっと辛い思いをしなくてはなりません」

静子夫人は涙まじりの声で必死に美沙江に呼

びかけのだった。

しばらく美沙江のすすり泣く声が断続的に内部から聞こえて来たが、夫人の悲痛な説得に観念の座に自分を置いたのだ。

「わかりましたわ。珠江お嬢様ですが、そんな辛い思いをなさっているのに——」

自分一人が助かろうという気になった我儘を許してほしい、という意味の事を美沙江は云って、よよと泣きくずれるのだ。

「——ああ、お嬢さん」

静子夫人は美沙江のそうした心情を思うと胸のはりさける思いになり、ガラス戸に額を押し当て、再び号泣するのである。

「そうと話がきまったら、早くこの戸を開けるんだよ」

森田がまたガラス戸をたたいて催促する。

美沙江は震える手で内鍵を外した。

同時に、ガラリと戸を引き開けた森田と田代は、麻縄の束を手づかみにして中へ突入して行く。

美沙江は、反射的に身を引き、浴室のタイルの壁に背を押し当て、片手で乳房、手拭を持つ片手で前を押さえながら、必死な眼を闔入者に向けるのだった。

「思った通り綺麗な身体をなさっているぜ。」

さすがは京都の名門の御令嬢だけのことはあるな」

森田は、美沙江のきらめくように美しい全裸を、まぶしそうに見ながら云った。

艶々した長い黒髪を白磁の肩から胸元のあたりまで垂れさせた美沙江の全裸像は、一つ一つの曲線が優雅なしなやかさを持ち、むせ返るほどの高貴な官能美といったものを感じさせる。

「さ女奴隷らしく縄をかけさせてもらうぜ」と森田が近づこうとすると、美沙江は白蟻のような頬を硬化させ

「こんな姿の私を縄でゆわえようというのですか」

と、美しい眼の中に憤怒の色を浮かべて美沙江はタイルの壁に背を当てたまま、横へ横へと身体をずらししていくのだ。

「ゆわえる？」

森田は田代と顔を見合わせて笑い、

「ここに居る女奴隷は皆、こんな具合にされているんだよ」

と、千代に合図して静子夫人を浴室へ引き入れる。

「あっ」

美沙江は、静子夫人の一糸まとわぬ素肌に

麻縄をかけられたみじめな姿を見て、息を呑んだ。

「どうだい。かつては上流社交界の美しい花形スターだった遠山夫人が、今は俺達のドル箱スターさ」

美沙江の方をまともに見る事が出来ず、静子夫人は美しい眉根を寄せて顔をそむけている。

「こんな風になにもかも丸出しで奥様は、この屋敷にずっと監禁され、長い間、修業に励んでこられたのよ」

千代は、面白そうにそう云って、伏せた夫人の頭髮をつかみ、ぐっと顔を正面にこじ上げた。

大粒の涙を閉じ合わせた切長の眼尻より流しつづける静子夫人は

「——お嬢様、もう、もう駄目なの。何もか

『切手代用』送金についてのお知らせ
○七月号広告でお断りとしておりましたが、当方の整理も一応つきましましたので、御注文の際の『切手代用を再開』して受け付けます。但し『一割増』は従前通りです。尚、よろしくお願いいたします。
『振替』等の方法にてご送金下さることをお願い申し上げます。

も諦めて頂戴。死んだ気になって、この人達の云う事を聞くのです。ね、お願い」

と、嗚咽の声と一緒に肩を慄わせてそう云った。

力が抜けたようにその場に腰を落として美沙江は両手で顔を覆って泣きじゃくったが、森田と田代は、背後から美沙江のか細いその両腕に手をかけて、ぐいっとうしろへねじ曲げていく。

美沙江は、たださめざめと泣くだけで一切の望みを断ち切ったように森田達の手でキリキリと縄をかけられていくのだ。

色白で繊細な背面の中程に美沙江の両手首を重ね合わせてきびしく麻縄で縛った森田は絹餅のように柔らかくふくらと盛り上る美沙江の二つの乳房の上下に余った縄尻を固く巻きつけ始めた。

ぴったりと華奢で優美な二肢を立膝させて男達に縛り上げられていく美沙江の、世にも悲しげな表情を見る千代と大塚順子は互いに北叟笑むのだ。

「大分手数がかったけど、この捕物もやっ」と終わったわね」

千代は、順子の肩をたたいて云った。

「——お嬢さん、我慢して頂戴」

静子夫人は、男達の手で高手小手に縛り上げられた美沙江を見ると、たまらなくなったように顔をねじって号泣する。

「そら、立ちな、お嬢さん」

森田は美沙江の縄尻を取って、ぐっと引いた。

よろよろと足元をふらつかせながら立ち上った美沙江の美肌を正面から見つめた田代は思わず胸をときめかす。

長い艶々した黒髪を縄に緊め上げられた美しい乳房のあたりまで垂れさせた美沙江の優雅な肢体——そして、翳りを含む濡れた美しい黒瞳より細い涙の滴を白く冴えた繊細な頬にしたたり流す美沙江は、華奢で柔らかい二つの太腿をびったり閉ざしてそこに立たされている。

「さすがに家元のお嬢さんだわ。どう、このきれいな肌の色——」

千代は感謝したように云ったが、春太郎も夏次郎も無垢で美しく深窓に生まれ育った美女の白銀色に輝くような妖しいばかりの美肌を心臓を射ぬかれたような表情をして眺め入るのだった。

とくに美沙江の美麗な太腿。ひっそりと翳を作る煙のように淡い夢想的なふくらみに眼

を向ける男達は、切ないばかりに胸をうずかせるのだ。

「まだ男を知らないお嬢さん育ちだけに何だか可哀そうな気がするわね」

銀子が柄にもなく同情した云い方をして、腰に巻いている赤いネッカチーフを取ると、それで美沙江の腰のあたりを覆ってやろうとする。

美沙江は今にも失神しそうな表情でその場に立っているだけであったが、銀子がネッカチーフを腰に巻き始めると、蘇ったようにブルブル全身を慄わせるのだった。

「それじゃ、友子さんに直江さん。このお嬢さんを私の部屋へ一まず連れて来て頂戴」

大塚順子は美沙江のかつての女中二人にその命令して田代と一緒に先に浴室から出て行った。

「それじゃお嬢さん。私達が御案内させてもらいまっせ」

と、友子と直江が代わって美沙江の縄尻をとった。

美沙江の滴るように美しい黒瞳の中に、二人の女中に対する憎悪の色がはっきりと浮き上る。

「友子さん、直江さん。貴女達まで、一体、

私に何の恨みがあって——」

美沙江は縄尻をとった二人の女中に恨みの言葉を投げつけようとするのだが、興奮のあまりはっきりした言葉にならなかった。

「千原流生花のやりかたが汚いから、湖月流生花に味方しただけの事よ。ね、友子さん」
静子夫人の縄尻をとる千代は、笑いながらそう云って、

「さ、早くお嬢さんを大塚女史の部屋へ連れてお行き」

と友子達に云い、次に静子夫人の肩を押して

「奥様は、これから折原夫人と御対面して、鬼源さんの指導のもとに特別の關係を持って頂くのでしたわね。さ、御案内しますわ」

千代に引き立てられようとする静子夫人は別の方向に友子達の手で引き立てられる美沙江に哀切極まりない視線を向けた。

「——お嬢様。どのようなむごい仕打ちを受けても、生きる望みを失ってはいけないわ。ね、お嬢様」

ハラハラと大粒の涙を白い頬に流しながら夫人は必死なものを含めて、美沙江に呼びかけるのだった。

「し、静子奥様！」

美沙江は悲痛な声をあげると、引き立てようとして肩や背に手をかける友子と直江の手を身体を揺さぶって払いのけ、夫人の傍に走り寄る。

「——お嬢様っ」

「——静子奥様っ」

二人の美女は緊縛された美しい裸身をびったり寄せ合い、互いに肩に顔を埋め合い全身を慄わせて哀泣するのだ。

「ここで、そんな愁歎場を演じて頂く時間はないんだ。二人ともいい加減にしねえか」

森田は邪慳に夫人と美沙江の身体を引離して「早く連れて行け」と友子達に眼で合図をした。

懲罰室

大塚順子は、美沙江が友子達に縄尻を取られて引き立てられて来ると、床の間の柱を指さして、縛りつけるように命じた。

美沙江はもう生きる屍になったような表情で、友子に背を押されて床の間へ上り、柱を背にして立つ。

すぐ前の円型の卓には酒や肴の支度がすでに出来ていて順子は田代の持つ盃に酒を注ぎ

ながらや々と念願が叶えられた事の喜びを噛みしめているようであった。

銀子と朱美が順子に頼まれたらしい八ミリの映写機を持って入って来る。

つづいて、春太郎と夏次郎が、これも順子に頼まれたらしい茶色の紙包みを持って入って来ると

「大塚先生、どうもこの度は、おめでとございます」

などと千原美沙江を生け捕りにした事の祝いをのべ、皆んなを笑わせるのだった。

「色々皆さんにもお骨折りを願ったけど、これでどうにか最初の予定通りの運びとなったわ。さ、ここへ来て一杯やって頂戴」

順子は顔面一杯に喜色を浮かべて、皆んなを招き、いそいそと酒の酌をして廻る。

床の間の柱にがちりと立ち縛りにつながれた美沙江は、象牙色に冷たく澄んだ美しい横顔を見せて小さくすすり上げている。

銀子の情けでわずかに腰の回りだけを赤いネッカチーフで覆われただけの美沙江を酒の肴にして、順子達は賑やかに唄などうたい出した。

「社長。いいですわね。これから一週間ばかり千原家のお嬢さんは、この大塚順子がこの

部屋で預らせて頂きますからね」

「いいですとも。長い間煮湯を飲まされた千原流家元の娘を一人でたっぷりいじめにかかるといふわけですな」

「ま、そういうこと。以前お話ししたと思いますが、千原流家元の娘の身体に湖月流生花を植えつける。ね、愉快な復讐でしょう、社長。あのお嬢様を美しい人間花瓶に仕上げる事が出来れば、早速、社長のお部屋へ飾らせて頂きますわ」

順子はそう云って笑いこけた。

順子の言葉の意味が初心な美沙江にわかる筈はないが、濡れ光った美沙江の黒い瞳の中に得体の知れぬ恐怖の色がちらと掠めるのを順子は見つけて、残忍な微笑を口元に浮かべるのだ。

「いいですわね、お嬢さん。今日からお嬢さんは、もう大家の御令嬢という考えはさっぱり捨てて、御自分はやくざ一家の性の奴隷になったという事を認識しなければ駄目ですよ。折原夫人も目下激しい修業をつんでおいでですからね」

順子がそう云うと、銀子や朱美が口を開けて笑い出した。

「私も今日からお嬢様の調教を受持つ事にな

るのでから一応予備知識が必要なのよ」

大塚順子は田代に注がれた酒を口の中へ流しこむとメモを取り出した。

「千原流生花家元、千原元康の一人娘、千原美沙江。えーと、年令は満十九才、そうでしたね」

順子は楽しそうに田代にメモを見せながら「趣味は、琴、それに茶の心得もある。フーフ、でも、こんなものはここじゃ通用しないのよ、お嬢様」

順子は友子と直江の方を見て云った。

「お嬢様のお腰につけていらっしゃるものを剥いで頂戴」

友子と直江が近づくのと美沙江は背筋に冷たいものが走って、石のように身体を硬直させた。

「——ち、近寄らないでっ」

美沙江は美しい顔をひきつらせて憎い二人の女中を面罵するのだ。

「——貴女達は今まで私の身の廻りの世話をしていた千原家の女中なのです。いくら、湖月流に尻尾を振ることになったとはいえ——」

美沙江は熱い口惜し涙を頬に流しながら迫って来た二人の女中を呪いつづける。

「何だよ。その口のきき方は」

銀子が立上って、興奮に肩を慄わせる美沙江の横面をいきなり平手打ちした。

あつと悲鳩を上げて美沙江は首を曲げ、キリキリと口惜しげに齒を噛みしめる。

「私しやね、ブルジョア娘のそういう生意気な口のきき方が一番癪にさわるんだよ、第一これは私のネッカチーフなんだよ。腰を包んでもらった情けにお礼一つも云わず、全く頭にきちやうわ」

銀子は腰をかがめて素早く布の結び目を解き、さっと引ったくった。

毛穴から血を噴くばかりの真っ赤になった顔をうっとそらせて、美沙江は火のような羞恥に全身を硬直させる。

「もう情なんかかけてやるものか。これから、何時もそうして素っ裸のままにしておいてやるからね」

銀子と朱美は小気味良さそうに笑った。

肩から胸のあたりまで垂れた長い黒髪を揺さぶって美沙江は慄える頬に大粒の涙を流しつつ世にも哀しげに細い眉根を寄せている。

身を覆うものを一切剥がれた十九才の令嬢は、貪るような男女の視線を辛く感じて、もじもじ身を動かすのだが、何という美しい肌の

の光沢だろう。

麻縄数本に緊め上げられた乳房は、未だ完全に成熟していない少女じみた稚さを持っていたが、スベスベした雪白の腹部や腰部の曲線は優雅でしとやかで悩ましいばかりの肉の緊りを見せていた。

いじらしいばかりに可愛い臍——そして酒を飲む野卑な男女の眼は移向して、どこか幼い感じのする淡くて薄いふくらみのあたりを凝視する。

美沙江は、恐怖と羞恥の戦慄に全身を慄わせながら身をよじって、見物人達の視線からそらすべく、はかない努力をくり返すのだ。

「今更、羞かしがってもおそいわよ。ちゃんと正面をお向き」

銀子は二肢をねじ合わせている美沙江の腰をたたいて、朱美の持って来た別の麻縄を手にする腰をかがめた。

美沙江の両肢を柱に縛りつけるべく朱美と二人で仕事にかかる。

「——誰か、ああ誰か来てっ」

美沙江は上ずった声で悲鳴を上げる。

「笑わせるんじゃないよ」

銀子と朱美は、必死に悶えさせる美沙江の二肢を取り押さえ、柱に押しつけて縄をかけ

始めた。

生まれて始めて味あう魂も砕け散るばかりの羞恥と屈辱に、美沙江はがっくり首を落とす白い肩先をわなわな慄わせながら激しい啼泣を口から発した。

両肢をびったり合わせさせて柱に縛りつけた銀子と朱美は、もう逃げ隠れも出来ず、その美しい全身全裸像を正面に向けて立たされた美沙江を満足げに眺めて云った。

「男を知らない女の体って、どこか神聖な感じのするものなのね」

ミルク色の霧に包まれたような幽玄的な感じさえする美沙江の美麗な肌を改めてしげしげ見つめる田代は、その淡いほのかな翳りを恍惚とした気分で眺めて、やがてそれが鬼源達の調教の前にもどくように変貌する事になるのかと想像する。さすがの田代もこの汚れを知らぬ美しい十九才の令嬢が、今後性の奴隷としての辛酸をなめる事になるのかと思うとふと胸が痛むのだ。

「社長、どうなさったの。妙に考えこんだりして——」

大塚順子が田代の表情を見て、おかしそうに云った。

「いや、こういう生花しか知らぬ深窓のお姫

様を調教するというのは大変だろうと今から心配になってきたんだよ」

「社長がそんなこと心配するなんておかしいわ。ここには調教の名人が沢山いるじゃありませんか」

順子は鼻で笑って、次にシクシクとすすり上げる美沙江の傍へ近寄って

「もう諦めがついたでしょうね、お嬢さん。さっき、ここでは生花とかお茶とか、そんなものは通用しないと云ったでしょう。じゃ何

が通用するのか。それは、たった一つの女の武器、つまり、これよ」

順子は美沙江の肩を片手で抱くようにし、片手で軽くたたくのだ。

一寸、手が触れただけだったが、美沙江はその瞬間、ブルブルと麻縄で固定された全身を震わせて

「な、なにをするのですっ」

と、激しい声を上げ、怒りと屈辱にわなわな頬を震わせるのだ。

新発足 懸賞入告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

「今からこんな具合じゃあ、先が思いやられるわね」

銀子と朱美は顔を見合わせてクスクス笑い合う。

「折原夫人だって遠山夫人だって、いえ、その他、ここに捕われている美しいお嬢様方も皆んなそれだけを頼りにして生きているようなものなのよ。そのうち、それが生甲斐となってくる。お嬢様も先輩に負けないように、みっちりその修業をつんで頂きますからね」

つまり、今日からは、他のことは一切考えなくてもいいのよ、お嬢様、と順子は笑いながら、再び、軽く掌でたたくのだった。

息の根も止まるような屈辱感に美沙江は全身を上気させ、血の出る程かたく唇を噛みしめている。

「大家の御令嬢であるという気位をまずはつきり捨てさせるために、今日から一種の特別訓練をするわ。調教以外の時は、この地下穴で暮して頂くのよ」

順子は、春太郎と夏次郎に命じて美沙江の立縛りにされている床の間のすぐ前の畳を上へあげさせた。そして、その下の古びたハメ板を外させると、ぽっかり穴があいていて、丁度、人間一人坐れる位の広さに荒むしろが

一枚敷いてある。

「反抗を示す女奴隷を入れるために作った、いわば懲罰室みたいなものさ」

と田代が説明し、すぐ順子に向かって

「しかし、ここへ家元令嬢を早速ぶちこむというのは何だか可哀そうな気がするんだが」と、顔色をうかがうようにして云うのだ。

「あら、そんな事ありませんわ。さっきのお嬢さんは浴室へ立竈ったりしてはっきり反抗を示したじゃありませんか。二度とああいう気を起こさせないように最初から制裁を加える必要があると思うのです。女奴隷に甘やかすのは禁物だと社長もおっしゃったじゃありませんか」

順子はわざと取りすました顔つきになってそう云い、美沙江に対する並々ならぬ敵愾心を見せるのだった。

「それから、こういうものも用意してありますのよ」

順子は春太郎が持って来た茶色の紙包みの中から薄い透き通ったナイロン製のバタフライを取り出した。

順子が田代に拡げて示すその三角形のバタフライには、末端に同じくナイロンで出来た小袋がぶら下がっている。

「鬼源さんが考案したおしめ代用のバタフライで放尿するとこの小袋が風船玉のように大きくふくらむ事になるの。この穴に入る時、お嬢様にこの特殊バタフライをはかせておくわけよ。そうしておけば、一タトイレへ連れて行く手間がはぶけるじゃない」

それを聞くと銀子と朱美は吹き出した。

「千原家の御令嬢が、お小水でふくれた袋をぶらぶらさせてこの穴の中で動き廻るのかと思うと笑いが止まらないわ」

淫虐な悪魔の考えとしか云いようのない順子の恐ろしい着想を聞かされた美沙江は、もう生きた心地もなく蒼ざめた顔を横に伏せているだけだ。

「毎日のおしめの取りかえは友子さんに直江さん、あんた達にお願いするわ。今までのこのお嬢様に仕えて来たんだから、それ位のサービスは出来るわね」

順子に云われた美沙江のかつての二人の女中は二つ返事で承諾した。

「それ位の事はこれまで御恩になったお返しの意味で喜んでさせてもらいますわ」

ね、早速、これ、お嬢様にはかせてみましょうよ、と順子の手からバタフライをとった春太郎はその珍妙な袋を面白そうに見つめて

云った。

「その前に、もう少しお嬢様に、この屋敷内の仕事を知って頂くと思うのよ」

順子がそう云うと、銀子と朱美は心得たとはばかり、柱に縛りつけられている美沙江の丁度正面に当たる襖に白い映写幕を張り始め、八ミリ映画を撮影するべく、映写機を配置し始めた。

「さ、みんな、こっちへ集まって」

順子に声をかけられて、田代も二人のシスターボーイも友子達も柱を背にして緊縛されている美沙江の足元へ尻をついたり、かがみこんだりして、眼を映写幕に向けるのだ。

「やがてはお嬢様もこういう映画に出演する事になるのだから、しっかり勉強しなくては駄目よ」

順子は床の間へ酒や肴を運んで来て、わなわな慄えつづける美沙江の脇のあたりを指ではじくのだった。

「静子夫人と捨太郎のがいいわ」

オーケーと銀子は持参して来たフィルムの中から一本を選び出し、機械にかけ始めたのである。



煉瓦の

光沢

宇野一郎

跡見洋子は火傷の跡をとどめる臀部を右手でゆっくり揉みながら静かな呼吸を楽しんでいた。茫洋として捉え所のない意識が沈澱するようである。揺籃の思い出が徐々に甦る。(私はこの原罪のような烙印をどう受け止めればよいのだろう、イヴのように禁断の実に触れた訳でもないのに)

一人の男が通りかかった。

今、跡見洋子は小さな門構えのある家のヴェランダで安楽用の藤椅子に深々と身を埋め

ていたのだが、レンガ塀の途切れたところを一人の男が通りかかっている。五メートル程の間、男と跡見洋子のお互いの視線を遮る障害物は何もない。男は急ぐ様子もなく、手にさげたアタッシュ・ケースをぶらんぶらんさせている。

そして洋子のところから見えなくなったと思うと、すぐ又引き返してきた。それは随分と勇気のいることである。ヴェランダで寝そべっている若い女の肢体を目のあたりにでき

るその視界を、再び得ようとする試みは、男にとって余程の決心が必要に違いない。

洋子は寝そべっていた。ノースリーブのブラウスに純白のミニスカート。

二十二才。未婚。家族は三人、弟と父がいる。彼女が三才の時、不注意にも彼女の臀部に熱湯をかけ、その痕跡を二〇年近くたった今も消滅することなく浮かび上らせている張本人ともいべき母は、一年前、既に他界している。

跡見洋子が火傷のもたらした宿命に気付いたのは、小学校五年の夏だった。

彼女にはその時、クラスに好きな男の子が一人いた。それで恒例の水練教室が夏休みに入った第一週目に近くの海で行われることになった時、洋子は相手の男の子もそれに参加することを知って、両親の心配も半分に加わったのだった。

その男の子は茨木清といった。少しなよなよしたところがあるのだが、突拍子もないことを平気でやって、女の子を驚かせたり喜ばせたりするので、その行動は専ら女生徒の注目の的になっていた。

スカートめくりや背中から手を入れてお尻

にタッチするなどは序の口で、授業中に先生に隠れてコップにおしっこをし、それを女の子に渡してのめという合図をしたり、休み時間だと砂場に穴を掘って、そこで女の子に無理やりおしっこさせたりという具合だった。

洋子には真理子という友達がいたが、その子も、お昼の休み時間に茨木君に無理やりおしっこをさせられたことがあったという。

真理子から半ば得意気にその話を聞かされて、洋子は自分に早くその順番が廻ってこないかなと心待ちする気持であった。真理子の話を聞いた翌日から、洋子は毎日毎日、昼休みの時間を砂場で過ごし始めた。目の前でクラスの女の子が次から次と「経験者」になっていく。が、洋子には仲々順番が廻ってこなかった。そして廻ってこないまま夏休みに入ってしまった。

洋子はそのころには毎晩茨木君の夢を見るようになっていたが、茨木君が後から腰を両腕で抱きかかえるところと、あと自分が一人でおしっこするところとだけが鮮明で、その中間は、いつもぼやけていた。

水練教室には、五年生は全部で四十五名が参加した。三クラス合同である。

洋子は水練教室の休憩所に着いて先生から

みんなして注意事項を聞いている時、女の子の顔ぶれを残る限なく見渡したが、自分のクラスから参加している女の子で「経験者」ではないのは自分だけだという事がわかると、おなかの下の方がきゅっと固くなるのを感じたというのは、先生の注意が終ると浜で泳ぐことになるのだが、その時茨木君におしっこさせられるのは間違ひなく私だわと確信できたからである。

しかし、いざその時になってみると洋子の確信はあざやかに裏切られた。岩と岩の間に隙を見て茨木君が連れ込んだのは、別のクラスの子であった。これは洋子にとっては相当なショックだった。

一時間ほど泳いだあと、砂浜で紙芝居が催されたが、紙芝居の間中ずっと洋子は茨木君の顔を追った。視線が会えばきゅっと茨木君は自分を忘れていることに気付くと思ったからだ。

しかし当の本人は、愛想のいいニコニコした笑顔を、紙芝居を演ずる先生の方に向けたまま、洋子の努力を、察する様子はなかった。しかも茨木君の足はというと、先程のよそのクラスの女の子のお尻をはさむようにしていた。

紙芝居が終るとまた皆で海に入ることになった。今度は泳げる人と泳げない人の二組に分けられた。洋子は余り自信がなかったけれど先の組に入った。女の子の大部分と、男の子の半分位はあとの組に廻ったが、茨木君は先の組に入ったからである。

彼は実際泳ぎが旨かった。忽ちクロールで二〇メートルも先を行ってしまう。洋子は、茨木君の現在位置を注意深く見定めながら不自由ながらも平泳ぎで前進し、一メートル程手前に茨木君が姿を現わした時、思い切って云った。

「茨木君。おしっこさせて！」

当の茨木君は、思いがけない女性からの提言に目をぱちくりさせ、洋子の顔を暫くきょんと眺めていたが、やがて笑顔を取り戻すと愛嬌よく云ってのけた。

「その岩の後に行きなよ、すぐ行くから」洋子はほっと一息ついて、それから一目散に岩の隠れ場に走りこんだ。そこはさっきよそのクラスの女の子がおしっこさせられたところと同じ場所で、洋子にはなんだかまだその女の子のにおいが残っているような気がした。

茨木君はしばらくして姿を現わした。期待

に満ちた洋子の視線をはずすかのように、洋子の肩に手をかけて背中を向けさせた茨木君は、両手を押し出すようにして洋子のお尻を捉える。

洋子の耳は、茨木君が口の中で呟くように「おしっこ、おしっこ」と連発しているのをキャッチした。水着の上からだ、明らかに動き廻る茨木君の手を感じ、洋子は「いや、いや」と二度ばかり声を出したが、茨木君の触手の素晴らしさに夢心地になって目を閉じ放心してしまう。

が、その夢心地はあっという間に消し飛んだ。水着を脱がされるというスリルに、洋子がワクワクし始めた時だ。

洋子の火傷の跡の生々しいお尻にぶつかって、茨木君は「きゃっ」と声をあげ、走り去

ったのである。洋子はその場に泣き伏してしまった。これからの人生が絶望的に思えて、むしように悲しかった。

今、ヴェランダに籐イスを出して涼風を楽しむ二十二才になった洋子は、ふっとあの時のショックを想い浮かべてみる。

誰の罪でもない、只、母の罪だ。洋子は、母の死後もその考え方を覚えていなかった。

あれ以来、洋子は幾多の男性の誘惑を受けてきたが、ペッティングから先は決して進むことがなかったし、どんなことがあってもお尻を見られる様なことは一度もなかった。

先程から、男がレンガ塀の切れ間より視線を投げ、じっと洋子を捉えている。やがて立小便でもするような恰好をし始めた。が、洋

子の肢体をながめながらあやしげなことに及ぼうとする意思は、はっきりしていた。

洋子は男の異常さに気付いた。それは次第に確かなこととなって洋子を怒らせた。しかし、反面それは洋子の容姿に関する自尊心をくすぐることもあった。

洋子はふっと籐イスから立ち上ると、男に背中を向けた。それからスカートのジッパーをはずし、スリッパをまくりあげ、パンティに手をかけた。

あの男も、きっと、茨木君のように「きゃっ」と声をあげて逃げ去るだろう。洋子は、さっと、白日のもとお尻をむき出しにし終わると、ゆっくりレンガ塀の方を振り返った。

男はいる。洋子はむしろ不思議に思えた。男は逃げ出さないばかりか、ますます身を乗り出さんばかりの様子を示したのだった。

紛れもなく洋子の火傷の痕に余計に惹かれていた態度だ。

洋子は原罪が今、晴れてゆくを感じた。恨みに思っていた母にすら感謝の気持が湧いてくるのを覚えた。

補修用のレンガの上に鈍く光る物が尾を引いている。洋子はそれを眺めながら思った。(これこそ正にメシアの賜物であろう)と。

天星社刊

《限定版グラビア写真集》 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円(送共) 略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

連載・アブ紳士行状記 仁科雅介の巻 (二)



M 派 交 友 録

(十)

鬼 山 絢 策

母親の誘惑

三十二才で仁科紙業の社長として、東京方面にも大口の取引先ができて、羽振りのよかった、恐らく仁科君の一番得意の時代だったのであろう。

永年、想い焦がれていた岩田美子に正式に結婚を申し込んだ。

しかし、父親の仁科雅太郎氏は、強く反対した。母親の、しのさんも大反対だった。

「あの娘だけは、よした方がいい。しょっち

ゆう男とくつついて、遊び歩いている不良少女じゃないか。男だって数知れぬほど知っているから嫁の貰い手がないんだよ」

そんなことは百も承知の仁科君だった。

一方、美子の母親は大変乗り気で、仁科君が飲みに行くとき欲待して是非もらってくれとくどくどと頼むのだった。飲んだ勘定は、どうしても取らなかつた。

「そりゃ、うちがこんな商売してるもんだからお父さんのお気に入らないのも、無理はありませんけどね。でも当人同志が好き合っているなら、これに、越したことはありません

よ。それに、あなただって今は立派な社長さんですもん。親御さんに気兼ねすることはないじゃありませんか。一緒に住むわけじゃないし」

結婚すれば父親の持家を一軒、分けてくれることになっていた。だが、父親が反対しているために、分けてもらえなかつた。美子の母親の多美子は

「それなら、うちの二階があいてるから、そこへ一時、住めばいいじゃありませんか。そのうち、お父さんも我を折るでしょう」と言った。

家の一軒ぐらい、買ってもいいと思つていた仁科は、両親の反対を押しきつて美子と結婚した。

もつとも肝心の美子は「あんたが、それほど結婚したいならOKしてあげてもいいわ」と言うような調子で、仁科が両親の反対を告げても無関心で、ひとごとのように困つた顔もしない。美子の母親が、やっきとなつてすすめても、大して気乗りがしないようすで、さりとして結婚をいやがつてゐるわけでもない極めてあいまいな態度で、結婚に踏み切つたのだった。

ただひとつ、美子のはつきりした態度をとつてゐるのは、仁科が小なりとは言え社長になり、金廻りがよくなつても、いつも仁科を見下ろし、その上に立つと言つた、いままでの態度をくずしてゐないことだった。

結婚当座、しばらくは料理屋をやつてゐる母親の家の二階、そこは美子の居間でもあったが、そこに落ちついたが、司町に格好な貸家が見つかったので、月が改まれば、そこに引っ越すことに決めた。

その引越しも間近かに迫つた或る夜、美子は名古屋へロードショウを見に行つて留守だった。店が閑なので、仁科は母親の多美子を

相手に飲んでゐたが、多美子のすすめ上手に酒を過ぎて前後不覚になるまで飲んでしまった。

多美子の肩につかまつて、二階に運ばれたあたりまでは覚えてゐるが、あとは眠つてしまった。

ふと気がつくと蒲団の上に寝かされた自分を見出したが、自分の股間に多美子が顔を埋めてゐるのにハツとなつた。

多美子の巧妙さにやめてくれとも言えず、そのままにしていると、やがて多美子の荒い息が顔にかぶさつてきた。

「かあさん！」

「雅さん、ゆるして。ゆるしてねっ」

多美子のせつない声におさえられて、身動きができなくなった。

四十をちょっと出たばかりで、色気もたっぷりある多美子が、泣き声をあげながら、しがみついてくるのを、まだ酔いの覚めてゐない仁科君は、どうしようもない気持で受けとめていた。

その時、突然、唐紙がサツとあいて美子の顔が見えた。

「アッ！」

仰天した仁科が母親を押しつけようとする

より早く、パシン！と唐紙が手荒く締まり階段を足音も荒く下りて行く音がした。

「美子、美子」

やっと多美子を押しつけて、あとを追つたが、その時は裏のガラス戸がガタピシャンと閉められて、美子はどこかへ出て行つてしまつたあとだった。店は閉まつていて、真つ暗になつてゐた。

「すみません、雅さん」

「ひどいなあ、かあさん。どうしよう」

泣きくずれる多美子を足もとに見て、仁科は困惑して立ちすくんだ。

犬 畜 生

美子はどこへ行つたのか行方不明だった。月があけたので、仁科は司町の貸家へ引越した。

すると間もなく多美子が来て、美子がみつかつたと言う。女友達でホステスをしているカナ子という女のアパートに居ると言うので多美子と一緒に出かけに行った。

美子もカナ子の勤めるバーへ出ていた。

夜の一時まで待つてやっと美子に会えた。

美子は仁科を見るなり、

「あんたなんか会う必要ないわよ。出てって頂戴」

「みんな、あたしが悪いんだよ。美子、だから、雅さんを許してやっておくれ」

「美子さん、ぼくが悪かった。許してくれ」

二人は美子の前に両手をつき頭をさげた。

「二人とも、けだものだよッ。出てお行き。」

出て行けたら！」

美子は足をあげて、仁科の頭を思いきり蹴とばし、とめようとする母親の頭も足蹴にかけた。

「母さんが悪かった、勘忍しておくれ。お酒に酔った上でのあやまちなんだから」

「もう母さんのところには居ない。司町家に引っ越してるんだ。美子さん、わかってくれよ、なあ……」

仁科は美子の足もとに、すがりついた。

「さわるな、けがらわしい。お前なんか母さんと結婚すればいいじゃないか」

「そんな殺生なこと言わないでくれ」

「ちき生。お前は畜生だよ。ホラ、あたしの足をナメろ！」

美子は仁科の顔を蹴とばし、顔の前へ足を突き出した。

「そんなお前、ムチャクチャなことを……」

多美子は止めようとしたが、仁科は突き出された美子の足をペロペロ舐め、足の裏まで舐めた。

「フフ、畜生、犬。そんなに、あたしが欲しいか」

美子はスカートをまくって、仁科の顔へ跨がった。

「欲しい！」

「お前なんか犬畜生だぞ。ちくしょう！」

美子は太股で仁科の顔を締めあげた。

多美子は呆れ顔で、見ているだけだった。

「このつぐないはどうやってするつもり？」

美子は上から仁科を睨んで冷たく言った。

「どうせお前なんか、金でしかつぐないができないんだろう。これからあたしの欲しいものは、どんどん買うんだよ。いいか！」

息が詰まって失神しそうになった仁科の顔は真赤になった。

「もうそのくらいで許しておあげよ。美ちゃん」

多美子は傍で見ていてオロオロした。

「だめよっ！　こん畜生っ、骨身にこたえるようにしてやらなきゃ！」

美子は狂ったように足で締め上げたままの

仁科の頭をボカボカ殴りつけた。

その時美子の友達のカナ子が帰ってきた。

一番慌てたのは多美子で、扉が開くなり、上り口へとんで行って中を見せないように立ちふさがって、

「まあまあお疲れさまでしたね。美子の母でございます。夜分、突然お邪魔しまして、すみませんですね。美子がいろいろお世話になりました、ほんとに有難うございます」

ペラペラとしゃべりまくって、カナ子が部屋へ入るのをくいとめた。

カナ子が部屋へ入った時は、美子は煙草をすっていたが、仁科は口をだらしくあけて長々とノビていた。

「あら、この方が旦那さんなのね」

「ウウン、此奴は、あたしの奴隷よ。いま、お仕置きしてやったの」

「美子、これ、さっきのあの人がくれたわ」

カナ子は千円札をムキ出して美子に突き出した。

「二千円くれたから、半分ずつね」

「サンキュー」

美子はハンドバッグにしまった。

仁科は倒れたままうす目をあけて金をやり取りするのを見ていた。

何十倍の「お礼」

その夜、多美子と二人でなだめすかして、やっと美子を仁科の新居へ連れてきた。

翌日、早速「つぐない」の第一歩を踏み出させられた。名古屋まで出て行って、モヘアのオーバーとウールのスーツを買わされた。

かなり高い買い物だったが、美子が少女のように、あどけなく喜ぶのを見てみると、たとえこれが「つぐない」でなくても、夫として愛する妻に買ってやることは当然のことだと思った。買物をすませると、仁科はその足で事務所に向かった。

その夜、取引先の男と食事をして九時頃、家に帰ったが、美子は居なかった。

仁科は、また逃げ出したんじゃないか、という不安におそわれた。

「ひとに、欲しいものを買うだけ買わせといてズラかるとは、ひどい」

飲み残しのウイスキーを、ちびちびやりながら待ったが、いつまでたっても帰ってこない。

「ああ、俺もえらい女に惚れこんでしまったもんだ」

自嘲と怒りと不安と、それに商売のことも考えながら、ついウトウトと、まどろんでしまった。

美子が帰ってきたのは一時を過ぎていた。

玄関の戸の開く音で仁科はパツと目が覚めた。とび起きて玄関に行ってみると、酔った美子が、

「ただいまあ、まだ起きてたのオ」

今日、買ったばかりのスーツとオーバーを着て、赤いダリアの花のように立っていた。

「ああ、帰ってきてくれたのかい。こんなに遅くまで、どこへ行ってたの」

「カナ子さんのお店よ。だってまだ、いままで働いた勘定が残っていたんだもん。もらってきたのよ」

「ああ、そうか。そんならいいけど、また、どこかへ行っちゃったんじゃないかと思って心配でたまらなかったよ」

「ウフフフ、そんなに妾に惚れてるの。どうこの服、すてきでしょ。みんなにほめられたわ」

美子は玄関で両手をひろげてファッションモデルのようにクルリと回って見せた。黒いスーツに赤いオーバーと、原色の好きな美子は、それがまた、よく似合った。

「ウン、きれいだ。すばらしい」

「こうなると靴が黒じゃ、おかしいわ。赤い靴でなくちゃ。明日、赤い靴、買ってね。それとハンドバッグも、いま持ってるのは大きすぎて、やぼくさいわ。もっとスマートなのが欲しいわ」

「ウン、そりゃそうだけど、一度に買わなくても、いいだろ」

「でも、いまの靴じゃ、型が古くて歩けやしない。いいわよ、あんたは仕事忙しいんでしょ。あたしが気に入ったのを見て買ってくるから、お金頂戴」

「買物は、どれを買おうかと楽しみながら、ひとつひとつ時間をかけてゆっくり比較して買う方がいいよ。そんなにあわてて買わなくてもいいだろ」

「あわててなんかないわよ。必要だから買うんじゃないの。あたしにお説教するつもりなの。これもつぐないのうちなんだからね」

「分かった、分かった」

美子は足もとも危うく、よろけながら部屋へ上った。仁科は、それを助けるようにして抱きついた。

「ダメよ。洋服の型が崩れちゃう」

「じゃ、お脱ぎ。もう遅いから、寝よう。脱

がしてあげる」

後ろへ回って、ホックをはずす。シュミーズ一枚になると、みごとにグラマーの肉体が誇らし気にあらわれる。テーブルの上にドシンと腰を下ろすと、仁科が前にまわって靴下を脱がせにかかる。

太く逞しい腿のつけ根のガーターをはずし弾力のある太腿からスルスルとナイロンの靴下をまいて行く。その下から、さくら色の、はちきれそうな腿の肉が指先に、はね返ってくる。

「今夜、店へ出たの？」

「ウン、すぐくもてちゃったよ。今日は、遊びだもん」

「君を好きな男も居るんだろう」

「ああ、一ぱい居るよ。なにさ、あんた、やいてんの。アッハハハハ」

美子は、裸に剥かれた足をまげて、仁科の肩へかけた。

「あんたなんか、やく資格ないじゃないの」
太腿を首に巻きつけてキュッと締めると、狐みたいな顔になった。

「アハハハ、生意気に亭主づらして、やきもちなんか、やきやがって。よし、少し、いじめてやる！」

美子はシュミーズもパンティも乱暴に脱ぎ捨てて全裸になった。

「ああ、寒い」

傍のオーバーを裸の上に羽織った。

「どう？ 毛皮のヴィーナスよ」

「え？ 君、毛皮のヴィーナス知ってるの」
「知ってるわよ、そのくらい。あんたはドレイ。コラ、鞭で打ってやろうか」

ピシャッと平手打ちをくれた。

「あっ、痛っ」

「なにさ、このくらい。こうすりゃどうだ」
頭を蹴とばすと、倒れた胸へ馬のりに跨がった。

「お前は、あたしに対して、ひどい侮辱を加えたことを忘れてやしないだろう。これから何日も時間をかけて、ゆっくりとお礼をしてやるからね」

頭に両手をかけてドッシリと大きな尻を顔の上にのせた。

「何十倍にもして返してやるから……」

酔うと美子のサディズムはひどくなった。グリグリと尻を揺すって顔を潰しにかかる。
「男なんて、みんなケダモノだよ。犬だよ。こん畜生ッ」

何をされても仕方がない。自分に大きな過

失があったのだから——とも思い、また美子の、かぐわしい肉体で責められることに甘く悩ましい快感も次第に強く感じるようになっていた。

苦手の顔

やっと家の中もおちついたもので、しばらく振りに父親、雅太郎の家に寄ってみた。

父は居なかったが母親のシノが
「お前ちの美子には気をつけなくちゃいけないよ。お前の留守に男を引っ張りこんでいるよ」

と知らされた。昼間、シノが訪ねて行くと玄関に鍵がかかっている。留守かと思ったがドンドン扉をたたくと「どなた？」と奥で声がする。「あたしだよ」と言うと、しばらくして寝巻姿で美子が戸をあけた。「眠いから寝てたの。やたらに起こされるのイヤだから鍵をかけてたのよ」と言うが、テーブルの灰皿には十何本も吸い殻が詰まってるし、ウイスキーとコップが二つ、置いてあった。誰か居るに違いないと思った、と言う。

「なにか態度にへんなところ、ないかえ」
別に変わったところは見られない。もとも

と仁科を奴隷扱いするのは相変わらずだが、それは最初からだし、たとえ母親と言えども話して分かってもらえることではない。

だが、そう言われて見ると気になった。

元来が浮気っぽい女だし、バーへ出ていた頃のなじみ客とでも、できているのかもしれないと思った。

翌日から仁科は毎日、昼間にソツと家に帰って見た。玄関がスリと開く日は、安心して事務所に戻った。

三日目の二時頃だった。玄関に手をかけてみると開かない。仁科はハツとした。

「美子！」

と声をかけてみようと思ったが、思いとどまって裏手に回ってみた。裏の勝手口も締まって開かない。

勝手口から左の方へ、人一人や々と通れるだけあいている。汲み取りの通路だった。便所の前に来て、そこで耳をすませた。隣が寝室にしている六畳の部屋だったからだ。

何か部屋の中で声がする。便所の窓に耳をもっていくと美子の笑い声と男の声がする。

「やっぱり、おふくろの言った通りだった」

「寝室から聞こえる男女の声！」

話し声を聞きたろうとしたが、よく分から

ない。

「あの声は一体、誰だろう」

まっ先に浩三の顔が浮かんだ。だが、少し違うような気がする。

聞き覚えのあるような声でもあるが、思い出せない。

仁科は表に回り激しく玄関の戸を叩いた。

「美子、美子ッ。僕だ、開けてくれ。開けてくれッ。美子ッ、開けろッ」

いくら叩いても開ける気配はない。

「どうしよう。このまま引返して夜になって訊きただせば、ごまかしてしまうだろう。どうしても手証を見たい。いま、入らなければだめなのだ」

仁科は、入る場所を考えた。

裏の勝手口のガラス戸を叩き破るか、便所の汲み取り口から入らなければならないが、両方とも感心しない。

ふと思いついて、便所の隣の風呂場に回ってみた。そこは上の方に窓がある。窓は閉まっていたが、外から簡単にあいた。仁科は、そこから風呂場に頭から逆おとしになるようにして入った。幸い下に風呂桶があり、蓋がしてあったので、その上に、手をつけて入った。

ガラガラと風呂場のガラス戸を開け、足音も荒く寝室の六畳へ突進した。

寝室の唐紙は開けっ放しになり、そこに男が、こちらへ背中を向けて、あぐらをかいていた。黒いセーターに白っぽいズボンをはいて、煙草の煙が肩のあたりから、あがっていた。

部屋には蒲団が敷かれ、美子がシュミーズ一枚で蒲団に、ひじ枕をして寝ていた。

「美子ッ。このざまは何だッ！」

いまにも殴りつけんばかりの、すさまじい見幕でどなりつけたが、美子はビクリともせず、ひじ枕をしたまま、うわ目づかいにジロリと仁科を見上げて、

「何で入ってきたのよ」

と言った。その時、背を向けていた男が、ゆっくりとこっちを向いた。

「おう、しばらくだったな、仁科君」

その顔を見るや、仁科はアッと驚いた。男は大場浩三だった。

浩三は落ちついたもので、煙草をくゆらしながら

「岐阜へちょっと帰ってきたもんだからな、昔馴染みで御機嫌を伺いにきたのさ」

といった。

浩三は以前よりふけて見え、声も太くなつて、やくざが身についてきたように見えた。

仁科は言葉が出なかった。どうも、この大場浩三だけは苦手である。浩三と美子がイチヤツイているのを指をくわえて見ていたことも再々あるし、あの東京の下宿では二人の愛し合うのを傍の寢床で一晩中、見せびらかされた、あの苦い思い出が一瞬のうちに、よみがえったのだ。

仁科は、浩三から視線をそらすと、

「表の戸をいくら叩いても開けてくれないし中でお前の声はするし、おかしいと思って入ってきたんだ」

さつきの勢いはどこへやら、弁解するような口調で、美子に言った。

「入れたくないから開けなかったのよ。なにさ、泥棒みたいなまねして。あんたには、こんなことをする権利はないのよ。分かってるでしょ」

美子はゴロリと仰向けになり、片膝を立てた。シュミーズがまくれて、太腿がみだらな曲線をつくる。それは、いましがた、さんざん情痴の限りをつくしたもののうさが露わになっていた。

「とにかくね、いまは、あんたの出る幕じゃ

ないのよ。早く出て行きなよ。何さ、仕事を放ったらかして、こんなところへきて」

「大場君、僕達は、いまは夫婦なんだ。夫の留守宅へくるのだけは遠慮してくれたまえ」

「アッハハハ、雅やん、やばなことを言うなよ。昔を忘れたのかい。まあ、坐れよ」

「いいから出てお行き。あんただって、いろんなことやってたんだから、妾のやることに口出しはできないはずよ。それとも妾達の、あそぶところが見たいんなら、見せてやってもいいわよ。そこへ坐ってごらん。拝ませてやるわ。昔、よくやったじゃないか。フッフ」

仁科は、クルツときびすを返すと、玄関の錠をあけて、扉を開けっ放しにして飛び出してしまった。

柳ガ瀬芸妓

「その日は、やけくそになって、この柳ガ瀬で遊んでしまったんですがね」

仁科君は酒が入ると、多々ますます弁ずというくちであろうか、さっきから、もう三時間以上も話しつづけている。話がちょっと途切れた時は、当時を追想するように目を細めて、空間を見つめているが、話し出すと、こ

とこまかに当時の事柄や心情まで打ち明けるのだった。

もう十二時をとくに廻り、一時に近い。もっとも、ここまでするには、話の順序もまちまちで、話の結末は、もっと前に既に話してしまったのである。

話は一応、十時半頃に終わったのである。

「どうです？ 此処は音に名高い柳ガ瀬ですよ。女の子を呼びましようか」

「そうですね」

「どんなタイプの女がいいですか」

「私はグラマーな女性でないと、だめなんですよ。年も、あんまり若いのは……、十代じや、面白くないですね」

「やっぱりSっ気のある子が、いいんでしょうね」

「それに越したことはないが、なかなか居ないでしょう」

「ああ、それじゃね、いい子が居るんですよピッタリのが。呼んで見ましようか」

「バーの女ですか」

「イヤ、芸妓です。まあ一度、会ってみて下さい」

仁科君は、すぐ電話をかけた。見番やら自宅やら、あちこちかけたが、

「今夜は一ぱいで都合がつかないそうです。残念だなあ、明日の晩なら、いいそうですがどうですか、先生。もうひと晩、岐阜にお泊りになりませんか」

私は明日、午後からちょっと用がある。それを済ませて帰るつもりであったが、仁科君の話の内容にも興味があり、またこれから呼ぶ美香という芸妓にも、仁科君と密接な関係があるということなので、食指がうごいた。そこで明日もう一晩、岐阜に泊ることに肚をきめた。

そう話が決まると、今夜はもう、することがなくなった。それなら仁科君の話をもっと委しく、ゆっくり聞こうということになって話は逆戻りしたり、順序がいろいろに変わって聞いたのだが、その通り書いたのでは読者が混乱を招くと思って、編集し、順序を立てて書いていたのである。

だから仁科君は、最初からこんなにこまかく話したわけではなかった。

あんまり遅くまで居ては「おさだ」も迷惑だろうと思い、仁科君が近所の宿屋に電話して部屋をとってくれた。それじゃ、そこへ行って飲み直そうということになった。

勘定を払おうとすると「ここは僕のツケの

きくところですから」と言っ、どうしても払わせない。

「じゃあ、今夜は御馳走になりました。その代わり明日は私が、あなたを招待しますから」

ということ「おさだ」を出た。

柳ガ瀬はまだ人通りが多く、店は閉っていても、まだ何となく華やいだムードが漂っている。さすがに名古屋に次ぐ東海での遊び場だと思った。

旅館へ入ると、まだ飲みたそうな顔をしているので、お酒三本とビール一本をとって、「これがなくなったら、寝ることにしましょう」

と言って寝床も敷いてもらって、また話の続きに入った。

「あの日、ムシヤクシヤして、仕事をする気にもなれず、やりきれない気持で、無性に女が欲しくなったんです。三時頃で、まだバ―は開いてないので、あ、いま通って来たでしょう。此処から、つい五、六軒先の左側に『花菱』という料理店があったでしょう。いまは代が変わってますが、あそこへ上って芸妓を呼んで、飲みはじめたんですがね、凄く欲情してしまって、昼間から習朝まで六、

七回、営んだですね。あんなに欲情したことは、生まれてはじめてですよ。一万二千円ばかりあった財布を女に預けたらトコトンつき合ってくれましたがね。飲んじゃ女を抱き、また飲んで女と寝たんですが、女の方が驚いて、あんた、どうしたの。まるでムシヨ帰りみたい、ガツガツしてるわね、って言われましたよ」

もう私は酒は一滴も飲むのがイヤになっている。仁科君は手酌でチビリチビリやりながら、

「どうしてあの時あんなに欲情したのか、いま、考えてみると、嫉妬がそうさせたんですね。いまごろは美子と大場が、ちょうどこんなことをやってるんだらうと、女を抱いていても、頭はそっちの方へ行ってるんですね。その場面を想像しただけで、むやみにいきり立ってくるんです。女はしまいに、あくびまじりになってきて、あんた、それじゃ体に毒よ。なんて言うから、いや、俺はもうどうなっても構わないんだ。俺という男はだめな男なんだ。俺を殴ってくれ、俺を蹴とばしてくれ。みんな俺が悪いんだ。なんて酔っぱらっちゃって、わけの分からないことを言うとその女も素直な女で、じゃ、こうしたらいい



『ダイアン・ベーカー』

女性 乗馬考……佐野 寿

の。あんた、ヘンタイね。なんて言いながら僕の言う通りのことをやってくれましたよ。それに刺戟されて、またカッカッとなってしまふ。いや、あの時は、ほんとにヘトヘトに疲れましたね」

「たのしかったですか」

「イヤ、ちっとも楽しくなんか、ありませんよ。苦しみの連続ですな」

「そうばかりでもないでしょう。いま思い出してみ、どうですか」

「そうですねえ。もっともあの時から、僕の性向がある方向に決定づけられたんだから、あれだけ燃えたということは、楽しくない事もなかったのでしょうね、いまも、あの苦しみを追い求めているんですから」

私は、その彼の性向、嫉妬に対する屈辱と

欧米の映画女優には、昔から、アニタ・エクバク、エリザベス・テイラー、イヴ・オンヌ・デカルロ、ジェーン・ラッセル、エヴァ・ガードナー等々、本格的な馬術をたしなみ得る女性が少なくありません。今日でも向こうの乗馬クラブは富と地位のシンボルとして、有名女性の姿が多くみられるようです。ある意味では彼女等の栄光をあらわすものと考えてもいいでしょう。

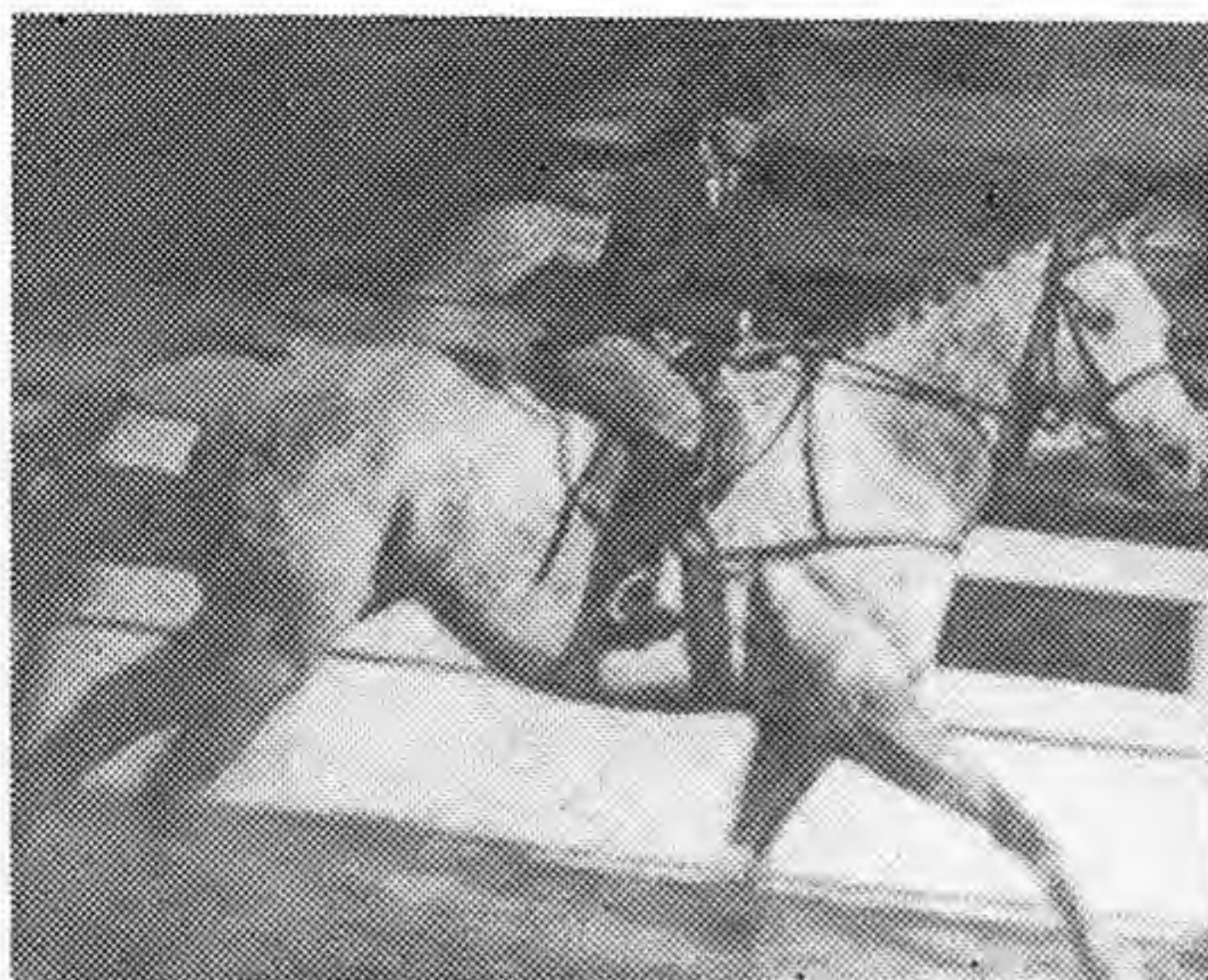
その意味を含んでかどうか最近のディズニープロ作品「紅いリボンに乾杯！」に出演のダイアン・ベーカーは、乗馬学校の女性指導員に扮して、すばらしい馬術と秀逸

自虐の心理に、非常に興味を持たれた。

「それで、どうしました」

「あけ方に最後のおつとめが終わったあと、一べんに疲れが出て、昼すぎまで泥のように眠りました。それから事務所に顔を出して、夕方、家に帰ってみると、美子が居ません。玄関が閉まっているので、また風呂場から入って、玄関を開けたままにしておこうかと思っただけど、結局、鍵をあけて美子の帰るのを待つ気になったんです。そのうち、また眠くなったので、敷きっ放しにしてあった蒲団へ潜りこみました。この蒲団の中で、さんざん情痴の限りをつくしたのかと思うと、また嫉妬のはむらがムラムラと燃えてくるのです。だ就是不潔感はないんです。むしろ、美子の妖しい残り香のこもった、この蒲団の中に、嫉妬とミックスされた僕だけが感じる欲情が起きてくるんです。どうしようもない焦燥感、憎悪、そんなものに、からまって、無性に美子が恋しくなりました」

私は僅かしか飲まなかったが、それでも酔いがまわって眠気さえ覚えてきたので、失礼しますよ”と言って蒲団へひっくり返った。「いつの間にか眠ってしまったんですね。どのくらい眠ったのか知りませんが、美子に起



な演技を充分に見せてくれています。

えび茶のキュロットに赤皮の長靴で、黄色のリボンの軽ろやかな姿。及び、淡紫色の乗馬服に白のキュロット、黒長靴のダイアン、のさっそうたる馬上姿は、アマゾン崇拜讃美者、馬装ファンたる私にはこたえられないものです。

こんなにクリテリオンの高いのも、ひとえに美女による上流階級のスポーツだからでしょうが、ダイアンの調教を受ける名馬アスパセル号とは、なんと幸せな馬であろうかと思われてなりません。誠に美女による名馬の調教というイメージは、秀逸無比とっていいでしょう。それは、あたかも乾ける砂漠の中でのオアシスのように、マニアの希求を満たしてくれる香り高き永遠の女神、といったらい過ぎでしょうか。

ダイアン・ベーカーは根っからの乗馬マニアで、本格的なアマゾンだそうで、画面の調教シーンでも拍車や笞が使われていますが、それはあくまで適切なもので、SM小説にみられるような、打つために打つサジスチンのやたらな鞭打ちとは、全くおもむきを異にしたものでした。

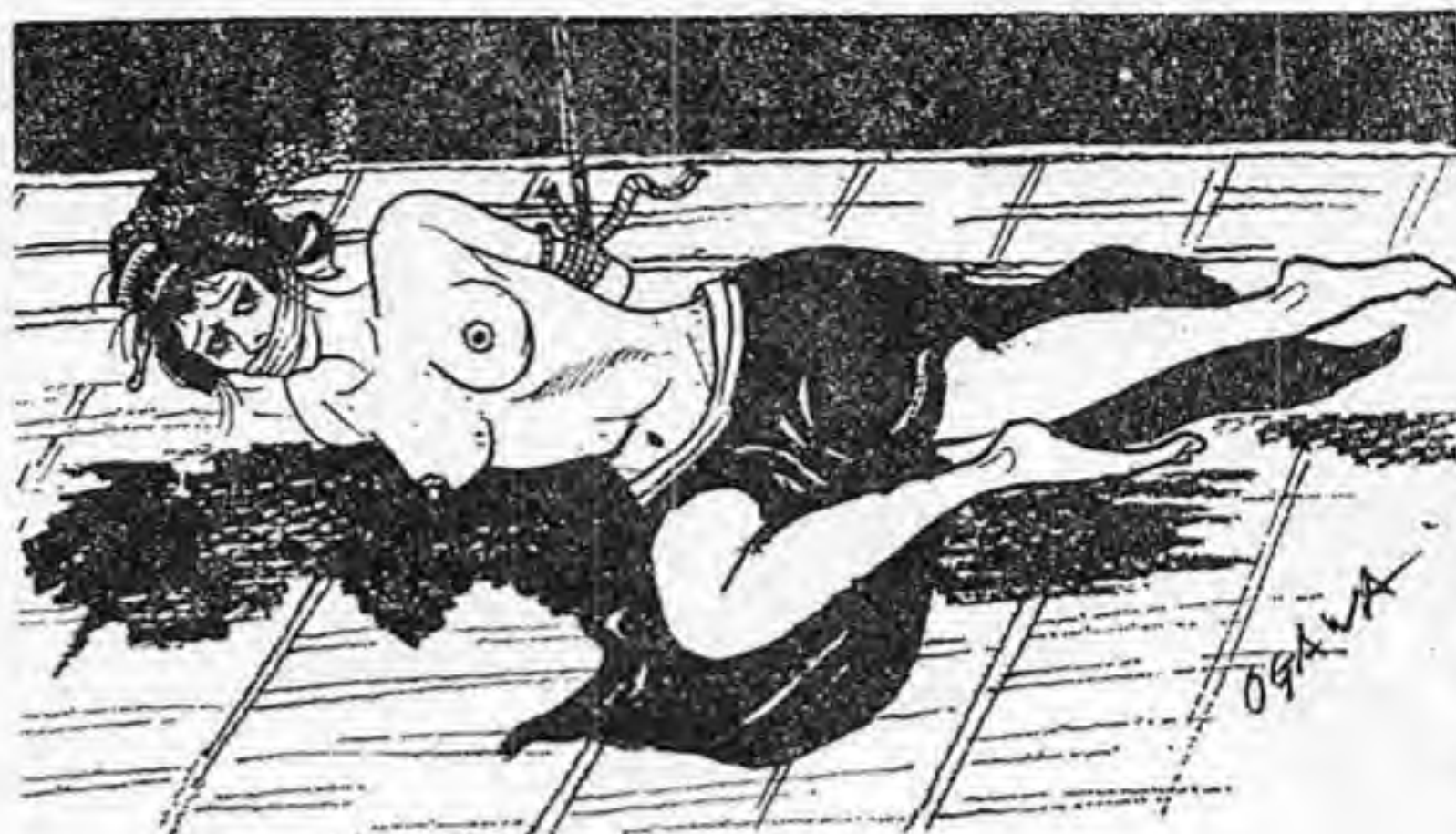
私はこの映画の、ベーカーの優れた馬術と洗練された身のこなし方に心を奪われ、素晴らしい馬装を整えたデサイナーに讃嘆の声を挙げる想いです。

こされたんです。『御飯ができたわよ』ってね。気がつくと朝から何も食べてないので、猛烈に腹がすいているんです。二人で夜の食膳に向かいましたが、美子が上機嫌なので、昨日のことには触れぬようにして、飯を食べました。時計を見たら十一時頃でした。もうどこへも行かないでくれ、と僕は哀願しました。寝室へ一緒に入ろうとすると、お風呂が沸いてるから入りなさいと言うんです。入りたくないと言うと、何さ、さんざ芸妓を抱いてきたくせに、汚らしくてしょうがない、と怒鳴られた時は、びっくりしました。彼女は僕の行動を、どうしたわけか知ってるんですね。きっと『花菱』のおかみが、同じ料理屋仲間のよしみから、美子の母親にでも話したんじゃないかと思うんですがね。それを母親から美子が聞いたんだと思うんです。それじゃ一緒に入ろうと言うと、妾はいいのよ。あんたは入らなきゃダメ。風呂へ入ってきたらどこでもなめさせてやると言うんです」

話が、そろそろ面白くなってきたので私は蒲団から起き上って、飲みたくもない盃に、また手を出した。

(続く)

(カット・岡たかし)



小川茂正・画

埋蔵金百万両

慶応元年春。

江戸城内——。

富士見宝蔵の鉄の扉が、おもおもしろく軋きしん

美女緊縛作法

八重垣流秘聞

(その一)

風流極道軒

の唐匣からくしげの蓋をあけた。

「あつたぞ！ 小栗おぐり！」

「いかにも、美濃殿！」

答えたのは勘定奉行小栗上野介忠順、広い肩幅の上に猪首けいがのっかり、両眼だけが炯々として手燭に映えている。

もう一人、長身瘦軀、あきらかに伊賀者と思われる男がいた。この宝蔵番頭服部別当、
「やはり……」

と唾をのみこむと、

「わが家のいいつたえに嘘いつわりはございませぬ。百年経とうが二百年経とうが、主命はいかなることがあっても果たし抜き、守りぬきます……」

三人の男の眼が、唐匣から取り出された異様な布に注がれた。布ではない、かとして、紙でもなく、材でもない。

「羊皮と呼ばれるものか」

稲葉美濃が、指で触りながら云う。

「それよりも、この文字は」

手燭の明りが、墨痕ぼくごんあざやかな文字をうかび上らせる。

はるか遠い異国で、その昔、紙の代わりに用いられたという羊皮の上には、次のような謎めいた言葉が書かれていた。

軍 宝

男女ありて一双より九双に至る

男六双にして起つ

女九双にしてすすり泣く

陰陽相なかばす 黒赤縄十六方 三方

より十二方に至る二十七町

宝暦元年六月 吉宗

「まさしくこの花押は有徳院吉宗様」

小栗が、うやうやしく呟いた。美濃も深くうなずいて、

「黄金百万両の謎をとく鍵……別当。」

でかしたぞ、賞めてとらせる」

「しかし美濃様、この謎の文句は………いったい何を意味しているのをごいまいしょうか。軍宝は、吉宗様が万一に備えられて埋蔵された百万両として、以下の文句は、隠し場所を示すもの、どう解釈すれば……」

三人の眼が羊皮紙に吸いつけられる。

徳川八代將軍吉宗が、孫の家治を溺愛したことはあまりにも有名である。三人のこどものうち、一番凡庸の家重を九代將軍に指名したのも、家重の子の家治を愛していたからなのである。その吉宗は、存職中、味噌でもって勅使を饗応するのかとそしられるほど幕府の出費を押え、自らも儉約をした。これは、

赤字財政を黒字にするという意味もあったであろうがそれ以上の目的——幕府に対する大規模の反乱を予想しそれに備えて軍資金を蓄積しておこうという深謀遠慮が働いていたのではないか。事実、吉宗の治世、享保の頃、百姓一揆が、全国津々浦々でおこっている。

幕府の危機が必ず訪れる、それに備えて、吉宗は、可愛い孫家治のために、百万両という、幕府の一年間の財政をまかなうにたる黄金を遺したというのである。そして、この秘密は、家治の母、梅溪氏だけに洩らされた。

梅溪氏は死に臨んで家治に伝えた。が、家治は、尊敬する祖父が万一のために遺したときかされて、未だその秋にあらざと手をつけずこどもに恵まれないまま治世二十六年で世を去った。去るに際して最も信頼あつたお庭番の服部散位をよび、一子にのみ伝えるべしと厳命して秘密を打ちあけその守護を命じた。散位——つまり服部別当の曾祖父である。

「家治様のあと十一代將軍をおつぎになった家齊さまは一橋家の出、ご存知ありません。十二代様も十三代様も、そして当代家茂様も勿論ご存知ありません……」

併し秘密はどんな秘密でも風評をうむ。アメリカ使節ペリー来航以来、幕府は一日一日

苦境に追いこまれ、吉宗の予言した倒幕の氣運が、全国にひろまりつつあった。老中稲葉美濃は、小栗上野とはかつて、単なる風評であつた吉宗の埋蔵金の真偽を、支配下の黒鍬組に命じて探査させること二年、あきらめかけたときに思いがけず服部別当が、父から、父はその父から代々一子にだけうけつがれてきた秘密を、幕閣に申しでて、恩顧無類の幕府の安泰を計るべき時はいまをおいてほかにないと、申しでてきたのであつた。

美濃と小栗はとびあがって喜んだ。黄金さえあれば、反幕府の旗頭で、ことごとく幕府にたてついてくる長州毛利藩を木葉みじんに撃破することができよう。毛利藩が屈服すれば、天下は再び幕府になびくのはあきらかなこと——。

「幕府の存亡はただこの黄金にかかる」

美濃たち三人は、手燭のつきるまで羊皮紙の謎ととり組んだ。

富士見宝蔵唐匣のなかに、埋蔵金の鍵がある——と伝えられた服部別当も、その内容までは知らされていない。

「男女ありて一双より九双に至る……一双とは……また、男六双にして起つとは、女九双とは……」

考えあぐねた三人が、外へ出たのは、もう寅の上刻であった。

「一双より九双に至る……か」

小栗達が謎の文句をくちずさみながら、城内西の丸へと歩をはこぶ。

と――

夜空にそびえる櫓の大樹の下枝が動いた。

「ヘッヘッヘッ……こりゃあ、また、とてつもねえ話をきかせてもらったぜ。このミズチヨボの狐六さまの地獄耳、八町先に針がおちても聞こえらあ……」

猿のようにすべりおりると鉄砲狭間はざまの堀にそって姿を消す。

警戒厳重な江戸城中、いったいどこから忍び込み、どこへと脱け出すのか、奇怪な男である。

いや、もっと奇怪至極なことが、その直後におこった。

もう一人いたのである。こちらは陽気な含み笑い、

「フッフッフ……ミズチヨボの狐六といや

あ、上州は黒駒の勝蔵身内で二番とは下らねえ、赤鯉丹波六人組の一人。その勝蔵をうしろから糸であやつっているのが今をときめく長州藩の桂小五郎や木更津刑部……こいつは

ちいっと面白くなってきやがるぜ。ただし、どっちにころんでもこの夢売の又平さまにやあ関係のねえことだが……フッフッフ」

もう一度、陽気な含み笑いを洩らすと、宝蔵の屋根から長堀の上へと、そして乾小門の扉を音もなく開くと高い城壁からまるで黒い陽炎のように姿を消してしまったのである。

△黒鯉組動く▽

江戸は八丁堀同心町の南町奉行所同心書役笹川うねめ妥女の妻三千代が、行方不明になったのは、笠森稲荷の祭礼の日であった。

仲間の伊助ちゅうけんの言によると、彼が一寸、唐人手品一座の看板に目をやっている間に、二、三間さきを歩いていた奥様の姿が見えなくなったというのである。

二十六歳の妥女にはまだはかばかしい手柄話はなく、従って、島帰りや脱獄囚からお礼参りをされる覚えはなかった。

「いかがいたしたものでございましょう」

妥女は、上役であるとともに八重垣流捕縄術の師でもある筆頭与力、八重垣大学に訴えた。肥満した軀をもてあまし気味に左右にゆすりながら大学にもよい思案はない。すでに

南町奉行所をあげて探索すること三日、杳ようとしてその行方はおろか、手掛かりひとつ、つかめないのである。

がっかりしながら家路に向かう妥女を途中で息せききって迎えたのは伊助である。

「だ、旦那！ 奥様の、奥様の……」

「三千代がどうした、帰ってきたか！」

「いえ！ そ、それが、ひ、ひでえことを、

ひでえことをしやがる！」

「こ、ころされたのか！ まさか！」

「……奥様のお着物が……」

「見つかったのか」

「お、おくりとどけてきやがったので！」

「何と申す！」

血相変えて家にもどった妥女を待ちうけていたものは、鵜萌黄に松葉結びの小紋を染めあげた桐生銘仙の長着――妻のものに相違ない。しかも、水色ぼかしの紋紗の長襦袢までが副えられてあった。思わず手にとれば、匂う、匂う、たしかに妻の三千代の肌の香りにまぎれもなかった。

「旦那、これが……」

伊助のさし出した書状をみたたん、妥女の顔から血の気がひいた。

それには、拙い字で次のように書かれてあ

った。

(笹川三千代二十二歳、たしかにお預り申し
おり候。返してはしくば、明四月十四日六つ
半、護国寺境内に来るべし。絶えて一人なる
べき事」

とあり、しかも末尾に、

「三千代殿の肌、皎として玉の如く輝きおり
候。ちなみに、右乳房下一寸、小さなほくろ
あり」

まさしく嘲弄の文句である。

齒ざしりしながら妥女は、待った。明日の
六つ半まで、まる一日。助けを求めようにも
絶えて一人なるべき事とあれば、八重垣大学
を始め、上役、朋友にも知らせることはでき
ぬ。第一、この書状を、どうして他人に見せ
ることができよう。妻が裸にされている——
妥女は、伊助に他言しないよう命ずると、三
千代の着物を抱きしめて、酒をあおった。結
婚以来三年、ぶつとりとやめていた酒であっ
たが、今の妥女には、酔っぱらう以外に、明
日を待つ方法とではない。

酔いのなかで妥女は、今、妻がどんな惨め
な姿をさらしているかと考える。追っても追
ってもその妄想は去らない。長襦袢まで剥ぎ
とられて、肌襦袢は、そして、腰布は……

まさか、そこまでは！ 全裸にされる理由は
ない！ 何ひとつ悪を、うしろめたいことを
した理由はない。相手は、一人なのか、二人
なのか、それとも徒党を組んでいるのか……
喰いっぱぐれの浪人の仕業か、やくざか、そ
れとも、島おくりから赦免されて帰ってきた
極悪人か……三千代！ 妥女の喉に、裸にむ
かれて、白い乳房をさらけ出し、男たちに縛
られ鞭うたれている妻の姿がうかぶ。一体！
どうして、こんなことに……

妥女は、頭をかかえ込むと部屋中をころげ
廻った。

その頃——

浅草は伝法院の近く、長屋の一角にある岡
っ引き朱房の重蔵の家へ、中肉中背、どこと
いってつかみ所のない武士がひとり、ふらり
と入ってきた。去年の暮、不逞浪人を逮捕し
ようとした際に、腰にうけた傷がもとで、ま
だおきあがることのできない重蔵に代って、
応待に出た女房のお千賀は、武士の姿を一目
みると、あわてて、

「左弁様！ これはまた、何の御用で！」

と、いそいそとして重蔵の枕もとに座蒲団
をおく。

「重蔵、どうじゃな、手傷は」

「へえ、どうもこうも……」

おき上ろうとして、アッ、チツチツ……と
顔をしかめる。そのまま、そのままと、眼で
制した左弁は、重蔵夫婦に、

「男女ありて一双より九双に至る、男六双に
して起つ、女九双にしてすすり泣く……」
と呟いた。

「存じておるかなこの文句……」

瞬間、お千賀の顔に動揺の色が走ったがそ
れを見すかされないうためであろう、何気ない
動作で、重蔵の蒲団の裾を直しにかかる。

「存じませぬ……黒鍛様」

「さもあるうのう重蔵。上は老中、下は乞食
に至るまで、ここ数日間当たって見たが、わ
からぬわ」

無然とした表情である。

「老中直属の探索方、黒鍛左弁様じきじきの
お乗り出し、さぞかし大捕物で……」

「問うな。ただ、この文句を存じておるもの
が、どこかに居よう、それを探すが、重蔵
お前の役目。頼んだぞ」

無駄なことは一言も云わない。それが、黒
鍛組の規律であった。左弁は、お千賀に軽く
会釈すると、何事もなかったように出ていっ

た。

黒鉄左弁——いま、重蔵のいったように老中に直属する探索方であり、左弁はその頭。配下に、加太の鑄銭、石部の班田、名張の春宮などとよばれる伊賀者がいる。

「左弁様が動き出されたところをみるとお前さん、今度の捕物はなまやさしいことじゃあなさそうね。老中稲葉美濃様がうしろにひかえておられる……」

重蔵もまた、余計なことを云わぬ男であった。ひとり雨洩りのしみた天井を眺めて、
「女九双にしてすすり泣く……陰陽相なかばするところ……」

と口ずさんでいたが、

「お千賀、おめえ。ほんとうに知らないのかい」

「知るものですか……妾も始めてきくのよ……それにしても何でしょうね、このおまじないのような文句」

「お経じゃあなし、歌でもなし、唐詩とうしでもなけりゃあ……」

と、寝ながら顎をひねっていたが、ふと、
「なにか、秘伝じゃあないのかなあ。それ、それ、剣術とか槍とか……そんなものの秘伝の書にでもありそうじゃあないか。お千賀、

お前、もともと……」

何か言おうとするのを、

「いやですよ、お前さん。妾に昔のことを思い出させちゃあ……」

「そうだったな。よし、お千賀。俺あ、このさまだ。明日から頼むぜ、ひとつ！」

「おっと合点、こう見えてもお千賀姐さん。江戸随一の岡っ引き朱房の重蔵の女房。そのうち朱房のお千賀と名をあげて見せましようよ、お前さん」

笑うと、いよいよ仇っばい色気がにじみでる女であった。

△湯文字に迫る▽

妾女が、護国寺境内に現われたのは、何者ともわからぬ書状の主に指定された時刻であった。

江戸の町から北西に二里。

このあたりは、民家も少なく、檜や櫟の巨木がうつそうとして繁っている。

六つ半と云えば、春の日は、とつぷりと暮れていた。

「笹川妾女か！」

楼門を入り、本堂に近づいた途端、常夜燈

のかげから声がとぶ。

「いかにも！」

答えと同時に、七、八人の男たちが、ばらばらと現われると妾女をとりかこんだ。

「ひとりだろうな……」

頭目らしい男の声。こやつ、武士だな——

と直感的に察した妾女が、

「名を名のれい！」

「その必要はない。乗るのだ」

男のさし示す方角に一丁の駕籠があった。

口惜しいが乗る以外に方法はない、相手は三千代という人質をとっているのだ。

大人しく妾女の乗り込んだ駕籠の垂れたがおろされると、七人の男たちがその周りを囲み

とぶように西に向かった。

みないちように無言である。

と——

その一団のあとを、二町ばかり離れて、人影がひとつ。脂粉の香をほのかに、なまめいた春の夜気に漂わせながら走る、追う。懐からのぞく十手のさき……。お千賀である。二度三度、顔を合わせたことのある笹川妾女の仲間伊助から今夜のことを知らされたお千賀は、夫の重蔵には、ちょっと買物にでかける風をよそおって、駆けつけてきたのである。

「どこまで走るつもりかしら……もう半刻も走っているよ、この連中」

と、お千賀が思ったとき、前方に、夜の闇よりも黒い森が現われ、妥女をのせた駕籠がそのなかに吸い込まれた。

妥女が連れ込まれたのは、むかしは由緒ある大庄屋の屋敷か、大商人の別宅でもあったのだろう、豪壮な構えをとどめる廃屋のなかの六十畳は敷けよう広間であった。

その中央、板間に突ったままの妥女の前に現われたのは、いきな斜子るるこの童文の帯、つむぎ縞の羽織という、一見、大店の旦那風の男だった。

「笹川妥女さんだね」

と念を押したあと、うなづく妥女に、

「男女ありて、一、双より九、双に至る……この文句、知ってるね、お前さん。知らねえとは云わせねえよ」

言葉づかいはまるでやくざだ。が、妥女の驚いたのは、言葉づかいでなく、その文句であった。

（こやつなぜ八重垣流の秘伝くけつ口決を……）

「知ってるね」

「存じておる！」

「フッフッフ、じゃあちよっくら教えてもらおうか。そうすりゃあ、お前さんも、可愛いお前さんの女房も、すぐに無事でここから帰してあげようじゃねえか」

「八重垣流の秘伝を知って何とする」

「ハッハッハハ……そいつはお前さんに教えるわけには参りませんなあ。のう、ミズチヨボの狐六よ」

「ヘッヘッヘッ……」

妥女の背後を、さきほどの七人の男たちがかためている。

「妥女さんとやら、早く親分の仰言るとおりになさった方がよさそうですね。でないと……ヘッヘッヘッ……あんたの奥さんは肌とい、匂いといい極上の玉ですからねえ……もうこれ以上は待ちきれねえとさっきも話していた所ですぜ。あのおっぱい、いい、腰の周りといい、まったくこたえられねえ！」

「雑言！ おのれ、許さぬ！」

「おっとっと……刀の柄に手をおかけなすっても駄目でござんしょう。こちらにはそれ足田陰流免許皆伝赤鉄丹波さん」

狐六が指したのは、片眼の浪人、護国寺からここまで妥女を連れてきたあの武士であった。懐手で、ニタツと笑う。

「教えるのか教えてくれねえのか」
親分とよばれる男がいう。

「存じておらぬ！」

「何じゃと！ 今、存じておると……」

「たしかに文句は存じておる。が……その術を未だ教えてもらっておらぬ！」

「チエ！ まことか！」

「まことじゃ。八重垣流捕縄術を身につけるのはなまじっかのことではないわ。陰陽あり本早あり円菱あり、一文字十文字あり、これを習得した上で、一、双より九、双に至る。拙者まだ、円菱の段階よ」

「フッフッフ……やはり一筋縄ではいきそうもないわ！ 丹波さん。人質を見せてやっておくんない。そうすりゃあ、少しはこの旦那のお気持も変りなさるでしょうて」

「わかったよ。勝蔵親分」

丹波は、かたわらの毛むくじゃらの男、ナンスケの熊七と、ジンバイの寅松にめくばせしてでて行く。

「いいんですけえ、笹川の旦那。ここにいらっしやる黒駒の勝蔵親分、狙った獲物はとことん手離さねえ……ここへ、あんたの奥様がひきずり出されてくるんですぜ、しかも、ヘッヘッ……裸でね、はだか……」

妾女の顔は怒りと屈辱で真赤であった。

刀の柄をもつ手がぶるぶるとふるえる。無性に斬り捨ててやりたくなる。黒駒の勝蔵といえ、名うての博徒である。

(博徒の分際で武士の妻を！)

その時、

「いや、いや、いやです！」

必死で反抗する女の声がして、正面、左側の潜戸があくと、現われたのは赤鯉丹波、つづいて、丹波の持つ手燭に、玉のような肌をかがやかせながら小腰をかがめて入ってきたのは、まぎれもない三千代であった。

「ウッ……ヌ！」

走り寄る妾女——。瞬間、

「あっ！ あ、あなた！」

三千代の顔が、硬直した。

(夫、夫が、ああ、こんな、こんな場所に……こんな惨めな姿を……)

笹森稲荷参拝の帰途、数人の男に前後左右をアッという間にかこまれ、駕籠につめこまれてここに連れ込まれてから、どれほど救いの手を待ったか知れなかった。そして二日目に、こともあろうにやくざな男たちに着物を剥ぎとられてからというものは何度、舌を噛んで死のうと思ったことか——。が、その前

に、夫に一目逢いたい。なぜこのような目に

あうのかが知りたい——その一念で狐六や寅松たちの嘲りに耐えてきた三千代であった。

それが、こともあろうに、こんな姿で夫に逢おうとは——。

三千代の顔が、真紅に染まった。狂おしいばかりに、双眸が見開かれる。

「あ、あなた！ 妾、妾……」

涙が、あふれでる。

この三千代のふっくらとした両乳房の谷間に、寅松の脇差が突きつけられる。

「笹川さん。どうです……正直に返答しなさい……一、双より、九双に至るとは、いったいどういう意味なのです」

「答えないというのなら親分。どうです、ひと思いにその女の腰のあたりの邪魔な布つきれを取っちゃまって、スッパダカにむいっちゃあ……」

ナゲサイの馬吉とよばれる七尺近いノッポが、正面の丸柱に、縄尻をとめられて、必死で身悶えしている三千代の真紅の腰布の結び紐に手をかけたから、

「や、やめ！ やめて！ やめてくださいまし、妾……舌を噛みます！」

鋭い声があがった。

「どうする、笹川！」

勝蔵が、しびれをきらせたように叫んだ。

妾女の顔が、次第に蒼白になっていく。

「教えろ！ 妾女！」

丹波が吼えた。七人の男たちの目が、いっせいに妾女に注がれる。

妾女の乾ききった唇がわなわなと慄え、血走ったその目に、三千代の裸身が、羞恥にうちひしがれている裸身がうつる。

「よかろう……」

妾女ががっくりと肩をおとす。八重垣流の秘伝を教授するのが口惜しいのではない。武士たる身で、やくざ風情に脅迫されるのがいかに口惜しいのである。

が、事、ここに至っては、彼等のいいなりになる他はなかった。

しかし、事実、笹川妾女は、秘伝のなかばまでを修得しているに過ぎなかった。それを彼等が、どう受け取るか——、

「知る限りのことは教えよう。だから三千代の縄をとき、着物をきせい……」

「おことわりしますぜ、旦那。交換条件には応じるわけにはいかねえ……まず、教えることだね」

馬吉の手が、再び真紅の腰布に触れる。

「妥女が、怒鳴るように説明し始めた。」

「男女ありてとは……男には男に対する縄掛け、女には女用の縄掛けがあるということ。」

「一、双の双は、手首のこと、男一、双とは従って男を後手に縛り、胸に一筋、縄をとおすことよ」

「女一、双とは」

「丹波がきく。」

「男と同じ」

「男二、双とは」

「胸元に二筋」

「女二、双とは、乳房の上へ二筋か、下か」

「上下へ一筋ずつ」

「男三、双とは」

「胸元二筋に、首縄」

「女も同じか」

「いかにも」

「男四、双とは……」

「高手小手に、首縄、女も同じ」

「フーム。方丹流、竹内流に並ぶ天下の八重垣流、いかなる秘伝かと思っていたか、これではたいしたことないのう。して、男五、双は、高手小手縄の上に首縄か」

「妥女が、首をたてに振った。」

「男六、双とは！」

「焦立ったように丹波がどなった。」

「知らぬ！」

「知らぬと！ 先刻……」

「先刻、知らぬと申したはず」

「こやつ！」

「丹波よりも馬吉の手が早かった。三千代が悲鳴をあげるのと、真紅の布が、宙に舞うのが、同時であった。」

「それっ！」

「馬吉が腰からうすよごれた手拭いをひきぬくと三千代の口に押し込む。」

「ア、アウ……」

「（死、死ぬことも、できなくなる……）」

「三千代の裸身をかくすものは、もう何ひとつなかった。せめてものの女の本能であろう、腰をくねらせ、両膝を必死で合せて、いくらかでも、男たちの目に触れるのをさけようとする。」

「あう、あうっ……」

「馬吉、寅松、熊七たちが、三千代の白い裸身を、撫で廻し、舐めまわし始める。」

「妥女——」

「刀を抜くひまもなかった。三千代の腰布が宙に舞った瞬間、激しい一撃を後頭部にうけて、意識を失ってしまったのである。」

「無駄な骨折りでござったのう。親分」

「丹波が、あざやかな手並みで妥女を縛りあげる。」

「この赤鯨丹波、方丹流捕縄術の達人でもあった。ミズチヨボの狐六が、江戸城内で盗みぎきした稲葉美濃たちの謎の文句を、八重垣流の秘伝だと直感し、八重垣大学は筆頭与力これに手を出すよりも、手っとり早くその門人を狙えば、謎もとけようと妥女を選んだのであった。」

「まあいいさ。これで、あの百万両の謎が八重垣流と関係があることを、はっきりつかむことができたのだから……のう、親分」

「丹波が、片目を細めた。」

「そのとき、寅松たちに罵られる三千代をじっと眺めていた狐六が、」

「丹波さま、それ、あそこに」

「と、丹波にささやいた。」

「途端、丹波の小づか、が、広間の隅の格子窓の隙間にとぶ。」

「逃げる足音——」

「追え、逃がすな！」

「その言葉よりも素速く、馬吉がまっさきにかけて出していく。」

「フッフッ……どやつかは知らねえが、ここ」

を狙うとは、ふてえやつだよ」

子分たちを見送った勝蔵は、正面、しろい裸身を屈辱にふるわせている三千代のふくよかな顎に手をかけると、

「しばらく逗留して貰いますぜ、奥さん。丁度、女っ気なしでね、子分たちの血が頭にのぼって仕方がなかったんで……フッフッフ……たっぷり、可愛がらせて貰います」

黒駒の勝蔵の指が、乳房をもみほぐし、腹を滑り、豊かな尻を撫でる。

「いい魅してるじゃあねえか……」

なおも、必死で合せている双の太腿に手をすべり込ませようとした時、親分の気持も知らぬように子分たちが、一人の女を肩でかっいで帰ってきた。

「親分、女ですぜ、それも、滅茶、あだな年増女……」

両手を後手に縛られひきすえられたのは、お千賀であった。チラッと、懐からのぞく朱房の十手を目にとめた勝蔵は、

「岡っ引きか、こいつは面白えことになりそうだぜ。八重垣大学の方は明日にして、この小粋な姐さんをひと責め、責めあげてみなくちゃあなるめえな」

赤鯉丹波の片目が、ニタツと笑う。

「親分、ここじゃ興ざめだ。あっちの部屋で酒でものみながら、百万両の前祝いといきましようぜ」

ヨツカマリの辰五郎が、三千代の縄尻をとると丸柱からはずして、ひきたてる。辰五郎はその名のように、ヨツカマリ——つまり強姦の常習者であった。この一団のなかで、いちばんい、な、せ、な、まっとうな顔をしている若者が、無類の女好きでとおっていた。

お千賀を抱きおこした寅松たちは、これまでその細腰を蹴りあげるようにして、勝蔵を先頭に広間を出ていく。

齒を喰いしぼりながら、お千賀は、どんな目に合っても生きのびて、この一団の謎をといてやろうと覚悟を決めるのだった。

△お千賀責め▽

部屋中央の角柱にお千賀は縛りつけられていた。

二十畳は敷ける広さだが、畳は所々にあるにすぎない。その畳の上に、てんでに一升徳利をもって寅松たちが坐っている。格子戸がひとつ。壁には、突棒やさすまた、袖がらみなど捕もの道具が、各種各様の縄とともにな

らんでいる。

三千代は、天井からのびた滑車の一端に、両手首を頭上にたかだかと、まるで白い一本の棒のように吊られている。縄目ひとつない全裸の魅が、数本の百匁蠟燭に照り映えて、身をよじらせるたびに、辰五郎たちの欲情を刺戟する。

「姐御、名は何という」

先ず、たち上ったのは辰五郎であった。お千賀の、あごを左手でもちあげると、

「女岡っ引きらしいが、この隠れ家をどうして知った。おう、何とか言いなよ」

青梅縞伊勢崎銘仙の襟へと右手がかかり、するりと、胸もとにすべり込む。

毛虫の這いまわるというのは、こんなのをいうのであろう。お千賀の全身が鳥肌立つ。アラトリの牛造が、のっそりとちかよるとお千賀の銘仙の裾から手を入れ、ふくらはぎから、すねのあたりを撫で始める。

「この女を知ってるのかい。この笹川妾女とかいう同心の女房を」

お千賀は、答えない。

「八重垣流の八重垣大学の門弟だといふので、かっさらってきたが役に立たずじまいよ」

そのときお千賀の閉ざされた瞳が、チラッ

と開いた。黒鍬左弁が、女九双にして、すすり泣くと呟いたとき、顔をそむけて動揺をかくしたお千賀であったが、あの時には左弁ひとり、今、八人の男たちの視線から、心の動きをかくし終せることは不可能であった。

「知ってるぜ、この女」

丹波が、すつくとたち上った。

「おい、女、名を白状せい！ 八重垣流と何の関わりがある！ 申せ！ 吐かぬと」

といいながら丹波の手が、献上博多の帯にかかると、

「吐かぬと、女としてこれ以上は、ねえ恥ずかしい目に逢うことになるぜ」

お千賀の再び閉ざされた瞳は、何の反応もしめさなかった。

「くそっ！」

丹波の手が、いそがしく動き、お納戸色の帯が、とぐろを巻いて三千代の足もとにおちる。と、白足袋に目をつけた寅松と熊七が、片足ずつを持ちあげて、足袋をぬがせようとしたとき、

「ウ、ウーン。ち、畜生……」

のけぞったのは寅松であった。お千賀が、その脾腹を思いきって蹴りあげたのである。

「ワアッ！」

という嘲笑があがった。

「ジンバイの寅松さん。ジンバイ（真面目な露天商の隠語）じゃあ女を裸にするこたあちと無理なようで……」

狐六の嘲けりに怒った寅松は、

「この阿魔！ やりやがったな！」

とお千賀にむしゃぶりつくと、襟元をぐいっとはだけさせ、ペリペリッと両袖の縫目をひきちぎる。支えるもののない伊勢崎銘仙が大きな花びらのように、お千賀の軀をずりおちて、帯の上に重なる。

「どうでえ。もう一枚ひんむいてやろうか、そのは、でな長襦袢をよう」

と、淡牡丹色の長襦袢の田之助襟に手をかける。

「いいぞ！ 寅松！ 剥いじゃえ！」

最初、かびくさかったこの部屋が、いつのまにか、酒くさくなっていた。勝蔵は、ふだん手足となって働いてくれる子分たち、今夜くらいは何でも好きなおりにやらしてやろうと思っっているのであらう、悠々として盃をあげている。

仲間の言葉に気をよくした寅松は、

「ほ、えづ、かかせてやるからな！」

と、長襦袢の両袖を、せわしげに匕首で切

り裂いていき、一方、辰五郎が、その細紐をぬきとったものだから、ふわりっと、音もなく淡牡丹色の綸子の布が、足もとにおちる。

「まだ着込んでやがるぜ、この女」

お千賀の身をかくすものは、純白の肌襦袢と湯文字だけとなった。

「まだ吐かないか、女」

丹波が、盃を口にしながら訊ねた。

お千賀は、うっすらと瞳を開いて、丹波を見た。その瞳は怒りに燃えていたが、屈服の気合はどこにもなかった。

「しぶとい女よのう。寅松、素っ裸にしちまいな。久しぶりに、この女を相手に方丹流の縄捌きを試してみとうなったわ」

寅松が肌襦袢の紐をひきちぎった。辰五郎と馬吉が、左右に前身ごろを押し開く。

ぶりーんと現われた両乳房は、八人の男たちが固唾をのむほど、美しく豊かであった。

乳色の丘、二十才前の処女にはない成熟しきった、針でちよっとつつけば、甘く白い液体がいまにもほとばしりてそうな、はずむような乳房である。

思わず、辰五郎が右の乳房を、がっしりとつかむと、馬吉も負けじと左方の乳房を驚づかみにして揉みあげる。二人に先をこされた

寅松、くそっ！ という表情で、肌襦袢をむしりとると、ぼろ布のように投げすて、中腰になって撫で、さすり、吸っていく。

お千賀の朱い唇が、始めて開いた。

「アッ！ アッ……や、や……」

お千賀は、やめて！ と叫びたかった。しかし、叫んでも訴えても止めてくれる相手ではない。叫べば叫ぶほど、男たちを喜ばせることになる。齒を喰いしばってお千賀は耐える。いまさら、夫の重蔵にも知らさず笹川妥女のあとをつけたことを後悔しても始まらない。この屈辱にどうにかして耐えて、あの秘密の文句をときあかそう。この一団の追う謎、百万両の前祝いとか云っていた謎をいってやるのだといきかせながら、全身を硬直させ、抵抗しつづけるのであった。

そのお千賀が、どうにもならない悲鳴をあげた。寅松のかたわらに坐り込んだ狐六が、湯文字をかきわけ始めたのである。

弓のように全身を反らせて、

「や、やめて！ やめておくれよう！」

額から二、三滴、玉のような汗がながれる。狐六は、やめようとしな。牛造と熊七が、お千賀の両足首をがっしりと捕えて左右に開く。狐六はニタツと笑う。

勝蔵と赤鯉丹波をのぞく六人のや、く、ざ、たち
に思う存分、颯られ、蹴弄されているうちに
お千賀の錯乱が、意志とは反対し、かすかな
反応を示し始める。

朱い唇から熱い息が洩れ、激しく身悶えて
いた躰が、くねくねとやるせないしぐさとな
り、牛造と熊七が両足首をはなしても、もう
それを合わせることも忘れたようである。

「おい、姐さん。お前さんもまんざらじゃね
えらしいな」

狐六のつきだした顎を、チラッと眺めたお
千賀は、思わず瞳を悲し気に伏せると、

「人非人……ひとでなし……ち、畜生」

と、声ふるわせて言い、がっくりと首うな
だれてしまった。

「いよいよ、拙者の出番だな」

赤鯉丹波、酒くさい息を吐きながらお千賀
にちかよると、

「岡っ引きなら、方丹流くらい知ってるだろ
う。いつも他人様を縛ってる女岡っ引きが今
夜は、その他人様に、はだかで存分にふん縛
られる……フッフッフ……いい絵になな
ぜ、こいつは」

丹波のとり出したのは赤白まだらの八つ打
ち縄であった。四つ打ち縄よりも強く、しる

やかで、はりがある。しかも、どうやらこの
縄は、絹糸でできているらしく、つやつやと
ひかっていた。

「まずは、割菱十文字縄から」

柱からおろされ、自分の着物の上に蹲まっ
てしまったお千賀の縄を、六人がかりで解い
ていく。やっと自由になったのも束の間、丹
波の掌が、お千賀の右手首をがっしりと捕え
背後に回し、両手首を重ねて、ひっくりくると
二筋の縄が、首に廻る。乳房の谷をとおって
一挙に流し、腰をうきあがらせておいて、手
首にもどり、二つに別れて、左右の脇腹をと
おって乳房の下と、へその下のたて縄に絡ま
り、再び背後に――。

「いつ見てもあざやかなものだなあ」

勝蔵が、ほめる。

「前から見ると大きな菱形が、二つに割れて
おり、背後からみると十文字……これぞ割菱
十文字……」

丹波が、片目で笑う。辰五郎と狐六は、そ
の縄目にそって、指を這わせていく。

「この女、よい躰をしておる。肥えてもおら
ず痩せてもおらず、程よいくらいに、縄をう
けとめる。……この肌からみると二十三、四
才か」

「二十三、四ですって……ほんとには二十七才なの……」

お千賀はふと考えたあとで、どうして女はこう年令のことをいつも考えるのだろうと思ひ、ふと、我に返ってハツとなる。こんなことでは……あの笹川妥女という武士、それに……と、お千賀は、やっと、三千代のことを考える余裕をもった。

三千代は、そのままであった。素裸のまま一本の棒のようにされ、猿ぐつわをかまされ眸をとじ、死んだように、ぐったりとしている。勝蔵が、お千賀の視線にさそわれるように三千代をみ上げる。

「フッフッフ……じゃあ、お前たち、この女で楽しみな。俺は、こちらの武士の妻とやらを抱かせてもらうぜ」

子分たちのうらやましそうな顔のなかで勝蔵は、自分で、三千代を抱きおろすと、縄尻をとって部屋をでて行こうとしたが、

「一刻待ちな。一刻もすりゃあ、この女をお前たちがたらい廻しにするがいい。ハッハッハハハ……」

見送った子分たちが、いっせいに、お千賀に、にじり寄る。

「お前の方が、あの三千代よりずうっといい

女とくらあな」

「そうともよう、このおっぱいのほりきりよををみなってことよ」

三千代を親分に先取りされたやせ我慢のせいでだけではなかった。二十二才の三千代にはない、ふるいつきたいほどの色っぽさが千賀の全身から発散していた。

「もう、こんなもの邪魔だぜ」

辰五郎が、縄目にまつわりついているお千賀の湯文字を、ぬきとった。

「アッ！ いたいじゃあないの！」

どこをはさまれたのかお千賀が悲鳴をあげたが、それは、男たちにとって艶めいたもの以外の何ものでもなかった。

お千賀の女っぽい匂いが、むんむんと部屋中にたちこめて、男たちは、鼻をびくびくさせながら、順番を決めていく。

△千春の乳房▽

「何と申す！ まことか！」

江戸南町奉行根岸肥前守は、筆頭与力八重垣大学の言葉に驚きの表情を見せた。

「遺憾千万なこと……なんとも申し訳なく存じまする」

「フーム」

根岸の驚きも当然であった。同心の一人笹川妥女が行方不明になったのが一昨日のことなのに、昨日はまた、八重垣大学の妻と娘が日本橋は越後屋に、娘の花嫁衣裳の品定めといったきり帰ってこないというのである。

「かかる書状が、今朝、投げ文^{なぐみ}されておりました」

大学が懐からとり出したのは、笹川妥女がうけとったのと同じ筆跡であった。が、それを知ろう筈のない根岸と大学は、

妻女と娘千春殿、当方において預かりおり候。御希望ならばお返し申すべく明四月十六日五つ半、おしのびにて護持院境内までおいでなさるべく。万一、町奉行配下のもども動きだし候えば、人質の二人のお生命、保障いたし難く候。

という文面を、呆然と見つめる他はなかった。大学の妻、節と娘千春の二人が、彼等の手にあることは、いっしょに投げ込まれていたべ、つこうの櫛と、花かんざしで疑う余地はなかった。

「お奉行殿。捕手のものどもを用意したいと存じまするが……」

「しかし、大学。さすれば、妻女と娘御の生

命が」

「止むを得ませぬ。かかる所業は南町奉行所への挑戦、ひいては公儀への反逆。近来、江戸市中をあらし廻る不逞浪人どもの仕業と思われまするゆえ、この際、一網打尽に」

「娘御と妻女の生命を賭けられてか」

「將軍家の御威信には代えられませぬ」

しばらく瞑目していた根岸は、

「やってくれるか、大学。頼むぞ。ただしくれぐれも、二人の生命に別条ないように」

深くうなずいた大学は、与力・同心を集めるために席をたった。

心のなかには、怒りにのたうっているのだろう、両眼が血走り、こぶしが、ぶるぶるとふるえている。

護持院は、護国寺と目と鼻のさきにある。

指定された五つ半にさきだつこと一刻、あちらこちらの雑木林のなかに五十人の捕手を忍ばせて、大学は相手の現われるのを待った。

が——、四つになっても四つ半になっても相手は姿を見せなかった。

九つをすぎ、夜っぴいて待った甲斐もなかった。失望しながら家に帰った大学は、そこに、節と千春の帯や腰紐が投げこまれている

のをみて激怒した。

約束を破ったな、大学。もう一度、機会をあたえてやる。今夜、九つ、芝は功運寺に来たるべし。若し違約すれば、汝の妻は、三段斬りの刑に処し、娘の千春は一糸まとわぬ素裸にした上、非人乞食の群れに投げ込むであろう。

大学の心は決まった。筆頭与力の面目にかけて独力でこの不逞の徒を捕えてやろう。万一に備えて大学は、その旨を書状にしたためると机上におき、根岸肥前守様と表書きをした。九つと云えば深夜である。大学は強いて自分をおちつけると、横になった。芝・功運寺と云えば護持院とは全く別の方角である。

相手は、はたして何ものなのか……妻や娘は無事なのかどうか……。ふと、大学は、娘の婿になるはずの望月秀之進のことを思いうかべる、そして、小者の権三をよぶと秀之進に至急、来宅するように命じた。

秀之進を、連れていこう。なにかと役立ってくれるに違いない……大学は、やっと、仮眠をとることができた。

予想をはるかに上廻る敵であった。

功運寺境内——。

ばらばらと現われたのは、やくざ、浪人、

商人風と、とりどりの服装をした二十人近い男たち。しかも短銃が三丁。有無を云わさず二人をとりかこみ、駕籠にのせ、左右の見えぬように駕籠脇をかこんで走り出す。

おろされた途端、目かくしをされ、長い廊下を歩いて、階段を上ったり下ったりして、つれ込まれたのは、和蘭渡りの調度にかこまれた豪華な部屋であった。

待つ間もなく六、七人の男を従えてでてきたのは、黒駒の勝蔵であった。

「筆頭与力の旦那よ。お前さんが奇妙なことをしやがるから、あの隠れ家がとうとう駄目になってしまったじゃあねえか」

武士を武士と思わぬ言葉づかいである。

「そのお礼に、これから訊ねることに答えてもらうぜ。八重垣流秘伝に、男六双にして起つ、女九双にしてすすり泣くとあるんだが、そのところが知りてえ。最初に云っとくがこちとらあ急いでるんだ。てっとり早く答えねえと女房と娘の躰に取り返しのかねえ傷がつくぜ」

大学は平静をよそおって言った。

「お前は誰だ、名を名乗れ」

「名のるほどの男じゃあねえ。が、かくすこ

ともあるめえ。教えてやんな」

と、そばで短銃を持っていた熊七にいう。

「この親分は、黒駒の勝蔵親分よ。よく拝んで覚えておくこつたな」

「黒駒！ あの長州藩と結托している！」

「結托ってほどじゃあねえが、ま、関東から信濃・東海道へかけてのやくざものをたばねて御一新に協力してゐるってわけよ」

「おのれ！」

幕府の与力の前で、のうのうと御一新という言葉を口に出す、許しておけぬ男である。

「おっと、待ちねえ。この短銃は、えげれすわたりの逸品、刀よりもはるかに早えぜ」

「教えるのか、教えねえのか」

今度はナンスケの熊七が叫ぶ。

「こ、ことわる！」

大学が刀の柄に手をかけた。

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

「そうかい、そうかい。じゃあ仕方がねえ。……これをよく御覧になることですね」

勝蔵が、部屋の小窓を開くと大学を招く。

ギヤマンの窓にちかよって中を一目見た大学は、思わず、息をのんだ。

あり得べからざるものをみたのである。

瞬間、七人の男たちが、二人に襲いかかると、あらかじめ用意されていたのであろう、何かをしみこませた布きれを二人の鼻と口にあてがった。いくら武士といっても南蛮渡りの麻酔薬の力にはかなわなかった。両刀を奪いとられ、麻縄で縛りあげられ、かつぎあげられると、隣の部屋にはこびこまれる。

隣の部屋——。

一目見て大学が固唾をのむのも当然であった。そこには、大学の妻、節と、秀之進の許婚である千春が、肌褌袴と湯文字いちまいでさらされていたのである。

しかもその緊縛された姿が無残であった。

お節は、両手を背後で縛られ、腰をおとし両膝を開いて六尺棒で固定されるという、丁度女が、小用をたすときの姿態そのままの姿で天井からおりた鎖につながれていた。

千春はと見れば——、

両手両足を部屋の四隅から伸びた縄に、が

っしりと縛られ、もうこれ以上、開ききることのできないほど「大」の字にひらかれきって、嗚咽している。

「ほらさ、旦那さまの御入来だ。そのうちお目ざめになるからな。そうしたら、いよいよお前さん方に、素っ裸になって貰いましょうぜ。あと一刻か、一刻半……」

全く思いがけぬ、夫や、恋人の姿に、お節と千春が、狂ったように身悶え、声にならない叫びを、猿ぐつわの下であげつづける。

「フッフッフ……百万両よりも、こっちの方が、欲しいくらいのものよ」

丹波の片目が、いまにも肌褌袴のえりもとからこぼれおちそうな乳房を眺めて、淫らに笑う。

「まっこと！ あと一刻も待ちきれねえや、親分。ちよっくら失礼」

と辰五郎、千春のえりもとを大きくひろげる。

「ム……ムッ……ムムウ……」

千春の羞恥をよそに、初々しい、もぎたての水蜜桃のような乳房が、ぽっくりと、とび出す。

——（つづく）——



|| S M カメラ・ハント ||

|| 渡部好美の巻 ||

悦虐の甘き戯れ

辻村

隆

連日鬱陶しい梅雨に降りこめられていた六月下旬、編集部より転送の一通の手紙を受取った。裏を返すと渡部好美と記されてある。

花模様の便箋に、かなりの達筆で書かれた内容は、以下原文のままである。

『辻村隆様——突然、見も知らぬ女より親しくお呼掛けするはしたなさをお許し下さい。数年来、貴男様の隠れたファンの一人として秘かにお慕い申し上げておりましたこの私でございます。実はこうして、いきなりお便り

差上げましたのも、主人の意向でございまして、本来なれば、主人自身が書くべきですがせがまれるままに思いきつて、ペンをとった次第でございます。

半ば主人の強要で書かされました、羞かしい私の拙ない体験の手記が、今年の四月号の奇ク誌上に掲載されましたのでございます。

題名もない告白を、編集部の方が『私はどうして、こんな女に?』というタイトルをつけられ、主人の写しましたおシバリの写真も

一緒に発表されておりましたのを、貴男様は御記憶なさっておられますでしょうか。

或いはお目を通されたかと存じますが、あの被虐の夫婦プレイの体験を発表いたしました渡部好美という、二児の母でございます。

いろいろと誌上でお呼掛け下さった方々もあり、主人も思いきって書いてよかったと申しております。私達夫婦のあの様な行為は、文中にもあります如く、既に何年か前から行なわれてきました。しかし、手記を書く気に

なりましたのは、貴男様を意識するようになったのが、その原因でございます。あの手記の最後に書いてある処の、理解ある方と申しますのは外ならぬ貴男様なのでございます。私は締めくくりを次の様に書きました。

『近ごろ主人は時々、「お前のこんな姿を、ぼく以外の人の手によって、ぼくの見ている前でされてはどうか」といいます。私もいやではないのですが、私はもう三十四才のオバーチャンですし、肉体的魅力ありません。まだ子供が小さいので、主人と二人きりで出て行くことも出来ません。もしそんなプレイが出来るとしても、主人の目前で、縛られ、責められ、抱かれなくては、その意味がありません。ですから、理解のある方が居られましたら、親しくお付合し、理解し合いたいとは思いますが、現在そんな方が居られないからこそ、思うことかも知れません。でもやはり魅力のある「夢」として、捨てきれない気持ちになることがあるのです』

何度も何度も書き直しながら、理解ある方のイメージが貴男様に固定し、それがいつかはきつと実現の出来る「夢」に違いないという確信すら、持つようになったのでございます。あの告白が活字になってからというもの

主人はまるで堰をきったかのように、プレイは激しくエスカレートするばかりでございました。今迄は一週間か十日に一度ぐらいのそのした夜が、今では三日に一度はおろか、時によっては、連日連夜続くような時もございます。私を縛るにしましても、次々と手を変え品を変え、縄目はきつくなり、苦しい時間は長くなって行く許りでございます。

特に著しいのはローソク責めで、いざという時は、辛抱出来るようになど申して、架空の第三者を想像しては、私の全身をくまなくローソクの熱いしずくでかためてゆくのでございます。そうした激しいプレイのあとに訪れる欲びの大きさに、いつしか無意識のうちに、主人の激しいプレイを待ち望み、主人がエスカレートすればする程、私の体に、熱い燃えるような欲びが充満するのです。

憑かれているのは、主人より、むしろこの私の方ではなからうかと、フトそんなことを考えてみたりするのでございます。たまに主人が、お仕事で疲れて、そのまま寝てしまう夜など、私の体は何かを求めてほてり、あらぬ想像が、次から次へと湧き上って、独り身悶えるのでした。

シトシト降る雨の夜、ビニール袋にぎっし

りと縛られて押しこめられ、小さい空気孔をあけて、庭先に放り出されるのです。一時間も二時間も――。苦しさで心細さで、猿轡の奥で、もうカンニンしてと叫んでも、主人は許してくれず、汗にまみれ、果てはお洩らしして、グショグショになり、泣きべそを掻いた私を、力強く抱擁して愛してくれるときなど、本当に魂を天外に飛ばして、私の体は陶醉と歓喜の極みに燃えに燃えておりました。辻村様、御免なさい――何だか、おのろけみたいになってしまいました。

プレイが激しくエスカレートしてくると、主人は思いもつかないようなことを口走り、私に復誦させるのでございました。夢中になつておりますと、私も又、主人のその突飛な考えが、まるで愉しい約束かのような錯覚にとらわれて、おうむ返しに返事をするのでございます。

――お前の、こんな浅ましい姿を、ぼく以外の人間にも見せてやりたいが、いいだろう――（ええ、いいですわ）

――気の合った夫婦と一緒に責め合って、お互いの羞恥を残るくまなく曝し合うんだ、いいな。一緒にプレイしたいといえ――（ハイ、一緒にプレイしたいです）

——こんな、素ッ裸のむき出しに縛られた姿を、ぼく以外の人間に撮られたいといえ——

(ハイ、貴方以外の人に撮られたいです)

——逆さ吊りして、浣腸してもらいたいっていえ——

(ハイ、してもらいたいです)

——何をしてもらいたいんだ、判っきりいうのだ——

(逆さに吊って、浣腸してもらいたいです)

——お前のすべてをカメラ・ハントに書いて貰えたら嬉しいだろう。嬉しいか——

(ええ、嬉しい)

——じゃあ、ハントの辻村隆に、思いきり、縛られて、虐めてもらいたいのか——

(ハイ、思いきり虐められたいわ)

およそ、こんな言葉の遊戯がプレイの合間につづき、歓びに酔い痴れる私の体が、主人のそうした言葉の一つ一つに、大きくうなずいて、うわ言のように反応しているのをごぞいました。主人のそうした言葉の刺激が、私をひとしお燃え立たせ、燃える私に主人は主人で、悦虐の境地に溺れてゆくようでした。

こうした仮題の設定が、私達のプレイをどれほど愉しくしたことでしょうか。しかも、

その主人の激情のまにまに口走る言葉によって、私の夢も又、際限もなく拡がって行くのでございます。

このお便りを書く数日前の、夜のことでした。

エスカレートしたプレイの果てに主人は、

——どうだ、辻村隆と、

温泉旅行でもして、一晚

中、くたくたになるまで、虐めてもらいたいだろう。寛大な亭主が許してやる。行きたいか——

事の重大さに、流石に夢うつつの歓びの合間にも返事を洩っておりますと、たたみかけるように

——行きたいといえ——

と、パシリと頬をぶったのです。思わず、

(ハイ、行きたいです。辻村さんと二人きりで泊って、一晚中虐められてみたいですわ)

と口走る私に、してやったりと主人は、

——よし行かせてやる。その代り、ぼくのどんな無理な要求でも、どんな強烈なプレイでも飲んで受けるのだ、いいか——



(ハイ、喜んでお受けします)

夢中で応えますと、主人は眼鏡をずり下げたまま、雁字がらめに縛られた私の体を、息もとまるほど、強く抱きしめるのでございました。

辻村様—— 本当に御免下さい。私達夫婦

は、夜毎のプレイの合間合間に、貴男様の露知らぬことを、二人で勝手にきめてしまっは、それがまるで既定の事実のように思い込んでしまっ、明日にでも、すぐさま実現出来るかのような錯覚にとらわれて、言葉のプレイの中で溺れ、独り指折り数えては、その日を待ち望んでいるのでございました。

今では、貴男様は、私達夫婦のプレイに、

なくてはならぬ存在にすらなっているのでございます。さぞかしお驚きと共に、お怒りのことでございます。

でも、私の心の中には、未だ見ぬ貴男様が大きなウェイトを占めるようになり、主人のその時、その時の言葉が、今では単なる妄想ではなく、憧憬と慕情をともなって、いつしか一つのはっきりした形態をととのえているのでございます。私の「夢」の願望が、いつ



かは実現し、本当に貴男様に虐められて、カメラハントされ、いつかは一泊旅行出来るに違いないという信念が、かたちづくられてきたのです。

主人は辻村様を自分風にさまざまに料理します。その押しつけのプレイの言葉の中から私は確固たる実現を希む様になったのです。——どうだ、辻村のダンナと早く旅行したいだろう——という主人に、その夜は、

(ええ、判っきり仰有って。いつなの?)

というと、主人はフト真顔になつて、

——思い切ってお前から手紙を出してみろ——というのです。

(でも分からないわ、なんにも……)

辻村様に、じかにお手紙差上げるなんて、およそ雲を掴むようなことですよ。

——編集部気付で廻してもらえよ——(そんなこととして下さるかしら……)

——やってみてダメなら、もともとじゃないか。お前の手記ものったことだし、きつとそれぐらいの労はとってくれるよ——

という主人の言葉に、私も一縷の望みを得て、こうして在りの俤に書いてみた次第でございます。

私の夢や空想に、現実を求めて、こうしてはしたなくも書きましたものの、果たして辻村様が御覧になってどう思われるか、それが私の唯一の心掛かりでございます。

因みに私は三十四才、二児の母。主人は三十七才で、京都西陣の或る織物会社のデザイナー、柄模様などをいたしております。

実現の暁には、或いは主人の態度がどの様に変化するか、それは分かりません。しかし唯今の処、主人は辻村様と私とを結びつけたがっている様でございます。私も以前から、ひそかに一度お会いしたい方と憧れておりました。何卒、私に失望を与えないで下さいませ。それとも、もう余り若くない、しかも二児をかかえた人妻などに、辻村様は興味をお持ちじゃございませんでしょうか。独りよがりの乱れた拙ない便り、お笑い下さいませ。

好美

渡部夫人の、この赤裸々な便りをよむうち私の心は次第に激しく浪うち始める。何という大胆、率直な告白文であらうか。つき上げる衝動と共に、書架に走り、慌しく四月号を

開いて、改めて、じっくりと『私はどうしてこんな女に?』を、よみ始めた。

四葉の強烈な緊縛フォトからは、夫人の容貌は判っきりと窺えなかったものの、稍々細身の、如何にも被虐タイプの肉体を想像して私の胸は熱く疼く。

しとしと降り続く梅雨の鬱陶しさも、しばし忘れて私は直ちにペンを執った。

果報は寝て待て——。そんな言葉がフト泛かぶ嬉しさであった。

京の桂の一隅で、ひっそりと暮している渡部夫妻に思いをはせて、例になくその夜は寝

苦しかった。

主人によって、すっかり飼育され、被虐の欲びを覚えて、ひたむきに私を求めている好美夫人の、未だ見ぬ端麗な顔、白い柔肌が、チラチラと私の網膜を横切り、妖しい夢魔に襲われて、軋々反側する私——。

或いは同時刻、私の便りを待ち兼ねて、又しても私を狙上にのせて、それによって燃えているかも知れぬ二人。想像は幻想を産んで私の心は、ひたすらに渡部夫人へと傾斜していったのである。

×

×

×

主人の渡部光雄氏から電話のあったのは、返事を出した翌々日の夕暮れであった。

おとなしい口振りの柔らかい声が響く。

「家内が我僣勝手な願いをいたしました、御迷惑じやなかったでしょうか」

「とんでもない。思い掛けぬ果報に弾んでいるんですよ」

「一応どんなことでも辛抱

しますが、鞭打ちだけは喜ばないようです。針責め、ローソク責めなども大丈夫です。ひとつ欲ばせてやって下さい」

「いいんですか——」

「正直いって少し心掛かりです。何しろこんなことは始めてですので……家内は私と一緒にいきたいと申すのですが、私が同行すれば辻村さんも御自由に振舞えぬでしょうし、家内も私の手前、何かと窮屈がると思いまして遠慮したのです。でも本心は、辻村さんが家内をさまざまに緊縛なさるのを、この眼でじっくりと拝見したかったのですがねえ」

「私なら構いませんよ、御遠慮なく御一緒にどうぞ」

「そうしたいのは山々ですが、家内の留守中子供の面倒もみてやらねばなりませんし、やはり今回は遠慮します」

「そうですか、残念ですね」

「私は家内を信じております。信じないととてもやらせられませんし、お互いに理解しているつもりなんです」

夫の渡部光雄氏は、優しい心づかいと、並々ならぬ妻への信頼感を披歴して、その言葉の端々には、プレイの夫婦の確信が脈打っているようであった。



彼の職業は比較的時間が自由らしく、融通がきくようで、私の都合のいい日に、日程を合わせるという協力振りである。

仕事の予定表を開き、一日を選ぶと、

「ああ、その日なら恰度いい具合に、家内も生理の支障がなくて結構です。まあ、せいぜいよろしく願います。一度私もお目にかかり、色々とお話を伺いたいんですが」

「よかったら、いつでもお越し下さい。私もお目にかかり度い気持です」

万事はトントン拍子にコトが運んでゆく。

会合の場所、好美夫人の特徴、服装などをきいて電話をきる。ここに又、新しい人妻のハントの糸口が開かれたのである。

川路叢子、谷山久美子について、この処、人妻がつづく。現代の夫婦間の、開放的なモラルに、複雑な気持にとらわれ乍らも、胸躍らせて、渡部好美とのその日を待ち兼ねるのであった。

七月十四日は、珍しく朝からカラリと晴れて、忽ちに暑い夏の陽のきざしである。

そろそろ出掛ける準備をしていたら、長女が先日、産まれた赤ん坊を抱いて、ひょっこり戻ってくる。私にとっては初孫——しかしおじいちゃんと呼ばれたくない気の若さで、

長女もそれを悟ってか今の処、いわない。

約束の時間が迫ってくるし、そわそわし乍ら、やっと抜けるようにして家を脱出。そつと車のトランクにプレイ道具やカメラをつみ込む私にチラリと長女は眼をやり、家内と顔を見合わせて複雑に笑った。それは私の性向を知っている笑いであつた。私の出演していたイレブンPMの番組を、婿と二人でみたといっていたから、或る程度は気付いているに違ひなかつた。それもよからう、もう驚く年頃でもあるまいと、腹を据えて出発する。私にとっては、久し振りに訪れた長女と初孫よりも、心は渡部夫人の方に既に走っていたのである。

会合場所は京都の苔寺門前ぎわの私設駐車場の約束である。みやげもの屋と食堂をかねた家が駐車場もやっているらしい。渡部夫妻の住居は、苔寺に歩いて十分たらずの処にあった。

数度訪れたことがあるので、苔寺周辺の地

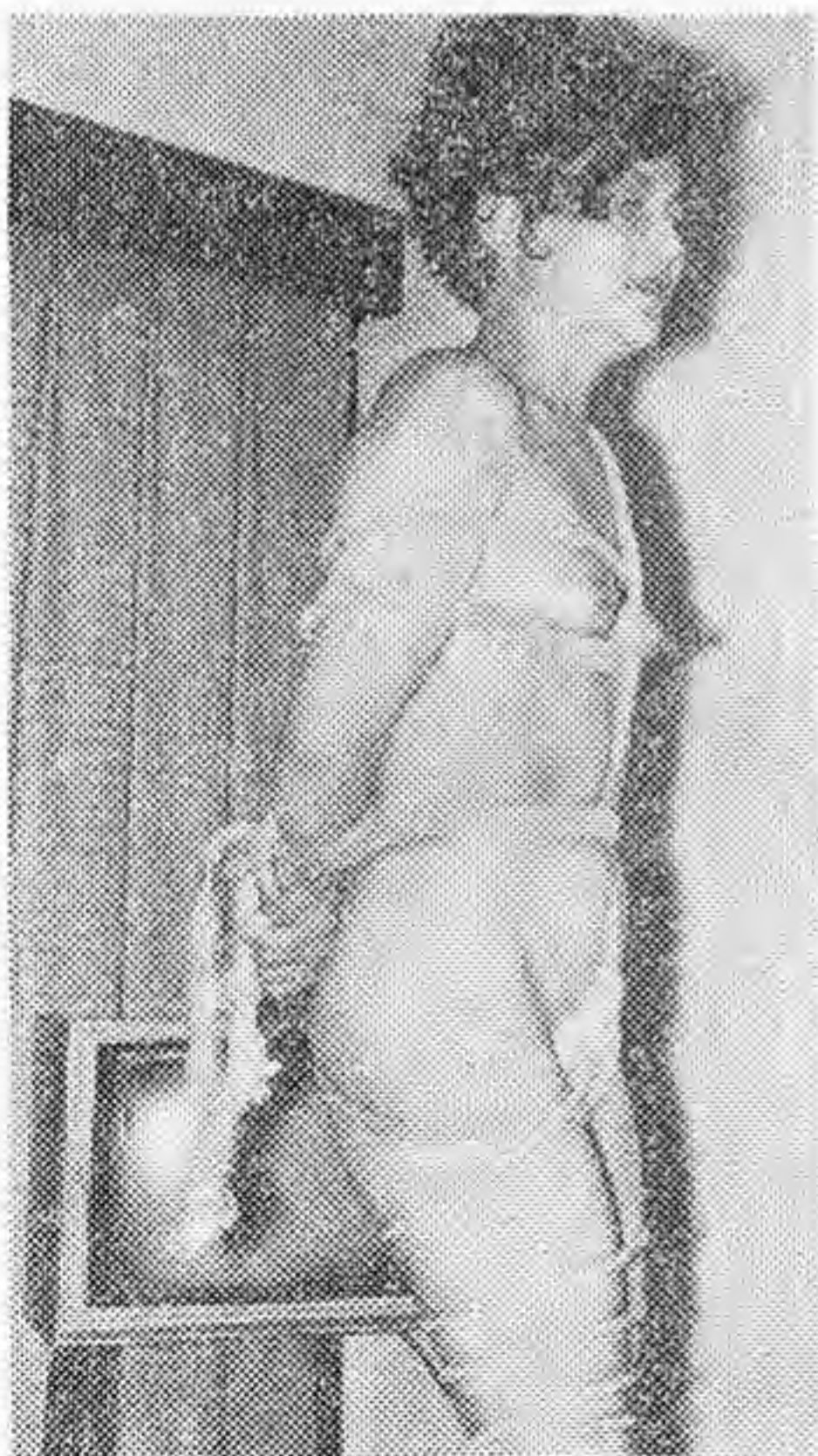
理は心得ているので迷うこともない。

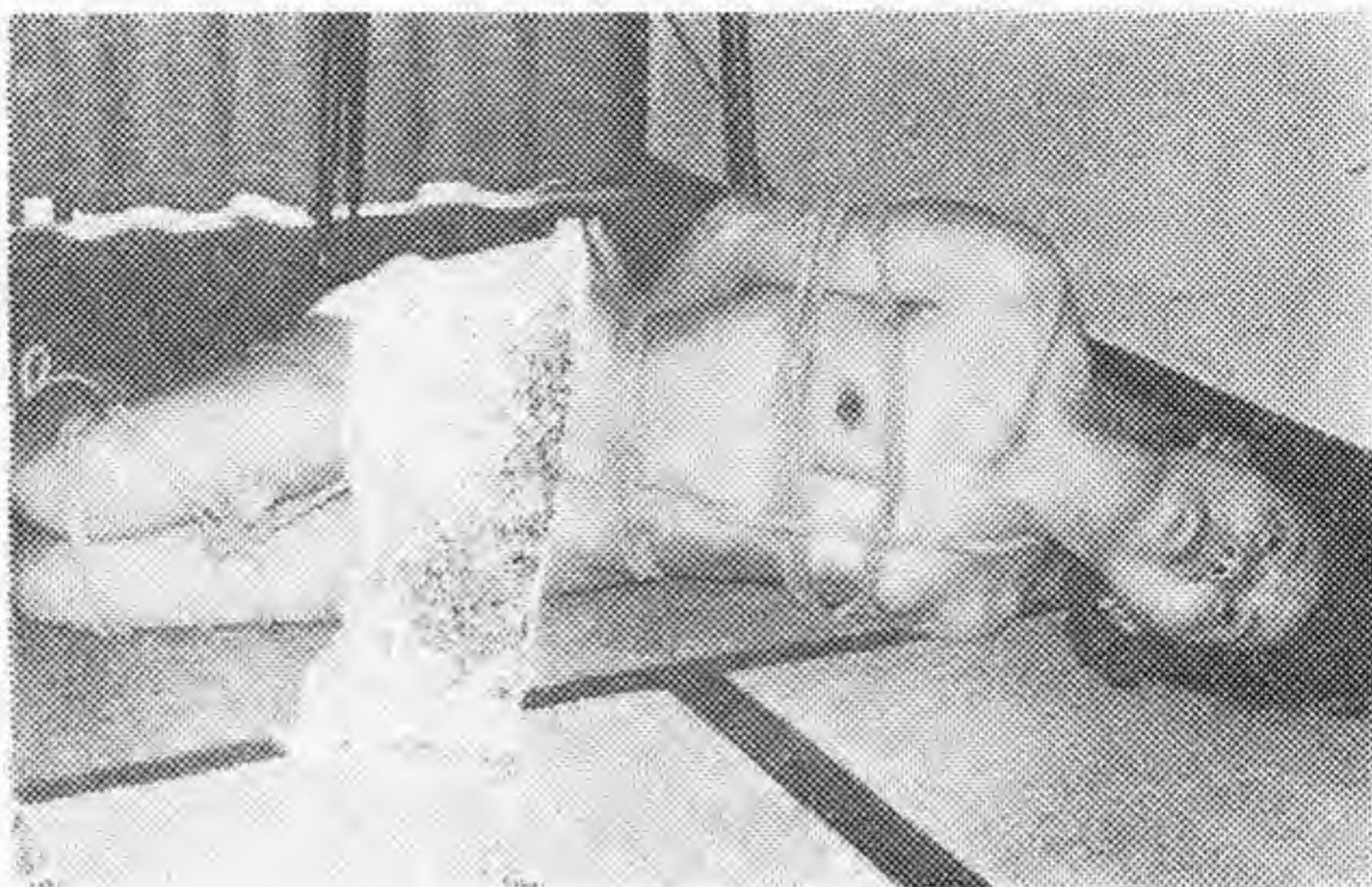
午後一時前、苔寺に到着した頃には、青空をみせて晴れ上っていた朝なのに、又してもどんよりと曇り始めて、暑さのみ、むしむしと激しかった。

露天駐車して車を降りると、木蔭にたたずんでいた女人が急ぎ足に近づいてくる。直感で渡部夫人と知って私は待ち受ける。果せるかな女人は私の眼前に立止まると軽く会釈した。プリント模様のミニのワンピースに、この暑さの中で長袖にしてあるのは、縄痕を考慮に入れての才覚に違ひなかつた。

「渡部さんですね？」

彼女は軽い羞恥を泛かべて、淑やかにうな





ずく。無言の俛、私を仰ぎみる瞳が、妖しい光芒を放っている。

到着してすぐさま出発しても、規定の駐車料を払わねばならず、のども渴いているので傍らの売店に入って、グレープファンタで、のどをうるおす。食事をしようとも思ったが

如何にも不味そうなので、河岸をかえてゆっくりと食事することにした。

「苔寺を御存知でしょうか？」

美しい透き通った声であった。

「ええ、二、三度来ましたが……」

「およろしかったら、御一緒させていただきませんか？ 私って、近くに移り住んで参りまして、もう一年以上になりますのに、未だ拝見したことがありませんのよ」

「そう、それじゃ見学しましょう。いい思い出になるでしょう」

ほんの数分前、始めて会った許りの、この小柄で貞淑な夫人に、私は一目で激しい心の傾斜を覚えて、苔むした庭園を、そぞろ散策する欲びに、返事は思わず上ずっていた。

プレイに逸り立つ動の心に、苔寺のただずまいは静のゆとりを与えてくれた。

空はすっかり曇り果て、今にも一雨きそうな気配に変わりつつあった。見学する好事家も少なく、木立で薄暗い小道を、私に数歩おくれる夫人と二人歩んでゆく。並ぼうとして立ち止まると夫人も立ち止まった。私達の間には、未だ会話らしい会話は何も交されていなかった。

カタン、カタンと、正確に一定の刻をおい

て、かけいの水が竹筒に注ぎ込んで落下し、乾いた音が静寂を破って辺りに響く。

暑い夏ゆえ、ミニのワンピースを着ているが、小柄のほっそりとした夫人には、地味な渋い柄の和服の方が遥かに似合いそうであった。

手紙では、あれほどまでに赤裸々に告白し又、手記もプレイした者のみが知る精密さでその模様を詳述しているのに、今眼前に佇む夫人からは、そうした被虐にのたうつ女性の片鱗だにも感じさせぬ、淑やかさそのものであった。昼は淑女——夜は魔女——。それは男の理想の女人である。

その時、フト私の脳裡にありありと泛かんだのは、彼女を独りここへ寄越して、今頃、子供達と留守番をしている夫、渡部氏の心の動揺であった。振り返って二、三步、後退すると彼女に蔽いかぶさるような姿勢で思わすきいたのであった。

「よく御主人が承知しましたね」

「ハイ、私を信じているのでしよう。ベテランの辻村さんにうんと虐めてもらって、いろいろ経験してこいと申しました」

「恐らく今頃は、何も手につかないで、ヤキモキしていらっしゃるでしょう」

「多分……」

「でしょうね。愛すればこそ、尚更それが本当です」

「ハントなさる奥様方の御主人は、皆様、御存知のことなんでしょう」

「いえ、殆どは主人に内緒の人が多いようです。最近とりました川路むら子さんにしても九月号に書いた谷山久美子さんにしても、主人は全然、気付いていません。御主人が承知の奥さんをとる場合、大抵は同伴の夫婦プレイになり勝ちです。中には、童女緊縛の、金原奈加子のように、プレイ以外の目的で、判っきり割りきったのもありますが、貴女のような方は珍しいですよ」

「正直申しまして、主人は御一緒したがっているのです。でも、それでは辻村さんがハントしにくいだろうと考えまして、遠慮しているようですわ」

「電話でもそう仰有っていましたが、そんな御心配は無用ですよ。一緒にいらっしゃれば御夫婦のプレイの模様をみせていただいて、むしろ、やり易かったかも知れませんのに」

「いいんです。子供二人放っておくわけにも参りませんし、やはりよかったと思います」

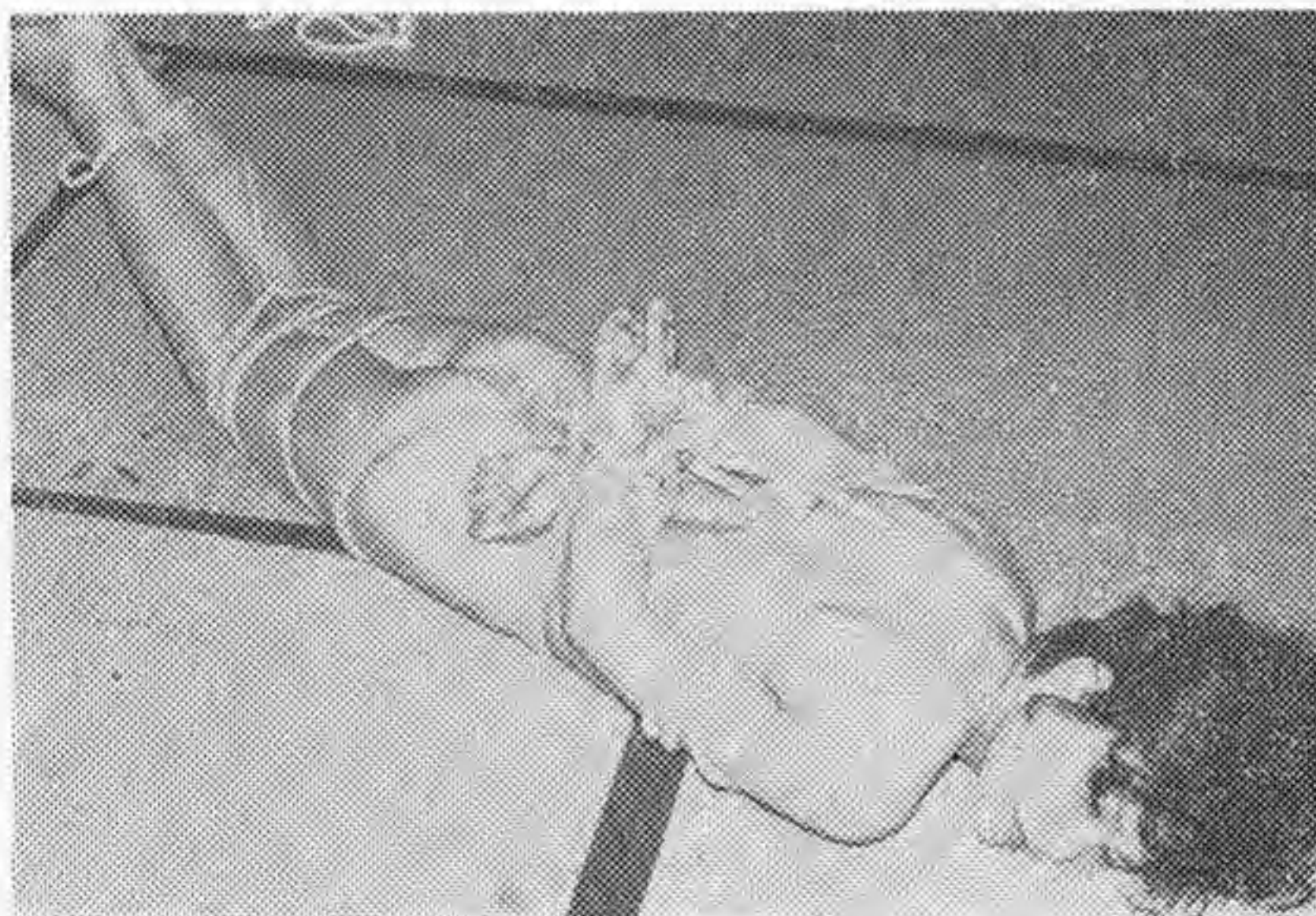
「しかし、御主人に気の毒しましたね」

「そのかわり……」

「えッ？」

「いえ、いずれあとで申し上げますわ。この様な場所では、何だかふさわしくないように思えますもの」

何かいいかけて、彼女は口を緘した。勿論



夫婦間の微妙な諒解であろう。いわなくともおよそ察しられる内容であった。一對一のプレイによって、渡部氏は強烈な刺激を覚え、私とのプレイの有様を、それこそ根掘り、葉掘りトコトンまで聞き訊し、それが彼の嗜虐の血を一入沸き立たせるに違いなかった。

彼女のスナップを撮るつもりで持参したカメラも、この暗鬱さの中では撮りようもなく徒らに肩が重いのに過ぎなかった。

遠雷が微かに耳朶をうち始める。ポツリと木の葉洩れのしずくが頬にあたる。雨は近い——。私達は急に速しく歩を速め、出口に到達した。

おどろおどろと響く遠雷の昼下りを、嵐山へ向かって車は走る。どこかの旅館の一室に早く落着かねばと心は焦り始める。

嵐山の昼食もあきらめて行き当たりばったりに、とある今様のホテルに車を止める。空室をきくと、無愛想な女中が心得顔に二階に案内し、二つの麦茶と菓子をおくと、そそくさと出ていった。

手持無沙汰にチャブ台を挟み、私と好美は思わず佻しい笑みを交した。

× × ×

雷鳴は頭上で鳴り渡り、沛然とふりしきる

豪雨が窓を叩いている。

冷蔵庫からビールをとり出し、苔寺のみやげもの屋で買った袋入りのおかきを肴に、昼飯がわりのコップをあける。

カッターシャツと蝶ネクタイを外して、シャツ一枚になり、好美夫人にもすすめるが余りのむ様子もなかった。注文した寿司はもう十五分近くなるがまだ届かない。近くの寿司屋から配達されるのだから少々時間のかかるのも無理はなかった。

三脚にカメラをすえ、自動シャッターで、私はこの貧しい二人きりの宴会をカメラに納める。二本のビールがいつしか私の心を仄々



と暖めて、クーラーの冷気が汗をひかせていた。例え、うたげは貧しくとも、二人きりの世界への没入が私達の心を弾ませてくれた。夫人は私にビールをついでくれ、自分はコップをもう一コとり出してサイダーを注いで、静かに含むようにのんでいる。

「今日のプレイの模様を一部始終、御主人に報告するのでしょうか」

「尾鰭をつけるかも知れませんが、あの人が求めているものをされたという風に」

「どんなこと？」

「そう訊ねられても御返事出来ませんけど。」

やはり相手変われば、又なさり方もいろいろと違うのじゃないでしょうか」

「その違うものを求めていらっしゃるんですね。しかし人間の考えることなんて、そうそう変わったことも出来ませんよ」

「主人はいつも辻村さんのハントのお写真を参考にしていますわ」「じゃあ、先刻あなた

の体が御存知の筈だ」

清楚な、あじさいの淡紫を感じさせる夫人はヒソと笑って、ポツと襟元を赤くした。

「じゃあ、そろそろ、御主人のいう『オシバリ』なるものを始めましょうか」

微かにうなずくと、ハンドバッグを開いて小さい紙包みを取り出し、開いて、そつとつまみ上げて机上に置いた。

注射針が三本ばかり細い糸で丹念に縛り合わせてある。それで何処を責めてくれというのだろうか。

「主人が持ってゆけと申しましたので」顔をそむけるようにして声をひそめる。

「これでチクチクやっていいんですね」

「ええ、なるべくオッパイを……私、とても貧弱なんです。吸われちゃって……」

もじもじし乍ら、更にハンドバッグから、ピンク色のおなじみイチジク浣腸をとり出すと、注射針に並べて、そつと置いた。浣腸を許容する夫人なら、私の黒靴の底には、エネマシリンジやポンプもひそんでいる。『私はどうしてこんな女に?』の手記をよんで、或いはクリスタールもいけるかと準備してきたのであった。夫の趣向に合わせようと懸命に努力している彼女のいじらしい心根が、この

二つのプレイ用具に、まざまざとにじみ出ている思いであった。

ほろ酔い気嫌で、三脚に据えたカメラから長尺シリーズを引き伸ばし、その足で、好美夫人の背後に回ると、そっと肩を抱く。

いよいよ来るべき時が来たという強ばりが夫人の五感をつらぬき、私の掌に微かな身震いが伝播してきた。

「あの、お願いがあるんです。今日お撮りになった写真を欲しいって主人が申すのです」

「いいですよ、差上げます。それがせめても御主人に対する私の出来ることですから」

「あのう、小さくてもいいから、撮ったのを全部、欲しいっていうのです。本当に、厚かましいお願いですが……」

私は、うなずいた。それは彼が妻を私の手許へ一人で送りこんできたプレイの代償でもあろうか。懼らくこの妻は、シャッターの音を敏感に耳で捉えて、フィルム枚数までかぞえているかも知れなかった。

莞爾と笑って、彼女の体の力は抜けていった。今日のプレイのすべてを、夫に報告すること、この妻は被虐の谷間で義務づけられていたに違いない。

「どうぞ遠慮なさらないで、お好きなように

縛ったり、責めたりして下さい。主人も、その方が甲斐があるよう申しとおりましたから」

といわれても、確かにいつもとは勝手が違っていた。姿なき夫の嗜虐の執念が、この部屋のどこかでじっと息をひそめて見守っているような錯覚に襲われ、私の嗜虐に逸り

立った心が、いつか萎縮しつつあった。或いは、このかばそい女体の中に夫の想念が息づいているように思えたのである。夫婦は一心同体とは、よくいったもの。たしかに、形はここに一人の人妻しか存在しなくても、まるでテレパシーのように、夫の執念が狭い密室に同居している思いにかられるのであった。

氣をとり直して一条の縄を握ると、手早く女人の背のファスナーを一気に腰まで引き裂く。この人妻は観念したように、私のなすが儘に身じろぎもなかった。シュミーズを肩から外して、上半身を裸にすると、胸縄をかけてゆく。彼女自身、卑下したように、そのむき出しの双つの乳房は小さかった。扁平な胸はふくらみもなく、二児を育てた乳首が浅



黒くポツクリと飛び出していた。細身づくりのこの人は、それが体質であろう。おそらく胸の扁平は娘時代からではなからうか――。

緊縛の過程を次々とカメラに納めたが一枚とる度に立ち上ってシャッターを廻すのは、プレイの中断をともなつて煩雑であった。服をずり下げて脱がせ、最後のパンティもとリ払った時、彼女は激しい羞恥をうかべてしっかりと股を閉じた。視線が必然的に流れる。ブルータスお前もか”であった。見事に剃毛されてあるではないか。夫婦プレイの場合どうしてそうなるのだろうか。

「御主人が剃ったのですわ」
「ハイ、恥かしいですわ」

「たびたびなの」

黙ってうなづく。

「フーン、まるで一種の流行ですね」

「本で刺激されたようです。夜明け前の午前四時頃、やっと眠りについたと思ったら、又起こされました……」

「じゃあ昨夜は殆ど寝ていないんですねえ」

「いよいよ、今日、辻村さんとプレイするんだというので、昨夜九時過、子供をねかしつけてから、ずっと……」

「すごく御主人ハッスルしたのですね」

「ええ、むごい想像ばかり働かせて、夜中の三時頃まで、未だかつてない程続きました。」

辻村さんに飲んでもらえるよう飼育してやるというて、全身ローソクのしずくで埋まりました」

「熱かったでしょ、さぞかし」

「ええ、でも辻村さんとお会い出来ると判った日から、急速に激しさを増して参りました連日のローソク責めに大分、慣れることは慣れたのですが……今も体中が何となくヒリヒリしているんです」

「そして、ウトウトしたら、そのあとカミソリで」

「ハイ、やっと少しばかり伸びた処でしたの

に又、綺麗さっぱりと」

夫人は、妖しいまなざしで、はにかんで笑った。

「でも、もういいんですわ。最初だけ、どう思われるかと、独りで恥かしがっていたんです」

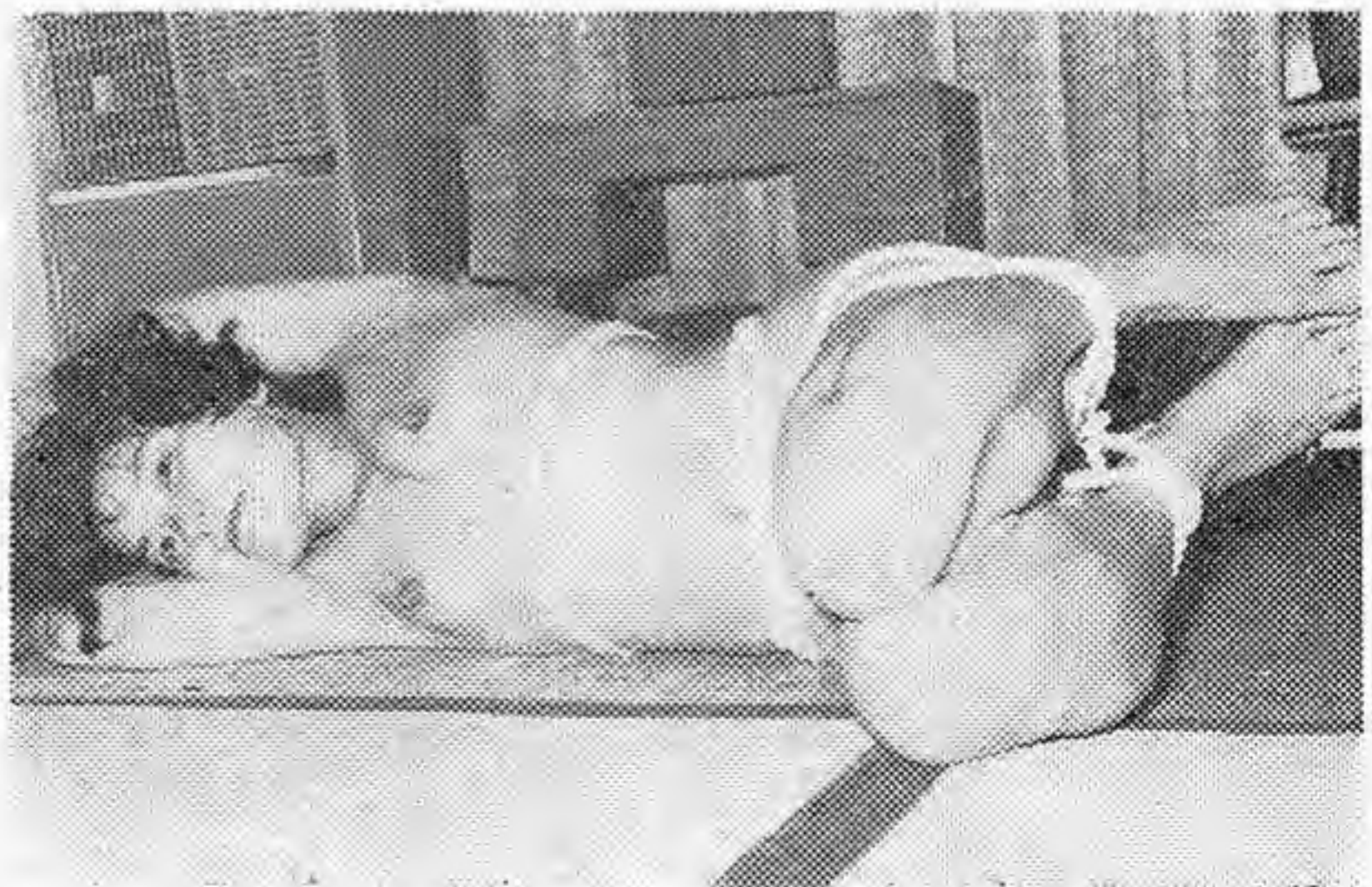
彼女は横坐りに膝を崩して露呈していた。飼育に明け暮れた今、むしろ夫人はすっかり度胸をきめて、すべてを投げ出しているようであった。

ムラムラと強い嗜虐欲が頭を拾げてきて、私は太縄のよく使いなれた一本を、掴んでいた。東映での協力の節、尾花ミキや、片山由美子、橘まゆみの柔肌を、散々にしめつけたあの太縄である。

ズボン脱ぎ、シャツもぬいで、パンティ一枚の裸になると、矢庭に犇々と、彼女のたおやかな裸身をしめ上げて行く、一本の太縄が腿に喰い込み、肩に這い上り、ウエストをしめ、両手を縛して終わりを告げた。

臍下で縄を足すと、太腿をギリギリ締めつけ、足首に伸びて行く。

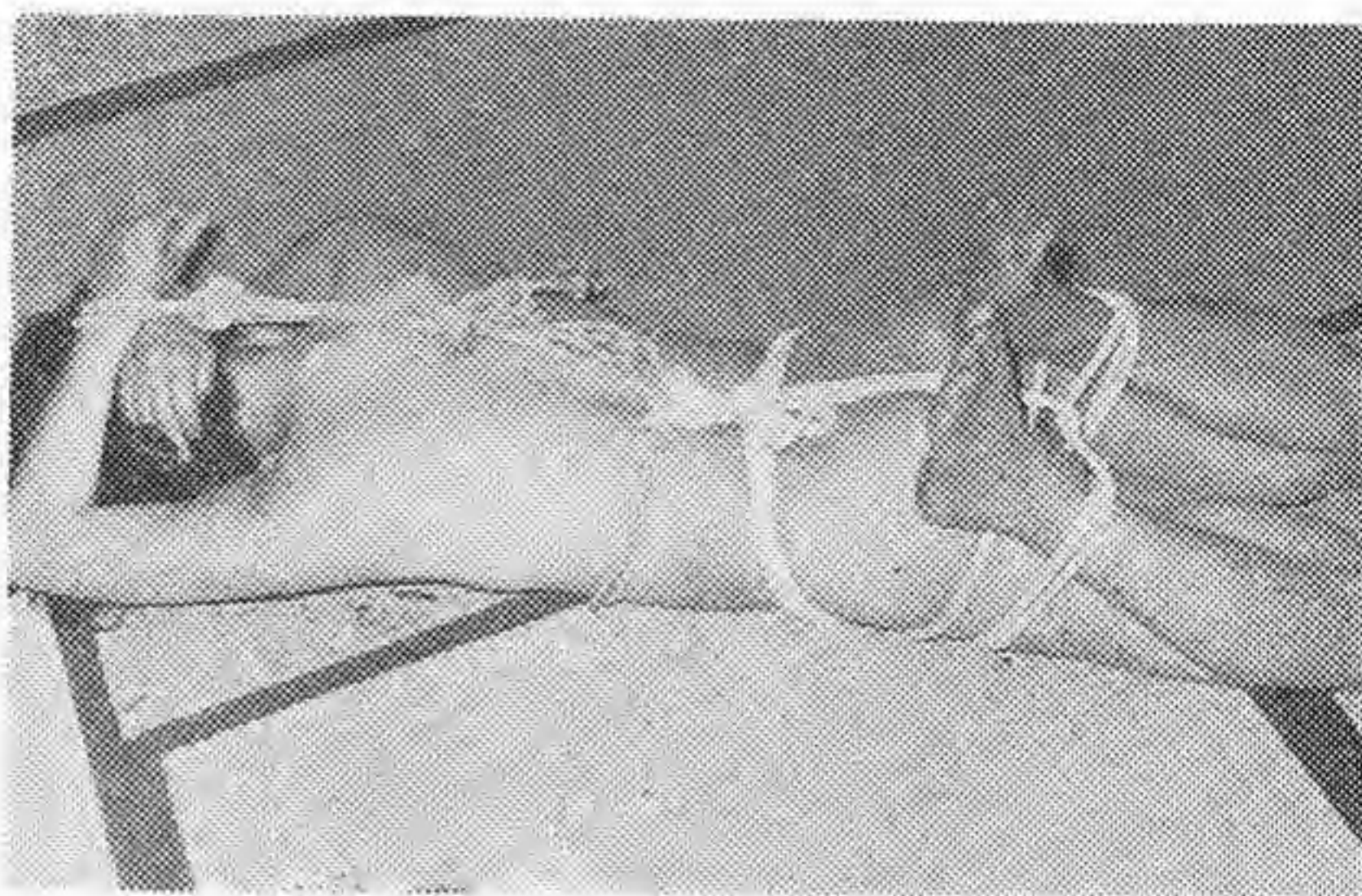
直立した俤、好美夫人は、私のなすが俤に体を委せきっていた。微かに泛かぶ唇の綻びは、既に悦楽の境地を彷徨しつつある欲びの



表情であった。

三脚からカメラを外し、その立ちポーズも前後左右からパチパチとカメラに納める。ひととき裸身に閃光が走りつづける。

抱きかかえるようにして横倒しにすると、恍惚の表情を泛かべる夫人に、私のカメラは



遮二無二、光った。うつぶせに転がし、両足を握って位置をずらせると、紐がきしむのか彼女は微かな苦渋を泛かべて、身をよじらせるのであった。双臀に深々と喰い込む太紐が悦楽を喚起するかのようになじれて、うごめいていた。

むき出しの双臀に鞭打ちの誘惑を覚えたがこの人が、それを好まないことは、告白で知っていた。カメラを置いて裸身に近づくと「どう、我慢出来そう?」

と声をかける。

「ええ、大丈夫です。主人は、もっともつきついことをします」

フーッと大きく溜息をつき、呟くように

「辻村さん」

と私に呼びかける。

「なんなの?」

顔を近づけると、眼がしっとりとうるんでじっと凝視し、

「まるで、夢のようですわ。幾度となく夢みたことが、本当になったのですもの……」

彼女の唇は、うわ言のように、しどろもどろに語尾が消えて、しきりに何かを訴えるように唇がはためいた。

そっと肩を抱くと、体をにじらせて、ヒタと寄り添うようにしてくる。カメラにない、ひとときの抱擁が、それに続いた。まぎれもない愛情の発露を夫人の肌に感じとり、いつしか私の手は、あらぬところを求めてうごめいてゆく。頬が紅潮し、貞淑な女人は、身も世もあらず悶えて、吐く息もあらしく、

一匹の牝獣と化していった。

「ああ、仰有って本当のこと……あたくしの様な、子供もある、体の貧弱なこんな女を、あなたは本当にお気に召しまして?」

「そんないい方はいけない。あなた自身、御自分を卑下していらっしゃる。あなたのような、貞淑な、優しい奥さんを持たれた御主人が、しみじみと羨ましくなります。あなたが人妻でなかったら、おそらく私は……」

「どうって仰有るの?」

「それを云わすのですか、残酷だなあ――」

その言葉は、あなたの場合、タブーですよ」
真実、私の心に激しい慕情が、芽ばえていた。それを口に出すのは、渡部氏の手前、憚られたのである。

ぐっと力強く万魁の想いをこめて、握りしめた掌の力に、夫人は妖しくフト猥らな表情をのぞかせて笑った。猥らさは忽ちに消えても既に疼き始めた女体が、プレイへの一途な惑溺を、ありありと示していた。

身悶える夫人に、近々と顔をよせて、
「私と一泊旅行したいって本気なのですか」
「ええ」と大きくうなずき、

「連れて行って下さる?」

「勿論、光榮の至りですよ。でも保証出来ま

せんよ、私という人間が野獣になっても」
「SMのプレイだけでは、済まないでしょうね。主人もそうなることは覚悟しています。それなのに、私をいたわって、行ってこいというのです。奴隷あつかいにする主人の、せめてもの思いやりなのでしょうか」

「御主人は心の優しい方です。妻を奴隷扱いする亭主は、慨して暴君で、独占慾がつよいのですが、あなた方夫婦の場合、プレイの愉しさを、平等にわけ与えたいお気持なのですね。一種のアウトセックスでしょう」

渡部氏の思考は世の夫婦にくらべて、確かに一歩前進していた。被虐を欲ぶ妻なら、彼女にもその欲びを、もっと味わわせてやりたいとの考えなのであろうか。

太縄の摩擦で体の一部が痛むのか、彼女は身をよじる。

しっかりと縛り過ぎた両腿から足首への縄が、いつしか私の作業の障害になってきた。抱きしめ乍ら、片手で腿の縄を解いてゆくとそっと上半身を起こす。

両手首の縄と両足首を繋ぐと、膝立ての姿勢で、彼女は中断された欲びの継続を求めるように、私になまめいた眸を投げて来た。

膝立の姿勢の前に、私の体がゆっくりと回

りこむ。抱きしめて、じわじわと女体を揉みしだいてゆくと、不安定な女体が倒れ込むように私の胸の中に傾斜して、きれぎれに喘ぐ声が、

「ああ、辻村さん、いいようにして……」

と、ドキリとする悦楽のうわごとが、私の耳朶を妖しくうったのであった。

不自然なポーズでは、所詮、長続きはしない。柔肌を存分に味わうには、この縄は不酔に太すぎる感じであった。

「縛り直すよ、ね、それから……」

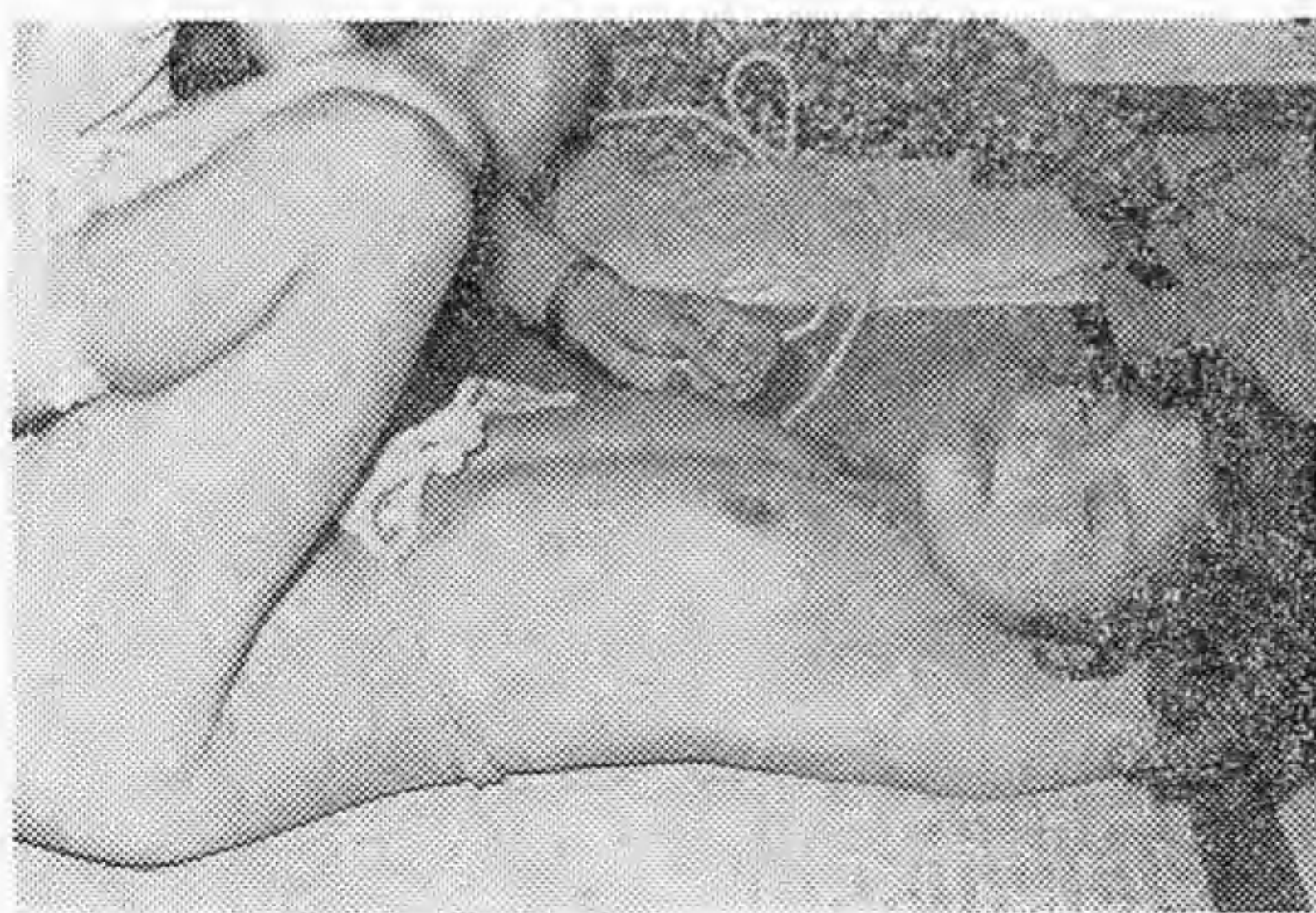
ささやくようにいって、素早く縄をといてゆく。既に好美夫人の呆然とした表情は、女体の歓喜を求める、牝獣の本能に激しく息づいて、それにひたすら耽溺したがっているようであった。

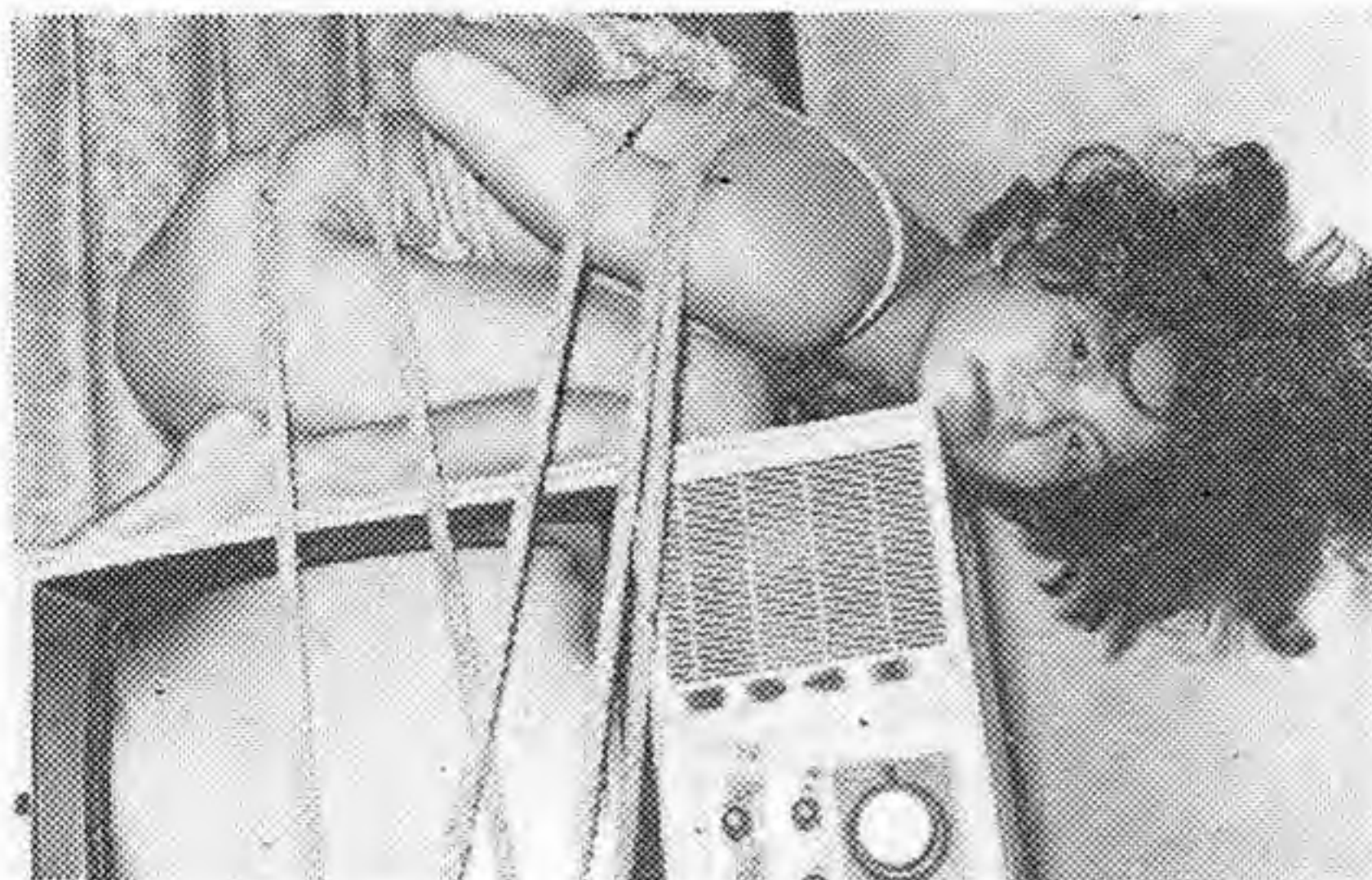
女悦を求めるプレイには、むしろ縄目は簡素で緊縛に伴う苦痛を与えぬ方がよかった。しかし、縛らずに、その儘、素肌を抱けば、それは最早、単なる情事の、セックスプレイとは何ら変わらない。やはりサジストを以て任ずる私としては、簡単なものにしろ、女体に縄目が欲しかったのである。

後頭部で、ゆるやかに両手を縛り、足首と腿を縛って、開股気味にして、あとの縄はア

クセサリ程度に腹部で結んでおく。それは私の本意ではなかったが、ギリギリと燃えるような眼で私をみつめる夫人の、激しく求める心に、思わず、私の縄もおざりになってしまったことは否めない。

縛り終わって、力をこめて体を押すと、ドサリと両脚を屈折した儘、横倒れになる。





恰度、両手を枕にした様なポーズで、彼女はじっと私の態度を見守っていた。そのなじりようなまなざしには、このポーズではどうにもならないじゃないの、というように、私に訴えているようであった。

しっかりしめつけた両腿——たしかにそれ

は愚かな縛り方であった。仰向けてみても、ゴロリと転がしてみても、はね上って、腿と足首をしめつけたポーズではどうしようもない。

しかし好美夫人の眼は、何かを求めて、早く早くとせき立てているかのようである。

このだらしない縛り方に愛想をつかして腿と足首をしめた縄を解く。夫人は、やっと両脚を長々と伸ばして、後頭部の縛った両手首を枕にして、仰向けに寝そべった。そのポーズは無防備の、どうにでもしてくれといわんばかりの大胆な挑戦を示していた。眼をつむった儘、独り言のように呟く。

「主人は、こんな時、よく針を使いますの」
反射的にえッ？ と応えて、私の視線は机上に走る。束ねた三本の注射針が、登場を待つように転がっていた。

臀部の鞭打ちを忌避する彼女が、注射針の刺激を求める——。私には分からない不可思議な被虐心理である。

比較的、鈍感な神経の臀部に、かなりの鞭打ちをしても、M性の女性なら殆ど耐え得る快虐の苦痛である。それに引換え、敏感な乳首を、鋭敏な注射針でさすことは、かなりの苦痛が伴う筈であった。

世の中に喰わず嫌いということがある。恐らくは、好美夫人の場合、主人の光雄氏が、情慾の充分醗酵していない妻に対して、心逸って、強く臀部を打ったのではなからうか。

その尻打ちが、好美夫人にとっては、被虐の悦楽に伴うものでなく、苦痛以外の何ものでもなかったに違いない。痛さのみが心に残った結果、いつしか臀打ちを忌避するようになったのではなからうか。心の熟さぬ時、鞭打ちという、加虐プレイの手段を用いても、それは女体を悦ばせる、何らの手段とはならないものである。

谷山久美子の様に、こちらの掌が痛くなる程の尻打ちや、縄むちをふるっての臀打ちに歓喜の呻きをあげる女性も、一旦平静に還って、被虐の悦楽に心走らぬ時、たまたま冗談に一発、強く打てば、飛び上って痛いッといったのを覚えている。好美夫人の場合も鞭打ちが、苦痛につながるものと、彼女の神経は覚え込んでいるのだらう。渡部氏が、注射針で、乳首や胸のふくらみ、更に鋭敏な個所をチクチクやった時は、たまたま、彼女の最も昂揚していた時だったのではあるまいか。その刺すような鋭い痛みが、激しい悦楽と恍惚に結びついた結果、彼女はそれを好むように

なつたに違いないと思われるのである。その結果、いつしか、注射針が肌を刺すことによつて、彼女の情熱が、忽ち昂められ、被虐の悦楽を喚起する刺激となつたのであろう。しかし、これは所詮私の考えに過ぎない。女体には、もっと云い知れぬ、深奥のカンドコロというものがあるのかも知れない。

針を握つたものの、注射針での責め方に、或いは渡部氏独特の女悦のコツというものがあるのではなからうかと、そんな危惧がフト走る。おそろおそろ、乳暈にそつと針を立てて力を入れてみる。ピクリと女体がうごめきさつと軽い苦痛の色が眉間に流れる。

チクッ、チクッと、ほんの軽く触れる程度に、乳房の辺りを、針持つ私の手が遊弋し始める。徐々に甘い陶醉のいろが、閉じた眼尻からこぼれ、微かに喘ぐ吐息は、切なげに弾んでいた。

のしかかるようにして、唇が、ポツリと突き出た乳首をそつとくわえる。一方の手で、針が、静かに、しかし徐々に力強く、周辺を刺しつづけている。甘い呼吸は昂まり、歎歎が洩れて、夫人の顔がのけぞつた。

渡部光雄氏が、このハントを必ず読むであらうことを想定しての、これはもう限界ギリ

ギリの表現である。

私は勿論、聖人でも君子でもない。いや、むしろノーマルな大衆以上に探求慾の強い人間である。結果としてこうなつた処で、それは当然すぎる帰結ではなからうか――。

私の手にいつしか愛用のバイブレーターが握られていた。彼女の衝撃は予想以上であつた。

彼女がこの種の大人の玩具に接することは、その時始めてであつた事が、好美夫人の悦楽と恍惚のないまぜた表情から、まざまざと感知し得たのであつた。

× × ×

プレイに没入したあとの、ぬめつく肌を洗うかすかな物音が耳に入る。

雨足はいつしか静かになり、雷鳴は遠のいていった。

いつもなら、先に入浴をすすめ、おもむろにプレイに取りかかるのに、脱衣から撮り始めて、その裸身に接するや、心の逸りたつまに、思わず我を忘れ、悦虐の陶醉の中へ陥没していった慌しさに、私の五体は、その性急さを反省するように喘いでいた。



恐らく夫である渡部氏ととも、こうしたことの成行は、ある程度、承知の上のことと考えて、こうして私は敢えて書いています。

いつもいのように、近頃の私はフォトは従で、女悦交虐のプレイが主流をなしていた。フォトのないカメラ・ハントなど書けないだけに、時によっては己むを得ず、カメラを駆使している場合だって、往々にしてあつた。それだけに、フォトとフォトの谷間の、その間隙を縫つての、女悦のプレイをオミットした場合、その方が、むしろ不自然ではなからうか。この事は、当の渡部光雄がサジストのプレイヤーであるだけに、彼がその経験上、一番よく知っている筈であつた。



人妻という立場だけに、いかに乱れに乱れても、私は確固として一線を引いていた。

女悦をかき立て、恍惚の境地に逍遙させても、私自身は唯、矛を納めて、只管に相手にのみ歓楽を与えている態度を堅持していた。しかしその行為によって、私自身の精は、少なくとも充分に昇華していたのである。

プレイの絆で結ばれた同好者の妻であるだけに、ありきたりのセックスは介在しなかったことだけは信じてほしいのである。

湯上りのバスタオルを胸に巻きつけて、上気した匂うような女体が、遠慮がちに部屋の片隅に佇んだ。

目顔で招くと、黙って私の傍らに身をうずくまらせ、

「いいお湯でしたわ、お入りになりませんか？ およろしかったら背を流させていただきますわ」

艶な媚を含んだ眼が、私にそそがれた。

「いや、今はいいんです。どうせ又、汗をか

きますから、あとで……」

そういつて、サイダーをコップに注いで手渡す。おいしそうにのみほして、チラリとアルカイクな笑みを泛かべると、

「いけない方……」

と、ひそと呟く。

「御主人に叱られる？」

「でしょう、多分……わたくし、ハントでよく辻村さんが、あれをお使いになるのを読ませていただいてましたけど、経験するの始めてなんです」

「どうでした？」

「気が遠くなっちゃいましたわ」

夫人は羞恥をかげらせて、呟くようにいった。その満ち足りた表情には、さして疲れた風もない。昨夜来の激しさにつづいて、ほんの一刻前、陶酔の丘を駆け上ったのに、更にこれからの、より以上のプレイを期待するかのように、甘い笑顔は歓びをうかべていた。

官能をくすぐる笑顔に、フット誘惑に負けそうになり、あわてて立上ると数条の縄のもつれを捌き始める。私の胸底には、何かもっともっとと激しい、思いきり縛ってみたい、強烈な緊縛慾が、渦を巻いて燃え上っていった。

無言で湯上りタオルに手をかけると、心得

緊縛のフोटを撮っただけなどと綺麗ごと

のみ書いたとしても、彼が徹底的に彼女を、嗜虐心をあおり立てて詰問したとき、この人妻の口から、プレイの模様の一部始終が語られることは明らか過ぎるほど明らかである。

夫の、より激しい愛撫を求めて、この人妻はむしろ、実際のプレイ以上に、尾鰭をつけて、夫の喜びそうなプレイの有様を、虚々実々に報告するかも知れなかった。

夫の執拗な責めを内心期待し、それが彼女自身を疼かせる材料になることを、この夫人は賢明に察知しているようであった。

しかし、相手が夫の諒解の下にやってきた



たようにさっと外す。塵毛一本ないすべすべした女体が、湯上りの芳香を漂わせて、私に迫る。

背後に両手を軽く組ませると肩へかけ、手早く腹で結びとめる。

「このテレビの上に坐ってごらん」

「あらッ、大丈夫かしら、壊れませんか」

「あなた何キロ？」

「四十三キロ」

「じゃあ、試しにそっと腰掛けて御覧、抱いてあげるから」

柔らかい体を軽々と抱

き、そっと十六インチのテレビの上に坐らせる。

四本の脚で支えられたテレビは、ゆるぎもしな

った。この際、ホテルの災難は大目にみてもら

うより仕方ない。テレビの上に女体が鎮座するなん

てことは、おおよそ、どのテレビ製造メーカーも想

像しなかったに違いないが、ホテルでも、まさか

部屋のテレビの上に乗る客があるなんてことは、思いも及ばなかった

であろう。

この突飛な思いつきを知ると彼女は、つや

やかな頬を光らせて可笑しそうにクククと含み笑いだした。

「辻村さんって、本当に変わったこと考えますのね」

「何をするか分かってるの？」

「テレビの上へ行儀よく坐るのでしょう」

「そうですよ。でも、それだけじゃ物足りないから、その上から太縄をかけて、落ちない

ようにするつもりですよ」

その通り実行にかかる。小柄な彼女は、テレビの上で行儀よく納まった。太い縄で、ぐいぐい引き絞って締め上げてゆく。

むき出しのオシリをチョイと針でつつくと髪を乱して首を振った。きっちりと縛られた好美夫人は、それでもこの変わったポーズが気に入ったのか、私のカメラの注文に笑顔を送ってよこした。

テレビの上に曝しものにして、私はクルクルと彼女の眼前で裸になるとバスへ向かった。背に彼女の声がかかった。

「待ってえ、あたくしをこの俥にしておくのですの？」

「ああ、そうですよ、しばらくね。何ならテレビをかけてあげましょうか。ジリジリとあたたまって来ますよ」

裸で戻ってきて、ニヤニヤ笑うと、

「ウーン、いじわるう……いいわ、我慢していますから、早く戻って下さいね」

「何なら、これをサービスしておきましょうか」

と、パイプをとり上げると、赤くなって首を振った。

「余り動くと倒れますからね、お静かに」

わざと意地悪く云って、バスに消える。少しぬるくなった湯につかって、今頃、テレビ台上的彼女は、独りポッチで、何を考えているだろうか、想像を逞しくすると、私の胸はカッと熱くなっているものであった。

あのおおやかな、優雅な人妻を、雁字搦目に縛り上げ、さまざまに羞恥責めをしてみたかった。もし可能ならば、逆さ吊りして、鞭打ちし、パイプをかけて、ヒイヒイ呻吟する女体をながめ、心ゆくまで、いたぶってみたかった。この狭い部屋には梁も鴨居もなく、逆吊りは出来なかったが、それに勝る何かの手段で、牝獣と化して咆哮する人妻の、あられもない姿を、この眼で、今一度、確かめてみたかったのである。

裏返せば、紐つきならぬ、亭主の陰影をたえず感じさせるこの人妻を、主人の眼にみえぬ圧力から脱しさせて、思う存分に振舞わせ乱れに乱れさせたかったのである。それは既に、この人妻に、私がそこはかとなき慕情を抱いたせいかも知れない。

のっそりと濡れた体で部屋に戻ると、元の状態のままで、唯、好美夫人のつきささるような鋭い視線が私の体を射た。

「どう、テレビの上の感じは？」

「しりません、ヒドイ方……」

しかし、口程にも怒ってはいない。淡い安堵の色が泛かび、甘えるように、身動きの出来ぬ体をかろうじてくねらせていた。

やつこらさと降ろすと「いじの悪い方ね、さっきお湯をすすめて、背をお流ししましょうと申し上げたのに、いらっしゃらなかったくせに、私を縛ってお行きになるなんて」

「一緒に入るのが怖かったからですよ」

「どうして？」

「分からないかな」

「分かりませんわ」

「私は、人一倍スキな方ですからね、どうなるか分からない」

「あらッ」

一瞬、頬を染めたが、小声で、

「いいじゃありませんの、そうなくても……」

この人妻は思いがけない大胆な発言をして



なまめかしく私をみつめた。今、主人から解放されて、一対一となった密室で、すべてを忘れて感溺しようというのであろうか。

気をとり直すようにして、私は夫人の肩を掴むと、背後に両手を深々と組ませる。腕にかけて、身じろぎも出来ぬくらいに、丹念に三カ所をしっかりと縛り上げてゆく。普段なら両手首のみ縛るところだが、こうすると背後の両手は微動だにしない強烈さを伴ってくる。

首縄をかけ菱型縛りのオーソドックスな緊縛が出来上ってゆく。かたちよく凹んだ臍で



結びめをつくって、両腿を開き気味に縄を交叉してかけてゆく。

好美夫人の表情が、縄目の強さに比例して眼がすわり、あきらかに恍惚の様相を呈していった。

「きつい？」

「いえ、いいんです」

やや、薄めの唇が、ものうげに動く。くびれた胸、押しつぶされた乳房が、激しい喘ぎにつれて、微妙にくねり起伏している。カメラを撮り終わって、両腿の縄をとくと、三面鏡のスワールに坐らせる。もっと雁字搦目に縛りたい意慾にかられて、犇々と縛った上半

身に、矢鱈に縄をかけてゆく。たおやかな柔肌に深く喰い込んだ縄は、時と共に苦痛をましているに違いなかった。

三面鏡に、異なる三つの悦虐の表情が、まるで走馬灯のように、刻々と変化して、泛かんで消えていった。

彼女は折ふし、チラリと鏡に眼を走らせては、己が強烈な緊縛の upper body を、我が眼で確かめて、忘我の境を、さ迷っていた。既に掌から肘にかけて、痺れて感覚が失われているようであった。

「どう、まだ我慢出来る？」

三面鏡に正対する、彼女の背後から、その肩を抱きしめるようにして、声をかけると、ハッと我に返ったように、

「え？ ハイ、きついですけど、もうしばらくなら……」

うっとりとして応える唇は、しっとりと艶をおびて濡れていた。

「未だ未だ序の口ですよ。ローソク責め、浣

腸と、盛り沢山に、これからネ、うんと愉しくいじめて上げる……いいんでしょう」

三つの表情がひそと笑って、微かにうなずく。ひしと体をしめつける縄目が、彼女に未知の悦楽をさまざまに想像させて、心を疼かせているようであった。

その笑顔を払拭させるように、いきなり顔面に縄が、蛇のように巻きついて行く。半開きの唇に深々と縄を噛ませて猿轡にし、彼女はああ、ううと呻いて、声にならぬ悲鳴を挙げた。無惨な苛酷な緊縛図がそこにあった。

鼻腔から洩れる吐息が、苦しげに鼻翼をはためかせて、押しつぶされた胸が切なく喘いでいた。

女体虐めと共に、女悦の恍惚をこの眼でたしかめるべく、私の異様に躍る心は、再び小型のバイブを廻して電動を始めていた。

かたく閉じた腿をしっかりと縄でしめ上げ更に脛から足首へと揃えて縛って行く。

声なき声が、縄の猿轡の奥から洩れ、キリキリと奥歯を噛みしめ、裸身を蠕動させて、夫人は悦楽に身悶える。

悶える裸身に追打ちをかけるように、膝頭にローソクを押し込むと、点火する。真新しいローソクは、やがて火芯を伸ばして、ジジ

と芯を焼いて直立する。

微かに揺れるローソクの底辺で、ものうげに響く電動音。

猿轡の奥から激しい歓戯の鳴悦が洩れる。

嗜虐に逸り立つ私の心は、尚も加虐を求めて、ポツリと飛び出した二つの乳首の尖端にプラスチックの洗濯クリップを挟んだ。バネが強く、この痛みはかなり強かったのか、ヒーツと、苦悶が洩れて、クリップがブルンと揺れ、必死に噛みしめる皓歯が、苦痛と悦楽のないまぜた悲鳴をあげさせた。

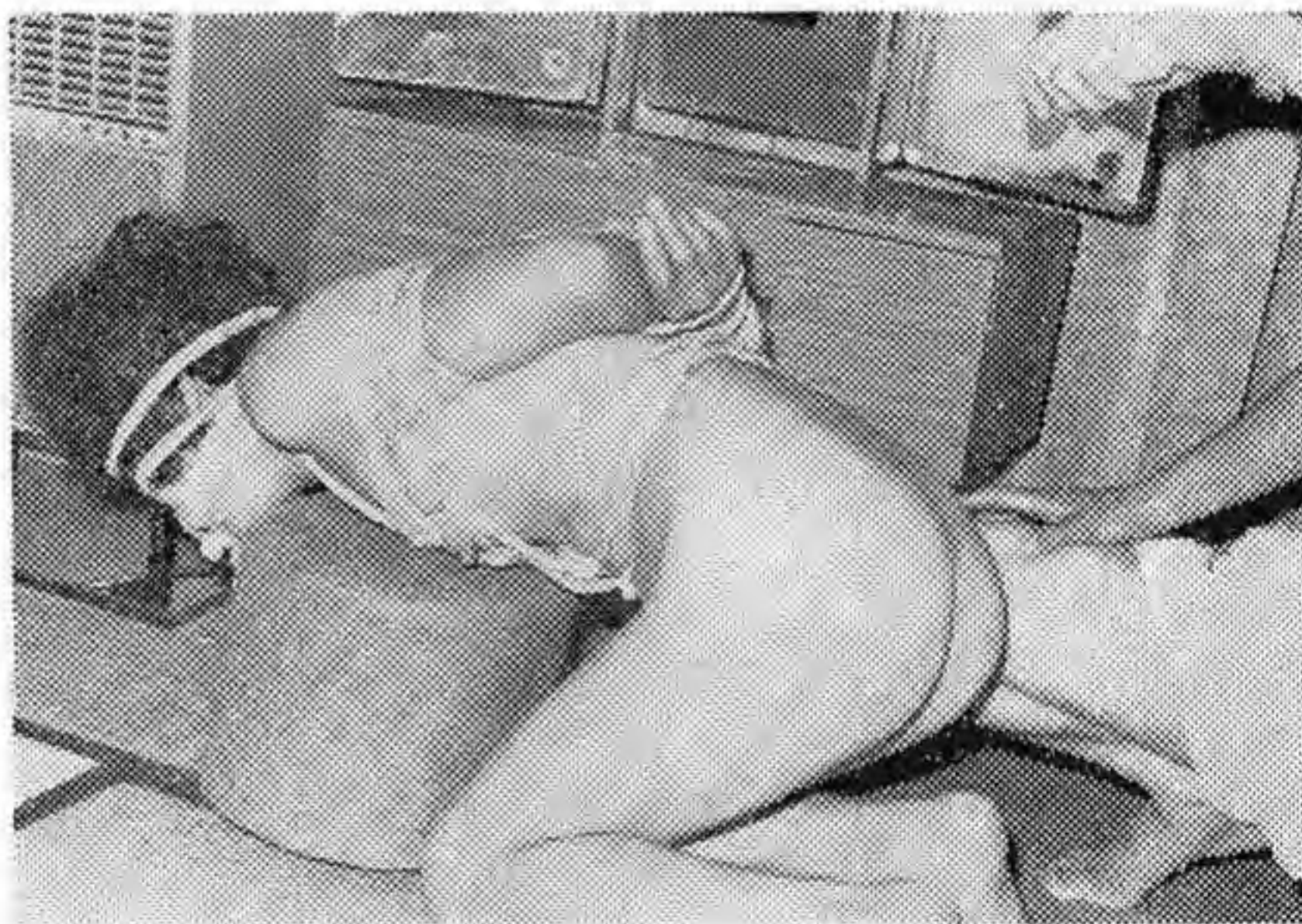
くねる腰、揺れる裸身につれて、ローソクの炎がハタめき、ポタポタと腿に落滴する。はじける私の嗜虐の血は、いよいよ猛り狂ってゆく。

チクチク、チクリ、チクチク、注射針が、プチッと張り切った、クリップにつままれた乳首の先をさしつづける。

押し殺す悲鳴でゆるんだ縄の猿轡の奥で、真白い歯が、キュッと縄をかんで、悦虐の陶醉をかみしめている。

「どうだ、痛いか——」

「ああ……、痛いけど、いいの……でもお願い、乳首が千切れそう、クリップをとって」
縄目のゆるんだ唇の奥で、悦虐を堪能しな



がら、甘えた声がうわずって哀願する。

「いや、外さない。もっと責めて上げる」

クリップを握って、上下にゆすると、けたたましい絶叫が洩れる。ローソクをぬきとって、顔の辺りから傾けて、乳首にポタリ、ポタリと蠟滴を垂らしてゆく。

バイブと熱蠟によって、彼女の悦楽は激増したのである。ワアワアと声をあげて、全身をゆすり、蠟滴は、腹へ腿へと散らばって白い花を咲かせていった。

乳首のクリップを、頃合をみて外すと、女体にしたたらせていたローソクを三面鏡台に数滴落として立て、足縄をとき始める。プレイは終わったのではない。更にエキサイトしようとしているのであった。エスカレートする、とめようのない嗜虐心に更に拍車がかかっていった。

胸をスツールに当てがって、四つ這いのポーズにさせる。既に両手は白く変色し、触れると冷たかった。強烈な緊縛が長々とつづいている。忍耐の限界を超えて夫人は耐えに耐えていた。

体温をしみ込ませたバイブが、脂汗に濡れて転がっている。むき出しの双臀にローソクが傾斜して行く。ポトリ、ポトリと、蠟滴は次第に早さを増して、双臀に蠟花を咲かせていった。

空いた片手が、我知らず、臀部を軽く叩いた。拒絶の反応はなく、燃えさかる、被虐の恍惚感の中で、それは、むしろ快く容れられたようであった。

斑々と蠟花は、双臀を白く染め上げていった。触ると、蠟骸がポロポロと畳の上にこぼれ落ちた。

「大丈夫かい？」

呻きのみが洩れるのに、ふと気づかって声をかけると、微かにうなづく。彼女は飽くなき情念でつづける私の嗜虐行為を、懸命にたえていたようである。

机上に転がるイチジク浣腸に眼が止まる。

いよいよ大詰に近いクリスタールプレイが、この日のSMのプレイの仕上げをするかの様に待ち構えていた。

私はビール瓶を下げて、浴室に向かうと、バスに瓶をつけて、ガボガボと湯液を一杯にのみ込ませてきた。

先ずイチジク浣腸の洗礼である。注射針で先端に孔をあけると、軽く先端に唾液を塗り、拇指と人さし指に力をこめてイチジク浣腸を絞り、グリセリン液を注入してゆく。グルグルと微かな音を立てて、液はすっかりのみこまれていった。休む間もなく、エネマシリンジで、ビール瓶の温湯を注入してゆく。

好美夫人は苦しげに腰をゆすり、身動きのならぬ上半身をゆさぶって、ハッハッと切なげに吐息を洩らした。

ビール瓶一本の温湯が、殆どこぼれず、彼女の腸内へと流れ込んでいった。

グルグル、グルグルと、圧迫された腹部で液の流動する異常な音が私の耳をうつ。

「ああ、ダメです。もうダメ……」

一分たらずで、くぐもり声の、哀願が洩れた。

「ダメダメ、もう少し」

ピシャピシャ二度、三度おしりを叩いて、忍耐させる。

「ああ、洩れそうよ。早く、早く……起こして下さい。もうダメ」

押えつける私の手をはね返して、必死に立ちとうとする。

冷たく変色した手首の縄を握って、やっと立たせると、よろける彼女の背後によりそって、縄をとこうとする。

「ああ、とてももちませんわ、早く、早く」
ジダンダふんで、夫人は自ら走りだそうとする。得たりやと、私は雁字搦目に縛った彼女を押すようにしてトイレの扉を開く。

もう恥も外聞もなく、夫人は白い陶器に跨がるとみるや、忽ちにして、激しい撥音と共に、排出する液が、やがて固体をともなって白い陶器をしぶきをあげて染めていった。

× × ×

長時間に亘る、強烈な緊縛の労苦に酬ゆるように、私は好美夫人の縄目で縞をつくった裸身を丹念に洗っていた。うっとり彼女が全身を私に預けている。さして広くないバスの中は蒸せかえり、私のひたいに玉の汗が浮かんでいる。

「いろいろと無理なことをして御免なさい。御主人に叱られるかな」

「いいんですのよ、そんなこと。あたくし、本当に愉しゅうございましたわ」

「でも何もして上げられない」

「お会い出来て、プレイしただけでも、満足でしたわ」

遠慮がちに、夫人の顔が、匂うように私に近づいてきた。思わず唇と唇とが重なる。懼れていた刹那が前触れもなしに訪れて、私はいつしか夫人の裸身を抱きしめていた。夫の渡部光雄氏に悪い悪いと知りつつ、ついつい心はその一線を越えようとしていた。

「夫は許してくれますわ。昨夜、もしそうならプレイの挙句だから仕方ないといっていました。体は許しても心を許してはいけな」と、何度も念を押していました。でも私、夫にいけないと知りつつ、何か体も心も許し

てしまいそうです」

「今はいいい。でもここを出たら、すべては忘れるんですよ、一場の楽しい夢をみたと思つてね。でないと夫婦の長い将来にヒビが入りますよ。私はウソは書けない。すべてを書いて、御主人に在りの俣をみてもらうつもりです」

体を離すと、狭いバスの洗い場に夫人を直立させ私は窮屈に体がかがめて膝を折った。両手でしっかりと腰を抱きしめると、私の唇が、稜線の断層を求めて喘いでいた。

……

激しかった雷鳴は納まったが、雨が小降りに降りつづいていた。

宿を出て、苔寺まで走って十分足らず、暗雲たれこめる苔寺の、初めて出会った駐車場まで引き返す。

「どうします、何ならお家まで送りましょうか？」

「いいえ結構でございます。目立ってもいけ

〓旧号お手持の方へお願い〓

本誌の旧号八昭和三十九年度以前の発刊分Vを高価に譲り受けたく思います。整理の意志をお持ちの方は是非編集部まで一報下さい。折返し返信致します。

ませんから……」

平静に戻った人妻は、既に近隣の眼を警戒する慎重さであった。心ならずも、人妻を逸脱しそうになった淡い悔恨が、今、渡部好美夫人の心を、ほろ苦く支配しているのかも知れなかった。

「濡れますよ」

「少しぐらい、いいんです。じゃあ、ここで降りして下さい」

ドアに手をかけて、自ら降り立とうとした時、傘をさした一人の男性が、あわただしく近づく。

「あッ、あなた——」

それは、妻の帰りを待つ、渡部氏のそそくさとした姿であった。車と傘の眼が空間で合つて、どちらからともなく会釈する。

「あなた、済みません。お待ちになって」

ひそと訊ねる妻に、小声で

「いや、ちょっと出たついでにね」

とさりげなくいつてはいるものの、彼の心裏は、私には手にとるように分かった。

まだか、まだかと、プレイへ走った妻を待つ夫の心。それは複雑、微妙、愛憎交々の、世の平凡な夫婦では到底、知り得ない心理であったことだろう。

「始めて、お目にかかります。妻がいろいろとお世話をかけまして……」

「いや、何と云って御礼申上げたらよいか、いずれ日を改めまして、一度お目にかかりましょう、いろいろとお話したいし」

「私も是非——今日は子供も待っておりますので、これで失礼します」

少々硬い表情で、渡部氏は軽く頭を下げると、相合傘で私に背を向けて、うす暗い小雨の道を戻っていった。

何か、とり返しのかめことをした様な、それでいて、プレイに大きく開眼した、アウトセックス——。そんな複雑な心理で二人は歩いているに違いない。

信頼し、愛すればこそ、妻にも平等の権利を与えて、プレイの場をつくってやりたい。そう考える、渡部氏の試行錯誤は、現代社会では時期尚早かも知れない。しかし、私は二人のゆるぎなき夫婦の愛情を、しみじみと感じとったのであった。

雨で鎮まりかえる苔寺でUターンすると私は夫婦が辿っていった反対方向の、雨に濡れた舗道を万感の想いを乗せて走っていった。彼女の希う一泊旅行の、今ひとたびの夢を大きくふくらませて——。

(終)



カット・岡 たかし

……幻想創作コント……

ヤプー商売繁盛記

……清 川 純 平……

「くるしまぎれというか、いわばフザケ半分にやりだしたショーバイなんですがね、まあボツボツ」

河野は、「いま時間待ちで」と前おきしながら、レモンティーを一口のんだ。

ぼってりと厚ぼったい、女性のように赤い彼のクチビルをみていると、彼のショーバイというのが、いかにもこの男にピッタリなんだな、と感心させられる。

河野は前職が、キャッシュレジスターのセールスマン。それが、ちょっとしたミスで職から追放された。同僚の使い込みにまきこまれたそうなのだ。

昔からの友人であるだけに、私も心配だけはしたのだが、そのころ「家畜人ヤプー」と

いうおかしな小説が、たいへんな評判を集めていることを耳にして河野は、この商売のヒントを掴んだというのだ。

いくら落ちてても、といくども迷ったそうだが、彼が過去に開拓したレジスターのユーザ―は、バー、喫茶店、飲み屋、洋品店、食料品店などの経営者が多く、そうした企業のマダムの中でも、型破りの女性が意外に多かったことを思い合わせると、やればやれそうない気がしたそうなのである。

『出張専門のヤプー屋』

これが、河野の考えだした、ショーバイであるという。

——〇——

世の中には平和な毎日のくり返しがタイク

ツで、モノズキな、小金をもつ女性で、軽いアバンチュールを楽しんでみたいという向きは、案外多いのだ。

だめだったら売ればいいと、アパートの四畳半の自室に、無理をして電話をひいた。セールスマンには、電話は重要な商売道具。あとは口一つだ。

その口が、こんどは電話以上にたいせつな商売道具になるのだと思うと、おかしな気分になってくる。

「こんどボク、あたらしいショーバイをはじめたんです」

レジスター時代のおとくいさまのなかからヤプーを使ってくれそうな向きに、片っぱしから電話をかけてみた。

打率三割。

十本かけた電話の三本までは、その営業内容を聞くとクスリと笑って、

「そう。いっぺん、きてみなさいよ」

色よい返事がかえってきた。幸先は上々。

いっぺんきてみなさいよ——ということはいつでもいいのよ、という意味より、なんなら、今からでもいいわ、というように解釈してもよさそうであった。いや、そうすることに決めた。

便器代り、足台、馬、足蹴、縛り、ムチ、……というのが電話でPRにこれつとめた営業内容である。

当りをつけられたそれらの客は、案外そんな、奇抜な奉仕を喜ぶものであろうという思惑から、そうしたのだ。

不安だらけの出発だったが、ストレス解消に、男性の肌にムチをあてて、効用を覚えるらしい性質の女性は、たしかにいた。そしてそんな客は、かならず二回、三回と、あとをひいた。この商売も成り立つような気持が湧いた。

さすがに、便器代用という場面は、ごく少なかったが、でもあるにはあった。

交通事故で右足骨折、ベッドに寝たままと

いう、美容院主が赤ちゃんのようにダッコしてトイレまで運んでほしいという「看護夫」のような仕事をたのんできた。そんなまだるこしい方法より、と河野が身を投げだし、人ばらいした病室で、われとわが身を便器代りに、いっさいのご用を果たしてあげたら、すごく喜ばれ、回復後もとときき呼ばれた。参上すれば、タタミの上で奉仕強要。

—○—

「そりゃ、フケツだと、ときにはイヤになりますよ。でもねえ、お客さんに喜ばれたうえに、けっこうショーバイになると思うと、つい、やってしまう」

その美容院主は、入院当時は仕方なく、泣く泣く？ そんな便器代りを使ったのだけれど、ひとたびその便利を知ったら、その重宝さに魅せられて、すっかりファンになってしまったらしいという。

便器——。

こんな奇怪なショーバイがあってよいものだろうか？

「きたない、なんて思ったら、やれる仕事じゃないですよ。あくまで人助け、また人道主義」

彼は、そうやって胸をそらした。

ペラペラと、そんな奇怪な体験を語る河野の、ヌメヌメした赤い、ヒルのようなくちびるをみていると、思いきって、これを便器に見立てて、平気で用をたす、ことし二十九才グラマー美人、と解説つきの、その美容院主の顔が目につくかぶようだ。

「その現場を、お弟子さんにのぞかれてしまわしてねえ」

彼の話には、フロクがある。

どうやら、そのお弟子さんというのが、院主と、いまはやりのレズのカンケイにあったらしいのだ。

「翌日、またもや電話でオーダーがあったんですよ。連続とは珍しいと思いがら、ノコノコでかけたら、いやオドロキ」

いつものように、院主さんに命令通りに奉仕して、看護夫として使用され、いいかげんクタクタのところへ、お弟子さん（リウコといた）が登場してきたというのだ。

「院主センセとタッグマッチした、リウコさんの扱いかたっているのが、モーレッツですね」

彼女のほうが院主よりも大きく、白いゆたかなヒップだったそうである。

「それがね、いきなり、でかいヤツを一発ブ

ッパナシで、あいさつがわりよ、っていつて笑うんですよ」

ああ、花も恥じらう二十のおとめが、いかに相手は便器商売とはいえ、かりにも初対面の男の顔面へ一発ひかけるとはねえ。

「初対面でこれなんだから、これはとカクゴしたら、案のじょうってえヤツでしてねえ。院主先生でさえ、大きいのは、めったにしようとはなさらなかったのに、リウコさんは、フランクフルトソーセージのような、みごとなのを……」

彼の話しぶりは真に迫ってきた。

「チッ息するかと思いましたが、まったく」目をシロクロして必死にこらえたというが一時は、ほんとうに死ぬかとカクゴしたそうである。

「おまけに、シャワーでしょ」

話のようすでは、このリウコさんなる女性相当なSのようだ。

「で、ここが辛抱のしどころと、夢中で頑張ったんですが、気がついてみると、あぶら汗でビッシヨリ」

このショーバイも楽ではないらしいが、その報酬はふたりぶんの料金一万円、別に出張料が二千元、というから本当のはなしならバ

カにはできない。

「まあ、あんな汚ねえもの相手の命をかけた重労働だけど、一夜の稼ぎが一万二千なら、ちよっとした重役クラスでしょ」

それはその通りだが、リウコさんのお相手をした以後、二、三日は、胸がムカつき、食事もろくにのどを通らなかったそうだから、平均すれば重役クラスが課長クラスに格下げになったのじゃなからうか。

「肉屋の前を通過してフランクフルトをみるとムカムカしちまって」

まあ、ヤプー屋も、せいぜい小さいほうが限度。ソーセージは不快すぎると、河野は、わりかし正直であった。

— ○ —

長距離ドライブのお供というのも多い。

車のなかで、足もとにうずくまるヤプーに満タンを処理させるのは、快的なことに違いないとの理由から、つけ加えた営業科目。

これを通知したら、ある喫茶店主で、三十才、独身のハイミスが早速、月末の集金日にお供をオーダーしてきた。

運転中にもよおしてくると、助手台の床にうずくまってるボクを足で蹴る。それがサイン。以後、彼女とは月二回の定期特約を結ん

でいる。安心感一〇〇パーセントだと、感謝されるとボクも嬉しくなる。

釣船のお供も時々あるようになった。ボクも気がつかなかったのだが、釣船には、原則としてトイレはない。男性なら、舟端で処理もわからないが、女性は、そんな器用なマネはできないから、お客に教えてもらったようなものである。

船尾に、持参のビニール風呂敷でカコイを張り、俄かづくりのトイレの中に、うずくまるのは、便器でなくヤプー自身。

— ○ —

「芸者衆なんかだと平気でやりますが、カタギのおくさんなんかは「ヤダワア」とヒメイをあげます」

そりゃそうだろう。ビニール囲いの中にヤプーが一びき。一般の女性なら、その使いかたを説明されるまでもなく、尻ごみするのがまず普通だろう。

「けど、使い方のコツがわかると、みんな便利ねえとかなんとかいって、いそいそと、用をたしますよ」

そんなものかなあ、と半信半疑で彼の口元を眺めてしまいが、河野は当然だという顔付でつづける。

「ナニ、こっちとしてはショールバイだし、ビールだと思や、なんでもない。けっこう、入るもんですよ」

おのれの胃袋の容量を、こともなげに話題にするのだから、プロに徹したとなると、さすがにすごい。

「まいっちゃうのは、酔っぱらいのお世話ですな」

酔いは、女性を大胆にし、残酷にするようだということは私にもわかるが、顔や手の上にゲロを吐いたり、それも、「モソモソ動いちゃ、出ないよオ」と静止を命ぜられ、まったくの器物と化さなければ、お客さまは満足しないという。

「便器のご用は、紹介また紹介で、すごく忙しいんですが、無制限に受けていたら、カラダがもちません」

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しませんでした。只今、若干在庫がありまので、未入手の向はお早めには是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。
略号『花』 定価五〇〇円

目下、商売カクチョーのために、弟子をさがしているそうである。

「そりゃあ、はじめは好奇心で、やります、なんていいますが、いざ現場に引っぱりだされるや、ボクには、とても」と、くる。小さいほうでさえ、尻込むような弱虫に、リウコさんみたいな、ソーセージの処理なんかできるわけがない。まったく、いまの人間はドラシがないや」

と彼は、妙なところで、ヒフンコーガイするるのであるが、この仕事？ でもまた、人手不足の世情の例外ではないらしい。

ムチャ、縛り、馬、ローソク責めのご注文も、たまにないこともないそうなのだが、お客はワガママで、自身のホネが折れるような厄介なプレイや、血を流したり、痛さをともなうプレイは、いくらヤプーでも、あまりおよびではないらしい」ということである。

「その点、便器奉仕はヒンがよくて、ライブルがなくて、まあ、ボクの独占企業ですわ、いまのところは」

彼はそこで、のみさしのレモンティをグツと干し

「お茶でも冷めると、うまくないですね。ヤプーのお茶も、古い、鮮度のおちたのは全然

ダメ」

うまく落として立ちあがり、「じゃ、約束がありますので、いそいそと出ていった。

ヤプー商売、便器奉仕。

果たして、そんな奇怪なプレイを買う女性がいるのだろうか。

河野は、レジのセールス時代から、巧みなもっともらしい、ウソの上手なおとこであった。

だから「ヤプー商売の告白」といっても、あるいはウソかも？ と思えば、思えなくもない。

客の足もとにひざまずいて、うやうやしく口を開き、拝受するなんて、あり得ることだろうか。

いやいや、真偽は不明なところが多少あつてこそ、人生は楽しいのではないか。

おれもヤプーになってみようか。ふと、そんな妄想にとらわれ、たのめば、どんな望みでもかなえてくれるトルコTの、ハルミちゃんに、久しぶりに会いにいかうか、と、私は伝票片手に立ちあがるのだった。

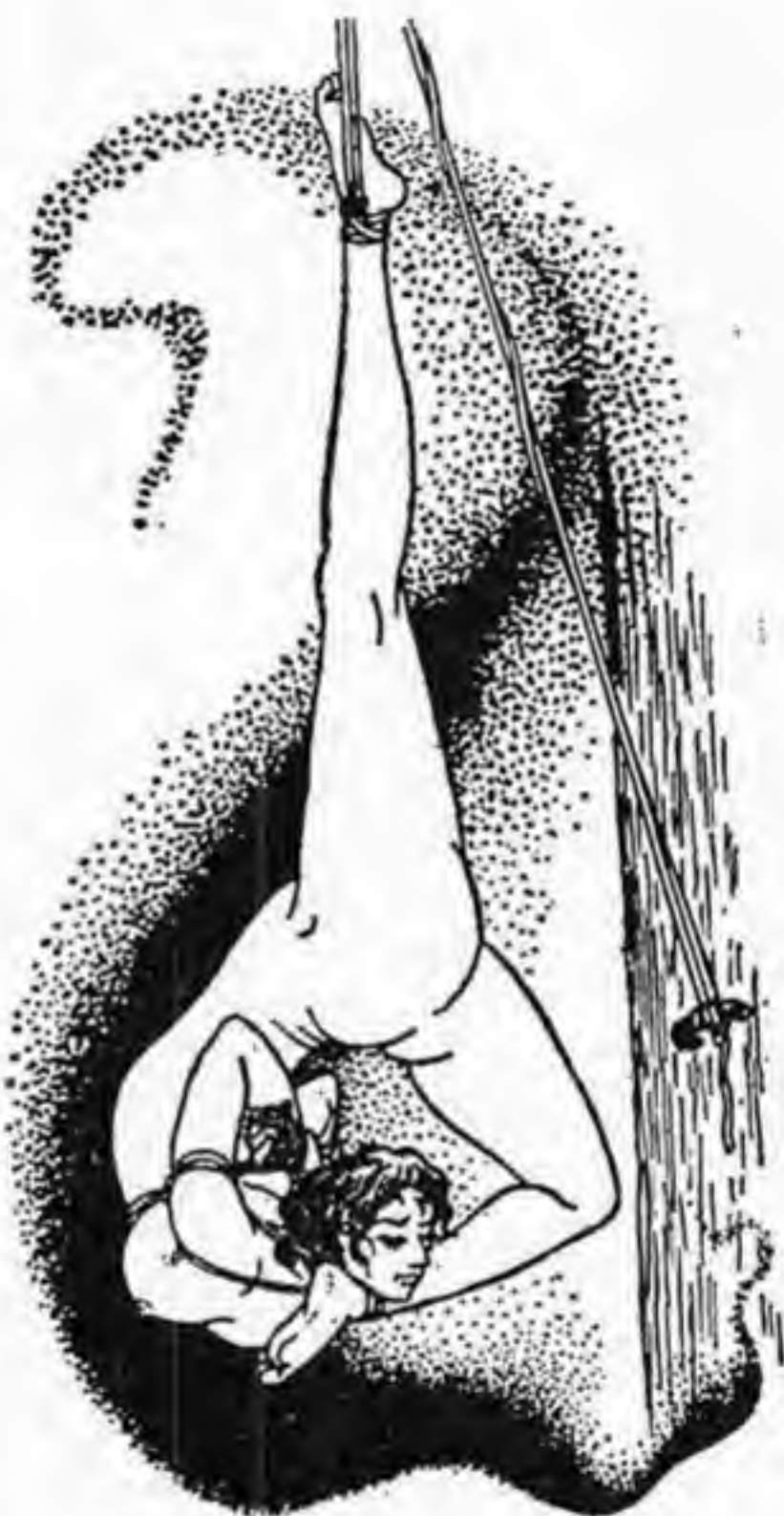
(おわり)

□ 水田真紀子

..... 習作シリーズ □

サーカスの少女

水田 真紀子



うすい肉襦袢とキャルマタ一枚で、この寒い冬のさ中に真剣になって芸をするのも、万一、失敗をして引きあげてこようなものなら、それはそれは恐ろしい折檻が待ちうけているからでございます。

サーカスは、ご存知の通り団長が所有者であり、経営者であり、わたくしたち芸人は、その一座に籍を置いているわけでございますが、わたしの居りました一座は、普通の雇傭関係ではないのでございます。

その一座に飼われていたライオンや象などと一しよで、いわば団長の私有物でございました。

勿論、そこに居る限り、養ってもらって、生活の心配はございませんが、そのためには芸を仕込まれて、それを見せて稼がさるるようなものでございますから、稼ぎが悪いと食事を減らされたり、ぶたれたりされるの

木枯しの吹く境内の広場から、うらさみしいううで何か人の心を引きつけるようなジンの音色が聞こえて参りますと、誰でも、郷愁と幼かった昔を思いだして懐かしいと、よく皆様はおっしゃいますが、玉乗り、空中ブランコ、綱わたりなど、華やかなプログラム

がもり沢山にあつて、見る人の眼をたのしませる私達一座の芸人には、その裏面に、ここまで芸を仕込まれてくる過程に常識では考えられないような、きびしい、そして残酷な練習や、ときには鞭の仕置きによる折檻がくりかえされて参っているのでございます。

サーカスには、ピエロの笑いにさえ、その裏に何かしら一抹の悲しさがあるものでございます。

でございます。

華やかな衣装をつけて、たのしそうに舞台をつとめているようですが、それはあくまで強制された姿態であって、無事につとめないと、あとのお仕置きがこわいからに他なりません。

サーカスには、全然芸人でない人も居ります。皆さん方がサーカス見物にいらっしゃると、木戸のあたりでなんとなくぶらぶらしていたり、舞台の道具をしつらえたりしているあまり人相のよくない、それでいて身体の高くましい男の人たちをきつとごらんになったことでしょうか。

これらの人は、サーカスが次の巡業地へ行ったときの小屋がけや荷物の運搬などの役をもっているのですが、もっとも大きな役割りは、わたくしたちが脱走したりしないか……の見張りであり、なにかのことでお仕置きをするときには、団長に代わってわたしたちをいじめる、とてもこわい人達なのでございます。

わたくしが舞台で勤めております、アクロバットのときでも、傍らについて、ときどき「ヤッ」とかけごえをかけたりにしているのをご存知の方がいらっしゃるかも知れません。

が、その声におびえて、苦しいアクロバットを演じているわたくしの辛い気持の中を知っておられる方は、少ないのではないかと思うのでございます。

わたくしたちは、無事に持番を終って引っこんでも、すぐプログラムを持たされたりなんかして、客席へ売りにだされるときもございます。

タイツ姿のまま、身体の高ぶしの痛むのも忘れて、一生懸命に売って歩きますが、売れ方が少ないといって鞭でぶたれたときもでございます。

でも、それらのことはごくさいなことでして、ときには何の理由もなく、ただ団長やこれらの男の人の気分だけで遊びの対象にされ、責められたり、恥かしい思いをさせられたことも、何度あるかも知らないのでございます。

皆様方は、わたくし達のことを人買いにさらわれてきてサーカスに売られてきたのであらうと、信じて居られる方が少なくないと存じますが、事実、このわたくしも小学校を出たばかりで、このサーカスに買われてきた者でございます。

勿論、最初からサーカスに売られてこられ

るのなら途中で逃げだしていたかも知れません。が、東京の大きな工場へ働きにいかされるのだという言葉を信じて、人買いにつれてこられたのでございます。

その人が果して、わたくしの身代金としていくら母に渡したか知りませんが、わたくしの母は、そのとき二度目の義母であって、家にいても何かと辛いことばかりでしたので、その義母の手許をはなれて東京へ働きに出られるということに夢をもち、むしろ幼心に喜んでいたのでございましたが、こんなにひどい運命に入ってしまうことになったのは、よくわたくしは星まわりが悪かったのでございましょう。

忘れもいたしません。始めてこのサーカスにつれてこられたのは、九段で小屋がけしているときでございました。

皆さんはサーカスの楽屋うらが、どこにあるかご存知でしょうか？ 木戸の二階でジンをタをならしているところをご存知でございましょう。あのならびに、どちらからもテントで囲まれて、人眼にふれないところがあるのでございます。

急な丸木で組んだ、はしごのような階段を上りきったところが団員の化粧や着付けをす

る楽屋でございます。

その一番奥に、団長のいる部屋のような仕切りがございまして、わたしはそこへ連れてこられました。団長は私の身体を上から下まで、じっと見つめてから、

「うん、こりゃあ上玉だ」

何かそんな意味のことを言ったようでございましたが、わたくしは、そのこわい眼でみつめられるのが恐ろしくて小さくなっていました、

「裸になってごらん」

と、急に言われて、とび上ったものでございました。

結局小さなわたしの抵抗ではどうしようもなく、たった一枚きりのセーラー服を手どりで足どりしてはがされて、ズロース一枚の裸にされて、立たされたり、横を向かされたりいたしました。

裸にされた恥ずかしさというより、もう、ただこわくって泣き出して逃げだそうと必死にもがいたものでございますが、

「おとなしくさせろッ」

団長の一声に、わたくしは、汚い布切れを口の中へいれられて、さるぐつわをされ、両手をうしろにまわされて、しばられてしまっ

たのでございます。

さるぐつわなどをされたのは勿論、しばらくしたのも初めてでございますから、どんなにされるのかこわくって、それきりすくんでしまったものでございます。

そこでわたくしは、はじめてサーカスに売られてきたことを知り、もう泣いても笑っても、この運命から逃げられないのを覚えたのでございます。

いえ、ただ言われただけなら、いくらわたくしでも、素直に聞けなかったかも知れませんが。しかし、すぐあとで、この眼ではっきり見た光景に、到底容易なことで逃がれられない運命を悟ったのでございます。

「団長！ このあま、またヘマをやらかしちまったんで」

その声とともに、荒々しく一人の少女が突きとばされるように転がされて参ったのでございます。

その少女は、しばらくして坐らされているわたくしの身体に倒れかかりそうになり、驚いてわたくしをみつめました、その瞳のつぶらな視線は、今でもハッキリ思い出すことができます。

「ごめんなさい。今度から決して間違いませ

んから」

その少女は、拝むように何度も哀願を始めましたが、

「少し可愛がってやるんだな」

団長はにべもなく言うと、わたくしの方を向いて、

「いいかい、言うことをきかないと、お前もこんな目にあうんだぞ」

少しニヤッと笑って

「よく見ておくんだな」

まるで何事もない調子でしたので、わたくしはジッとして居りましたが、その少女はそのつぶらな瞳にありありと恐怖の色をうかべて、やがてポロッと涙を落としたのでございました。

少女は薄い肌襦袢の上にキラキラと模様の入った海水着のようなものをまとっただけでしたが、涙をうかべながら立ち上ると、団長や男たちのいる前で、その衣装を脱ぎ始めたのでございます。

美しい水着のようなものを器用に足首から落とすと、うすい肉色の肌襦袢を首のところから外してシャツを脱ぐように両手をぬきとって下へずりさげたのでございましたが、あらわになったその上半身の素肌をみるなり、

わたくしは、

「アッ!!」

と驚きの声を上げてしまったのでございます。白い肌の二の腕や背にかけて、無数の細い筋目のあざがついているのが見えたのでございませう。それが鞭のあとだということにすぐ分かりました。

「よし、脱ぐのはそこまでいいから、すぐ始めるんだな」

その声に少女はハッとなって、脱ぐ動作をやめて、あわてて両手を前につき出してそろえたのでございます。

少女をつれてきた男は、ごく普通のことでもするように、その手首を組ませると、太いロープで器用にくりつけ、そのロープの端を頭の上の、小屋の骨ぐみになっている丸太の一本に投げかけて、ぐいぐい引きしぼっていったのでございます。

少女は両手首を思いきり頭の上に伸ばした格好になり、なおもロープをひかれますと、つまさきが床から離れて完全に宙吊りにされてしまったのでございます。

そうして置いて男はロープの端を、もどらないように近くの丸太にしばりつけたのでございませう。宙吊りにされた少女の身体はゆ

っくり空間で廻って、わたくしの方に正面が向いたのでございます。裸にされた上半身の胸にも、乳房のところにも、無数の鞭のあとが見受けられました。

わたくしは、あまりのその痛々しい有様に思わず顔をそむけたのでございますが、

「見るんだよ」

団長の声が入ってパシッといきなり頬をぶたれたのでした。痛さより恐ろしさに慄え上ってしまい、もう顔をそむけることもできず、いわれるままに哀れな少女に視線を移したのでございます。

少女は吊るされてから、男の手で肉色の肌を着をすっかり脱がされ、短い布切れのズロース一枚の素裸にされましたが、すらりと伸びたふとももにも、赤いあざがいっぱいございました。

少女は、そんなにされても一と言もいわず観念したかのように、じっとうなだれて吊られて居りましたが、間もなくその素肌に鞭があてられ始めると、

「うッ」

そのたびに小さな、おし殺したようなうめき声をあげていったのでございます。

むしろ、鞭の音の方が大きくひびいて

「パシッ」

と少女の素肌にうちおろされると、柔らかな肌にたちまち赤くあとが走って

「うッ」

苦痛をこらえる少女の悲鳴があがるのでございますが、努めてその声をきかせまいと無理をしているようなものが、わたくしにもよく分かりました。

ピシッ、ピシッ

男の鞭は容赦なく少女の裸身に鳴って、その度に少女のからだは左右に舞い

「ウウッ」

という声が、もう辛抱しきれないようになったのか、少し大きくきこえだすと、

「さるぐつわをいれるんだな」

団長は下から見上げながら、冷然とそれを見ていたのでございます。

私は鞭が鳴るたびに、恰も、この身が鞭うたれるかのような錯覚がして、無意識に眼をまたたいては、慄える体を、すくませていたようでございます。

少女はそこでしばらく鞭うちから休まされましたが、それは、男がさるぐつわをかませるためにどうしても必要な中休みで、鞭音のしなかったのはその間だけのことであり、少

女はさるぐつわをかまされると、また、それからやり直しのよう、何回もぶたれたのでございます。

何と哀れなことでございましょう。少女は自分の身につけていた短いズロースで、さるぐつわをされたのでございます。これがキャルマタというんだそうなのは、あとになって知りましたが、それを口の中におしこまれてさるぐつわをされたのでございます。

あとはもう一糸まとわぬ全裸でございました。宙吊りでは体をかくしもできず、少女はさぞ恥しかったことでございましょう。

しかし、わたくしは見るとはなしに少女を見て、少女といっても、私よりいくつも年上の女で、既に完全な娘の年令でしたのに、当然その箇所にあるべきものが、わたくしでさえ最近になってちらほら生えてきているのに全くございませんでした。

子供のときのままの有様で、娘々しくてふくらんでいるだけに余計不思議に思えたのでございます。

ピシッ、ピシッ

激しい音を立てて鳴る鞭は、ときにはその恥かしい股間にまで伸びて、

「むうッ」

ひととき大きなうめきをあげてのけぞる様が、小さなわたしに、とほうもない恐ろしさをみせつけて、とても堪えられない思いをさせる残酷ないじめられ方に、少女の体は宙でとび跳ねるのでございました。

「いいかい」

団長は私の肩をうしろから起こして、その少女の方へ顔をしっかりと向けさせて、

「お前もここから逃げようとしたら、言うことをきかなかつたりしたら、こうやって痛い目にされるんだぜ。まあ、せいぜいよく見ておくんだな」

低い声でしたが、わたくしにはその一言が巖のように、頭の上からのしかかってくるように聞こえ、もうとてもここからは逃げられないという悲しい気持ちにさせられたのでございます。

二

これが、わたくしのサーカスに売られてきた第一日目の出来事でございました。それから二、三日は新入りとしての引き廻しや、内部のしきたりなどを教えられたりして、別にこれといったこともさせられず過ぎてしま

ました。

その間、小屋から出るときは、街の銭湯にゆくときだけでしたけれど、ちゃんとそのときは古株の女座員につれられて、また行きかえりには、恐ろしい男の座員が、それとなく監視しながら行動をともしていたのでございます。

夜になって興業がはねますと、幹部級の人たちは、街の旅館に引きあげましたが、わたくしたち若い女たちや、まだ修業中の者はみんな楽屋に寝泊りをさせられ、こわい男の座員がつきっきりで見張りをして、私たちの逃亡や、外部の人たちがわたくしたちに接するのを監視をしておりました。

わたくしは一番新入りでしたので、特にきびしくされ、なにも叱られることがなかった。毎晩手足をしばられて、ねかされました。しばられたまま寝るということは皆様ご経験ないと存じますが、馴れないとなかなか寝つかれないものでございます。

薄い毛布をかけられて横になっているときも、深夜のサーカスの内部では、うす暗い裸電球の灯りのもとで、まだ、しっかりと芸がでない女たちの、きびしい訓練が続けられていることはご存知ございませんでしょう。

若い女の、気合いのこもったかけ声や、男ののしる声、鞭のピシッと鳴る音、そしてときには苦しそうな悲鳴などが聞こえてきてとてもゆっくり寝つかれたものではございませんでした。

このあいだ、まる裸にされて鞭うたれていた少女も、この中の一人で、残されているはずでございます。

毎晩どんな練習をやらされて、どんな訓練をされているのか、分かりませんでした。が、相当きびしいことをやらされているということは想像できますし、そのうちにわたくしもこの仲間に入れられて、辛い毎日を送らなければならぬことは、火をみるより、明らかでございますから、ただもう恐怖で一ぱいでございます。

そのうちに、わたくしに何をさせるかがきまったのでございましょう。団長に呼ばれて明日から稽古をつけることを言い渡されたのでございます。

わたくしは、綱わたり、足芸、皿まわし、一輪車乗り、お手玉とり、馬上曲芸、空中ぶらんこ、など、もう女座員のする芸の種類もいくらか分かっておりますので、何にまわされるかと、ドキドキして待っていたのでござ

います。が、団長は、またわたくしを裸にして、じろじろ何度もながめていたのち、「お前は、いい身体してるな。それにまだ若いんだから、ひとつアクロバットにまわすかな」

団長にそう言われますと、それがもう決定的で花子という名前がつけられて、それから毎日毎日アクロバットのきびしい訓練をさせられたのでございます。

アクロバットという芸は、ご承知のとおり身体を弓のように曲げたり、両脚を一直線に伸ばしたりする、とても身体を酷使用する芸でございます。

よく世間ではサーカスの女の子は酔をのまされるので、身体があれだけやわらかくなるのだと言われるようでございますが、決してそんなことはございません。

ただもう練習のくり返しによって、あれだけのことが出来るのでございます。それだけに大変でございます。何しろ普通では、とても想像のできない姿態をさせられるのでございますから、並大抵のことではやってゆけません。

それに毎日食事をさせて養っているのだから、一日も早く舞台に出て金をもうけさせな

くてはなりませんので、その練習もきびしいものになって参ります。

そこが一般の訓練と違うところでございまして生やさしいことではなく、鞭でぶったり痛い目にあわせてでも早急に芸を仕込んでゆくのでございます。

初めての日、わたくしは、そのアクロバットの訓練の模様をみせられました。夜の興業が終って、人のいない舞台の片隅で先輩の女が、仕込まれているのをみせられたのでございます。

舞台の上に、小さな机のような台をおいてその上で身体を弓なりに、うしろへ反らせてうんうんうなっているところへ連れてこられたのでございます。

「アッ」

その姿を初めて見たとたん、わたくしは、思わず声をあげました。その女は一糸もつけない全裸のままであつたのでございます。

もう訓練が始まって相当の時間が経っているのでもうございましょう。全身に汗をうかべての演技でございましたが、まる裸のまま、仕込まれているのを見て驚いてしまったのでございます。

「まだまだ。それくらいのことねで音をあげる

やつがあるか。この音が分からないか」

ピシッ！ 傍にいる調教師が床の上に鞭を
ならします。

「ううッ」

その音に改めて力をふりしぼるように女は
身体をつきあげるようにもち上げるのでござ
います。

両脚をふんばったまま身体をうしろへ反ら
せて、両手がかかとのすぐうしろの床につい
て、お腹の皮が張りさけるほど曲っていて、
よくもあんなに身体を逆にまげられるものだ
と感心するのでございますが、まだ男の氣に
入らないのでございましょう、

「もっと手を足の位置まで近づけるんだ」

と、どなっているのでございます。

そしてピシッと鞭をならせますと、女は言
われた通りしようと努力しているらしいので
すが、どうしても、それ以上曲げることが出
来ないようで、ただもう

「う、う、う、う」

と苦しそうな声をあげるばかりでございま
した。

「よし、立て」

調教師の男が、苦虫をかみつぶしたような
顔でいまいましそうに言いますと、女は、や

っと、重心を足の方に移して立とうとしたの
でございしますが、もう力がなかったものか、
そのままひざを折ってつぶれこんでしまった
のでございます。

そのときになって、わたくしは顔を見るこ
とができたので、のぞいてみたのでございま
すが、いつかの日、鞭でめった打ちにされて
いた人でしたので、二度びっくりしたのでご
ざいました。

その少女は台の上からおろされると、板の
床の上に正座させられて、両手を前について
じっと首をうなだれているので、今度は何が
始まるのであらうとみておりますと、それは
お仕置をうけるための姿勢であったのでござ
います。

「もっと、しっかりやれないのか」

男はそんな姿勢でじっとしている背なへ、
持っていた鞭をピシッとふり降ろしたのでご
ざいます。

「ア、アッ」

ぐうッとのけぞって苦痛にゆがんだ顔がも
ち上ります。

それでも逃げようとせず、またうなだれ
ますと、再びピシッと素肌に鞭がとぶのでご
ざいます。

そのたびに赤い筋目が白い肌にくっきりと
描かれてゆくところは、全くこの世の様では
ございません。

しばらく鞭にうたれてから、また台の上に
あがらされて練習を続けさせられるのでござ
います。

しかし、もう、くたびれ切った肉体はいう
ことをきかず、ましてあんなにぶたれて痛い
目にあわされている身の、なんで満足な演技
ができるものでございましょう。

あぐくの果てに言うことをきかないと言っ
て、ぐったりとなった身体を後手にくくって
足首も一しょにして、そのロープを天井の丸
太に吊るすのでございます。

弓なりに反らされた身体が、背の高さまで
つり上げられると、まる裸にされているだけ
に余計にみじめで、あまりのはげしい仕込み
方に、もう、わたくしは身をすくめて震えだ
していたのでございました。

三

「今度の新入りはお前か」

調教師のガラガラした眼がふり向きますと
もうわたくしは恐ろしくて坐り込んで両手で

顔を蔽っていたと思いますが、そんなことで許してくれるものではございません。

着ているものを脱がされると、ズロースだけの裸にさせられて

「身体を前に曲げてみる」

「うしろへ出来るだけ反ってみろ」

「思いきり股をひろげてみる」

色々な姿勢をとらされたのでございます。

「うん、お前の身体は柔らかさうだ。年はいくつだ」

わたくしが答えると、

「うん、こいつより五つも若い。それにお前の身体の線はいい。名をつけてもらったか？花子か。いい名だな。よし」

そのまま台の上につれてこられますと、仰向けに脚をそろえて寝かされます。わたくしはどんなにされるのかと思うと、こわくてなりませんでした。

「手のひらを頭のうしろで組むんだ」

そういいながら、わたくしの足首のところを止め金のようなもので台に固定したようでございます。

「そのまま上半身を起こしてみろ」

身体を起こしますと、果して私の伸ばしている足首は台の端のところに仕かけてある金

属製の環に入れられているのでございます。

「これは腹筋を鍛えるための練習だ。何回もくり返すんだナ」

しかし、わたくしは十回と続けますと、もう身体が痛くてなりません。男はじっとみつめて居りますので、何とかして続けようとがんばってみるのでございますが、思うように参りません。

「よし、はじめてだから、それくらいでいいだろう。今度はだナ」

言われる通り新しいことをさせられてゆくのでございます。

次にさせられましたことは、自分の足首をつかんで上半身を出来るだけ前に倒すことでございます。

「ひざを曲げるんじゃない。もっと前に身体を倒すんだ」

これも限度をこえて曲げてゆくのは苦しいものでございます。そのうちに傍で吊られたままになっていた女の、ぐっというような悲鳴がきこえて参りました。

それをきくと男はあわててとんでいったのでございます。ロープをゆるめて女を床の上におろしてしま

そのとき、うしろ手に吊られていた身体は

さきほどより一層お腹のところで曲って、折れるんじゃないだろうかと思われるほどの角度になってるのが、ちらりと見うけられましてびっくりしてしまいました。

自分自身の体重が、自分の身を責める結果になったからでございます。痛々しい曲がりようでございました。

床におろされると、ぐったりと気を失ったかのようになっていますので、驚いたのでございますが、

「花子！　誰がやめろと言った」

男のするどい声がとんできましたので、あわてて身体を前にかがめてゆく練習を始めました。

「よし。そのまま、俺がやめろというまでぐっと曲げたままでいろ。顔をあげるんじゃない。もっと曲げていけ」

そのままの状態だとめられますと、じっとしてはなりません。ふとももの裏側の筋肉が焼けつくようでございました。

男は床の上に降ろされた少女の傍へしゃがみこんでいるようでございまして、わたくしの横には居りませんでした。それっきり何の音もせず叱りつけてくる声もないかわりにわたくしに顔をあげるとも言わないので、じ

っとしているより他ありません。

きっとまた少女は辛抱できなかったことで鞭でぶたれるのであらうと思っていたのでございますが、しばらく経っても鞭の音がしないのでございます。

おそらく少女は縄も解かれずに、うしろ手と足首をいっしょにくくられたままではございませぬ。

まる裸にされたまま、縛られているはずでございませぬから、どんなにしてもいじめることが出来るはずで、それが何の物音も聞こえてこないのが不思議でございました。

許されて帰ったのかしら？ それにしてもそのような気配もございませんだけに、どうしたのであらうと、いぶかっておりましたが間もなく、

「イヤッ」

今まで気を失っていたとばかり思っていた女の、小さな声がきかれたのでございます。

たしかに「イヤッ」といったように聞こえました。鞭の音もきこえないのに、どんなことをされて折檻をうけているかが分かりません。何かされているのに違いないのでございます。そうでなければ、そんなことは言わないはずでございます。

それにしても男の声がきかれません。わたくしは、どんなにじめられかたをされているのか、その時、見たかったのでございますがもし顔をあげたところを男にみつかる、このわたしがどんな目に合わされるかわかりませんのでそれも出来ず、ただ、じっとしておりますと、そのうちに

「ク、ク、ク、ク」

と、なにか押しころすような女の声がきこえて、参ったのでございます。

わたくしはハッと思いました。やはりあの少女は許されたのではなかったのでございました。その呻き声から、きっと何か折檻されているのに違いなく、手足のロープも解かれていないと思われました。

「ばかめ、早や、ねをあげやがって」

調教師のあざけるような言い方に、どんなことをされて折檻されているか？ 怖いもの見たさで、そっと顔をあげますと、運悪く、彼の視線と合ってしまい、

「誰が、こちらを見ろと言った？」

怖ろしい目つきで、にらまれたのでございます。

ハッとなって、今まで以上に首を曲げて、精いっぱい身体を倒していったのでございませぬ。

すが、その瞬間、チラッと見えた光景は、今でも忘れることは出来ません。

女の子は、やはり手足をしばられたまま身体を反りかえされたまま、大きく左右に両ひざを開かされて、転がっていて、その前に彼がしゃがんでいるのでございます。

赤い鞭のあとが幾筋もついた白い肌の印象が、私の眼に灼きついたのでございます。

四

アクロバットにも色々芸がございませぬ。普通ではトテも考えられないところを曲げたり伸ばしたり、まるで骨や関節がないように、身体を柔らかくするのがアクロバットでございませぬ。

身体をうしろへエビのように曲げる型がございませぬ。立った姿勢で、腰からうしろへ身体を曲げて、両手をうしろの床につける。これが、オーソドックスなもので、一番基本の形でございませぬ。

ところが、ただこれだけの事でも、身体の重心をとるのがなかなかむつかしく、起きあがる時、特に腹筋の力と身体バランスのとおり方がむつかしいので、大変なのでございませぬ。

す。

その上に、身体を反らせたまま、片脚をピ
ンと立てて持ちあげることもやらせられるの
でございます。

もっと高度になると、身体をうしろへ反ら
せていって、自分の両脚の間から、首を前に
だしてゆくこともやらされます。

こうなると、両手のひらと、ひじとで身体
を支えて逆立ちをしてから、前方に下半身を
曲げて行き、足を床におろし、そのまま身体
を起こして立ちあがることなども、できるの
でございます。

また片足をあげて、まっすぐ伸ばしたまま
頭上高く、もちあげたり、両脚を水平に真横
に開いて、ピタリと床にくっつけたりする芸
もございます。

さらにむつかしいことになる、肩の上に
立てた竹の上までのぼって、その先でいろい
ろなアクロバットをやらされたりしてゆく
のでございますが、どの芸をとりましても、き
びしい苦痛をとまなうアクションでございま
す。

それだけに、そこまで仕込まれるまでが、
ほんとうに、毎日血のでも思いの訓練と折檻
のくりかえしでございます。今、考えても、

よくまあここまでできたものと思うのでござい
ます。

覚えが悪いといつては鞭でぶたれ、精もつ
き果てて動作がにぶると責められ、時々食
事もあたえられなかったり、縛られてぐった
りになった身を、玩具にされたり、男たちの遊
びにいやな目に合わされて、ここまでできたも
のでございます。

それに、このサーカスのアクロバットの調
教師は、私たちをいじめるのが、趣味のよう
に見られる男でございました。興奮してくる
と、すぐタイツを脱がせて、まる裸にさせて
訓練をさせるのでございます。

わたくしの居りますような小さなサーカス
では、一人で幾種類もの芸を覚えさせられる
のが当たりまえのようですが、アクロバット
を表芸に仕込まれていたのは私と例の先輩に
あたる少女、有里子さんと二人でございま
した。

有里子さんは途中でアクロバットに変わっ
たので、私が入団した当時は、まだ訓練をつ
づけながら舞台に出はじめていた頃でござい
ました。

ですから、私が基本から仕込まれている時
は、もう相当進んでいたわけでございますが

それでも私といっしょに毎日、脂汗を流し、
鞭でぶたれながら苦しい訓練の明け暮れでご
ざいました。

二人とも程度こそ違いますが、夫々苦しい
姿勢をさせられて、うんうんうなっているの
を、調教師はこれでもか、これでもかという
ようにいじめるのでございます。

わたくしは、まだ年も若かったので興味が
なかったのでございましょうが、有里子さん
は、ちょっとしたことでもすぐ裸にされて、
恥かしい姿のまま、アクロバットをさせられ
ていました。

有里子さんが、そんな姿で腰を反らせたり
両脚を開けさせられたりした時、同性の私でさ
え、見るとはなしに視線が動きますものを、
異性の目の前で、さぞ恥かしい思いで毎日を
送っていたことと、想像いたしますが、サー
カスにいては、こんなことで音をあげていた
のでは到底つとまらないのでございます。

「花子も裸になれ」

最初に言われたときは、とても恥かしくて
ズロースだけは、どうしても、脱ぎしぶって
いたのでございますが、

「そんなことで恥かしがっていちゃあ、仕事
にならねえよ」

と、無理やりに全裸にされると、左右から私の両脚を押しひろげられ、

「いや、いや」

とわめいたら、さるぐつわを入れられ、きれいに剃りおとされたのでございます。

そして、後手に縛られ、楽屋の入口のころの丸太にくくりつけられ、

「恥かしいと言う気がなくなるまで、そうしていな」

と、出入りの団員たちの晒物にされたのでございます。

「おや、早速だね」

「なんだ、まだ子供じゃないか」

などと言われ乍ら、私は裸身をながめられるのでございました。

中には、私の身体にさわったり、今、剃り落とされたばかりの所を手のひらでなでられたりしましたが、女の団員たちは、ただジロリと眺めてゆくだけ……。何もされたりはしませんでしたか、かえってその目つきが、怖かったのを覚えております。楽屋は天井裏のようなところで、小さいので、女の団員たちもそこで化粧をしたり、着更えたりしているのでございますが、みんな平気で、肉襦袢をぬいで、キヤルマタをはきかえております。

若い女たちは皆一様に前をそりあげられているのを、はじめて知りました。

あとで分かったのでございますが、みんな裸にちかいスタイルであり、激しい動きのため、万一、キヤルマタの間から、チラチラしたらいけないのだそうで……。剃られているのだそうでした。

どの子も肉襦袢をぬいで、素肌になると、背やふとももに、赤い鞭のあとがみられ、可哀そうでございました。

私はうなだれて、まだ生まれたままの無キズの素肌を今更のようにいとおしむとともに全裸の恥かしさに、いつまでも馴れてゆけないのを、焦れつくさえてきたのでございます。サーカスに売られてきた以上、このキズひとつない肌のまま居られるわけはございません。

今では、ほら、ごらんのように、鞭でぶたれた跡が、こんなに残っております。一生消えることはございません。この鞭のあとを薄い肉襦袢でかくして、舞台へ出るのですでございます。

ジンタの音楽に合わせて、いろいろ芸をしているサーカスの女の子達は、みんなこうしてムチのあとのついた肌をかくしているのです。

ございますが、ふだん楽屋にいるときや、芸を仕込まれているときなどは、素肌のままでみるだけでも、痛々しい思いでごらんになると思います。

勿論折檻されるときは、素肌にされてからひどいことをされますが、肉襦袢をつければ傷跡がわかりませんので、容赦なくぶつのでございます。まるで、牛か馬をぶつように、女をぶつのでございます。

ぶたれる方はたまりません。ヒイヒイ泣きながら、本能的に芸に打ち込んでゆくようにされるのでございます。あまり悲鳴が大きくテントの外へもれたりするようなときは、さるぐつわをはめられ、ぶたれます。

ひどくぶたれ、身体全体に火がついたようになり、二、三日は夜も寝られない時が、何度もございました。とくに私は、アクロバットを仕込まれましたので、そうでなくてさえ馴れるまでは、身体のふしぶしが痛んで、お恥かしい話ですが、トイレでしゃがめないことまで経験したのでございます。そのうえ毎日のように、鞭でぶたれておりましたので、しばらくは身体のおきどころがございませんでした。

五

最初の訓練は、みんなが一応身につけるような基礎動作、からだを軽くして飛んだりはねたりすることから始まるのでございますが、アクロバットの専門的な訓練に入ってゆきますと、とても厳しく仕込まれるのでございます。膝について、腰に両手をうしろからあてがって、上体をうしろへ反らせていく練習、頭がうしろへつくまで、やらされるのでございます。

両手を前から伸ばして大きくそりかえってゆく練習も、肩がうしろの床につくまでやらされます。

両脚を左右にひろげる練習は、左右の脚が一直線にひろくまでやらされます。まだいろいろございますが、ここまでいくまでには、何カ月かの日数と何百回、いやもう数えきれないくらいぶたれ続けて……できるのですでございます。

「花子、それでも一生懸命やっているのか」

訓練の途中でも、天井の丸太に吊られ、素肌を調教師の気のすむまで鞭打たれ、おろされてからまた、痛む身体を折り曲げてゆくの

は経験のない方にはお分かりいただけぬ苦しみでございます。有里子さんと二人がまる裸にされて仕込まれるときもございました。

ぶたれて、ヒイヒイ言いながら、汗にまみれて、二人とも泣きの涙でやるのでございます。

有里子さんが逆えびになって、大きく太鼓橋のようにそりかえっている上で、私も同じ姿勢をとらされたときもございました。

有里子さんのひざと肩の上に、わたしが体重をあずけて、身体をまげているのですが、下になっている有里子さんの方は、私の重みで苦しくなり、うめき始めますと、

「まだ早い」とピシリと鞭がなります。

そのときの折檻はひどうございました。二人して両手首をくくられてぶら下げられ、両足首もしばられ、同じ高さの丸太にくくりつけられたのでございます。ちょうどお腹が下に向くように、逆に吊りあげられ、手首と足首を重ねるようになるまで引きよせられ、二人とも空中でアクロバットをしているようになったのでございます。

まる裸のままでもございました。二人ともこの姿で鞭うたれたり、やわらかいところをくすぐられたりされました。

「うッ、うッ」

「あッ、いや」

あまり声が高かったのでございましょう、二人ともさるぐつわを入れられたのでございますが、

「有里、花子のをくわえろ」

「花子には有里のものだ」

互いに、さきほどまではいていた下着で、それぞれ口をふさがれ、更に責め続けられたのでございます。

ちがくたびに身体がしわって、自分の体重で、腰のところから、更に角度がついて、痛みが辛抱できないくらいになったとき

「おい、もうそのくらいでやめるんだな」

団長が入ってきて、やっと二人ともおろされたのでございますが、このままで、あとしばらく続けられていたら、恐らく二人とも、どうなっていたか分からなかったと、今でも思うのでございます。

「どうだ、花子は、ものになるかな」

団長が調教師に云っているのを聞きながらわたくしは、それきり気を失っていたようでございます。

気がついたとき、有里子さんは、見えませんでした。

調教師は、わたしをほどくと

「少し休め。しかしこんなことで、ねをあげてちゃ、アクロの芸人たあ云えねえ。俺はきつと、お前をものにしてみせるぜ」

とこわい顔つきでございます。

しばらくして、また痛い体を仕込まれて、やっとその日は、解放されて身体を、ふいたりもみほぐしていると、

「う、う、ううう」

と、苦しさに耐えかねているような、うめき声が出て参ったのでございます。

それは間違いなく、有里子さんの声でございました。

「く、く、く」

もだえ抜いている声まで聞こえるのでございます。

有里子さんは、まだ、いじめられているのであろうかと考えると、それが団長の部屋の方角だけに、不思議でございました。

そのときわたくしは、まだ子供でございましたので、ふかい考えはございませんでしたが、やがて私も身をもって体験させられたことと思ひ合わせて、丁度そのときの有里子さんが、それであったと、あとになって想像できるでございます。

そのころ私は、訓練がすむと、いつもコルセットをしめられて居りました。この晩も男の力で、胴がくびれるほど、ひもをしめつけられたまま寝かされましたが、天井から、吊るされたお仕置のためか、特に痛くって、ねむられませんでしたが、いつになっても、隣の寢床へ帰ってこない有里子さんが気になっていたのかも、知れなかったのでございましたよう。

翌日の、稽古のときの有里子さんは、いっになく、動作がけだるそうでございました。そのためか最初から鞭がとんで泣きながらの訓練をさせられて居ましたが、この日は、早くから、まる裸にされて特に念入りに、調教師が恥かしいポーズの多いアクロバットを殊更にさせているようでございました。

いつも裸にされてからは、股を開いたり、逆回転をさせて足を拡げたりさせる芸をつけて

「恥かしがってる内は上達しねえぞ」

と、よく言われたものでございますが、この日は、意識的に何か有里子さんを、そうさせて、いじめているように見うけられたのでございます。

わたくしが、始めて舞台でつとめた芸は、

セメント樽に身体を二つに折って、お尻の所からすっぽりいれますと、手首と足首が、そろって重なり樽の両端から、お尻と手足の先だけが、見えるだけで、身体がたたんだようになつて、完全に樽に入りこんでしまうようになつて、そのまま足芸の人の足の裏で、クルクルと廻されるという芸でございました。

わたくしは、ただ、じつとしていれられないのでございますが、窮屈な姿勢のまま押し込まれている上にクルクル廻されると、とても苦しいのでございます。肉襦袢をつけて、ピシンのキャルマタをはいて、ウエストの所へ黄色の絹の幅の広い帯のような物を巻いて、結び目を大きく右横に作って、白い足袋をはいたコスチュームが、私の初の衣裳でございました。勿論舞台がはねてからは毎日のように稽古を続けながらの舞台でございましたから、痛む鞭のあとを、笑顔でかくしての出番でございます。

その芸の内に一度失敗したことがございました。始めの内は、緊張しておりましたせいか、毎日無事に舞台を勤めて居りましたのですが、もう相当馴れてから、その日はいつものように、足で持ち上げられてクルクル廻されている内に、目まいがして思わず身体をち

ぢめたので、お尻の部分が、ズルツといくらか樽から抜けてしまったのでございます。

足芸は、ご承知のようにバランスの芸で、ございますから、そのために重心がくるったので、私が入ったまま樽が足から落ちたのでございます。

落ちたと申しましても、いつも、その芸の時は、左右に裏方の男の人が万一のときのために、ついて居りますので、途中で支えられましたが、とにかく芸が一時中断されたのは事実でございます。

楽屋へ帰ってから、足芸の方に、その方も女の方でしたが、

「よくもあたしの芸に、ケチを付けたわね。花子ッ」

すごい権幕で叱られ、すぐにその場でお仕置を受けたのでございます。

「衣装をおとり……………」

肉襦袢を脱がされると、わたくしは、うしろ手に括られたのでございます。その上、すっかり裸にされ、ひざまずかされて顔を前の床に、ねじつけられ、お尻を上にもち上げるようにさせられますと、平手でバシ、バシ、ぶたれたのでございます。

鞭のように突きさすような痛さはございま

せんでしたが、裸のままのお尻を一面に、ぶたれ始めますと、ヒクヒクしてまいります。

「もうかんにんして下さい」

声をこらして哀願しましたが、楽屋で、皆が見ているので、とても恥かしゅうございしました。さんざんぶたれたあとで、

「花子はアクロバット、だからこのくらいの事は出来るだろう」

と、云って、私の入っていた樽を背中へ、背負うように、うしろ手と足首をひとつに、くくられたものでございますから、樽の丸みにそって、私の身体が反ったまま、動けなくされてしまったのでございます。

そして私の身体を上に向けたまま、放って置かれたものですから、皆に恥かしい姿を晒されることになってしまいました。楽屋には男の団員も入ってこられますから、

「誰だい、こんなあられもない恰好を見せつけて……。おや花子かい。罪だぜ——」

とか何とか云っては、お腹や太股をくすぐられたりしましたので、たまらない思いをいたしました。やはり女は女の一番辛い所を、よく知っているのでございます。

しかし、こんな辛いことや、苦しい事を、くり返している内に、私も次第に芸を覚えて

行き、いろいろむつかしい事が出来るようになって参りました。年が若かったせいか、先輩の、有里子さんよりも、アクロバットの上では、私の方が、上達致しましたのでございます。

立ったまま、身体をそらせて、開いた両足の間から、顔を正面に向けるまで、曲ることも出来るようになりました。

片足を、後ろから、肩の上へ、かつぎ上げる事も、両脚を前後左右にびったりと伸ばしたまま、床に付けるようになっていたのでございます。

せまい台の上に立って、体を後へ曲げて、手の平で、自分の足首を、つかめるようにもなり、足首のすぐ後へ手をついて、そのまま逆立ちに移る事も出来る迄になっていたのでございます。

私の身体も、いつの間にか、胸もふくらみ脂肪も付いて、コルセットで仕込まれたウエストは一層腰周りを大きく見せて、ごらんのように、スタイルは、自慢しても、よろしゅうございました。

今では、有里子さんを、サイド役として、このサーカスのアクロバットのスターとしての座を獲得していたのでございます。

哀調を帯びたクラリネットの調べに合わせ、曲げたり伸ばしたりして舞台を勤める事が、面白いと感ずる時さえ出て参りましたがそんな時は有里子さんと、ペアを組んでやって、この私に拍手が多い時でございます。

こんな時は鞭のあとの痛みや、身体のうちずきを、しばし忘れるのでございます。

しかし、アクロバットと云うものは常に、稽古を怠らずに、身体を馴らしておかないと出来るものではございません。従って稽古は毎日のようにやらされましたし、次の段階として、空中ブランコの、フィナーレに、プランコにゆられながら、空中で、アクロバットを見せるという、新しい事を仕込まれて居りましたので、失敗してネットへ落ちたりすると、さんざん鞭でぶたれますし、もう身体中一面に鞭のあとが、消える事はございませんでした。

稽古の時に鞭でぶたれたり痛い目に合わされるのは、サーカスに売られた以上、止む得ない事ではございますが、これだけではないのでございます。本当に皆様がご存知のないサーカスの裏話と云ったものを、こうなったらお話し申し上げますが、決して作り話をしているわけではございませんので、どうかそ

のおつもりでお聞き下さいませ。

サーカスに売られて来た女の子というものは、云わば、馬や虎などの動物と同じで人格などが認められるものではございません。

家畜同様でございますから、団長を始め、幹部の方のなさろうとすることに、決して逆らう事などは出来ないでございます。

私も最初、鞭でぶたれることに、この上ない恐怖を感じて、とても辛うございましたが、毎日、毎日、くりかえされている内に、それが当たり前のことのように馴れてきて、いえ、それはぶたれるとやはり痛うございますのよ。でも、それが運命となると最初のような、恐怖感が、なくなってゆくものでございます。

それと一緒に、サーカスの男の方達は、何かというと、女の子を鞭打ったり、いじめているものですから、それが当たり前になっているのでしよう。別に理由もないのに

「花子、あとで俺所へこい」

などと云われて、稽古が終って、すっかり片付けてから、参りますと、

「手を後へ回せ」

そのまま、くくられて、その方の気のすむまで、鞭うたれたり、縄目の苦しみに、さん

ざんうめかされて、本当に玩具にされたりする事もございます。

そうされても、文句も云えず、されるままに、この身体を提供しなければならぬのでございます。

こんなこともございました。

興業期間が、全部終って明日はテントをたたんで次の興業地へ行くという晩でございました。

意外に成績が良くて団長から、ふるまい酒が出て、一同で小屋の中で酒宴を開いたことがございます。女団員の主だった人は、いいかげんに切り上げて、町の宿舎に帰りましたが、私や有里子さんなど、三、四人の女の子は、このテントが宿舎でございましたので、その席で手伝わされたのでございます。

「花子を遊んでやろう」

と、云い出す方がありまして、私は裸にされて、くくられたのでございます。

「ズロースも、取っちゃうんだぞ」

仕方なく、その宴席の中央にまる裸にされてころがされてしまったのでございます。

酒の席だけに、みだらな笑い声が盛んにとんだり、酔った勢いで、私の身体にさわったりして、中には、無理に私に酒をのませたり

りる方もあって、男の方達の視線の中で、身も世もない思いを、致したのでございます。その内に

「おい、わかめ酒をやろうぜ」

と、云い出す方があって

「わかめがねえのに、わかめ酒で事があるかよォ」

「でもいいや、花子のピチピチした肌は、いいだろうな」

私は何の事だか分かりませんので、どんなにされることかと、気が気でなかったのですが、さいます、そうされだして、始めて知り、あまりのことに驚きましたが、何と云っても恥かしくてたまりません。

「花子、動いちゃ駄目じゃないか」

「もっとひざを合わせろ」

結局は、されるままにじっとこらえていたのですが、男の方が、かわるがわる口を付けて参りますので、とてもたまりませんし、くすぐったいやら、恥かしいやらで、うんうん、うなったものでございます。

そのあと、今度は逆に、思いきり股をひらかされて、両足首を一直線に丸太にしばりつけられたのでございます。

「花子はアクロバットやっているから、こん

な時、都合がいいやな」

そのままのけぞって身動きも出来ずに、くられている全裸の私を皆で酒の肴にしながらドンチャンさわいでいるのでございます。

女の方まで、そんな私を興味深げにのぞいたり、やわらかい所をつまんだりして、

「お酒でベトベトじゃない？ 誰か、なめてやんなさいよ。まあいいわね、花子ったら」

そんなにされても先輩の方だと、私はどうすることも出来ず、ただ、うめくばかりでございました。

もう一つ、申し上げましょうか。

ご存知の通り、サーカスの興業は、香具師仲間のわたりによって興業するのでございますから、巡業先ごとに、その土地のボスに挨拶を通したり一席設けることがございます。

そんなときに、その座興によく出されることがございまして、座員の若い女の子達は誰でもこの経験はあるものでございますが、私は特に、アクロバットが出来るものでございますから、よく連れ出されたものでございます。

そんな時には、そのお座敷で親分さん方の前で、アクロバットを演じて、ご気嫌をとり結ぶ道具に使われるのでございます。

舞台とちがって、お座敷で眼のあたり、女が身をくねらせるのを見れば、どんなむつかしい親分方でも、悪い感じは、しないのでございましょう。

「うん、この子はいいい身体してる」

「きれいな女の子が、いるんだねえ」

「ほう、こんなに身体が曲るものかね」

たいてい眼を細くして喜んで居られるようですが、ときには団長の命令でまる裸のまま演じなければならぬときもあるのでございます。

いくら身体の線を見せることに馴れて居りましても、こんなお座敷で外部の方に、あます所なく裸身を見せるのは、恥かしいものでございます。

それも、アクロバットを演じなければなりませんので、あからさまに見せつけることになり、特にたまらなくなるのでございます。

今では全国殆どの所を廻りましたので、各地の親分の前でお相手をして参りました。

中には変わった方もございまして私の身体を責めさせてくれ、といわれるのがございます。そんなときは、あらかじめ団長から因果をふくめられて参るのでございますが、私自身をしばる紐や、この身を痛めつける鞭を携

さえて、その席へ行かなければならない、この身をお察し下さいまし。

しかし、私を裸にしてみても全身に赤い筋目を残す鞭のあとをみて、驚いてしまう方が多いのでございますが、一度だけひどい目に合わされたことがございました。

九州の巡業先でございます。

裸になった私をみて

「フン、いじめ甲斐のある女バイ」

かえって興奮されたようでございました。

うしろ手にきつくしばりつけ、この腕を胸から幾重にもギュッと、縄をまかれましたときは、あまりの苦しさ思わずうめいたものでございます。

「よかトネ、この鞭を使っても」

私を送って来た団員が

「いいですよ、肉襦袢と云うものを着せて出しますから、鞭のあとは分かりません」

と答えますと、うなずいて

「この子は、たしかアクロバットば、するト聞いちゃったが、無理な姿勢ば出来るトネ」

私を押し倒すと、うつ伏せにして両足首を組ませて、別の縄でくくりつけますと、その足首を持ち上げ後へ曲げようとし始めたのでございます。

足首がそのまま俯伏せにされた私の頭まで届きますと、

「これは見事バイ」

嬉しそうな声で呻くように言いました。

私は足首を交叉させられて、くぐられていましたので、ひざがどうしても割れ、腰部が真上に向き直ったのでございます。

「おや、この子は、かわらけバイ？」

「いえ、サーカスの女はみんな剃ってるものですから」

団員が説明しますと

「ほう？ 剃るトネ？」

興味深げに、のぞいているようなのでございます。

それは珍しいことでございましょう。まして男の方にとりましては、はっきりと素肌が見えますので、殊更に興味があるものか、今度は、前かがみにさせて顔を両脚の間に押し込んで足首を首の後で結んで仰向けにねかせたり、両脚を思いきり開かせてみたりなさいました。

私は、まる裸でうしろ手にぎっしりくられたままの姿で、あとからあとから恥かしいポーズで無理矢理アクロバットをさせられたのでございます。

その方は、私の身体が自由自在に曲りますので面白がって、しばらくはそんなことばかりなさって、座敷の中で私はあちらこちらところがされたのでございます。

そんなにされている内に胸をしばりつけた縄が次第に肉に喰いこんできて

「ウーン、ウッ」

知らず知らずの内にうめいていたので

「親方、あまりそんな声が外へもれるってえと工合が悪いんで——」

団員の方が注意されましたので、私は、はッとなって息をこらしたものです。

「なるほど、そげんことバ、うっかりしちゃったと。どうすりゃよかと」

結局さるぐつわを、いれられたのでございます。

そうして置いて、私は胸へ回した縄から今度は別のロープで身体をたてにくぐられたのでございます。

私は、このとき始めてこんなしばらく方をいたしました。

横で見ていた団員の方が、この縛り方を覚えて帰ったので、その後は、そんな縛られ方は何度も経験致しましたが、この時は、私も驚いたのでございます。何しろ、股をぐうッ

と吊りあげられるようにロープをかけられ、その上にロープには結び目をいくつも作ってあったのでございます。

そして、その格好で座敷の中を歩かされたのでございます。

歩き始めますと、この結び玉がクリックリッとかすれて素肌に痛く、思わず身をかめますと、

ピシッ！

始めて、うしろから鞭うたれました。

「う、うッ」

その痛さに身を反らせて歩き出すのでござ

います。

何度も何度も座敷の中を廻らされて、鞭うたれたのでございます。歩かされる内に次第に激しく、その結び玉が、この身をいじめつけてくるのでございます。

そのたびに鞭でぶたれて私は全身ぐっしょりと脂汗が、にじみ出てきたのを覚えて居ますが、こんな責められ方をしたのは始めてでございました。

あとになって、舞台の生活にもどってから、しばらくのあいだは、結び玉にいじめられた所が痛くって、たまらなかったものでござ

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能の絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下さい。折返ししお返事差し上げます。

ございます。

まあ、ずい分と長い間、おしゃべりをしたものでございますわね。

まだまだ、いろんな体験がございしますが、中にはとても、私の口からは云えないようなひどい事をされたこともございます。しかし今まで申し上げましたことは、皆この身で体験したことの一部でございまして、うそではございません。

ほら、ごらん下さいまし。この腕にも、こんなに鞭の痕がございすでしょう。背中もお見せ致しますわ。ね、一面、赤い筋目が入っているでございましょう。

太股もこんなに。ですから、少しくらいのことでは音をあげません。じっと辛抱できるつもりでございす。

さあ、くくってもよろしゅうございす。

裸が、この私の裸が、ごらんになりたければ全部はぎ取って下さいまし。ここに鞭も持ってきて居りますわ。勿論、ぶってもかまいませんのよ。女の肌って、とってもいい音がするものですよ。

ぶってごらんになりませんか？ さあ、好きなようになさって下さいまし。



或る交換プレイの記録

野間文生

静かな昏れゆく山峡の宿。

ベランダの藤椅子に腰を下ろすと湯上りの肌に河面を渡ってきた風が心地よく浴衣の汗を冷やす。

傍の妻が手摺りに寄りかかって昏れなすむ遠くの山々に目をやるとまま、期待と不安の入り交じった面持ちでいるのが、いとおしい程のいじらしさを感じる。

そんなセンチメンタルな気分を破るように、「ゴメン下さい。お客様がお着きになりました」という番頭の声がした。途端、恥じら

いと昂ぶりが全身を包む。番頭の後から瘦せぎすのK氏とポツチャリとしたK夫人が姿を現わす。初対面の挨拶もそこそこに風呂をすすめ傍の妻を見やると妻も心なしか相手の夫婦を見てはった様な表情がうかがわれる。風呂から上りビールを飲み雑談

の裡にお互いの近況を語りあい少しうちとけた頃に食事の仕度が出来たのを機に女中は、お願いしますと立ち去る。ここでめいめいの奴隷を交換して食事をとる。互いに相手を意識してギョチない仕草で食事をする。

それでも食事の終る頃には軽いキッスや袖の八ツ口から手を入れてサクランボをつまんだりする程度になったが、女中の来るのを意識してかそれ以上には進まない。食事が終わったのを電話して散歩に出る。二組は適当に離れて浮気

旅行の気分を満喫して宿に帰る。別々の室に夜具の仕度がしてあったが一室に集まりお茶を飲む。では、とK氏が立ち上って錠を掛けに行っただけでバッグから小道具を取り出しK夫人を抱き上げて片側の蒲団の上におろしキスをしな

がら帯を解く。浴衣の下から純白のレースに点々とピンクの水玉が散っているパンティがむっちりした太股に喰い込んでいた。

横を向くとあちらでも早や妻のパンティが膝頭まで下っている。

先ず細引きで乳房の上下をキツク縛ると、掌に余る程の乳房は痛々しく盛上る。後手に緊縛して仰臥させ両肢は上に屈曲したまま左右の肘を通して開股させ早速剃毛にかかる。夫の目の前でこの様な格好で剃毛されるのが余程恥しいのか内股がピクピク慄えている。

そととK氏の方を見ると、K夫人より浅黒い妻のそのあたりが白々と息づき下腹がピクンピクンと波打ち、剃毛も終りに近くアヌスのあたりにかかっていた。

浴室から濡タオルを持ってきて清拭し、しみじみとK夫人を眺めた上、妻の方を見やると妻の途まどった様な目につかる。

K夫人を抱き起こしコーラを飲ませると夫を意識してか、辱かしそうにしているの、ムッチリした乳房を驚嘆みにすると、ムツと言ふなり額をのけぞらせる。

K氏も負けじと私の妻の臀部に平手打ちを加えている。二人の女性の押し殺したあえぎが夜のしじ

まに低くこだまする。かくしてお互いにエスカレートして、K夫人の白くふくよかな尻には赤黒いミズ脹れが縦横に走り、室内には陰微な香りさえ漂いはじめる。

私の妻はK氏から蠟燭責めにあって呻いている。時々私の方をうかがういじらしさはえもいわれず内股から花芯にかけて、K氏の手にした火のついた蠟燭から熱蠟がしたたり落ちる。一瞬、肉体は熱さとよろこびに打ちふるえる。

かくして十二時頃、別々の室に引き上げ私はK夫人を風呂に入れた。児童の様なヴィナスの丘とアヌスを奇麗に洗い裸のまま夜具に横たえる。吸っては噛み撫でては叩き、K夫人を天国と地獄を行き来させることにより、心身共にくたになり夫の影を追い出す事が出来た所で始めて抱き寄せて果てた。午後三時、約束通りK夫人は浴衣をまとうと夫の許へ帰って行った。入れ替りに妻がスツと寝床に入ってくるなり無言で抱きついてきた。

始めての経験と刺戟にぐったりとして涙さえ流している。K夫人も今頃は同じ様にK氏に抱きついていてことだろうと思った。

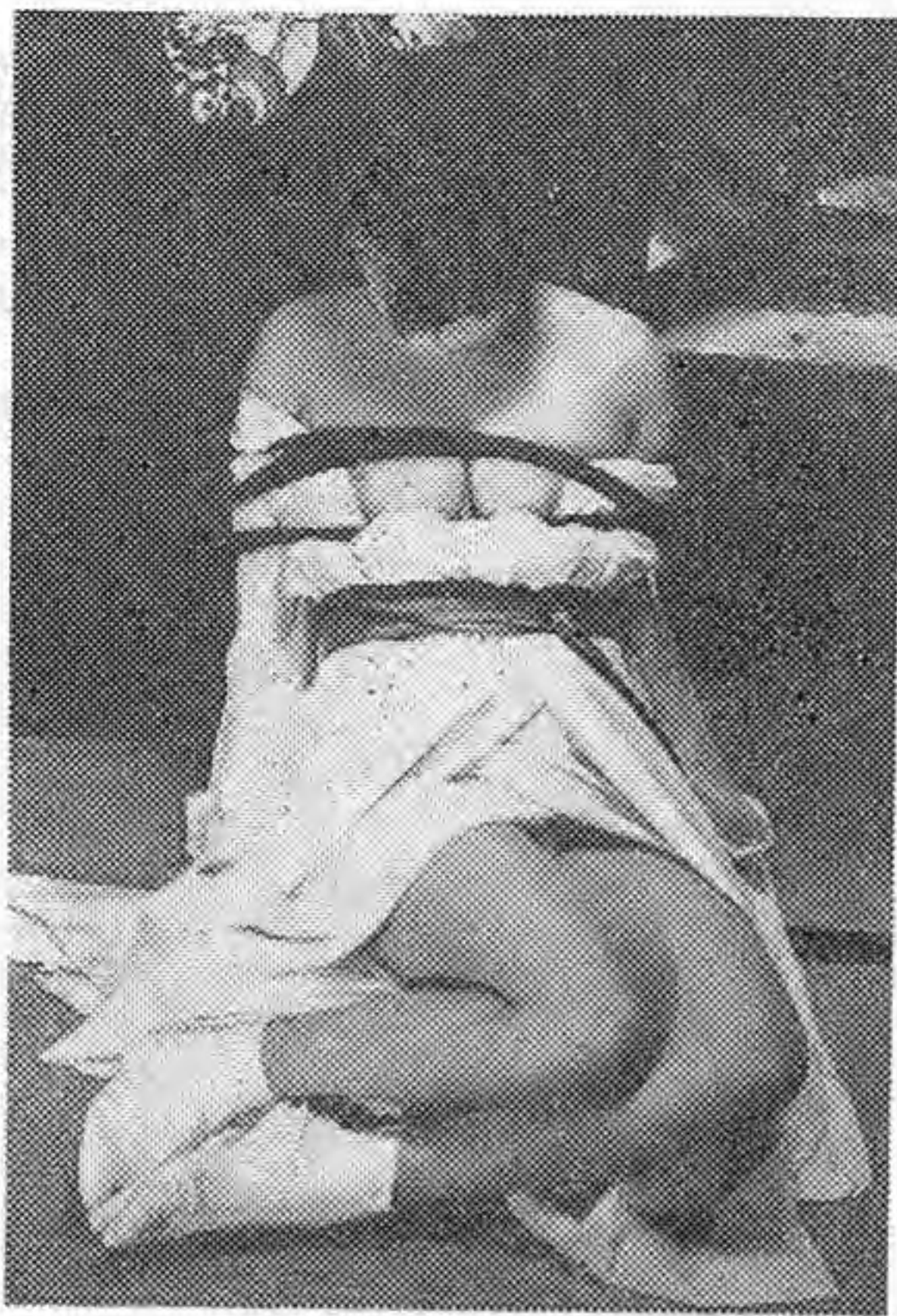
(カット絵・あらい・かず)

充実してきたM派小説

麻 曾 比 須 人

八月号を手にして、まずM派小説の充実ぶりを非常に嬉しく思った。とくに「M派交友録」の本村氏を凌辱する倉田夫人の様子が、鬼山氏の麗筆によって展開される

愛妻の緊縛写真 和歌山 K生



私達は結婚して六年になる至極平凡な夫婦でございます。時々妻を縛って写真撮影などをして楽しんでおります。最近、誌上に発表

される方も沢山おられますので、一つ私達も思っ、つまらぬ写真ですが同封しましたので、もしよろしかったら掲載して下さい。

してやった”シーンは鬼山氏が直接見たのではなく、倉田夫人から聞いた話になっていたので、やや、直接的描写より迫力がなく残念な気がしたが、あの時の様子は、ウーッて吠えていた”という倉田夫人の話から、その時の本村氏の感激の度合いが、察しられるようであった。今後是非「交友録」を続けてほしいものである。

ついで芳野氏の青春の陥穽「S的な開眼」も、葉子の生い立ちともいうべきもので、葉子がいかにしてS的な女性になったかということ、同氏独特の美しい文で、いや味なく書いてある。マンネリから脱しようとする氏の努力も、それなりに成功しているように思う。特にM派好みの場面が多かったのも気に入った次第である。

このほか「壺中の園」「紫の世界」SMをからみた「反逆の罌」など、それなりに変わった味があり、今後が楽しまれる。また、辻村氏のカメラ・ハント「むら子恋狂い」は、またまた七月号につづいて、Sの旗頭として自他ともに許す(?)辻村氏が、Mの境地を描いているのは敬服してしまつた。前月ではネクタールを浴び、八月号では、トイレットペーパー

の代りになって奉仕するという、これまでにない辻村氏の一面を見たように、SMの深さというか、共通性というか、この世界の不思議さに、おどろいたのである。

写真も、読者投稿のものの中によいものがふえている。丸木戸砂土氏の「初めて妻を縛って」の写真もなかなか捨て難い味があり、臀部を見せた大橋美代子さんの、「狂い咲く湯の花」、排便を強要されている佐野みさ子さんの「S男性の元へ行きたい」のフォト。どれもそれぞれの良さがあ、グーラビア写真であれば、もっと鮮明なのにと惜しまれるのである。

このほか、三木京助氏の「六つの性欲」は少々難解なのが欠点だが、その努力を認めたい。こうした硬いものも、一篇や、二篇あってもよいと思う。毎月これはいただけにないと思うものも、二、三篇あるが、それは個人の好みによるものなのだから、あえて名前をあげる必要もないと思う。同じS小説でも「花と蛇」のような傑作もあれば、ひとりよがりの、エロ小説にもならないものもある。編集されるのも大変だとは思いますが、その辺を考慮して、取捨選択されんことを切望する次第。



— 第七十六回 —

辻村 隆

七月三十一日附の夕刊に「家出少女から『甘い汁』もぐり芸能プロを摘発」という見出しで報道されたリズエンタープライズという名前の、この芸能プロを牛耳っていたのは、高夏子という二十九才の女性であるが、新聞にもある通り、東映京都撮影所にピンク映画専門のヌードエキストラとして、百五十人近く送りこんでいた彼女を、私はしばしば「責め地獄」の撮影中、見かけたことがある。青白い小柄な男装のスタイルで、いつも撮影の合間、黙ってじっと専属のモデル達の動きをみつめていた。「責め地獄」の冒頭タイトルの女囚集団ハリツケシーン、將軍上覧の刺青競艶のシーン、大黒屋遊女群などが彼女達であったが、

新聞に書いてあるような、十四、五才の未成年の娘はみかけなかった。モデルの一回の出演料一万五千円から、彼女が一万円をピンハネしていたということであるが、あの瘦身の、小柄で無口の女に、そんなスゴ腕があったと知って、今更驚かされる。なかには十四才の家出少女が、強制的にヌードダンサーをさせられたり、芸能関係者に売春行為をさせられていた少女もある、ということだが、私もこのモデル達の何人かは、撮影協力中に縛った覚えもあり、この記事は他人事とは思えなかった。エスカレートしてゆく性愛路線の映画界にあって、こうしたもぐり芸能プロの出現も、社会悪がうんだ産物であろうか。

七月三十一日号「週刊ポスト」

× × ×

に、今週の人として、いよいよ団鬼六氏が登場している。「家畜人ヤプー」より凄いSM作家というキャッチフレーズで、そこは交遊もあり、さてさてどんなことが書かれてあるのかと気になって読んでみる。奇巧の「花と蛇」の文章をしばしば引用し、どちらかという、本人の紹介より「花と蛇」の紹介みたいである。それだけ奇巧が普遍化し、とりあげられるようになったのは嬉しい限りで、鬼六氏の本名や、簡単な略歴も素ッ破抜いているが、殆どは某誌の記者対談のうけうりで、週刊ポスト自体の取材はない。とはいえ彼の名誉のために、さして過誤のないのは結構であった。彼の謂う、純文学や大衆文学に対抗して、SM小説も文学的にまでたかめられて、認められてもいいという雄大な発言は、私も大賛成である。

既に奇巧を母体として誕生した「家畜人ヤプー」が、SM文学として認められつつある現在、こうした特異のジャンルが、単なる刺激一遍倒のものより、文学にまで昂められるところに、大きな将来の課題がありそうである。オール読物新人賞当時の、鬼六氏の連作の小説は、その大半が私小説風でどちらかというと、今は亡き織田作之助氏あたりの作風に近いが、読んで確かに面白いし、一風変わった魅力がある。今や大河小説となつた「花と蛇」が、何年書いてもさして質の落ちないのは、確固たる文学の基礎をふまえて書く彼の過去の素養が、ものをいっているようである。プレイブックス版の「トイレで読む本」という単行本にも「花と蛇」が、スカトロ文学名作選という中に堂々と選ばれて掲載され、京子と美津子が浣腸されて、やくざとズベ公達の前で、羞恥を曝してゆくくだりが抄録されてある。この本、徹頭徹尾、大便小便で、ハルンをのんだり、コートを喰ったりすることが堂々と書かれてある奇妙な本だ。

清水正二郎、野坂昭如、柴山嘉樹、筒井康隆、太宰治、五味康祐、火野葦平、渡辺一夫等の、大・小便取扱い小説、翻訳ものに伍して「花と蛇」ものるようになったのだから、正に一流である。しかし鬼六さん自身、先日会った時の述懐によると、もう「花と蛇」を毎月書きつづけてゆくのが、物語の展開のしようもなく、しんどくて

しんどうとこぼしていた。余りにも有名になった『花と蛇』に、今は鬼六さんの方が振り廻されている恰好である。稿を改めて、新たな構想の下に、畢生のSM大作を書いていただきたいのは、豈私一人の願いのみであろうか。

× × ×

かくいう私、三十九年十一月号の、青木順子さんのカメラ・ハントを皮切りに、もう丸六年間、延々と飽きもせず、SMカメラ・ハント一本を書き続けている。それと、その折々の裏話や、身辺雑事が、この楽我記欄である。大同小異といわれ、マンネリズムと叩かれ、だらだら長いとのしられ乍ら、時にはもうイヤになってやめてしまおうかと思ったり、読者諸賢の反響を気にしたりしてハントモデルに行詰まった時など、もうこれが最後だと思いつつ、ついつい六年間書き続け、ハント女性の数もはや五十人になんなんとしてゐる。虚名が虚名をうんで、まるで一廉のベテラン扱いされ、時によつては緊縛師などと、奇妙な名前まで頂戴して、同好者の方までが私との隔たりを意識して、反って近寄らなくなつたとあつては、今はむしろ、その虚名すら煩わし

い想いにかられるのである。

長女、二女が結婚して私の手許を飛び立ち、長男が会社へ出勤し末娘が高校進学コースでおそくなると、家内と二人きり、夕暮れまで広い我が家でボツネンとしていると、そぞろに身辺の佻しさを覚え、めっきり白髪がふえて来た頭髪を撫でて、もうおじいちゃんと呼ばれるようになった自分自身に、しみじみと哀歎を覚える。虚構とフィクションを織りまぜて、三年半書きつづけた『奇譚三十九夜物語』頃の情熱を取戻して私は私なりに、もう一度、自由奔放のSM小説を書いてみたい気持ちしきりである。

× × ×

昨年のイレブンPMでM男性の耳朶、鼻障子穿孔のモデルとしてフォトがテレビにうつし出された佐々木耳環生より、ひょっこり便りがあり、その文によるとこの処しきりに万国博通いの由。目的は世界各国の美女の耳朶穿孔探求で、既に二十数人の美女の耳の穿孔を発見したという。近頃は芸能人、歌手の中にも、しばしば穿孔してイヤリングをつけている人もあるので、最早、余り珍しくはなくなつてきた。

エキスポ通いの、三回目と六回目に、二十二、三才ぐらいの日本女性が、左腕に、刺青ならぬ、刺紅をしているのを発見し、勿論同一人であつたが、刺紅を二カ所に施しており、大分追跡した模様である。描いたものではなく、近づいてみて、確かに刺してあつたと断言していたが、サイケ調の時代ともなると、これから先、どんな変わったことが起こるのか想像もつかない。佐々木耳環生の穿孔は二十カ所に達し、M七〇生のピアシングも、乳首にローソクが貫通している。何だかコワくなつてくる。

× × ×

八月一日渡部光雄、好美夫妻が子供連れで訪問され、一泊してゆかれた。好美夫人のハントは、別掲の通りであるが、夫婦プレイも一旦火がつくと、もう矢も楯も耐らぬものらしい。子供を早々にねかしつけたあと、午後十時頃より夜を徹してプレイに耽溺したが、私はもう所詮傍観者――。夫婦の愛情は燃えに燃えさかり、私というプレイの理解者の前で、遂に夜の白むまで続いた。しかし、この二人も、やがて夫婦プレイの飽和点に達すると、徐々に冷却してゆ

くのではなからうか。燃えては消え、又燃えた人が現われて次々と夫婦プレイの方は推移してゆく。ハントで書いた夫婦プレイのあの入、この人も、いつしか、去る者は日々に疎しで、年賀の便りぐらいになり果てて行く。燃えに燃えたあとに、しっくりとした相互理解の愛情がこりかたまって、夫婦プレイの人々は皆その後しあわせそうである。相手変われど主変わらずで、延々とSMにうつつをぬかしているのは、外ならぬこの私ぐらいのものではなからうか。その実例は奇巧の投稿にもあきらかである。

× × ×

所詮は一生添れそつて行く男と女であれば、縛るだけ縛り、撮るだけ撮れば、もう情熱はさめ、時にはその気になつても、いつでも行なえるという手近な安易さが、生活や環境に毎日を流されて、いつしか、なおざりになつて行くのであらう。夫婦はそれでいいのかも知れない。偶にエスカレートした夜などプレイしても、日々の生業いは正常そのもの。プレイで相互信頼を深め、よりよき夫婦生活が出来たら、もはや何を好んで秘めごとなど発表する必要があらうか。

雑感 今井博

辻村氏のカメラ・ハントにのぞむ

最近の私が奇ク誌を開く際、まず最初に目をとおすのは、辻村氏のカメラ・ハントをおいて他にない。それほど私は、氏のカメラ・ハントに深い期待と関心を持って読みつづけて来た。いわば私は、辻村氏の大ファンである。

辻村氏のカメラ・ハントは、おとしに似合わず（オツと失礼……）ますます精力的で御同慶にたえないが、ややマンネリのきざしがうかがえるのではなからうか。

勿論、氏の文筆にケチをつける気はないのだが、氏の大ファンをもって任ずる私としては、ここに敢て苦言を呈する次第である。

氏のカメラ・ハントは、いつの場合でも、全裸緊縛、股縛、吊り、パイプレーター、尻打ち……といった場面の描写がつづき、更に写真に至っては全く表情に乏しい（といっても後述する通り、たまに例外もあるが）ものが多い。すでに氏のカメラ・ハントが、奇ク誌に連載されだしてより、かなりの年数をへた今日、御多忙のなかをせっかく御苦勞願うなら、いま一歩つつこんで頂けないものだろうか。

というのは、次の様な点である。

先ず第一に、ハントの対象となつた女性の個性をもっと強くひきだして頂きたい。いちがいにM女性といつても、いろんなタイプがあることは御承知の通り。大別すれば、肉体的苦痛にウェイトをおく者と、精神的苦痛にウェイトをおく者との区別することが出来よう。前者の場合は、強度の緊縛や鞭打ち、ロウ涙責め、吊り責め等に恍惚感をおぼえ、後者は、全裸開股縛り、股縄、浣腸責め、強制排便、剃毛、パイプレーター等、主として羞恥の極限においやられることにより、その被虐感を満足させるタイプである。勿論、M女性たる以上は、この双方の面を併せ持っているわけだが、しかし殆どの場合、そのいずれかにウェイトが傾いているものであり、究極の満足感……つまり恍惚感、その比重の大なる方によって得られるものである。すでに登場したM女性を例にあげれば、肉体被虐型は、関谷夫人、秋山夫人、左近麻里子等がその代表といえようし、また精神的被虐型では、ここ数カ

月前より、さかんにサロン欄でアピールしている佐野みさ子などは好適の人といえよう。

私の浅い経験によつても、前者にウェイトをおくM女性の場合、はては失神にいたるほどの激しい肉体的苦痛をうけることが彼女の悦びのすべてであり、そのあとにパイプレーターや浣腸責めを行う余地のないものであり、敢て行つたとしても、それは単なる後戯以下のもとなつてしまふ。その反対に後者の型の場合、緊縛や軽度の吊りは、羞恥を拡大するための単なる手段であり、鞭打ちやロウ涙責め等の肉体的加虐は受けいれないのが普通である。

ところが、これまでの辻村氏のカメラ・ハントでは、まるで学校の教育課程のように規則正しく、この両者が同一人に対して、総花的に展開されているようだ。その上、氏のカメラ・ハントのモデルとして登場する女性の中にも、まだまだMとはいえない様な女性が、何とはなしの好奇心と、経済的な理由（謝礼金）により辻村氏のお相手をつとめた「自称M女性」が、かなりあったのではないだろうか。従つて辻村氏としても、余り強烈なことはできず、かといつて読者の期待

にこたえるためには、ある程度、総花的にせよ氏の演出による一連のポーズを、カメラに収めざるを得なかったのではないかと思う。

このような女性達の写真からは、全くM女性としての表情がうかがえず、ただヌードモデルに繩をかけた……といった態のものが多くその迫力不足を辻村氏のすぐれた文筆で大いにカバーし、読者の想像力をかりたてて来たもののようである。といつても、たまには真のM女性といえる人達の、ほんとうの被虐の悦びに浸つたすばらしい表情のフォトにお目にかかる。最近では関谷夫人、谷山久美子氏大分前になるが佐々木真弓の棒縛りでの棒責め……等は私の忘れられないものである。

そこで私は一つ、辻村氏にお願いがある。というのは、毎号々々新しい女性によるハントも大いに結構だし、また私自身たのしみでもあるのだが、この際、三カ月に一度位の割で「カメラ・ハント高専科」ともいふべきものを組みこんで頂けないものだろうか。つまり「M入門」の輩ではなく、真のM女性（辻村氏の判断におまかせする）を対象にして、その個性を強くひきだし、その女性が羞恥責

夫婦プレイを

楽しむ

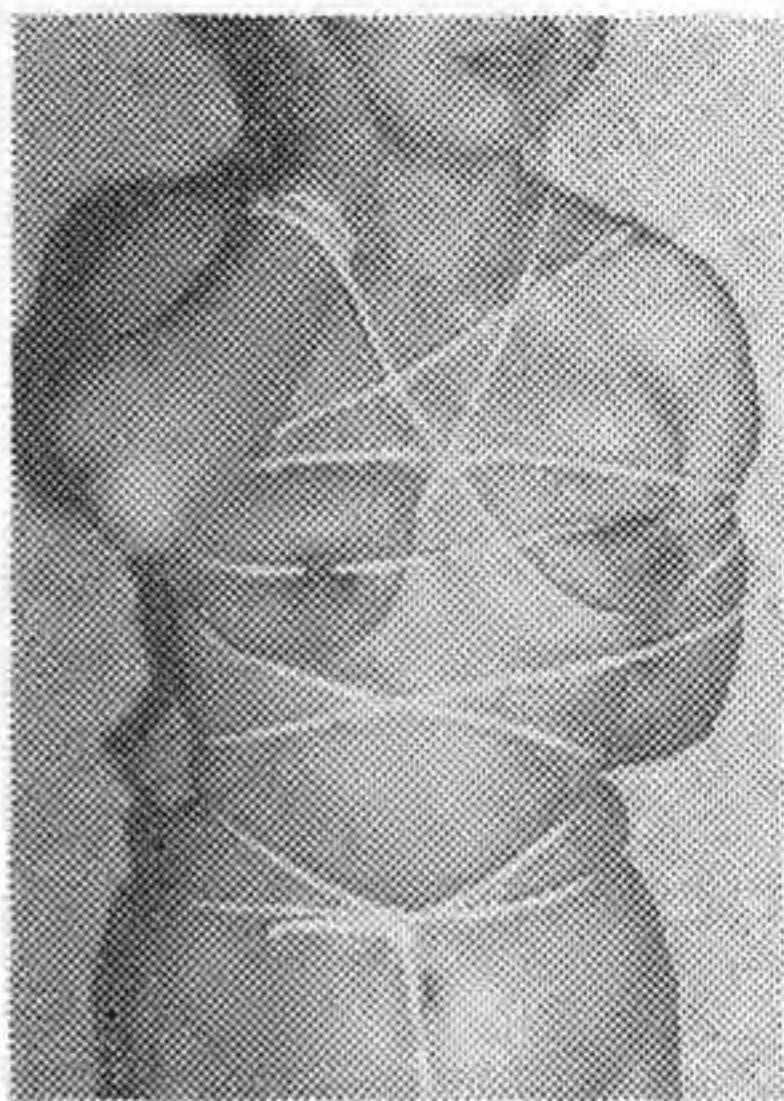
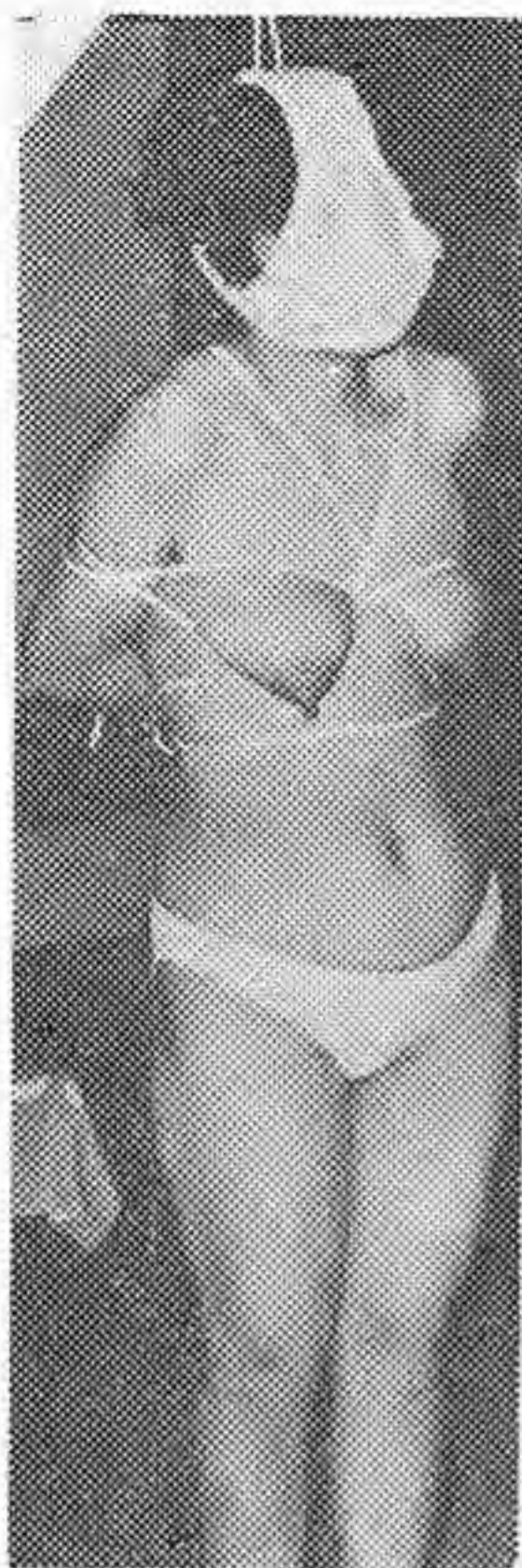
紀川正信

私は数年来の奇巧の愛読者ですが始めて投稿します。

誌上で皆様のプレイの様子を見するにつけて私達夫婦も皆様のお仲間入りをしたくお便りを書いた次第です。結婚十余年の私達夫婦は、私達なりにいろいろと楽しんでまいりましたが、誌上でそれ以上の皆様方の活躍を見て、もっとハッスルしてプレイを楽しみたいものだと考えました。

私達のプレイは、ロープを使つての緊縛、それに剃毛、乳房へのペインティング等いろいろ趣向をこらしましたが、長い間には幾分マンネリ気味になるのはやむを得ませんでした。同好の方々の新しいアイデアを参考にして私達も大いにハッスルしたいものです。

ここに同封しました七枚の写真はプレイの最中、私が妻を撮影したものです。誌上に掲載下されば幸いです。



めを好むとあらば、その一点に集中した激しい責めを展開して頂きたい。と同時に、その表情をリアルにレンズに捉えて頂きたい。無論、誌上掲載のためには一部カットはやむを得ぬが、顔の表情、縛られた手指や足指の微妙な動き、更には体全体からにじみ出る羞恥感、等を赤裸々に、適当にアップもまじえて収録して頂けないものだろうか。また肉体的苦痛をよしとする女性に対しては、ロウ涙責めや逆さ吊り、股縄吊り（禪状の股縄の延長で、そのまま吊る）毛髪吊り等を展開して頂けないだろうか。そして乳房や乳首に白く盛り上ったロウ涙や、鞭のあと等の近写などは、ぜひ見せてほしいものである。毛髪で吊り下げられた女性には脂汗をたらし、目をひきつけ、全身の重みをかけた毛根の痛みに大声をあげて泣き叫ぶ（数年前の私の経験）だろう。しかしそれが「真の責め」であり、それに堪えるのが「真のM」である。

毛髪吊りといっても完全に床面からはなれていくわけではない。爪先だけは床につく程度に吊り、鞭打ち、またはロウ涙責めをあわせ行なう。完全に吊上げると毛根が抜けてしまう危険がある。生命には別条はない。その泣き叫ぶ表情、吊り上った目、流れおちる脂汗……私は、辻村氏のレンズにこれを期待する。

つまり私のいいたいのは、仮借のない、妥協のない「真の責め」である。従来のカメラハントには往々にして、それが欠けていると考える。表情がないのだ。たしか小杉千恵君も、半年ほど前に一文をよせ、ハント女性の表情の乏しさを嘆いておられたようである。

このような「真の責め」を甘受出来るM女性はその多くはいないだろう。が、関谷夫人、谷山久美子氏、左近麻里子氏、大島照代氏等々の中で、辻村氏のお眼鏡に叶う方も多いことと思う。果して女性方の賛同が得られるかどうかは疑問だが……。真のM女性なら必ず御協力頂けると確信する。

勢いにまかせていいたい放題、書いて来たが、決して辻村氏に他意あつてのことではない。出来得ればぜひ一度お会いして氏の豊富なキャリアからくるSM談義を、とつくりと拝聴したいものと願っている。今後とも健康に留意され益々腕によりをかけて縄とレンズを縦横に駆使されるよう祈ること切である。

緊縛は

夫婦生活の

活性炭

三浦敬一

私は根っからの緊縛好きの男だ
 と思っっているが、さりとて妻以外
 の女性に縛ったことがないのだから、
 諸先生方から見れば、まだまだ
 雑この部類であると自覚して

いる次第である。

私が初めて妻を縛ったのは、新
 婚はやほの頃だから、結婚歴五
 年の私達にとっては、プレイ歴も
 また五年のキャリアを誇るという
 ことになる。

ことになる。

独身時代の私
 は他のマニアの
 方々もそうであ
 るように、若い
 女性を縛りたい
 という、強い欲
 望を抱きながら
 も、それを満た
 されない欲求不
 満にさいなまれ
 ていた。

それが結婚に
 よって、もう天
 下晴れて思いの
 ままに女性を縛

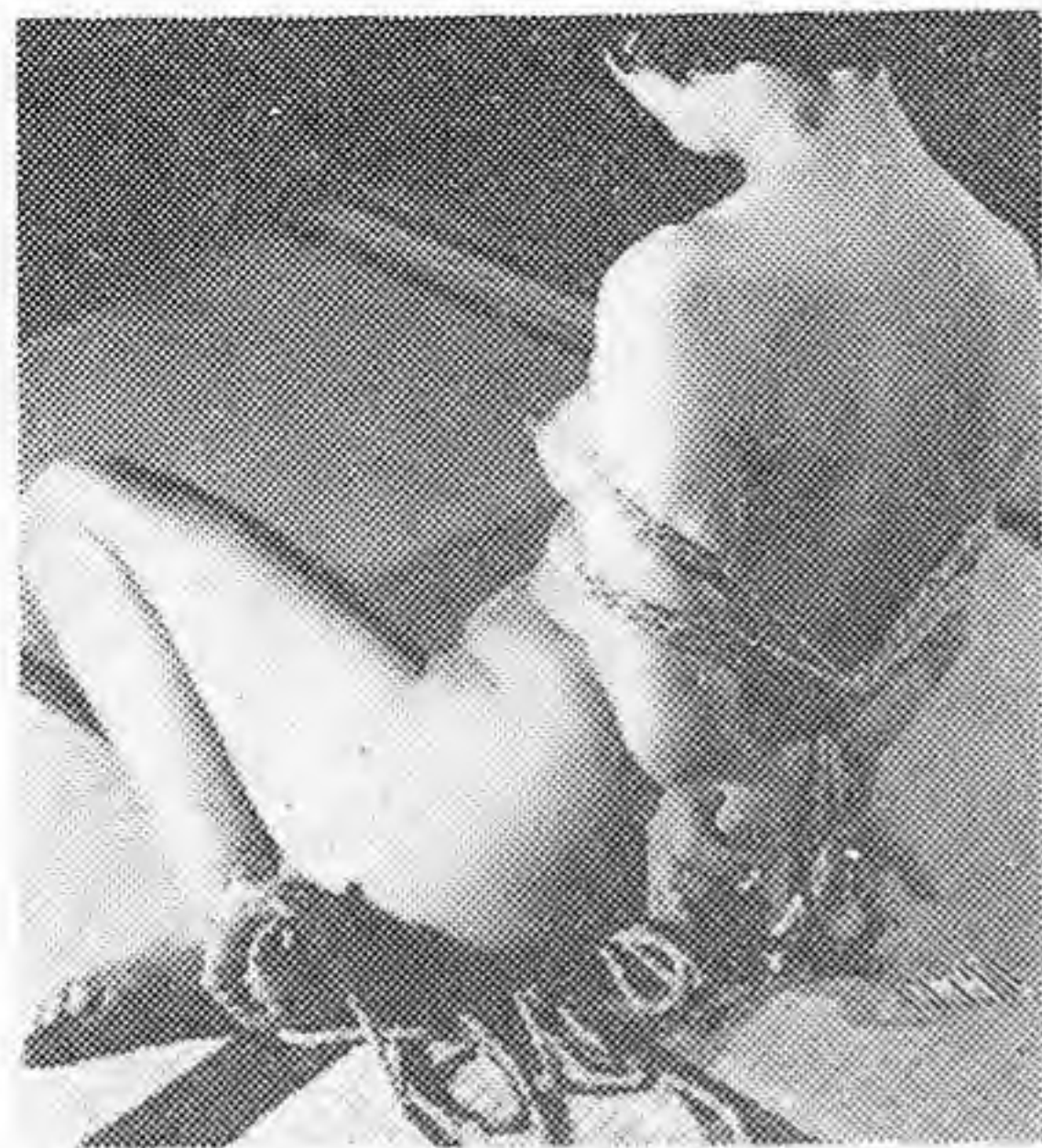
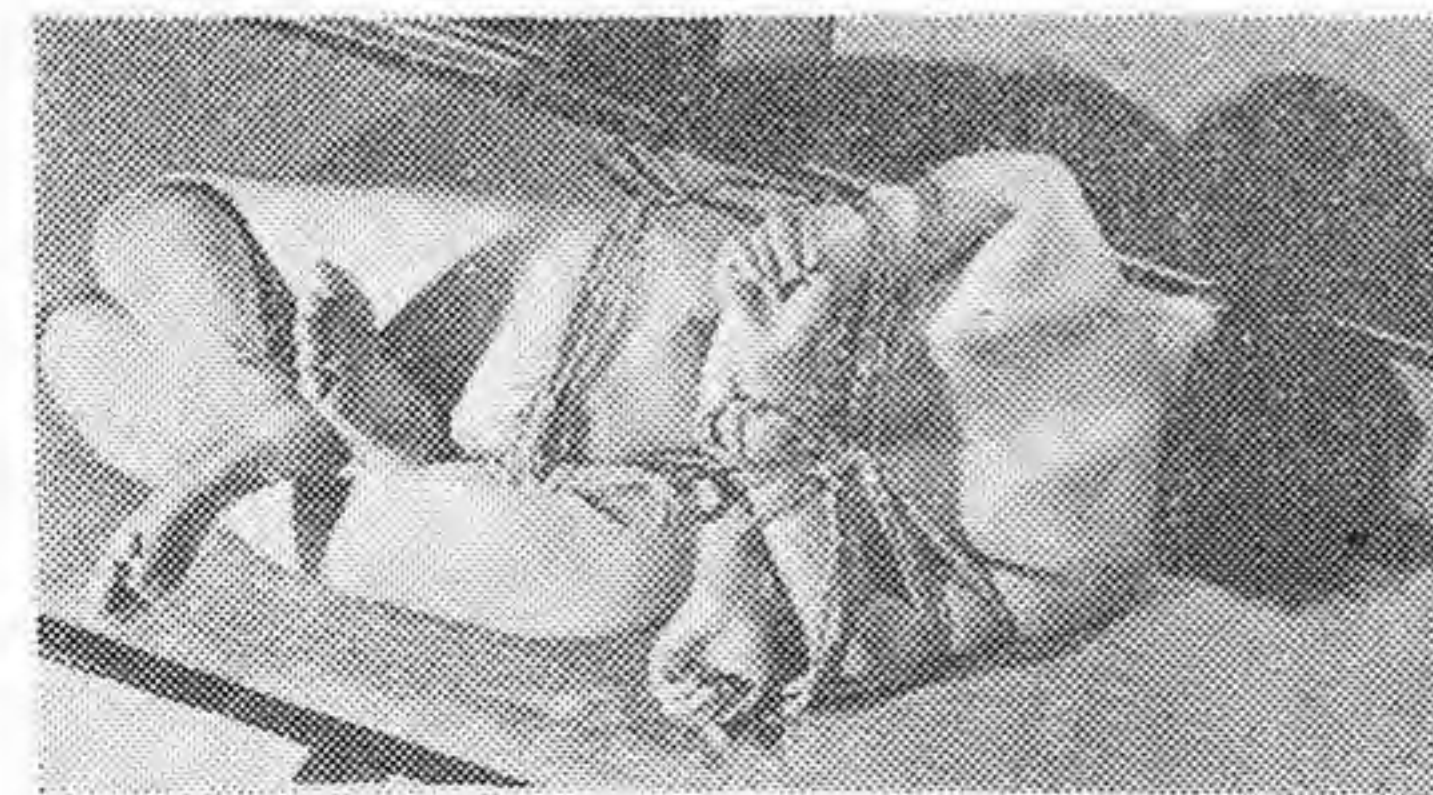
ることが出来るという期待に胸を
 わくわくさせていたが、流石に新
 婚初夜には縄を手にするとはな
 かった。しかし新婚旅行から帰っ
 て十日も経たないうちに恋女房を
 裸にむいて後手に縛っていたのだ
 からやはり緊縛好きなのだろう。

勿論、妻はMだのとか、縛りと
 かについては、なんの予備知識も
 なく、全く私の一方的な要求を受
 け入れて呉れていたわけであるが
 女性というものは妙なもので、私
 が人女体緊縛Vに異常なまでの関
 心を抱いていると知ってから、
 全面的に協力してくれるようにな
 った。

『縛り』と『夫婦生活』の連鎖反
 応が、いつとはなしに、切っても
 切れぬ絆によって固く結ばれるよ
 うになってからは、二人は雑誌な
 どによって色々と研究するように

なり、二人きりの新しい方法を発
 見するまでになった。

長男が生まれるまでは二人きり
 の生活だったので、本当に誰に気
 兼ねすることもなく水いらずで、
 時には十二時すぎまで緊縛プレイ
 に耽ったものである。それが、長
 男、長女と二人を儲けてからは、
 二人つきりというわけにはいかず
 両親と同居するということになっ
 たが、幸い私は自営で換紙の販売



をやっているの、自由の時間を
持つことが出来る。

得意先回りに車で出るとき、二
人の子供は両親にまかせて、妻を
助手席に乗せて出発する。車のト
ランクに責め道具一式を積み忘れ
ないのは勿論である。

最近は一才郊外まで車を走らせ
ると閑静な林の中にモーターが建
っている。市内のホテルを利用し
たこともあるが、近頃は専ら、顔

がささないのと、いろんな責道具
を容易に持ち込めるのでモーター
を利用している。

私達夫婦は「真昼の情事」なら
ぬ「真昼の緊縛」を楽しんでいる
訳であるが、これだと家の中でプ
レイしているのと違って、周囲に
気兼ねすることなく、お互いに思
いきりハッスル出来るので、本当
に心ゆくまで緊縛プレイの醍醐味
を味わうことが出来る。

誌上で沢山の方々が入夫
婦プレイVについての体験
を発表しておられるが、私
はそれ等の方の記事に習っ
て妻の緊縛姿態を撮影する
ことを試みた。ここに数枚
同封しておくので、もしよ
ろしければ誌上に掲載頂い
てもよい。

緊縛歴五年にもなると、
緊縛自体大分マンネリ化し
てくるのだが『写真撮影』
ということは、他の方も言
及しておられるが、二人っ
きりのプレイに第三者的な
視点が加わって確かに私に
とっても妻にとっても刺激
的である。写真をやり初め
て、まだ日が浅いのだが、
それでもアルバムは、もう

数冊たまった。

時折りアルバムを取り出
して二人で眺めるのも乙な
ものである。殊に何かの都
合で半月以上も所謂「真昼
の緊縛プレイ」を行なえな
い時など、このアルバムに
よって慰められている。

一度、離れ座敷のような
つくりをしてある、小さな
庭付きのモーターへ行った
とき、全裸で緊縛した妻を
その庭へ引きずり出して撮
影したことがあるが、それ
以来、本当に野外で緊縛し
た妻を写したことがたびた
び、ある。

一度は車の中で妻を縛っ
ておき人影のない森の中へ
入って車から出し写真を撮
ったのだが、やはりスリルがあっ
て面白かった。

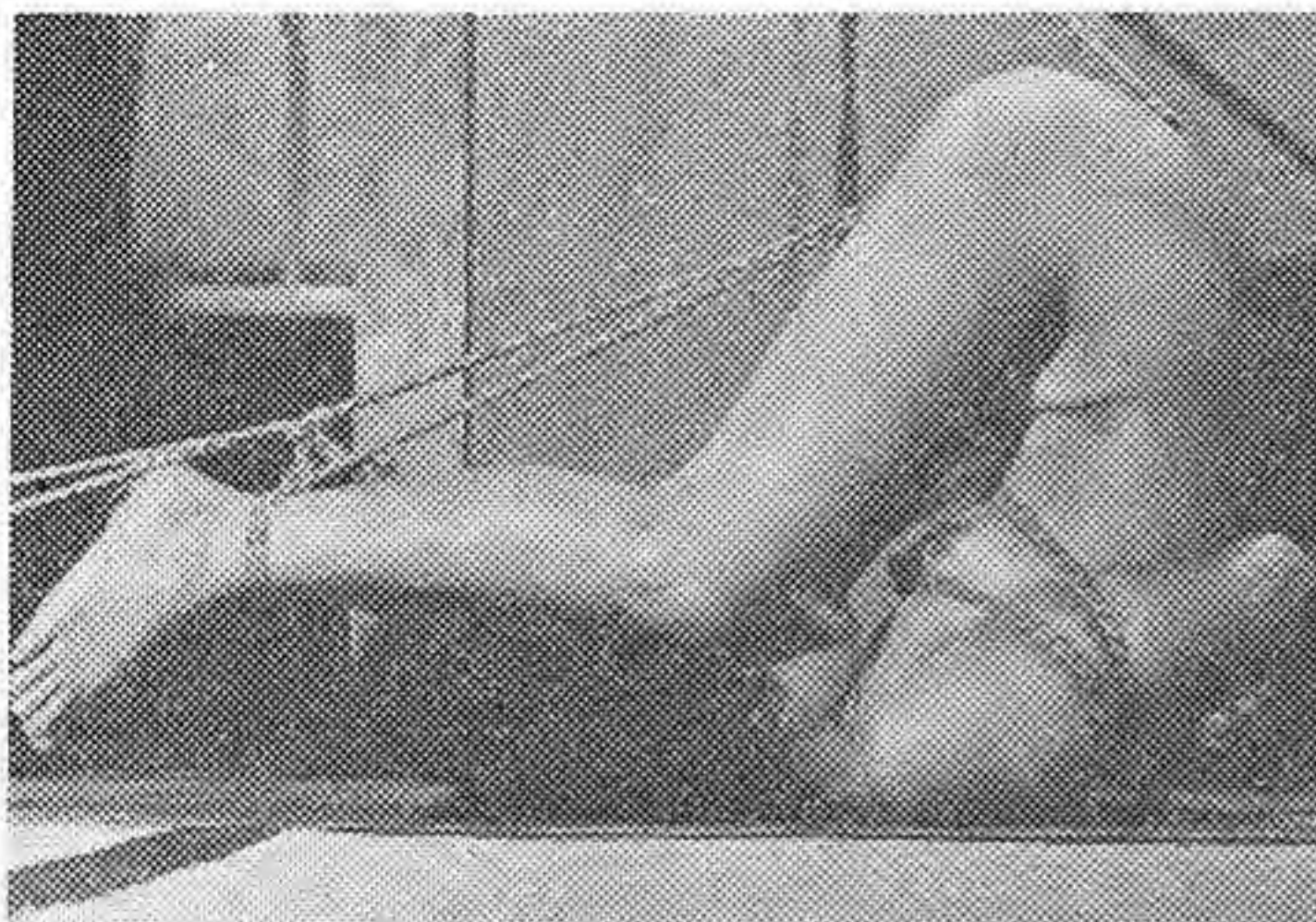
もう一度は夏の夜、妻を全裸で
海岸の松の木に縛りつけフラッシ
ュで撮ったのだが、うろうろして
いるうち蚊が刺すので弱った。あ
とで調べたら七カ所も赤く腫れあ
がっていた。

気心の知れた同好の夫婦の方が
あれば、色々と体験を語り合っ
たり作品を見せ合ったり出来て、楽

しいと思います。

セックスを伴わない緊縛プレイ
だったら、今流行の入夫婦交換プ
レイVに依拠してもよいとさえ考え
ています。或る日奇クを見せ二人
で読んだのを機会に妻にそのこと
を話したところ、大いに乗気のよ
うでした。

どなたか、私の妻を縛ってみよ
うとお思いの方はありませんか。



『交換プレイと三人プレイ』

兵 庫 収

全国の奇ク愛読者の皆様、御機嫌如何ですか。皆様の素晴らしい体験談を拝読するたびに、勇気を出して自分の趣味を世の皆様理解していただき、何かと指導していただくたいと願いながら中々ペンを取る勇気も出ぬまま今日に至りました。

私は本年三十二才になります。過去五年程、先輩諸氏の指導を得て妻と共に八夫婦交換プレイVを

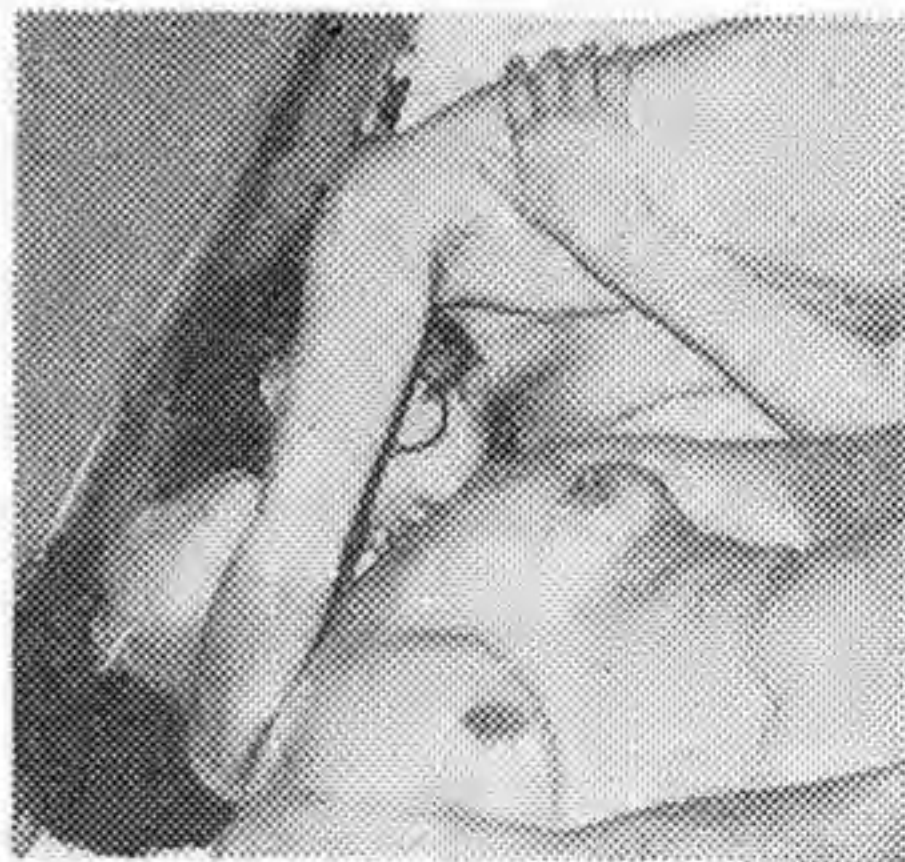


数回体験して参りました。この間心から信頼しあい、永続性のあるご夫婦を求め合いながらも、一長一短、中々気の合った方々にめぐり合えませんでした。

私の性向は第一に女性の下着に興味を持ち、或るご夫婦と三人プレイを実行した時など、約束の喫茶店で待合わせホテルに行くまで私好みのビキニパンティを着けプレイ開始と共に相手の奥様のパンティやスリッパを身につけて大変興奮し楽しいひと時を過ごしました。外出時も時々身につけます。

第二に屋外(野外)におけるプレイに興味を持ち一人で深夜の公園などの芝生の感触を素肌に味わいます。誰かに見つかりはしないかというスリルを感じる時、私の露出癖を満足させてくれます。

第三にSMプレイですが、痛みを感じたり傷つくようなプレイは気が進みません。いわゆる羞恥心をかき立てるようなプレイをしてみたいのです。きっと私はM的なのでしょうね。私は女性同志のプレイ(レスビアン・プレイ)を見る時、凄く胸のときめきを感じ、



この女性二人の内どちらかが自分であつたら、どんなに楽しいだろうと想像してしまいます。

第四は、これは八夫婦交換プレイVの体験者にお尋ねしたのです。過去五年間、数少ないながら私達も体験して参りました。この間、相手のご主人を一人で招待したり、私のみ招待されたりで男2女1の3人プレイも体験しましたが、いつも感じる場面はきまって居るのです。最初恥かしがっていた妻が相手の男性の技巧に依ってだんだん夫を無視する態度になり次には娼婦的な態度に変わってゆくのです。

こんな時、私は自分が無能な夫のように錯覚して、「アッ、妻が

編集部だより

○本誌も創刊以来二十数年、永く続いたものです。オギャアと生れた赤ん坊も青年に達している訳です。すから孤独と迫害の中を生き抜いてきた本誌の歴史を願ってみると転た感慨の深いものがあります。

○過去二百数十号に亘り発行した雑誌の中で幾多の傑作があります。最近オールドファンの中からそれ等傑作の中から再録を望む声が多く出てまいりました。早速筆者に接触を保ったところ、中には再掲載を断られた人もありますが多くの方は手を加えて新しく書き下した上で発表してほしいということでした。吾妻新氏なんかは、あのままの形で掲載は好まないが書き直してならよい。但し今はその時間的の余裕がないというのと、あの珠玉のような数々の名作も陽の目を見ないのは至極残念です。しかし、あの時期の作家的意欲の燃焼があつた傑作を生み出したのですから、そのままの掲載は筆者としては一面耐えられない気持ちを抱かれるのも理解できます。○八家畜人ヤプーVに関しての原

あるシンジケート

『仕置』

青井松造

「ボス。この女たち、逃げ出そうとしやがったんで……」

「足抜きしようとはふてえアマだな。よし、仕置を決めてやろう。調教中の観察書を読んでみナ」

「へい。A子、二十才。緊縛に対する感度92。羞恥責め反応98。鞭打ち反応3。身体特徴は……」

「よし、わかった。そのアマは紐類を一切取り上げて、広い部屋に一カ月間ほり込んで、じっと坐らせろ。毎日三回、一時間ずつ、ひっぱたくこと。だが、絶対に縛っちゃいかんぞ。お次」

「へい。次はB江、二十四才。緊縛感度25。但し裸体の際には93を示すなり。羞恥……」

「もういい。そいつには、長袖のスーツにズボンと三枚ばかり重ね着させて、片手錠だけで繋いどきな。絶対に肌を出さすなよ」

「へい。……次はC子、十九才。緊縛のみに30の値数なれど、浣腸責めをほめかすのみで、直ちに95に上昇。故にこの……」

犯される」と嫉妬に胸がかきむしられるような思いにさいなまれます。その瞬間の妻の顔は「アナタ許して！ この人にとうとう犯されてしまったの。でも体が燃えてしまうのよ。もうダメ」と私に訴えるような目をしているのです。私はこの時、夫として、男として、「夫婦交換」なり「3人プレイ」の最高の醍醐味を感じるのです。相手の男性に妻を与え、妻が目の前で犯されるのを見て感じるこの快感は、私のみなものでしょうか。全国の同好の方々のご意見をお聞かせ下さい。

東京ET生様、池田市の武田勝子様、若松一郎様、渡部好美様、その他信頼し合い永続性のある交際を願う同好の皆様の便りをお待ちしております。

最初は、奇クサロンや読者通信の誌面をお借りして、意見の交換をしたいと思います。同封のフォ

「よし。そいつはストラックスを穿かせてホンの軽く縛れ。それで下痢止めを毎日飲ませて、十日ばかり、うまいものをたらふく喰わせろ。絶対に坐らすなよ。泣きついたらハリとばしてもいいが、尻だけは間違っても殴るな」

「わかりやした。じゃあ最後のD

トは夫婦交換Vを実行した際、妻同志のレスビアン・プレイを記念に撮ったフォートの一部です。個人的におつき合ひするようになりましたら、数々の作品もお見せします。



枝でござんすが、二十才、超ゲラマーで緊縛反応ゼロ。鞭打ち、羞恥責め等、総べてマイナス10。他の女の調教ぶりを見せつけた場合の反応95。故にM客専用が最適と認む……ってんですが」

「そいつこそ、ギリギリに縛り上げて逆吊りやエビ責めにかける」

稿がその後も引続いて寄せられましたが、一部誌上に掲載したもの以外は割愛させて頂きました。○嘗て本誌上で活躍されました河恵子夫人が万国博覧物で来阪されたのを機会に、もう一度緊縛モデルになってほしいとわざわざ電話をして下さったのですが、丁度直ちに出勤できる持駒がなくて撮影できませんでした。因みに彼女は第二回目の妊娠中で今月で七カ月になるとのことでした。

○『夫婦の緊縛プレイ』についての告白や写真が次々と投稿されてきています。写真も中々優秀なものも寄せられてくるので大変意を強くしております。どうか、お差支えない向きは、ご遠慮なく共通の広場でお呼びかけ下さい。

○先月号のこの欄で言及しました北海道のモデル志願者の方は盲腸の手術とのことでしたが、その後の便りに依れば子宮筋腫の手術で当分入院加療の要があるとのことですので仕方ありません。

○その代り塚本鉄三氏の手で、素晴らしい沖縄出身の肉体美人座間明子さんが登場してくれました。暑さで益々元気が出るというハッスル・ガールですので、第二回の緊縛ルポが非常に楽しみです。

○その代り塚本鉄三氏の手で、素晴らしい沖縄出身の肉体美人座間明子さんが登場してくれました。暑さで益々元気が出るというハッスル・ガールですので、第二回の緊縛ルポが非常に楽しみです。

○その代り塚本鉄三氏の手で、素晴らしい沖縄出身の肉体美人座間明子さんが登場してくれました。暑さで益々元気が出るというハッスル・ガールですので、第二回の緊縛ルポが非常に楽しみです。

我が主観の美学 (4) ロマン派生

4、ポーズについて

ポーズはあくまでも女の弱さ、哀れさ羞恥等を出すべきで、縛りについては、あまりに健康的な美しさを自ら誇っているようなポーズはいただけないと思う。

正座 きちんと正座させるだけで、従順そうなマゾヒスティックなムードが出てくるようだが、正座させた女を、責め手が足で後ろから押えつけてお辞儀させたのもよいし、髪の毛を掴んで胸をさらさせたのも好きだ。

あぐら 私は、左右の下腿が水平に近く一直線になるように縛りたい。そのために、両足をやや深い目に組ませ、縄は重ならないように丁寧に七、八回巻き、仰向けに寝かせたり、横向きにしたりしてポーズに変化をつけている。

えび えびにする時には、あぐら縛りの上に更に上腿にも縄をかけ、その縄を体の側方から背中に回し、首縄と足首とを連結して、上半身を折り曲げるようにしているが、このポーズでは顔が隠れ易く、横を向かせて横から眺めるとか、髪をつかんで無理に顔をあげ

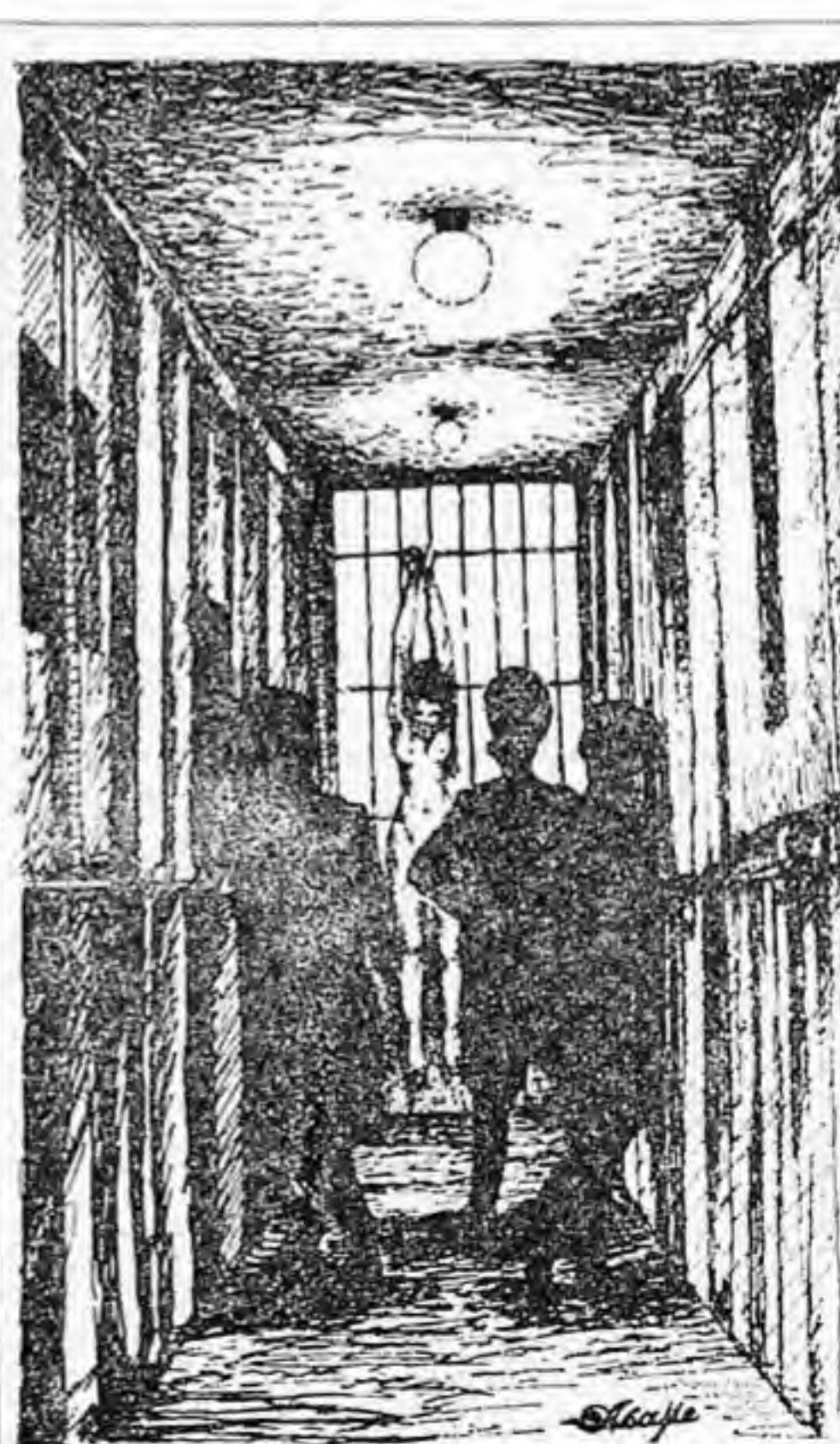
させるようにしなければならぬのが欠点である。もちろん横にしたり仰向けに転がしたりするが、壁などを利用して斜めに立てかけて鑑賞することも覚えた。

柱縛り 柱を利用する縛りは、いろいろとバリエーションが楽しめる上、女体の固定感も強いので好ましい。坐り、立ち、横棒利用といろいろあるが、私は、いずれにしても後手は、柱の後に回して固定したいし、胸や足にかけられる柱と一緒に結びつきたい。なるべくならば横棒をとりつけて、足首を大きくひき離して縛りたいと思う。スツール等に腰掛けさせてあれば、横棒に縛った足を上に吊りあげるのもよい。立縛りならば片足挙げということになる。台の上に立たせて、思い切り強く柱に縛りつけた上、台を外し、足が床につかない状態にしたこともあったが、体重でずり下がった女体に縄がきつく噛み込んで、最高の緊縛感をももたし出してくれた。

椅子利用縛り 椅子は当然、開股のために利用しているのだが、なるべく広く開股させると共に、足首や太腿を十分に縛って固定感を強める工夫をしている。その上に私は、膝や足首が尻よりも高い位置にしなければ物足りない。つまり、足をだらりと下に下げているのではぶちこわし、という気がしてならないのである。

ベッド利用縛り ベッドやテーブル等を利用して仰向けにはりつけてするには素材がかなりのグラマーでないとい合わないよう思う。両手は斜め上に手首だけでピンと張り、足はなるべく横に大きくひろげる縛り方が好きだ。足首と膝の二カ所を縛って横に張るのもよいし、更にその上、尻の下にクッションなどを入れて反り気味の方が美しいと思う。テーブルを利用する場合はテーブルの足の下に台を入れて、全体に足の方が高くなるようにしている。

木馬責め この責めでは、足首に錘りをつけて、足のツマ先までピンと伸びるようにしたいと思っている。同時に髪を天井から吊って、胸を張ったようなポーズがとれれば更に好ましい。うつ伏せに乗せる時は、手足を木馬の足にきつく縛りたいが、乳房や尻が木馬からはみ出すような、長さの短い



僕のイメージ画集「スパイ諷問」室井亜砂路

縛り映画
私の採点

岡田康彦

『人間と性』 小森 白

待望の小森演出映画で、日本陸軍諜報部に連れこまれてスパイとしての教育調教を施される従軍看護婦のオハナシ。

例によって、タイトル前に映し出されるカットバックで、内容に出てくる責め場面の総ざらえがある。その四シーンを列挙すれば、本稿の目的完了という感じ。

(1) 看護婦たち(辰巳典子、二条朱美、乱孝寿、他)が、白衣のまま髪吊りにされて、うつつ責めをされる。数日間、眠られずに責め通され、意識の薄れてきた女たちを、二人の教育係の男が竹刀でしばき上げ、自分で服を脱いだら許してやると囁きかける

木馬を使い、この際も、尻が頭より高くなるように木馬の足の高さを加減したほうが、美観が増すように思える。

はりつけ はりつけは女の美を最高に生かすポーズであろう。古式のいろいろなしきたりもあろうが、それは無視して私の好みから云えば、柱はあまり太くなく、三寸か、せいぜい四寸角のものがよい。横木等はあまり薄い板ではなく、せめて一寸位の厚さのものを

のに釣られて、全裸になった女だけが頭髪吊りから解放されるが、次には、上半身裸になった男に抱きつくように命じられるシーン。

(2) 服を脱ぐのを拒んだ女も結局は全裸に剥がれ、犬の首輪を嵌められて鎖を曳かれ、別の男の竹刀でしばかれながら四つ這いで引き廻された上、寝そべった男の顔を跨がらされたりするシーン。

使いたい。縛りつける際には、腕は水平か、肩よりも少し高くなるようにしたいし、手首、肘、肩、首、胸、胴、上下腿、足首等、それぞれ切り縄を用いて充分に固定すべきだと思っている。二カ所以上を一本の縄で連続して縛ってはゆるみ易いし、必然性のない遊び縄が出来てしまうからである。足は横木に十分開いて固定。足台などを使ったり、横木に足を乗せて楽をしては迫力がなくなるから、

(3) 二種の食糧責めを見せてくれた。最初は数日間、水を与えなかった女たちを全裸のまま机の足に繋ぎ、その前で男たちがうまそうに水を飲んでみせたり、食事したりする。空腹の女たちが、わざと捨てた空の器を奪い合い、更に男の足についた米粒を甜めまわしたり、一粒のために男のいう通りに全裸の体をすり寄せ、まつわりつく。次には、男が自分の肌に蜂蜜を塗りつけて、女たちに争って甜めさせたり、女の肌にも塗りつけて女同志で甜め合わせさせたりした上で、女が見ている前で次々と犯すシーン。

(4) スパイとして敵に捕われた場合の想定で、それぞれ個室にと

縄に足を乗せるように縛って、固定すべきだと思っている。もちろん、股木は素材の寸法に合わせてしつらえなければ不恰好だろう。

吊り 吊り上げる縄を背面からとると、なかなか絵に画いたようないいポーズにならない。むしろ胸から吊って少々そりかえるように吊る方がよいように思う。縦縄をかけてそれと吊り縄を連結してみたが、これでは完全に吊ることは不可能であることを知った。

じこめられ、連日のSEX攻撃に耐える訓練をさせられる。全裸でベッドに縛りつけられて、パイプレーターに責めつけられながら、数字や、図型を記憶する訓練を強いられるシーン。

以上であるが、全裸責めシーンの連続で、小森映画の故か女優さんも真剣に体当たりしているように思えてよかった。ただ、以前にあった、同じ小森作品「0才の女」の二番煎じの感があるのが惜しまれるが、「戦争時に於ける人間性の喪失」というアドバルーンのおかげか、映倫さんもだいぶオオラかな感じ。こんな映画を見ると団先生に「花と蛇」の再映画化を望みたくなる。(九十点)



「展示品」
あらい・かず

夫婦プレイ同好者の皆様へ

見学を希望します

菊 慈 童

東京ET氏の九月号サロン『夫婦生活に於けるSM願望と期待』を読み、心をひかれるものがありました。そこでこの機会に夫婦プレイに対して私が抱いているイメージについて若干、述べてみたいと思います。

私は奇クを読みはじめてから四年になりますが、この間ずっと夫婦プレイに対して強い興味と憧れを抱いて参りました。私が夫婦プレイを特に好む理由は恐らく次の様なものであると思われます。即ち、夫婦プレイには他のSMプレイには見られない或る種の「明るさ」と「救い」とが感ぜられるということ。只単にSMプレイだけを目的とした男女間のプレイ、そこには陰湿な異常美を認めることは出来ても、その中へのめり込んで行くのを躊躇させる何物かが存在するのです。そして仮にそうした男女の間に信頼と愛情とが生まれたとしても、それが決して実ることのない愛であるだけに一層やり切れなさが感じられるの

です。

ところが夫婦プレイに於いてはその様な陰湿な異常美よりやり切れなさといったものは存在しないかあるいはより稀薄なのです。それ故、時としては思わず微笑みたくなるような「あたたかみ」さえ感じられるのではないのでしょうか。

今ここに夫婦プレイを愛好する一組の夫婦がいるとしましょう。彼等は夫婦プレイという二人だけの秘密の体験を持つことによって自分達二人だけの世界に遊ぶことが出来るのです。そしてその結果彼等の間に存在していた相互信頼はより一層強固なものとなり、またそれに伴って彼等の愛情も更に強いものになって行くことでありましょう。夫婦プレイという二人一緒に楽しめる「趣味」を持つことによって彼等には共通の話題が出来、お互いの気持ちをより良く理解し合えるようになるでしょう。更には彼等が新たなプレイを開発し、取り入れて行く過程において彼等はややもすると現代人には縁遠くなりがちな「冒険心の充足」をも得ることが出来るであります。そして彼等はこうした夫婦プレイを行なっていくなかで妻は日頃の夫には感じる事が出

奇ク誌への欲求

風 流 粹 人

窓から見えるネオンに投げている視線の奥には片思いだったあの顔が浮かんでいる。22才の誕生日が近いはずだ。もはや諦めたつもり彼女のことが、近頃しきりに想い出されるのは、やはり諦め切れないのだろうか。

あの可愛い顔、グラマラスな肢体、白い艶々しい肌、それらの追想と共に、ひとしお強く実感と共に浮かび上ってくるのが、忘れ得ぬ、あのスリルと味覚である。

誘えば大抵はついてきた。ついてくる以上は、まんざら私を嫌っていたわけでもないと思っていたのに……。それとも異性観念を超越出来る悟道者だったのか？ まさか20才の娘が……。とすれば、性的不具者か図々しいかバカか、ということになるが、まあいい、何れにしても、今の私にとっては想い出の中だけの娘だ。

キスの味を想い出せるのは、唇を別にすると膝小僧だけだ。腕にも首筋にも背中にもした覚えはあるのだが……。

一番強烈なのは、海辺での想い出である。

喜々として旅館をとびだして行った後の部屋には、彼女の脱ぎ捨てた衣類を収めたみだれ籠が残されていて、後を追おうとした私に足を止めさせた。

私は、みだれ籠の中におそるおそる手を伸ばした。そのどれもが魅力秘めていたが布切れともいえる小さな白いパンティが、底知れない引力を有していたのであった。ブルブル慄える両手が、裏返したそれを私の鼻先へ運んできた。なんとも形容しがたい芳香が私を夢中にさせた。ことに、ある一点のかすかなシミが、私の唇を寄せさすにはおかなかった。

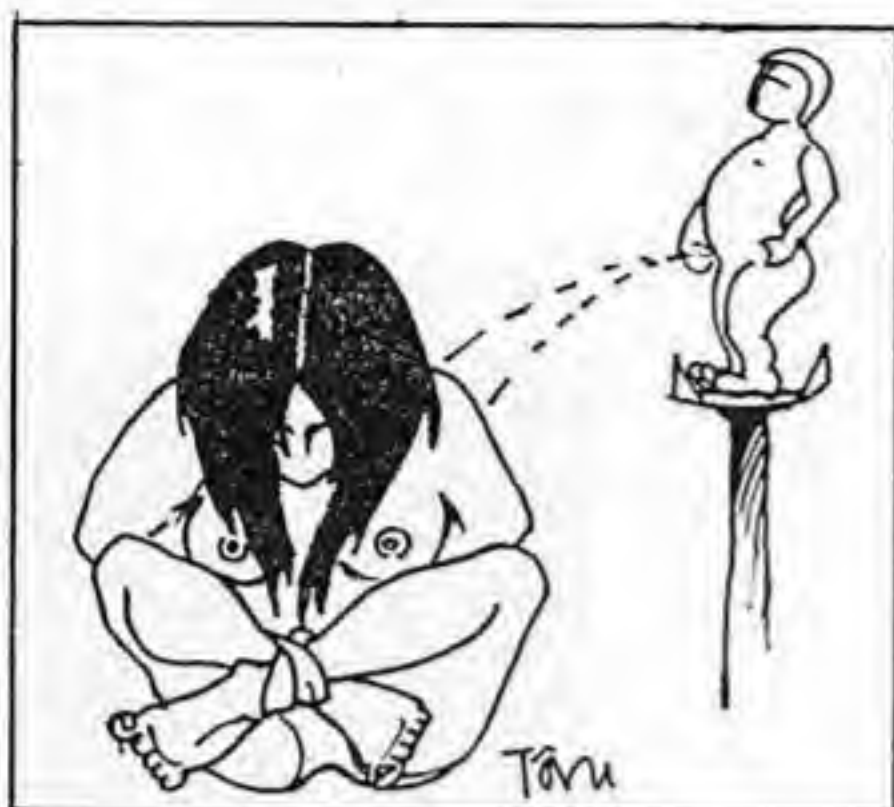
実感あるスリルと味覚は、以後いく度も、今のようには蘇生しては私を悩ますようになったのだ。

上流社会の人達や、金に埋まっているような恵まれた人達は、望みさえすれば大抵のところは実現するだろう。

同じ人間でも、私如き下層階級の者ではそうはゆかぬ。欲望という怪物に振り廻され、抑圧を重ねた末に、絶望感、悲壯感、不安感が苦悶となり、自律神経失調症を

来なかった逞しさ、頼もしさを肌で感じ取り、夫は従順なる妻のうち女に美しさ、可憐さを再発見するのです。いってみれば夫婦プレイは登山・スキー・ヨット等と同様、いや、それらよりずっと手軽に楽しめる冒険心に富んだ一種のスポーツではないでしょうか。

ここにおいてはSMプレイと円満な夫婦生活とが果して手段と目的の関係にあるのか、将又単なる目的と結果＝副産物の関係にあるのかといったことは殆ど問題になりません。只夫婦プレイ＝円満な夫婦生活といった図式が漠然と成立っているという事実を認識し



「洗礼」 札幌 T・M

えすれば、それで十分でしょう。ところで、現代社会における私達の生活は法律と道德という二重の枠組によって規制されています。そしてその結果、私達は変質的サディストとして振舞うことを諦め理性的サディストとして振舞わざるを得ないという状況に置かれているのです。とするならば、時に「なれ合いだ」、「水増しのSMプレイだ」といった非難を受けることはあっても、やはり夫婦Ⅱ家庭といった枠組を破壊しない限度においての夫婦プレイこそがSMプレイの最も「健全なる形態」であるといえるのではないのでしょうか。

常識の世界と異常美の世界、陽の当る世界と陰湿なる世界、これら両世界の中間に位置している第三世界としての、夫婦プレイの世界。これを私は「陽性異常美の世界」と呼びたいと思います。

さて、私の好むプレイ傾向は奴隷妻・羞恥責めなどといったムード派好みのもので、強い鞭打ちなどといった相手に苦痛を与える様な責めは余り好みません。全裸後手縛りのうえ正座させられて奴隷宣誓を強制されている奥様方、体の自由を奪われた後に次々と発せ

呼ぶぐらゐのことがオチだ。賤民意識を表面に押し出し、他人の迷惑を無視すればはなしは別だが、なまじ身につけた「教養」なるものが邪魔をする。

内気な私としては、前記の「キス」程度が関の山で、いくらご馳走が目の前にあっても、わが物でない以上、ガツガツ喰らうということとは出来かねる。

これは私ばかりではなく、大部分の同じような境遇者がそうではなからうか。

婦人代議士や堅物の指導者のおかげで、日本の表面上からは消えてしまったが、人間の生活の奥には「必要悪」を切り捨てられない

られる御主人の命令を懸命に実行しようとしている奥様方、第三者（私）の面前で御主人から開股の晒し責めに合わされて全身を真赤に染め、今にも消え入りそうな風情の奥様方、あるいは全裸に剥かれた中年の奥様に幼女言葉の使用を強制し、言葉による羞恥責めを行ないながら、やがて剃毛へと移行して行くプレイなど。私はいつもこの様な情景を思い浮かべては胸をときめかせています。

一種の要素みたいなものがあるのではないか、と私は思う。こう書いた直後だと、いかにも「悪」と認めているような誤解を招くかも知れないが、私が奇クを愛読するのも、そうした不満をいささかでも吐かせたいためだ。そして近頃は、奇クに、もっともつと前進してむしろ名実共に、「必要悪」になつてもらえないものだろうか、という気がする時がやたら多くなつてきているのだ。

望み得べきことかどうかは知らないが、個人の希望だけからいうならば、マニアのフラストレーションと奇クを結びつけた編集を求めたいのである。

ければ、是非ともあなた方御夫婦のお仲間に入れて頂きたいのです。そしてET様により責められて悦びの表情を示す奥様の赤裸々な姿をじっくりと観察し、ET様共々奥様に対して言葉による羞恥責めなど試みてみたいと思います。が、如何でしょうか。きっと今までは違った雰囲気生まれ、プレイにも奥行と幅が出来てくるものと思います。どうか、私をプレイパートナーの一人に、加えて下さい。

東京ET様、こんな私でよろし

プレイ告白

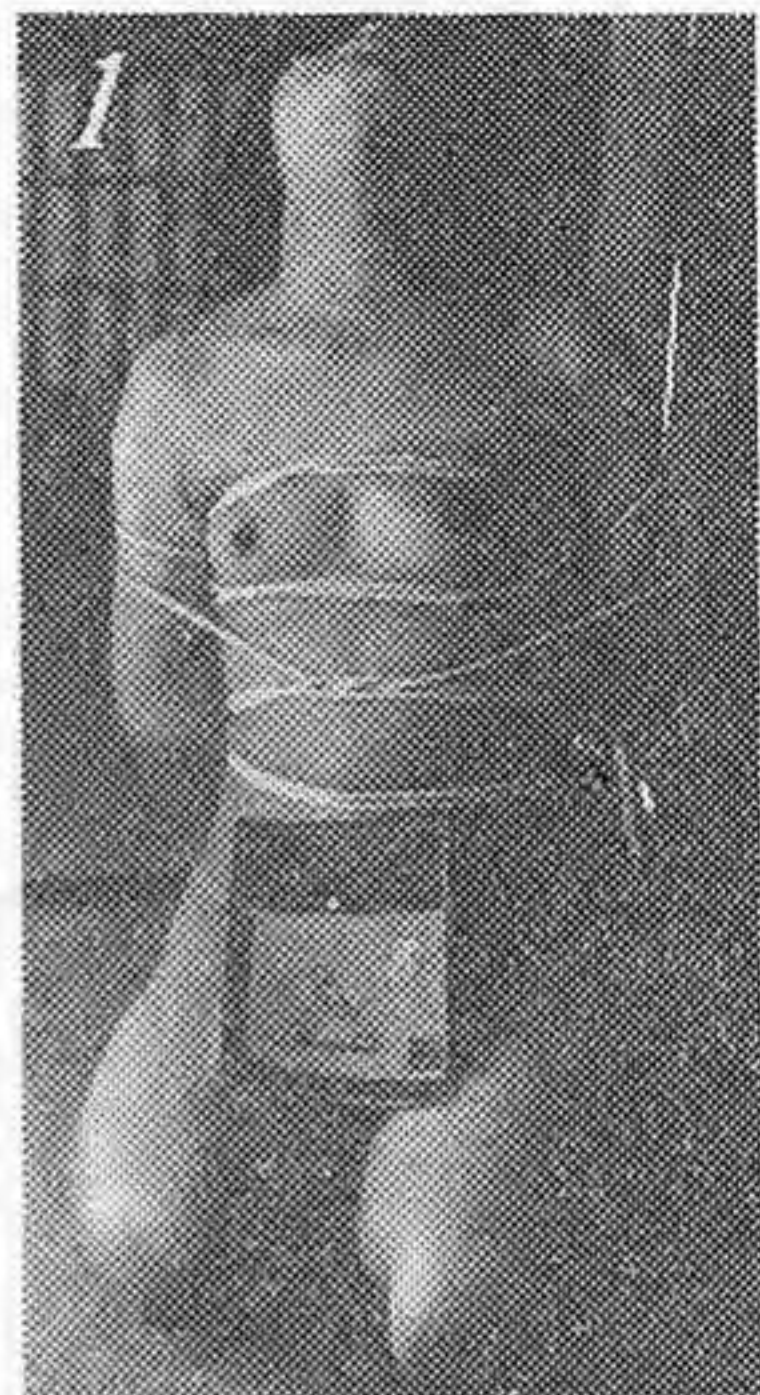
阪東太郎

日時の経過にしたがって、私ども夫婦のSMプレイ熱は、ますます昂まっております。妻もずいぶん協力的になってくれました。だいたい週一回の緊縛を、つい二、三カ月前の時とくらべると、別人のようにこころよく受けてくれますので、Mの開眼をしたのではないかとも思いますが、本人は笑っているだけで、私がその点を訊いても答えません。しかし、緊縛プレイを一時ほど嫌っていないことだけは確かなようです。



私の方は、はずかしながら暇さえあれば自然に浮かぶ緊縛姿。寝ては夢、起きてはうつつナントカの……で、プレイのことばかり考えているといったもよい状態です。今度ほどのような縛りをしようか、どういふ縄のかけかたをす

ればいいか、などと腹案を絶えず考えているのです。しかし、いざとなつて妻の裸身に縄掛けを始めると、腹案ではうまくゆくことになっていったのに、とんでもないところだけが締まりすぎて泣かれたり、だらけきった縄掛けになってしまったり、なかなかうまくゆかず、結局は、いつ



も同じような縛りかたを繰り返すハメにあいながっているのが現状です。

緊縛プレイとひとくちにいつても、私達のプレイは、もちろん夫婦としてのセックスに役立てるためのプレイなのです。から、形だけでは困りますものの、やら苦痛のともなう縛りも感心できないのであつて、あくまでも、お互いの愛をたしかめあいながら進出してゆかなければ、折角のプレイも、大半の意味が失われるのではないかと思っています。

その意味から、私達夫婦は主として「乳房責め」を行っているのですが、縄の掛けかたひとつに依つて、どのようなでも変化してくるこの神秘的な双丘は、充分に私達の希望を満たしてくれそうです。今回お送り



しますこのフォトは七月十日に行なつたプレイの時のものです。この日は奇ク八月号を読んだせいもあつたのかどうか、妻もかなり積極的でして、スムーズにプレイ開始ということになりました。

(1) 緊縛に使つた縄は、長さが十数メートルもあるロープです。二重にして乳房の上下を縛り、二の腕に廻して、ごらんのように腹を締めあげ、読み終つたばかりの奇クをアクセサリ兼パンティ代りにしたものです。顔を上向きにのけぞらせているのは、べつに頭髪をひっぱっているわけではなく、誌上に載つた場合に、恥かしいからという妻の希望によつて、こういうポーズをとらせただけのことです。私の性向に協力して、縛ら

れることにはだいが慣れたとはいえ、恥かしさは拭いきれないという妻の気持が、私には痛いほどよくわかり、余計に愛情を覚えてしまします。

(2) 縛りはそのまま、背面を撮ったものです。長いロープを使っているわりには、手首の辺りがすっきりと縛

れたと思っ
ています。ただこのロープを使った時はいつも後で思うのですが、ロープそのものがかたいようで、ほどいたあとのロープ目がクッキリしすぎて、肌がいたいとし



くなること
です。もっと
と柔らかで
適当な紐を
さがそうと
思っています。

(3) 乳房
を中心にし

た股間縛りです。妻の乳房は大きいほうではないのですが、縄というアクセサリのために強調されて、いっそう美しく見えるように思います。ただのヌードでは見られないポリウムです。

(4) これは、七月十五日のプレイ分です。裸体縛りが一番美しい



ことは、私も妻もよく知っているのですが、妻が新しく買った今流行のブラジャーを脱ごうとするのを止めて一度それでやってみようということになったわけです。この時も、もっと変わった縛りかたをしてみようつもりで縄をかけていったのですが、縄止めし



とあいなったわけです。

(6) 逆エビで失敗したことが残念でたまらず、三日目の十八日に改めて縛った時のものです。縛られることには慣れても、プレイとしては慣れていないのだから、逆エビでうつ伏せにされたら、胸に自分の体重がかかって圧迫され、苦しさにびっくしたのだろうと思います。今度は吊り責めに見ようと考えたのです。宙吊りにさえないなかつたらそれほど苦しくはないはずですから、喜びを導き出してやるまでぐらいいは耐えるだろうという見込みで敢行したわけですが、やはり長保ちはしませんでした。手首だけで吊ったのが悪かったと思いますが、SMプレイの難しさをしみじみと感じました。

△強烈な被虐女性▽

川路むら子の狂態

本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあつと驚いた典型的なM女性川路むら子さんの要望によって彼女のある被虐の狂態を再び刻明に描写し、ここにフアンの手元に提供することにします。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
一糸もまとわぬ裸身に只悪魔のような執拗な縄目だけが柔肌をじわじわと痛めつけてやまない。

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
如何に被虐を求めて泣き叫ぶのか、それとも悦びに泣いているのか、それとも悦びに泣いていてはいるのか、妖氣溢れる開股責

妖氣溢れる開股責

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
ねっとり脂肪を浮かした素足に縄をからませて、左右に引き開けば忽ち妖氣が充満してくる。

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
縄尻をとられて追いついては、うしろも責め手の意のままに、ど

臀部晒し浣腸責め

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
後手に縛られたまま、臀部を高く持ち上げて肛門を晒せば、恐ろしい浣腸器が近々と迫ってくる。

露出した全裸肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
諦めきつた表情で若々しい肢体をマニアの眼前にあらわした。

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
自分の顔面より上に両足を開いて挙げさせられた姿態をかくすべもなく身悶えして耐える。

壮絶臀部責の妙技

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
ありきたりのM女性であつた、このような責めは許容しないものであるが彼女はやはり違つた。

悶悦海老縛り地獄

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
身体が二つ折りになつた苦痛もさることながら羞恥の個所があらさまになる無防備感はいどい。

片足吊りの全裸像

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
不安定な片足吊りで全身を砥めるように見られる羞しい苦痛。

再びむら子の狂態

本誌五月号で塚本鉄三のペンで川路むら子は耐え難い被虐の妄想に耽られて三度、四度、鮮鋭なレズの前で、その緊縛の裸身を晒したのであつた。お申込みは代金同封の上、大阪市阿倍野局私書箱第14号、天竺社宛へ、どうぞ。

開股責と強烈縛り

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
横臥に膝を棒に開股縛りにしたり、裸縛りなどむら子好みの責め。

緊縛と鼻責め悦楽

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
身動き出来ぬまで縛られたむら子の鼻を煙草、ドライバ、手指などに徹底的にいじめぬく。

トイレの排泄縛り

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
全裸で後手に縛られたむら子をトイレに追い込んで無理矢理排泄させるところをスナップする。

逆エビ責にあえぐ

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
縄を用いて逆エビ縛りで責めつけば流石のむら子も一痛

棒責めの全裸女体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
豆絞りの猿轡以外一糸も使わず、強烈に責めて激しく悶えさす。

椅子責でいためる

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
椅子を使つたグルグル巻きで、くれた髪を縛られ転落の恐怖に激し

柱に縛る全裸女体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
部屋中央にある柱に全裸のまゝ、前面立縛りにされ、柱の周りに視線を全身に浴びるのだ。

後手縛り顔面玩弄

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
厳しい縛りに恍惚として悦楽の境をさまよつて、むら子の髪を握んでいたが、続ける悪魔の触手

両手挙げ縛り媚態

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
両手を揃えて頭の上へ挙げさせ、ぐるぐる縛りにすれば、むら子は振り解こうとして、もがき狂う。

悦楽責めアップ集

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八〇〇円
柱と棒利用の開股責めを初め、など柱縛り棒責め、両手挙げ責め

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組 百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-19)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の厳重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの擦り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号 (むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号 (あけ) 四〇〇円

猪 吊り三態

梨花悠紀子 略号 (いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号 (せめ) 四〇〇円

強 烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (ねむ) 四〇〇円

後 手首の高縛り

玉田美佐子 略号 (ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 (ねと) 四〇〇円

全 裸脚挙げ縛り

長野 良子 略号 (てい) 四〇〇円

全 裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号 (てへ) 四〇〇円

全 裸屈伸縛り

長野 良子 略号 (てほ) 四〇〇円

強 烈エビ責め

松本アサ子 略号 (まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号 (やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号 (ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号 (りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号 (ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

関谷富佐子 略号 (ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号 (ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

長野 良子 略号 (へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子 略号 (いな) 四〇〇円

強 烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号 (もい) 四〇〇円

乳房責めの苦悶

関谷富佐子 略号 (もろ) 三〇〇円

全 裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号 (もた) 五〇〇円

強 打に泣く裸身

関谷富佐子 略号 (むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号 (わあ) 四〇〇円

全 裸股間縛

関谷富佐子 略号 (せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号 (そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

一塚 啓子 略号 (とう) 四〇〇円

色 輝の開股縛り

長野 良子 略号 (いふ) 四〇〇円

鼻 責めのアップ

大塚 啓子 略号 (はす) 四〇〇円

乳 房しばり

長野 良子 略号 (うは) 四〇〇円

鼻 責めと緊縛

大塚 啓子 略号 (うい) 六〇〇円

木 馬責三態

大塚 啓子 略号 (もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大塚 啓子 略号 (いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号 (もの) 三〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号 (よな) 六〇〇円

鼻 いじめ三態

山原 清子 略号 (はね) 四〇〇円

鼻 責め万華鏡

山原 清子 略号 (はた) 二〇〇円

碧玉裸身緊縛

大塚 啓子 略号 (のん) 四〇〇円

くすくす責め地獄

大塚 啓子 略号 (きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大塚 啓子 略号 (きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大塚 啓子 略号 (きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大塚 啓子 略号 (きて) 七〇〇円

凌辱されるマゾ女

大塚 啓子 略号 (きと) 七〇〇円

鼻 責め悦楽

大塚 啓子 略号 (きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大塚 啓子 略号 (なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

大塚 啓子 略号 (なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号 (ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一三〇〇円)
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一二〇〇円)
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けか)

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けひ)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 (一五〇〇円)
山原・東浦 略号 (かも)

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けま)

浣腸後カバー装置

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けさ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かち)

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)
山原・東浦 略号 (かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ると)



奇クを愛読して十年余り、最近の本誌の充実した内容に、心から喜んでおります。昔は少なかった浣腸に関する記事ストーリーも多くなり、毎月の発売日を心待ちする昨今です。中でも私は羞恥責めには特に興味を抱いております。「羞恥責め」それは何と甘い響きを秘めた言葉ではありませんか。女性を責める上での全裸、排尿、開股縛り、浣腸、バイブレーターその他、諸々の小道具等々。私がプレイを行なうためになくてはならぬ要素の一つ一つです。縛りもあくまで羞恥心を増すための手段

であって、羞かしめの姿態から逃れようとする女性を固定する場合と、羞恥を縛りによって一層クローズアップする意図に用いる事が主体で、苦痛を伴う強烈な緊縛や美しい女体に痕が残る程のムチ打ち等はあまり好んでおりません。したがって私が女性に施すプレイは、あくまでも、いかにすれば女性に羞恥心を最高に感じさせる事が出来るかにあり、其のために私はあらん限りの羞恥の責めを考案し、想像し且つ実行するのです。そもそも私が女性に羞恥を与えて責めるといふ、変質的な欲びに興味を抱き始めたのは、それまでに脱衣、開股、導尿、浣腸、内診、検査、注射という、日々に明け暮れていた私が、何を間違えてかセールの世界に入り込んで、毎日を車で走りまわるようになってからのことです。それまでは、あまりにも身近であり過ぎた環境のために神経が麻痺してしまっただけで、それを習得しなければならぬ立場にあって、心の余裕もなかったのですが、今に至って、其の時の一人一人の女性の羞恥の思いが、手に取るように楽しく鮮かに想い出されるのです。その後も機会あるごとに、数度、羞恥プレイ

を試みましたが、いずれも金銭のみ目的の女性であったりして羞恥心もなく興覚めしてしまい、途中でプレイを中止するような始末でした。最近の奇クには、女性の投稿者も数多くあり、中でも佐野みさ子さんの積極的な呼びかけ小杉千恵さんの消極的な囁き。この対照的な性格の二人の女性に、私は強く興味を覚えるのです。この二人の女性とそれぞれプレイを行なうならば、そこには情熱的なムードを、そして又華麗なアトモスフィアを堪能させてくれることでしょう。私もマニヤとして強く惹かれます。是非プレイを実現してみたいものです。

(大阪・大木 喬)

私は三年程前から愛読しています奇クの大ファンです。ともすれば低俗になりがちなSMの世界を真面目に追求され、内容充実を計ってこられた編集部の方々、又愛読者の皆様に深く感謝致します。只七、八年前のようなグラビヤがなくなっただけの本当に残念です。私は人並の遊び(酒、タバコ、パチンコ、麻雀等)には興味がもてず、真面目な温和しい性格の二十六才の男性です。……が心の奥で

は、女性を虐めたり羞かしめるところを、いつも空想しております。私の好みは「花と蛇」のような羞恥責め、擦り責めなどで、身体を傷つけるような責めとか、強烈な責めは好みません。お互いに信頼の上に立った楽しいプレイを念願しております。が、なかなかチャンスに恵まれず、毎日が無為に過ぎていくのが残念でならず、ペンをとった次第です。関東地区のM女性の方、年令、容姿は問いません。勇気を出してお手紙下さい。

(埼玉県・耽美英雄)

奇クファンの皆様初めまして。小生も、十年來のファンです。関西在住も久しく、数年前よりカメラハントをはじめ、私家版のコレクションも可成りあります。小生は梨花さんの絶対的なファンで梨花さんが誌上から消えてからは僅かに左近さん、中河さんにその面影を求めています。小説では何と言っても団鬼六氏の「花と蛇」が圧巻ですが、小生も筆のすざびに時折ものしたものがありますので、近くまた誌上に発表の機会もあると思います。小生、この数年来つきあってきた良きプレイの相手であった彼女と別れ、フォトに

残る面影を偲ぶばかりですが、私家版コレクションを、より豊富ならしめるため、緊縛プレイのフォト・モデルをさがしています。当方、中年の地位ある紳士のつもりです。SMプレイに興味ある教養の高い女性を求めます。

(神戸市・ふじ)

読後感。九月号「ゴムマントの舞」……三葉のフォトを通し「ゴムの女王」梅川幸子様の勇姿を観賞し、その一枚一葉が猛暑を吹き飛ばす力作、一陣の涼風でした。

ニュータイプのゴムマントにくるまり、陶酔感に満ちた梅川様の心境は、同好マニアの私にも手に取るように理解できます。ほんのり漂うゴムの香り、初めて纏ったパウダーの手触り……等々フォトにしみ出ていました。それにも増して光沢のあるエナメル仕上げのラ

〓御送金についてお願い〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替等の方法もあります。ご利用下さいます。尚、便宜上「切手代用」にても結構ですが、必ず「割増」にてお願い致します。

バーブーツが素敵でゴムマントにアクセントをつけ、アクセサリーのボトルと共に、非常に効果的でした。私欲を云えば、タイトルどおりゴムマントスタイルに陶酔し黒い花びらの如く舞った大輪の名花を観たかったのですが、残念です。ぜひ、次の機会に観賞させて下さい。

(東京・菅原敏夫)

夫婦プレイを楽しんでおられる皆様、私達夫婦も緊縛、乳房責め写真撮影等を取り入れてプレイを楽しんで参りました。しかしながら二人だけのプレイには自から限界があり、そのことについては御経験の皆様が誌上で御指摘の通りです。ただ種々の条件、困難は勿論あると思いますが四月号杉本様の「マンネリのSM夫婦の願い」にありますように、同好者に依る文通、或いはフォト交換等の方法を通じて、相互の願望、性癖等の赤裸々な告白の交流に依って、真に信頼できる同好者を得られるのではないかと確信しているものです。私達はSMの傾向の如何を問わず夫婦プレイの究極はセックスプレイを離れてはあり得ないと思えます。その意味で神戸MY氏の「我が夫婦プレイの告白」には最

近にない昂まりを覚えさせられました。真に信頼でき合える同好者が出現され、未熟な私達夫婦プレイを、より楽しく変化ある方法を御教示下さりながら複数プレイが実現できますことを心から願って止みません。

(東京・ET生)

9月号で初めて告白文でとりあげて頂いたSMマニアの運転手ですが、小生の一番関心のあるS小説「花と蛇」に対する提案が最近多く掲載されて、しかも、それが京子に集中しているのを知り、いたたまらず、小生も一筆啓上する次第です。私の想像する京子は小麦色の肌の太腿をもち、豊かな乳房と腰をもった二十才すぎの女性で特に堅肥りのプリンプリンする臀部の素晴らしさは比類のない美しさをみせ耽美な空想を生む女性です。静子が見せるためのショー的甘さの女性ならば京子は反抗に反抗を続けながら結局体の奥底までも曝け出されてしまう責められるための女性であると思います。静子が自ずから演ずるのに対し、京子は廻されながら多くの悪人男に無理に拡張され調べられる女性であるべきです。小生は他のSMニヤ京子ファン同様に再び京子の

責めを夢にまでみております。どのような方法を探ろうともA責めに女性の誇と安堵が存在します。京子の勝気な反抗を羞恥と屈辱の中へ、つき落とすにはA責めしかないと思います。且つ、はねかえり娘京子の大きな双臀を拡げてこそ、真の肉体羞恥責めの極致が現出すると思えます。京子への流腸を始めてとして、更に拡張器、ガラス棒肛門鏡を使つての責めは大賛成で願わくば小麦色の腿を踏み開かされて京子の再現を、他の多くのファンと共に願望致します。

(神戸市・大場玄一郎)

お恥かしいながら、お便りを差し上げます。私は、ある学校の教員をしております二十八才のオールドミスです。自分のMの性癖にめざめて御誌を人知れず愛読するようになりましてから、もう四年にもなります。交際している男性もあるのですが、自分で自分の性癖が恐ろしく、結婚まで踏みきれないのです。教壇に立ってさえ、恥かしい妄想をしてしまいます。近頃、性教育論議がさかんですが、もしこの男子の学校で、私が性教育の生きた教材にされたらどうだろうか……などと。いつも

きびしく接している生徒たちの前で、一糸まとわぬ姿にされ机の上に坐らされ、自分自身で教材をさけ出して見せます。男の先生が生徒たちに私の体の構造を説明します。そんな出来もしない空想にふけることがよくあるのです。実際に出来るかどうか知りませんが、単独ではなく数人の男性グループの方々に、こんな私を責めて下さいませんでしょか。丸裸にされ縛られ、鞭打たれてみたいと思います。奴隷のように御主人の命ずるまま四つん這いになり、犬のまねをさせられたり、衆人環視の中で排泄を強要されたり、器具で強制的に採尿されるなど、私を屈辱の極致に陥れていただきたいのです。体は丈夫ですので何をされても構いません。数人の男性に奉仕させられる自分の姿を想像すると興奮してしまいます。学校も休暇ですので、お呼びかけ下されば遠方でも参ります。

(東京・浜口里子)

8月号誌上で前原昇氏がマゾ化した静子夫人を「花と蛇」のヒロインとするより、これから先は激しく抵抗を続けるジャジャ馬娘京子に主軸をおいてほしいと願望さ

れていたが私も大賛成である。大の字に縛りつけられても、なお、あきらめないで太腿を反りかえすようにして加虐に反抗し続ける強情娘を責めさいなむ悦びは、Sにしかわからぬ醍醐味である。しかし、少しだけ前原氏と意見を異にするのは静子夫人に対する考え方です。勿論、前原氏も静子夫人を全然、否定しているわけではないのですが、彼女を終局的には責められることにマゾ的な喜びを感じるとる女性に過ぎないと云い切っている点に私は不満を感じていたい。成程、近頃の静子夫人は被虐の中に妖しく酔い痺れるが如き様子を露わに見せ始めたことは事実であるが、いつも優雅な令夫人としての心の姿勢は失っていません。常に彼女はそれがために悶えぬいている状況が如実に表現されているのである。しかし、積極的に鬼源等に協調を態度でしめし始めた静子夫人を、うまく活用させてこそ、新鮮味のある「花と蛇」が生まれると私は考える。固形を出してみせる自発的行為のすさまじさは、この意味の一端を担っているようにも思える。このように調教の成果をみせた静子夫人を充分に活躍させるため、私はあえて

安井・中川・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しう

髪吊りて強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八した

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しち

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しつ

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八して

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しと

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しや

痛打にもがく美女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しゆ

あぐら縛りの羞恥責

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しよ

片脚挙げで晒す裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とは

強烈エビ縛りて苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とに

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とほ

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とへ

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とち

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とり

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とぬ

菱縄縛りて床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とる

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とか

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とま

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とみ

浣腸責め的美態開陳

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とめ

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とも

後手縛りの両手を解き放し腰縄に時には交えてみたいと思うのである。鈴付きの縦縄や鎖で締めあげられて腰を前後にゆすっていたのでは、その限界から一步もはみ出せない、マンネリ化を防ぐためにも両手を自由にしておくべきである。美貌と教養を持った上流社会の若夫人が猿のように腰縄をうたれた姿で、野卑なやくざ達やいやらしい好事家達の環視の中に、SMの真髄、ここにきわまると感ずる。乞解縛を。

(神戸市・兵庫風流粹人)

池田市の武田勝子様。私達夫婦も貴女方と同じ願望を夢みて居りますが、なかなか夢と現実は一一致しません。交換プレイによる羞恥責めは、想像するだけで胸が高鳴る思いがします。一度お便り下さい。小生は大会社に勤めるサラリーマンですが、画をかくのが好きで、SM作品も大分、たまりました。プレイ以外の事では絶対に信頼して頂いて結構です。

(谷中 浩)

八月号で拝見いたしました広島絵川ルミさん。現在の若者を代表するような、あなたの素直で純

粋な御気持ちに感銘しました。つきましては、ぜひ一度、お会いしたいと思ひます。私は、あなたの御希望通りの中年紳士です。小麦色の肌を思いきり責めてあげたいと思います。(吹田市・オバタ)

富山、いや大阪。まだ見ぬ貴女は今、どちらに住んでいるのでしょうか。曾根葉子さん、葉子さん。ぼくの好きな、SMの心を呼び起こしてくれる、お名前。ぼくは京都の下宿に住んでいる、年令二十一才、身長百七十七センチ、体重六十三キロ、胸囲八十九センチのスタイルのよい、明るい性格の現代青年です。そしてSMに激しい興味、いやSMに恋狂っている、清潔で誠実な男性です。ぼくも、あなたと同じように、この奇くを讀んでいると、まったく周囲が感じられなくなり、すばらしい優雅な恍惚の世界に、入ってしまいました。浣腸責め、アヌス責め、開脚責め縛りなど、種々様々な肉体的精神的な責めをやりたいたいと思います。SMプレイは、人生において男性女性間の最大の喜び、快楽であると信じています。葉子さんからの優しいお手紙、お待ちしています。(京都市・桂洋一郎)

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆめ	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆえ	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆひ	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆあ	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆも	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆに	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆほ	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆみ	股間縛りで悶える 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆる	全裸縛りに羞らう 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆへ	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆわ	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆよ
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆぬ	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆる	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よれ	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よそ	全裸高手小手の麗身 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よの	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よや	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よい	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よふ	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よえ	女体一つ折り縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よぬ	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よあ	イルリの浣腸責め 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よた

清水民子様。謹んで一筆、差し上げます。何とぞ、今ここに書いた事柄の中から私の真意のほどをおくみとり下さるように、おねがいいたします。九月号の告白「白い肌への劣等感」を拝見して、貴女の本心、態度がよく分かりました。貴女は私が長年、探していた理想の女性です。ですから、もしおつき合いねがえるならば、すばらしい楽しみを味わうことができると思います。私の長年の希望は言葉どおり絶対的に私のパートナー及びアシスタントとして、ふさわしい人を探すことでした。貴女は私の理想に叶った方だと思えます。すばらしい美しさ、威厳ある視線、堂々とした微笑、おかしがたい冷酷さ……。貴女は尊敬すべき方だと思います。必ず御返事下さい。

(和歌山・小島祥公)

○ 中山昭子さん。貴女の言う通りです。残されたものは複数プレイです。貴女は一人で住んでいるのですから、思いきった大胆なプレイを楽しんでいるのでしよう。しかし、やはり誰か他に人がいて、一緒にプレイした方が今の数倍も楽しいと思います。私も一人でプ

レイしているので貴女の気持が良くわかります。貴女は、もう経験したかも知れませんが、貴女の大好きな三〇CCの浣腸器に液を入れて注入します。三〇CCの目盛りのところまで、ゆっくり注入しますと、液はずっと奥の方へ行きます。このときの姿勢は、枕をお尻の下に入れて、完全にお尻が天井に向いているようにします。液を入れ終わったら、しばらくそのままにしておきます。それから、ゆっくりと浣腸器をぬきます。上手にやらないと液がこぼれます。それから括約筋の締るところで、何か先の丸い細長いものを使うのです。私は最近の化粧品容器はこのためにあるのではないかと思われ、これを利用しています。貴女も化粧品容器を使ったらよいと思います。とくにキャップが丸くて少し大きめに出来ているものが良いでしょう。それを三分の一くらい埋めて、あと三分の二を外に出したまま括約筋に力を入れて立ちます。そこで部屋の中を少し散歩します。尻尾をつけてインスタントコーヒーでも入れたら楽しいでしょう。コーヒーが入るまでもつかどうか。私と一緒にプレイ

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剝玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

しましう。貴女を待っています

(高崎エネマ)

拙筆ながら、お便りします。小生は浣腸責めに興味を持つ一男性です。東京の仲山知子さん、貴女も同好者の方ですが、ぜひお便り下さい。また他の女性の方も、良いアドバイスや経験等、お知らせ下さい。毎日、あらぬ空想に耽り、奇クを読んで気をまぎらわしております。鞭打ち等、肌を痛めつけるのは余り好まないで、縛りを主体にしたプレイをしたいと思っています。浣腸器、大鏡、パイプレーターなど用意してあります。それらを使って思う存分、羞恥責めをしたいと思っています。

(有田 治)

奇ク愛読者の皆様。M愛好家の女性の方、私と友達になって下さい。九月号での扉で一言の越間あつ子さん。美しい詩を拝見、うっとりすると共に、また貴女の詩に對し、それに答うる詩をお送りいたしたく思います。小生と文通でなりと交際ねがいませんか。同じ愛読者同志、何時つきるとなく話せ、また理解願えてプレイに移行するのが理想的だと思います。

度、詩で文通をいたしましう。

(京都府・八木烈士)

東京のET生様。貴方の九月号での呼びかけを拝見し、いても立ってもいられない気持で筆をとることにしました。私も奇クを読み出したのは古く、今までも何回か全国諸兄の呼びかけに応じたりまたSMに対する愚見を述べさせていたきたいという気持になったこともありますが、何となく秘密が洩れはしないかと気がかりで筆をとるに至りませんでした。しかし今回の貴方の呼びかけには、それらの心配を吹きとばす何かを感じました。貴方の一文を拝見させていただき、世の中には、これほどまでに自分と同じ考えを持つ方がいるものかと、本当に驚いてしまいました。私も貴方と同じようにSM双方の性向があるようですし、貴方が夢想されているという奥様を混えての三人プレイ及びそのバリエーションは、私がかねがね心に描き妻に語っていることと寸分の違いありません。当方三十一才。結婚歴七年、妻にはようやく調教を始めたばかりです。貴方の夫婦プレイのパートナ―に、お選びいただければ幸いです。

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号△はわ▽
中河 恵子

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふ▽
中河 恵子

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほ▽
中河 恵子

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあ▽
中河 恵子

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はう▽
中河 恵子

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさ▽
中河 恵子

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめ▽
中河 恵子

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はし▽
中河 恵子

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はも▽
中河 恵子

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△へむ▽
関谷富佐子

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△へめ▽
関谷富佐子

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△へも▽
関谷富佐子

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△へさ▽
関谷富佐子

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号△へし▽
大島 照代

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△へす▽
大島 照代

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△へせ▽
大島 照代

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号△へゆ▽
大島 照代

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△へた▽
大島 照代

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△へち▽
大島 照代

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△へつ▽
大島 照代

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△へて▽
大島 照代

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△へと▽
大島 照代

す。

(神奈川・相模太郎)

東京の仲山知子様。私は本誌を十年間ぐらい愛読しています。口絵、グラビヤ写真に浣腸責めとA責めがあると、いつも心がわくわく、夢のような想像にふけたものでした。注入後は直ぐに排泄せずに、オムツ等にむりやりに排泄させるのが好きです。浣腸責めは貴女のように三〇CC浣腸器のみでは無理だと思っています。やはり高圧浣腸器を使用すべきです。いつでも貴女とのプレイが楽しめます。貴女の返事をお待ちしています。

(山梨県・岡部一夫)

辻村隆様。益々のご活躍、たいへんでございました。千恵も、どうやら一人前になったと申しましょうか、初めてSMプレーを経験することができました。そして縁は異なるもので、その相手であるおじさまの仲人で正常な結婚をすることにきまりました。おじさまは、激しく悶えた千恵の姿を想い出しながら、仲人をする加虐感にわくわくなさっているのに違いはないと思っております。本当にわるい仲人さんですわね。千恵は辻村様の大ファンです。妊娠したら妊

婦フオートをお送りしますわ。どしどし素敵なカメラ・ハント発表して下さい。心からお待ち致しております。9月号の「花と蛇」は迫力を欠いているように思います。楽しみにしておりましたが、まるで当初の静子夫人そのままに珠江夫人が表現されていたからだと思えます。忍頂寺様も述べていらっしやった通り、珠江イコール静子になってしまわないようにお願いします。それから忍頂寺様の「花と蛇」評の同頁に掲載されておりました出門順様の「芳香」と題するイメージ画は既に予告済の香港犬対静子の取組みを空想させ、妖美きわまる静子夫人の姿をまのあたりに見るように耽美で9月号最高のカットでした。私は一日も早く美しい静子夫人が醜悪巨大な香港犬の診技秘技に追いあげられていく有様を読みたいと思っております。千代達の哄笑の中で香港犬に襲われる美女を想像すると私自身も身悶えしてしまうのです。

(神戸・小杉千恵)

小生、十数年、奇クを愛読いたしてありますが、最近、特にSMプレーについての欲望が強くなり此度、勇気を出して始めてお便り

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大塚 啓子 略号

大手札四枚一組

目にあえぐ裸女

大手札四枚一組
大冢啓子 略三

豊麗な裸身をくびる縄目

大塚啓子 略号

大手札三枚一組

長襦袢の緊縛色模様

大手村三枚一組
東浦ひかる略号

緋の腰巻緊縛色模様

東浦ひかる 略号

大手札三枚一組

柱
宙吊り強烈縛り

東浦ひかる 略号

ホリウツを縛りあはせる
大手札三枚一組

東浦ひかる 略二
電に苦悶する果女を且一

大手札三枚一組

真紅の腰巻着用姿態

大塚 啓子 略呈

組付用之る黒糸色柱材
大手札二枚一組

東洞・大塚 田子
真紅の腰巻着用有り

大手札四枚一組
大家啓子 格三

華麗なる緊縛裸身

一宮百合子 略三

大手札三枚一組

責めに疲れた諦観

一宮百合子

真紅の腰巻姿で緊縛

一宮百合子 略呈

大手札三枚一組

若肌に喰い込む縄目

一宮百合子

高手小手後手縛

一宮百合子 略

大手札三枚一組

羞らいの股間縛り

中河 惠子 略

する次第です。私は三十八才で平凡なサラリーマンです。妻はSMに全く関心がなく、一人淋しく悩んでおります。今までに妻しか縛ったことはなく、妻はただ痛がるだけで、縛りに対して反応は全く示しません。私はSM五十パーセントぐらいですので、時々妻に縛らせるのですが、妻は面倒くさがり全く下手で、緊縛感がありません。仕方なく家族の留守のときに一人で自分を縛って、緊縛について研究いたしておりますので、縛るのには自信があります。私に縛られて色々責められたいと思う方または私を奴隷にしたい方、お便りをお待ちしています。SMに理解ある女性との交際を、ぜひとも望む次第です。

(東京・太田一郎)

毎月、奇クをドキドキしながら買い求めています。七月号は特に「花と蛇」がよかったとも思いました。社会的な地位の差を利用しているそう静子夫人を恥かしめることなどは、私のとても好きなところですよ。また、パイを使っている練習なども、ユニークなことで良かったと思います。もうすぐショウの場面も登場することでしょう。

が、黒人との組合せは最高です。他にも知能のおくれた者や醜体の持ち主などに奉仕させたり、ショウの客に剃毛してもらったり、色々な器具を使っている恥かしめや排泄などもよいと思います。女性特有の生理を利用しての恥かしめはどうでしょうか。色々さしでがましく言いましたが「花と蛇」は、やっぱり最高です。それから写真ですが、もっと鮮明で大きなものを希望します。カットしないで貞操帯や生理バンドなどをつけたものをおねがいします。

(大阪・野田一郎)

東京の仲山知子様、浣腸が大好きとのお便りを拝見して、早速ペンをとりました。私も浣腸の大好きな一人です。出張のときなど、いつも器具を持って参ります。先日、旅先で便秘を理由に医院を訪れましたら高圧浣腸をされてしまいました。あのときの気持は今も忘れられません。貴女とお互いに浣腸し合えたら、どんなに素敵なことでしょう。ぜひ、お目にかかりたいと思います。そしてソフトなプレイを楽しみましょう。

(東京都・秋山 明)

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れや

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆ

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえ

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れぬ

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れね

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れの

豆絞りの猿くつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れむ

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やか

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やき

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やく

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やも

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やし

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やみ

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なる

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八ぬめ

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八ぬね

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しい

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しみ

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しけ

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しこ

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しら

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しれ

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しわ

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号天星社宛へ願います。

小杉千恵様、久しくお書きになりませんね。素敵なパートナーを見つけたのでしょうか。一寸ジュラシーを感じています。目次に通信欄に、お名前のないときはガッカリします。お前のために書いていたのではないと、叱られるかもしれません。許されることなら、一度ゆっくり話し合ってみたい、そんな気持ちです。ニットの超ミニで洩らす千恵さん。それがサンダルにとどく前に、私はこの口で受けとめてみたい。その香りと美味は、きっと私を桃源境に追いやることでしょう。昨年の夏から、どうしても忘れ去ることのできない人「千恵さん」の幻は無限に拡がっていきます。

(岐阜・座頭孝司)

倉島辰子様。八月号の貴女の記事を読みました。私は今までに妻以外に女性を縛ったことはありません。サロンや読者通信で知った人たちに何度か手紙を出そうとしましたが、なかなかうまく書けずその機会がありませんでした。しかし、今度は思いきって書きました。私は三十五才で、もちろん妻がおり高槻に住んでいます。良ければ妻と一しょに縛られて下さ

いませんか。このような願いが叶えられるのでしたら、私としては最大の犠牲と代償は惜しまないつもりです。(大阪府・都島並夫)

初めてお便りさせていただきます。私は二十二才になる男です。私は未だプレイの経験はありません。八月号の川崎・物好男様の御意見には賛成です。ただ浣腸、毛剃り等は好みません。私の一番好きな姿は、縛られた女性が苦痛に表情をゆがめたところです。プレイをやるとき、ロングヘアでポインの方が好きです。プレイをやっているとき、汗にまみれて髪の毛が顔にまつわりついたところが魅力があります。また少々ボインの方が乳房責めに効果があると思います。SMに興味のある女の方お便り下さい。(静岡市・SM生)

愛読者の一人として、お願い致します。女性同志の責め合い写真の特集号として発行して下さい。馬のりで組敷いているところや、縛り上げるまでの連続写真。年増の女が若い女に完全に組敷かれいるところ。また柱に縛りつけられ鼻をつままれているところ等、色々あると思います。外人女性と日

編集部特写緊縛女体資料

逆さ吊りの臨月妊婦	大手札三枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さめ
両手吊りの臨月妊婦	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さめ
若妻初妊娠の哀歎	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
妊婦の全裸縛り全身	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
妊婦腹の緊縛側面	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
強烈縛り妊婦責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
若妻の緊縛妊孕美	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
膨満の妊婦乳房責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
臨月腹の全裸晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
躍動する妊婦の裸像	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
妊娠という異常美の女体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
見てほしい臨月腹	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
妊婦全裸の全身肢体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号	八さい
全裸正面の縄掛け	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号	八れろ
柔肌の高手小手縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号	八れろ
後手首を縛られた少女	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号	八れろ
飼育された美少女縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号	八れろ
縛られた美女二人	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池・松山二嬢	大手札三枚一組	略号	八れろ
全裸の美女を連縛する	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池・松山二嬢	大手札三枚一組	略号	八れろ
白肌に喰い込む縄目	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号	八れろ
一糸まとわぬ柔肌縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号	八れろ
開陳した華麗縛り肢体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号	八れろ
縄に喘ぐ諦観の相	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号	八れろ

本女性の組み合わせ。格闘場面や一人の女が二人の女にいじめられているところ。組み敷いて鼻責めしているところ。私の友達がスエーデンの、そういう写真を持っていました。内容は、二人の女性が水着姿で、かわりばんこに相手を組み敷いているところや、鼻をつまんでいるところ。組み敷いている恰好は、相手を仰向けにして、ヘソのあたりに馬のりになり、両手をバンザイ型に押さえつけている。また両手を縛って馬乗りしながら、鼻をつまんだり鼻毛を抜いているところなど、色々でした。三十枚ぐらいのグラビアでした。ぜひ、このようなものを発行して下さい。

(豊川市・加藤)

貴誌益々御発展のこと、お喜び申し上げます。小生は貴誌を愛読し、大きな慰めとしています。以前より同好の士、特に女性との文通を望んでいましたが機会がないまま現在に至ってしまいました。九月号の東京・仲山知子様の文を読み、小生と同じ浣腸、アヌマニアと知って、ぜひおつき合いたいと思います。小生は二十三才の会社員です。なにとぞ小生の願いをお聞きとけ下さい。

(東京・佃 和夫)

佐野みさ子殿。あなたの緊縛写真、拝見しました。しかし、何とだらしのない軟縛写真でしょう。あなたも行きずりの男性に緊縛を頼むのであれば、もっと注文をつけては如何ですか。あなたも私と同感でしょう。首縄は私も大好きで首縄だけで強烈に縛ったこともありますが、首縄というものは、いくらきつく緊めても、多少、息苦しくなるだけで、窒息することはありません。あなたのは縛ったというより縄を身体に巻きつけて手を後ろへ回しているだけですね。高手小手、首縄というものは、手首をもっと首の上まであげて、縄はもっと身体全体に喰い込むようにせねばなりません。私が女性を縛るときは、いつもこのことには気をつけております。しかし、いきなり私の緊縛を受けても、なかなか耐えられるものではなく、馴れなければ無理です。写真を見て問題になるのは、貴女が中々グラマーなこと。大体、私はグラマーな女性より細っそりした女性の方が好きです。これは緊縛感が非常に出るのです。グラマーな女性には反対に縄をはねかえすように

SとMの甘い一瞬

大手札三枚一組 略号△とさ▽ 四〇〇円

松山・小池二嬢 略号△とさ▽ 四〇〇円

縄に通う愛情の焰 略号△とけ▽ 四〇〇円

マキとミキ 略号△とけ▽ 四〇〇円

相愛の極致を描く二女 略号△とな▽ 四〇〇円

マキとミキ 略号△とな▽ 四〇〇円

鞭に狂う悦虐表情 略号△らて▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△らて▽ 四〇〇円

鞭打ちにうねる肢体 略号△らあ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△らあ▽ 四〇〇円

足吊りの被虐肢体 略号△らえ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△らえ▽ 四〇〇円

美しきマゾの境地 略号△らせ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△らせ▽ 四〇〇円

裸後手柔肌縛り 略号△こよ▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△こよ▽ 四〇〇円

乳房強烈膨隆責め 略号△こわ▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△こわ▽ 四〇〇円

海老責めに苦悶する 略号△こお▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△こお▽ 四〇〇円

全裸の緊縛全身晒し 略号△こる▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△こる▽ 四〇〇円

煙草責めに喘ぐ女 略号△こぬ▽ 三〇〇円

佐々木真弓 略号△こぬ▽ 三〇〇円

抱擁する美女二人

大手札三枚一組 略号△とや▽ 四〇〇円

ミキとマキ 略号△とや▽ 四〇〇円

柔肌と柔肌のレス狂態 略号△とよ▽ 四〇〇円

ミキとマキ 略号△とよ▽ 四〇〇円

緊縛麗姿に映えるライト 略号△こほ▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△こほ▽ 四〇〇円

臀部強調後手縛り 略号△こほ▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△こほ▽ 四〇〇円

羞恥に悶える全裸緊縛 略号△こほ▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△こほ▽ 四〇〇円

ホステスの緊縛姿態 略号△こほ▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△こほ▽ 四〇〇円

二つ折り責める女体 略号△こほ▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△こほ▽ 四〇〇円

脈打つ全裸の臨月腹 略号△こほ▽ 四〇〇円

中河恵子 略号△こほ▽ 四〇〇円

臨月腹の革紐股間縛り 略号△こほ▽ 四〇〇円

中河恵子 略号△こほ▽ 四〇〇円

猿轡の臨月妊婦腹縛り 略号△こほ▽ 四〇〇円

中河恵子 略号△こほ▽ 四〇〇円

卓上の股間縛り狂態 略号△こほ▽ 四〇〇円

長井葉津子 略号△こほ▽ 四〇〇円

羞恥の足挙げ責め 略号△こほ▽ 四〇〇円

長井葉津子 略号△こほ▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

長井葉津子 略号△こほ▽ 四〇〇円

次号(十一月号)は九月二十五日に発売いたします

緊縛感がうすく、あなたの写真が余計、軟縛に見えるので、貴女のようなグラマーは徹底的な緊縛をせねばなりません。もし又、誰かとおのうなプレイをされるのであれば、私のいったことを参考にしてください(神戸市・前田徹男)

たりで彼女の動静が消えたのは残念でたまらない気持である。美津子の登場をお願いしたい。

(大阪市・美津子ファン)

○

僕は、いつも「花と蛇」の関西流のねちねちした羞恥責めに浮世のウサをはらしている。この登場人物には夫々、個性があり、静子ファン、京子ファンというように最良筋に別れているようで最良の美女が現れないと、なかなか「わいのわいの」と姦しい。僕は美津子ファンで近頃、とんと御無沙汰で淋しい限り。美津子が初めて立位開脚されて、いまだ疎々とした幼なさを残した体を曝した際、息をのむSのケレン味を感じたことを、はつきり記憶している。一年程前に、文夫と桂子が一つになるのを見せつけられて、美津子が吉沢に調教を甘受することを誓い、早速、成熟のきざしはあるとはいえ、ふと稚さを感じさせる麗身を投げ出して巨大な貴具を求めたあ

ぼくはS気M気五分五分の、欲張ったアブマニヤ。木馬の上でやっちゃった珠江夫人に快を感じ、彼女に下剤を少量飲ませて、責めたら素晴らしいとS気を出し、反面、M派交友録のように仰臥した顔面にどっかりと女王に跨がられて、液体を発射され失神しそうになりたいたと、M気を出す男です。お嬢さんでも奥様でも結構ですから、私に海老のように縛られたり仰臥全裸開脚縛りにされ、Mの境地に溺れてみませんか。四十才までの女の方なら美醜を問いませんから、私の女王さまになって、顔にまたがって下さい。長時間の御奉仕に舌が動かなくなつた奴隷の鼻には暖かい液体を、あぐりと開いた口腔には激しい臭いの固型を押し込んで下さい。夢、夢、夢。人生すべて夢で終るのでしょ

(大阪府・富田生)

○

私が始めてこの「奇譚クラブ」を手にしたのは十年も昔のことである。あのときのショックは今もおぼえているが、世の中には恐ろしい事もあるものだと思つたことであつた。あの頃は写真が余りなく絵が多かつたのであるが、気味の悪い、それでいて読まずにはおれなかつた。私はMではないのかMの気持ちは余り解らない。それでいてS(純然たる)でもないのか、美しいものを汚してみたいという、欲求も余りないのである。だからこの本にもしばしば出てくるような余りにも残酷な描写は実に読みづらく、飛ばしてしまう。いったい本当のSMは世の中に存在するのであるか。純然としたサディストなど考えたら背すじがぞつとする程恐ろしいし、マゾヒストなども精神障害者のような気がする。だから本当のS・Mは空想の中で羽ばたくべき存在のように思えるのである。私の言いたいS・Mとは性向のことである。つまり人間の性向としてS性、M性というべきものが考えられるのである。S・M性のかみ合いはあくまでも人間性のかみ合いであり、物体と物体のかみ合いでは断じてない。そしてその間には「愛情」

が常に存在していなければならぬのである。S性の人間はM性の人間に対して愛情をもつていわゆるプレイ(遊びと考えて良い)をしなければならぬし、それにくては一方的な行為に随してしまふであらう。たとえ、それらの行為が具体的には鞭打ちであり浣腸責めであり、緊縛であらうと全て愛情の発露でなければならぬと信ずる。愛を表現するのに「愛しているよ」と口で言うより尻をムチうち、その後キズ口を舌でいやしてやる方がより具体的強烈的ではなからうか。それともう一つ言いたいことはSMプレイの行為が余りにも類型的すぎるではないかということだ。緊縛にしても浣腸にしても鞭打ちにしても、同じような行為しか考えられないのだらうか。もっと工夫すべきではないのか。写真等をみても同じような縛り方ばかりで一つずつ名前がついているというようなことは実におかしいことではないのか。なる程昔から拷問には名前がついてたが十年百年経た今もそのようなことしか出来ないとは余りにも進歩がなさすぎるといふものだ。どんどん、道具なり技術(?)なりを新しく開拓していこうではない

V

SMプレイを夫婦間の和合に採り入れられる人達が増えた、というより、それを発表しようとする人達が増えたのは事実のようです。しかも尚、この人達は氷山の一角で、海面下のひそやかな耽溺組となると、とつい想像してしまいますが……とにかく暑いですナア。

○そんなわけで、ヒト様の手活けの素肌を拝見出来るのは有難いとしても、ナニヤラ公園の夕暮れどきよろしく、単身投稿者を圧迫する状態を生じて、一部の方には申訳ないと思っております。ナンデモ屋の性質上、多方面に亘る「ラクガキコーナー」として、心のアヤで織り上げる小広場を目標に、今後とも変わらぬ投稿をお待ちします。尚、イメージ画は製版効果上、黒一色にして、なるべく薄墨使用は避けていただきますようお願いします。

△體驗、告白、手記▽

△創作、小説、物語▽

映画、雑誌、演劇、新聞

単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

本誌に関連したものでした

ら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

映畫、雜誌、演劇、新聞

単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

二千元以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております故
 悪しからず御諒承願います。

故、御応募の方は項目を御明

記の上御送稿下さい。
△読者通信原稿▽

皆さま方のための公共の広場

として開放しています。 徹底
慮なくお寄せ下さい。

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

十月号

（第二十四卷第十一号）
（通刊第二百七十一号）

昭和四十五年九月二十日
昭和四十五年十月一日
印刷
發行

印刷發行

編集人 杉原 虹
發行人 北村 俊
印刷人 杉原 夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

郵便番号
△振替口座大阪四二七八三番△
(昭和三十一年四月二〇日 第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各条例に指定されないうち、充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として發行を企図しておられますが、關係上、十八才未満の方には絶対販賣下さらないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。